
これはゾンビですか？～いいえ、ただの？病弱です～

ハヤテ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これはゾンビですか？いいえ、ただの？病弱です！

【Nコード】

N6675T

【作者名】

ハヤテ

【あらすじ】

少女を助けたかわりに死んでしまった！！死んでみたらなんと！その少女は神みたいなものだった。その少女にある能力をもらいこれゾンの世界へ転生させられてしまった！これからどうしよう・・・

第1話 転生？いいえ、ただの横暴ですよ（前書き）

夢で見たので書いてみました。嘘です。ただ、これゾン読んでいいわあ、っと思ったので書きました

第1話 転生？いいえ、ただの横暴ですよ

あれ？ここどこさ？たしか・・・あ、思い出してきた。えーっと、たしか、小さい女の子が車に轢かれそうになったのを助けて、それで・・・

「死んじやっただよ。」

ん？君誰さ？

「君に助けてもらった女の子だよ。」

ああ、そうなの？ん？心読んてる？

「呼んでるよ。だって、あたしは神みたいなものだしね」

へえ、で、僕をどうするの？このままあの世行き？

「本当ならそうなんだけど、あたしのせいで死んじやったようなものだしなー。うん。決めた。あなたを転生させるよ。」

転生？

「そ、転生。どこか行きたいところある？」

特にないよ。あ、なにか特典が欲しいかな。

「ふーん。特典ねえ……。じゃあ、最近読んだこれゾンの世界に

行ってもらおうよ」

これゾン？あー、あのゾンビが主人公のあの。って死亡フラグ結構あるよね？

「あるよ。まあ関わらなければ無いんだけど、関わっちゃうだろうね。で、特典は・・・そうだね、刀語の鑢七実の能力なんてどう？あと、悪刀『鑢』も付けちゃおうかな」

いや、それ僕死ぬよね？病魔1億個とか無理だよ？耐えきれませんよ？

「あと、不老」

は？不老？

「うん。あと、耐えきれるよ。なんせ七実のスペックだよ？耐えられるに決まってるじゃん。あ、だけど自分の力は使っちゃだめだよ？すぐ昇天しちゃうから使つとしたら悪刀を使ってからにしてね。あ、それと、不老が発動するのは高校に入ったくらいからでいい？」

いや、入る前に病弱で行動不能ですよ？1日中布団ですよ？少し歩いただけでせえぜえですよ？

「大丈夫。このご時世アニメとかいっぱいあるじゃん。それで、高速移動術でも見れば？」

むむむ・・・。

「じゃ、そついでに」といって

パカッ！

え、あ、ちょっとおのおのおのおのおのおのお！！

キャラ紹介

やすしおほろ
鑢七実

この作品の主人公。黒眼黒髪。神みたいなのに鑢七実の力を不本意ながらもブチ込まれたため、非常に虚弱で病弱になっている。が、その反面、見稽古という相手の技を一度観ただけで体得、二度見れば万全に出来るようになってる。

虚刀流は使えない。その代わり、通りかかった道場で剣道を「見てしまった」ため、剣道はできるが、本人はまったくやる気がない。基本的に口調は丁寧で1人称は「僕」。しかし、キレると「俺」になり、口調も少々乱暴になるという怒らせたらいけない人である。

キャラ紹介（後書き）

説明短か！？

第2話 銀髪の少女との出会い（前書き）

さきのキャラ紹介で書き忘れたのでここに朧くんの体格を書いときます。

ガリです。顔立ちは整ってます。鑢七実の能力と言っても虚刀流じやあ無いので、普通にナイフや剣を使えます。使うかどうかは分かりませんが。

こんなところです。

第2話 銀髪の少女との出会い

「やあ、みんな、鑢籠だよ。転生させられてからもう8年たったよ！え？時間がいきなり飛びすぎだって？いやいや、この7年間大変だったんですよ？恒例のあの羞恥プレイもありますけど、その前に病魔1億個がすごいきつかった。言っちゃうと、ここ7年の事なんて覚えてないってぐらいだった。医者には「生きていられることが奇跡って言うレベルじゃないです。もう死んでないのが奇跡です。」って言われるくらいですよ。おかげで親にも捨てられちゃいました。ホームレス中〇生もといホームレス小学生です。学校行ってないですけど。というか、行けません。お金無いです。食糧は盗ってます。1回そういうののプロがいます、見取らせていただきました。まあ、何でもかんでも見てるわけじゃないですけどね。見る必要がある物だけです。普段はアイマスクしてます。一応心眼？みたいなのをアニメで見たので見えないってことではないです。ついでにアニメで見たのは月姫（というか、メルブラですけど。ゲームですよ？盗み見しました）とアニメじゃないけどマトリックスです。直死の魔眼も見取っちゃいました。実はこんなことがあったからアイマスクしてます。とりあえず言えることは、七夜様の（もしくは遠野君）身体能力は神です。ちなみに鑢と言う名字は自分で勝手につけました。いや、だって捨てられたのだから。で、なんでこんなに走馬灯のごとく昔の事を思い出してるのかと言うと……」

「まずいですねえ……。本気で倒れそうです。」

と、言うわけです。たまたま、食糧が尽きたので盗りに行くと思っただけならこんな具合です。さすがにまだ体もできてないし、きついん

ですよ。慣れるのもあと2年くらい掛かりそう。って、こんな現実逃避するなんていよいよ駄目ですか？

「っ！まだ、ですよ……。こんなところでぶっ倒れたら最悪死にますよ。まだ、死にたくありませんし、とりあえずあの公園で……」

「……なんか、学ランきた変な動物がいるんですけど……。あ、あれですか。最近よく見る……。なんだっけ？名前が分かりませんね。前世の知識でよゆ〜とか思ってたんですけど無理ですね。闘病に全力を注いだせいでスツカラカンです。」

「って、なんか、襲ってません？あ、銀髪の西洋の甲冑を付けてる女の子が襲われてますね。」

「……ダメじゃん！」

「……しょうがないですね。この病弱で虚弱なか細い体に鞭打つとしましょう。」

後ろに回り込み、アイマスクを外し、魔眼を使って……

「ブスツとな！」

点を突きました。もちろん指ですよ？ナイフなんか持ち歩きくわけないじゃないですか。銃刀法違反ですよ。まあ、普通に悪刀は持ち歩いてますけど。

しかし……。疲れましたねえ。

「大丈夫ですか？」

『大丈夫。』

「そうですか、それは良かった。でも生憎・・・」

僕が大丈夫じゃないんですよねえ、と、言おうと思った瞬間僕は気絶しました。あー、ついてないですねえ。まさか、体力切れと空腹と病でぶっ倒れるt・・・

（銀髪の女の子）

それは突然起こった。メガロが現れて、襲われそうになった。しかし、メガロの背後から

「ブスツとな！」

と、声がした。その瞬間、メガロがあっさり消滅した。とても驚いたし、しかもその現象を起こしたのはまだ幼い子供だった。これにも驚いた。メガロはこんな若い少年に殺されるほど弱くない。

「大丈夫ですか？」

少年が声をかけてきた。それは、とても落ち着いた声だった。けど、その声はとても悲しい声だった。まるで、この世のすべての絶望を知ったかのような、そんな声。

『大丈夫。』

わたしはそう、メモ帳に書いた。それに驚いた様子もなく少年は

「そうですか、それは良かった。でも生憎・・・」

と、言いかけて、少年はそのまま地面に倒れた。突然の出来事に受け止めることができなかった。

額に手を当ててみると、とても熱かった。少なくとも、何時死んでもおかしくないような、そんな熱さだった。

このままじゃあ、死んでしまう。とりあえず、冥界に連れて行こう。持ち上げた少年の体は驚くほど軽かった。

（朧）

「こんな化け物うちには置いておけない!!」

うん？何でしょうねこれ。ああ、夢ですか。昔にこんなことありましたねえ。

「なんでこんな状態で死なないんだ!!おかしいだろ!!」

「そうよ!!こんな化け物、今すぐにでも捨てるべきだわ!!」

そういえば、そんなこと言われたっけ。この時のことはあんまり覚えてないんですが、中々にひどいですね。

まあ、確かに僕は化け物ですけどね。別に捨てられる事は恨んでま

せん。こうなることは分かっていたから。生きぞこないで、死にぞこない。それが僕です。まあ、死のうとかは思いませんがね。というか、僕はなんでこんなに冷静に思考ができるのでしょうか？あれですか、死に際は割と冷静に思考できるって言うあれですか。困りましたね。本当に死ぬのでしょうか？

と、その時、額に何か冷たいものがのる感触がした。

「うん？ここは・・・」

ああ、まだ視界がぼやけますね。まだ、この熱は低い方なんですけど、やっぱり体が出来てませんね。

と、横を見ると、例の銀髪の少女がいた。

「君が助けてくれたんですか？」

『そう』

はあ、助けた人に助けられるなんて・・・

『まだ寝て無くてはいけない。熱がひどい。』

「え？・・・ああ、これですか？これは元々ですよ。むしろ、少し低いですね。今回ぶつ倒れたのは、空腹と体力切れが主な原因ですので、少し休んで、何か食べれば無問題です。」

『嘘、人間がそんな高熱をだして生きていられるはずがない。あなたは今、死んでもおかしくない状態にある』

「あ、それ、昔言われました。なんで死なないのかが分からないとね。まあ、現に生きてますし。それに僕は生きぞこないの死にぞこ

ないの死にぞこないですので、あまり気にしないでいただくと思います。これについてはおおよそ、一般的な知識、常識では理解不能ですのぞ」

『ここは冥界。あなたの住んでいた所との常識が違つ。だから、話して。これつてなに？』

む、冥界・・・ですか。じゃあ、本当に僕は死んだのでしょうか？いや、だつたらこの体の病は何なのでしょう？まさか、死んでも尚僕は僕の力のせいで苦しむのでしょうか？

まあ、死んでないんでしょうけど。今、アイマスクしてないのではつきり『線』が見えるんですよ。無論、僕にも。

「これつて何？ですか・・・。ふむ、言えませんね。これは確実に人に嫌悪感を与える部類ですのぞ。」

個人的には言つてもいいんですけど、これを聞いて、知つて、嫌悪感を抱かなかつた人はいない。僕だつて人間です。嫌われるのはいやに決まつてます。

「これを聞いたら確実に貴女は僕のことを嫌いになりますよ。」

その瞬間、一瞬だけ、少女の顔に驚きの色が浮かんだ気がした。

「それはそうと、まだお互い名乗つてませんね。僕は鑢臙です。」

『ユークリウッド〓ヘルサイズ』

「長いですね。ユーでいいですか」

そつぎくとロクッとなぜいた。どうやらいいらしいですね。

『それで』

「はい？」

『これってなに？』

「言いたくありません。しかし、そうですね。強いて言えば、僕は病弱なんですよ。」

『病弱？』

「そうですね。ま、少々特殊ですが……。それよりもなにかお話しませんか？ここ数年、人と喋ってないものですから久しぶりに喋ってみたいんですよ」

『わかった。』

それから数時間、僕はユーと他愛のない雑談をして過ごしました。まあ、途中で少し疲れたので寝てしまいましたけどね。

（ユー）

少年……。臃が寝てしまった。元々体力がないらしい。それは見ればわかった。色白では説明が付かないほど肌が青白い。寝てしまった今はまるで死人のよう。

それより、驚いたのが、「これを聞いたら確実に貴女は僕のことを嫌いになりますよ。」という言葉。

わたしと同じだった。別に傷の舐め合いをするつもりはない。唯、わたしと同じような状況にいるという人は生まれて初めてだった。でも、1番驚いたのは唯の8歳の子供がそんな状況の中で笑って雑談できるということだった。

「ヘルサイズ様。」

突然後ろから声がした。

『何?』

声をかけてきたのは冥界の番人ケルベロス・ワンサード。知り合いの1人。

「その方なら大丈夫だと思いますよ。」

『何が?』

「もうお気づきでしょう。その方なら、あなたの事を知っても普段と何も変わる事無く、そして、あなたを嫌いになることもないでしょう。」

『しかし、もし、違ったら。』

「物は試しですよ。」

『わかった。起きたら話してみる』

「では、わたしは仕事がありますのでここで。がんばってください。」

「

・・・話していいのか。わからない。それに・・・怖い。さつき雑談していてわかったけど、臙は優しいし、とてもいい人だった。とても仲良くなれそうな気がする。だから、そんな人に嫌われたくない。

だから、言いたくない。どうs

「ふむ、なるほど。なにか重大な話のようですね。」

く臙

さつきの犬みたいなの話によるとどうやらユーは人に避けられうような、力を持っているらしい。まあ、予想はしてましたけどね。なにかあるんじゃないかと。

『起きていたの?』

「ええ、さつきの犬みたいなの came あたりから。元々眠りが深くないというのがありますが。」

『そう』

そして沈黙。1分2分と時間が過ぎていった。と

『この話を聞いたらきつと臙はわたしの事嫌いになる。』

「そうですか。話したくありませんか?」

『話す』

「では、聞きますよ、最後まで。」

それから聞いた話は壮絶の一言だった。強すぎる魔力により感情を動かしただけでまわりにいる人の運命を変えてしまうこと。言葉を聞いた人はその通りになってしまったため、発することができないということ。手には治癒の力があり、血液には不老の力、心臓は強力な魔力を放出しているということ。

『これですべて話した。嫌いになったでしょ？』

ユーの目からは涙が流れていた。

「・・・なるほど、話しは分かりました。結果から言うと僕は微塵もユーのことは嫌いじゃないですね。むしろ、優しい人だと思いますよ。」

『こんな化け物みたいなやつがいて、気持ち悪くないの？』

この問いに対して、僕はそっとユーを抱きしめこう言った。

「なぜ、気持ち悪いのですか？あなたは周りの人を巻き込まないように自分の感情、言葉まで消しているのに、なぜ気持ち悪いのですか？気持ち悪くなんて無いですよ。今、僕の目の前にいるのは優しい可愛い女の子です。」

「・・・この娘も苦労したのだと思う。いや、苦労したのだろう。少なくとも僕よりかは苦労しているはずだ。」

『わたしの事、嫌いじゃないの?』

「もちろん。嫌いになる所がありませんよ。ずっと親しくありたいぐらいです。」

『ありがとう』

・・・こちらもお話した方が良かったですよね。

「では、次はこちらの話を。なに、別段そう深刻と言うわけでもないのでから昔話を聞くぐらいの気持ちで聞いてください。」

それになんて言わずにユー。たぶん、この心優しい少女なら、嫌わないうれそうです。

「そうですね。まず、僕の眼は特殊でして、1・2回見れば他人の技術をすべて見取ることができるんです。そう、人が血の滲むような努力をして体得した技術をほんの1・2回見ただけで。これだけでも十分気持ち悪いのですがまだありますね。これも眼なのですが、僕には死線が見えます。そこを斬ったり突いただけでたとえ不死でも殺せます。これは、とあるアニメを見たら不本意ながら体得してしまいました。以来、このアイマスクを着けています。そして、僕の体は今この瞬間も1億個の病魔に蝕まれてます。」

まあ、体の細胞と拮抗してますがね、と付け加える。

「特にこの病魔が厄介でしてね、これのお陰で親から捨てられて、ホームレスになっちゃってますし、食糧獲得がとっても大変です。おっと、話が脱線しましたね。ここまでで、何か質問はありますか?ぶっちゃけ、ここまで聞いて気分を害したというのなら、ここま

でにして僕は帰りますけど。」

その僕の問いにユーは『大丈夫』と書いたメモ帳を見せ、次に質問してきた。

『つらくないの?』

「なにがですか?病魔の事ですか?」

『違う。ずっと1人でつらくないの?』

「つらいですよ。ですが、もう慣れました。この先ずっと1人だと思っ

そう、この先、高校に入ってから(入れるのか?)不老になって寿命では死なないようだし、おそらく僕を殺せるような人もいないだろうから永遠に1人。こんな未知の病魔を持っている奴なんかとずっと一緒にいるなんていうもの好きもいないでしょからね。

『そんな悲しいこと言わないで。』

「悲しい・・・ですか。確かに悲しい考え方ですが、しょうがないんですよ。この未知の病魔、人には移ることは無いですが、君が悪いことには変わりありません。人間は異端が嫌いなんです。異端者は常につまはじき者です。」

『大丈夫。』

「何が大丈夫なんですか?」

『わたしがずっと朧という。たとえ世界中の人が朧を嫌いになっても、わたしだけはずっとそばにいるよ。』

「……正直、この話をしてこんなことを言われるとは思わなかったです。しかも、そう言われて嬉しいと思う自分がいます。」

「いいんですかそんなこと言って。僕は真正銘の化け物ですよ？病魔とこの眼を抜いたとしてもそれは変わりません。」

『いい。朧は化け物じゃない。唯の男の子だよ。』

「……僕は誰かを頼ってもいいのですか？」

ポタポタと、僕の手の甲に水分が落ちてきた。ああ、これは涙ですか？僕にも涙ってあったんですね。

『うん。』

「……ありがとう。」

涙を流しながらですが、笑顔でそういいました。この時だけはこの歳にあったような笑顔ができていたと思います。

『というわけで、臙は今日からここに住む。』

「え！？こゝ、ここですか？」

『いや？』

「嫌じゃないですけど……うーん、ま、良いでしょう。じゃあ、ただで住むというのも気が引けますので、ここにいる間は、ぼくはユ一を守ります。大方、その力のせいで誰かに狙われてたりするんでしょう？。」

『うん。よろしく。』

「はい、よろしくお願いします。」

……冥界に住むことになっちゃいました!!

第2話 銀髪の少女との出会い（後書き）

ggggdですなー。

次回もまた時間が飛びます。が、冥界での生活が見たい！知りたい！という方は感想にて言ってください。番外編などで書くかもしれません。

第3話 お前は何者なんだ？うん？唯の病弱ですが？（前書き）

データが消えた……。鬱だ……。

第3話 お前は何者なんだ？うん？唯の病弱ですが？

ユ一と出会ってから7年経ちました。15歳です。やっとこさ高校に入れます。いやー、長かったですね。やっぱり、1番大変だったのは、お金稼ぎですね。やっていた仕事は、まあ世間一般的に言う「知らないほうがいい仕事」です。大変でしたよー、なにせ、1回死にかけましたから。まあ、原因は僕の体力切れですが。あ、今ユ一とは別々です。3年前に別れました。理由は仕事が忙しくなってきたという実にあります。そういう理由です。今では簡単なものから危ないものまで結構来ます。そのせいでちよつときつくなってきたので、まにわにの忍法を見取りました。「忍法足軽」と「忍法爪合わせ」だけですけど、これがけっこう便利でして、仕事がしやすくなりました（特に暗殺）。

で、現在の状況ですが、僕は歩の家に居候・・・もう居座る気ですが、してます。たしか・・・3月の辺りからです。馴初めはまた後日、僕が気が向いたら話しましょう。

そして、今日は高校の入学式です。いやー、新鮮ですねー。高校の保健室って。

「まさか、入学早々来るとはねえ。」

「すみません。これから常連になるかもです。なにせ、病弱ですか
ら。」

「ま、体には気をつけてね。」

「もちろんです。失礼しました。」

保健室をでて、教室に向かいます。

「すみません。おく」

あれ？なんでここにクリスいるのでしょうか？教師でしたっけ？

「来たか。おそ」

あちらも気付いたようです。あ、一応言っときますが、別に敵同士ってわけではないです。

「・・・とりあえず、席に座れ。後で職員室に来るように。」

クラスに驚愕の反応がちらほら。まあ、いきなり呼び出しくらくちやそういう反応になりますよね。

「それじゃあ、自己紹介だな。」

それから皆無難に自己紹介していき、今日の学校は終わりになった。

「臈、お前何したんだ？」

歩が話しかけて気ましました。

「いや、別に何も。」

「そうか。ま、がんばれよ。俺先帰ってるから。」

「わかりました。ご飯は野菜がいいです。」

「はいはい、作っておきますよ。」

歩と別れ、職員室に行きます。

「失礼します。クリス・・・先生、来ました。」

「お、来たか。じゃ、場所を移すか。」

と、言つて、近くの人気のない公園に移動しました。着いた瞬間、先生はお酒を飲み始めました。そして・・・

「らから〜、くりすはーアリエルがゆるひえないによー!!」

完璧にできあがりしました。というか、あれですか、僕を呼び出したのはただ単に愚痴を聞いてほしかっただけですか。まあ、良いんですけど。

「でもそれって、よく考えてみたらアリエルは悪くないですよね？悪いのは呪いをかけなかった女王の方かと。」

「しょうなんりゃけど、にゃんか、むかつくやん？」

八つ当たりじゃあ無いですか！しかもしん〇けさん？

「まあ、止めはしませんがやりすぎないようにしてくださいね。」

「臆がしょういうにゃらしょうしゅるー」

・・・これ文章的に見にく・・・いえ、何でもありません。
その後も、もはや意味のわからない言語で喋ってたので、ここらで
歩との出会いでも思い出すとしましょう。まあ、とつても簡単な出
会いですけど。

その日、僕は街中を歩いていたら突然、

「すみません、お兄ちゃんと呼んでもらってもいいですか？」

と、声をかけられました。これが歩・・・ではなく唯の変態です。
僕を女と勘違いしているのでしょうか？たしかに、僕の顔は七実さ
んに似てますが、うーん、そこまで女に見えますか？

と、前の男に若干引いていると、そこに歩が現れて、見事救ってく
れたわけです。まあ、その後、「お兄ちゃんと呼べ！！」って言う
てきましたが。こんな感じですね。なるほど、思い返してみると中
々に珍妙な出会い方です。

「ちょっとー、きいちえるのー！」

「聞いてますよ。まあ、クリスの呪いを解くことに協力するのはや
ぶさかではありませんね。」

「ほんとー？」

「ええ、本当です。」

ニッコリと笑ってそう言う。

「っ！／＼あ、ありがと・・・」

うん？元々酔って赤くなっていた顔がさらに赤くなりましたが、気のせいでしょうか？

「さて、そろそろお開きにしましょう。遅くなると主に僕の体力がもちませんので。」

「ぶー、わかったよー。また付き合ってね？」

「よろこんで。」

帰りましょう。まあ、帰ってもそこまですることもないんですが。

「ただいま帰りました。」

「おー、おかえり。遅かったな？」

「ええ、おかげで良かったです。」

「そっか、あー、そうそう。最近この辺りで連続殺人が起こってるらしいから臆も気をつけるよ。」

「連続殺人ですか・・・。物騒ですね、気をつけます。では、僕は寝るとします。何分体力がないですから早く寝ないと。」

「おう、おやすみ。」

このような感じで生活していき、たまにクリスの愚痴に付き合い、気が付けば五月の後半、26日になっていた。

今日についてはいません。朝から体調が絶不調。ここ数年で1番まずいですねえ。学校を休んでしまいましたし、ああ、出席日数が……とりあえず寝ましよう。歩に迷惑はかけられません。

く歩く

俺は相川歩。突然だが俺はついさっきゾンビになった。ん？唐突だつて？仕方ないだろ、作者が端折ったんだから。まあ、簡単にまとめると、家に居候している俺の友達の朧が今日は不調だから、冷えピタとか買いに行こうと思ったたらコンビニで銀髪の少女に出会った。そこで、長々喋ってから俺は帰路に着いたんだが、そこで連続殺人の現場にみごとに出くわし、そのまま心臓をブスリ。で、その銀髪の少女……ネクロマンサーらしいが、にゾンビにされた。それは良い。いや、よくないが、今はどうでもいい。大事なことを思い出したんだ。おれが襲われたのはおれの家のすぐ近く、つまりおれの家にいる朧に被害が及ぶ可能性がある。

だから、俺は今全力で走っている。銀髪の少女……ユーもだ。朧の名前を聞いた瞬間血相変えて走っている。なにか関係があるのだろうか？いや、今はそんなことより朧だ。あいつは今絶不調。逃げようにも逃げられないはずだ。元々体も弱いんだ。逃げ俺！！家には着いた、あいつの部屋には明かりも点いてない。点いていたのは……血だった。

「朧！！」

間に合わなかったのか！？家に入ろうとドアに近づくがその瞬間、

「きゃあー!?」

女の子が飛び出してきた。顔はわからないが、間違いない。俺を殺したあのシルエットだ！

「お前！」

「っち！まさか、あんな化け物だとは思いませんでした。」

化け物？なんのことだ？俺の家にはそんなのはいないはずだ。どう
いう

シュツッ！！

何かがおれの頬を掠めた。

「な！？もう復活したんですか！？一体どういう生命力です！！？」

その質問に答えたのは、俺達が無事を願った、病弱の少年だった。

「そうですねえ……。ただの化け物じみた人間としか言いようがありません。ああ、生命力には特に自信がありますね。質問は良いですか？」

ポタポタと、臙の手……。と言うより異様に伸びた爪から血が滴っている。その血は臙の方の辺りから流れ出ていた。

「ッ！おぼ」

「……良いみたいですね。さて、では一応殺してきましょうか。
なに、人間じゃないようなので問題ないでしょう。それに、野放し

にしても歩達が困るでしょうし。」

すまん、手遅れだ。というか、あいつ俺たちに気付いてないのか？

「私を殺す？そうはいきません。ほら、これが視えませんか？」

ツ！？いつの間にかユーが人質の取られていた！しまった、完璧に油断した！
今すぐ助け

ブシュ！

「「は？」」

何だ今の音？俺から出たものじゃないぞ？当然、あのツインテールでもないし、ユーでもない。
まさか……

「ゴフツ……。貴女、僕を怒らせたんですか？」

臍からだった。腹に思いつきり刀を刺している（……）。
そうすれば、たしかにユーは殺されないんだろうが、その行動を一瞬の迷いをせずに行った臍は明らかに異常だった。それに、雰囲気が変わった。普段の落ち着いた様子からは一変し、憤怒を顔に浮かべていた。

「その人に……。ユーに、手出ししてんじゃねえよ。この三下が
！！」

……。え、誰この人。臍？臍だよな？なんか口調がおかしいと

「どうか、性格変わってね？
だが、殺気が半端じゃない。ついさっきまで一般ピーポーだった俺にも分かる。」

危険だ、と。

「お前に選択肢をくれてやる。このまま俺に細切れにされるか、逃げながら細切れにされるか。さあ、どれがいい？」

「どちらも・・・お断りですー！」

その瞬間、隳と殺人犯の間に竜巻が生まれた。

「っ！！・・・危ないな。しかも、逃げやがりましたか。」

（隳）

逃げられましたねえ。まさか、竜巻まで使ってくるのは予想外でした。

でも、まあ、目的は達成ですね。

「大丈夫ですか？ユー。」

『問題ない。』

「そうですか。よかったです。それにしても久しぶりですねー、元気してましたか？」

『元気だった。が、少し物足りなかった。』

うん？物足りないとはどういう意味でしょう？まあ、そんなことより……

「歩も無事……ってわけでもなさそうですね。ゾンビですか。」

「その通りだが、そういう、臆は何者なんだ？ユーがネクロマンサーだってことも知ってるのか？」

「そうですね……、まず、ネクロマンサーの事ですが、もちろん知ってます。だって、親友ですよ？」

あれ、なんか、ユーがガクツと肩を落としましたけど、何か僕は間違いを犯しましたか？え、だって親友って言っただけですけど、もしかして、僕は親友と思われてない！？……シヨックですね……。

「……で、僕が何者かという質問ですが」

「急に落ち込んだな、おい。」

「気にしないでください。ただ、軽くこの世界に絶望しただけですから。で、回答しますと、唯の病弱ですよ。それ以上でも、それ以下でもないです。」

「嘘付け！！あんな身体能力で病弱なはず……」

「ああ、それに関しては時が来たら教えます。そんなことより……

」

やはり、僕はユーに嫌われているのでしょうか。なんか、さっきから眼を合わせてくれませんし、ずっと俯いてばかりです。ハア、何が原因なのでしょう？

『臃』

「……はい、何でしょう。」

何を言われるのでしょうか？一応、気持ち悪い等の悪口は慣れてますが、それを、ユーに言われるとなると話は別です。ショックで白髪になるかもしれません。

『会いたかった』

……さっきまで、ネガティブな思考をしていた自分をブン殴りたいですね。唯の僕の考え過ぎのようでした。……よかった。

「ええ、僕もですよ。」

にこりと笑ってそう言う。ユーはまた俯いてしまったが、さっきのような思考は浮かんでこなかった。ユーの頬が微妙に赤かったからです。

「あー、ちょっと良いか？」

「なんですか？」

「いや、今言うのも何なんだが、今日からユーもここで居候する」となった。「」

「そんなんですか。分かりました。よろしくお願いしますね、ユー」
『よろしく』

今日、歩の家に同居人が増えました。なんだか、この先も増える気がしますね。

第4話 新しい出会いです(前書き)

遅くなりました!!

第4話 新しい出会いです

みなさんこんにちは。臃です。ん？おはようですか？こんばんはですか？わかりませんねー。あ、それでは朝昼晩同時に使える便利な言葉でいきましょう。

みなさんおはこんにちばんは、臃です。よし、これでいいでしょう。朝昼晩兼用できますねー。とっても便利ですね。

ユーが歩の家に来てから1ヶ月経ちました。時間が飛んだのはご了承下さると助かります。大変だったのですよ。ええ。メガ口が来たり、吸血忍者が来たりもうはっちゃかめっちゃかですよ。まあ、ほとんど歩に押し付けていますけどね。日ごろの重労働で僕はもうくたくたです。もう裏のこわーいお仕事から足を洗おうと思っていたのにユーが来たので、3人分の食費を稼いでいます。あ、いや、2人分ですね。仕送りがくるといつても歩一人分だけですからねー。歩には迷惑かけられませんし、足を洗わずいまだに暗さ・・・こわーいお仕事をやっています。あ、実を言うところのことは歩とユーたちには秘密です。無駄な心配をかけたくありませんからねえ。銀行には親からの仕送りということで入金しています。

フッフ、裏のお仕事してるとどうしてもこういうことが得意になっていくのですよ。我ながらダメ人間ですね。ま、おかげで体調が崩れやすくなりましたけどね。絶不調によくあります。学校なんかもう保健室通いですね。保健室は我が城です。あ、嘘です、先生！やめてください！！それはアンブ　ラ社の薬品じゃあないですか！？早く閉まって下さい！！

ふう、疲れしました。まあ、そんなこんなで1ヶ月経ったわけですよ。もう夏真っ盛りです。暑いですね。僕なんかすぐにぶっ倒れちゃいますよ。歩は干乾びてますけどね。あれはすごかったですね。で、聞いてください。これが一番重要です。いままでの話なんかごみ箱

にポイしてもいいくらいです。なんと！！今日は久しぶりに休日なのです！！

・・・あれ？微妙ですか？いや、最近ほんとに仕事が多かったのに死にそうだったんですよ。冗談抜きで。なので休日（といっても学校がありましたけど）は本当にうれしいですよ。今日は久しぶりにユーとゆうーつくりまっただーりお茶でも飲みますかね。ああ、ユーと言えばなぜか歩の家に来て1週間ぐらい経ったある日からなぜか夜に僕の布団に（ベットじゃあないです。僕は和が好きです）潜り込んでくるのですが、あれは何故でしょう？あれですか、いつでもどこでも私を守れ、という意思の表れでしょうか？うーん、まあ、人間界は危険ですからねえ。なんでもいますよ。どこにでもいますよ、ユーの命を狙う輩は。

うーん、こんなところですね。ああ、ちなみに僕は今さつきも言ったように保健室にいます。もう帰りますけどね。勉強なんて問題文見ればどんなに難しくかろうと理解してしまうのでやる必要もないです。まあ、入学して早々のテストは半分以下でしたけど。まじめにやらなかったんです。この見稽古ですが、最近オンオフが付けられるようになってきました。いやー、やっとこさ、アイマスク卒業ですなー。よかったよかった。

・・・ところで、卒業した時期に呼応してやたらお見舞いが増えたのは何故でしょう？特に女子の方のお見舞いが増えました。うーん、何故でしょう？あれ？これは一回やりましたね。

「さつきから何ぶつぶつ言ってるの？」

「いえ、なんでもありません。気にしないでください。先生。」

「そう？あ、そういえば栗須先生が呼んでたわよ？」

この時期だから、また愚痴でしょうか？何かお土産のお酒でも盗っ

ていきましようか？

・・・いや、駄目ですね。さすがに高校生ですから自重しないと。家の秘蔵のお酒でも持っていきますか（未成年が何作ってるんだ！と言った意見はスルーです。元々クリスにあげる為に作っているのですから大丈夫なはずです）。

「わかりました。それでは、お世話になりました。また来ます。」

本当は来ないほうが健康で大変よろしいのですが、いかんせん、そうは門屋が下ろしません。もうすでに、この保健室の常連・・・いえ、定連、と言ってもいい僕ですから恐らく、いえ、必ずあの保健室に再び舞い戻るでしょう。というか、定連になりすぎて保健室の先生・・・もとい、高良先生と仲良くなりましたが、高良先生は美人ですので男子から反感を買ってしまったのですよ。あ、ちなみに、歩は初めはフーンとしていましたが、初めて出会った時のことをみんなにばらすと脅しをかけたらあっさり普段の歩に戻りました。・・・冷や汗掻きながらですけど。このような学校で起きた出来事をユーとよく話しているのですがお見舞いの話をしたとき何故かすれ違いざまに脛を蹴られました。痛いかったです。とつても、そんなことを考えてたらいつの間にか歩の家に帰り、酒を取り、栗須先生のところまで来てしまいました。かかった時間は・・・15分ですか。気付かぬうちに屋根でも登って行ったのでしょうか？まあ、どうでもいいです。

「先生、来ました」

「遅かったな。まあ、いい。今日は俺の友人の家で飲むぞ」

飲むの前提なんですね。

いどーちゅー

「ここだ」

・・・なんかぼろいですねボロいですね。いえ、人が住む家を否定しません。これがこれいつ倒壊しても文句も言えませんが裁判も起こせませんよ？僕が裁判官だったら確実に無罪にします。何が何でもします。どれだけ被害者の家族が泣き喚こうとも、おかげで未亡人になっちゃったと言っても問答無・・・有用で無罪にします。

おや？考え事していたらいつの間にか部屋に入ってますよ？って！？

「先生、不法侵入です。今すぐ警察に行ってください。」

「アポは取ってある。さ、開ける。」

命令ですか。そうですか。はいはい、あけ・・・る前に呼び鈴ですね。ポチっとな。

・・・

・・・

・・・

・・・遅くない？もう一回ポチっとな。

・・・

・・・

・・・いや、もうこのくだりいいから。もういいです。開けますよ。

もにゅん

・・・えっと、開けた瞬間視界がブラックアウトしましたけど、な

に僕は死んだのですか？

ポケンの主人公見たくバトルに負けたら目の前が真っ暗になるあれですか？それでは僕は一体何に負けたのでしょうか？人生ですか？病魔ですか？世の理不尽にですか？

「な、ななな、何やってるのー!？」

「ほえ？（はい？）」

うん？なんか上のほうから声がしますけど、何でしょうか？とりあえず、僕の視界を完璧に遮っているこのなぞの物体Aをどかすことにしましょう。

むにゆうん・・・

「あ、んん？あれー？そんなとこでどうしたの？」

んんんん？上からは女性の声。で、僕がどかそうとしたやたら柔らかい物体A。これらの情報を照らし合わせて今の状況を考える・・・
・・・前に、

「あー、ふみまへん、はんへふでふっはおれまふ（すみません、酸欠でぶっ倒れます。）」

バタリ。ついてないですね・・・。僕が何かしまし

んあー、ここはどこ？僕は臃。
意識が戻りました。ん？何でしょう？笑い声がしますね。少し寝た
振りでもして、聞いてみましょうか。

「うん、クリスとええつと、臃君だっけ？はそんな感じで出会っ
たんだー。なかなか面白い出会い方だね。」

「でしょー？まさか、出会いがしらに『未成年飲酒は駄目ですよ？
やるならべないところでない』なんて言う小学校6年生みたい
な形の子供ながそんなこと言うんだから思わずお酒吹いちゃったよ。」

あー、確かそんなこと言いましたねえ。懐かしいですね。

「面白い子だなー。まあ、あたしを初めて会った時はびっくりしち
やったけどね。いきなり胸掴まれるんだもん。」

あ、あれ、胸だったんですか！？予想道理なんですけど、あつてい
てほしくはなかったですね……。

「臃はスケベだからねー。」

「ちょっと待って下さい！！」

異議あり！！激しく異議あり！！！！クリスさんは何言ってるので
しょうか！？自分で言うのもあれですがこの歳で僕ほど性欲に枯れ
た思春期男子もそういませんよ！？

……自分で言ってるって悲しくなってきました。

「あれ？臃起きてたの？」

「あ、はい、今起きたとこ・・・って、ちがう！！そうではなくて、僕がスケベだという発言を今すぐ取り消して下さい！！理不尽ですよ！！」

「えー、だって、実際にネグレリアのおっぱいを掴んだことは事実でしょー？」

「っ、確かにそうですが、あれは不可抗力です！！いきなり目の前に謎の物体が現れたら皆それ相応の対応をするでしょう？僕の取った行動はそれと全く同意です！！」

「謎の物体って・・・おねーさん傷ついちゃったな・・・。」

「ああ！？すみません！別にあなたを貶したわけではなくてですね・・・あ、申し遅れました。僕は鑢臙です。以後、お見知りおきを。」

「あたしは、ネグレリア・ネビロスだよ。ネネって呼んでね。」

「了解です。それで、クリスのお友達はネネさんですよね？」

「そっだよー。」

「・・・で、クリスは早速酔っぱらってる。」

「ひょらよー。」

「・・・まあ、いいですよ。あ、これお土産というか自作のお酒です。」

「ほんと!?!のむのむー!!」

飲兵衛ですねえ。って、嗚呼、そんな。僕の自作のお酒がラツパ飲みでどんどん消えていく……。

「で、さっきの話の続きなんらけるさー。」

ん?さっきの続きって……。

「結局、臃はスケベってことで」断じてよくありません!!」「ぶー、いいじゃ」「よくありません!」「ちよっとー、最後までいわ」「せませんよ!?!」「」

「あっはははは、やっぱり臃君は面白いねー。」

面白ってなんですか!?!こっちはとっても必死だというのに!!

「そついつとこが面白いんだよ。」

「心読まれた!?!」

「というわけで、臃はスケベにけつてーい。」

「なんで!?!なにが『というわけで』なの!?!まったくそうだった経緯がわからないのですがっ!?!」

「「よろしくね、スケベ君。」」

「声を合わせて言うなー!?!!?!!?!」

J e s u s ! ! ! ! ! 神は死んだ!!!この世に情けというものはないのか!!

「あははははは!こんなに笑ったのは久しぶりだよ。」

「ふふふふふ!こんなに気が狂いそうなのは久しぶりだよ。」

あ、たぶん僕今すっごい邪悪そうな笑顔です。七実さんみたいな感じで笑ってるはずですよ。

「それにしても、クリスと友達だなんて、ネネさんは何者なんですか?」

これは普通に素朴な疑問。クリスは、強い。とつつつても強い。僕は負けることはありませんが(負けるとしたら体力切れですね。まあ、悪刀を使えば負けないですけど。)たぶん、この街を5分以内に荒野に変えるくらいの力はあるでしょう。そんな、彼女の知り合いですよ?気になります、気になります、気になります。そう思いませんか?

おおっと、ちょっと危ない人が入ってしまいました。

「んんとー、まあ、簡単に言っちゃうと冥界人かな?」

「そうなんですか?でも、冥界とヴェリエって敵対関係でしたよね?なのにこんなところで最強の魔装少女とのほんとしていいのですか?」

「いいのいいの。プライベートは別だよ。」

「そうですか。」

やはり、強い人というのは公私はつきりしてますね。ん？ああ、ちなみにもちろんのことですがネネさんがとつても強いということくらいとつくに気付いてますよ？たぶん冥界でも最強クラスでしょう。まあ、だから何？って感じですけど。

「ところでさー」

「はい？何でしょう？」

「朧君も何者なのかな？魔装少女でも冥界人でもメガロでも吸血忍者でもない。言ってみれば普通の人間だよね？」

「分かってるじゃありませんか。」

「違う違う、そうじゃなくて、なんで普通の人間なのにそんなに強いのか？」

「……あれ？ばれましたか？いや、それはないでしょう。なぜなら僕は今、普通の一般市民の動きをしているのですからばれるはずありません。クリスにも確認しましたし。なら……カマかけですか？」

「はて、何のことでしょう？僕はただの病弱な一般ピーポーですよ？」

「んー、カマかけてみたけど駄目だったかー。」

おお、やはりカマかけでしたか。

「おぼりよはちゅよいによー。」

「はい！？ちよ、クリスさん！？何言っちゃってるんですか！？」

「え？そうなの？」

「いやいやいやー！！強くないですよー！！クリス、いきなり何言ってるんですかー！！」

「え？強いでしょ？だって普通にあのメガロもどき倒してるじゃん。」

「ブツ飛ばすぞ糞アマー！！！！」

こいつ素面でしゃべったと思ったたら何口走ってんだよ！！

「わー！臍がキレたー！！」

「つたりめえだー！！人がせっかく普通の一般人みたくなるうとしてるって時に手前は何大暴露してんだよー！！さっきのスケベ発言とかも合わせてもう我慢できんー！！表に出るー！！世の中の理不尽、不条理、その他諸々叩きこんでやるー！！！！」

「謹んで遠慮します。」

「なに冷静に断ってんだよー！！！！あー、もういいです。はいそうです。僕は普通の人じゃありません。その気になれば日本の主要人物を1日で殺せる人です。．．．どこその飲兵衛が喋りやがったせいでこんなこと言う羽目になってしまったではありませんか。」

また今度屋台で奢りやがって下さいね？」

「臃君つて、怒ると性格変わる人？」

「え？ああ、そうです。口調とかもガラッと変わっちゃうんですよ。お恥ずかしいですね。」

ああ、そうそう。実を言うとユーが来た最初の夜のなんか変なツイ
ンテールが来た件なんです。あの時歩に不覚にも見られてしまっ
たので、記憶を消してあります。どの辺からは知りませんが、戦闘
の所は間違いなく消えています。え？何故かって？いやー、あの時僕
取り乱してましたからねー、うん。恥ずかしくてつい、ね？照れ隠
しです。

「変わってるね。二重人格？」

「いいえ、同一人物です・・・というか、今何時・・・って8時！
？」

なんてこった！！最低でも九時に寝ないと体が持たないというのに
！！

「ネネさんすみません！！僕は今日はもう帰ります！九時には寝な
いと色々駄目なんです！！」

「うん、わかった。じゃね。」

「お邪魔しました！あ、クリスは置いてきますね。」

「ひどくない！？くりすももう帰るよ。お酒なくなっちゃったし。」

「え？クリスも帰りやがるのですか？まあ、いいです。では、お邪魔しました。」

「臃まだ怒ってるの？いい加減機嫌直してよ。」

「黙りやがれです。」

クリスと雑談しながら、僕はネネさんの家を後にしました。

「臃君か……。なんか、ユークリウッドに似てたなー。」

「ねえ、臃の病気って本当に治らないの？」

帰り道、突然クリスがそんな事を聞いてきました。

「いきなりですね……。治りませんよ。たとえば、ヴァリエでも冥界でも、果ては悪魔男爵の力でも、ね。」

「試したの？」

「いえ、ただわかるんです。この病気は一生治ることはないって。それに、もう今更ですよ。もう慣れちゃいました。この病魔はもう僕の友人みたいなものです。」

「そう……。」

なんか、重くなりましたね……。こういつときは話題を変えるのが一番です。

「そういえば、クリスは呪いを解く目処は立ったのですか？」

「え？あ、ああ、うん。あともう少しかな？中々、うまくいかないんだけど、これなら臙に協力してもらわなくてもできるかもね。」

「そうですか。でも、なにか協力してほしいことがあれば何でも言っ
て下さいね？クリスのためなら協力は惜しみませんよ（ニコリ）」

「えー？う、うん、ありがと……。／＼／」

うん？何やら顔が赤いようですが、また酔いが回ってきたのでしょうか？

っと、もうそろそろ着きますね。

「では、僕はここで。帰り道、気を付けてください。おバカな魔装少女がサクリまくってますから。」

「うん。じゃあ、また学校でねー！」

クリスと別れ、相川家のドアを開けます。あ、そういえば、ユーと
まったーりできませんでしたね。いまさら遅いですが。

って、何か騒がしいですね。ユーは喋りませんし、お客さんでしょ
うか？

「歩、ただいま帰ります……。／＼」

えー、僕の目の前には今小さい女の子がいます。ユーではありませんせん。全く知らない人です。それが、何故か顔を赤くしながら歩をばつこぼこにしています。．．．えっと、とりあえず、

「あ、臆じゃないか！？いいところに帰ってきた！！たすく」

「歩．．．ついに誘拐ですか．．．。僕の時のことはまあいいとして、これはさすがに駄目ですよ．．．。自首してください。」

「なんでだよ！？つて、あ、ちょっと待って！けらな．．．アツ
—————」

『臆、お帰り』

「はい、ただいま。」

えー、また同居人が増えたようですね。それにまた女性の方．．．。歩はここをハーレムにでもする気でしょうか？

第5話　なんか、危ない人が来ましたね

皆さん、どうも。臃です。昨日きた少女・・・ハルナと言うらしいですが、あの子はとっても元気ですね。その元気、こっちにも分けてもらいたいくらいですよ。ですが、何故か僕の呼び方が『色白さん』なんですよね。あれ、どうにかできません？確かに僕は色白くて日焼けなど皆無ですが、それをそのまま、その人物を示す言葉に使うとは・・・予想外です。ええ、まったく予想外です。散々、化け物やらなんやら言われてきたことはありますが、まさか、『色白さん』とは・・・ふう。まあ、いいです。今の問題はそこじゃないです。朝、いつも道理、特性栄養ゼリーを作るうと台所に入ったのはいいのですが・・・

「ここは、あたしの戦場だ！勝手に入ったりするなよなっ！！」

だ、そうです。困りました。僕の食は細いのでぶつちゃけ、1週間飲まず食わずでもピンピンしてるのですが、やっぱり何か食したほうがいいとユーが言ってたのでここ最近ゼリーの栄養注入だったのです。あ、ちなみにコンビニとかにあるのもいいですが、こっちはお金が掛かるので、自分で作ったほうが安上がりだから自分で作っちゃったりしてます。まあ、それも今日で終わりそうです。

「そうですか。分かりました。では、頑張ってくださいね。」

と、言って、学校に向かいます。僕は歩よりも学校に行くのが実を言うと早いんです。

何故か？それは、ただ単にすぐ学校でぶっ倒れるので早めに行つて、

人に迷惑をかけないようにしよう、という考えです。……た
まに女子の方が大勢保健室で待ち構えているのは何故でしょう？し
かも、僕がふらふらで保健室に入った瞬間『きゃ〜！』と黄色い声
援が出るのも何故でしょう？分かりません。女性の方はミステリー
です。

「それはそうと、やはり何か口にしないとなんかさびしいですね・
」

どうしましょ？やっぱり、コンビニで栄養ゼリーでも買って食べま
しょうか？あー、でもそれは今後のお仕事の比率によりますね。え
ー、今月のお仕事はーっと、……おおう、海外に行けと申す
か。何々、某国でのテロの主犯格の　　って、なんで僕に回ってく
るお仕事はこんなに物騒なんだろう？しかもこれ、下手したら死
にますよね？さすがに銃弾を急所に食らったら僕でも死にます。・
・逆に急所じゃなかったらどんどん回復していくのですが、まあ、
それは別のお話。って、ん？あれは……メガロもどきですか。最
近多いですねー。まあ、ユーが僕たちの近くにいるからなんでしょ
うが、ユーが近くにいない関係なく僕には面倒事がちらほら降
りかかってくるのは何故でしょう？あれ？今日はやけに疑問に思う
ことが多いですね。まあ、それはいいとして、どうやら僕は根っか
らの不幸体質の様です。きつと今日も何かありますよ。ええ、断言
できます。……最近、志貴君の力じゃあどうにもならないこと
になることが多いのでここらでもっと強い人……いいえ、『弱い人』
の技術でも見取ろうかな？ん？クリス？駄目駄目、あの人は『僕』
に近いですから駄目です。じゃあ、ネネさん？それも駄目です。あ
の人もクリスと同じくらい強いです。あー、だれかちょうどいい感
じの人もいませんか？ぶつちゃけ、志貴くんたちの技術は暗殺とか
一瞬の攻防が主だからって、そういえばメガロもどきがいましたね。
……はい、背後に回ってブスツ「バゴン！」……あれ？

「ケケケケ！気付いてないとも思ったか？とっくに気付いてんだよ。ヴァーか！！」

こいつ、は、サソリのメガ口ですか。尻尾で思いっきり叩かれました。

・・・まずいですねえ。僕って打たれ弱いんですよ？それこそ、障子紙並みの防御力です。

つと、こんなこと考えてる場合じゃないですね。すぐさま魔眼をONにし、ついでに見稽古も使います。武器は・・・

「やはり、これですね。」

みゆいと、爪を伸ばす。硬度も切れ味も高くする。そう、なんと僕はこの忍法の使い手さんよりもうまく使えてしまうのです。すぐさま、硬度と切れ味を何合打ちあっても折れないくらいにはできます。時間を掛ければもっと堅く、鋭くできます。

「・・・行きますよ？この動きに付いてこれますか？」

ここは屋外。多少、足場が少ないでしょうが問題ないでしょう。忍法足軽のON・OFFをうまく使い、屋根を、壁を、電柱を、すべてを足場とし、相手を翻弄する。今のあのサソリさんは無音で僕が跳び回ってるように見えるでしょう。実際、無音ですが。

「十七分割・・・」

合計八本の爪で相手を切り裂く。そして、サソリさんは断末魔をも上げれずに絶命した。

「・・・ふう、おや？この気配は・・・歩ですか。大方、ハルナに「メガロだ！」って言われて来たのでしようが、この現場を見られると些か面倒ですね・・・。逃げましょ。そうしましょ。」

それから、志貴君の身体能力を駆使してなんとか校門に着きました
が、そこで力尽きました。

『これはゾンビですか？いいえ、ただの？病弱です。完！！』

た。
「愛読ありがとうございます」

駄作者の次回作に

期待しないでください。

終わってたまりますか!!!

危なかったです……。まさか僕が気絶している間にこんなことになっていようとは!!!

許すまじ、作者!!!あとがきで覚えてろよ!!!

で、僕の今の状況ですが、脇腹の打撲で、保健室にて寝ています。というか気付いたら保健室でした。あ、今四時限目です。サボりまくってます。今日はもう帰りましようかね？

「失礼します。」

うん？だれか来ましたね。

「あら、星川さん。どうかしたの？」

「いえ、ただ、彼の容体が気になっただけです。」

「そうなの？ 隴君のことだからもうじき目が覚めるはずよ？ まあ、一応見てつてくれないかしら？」

「もちろん。初めからそのつもりでした。」

ん？ 僕ですか？ もう起きてるんですが・・・寝たフリでもしておきましょう。心眼は開いておきますけど。

シャーっとカーテンが開けられ、シャーっと閉められます・・・つて、あれ？ なんで閉めるんですか？

「ほう、やはりいいな・・・。」

何がですかつて、わわ！？ 頬を突いてきましたよ！？ ついでに頭を撫でてきましたよ！？

「うん、やはり私は君の顔の造形が堪らなく好きだな。」

なんか言ってますがどうしましょう！？ 僕はどうすべきですか！？ え？ 何々？ 『リア充死ね！』？ つて、この声は作者！ てめえに言われる筋合いはねえ！ むしろお前が死ね！ おっと、失礼。

というか、顔の造形が堪らなく好きつて・・・どういうこと？ よくわかりませんが、つまり・・・どういうことでしょう？

（ハア、駄目だこの子）

ん？ 今の声はあの時の神もどきですか？ お久しぶりです。

(そうだね。・・・あとで作者ボコそう。なんで私にも役回してくれないのさ)

協力します・・・って、わわ!!か、顔が近いです!!なんでそんなにジーツと見つめてくるんですか!?

「うむ、素晴らしい。」

近いですって!!顔と顔との距離がもう数センチしかありませんよ!!!?

もう、限界です!!起きましよう!!

「ううん・・・あれ?ここは?」

ありきたりな起きた時のセリフです。まあ、寝ていたこと自体が演技ですのでこうでも言っておかないと。ちなみに星川さん?は僕が「う」つと言った時点で顔を引きました。凄い速さです。

「起きたか。体調はどうだ?」

あんなことしていたのによくそんな堂々とできますね・・・。ある意味、尊敬します。

「良好です。それよりもあなたは?」

「む、知らないのか?よく、ここに看病に来ていたというのに・・・」

うん、すみません。全く覚えがないです。

「すみません。何分、体調不良の時は意識のほうが曖昧でして……」

「ふん、まあいい。今から覚えてくれれば全く問題ない。星川輝羅々《ほしかわきらら》だ。以後よろしく頼む。」

「臆臆です。さっきの話から察するにいつも看病してくれていたようですね。ありがとうございます。」

「（よしっ！高評価だ！）いや、礼には及ばん。ところで、なぜ校門で倒れていたのだ？登校したらお前が倒れていて驚いたぞ。」

「ああ、いつもと同じですよ。すみません。」

「いや、構わんさ。（むしろその方が会える時間が増えてラッキーというもの）」

「そうですね。あ、僕はもう帰りますね。もう昼放課も終わってしましますよ？そろそろ教室に戻らないと授業に遅れるのでは？」

「……そのようだな。では、私はこれで。お大事に。」

そついうと星川さんはカーテンを開けて出て行きました。……今度はカーテンを閉めていきませんでしたね。

「というわけで、先生。僕はもう帰ります。」

「わかったわ。じゃ、気をつけてね。」

先生に見送られ僕はてくてく相川家を目指します。帰ったら何しましよう？ユーとまったくりしましようか？それとも、ハルナと打ち解けてみましようか？

ブルルルルルッ

そんな考えを張り巡らしていると、不意に電話です。何なんでしょう？

「もしもし、臈でs」

『『死神』か？お前に仕事を依頼する。』

あー、『お仕事』の話ですか。

『ある人物の抹殺を依頼したい。』

「・・・まあ、いいですけど。で、その人物の容姿、特徴、喋り方、そして、名前を教えてください。」

『名前はセラフィム。容姿は長いポニーテールで、身長は167cm。よく「気持ち悪いです」「クソ虫」などと言っている。戦い方は木の葉を手裏剣や剣にして戦う。忍術は雷を扱うらしいがそこまです得意ではなく、剣術のほうに注意してもらいたい。特にスピードには要注意だ。以上』

ふむ、今までのお仕事とは一味違いそうですね。

「分かりました。最後に1つ。その方を殺そうとする目的は何ですか？」

『われらの計画において邪魔だからだ。』

「・・・なるほど、分かりました。お引き受けします。報酬は30万円です。」

『ふっ、噂には聞いていたが、本当に格安で依頼を引き受けるな・・・。ああ、成功した暁にはその報酬を約束しよう。』

まあ、生活できるだけのお金があればいいですしね。ちなみに、30万円というのは3人に10万円のおこずかい、というわけで30万円です。ああ、3人というのは。ユー、歩、ハルナのことです。え？僕の方ですか？皆の残りカスです。まあ、もつとも、ユーは全く、とは言いませんが使いませんから、それを少しお借りする感じですね。5000円ぐらい。

・・・それにしても、朝言ったことがほんとになっちゃいましたね。今回の任務は少々本気で取り組みますか。

朧「良かったですね。ではこの辺で。」

朧&神「感想等お待ちしてまーす!」

第6話 葉っぱの人、登場です！

ども、臆です。現在、自宅にて（と、言っても歩の家ですが）今回のお仕事の準備をしています。まあ、準備といっても少しだけ暗器を持って行くだけですけどね。主に苦無、鋼糸ですけど。ね？少ないでしょう？これにはちゃんとした理由がありまして、簡単に言うと重たいのです。それだけです。あとは悪刀『鏢』を用意して終わりです。この間実に15分です。依頼主もまさか大事な依頼の準備を15分で終わらせられるなんて予想外でしょう。しかし、僕の場合は、暴露しますとお仕事の時に持っていくものなんて悪刀『鏢』ぐらいですよ？普段は。今回の暗器はほんの気休めです。あつたほうが便利かな〜程度のもんです。正直使うかどうかわかりません。．．．まあ、僕自身、こんなものいるのですかね、と思つてたりします。だつてそうでしょう？僕は真庭忍軍の方の『忍法足軽』と『忍法爪合わせ』を見取っており、さらに志貴君の殺人技術、マトリックスのアンダーソン君（笑）の心眼．．．というよりも身体能力．．．というより、演算の処理スピード？まあ、それが異常に高くなつてますので、要するに忍法使えて殺人うまくてなおかつ情報の呑み込みが早いから不意を突こうとも余裕で対処する人間です。．．．お！改めて自分の力について考えてみたら、凄い化け物ですね。これ全部、僕の強すぎる力を抑えるためつていうのですから、悪い冗談ですね。

まあ、そんなことはその辺の道端にポイして、久しぶりにユーと今度こそまつたーりしましょうか。

「ユー、いますか．．．つて。」

ハルナもいました。いや、それは別にいいんですけど……。

「……何やってるんですか？」

「見ればわかるだろっ！ヴァ スだ！！」

いや、この世界にヴァイ ってあるんですか！？……いや、まあ、あるんでしょうね。アニメとかもありましたし。

「色白さんも参加しろよな！！」

「ああ、すみません。僕はそのカードは持ってないです。」

『安心して。デッキならいっぱいある。』

見れば、部屋の横のほうにデッキの山、山、山……。あ、Fat とインデック は品切れですね。

「色白さんもやるっ！！」

「ふむ……分かりました。それでは、デッキづくりをするので待っていてください。」

そうですね……。メル ラと刀 の混成デッキで行きましょうか。え？何故かって？僕自身がそうだからです……。とりあえず、志貴君と七実さんは確実に入れましょう。

「できました。」

「よしっ！じゃあ、まずあたし『私から』あたしからだっ！根暗マ
ンサーは後でいいだろ！？」

『そこは譲れない。』

むむ、喧嘩になりそうですね。・・・そうだ。

「なら、2対1でもいいですよ？」

正直、この手のゲームは負ける気がしません。ええ、前世でも無双
してましたとも。

「なっ！？舐めすぎだろ！後悔しても遅いからな！！！」

『捻り潰す』

おお怖い。まあ、適当にあしらってあげますよ。

「そ、そんな……。あたしの一方通行《アクセラ ータ》が、こんな……。」

『まさか、私のア チャーとギルガメ シュが完膚なきまでに。』

2人とも憔悴しきってますねー。僕はそれに満面の（といっても今の場合は限りなく邪悪そうにみえるでしょうが）笑みで答えます。

「まあ、僕のため、七実、七花、アルク、などなど、絶妙なコンビで繋がっている僕のデッキには勝てないでしょう。ユーとハルナは個々の力に頼りすぎだから負けたのですよ。

……30回も（ボソツ）」

「うるさいっ！喋るな！バーカ！！」

『デリカシーがない。』

「ああ、すみません。……あ、今日はちょっと用事がありますので少し休んできます。ここにデッキの改善点をまとめたメモがあるので参考にしてください。これだけデッキがあれば可能ですから。ふあー、じゃあ、お休みなさい。」

あー、ネムネム。あ、皆さんもお休みなさい。

む、目が覚めました。えーっと、あ、もう夜ですね。とりあえず、歩に晩御飯を頂くとしましょう。

おっとと、寝起きはやっぱりフラつきますね。あー、まだ寝ぼけてるようです。

「何笑ってんだよ。気持ち悪い……死ね！バーカっ！！」
パンっ！

そんな声が聞こえた瞬間乾いた音がした。
まあ、同時に部屋の前に立ってしまったのですが、うん、気まずいですね。

『軽々しくその言葉を使うな。』

・・・そうですね。ユーにとっては『死ね』という言葉ほど重たい言葉はないですよね。

「ユー、気持ちはありがたいが、ハルナも本気で言ってる訳じゃないんだぞ。」

違う。違うんですよ、歩。これはそんなに簡単なものじゃないんですよ。

「いや、本気で死ねよ。そっちの根暗マンサーも一緒に死ねっ！」

今度はハルナがユーの頬を叩きました。明らかに痛そうです。

・・・それにしても、死ね、ですか。最近はその言葉は聞かなかつたですけど久しぶりに聞いたら結構思う所がありますね。昔はよく言われましたね・・・。

『死ぬのは つらい。』

その通りですね。死ぬよりも生きていた方がいいです。死んだらそれまでですが、生きていければいいことがある『かも』しれません。あくまで、『かも』ですが、僕はそこに賭けていま、結構楽しいです。少なくとも死んでいたらこんな経験、できませんでした。

見ると、ハルナは歩にお代りをねだり、ユーは・・・涙を流していました。それを見て歩は急いでユーのお椀にご飯を入れてましたが、その行動の意味はよくわかりません。

さて、僕も食べましょうか。そう思い、部屋に入ろうとしたら、ユーがまたハルナたちにメモ帳を見せていました。

『それと 臍の前で死ねなんて絶対に言うな。』

そう見せた後、ユーは僕の方をじっと見てきました。

「お、臍。起きたのか。飯、食うか？」

「はい、小盛りでお願いします。」

僕の前では死ねなんて絶対に言うな・・・ですか。ユーには心配かけまいとこの体のことについてあの日話したこと以外あまり話していませんが気付いているのかもしれないですね。

この体、ひよんなことで死ぬかもしれないということに

「私は味噌汁を頂きたいのですが？」

・・・あー、さつきから何か来るなー、と思ってたらこの人ですか・・・って、ん？なんか、あの任務依頼の内容の人物に似てませんか？いやいや、考えすぎですね。僕の悪い癖です。

「一応・・・自己紹介とか、してくれないか？」

「わかりました。私の名はセラフィムです。」

ほー、どこぞの天使みたいな名前ですねー、って違いますっ！その名前、依頼の人物とドンピシャじゃないですか！？しかも自己紹介それだけですか？短いです！！威風堂々とした態度は評価できますが、この人、絶対世渡り下手です。吸血忍者だから良いのですが社会の荒波に揉まれてみなさい。すぐにぼろぼろになり・・・ならないかもです。何せ美人ですから。鼻屑にされる可能性があります。それに、仕事ができそうですし。

「あー、もう少し何かありませんか？例えば好きなものとか、趣味とか、特技とか。」

「好きなものは秘剣、燕返し。特技は秘剣、燕返し。趣味は秘剣、燕返しです。」

「・・・まさか本当に趣味を言うとは・・・。分かりました。では、僕も。鑢臙です。好きなものは、和風なもの。趣味は草むしり。特技は特にないです。」

「って、お前まで言うのかよ!？」

「え?何言ってるんですか、歩。言っにきまつてるじゃないですか。常識的に考えて。」

「え、常識的か?」

「何言ってるんだバカアユム!!常識に決まってるだろっ!!」

『常識』

「ええ、常識ですね。」

「何このアウエーな感じ!!俺が違うのか!?俺が生きてきた16年間が間違いだって言うのか!？」

「はい、その通りです。歩、常識を考え直して下さい。」

「俺の今までの人生全否定ツスか!?!？」

「うるさいですね・・・。理不尽じゃないか!？」「まあ、歩のことは一旦ごみ箱にポイしまして「するなっ!!」「あなたは何故ここにいるんですか?」無視ですか!？」「ッ!本当にうるさいですよ?歩。あの事」ばらしますよ?」

「すみませんでした!?!」

ふう、ようやく黙りましたか。で、

「何故ここに来たのですか？」

「任務です。」

・・・任務ね。僕の方も依頼があるのですがこれいかに？あー、確か吸血忍者にも派閥がありましたね。まあ、目的は同じなようですがやり方がねえ・・・。革新派と保守派でしたっけ？まあ、僕はどつちも大っ嫌いですけどね。ユーの力を利用するなんてクソです。持ちたくもなかった力を使わせることは中々に酷なことです。それに・・・

「無意味なことなんですよね・・・。」

「何がですか？」

「ああ、すみません。こつちの話です。で、目的はユーの御同行・・・もしくは引き渡せ、といった感じでしょうか？」

「・・・話が早くて助かります。ですが、私たちはヘルサイズ殿のお力に敬意を払っております。できるだけ、ご本人の意思で御同行願いたい。」

良い迷惑です。

「・・・だそうですよ。ユー、どうしますか？」

正直、初めは歩辺りに任せてほしいです。その方が僕にとっては有

利ですし、何より、歩は僕が戦えないと思ってるでしょうから。ユ
ーもその辺理解してますよね？

『歩 かまわない 追い返せ。』

うわ、ばっさり。まあ、そうでしょうね。僕でもバツサリしますよ。

「

「今回は、戦う必要ないんじゃないか？」

『歩 かまわない いいから追い返せ。』

問答無用ですね。そして、ユーが歩に話を振ったおかげでセラフィ
ムさんの興味も歩に行ったようです。

「あなたは、ヘルサイズ殿の何なのですか？」

「ん？なんと云うか。」

え？そこに迷う余地があるんですか？仕方ない。僕が代りに言いま
しょう。

「『下僕』じゃあ、ないでしょうか？つて、あ、すみません。かぶ
りましたね。」

失態です。

「臆、一回、2人でゆっくり話し合おうか。」

「え？何故ですか？もしやまたお兄「すみませんしたー！！！！」・・・

・フッ。」

「ならば、私も下僕となります。私のことはセラとお呼び下さい。」
おおう、スルーですか。

『下僕は 一人でいい。』

というか、ゾンビがやたらめったらいたら軽くホラーですよ。まあ、僕はゾンビでも殺せますが。

「でしたら、あなたはいいませんか？どう見ても頭が悪そうですし。」

あ、歩が少しキレました。駄目ですね、その程度で怒っていてもゾンビ人生エンジョイできませんよ？あ、目線でバチバチです。これはもしかして……。

「どこか、人のいないところへ参りましょう。」

あ、困る。それ困る。僕のお仕事に歩を巻き込みたくないですし、うーん、どうしましょう？とりあえず、

「ストップ。」

「どうした？臆。」

「この件、僕が受け持ちます。」

今のうちに爪を伸ばしておきましょう。もちろん、袖に隠して。

「な、なに言ってるんだよ！！相手は吸血忍者だぞっ！」

「ああ、別に戦闘をする気はないですよ。ただ、少しお話するだけです。歩も僕の口撃力は知っているでしょう？」

「……まあ、確かにな。でも、危ないぞ？」

「大丈夫ですよ。さ、セラフィムさん。逝きましょう。」

え？字が違ってるって？合ってますよ？どうせ、お仕事で殺さなくてはいけないのですから。

「はい。」

『臍』

「ん？どうしたんですか？」

『気をつけて』

「はい。気をつけます。」

さて、とりあえず、あの墓場にいきましようか。

「どういつつもりですか？」

「何がですか？」

「あなたは普通の一般人のほずです。それなのに私と」

「お話の途中失礼します。こっちもそこまで時間を掛けるつもりはないので用件を言わさせていただきます。あなたには面識もなく、恨みも欠片も、微塵も、小指の甘皮ほど御座いませんが、お仕事により・・・あなたを抹殺します。」

瞬間、爪で彼女の『点』を突きます。が、もう少しの所で弾かれませんでした。

「・・・話し合いじゃなかったのですか？」

「あー、さすがにこれぐらいは防ぎますか。話し合いじゃないですよ。そんなの口実です。あなたには僕が用があまりまして、まあ、あれです。あなたを抹殺する依頼が来てるんですよ。どこの誰だか知りませんが。」

喋っている間も爪で『点』を突く、突く、突く。まあ、しっかり弾かれています。

「よくわかりませんが、降りかかる火の粉は払うまでです!!」

今度はあっちから攻めてきた。秘剣、燕返し、でしたっけ？浅く斬りかかり、ひるんだところで真の一撃を相手に与える技ですが……。

「そんな……。」

「まだまだ、です。錬度がいまいちですね。」

「くっ……！」

ええ、全部かわしてやりました。忍法足軽なしで。あれぐらいならかわすことなど苦じゃないですよ。

ガキイ、キイン！

「む、中々早いですね……。」

長期戦は元々向かないのでここで決めさせてもらいましょうかね。

「殺曲カゴメカゴメ。」

かーごーめーかーごーめー

「なっ！」

驚いてますね。ああ、この技は僕が唄を歌いながら相手の背後に常に回り続けるという単純明快な技ですが、この歌には恐怖とか焦燥などといった感情が湧きやすくなるような効果があります。ちなみに声はどこから発せられてるか分からないようにしてるので尚更で

しょう。

「かーこのなーかのとーりは」

本来この技は一定のタイミングで相手を斬るなり突くなりして本来の強さが出るのですが・・・まあ、まだ確認してませんね。

「いーつーいーつーでーやーる」

「よーあーけーのばーんに」

「つーるとかーめがすーべったー」

「うしろのしょうめんだあれ？」

ブスッ

はい、締めです。まだ、『点』は突いてません。ていうか、この歌ってやっぱり怖いですね。声は全方向から聞こえてくるようにしてあるので、僕がどこにいるのかも分からず、後ろかと思いつき振り向いてみてもだれもいない。最終的に僕の姿が見れるのは最後だけです。あ、ちなみにどうやって全方向から声がするようにはしているのかというと、んー、単純に練習したとしか言いようがないです。はい。

「ゴフ・・・。」

「さて、殺す前に質問します。あなたはユーの敵ですか？」

「ち、がいます。」

「もし、ユーが危険な目にあつた時、あなたはどうします?」

「お助け、するに、決まっています。」

ふむ。

「最後にひとつ。革新派にユーを殺そうと目論む人はいますか?」

「いま、す……。」

あ、気絶しちゃいましたか。まあ、ずっと体を貫通させた爪があればしますよね。

「では……。」

懐からあるものを取りだす。

ピポパポピ。

「あ、もしもし、死神です。突然ですが、あの依頼、破棄させていただきます。え?何故かって?そうですね……。殺そうと思った人のことが気に入ったからです。あ、別に惚れたわけじゃありませんよ?へ?ふざけるな?……。あのですね、僕の噂聞いてないんですか?僕は時たま依頼をすっぱかすことがあるんですよ?僕に依頼したということはそういうことも含め理解していただきたい。では。」

ツーツー。

……。あー、またやっちゃいました。また稼がないと駄目ですね。

恐らくこの人も歩の家に住みそうですから40万ぐらい。・・・と
りあえず、この人を歩の家に運びますか。

というか、また増えましたね。今回は僕にも原因がありますが。

第6話 葉っぱの人、登場です！（後書き）

作「まだだ……。まだ、しな」

神「ザ○」

朧「極死「七夜」」

作「いぎゃあああああああ！！！！！」

神「しぶといね。ま、いつか！！さて、今回は遂にセラフィムさんが出てきたね。」

朧「ええ、疲れました。」

神「戦ってみてどうだった？」

朧「え？そうですね……。まあ、普通に強いと思いますよ？」

神「なんで疑問形なのさ……。それよりも何？殺曲って。」

朧「ああ、あれですか？お仕事に少し楽しみが欲しーなーと思ったのでやってみました。曲は……。作者が選曲しているそうですが、正直、あまりいいのが浮かんでこないようです。」

神「へえー、あいつがね……。だから今回こんなに趣味の悪い曲になったの？」

朧「こらこら……。この歌好きな人がいたらどうするんですか？」

神「そうそう、いないでしょ？」

朧「少しはいると思います。」

作「そ、そうだ……。ここにいる？」

神「ザラ○」

朧「ザラキー○」

作「オーバークル！？くほあ！……！」

神「……と言っわけで今回はここまで……！」

朧「感想等お待ちしてます。」

第7話 よく考えて行動しないと駄目ですね

どうも、またまたお仕事をすっぱかした臃です。まあ、またまたと言っても描写するのは初ですけどね。

あの後、僕はセラフイムさんを歩の家に連れて（おぶって）行き、そこで普通に話し合った結果、何故か僕の下僕として、歩の家に居座ることになりました。うん、何故？いやね？なんとなく歩の家に居座るかな、とは思ってましたがまさかこんな形で居座るとは僕の予想の斜め上を歩きました。その後のユーの冷めた目線の辛いもの。通り過ぎざまに小指を蹴られました。激痛でした。何故こんなことをしたかしたのか聞いてみたところ、

『臃が女を侍らせていたから』だそうです。いや、僕の望むところじゃないですからね？

まあ、そんなこんなで土曜日です。今日は！！なんと！！

「なんでこんなに書類仕事があるんですかー！！！！？」

いや、理由はわかるんですよ？この書類は僕のお仕事の後始末なのですが、多くないですか？机の上に東京が出来てますよ？ふざけんな！！僕の体力でこんな量捌ききれませんよ！？なんですかこれ！？いやがらせ？いやがらせなんですか！！？しかも期限今日中つって何！？死ねと？僕に死ねと言ってるんですか！！わかりました！そういうことならこっちにだって考えはありますよ！！！！！！！！！！遺書、書いてきましょう。ええ。

かきかき……………。

「……遺書って難しいですね……。」

かきかきかき……。

「臙、何しているのですか？……なんですか、この書類の山は。」

「え、あ、セラですか……天井裏で何してるんですか？」

「移動ですが？それより、なんですか？この書類は？」

「あ、これですか？秘密です。気にしないでください。あ、これ、遺書です。」

「遺書ですか……。え？遺書？」

「ハア、さて、やりますか。あ、そういえば何か用があったのではないですか？」

「いえ……、ただ、今度歩以外の皆でボーリングに行こうという話を……。」

「あー、それは良いですね。わかりました。僕は生きていたら行きます。」

「そ、そうですね。わかりました。では、ヘルサイズ殿にもそのように。」

ん？なんか若干引いてませんか？どうしたのでしょうか？まあ、いいです。今はこっちの東京に集中しましょう。とりあえず……

「スカイツリーを崩していきますか……。」

……なんか不吉ですね。まあ、良いですよ。さて、逝きますか。

（ここからは音声のみでお楽しみください）

「くそ！！なんて量ですか！！」「ああ！！ここ間違ってるし！！
またやり直しだ！！」「わわ！！タワーが崩れてわあー！！！！
！！」「ふう、やっと、半分終わりました。って、忍びの方じゃな
いですか。どうし……え！！？書類追加！？ふざけんじゃねえ！
！あ、おい！てめっ！逃げんな！！せめて手伝ってけ！！ダアア
ー！！！！！！」「ハア、ハア、やっと都市の3分の2を制覇しま
した……。あと少しです。あと少し……ククク」おかしくな
ってる。「終わったぞ！！ハハハ！！フハハハハハハハ！！
！！ゴフツ！！」チーン、お亡くなりになりました。

いやいや、死んでませんよ？作者、あなた何勝手にやってくれてる
んですか？あとで覚えていてください。

さて、というわけでやっと終わりました。今は……あれ？おかし

いな？さっきまで少し薄暗かったのにあら不思議、もう空が紅くなってるよ？あ、そうか、朝日ですね？いやー、僕頑張ったからなー、うん、わずか2時間足らずで終わらせちゃいましたよ。えーっと、時間は・・・五時・・・うん、認めましょう。今は夕方であると。・ ・ ・あとあの忍者の方、じっくりO H A N A S I I しましょうか。うん、そうしましょう。よし、とりあえずの目的もできましたし、僕はもう寝

「臆！！すぐに来てください。ヘルサイズ殿が呼んでいます。」

・・・マジですか。とりあえず、階段を下りてと、

「何かご用でしょうか？僕今、すっすっすごく眠たいのですが？」

『メガロが出た。歩たちが危ない。』

「そんな、メガロぐらい歩なら・・・って、でかいですね・・・。」

うーん、どうしましょう？歩たちには僕のこととは秘密でしたし、いっそのことここでバラシテおいた方がいいですかね？いやいや、それはノーです。まだ、その時期じゃありませんし、歩がもう少し強くなったら言いますか。あー、でも、その場合このメガロどうしましょう？結構でかいですから、歩とセラでは荷が重いでしょうし・・・あ、そうだ。

「分かりました。では少し待っていてください。」

そう言って、僕は自室に戻り、とりだすのは・・・刀語第1話です。

（視聴中）

うっ、気持ち悪い。でも、すっかり見取りましたよ。おえ、僕は絶対にあんなことしませんからね！あ、ちなみに見取ったのは『忍法骨肉細工』です。あまり使いたくないんですけどね？今のうちに顔の造形の写真を取っておきましょう。ついでに体も。変装は行きながらしますか。

「ユー、セラ、準備ができました。」

「では、すぐに行きましょう。」

『気をつけて。』

「それで、一体、どのような準備を？」

「ああ、ちょっと待ってて下さい。えーっと、適当にいじると駄目ですからね……。まあ、良いです、普通に蝙蝠さんでいきましょ。う。」

では、早速。ゴキヤ、バキツ、グチャ、など、結構生々しい音を発しながら姿形を変えていきます。やっぱり、気持ち悪いですね。

「ぶっ、どうです？変わってます？？」

「……ええ、変わっています。気持ち悪い。」

「僕もそれには同意します。さ、行きましょ。」

ザバァー………!!!

ん？何かが流れるような音……って!!

「セラー!!」

「え？」

間に合わない!!仕方ない!セラを背負い投げの要領で上に投げる、
艇子の原理を使いましたので、僕でも楽々です。

「臙!!何する」

「あー、間に合いませんね。先にいつてゴボボボボボ!!!」

「臙!!」

……この水、メガロの水ですか、しかもかなりの量が出ていると
見ます。……仕方がない。質量保存の法則に喧嘩を売りましょう。

くセラフイムく

臙が流されてしまいました。私自身としては今すぐにも助けに行
きたいですが、臙は先に行けと言ってましたし、私はそのまま行く
ことにします。……大丈夫でしょうか。

しばらく飛んでいると気持ち悪い服装をした歩がいました。

「あ、セラ、ナイスタイミング。」

「歩、何ですかその格好は。気持ち悪いですね。……気持ち悪いですね。」

「二回言わせていただきました。だって、そうでしょう？ 臍も言うと思います。」

「すまん。けど、こうじゃないと飛べないんだ。」

「……ほんと、気持ち悪いですね。特にスカートが。」

「そんなことより、あれ……ですか？」

「そうだ。途中までは水を止めていたんだが……。」
「なるほど、それで今でも水が。」

「何か対策はないのですか！」

「こうしている間にも臍は流されて行っているのです……早くなんとかしなければ……！」

「今考え中だ。」

「何を悠長な……！」

「セラ、焦るな。俺たちが焦ったら、被害が広がるだけだろ？」

「……くっ。」

もどかしい……。いまこの瞬間にも町は流され、朧も流されているかもしれないというのに何もできない自分が凄く悔しい。歩も私の様に考えているのか、渋い顔をしています。

「アユム！早く倒せっ！もう、この水を止めるには、あいつを倒すしか……。え？」

ハルナが喋るのを途中で止め、水を見ています。水は相変わらず、ドバドバ一点に集中して流れているのに何をそんなに驚いているのでしょうか？……。え？一点に向かって？

「な、なんだよこれ。水がどんどん減っていつてるぞ？」

まさか……。いや、今はあのでかいのを倒すことに集中しましょう。

「歩！呆けてないで早くあいつを倒しますよ！！」

「あ、ああ。よし、セラ、もう半周できるか？さっきの五倍くらいの剣で。」

「可能です。どうするつもりですか？」

「俺が全力で蹴る。この格好の俺ならどこまでも限界を超えれそう。さっきよりも長めの剣で下半分を切り、おれが全力で蹴り上げれば、さすがに干切れてくれるだろう。」

「わかりました。あなたの力は信用に値します。あ、変態ですが、あなたの力は信用に値します。」

変態を付けるのを忘れてしまいました。失態です。

では、行きますー!!

く
臃

現在、質量保存の法則に喧嘩を売ってます。いやー、できるかどうか分かりませんでした。やってみれば出来るものですね。あ、何やってるのかというと、単純にこの水を飲んでます。ええ、どこぞの丸いピンクの丸い生物見たく吸いこんでます。そろそろ限界ですけどね。息とかその辺が。というか……。

「早く倒してくれませんかねえ!!」

チラッと見てみればセラが下半分を長い剣で切っています。で、歩が蹴り上げると……

「ぶわー、ぶろいでぶねー(うわー、グロいですねー)」

シロナガの頭部がはじけ飛びました。その瞬間シロナガは地面に落ちる前に消えていき、水も引いて行きました。……しんどかったー。お、歩は町の修復と記憶操作してますね。僕には記憶操作は効きませんけど。理由？クリスのおかげということでしょうか。さで、僕は家に帰り……あれ？歩、心臓突かれてません？おお、あれはアリクイじゃないですか。セラも力の使い過ぎで血が足りてないようですね。あ、ハルナにキスしました。ピンチってやつですか？……仕方ない。元々、この体内に溜まった水を吐き出さなく

てはいけませんし、少し援護しますか。家の屋根に飛び乗り、口をあけ、そこから圧縮した高圧水流を発射。少し、威力が高すぎますがメガ口相手にはこれぐらいでいいでしょう。そのまま、連続で高圧水流を発射していきメガ口の足、腿、腹、胸、手首、腕、といったぶつていきます。水が当たったところは見事に貫通し肉が弾け飛んでいます。んー、まだ死にませんか。それなら・・・

「（ハイドロポンプ!!!）」

はい、見事にメガ口は粒子になって消え去りました。んー、水って便利ですね。ある程度体の中に入れておきましょう。さて、帰りましょう。

帰宅しました。今に入るといつものようにユーがバラエティ番組を見ていました。毎日大変ですね。

『おかえり。』

「ただいまです。変わりありました?」

『なにも。』

「そうですね。」

そこまで会話?してユーが何故かガントレットを外しました。

「何ですか?」

『臃 怪我してる。』

え?マジですか?・・・あー、これは腕の骨が折れてますね。気付

きませんでした。というか、この程度の痛みは気付きませんよ。ええ。

「大丈夫です。放っておけばすぐに治ります。それに、そんなことしたらユーが痛いじゃないですか。そんなことさせませんよ。」

『わかった。』

ふう、よかった。大人しくガントレットを・・・

ぴとっ

「・・・え？」

ユーが、素手で、僕の腕に触っている？

「っ！ユー！！」

『大丈夫 許容出来る痛み。』

「そうじゃなくてですね！！あー、もう！クドクドクドクド・・・」

歩たちが帰ってくるまで僕はユーに説教してましたとき。

「今日は大丈夫だったか？」

歩たちが帰ってきて、ハルナは二階に上がり、僕はお茶をずずーっ

と飲み、セラはユーと一緒にテレビを見ています。・・・あ、このお茶おいしい。さすが、依頼を受けた報酬として貰った、高級茶なだけありますね。しかもなんと、茶柱が立っております。良いことありそうです。ずずうー。一応、歩の反応には肯定の意を示しておきます。ユーもそれは同様です。

「ユー、聞きたいことがあるんだが？」

ん？何でしょう？威圧的ですね。好ましくありません。ずずうー、はふう。

「俺たちが出会った日、ユーは俺を助けてくれたんだよね？」

あー、そんなこともありましたねー。懐かしいですねー。お茶がおいしいですねー。ずずうー。

そして、それに対してユーは肯定してますねー。ずずうー。お茶がおいしいですねー。ずず・・・あ、お茶が無くなった。入れなおさなくては。

「本当にか？俺を殺そうとしたのはユーじゃないのか？」

瞬間、僕はお茶を入れようとしていた手を少し止めてもらいました。・・・歩は何を言っているのでしょうか？ユーは強く否定しています。

「じゃあ、俺を助けた後、俺が意識を取り戻すまで時間があつたよな？その間何をしていたんだ？」

・・・これはユーを疑っているのでしょうか？バカですね、助けてもらっておきながらその人物を疑うほど無駄なことはありませんよ。

『歩の傍にいた。』

まあ、そうでしょうね。僕が襲われた時も一緒にいましたし。．．．
つて、ん？これ、僕が歩の記憶を消さなければこんなことにはなら
なかったのでは？．．．うわ、すごい罪悪感です。まあ、疑う歩
も悪いのですが。

「本当に？．．．お前に家族を殺されたって情報を得たんだ。
おかしいだろ？被害者の人間と、訳のわからない力を持った人間と、
どっちの証言を信じる？ユー、頼む真相を説明してくれ！」

「歩、口調がきついです。」

「ええ、それと、ヘルサイズ殿は嘘を言うようなお人ではない。」

それに、被害者？ありえない。あのツインテールはそんなヘマ絶対
にしない。なにせ、魔装少女ですからね。だというのに、被害者？
怪しいですね．．．。調べてみましょうか？

「そうだな。少し強く追及してしまった。それは謝るさ。．．．
．すまんかった。じゃあ臈、セラ、お前らが判断してくれ。被害者
の人間がユーの姿を指摘出来る理由はなんだ？さあ、答えてくれよ。
どっちの言葉に信憑性がある？」

「歩、少しお「ストップ。」「臈？」

「歩、その被害者の名前、特徴、教えてください。」

「何故だ？お前に教えてなんの「いいから教えやがりなさい。」「．．

・クリーム色の髪にツインテールだ。名前は京子。そして、割と巨乳だったな。」

「分かりました。では、セラ。言いかけた言葉をどうぞ。」

「少し、落ち着いてください。」

「俺は冷静だ。冷静に、真実を聞きたいんだ。」

『嘘は言っていない。』

「信じてやりたいさ。だから、そういう言葉じゃなくて、もっと簡単で確実な証拠はないのか？お前が人殺しをしていないっていう確証だ！」

「歩……！！！！！」

『っ……！？』

つい、大声をあげてしまいましたが、今はそんなことどうでもいいです。

「……すみません。少し取り乱しました。そろそろ夕飯にしましょう。歩はハルナを呼んできて下さい。今すぐにです。」

実際はユ一から離れるという意味ですが、気付いてますよね？気付いていたようですね。今から退散しました。

「……セラは料理は出来ますか？」

「はい。」

「じゃあ、お願いします。」

「わかりました。」

・・・さて、僕は『こっち』を担当しますか。

「ユー。」

ユーはいまだに泣いていました。悲しいでしょうね。わかります。

「ユー、まず、謝らせて下さい。すみませんでした。僕が歩の記憶を消さなければこのようなことにはならなかったでしょう。」

『気にしないでいい。臙には、臙の事情がある。』

やはり、ユーはやさしいですね。自分自身がこのような状況にあるというの」。

「それでも、すみませんでした。代わりに、と言っても何ですが、思いつき泣いてください。存外、スッキリするものですよ？胸を貸してほしいのなら貸します。」

その瞬間、ユーが僕の胸に飛び込んできました。正直、痛かったですが、悟られるとまずいので、そのまま、ユーの頭を撫でます。

「泣きたい時は泣いていいんです。大丈夫、僕も、そして歩も多少厄介事が来たってビクともしません。だから、泣いてもいいんです。

・・・僕もそうでした。」

嗚咽こそ聞こえませんが、若干震えていることからたくさん泣いているのでしよう。僕はユーが泣きやむまで落ち着かせるよう、安心させるように、頭を撫でていました。

『ありがとう もう大丈夫。』

「そうですね。」

・・・心なしか、ユーの顔が若干赤いですが何故でしょう？あ、あまり泣いたことがないから照れているのですか。なるほどなるほど。

「夕飯が出来ました。」

お、出来ましたか。歩たちも降りてきましたしタイミングはばっちりです。皆席に着きましたしセラも料理を持ってきましたしたべま

s
「さ、食べてください。」

・・・あー！これ黒酢を使った料理ですね！！なるほど健康に良さそうです。

第7話 よく考えて行動しないと駄目ですね（後書き）

神「おーい。おーぼーろー？」

臃「……………」

神「ありや、ダメみたい。じゃあ、臃がいらないから今回はこれおしまい！！

感想とか待ってるよ。」

神「おーぼーろー、大丈夫？……………あ、息してない。脈もない……………」

第8話 ボーリングの常識って何なのでしょう？

・・・あれ？ここはどこでしょう？というか、さっきから僕の頭の中をぐるぐる回ってる記憶ってもしかして走馬灯ですか？

「せいがい！！！！」

あ、あなたは何時ぞやの神様じゃありませんか。お久しぶりです。こうやって面と向かって喋るには今ので3度目ですね。

「そうだね。あ、ついでに言っておくと君、今死にかけてるよ。このまま何もしなかったら普通に死ぬよ？」

え、本当ですか？困りましたね。なんとかありませんか？

「困ってるようには見えないのだけど・・・まあ、いいや！大丈夫！！そのために私がいるんだから！」

助けてくれるんですか！？

「いや、というか、私もう死神業辞めるから、最後の仕事にと思って。」

あなた死神だったんですか？というか、何で辞めるんですか？

「えっと、まず一つ目、臍と初めて会ったときに言ったんだけど、神みたいなものって言ったでしょ？つまりそういうことだよ。で、

二つ目は、単純に君が元々いた世界に飽きちゃったから、世界巡りというか、ぶっちゃけ、君の世界にお邪魔しようかなって。」

勘弁して下さい。こっちにはただでさえ、魔装少女、冥界人、吸血忍者、メガロ、ゾンビとか、もういっぱいはいっぱいなのにまた増えるんですか？しかも今度は神って冗談じゃありません。

「死神だって。別にいいじゃん。今更、一人や二人増えたところで変わらなんでしょう？それに、予定では私は臙の味方のつもりだよ？」

・・・まあ、確かにあまり変わらないですね。それに味方が増えるのはいいことです。分かりました。それでは、僕はあなたをいつでも迎え入れるように準備します。・・・そういえば、名前はなんというのですか？

「ん？私？フレイだよ。」

・・・ずいぶんシンプルですね。

「ぶ〜、うるさいな〜。本名は長すぎるからこつやって名乗ってるの！〜！」

あっそう。では、僕は早く助けてください。

「助けられる人の態度じゃないよね。ま、いいや。いつくよ〜。」

バコンー！！

あ、またこの展開ですか。いや、もう驚きませんからね？

問題ないのですが、やっぱり厄介事は早めに終わらせたいですね。・・・ああ、あの日は、別に怪しいものではなく、前にも言いましたが、海外の依頼の場合詳しい説明が面と向かってされるのですよ。で、それが、今日だということですよ。

「さて、確か集合場所はあの墓場でしたね。歩は下でテレビを見ているようですし、屋根から行きましょう。」

（移動中）

はい、そんなこんなで墓場に着きました。いやー、やはり夜風は涼しいですね。気分が良いです。

「来たか。」

「来ました。手短にお願いします。散歩の途中ですので。」

「フツ……。超難関の依頼の説明を散歩のついでに聞くか。やはり、お前は大物だな。」

「いえいえ、そんなんじゃないやありませんよ。別に人を殺すという意味では同じ依頼でしょう？相違ないです。」

「ククク、違うない。しかし、今回は殺しじゃない。盗みだ。」

「珍しいですね。まあ、良いですよ。依頼料は増えますが。」

「ほう、何故だ？」

「証拠隠滅に根気があるんですよ。殺人よりもね。」

「そういうものなのか。わかった。では、説明する。時間が惜しい
ようだから手短かに説明するぞ。アメリカ合衆の最重要機密事項を
盗んできてほしい。」

「・・・これは、また結構ハードな所から盗もうとしますね。値が
弾みますよ?」

「かまわん。幾らでも払う。だから、完璧にこなしてこい。」

「了解しました。ご期待には応えさせていただきますでしょう。」

「頼んだぞ。」

話を切り上げ、僕は墓場を後にします。んー、やっぱり夜は良いで
すね。涼しいです。

・・・さて

「いつまでもそんなところにいないで一緒に散歩しませんか?セラ。」

「

「・・・気付いていましたか。」

「ええ、とっくに。で、どうですか?」

「分かりました。一緒に一緒にします。」

それからしばらく僕とセラは並んで散歩をしました。僕はカゴメカ
ゴメの鼻歌をしながら月を見て歩いていました。途中、ちらっとセ
ラの顔を窺ってみたらもう、見事な渋面でした。まあ、この歌に

は色々思う所はあるでしょうね。僕はこの歌好きなのでやっぱり歌いますけど。カーゲーめーカーゲーめー。

「ところで」

「はい？」

突然セラが喋りかけてきました。まあ、大体何を聞かれるかは予想が付きそうですけど。

「先ほど人物は何者ですか？気配の消し方、立ち振る舞いからしてみてもおおよそ、一般人が出来るものではありませんでしたが？」

「秘密です。」

「何か危険なことでもしているのですか？」

「秘密です。」

「何故秘密なんですか？」

「それも秘密です。」

「・・・私はそれほどあなたに信用されてませんか？」

失敗しました。少し秘密が多すぎましたね。もう少し、僕もオープンになれば良いのですが、今回のこれだけは駄目なんですよね。世の中、知らないほうが良いこともあります。

・・・だけど、セラの今の顔は耐え難いですね。すごく、悲しげな顔です。僕はこういう顔が一番嫌いです。

「いえ、信用していないわけではないのですが、すみません。これは僕の心の問題です。」

「?どういう意味ですか?」

「……僕は憶病なんですよ。」

「え?」

「もう歩の家に着きますね。帰りましょう。」

そう。僕は結局のところ憶病なんですよ。歩たちに僕の事を言えないのも僕が憶病だからです。嫌われたくない、と思ってるのでしようね。……ハア、僕は結局、ユーと出会ったあの時から何も変わってませんね。情けない。本当に情けない。こんなじゃ、誰も守ることなんてできません。

「臃?」

「はい?何でしょう?」

「いえ、着きました。」

みれば、もう歩の家の目の前でした。いけませんね、考え事をしてるといつもこうです。反省。

「そうですか……。」

少し、呆けながら相槌を打ってしまいましたが、セラは気にするこ

となく、そのまま家の中へ入って行きました。さて、僕も入りましようか。

「ただいま戻りました。」

あれから、家に入って自室に戻ったのは良いのですが、ユーがまだ僕の部屋で寝ていたので、僕は居間で寝ました。ですが、中々寝付けなかったので、暇つぶしに草むしりをして時間を潰しました。おかげで庭はいい感じに整ってます。そして、翌日。

「ボーリングだッ!!」

はい、というわけでやってきましたボーリング場。お昼ということもあり結構人がいますね。

「皆さん、やり方はご存知ですか？」

「知らない。」

「知っています。」

『分からない。』

・・・ほとんどの人が知りませんか。

「そうですねか・・・、じゃあ、僕とセラで色々決めちゃいますけど良いですか？」

「なっ！？良いわけないだろ！！あたしも決める！！」

『任せる。』

いやいや、ハルナ、あなた何も知らないでしょう。知らない人がやったら別に困ることもないのですが、手際とかがやっぱり違いますから、ねえ？

「いや、僕たちに任せてもらいます。まあ、不満にはならないと思います。何ゲームも出来るくらいお金は持って来てますから。さあ、じゃあ、まず、靴を借りに行きましょう。」

それから各自、自分のサイズに合った靴を借りていざゲーム開始です。・・・ところで、気のせいかもしれませんがさつきから奇妙な視線をビシビシ感じるのですがどういうことでしょうか？いや、僕以外なら分かるんですよ？ハルナにユーにセラ。この3人は女性としてかなりレベルの高い位置にいるほどかわいいです。しかしながら、そこに何故僕？しかも一部の人が「おい！あれって鑢七実じゃね！？」とか言ってますし。違います。性別も違いますし、色々違います。まあ、いいでしょう。スルーします。では、セラがユーとハルナにボーリングのやり方を教えているので、ここらで皆さんの服装を紹介します。僕も暇なんです。まずセラですが、自身

のスタイルを満遍なく見せつけるといふ感じの服装です。あれですね。多くの女性の方が自信を喪失しそうです。次にハルナですが、シンプルに白いワイシャツとジーパンです。元気いっぱいハルナにはびつたりですね。で、最後にユーですが、普段通りの格好をしています。暑くないのでしょうか？まあ、ユーはそれが一番似合ってますけどね。ついでに、知りたくもないでしょうが、僕は白の着物に黒の帯という実にシンプルな服装です。もっとわかりやすく言えば七実さんの服装の足の辺りを長くして、帯を黒くした感じですが、いつの日だったか、僕は白の着物に白の帯をして出掛けたのですが、小さいお子さんに「幽霊が歩いてる〜!!!」と泣かれて以来、着物と帯は別の色にしています。・・・あれはほんとに傷つきました。見事に僕の心を切り裂いていきました。はい、閑話休題。

「臍、いいですよ。」

「あ、そうですか。では、初めは・・・あ、ハルナからですね。どうぞ。」

「よしっ!!!」

元気よく飛び出し、そのままの勢いで「だらっしゃっ!!!」と豪快に投げます。はい、見事にストライクです。・・・今、機械が壊れて涙ながら弁償している僕が脳内に浮かんだのですが気のせいですよね。うん。

次はセラです。フォームをしっかりしています。ボーリングに結構来ているのでしょうか？

「行きます!!!秘剣、燕返し!!!」

すばらしく綺麗なフォームから放たれるボール。一直線に進んでいきそのまま一番ピンを倒し、そのまますべてのピンを倒しました。凄いです。完璧なフォームから完璧なコースでした。しかし！しかしながら、言っておきたいことがあります！！

「燕返し、関係なくないですか！！？」

「何を言ってるんですか臙。これは絶対必要ですよ。」

「要するになんでも良いつてことですか？」

「いいえ、あれもまぎれもなく燕返しです。」

「……そうですね。はい、次はユーですよ。」

こくっ、とどなずきとどとととボールを両手で持ってそのままボールをゴトン！と落としました。セラは「無視ですか？」とか言ってますが無視です。ユーの落としたボールはそのままゆっくり転がっていきそのまま一番、三番の間に入っていく、そのままパラパラとピンを倒して行きました。結果、ストライクです。さすがです。

「次は臙ですよ。」

「そうですね。少し待っていてください。」

・
そう言っつて、僕がある場所からある物を持ってきました。それは・

「……まさか、それはボールを転がすための台ですか？」

「ええ、それがどうかしたのですか？」

「……いえ。どうぞ。」

セラの困惑、ハルナの軽蔑、ユ一の無表情な視線を背中に受けながら、僕はボールを台に乗せ、そして……、

「フツ！」

もの凄い回転を掛け、それを転がしました。ボールを中心に埃やら紙クズやらが舞って、ピンに着弾似た瞬間、そのピンがバギャツ！と嫌な音がしましたが、ストライクです。

『……………』

「……あれ？皆さんどうしたのですか？」

「どうしたじゃねえよ！！！」

ん？この声は……ああ、歩ですか。隣にいるのは織戸ですか？下の名前は……分かりません。ないのではないのでしょうか。

「というか、歩。何故ここにいますか？ストーカーですか？」

「なっ」

「なるほど。だからここにいますか。本当に気持ち悪いですね。」

やっぱり、僕とセラはなんとなく属性が似てますね。特に歩相手の

場合ボロクソです。ハイタッチしたい気分です。

「ところで歩。何故そのようなものを被っているのですか？」

・・・確かに。何故歩はあのような気持ち悪いマスクを被っているのでしょうか？

「違う！！私は相川歩などではない！！マスク・ド・アユムだ！」

「「そうですか。通常の三倍気持ち悪いですね。」「

おお！！今度はぴったりですね！ハイタッチです。いえーい。

「ぐはっ！！」

歩は精神的にダメージを負ったようです。まあ、大丈夫でしょう。ゾンビですから。

「相川、お前この子と知り合いなのか？」

「馬鹿言つな。俺がこんな美女と知り合える訳がないだろ？」

む、そのセリフはセラに少々失礼ですね。というか、何故ばれたくないのでしょうか？

「じゃあ、鑓は？って、お前は知り合いに決まってるよな！！一緒にボーリングなんかやってやがったしよ！！ぺっ！」

「はあ・・・、まあ、確かに仲はとても良好ですよ。特にあの銀髪の少女とは旧知の仲です。」

「くそお！！なんだっていつも鑢なんだ！！学校でもすっげー、モテてるのにここでもそうなのか！！？」

・・・この人、何言ってるのでしょうか？僕が学校でモテてる？んなわけないでしょう。

と、そこまで考えていたところで不意にクイクイと裾を誰かが引っ張ってきました。

「あ、ユーですか。どうしました？」

『臙の番。』

「そうですか。ありがとうございます。では、そういって。」

織戸が後ろでギャーギャー騒いでいますが、無視です。さて、またボールを転がしましょう。

一ゲームを終えた後。どうやらセラが歩に何か用事があるようです。僕も用事があったのでちょうどよかったです。何を言うかも検討付きますし、あちらはセラに任せましょう。さて、僕は楽しむつもりでしょう。どうぞせ、明日にはこの国から一時的に消えるのですから。

「色白さん！つぎ、お前の番だぞー！」

「ええ、今やりますよ。」

その後、四ゲームを楽しく終えました。ちなみに、僕たちは四ゲーム連続でパーフェクトです。もう皆さん注目の的です。え？僕ですか？僕は裏で今回の弁償をしている最中です。たまに、「あの美白の美少女はどこだ！探し出せ！」という中々物騒な声が聞こえますが、すみません、僕は男です。いや、その気になれば女性にもなれるのですが、それは男としてどうかと思うので必要性を感じない場合、女性にはなりません。

弁償も済ませ、ユーたちと合流します。なんかガラが悪い人がナンパしてきたので（僕も含め）適当に精神を切り裂いて起きました。ハルナが蹴り倒そうとしてましたが、それはなんとか阻止しました。暴力、いくない！！というわけで、ガラの悪い方には恨みも何もないのですが、ハルナが蹴り倒す前に口撃で粉碎させていただけでした。

その後、ハルナが歩に服をねだり、デパートに向かいます。ちなみに織戸は僕たち（というか、ハルナ、ユー、セラ）が歩の家に住んでいると聞き、僕でも戦慄するほどの殺気を放ちました。あ、ちなみにあの悪三人組は黄色い救急車で運ばれて行きました。歩は「お前ら何した？」と聞いてきたので普通に「口撃しました。」と云っておきました。歩には程々にと注意を受けてしまいました。シン。閑話休題。

で、織戸が「エツチなことしたのか？」とかどうだか聞いてきました。歩は否定し、ハルナとセラはそれに同意しています。が、その後、歩が余計なことを言いやがりました。

「臙はどうだか知らない。」と。

あれですか、さっきのささやかな仕返しですか。ほら、織戸なんか血走った眼でこっちを見ているじゃないですか。

「いえ、僕も何も『一緒に寝た。』……………ユーさん？」

「……………臙（臙）？」「」

今のは、織戸、セラ、歩です。正直に言います。滅茶苦茶恐いです。というか、ユー、あれはあなたから入ってきたのでしょうか。って、ユー。何故視線を背けるのですか！？

「どういづことなのか説明してもらいましょうか？」

「セラさん？ちょっと落ち着いてください。説明しますから。」

長々と説明させていただいました。ええ。その結果

「……………信用できない（出来ませんね）。」「」

……………あー、プツンしそうです。

「……………そうですか。では、どの辺が信用できないのか。教えてくれやがりますか？」

ええ、とっても疑問ですね。何故、信用できないのか。ん？どうしたのですか歩。さっきまであんなに強気だったのに、顔色が悪いですよ？

「お、おい、その辺にした方が……。」

「？何故です？ヘルサイズ殿の真操が掛かっているのですよ？」

「そつだぞ、歩。」

「……い、いや、そつじゃない。そつじゃないんだが……。」

「じゃあ、何だというのです？」

「お、臍は怒らせちゃ歩？どうしたのですか？早く！何故！信用できないのか教えてください。フッフッフ……。」ひっ！？」

「さあ、早く教えやがりください？どこが信用できませんか？」

「し、信用する！信用してるから……！」

「……で、そつちのお二人は？」

「……信用できます。」

「俺は信用しないぞ……学校でもハーレムだからって調子に乗ってんじゃねー……！」

（（（あ、バカ。（（（歩、ハルナ、ユー、セラ

「そうですか……。では、あっちでゆっくり話し合いましょう。
フフフフフフフフ……。」

「おつおつ！上等だぜ！！」

（10分後）

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
い……………」

「お待たせしました。この通り、織戸も信用して下さったので、早
く服を買いに行きましょう。」

あれ？皆さんどうしてそんなに顔が蒼いのですか？珍しくセラまで
も顔が蒼くなっているではありませんか。

「？どうしました？早く行きましょう。」

この時の皆の共通意識。

（臃は絶対に怒らせたら駄目！！）

何故か重たい空気の中、衣服売り場に着きました。なんと、歩は僕
の服も買っても良いとのことなので、今度は趣向を変えて、裾がと
つても長い着物でも買いましょうか。セラも物欲しそうに服を見て
います。セラも女の子なのでこういうのには興味があるのでしょう。
……………ぶむ。

「セラも何か買いますか？」

「え、……良いのですか？」

「良いですよ。ね、歩。」

「ああ、むしろハルナぐらい遠慮なく言ってくれ。」

見ると、ハルナはうれしそうに頭のとっぺんをぴょぴょんと揺らして、服を物色しています。

「ですが、私のようなものに……」

「だから、いいですって。」

「ですが、私は下僕であって……」

「だってよ、臍？」

「……ハア、じゃあ命令です。今日はわがママを言って下さい。出来る限り要望には応えます。」

ほんとはあまりこういう命令をしたくないのですが……というか、命令自体したくないのですが、こうでもしないとわがママも言うてくれませんかからね。

「その命令は卑怯です。ですが……。」

くるりと背を向け商品を吟味し始めました。振り向きざまに小さく

「ありがとうございます」と笑顔で言ってきました。歩は・・・あー、どきどきしてますね。さて、じゃあ、僕も吟味しますか。

(歩も、なにか思うところがあるのでしょね。)

気付けば、歩はユーの手を握り、そこから連れ出しました。

「おい、相川！どこ行くんだよ！」

「・・・セラ。」

「分かってます　　すみません、この服、似合いと思いますか？ハルナ、こちらの服も可愛いですよ？」

さすがですね。僕とセラはそのまま歩たちが行くのを見守ってました。

「・・・しっかり、受け止めてあげて下さい。歩。」

それでは、僕の方も何か服を・・・

「すみませんお客様。こちらは男性用の服を扱う店でございます。女性用はあちらとなります。」

「・・・ああ、そうですか。ですが、僕は男ですよ？」

「えっ！？た、大変失礼しました！あまりにも綺麗だったものでっ
い・・・」

「いえいえ。まあ、お世辞でもありがとうございます。ところで、

この辺りに黒色の着物は売ってますか？」

「はい。少々お待ち下さい。」

「……また、間違えられました。」

「歩く」

ユーからすべて聞いた。声が出せない理由もちゃんと聞いた。正直、ここまで深刻なことだとは思っていなかったから、驚いた。

『全て話した。嫌いにな』

『嫌いになつたでしょう？』と、書きたかったのだが、途中で文は途切れ、メモ帳には涙が落ちた。

「俺が、ユーを嫌いだと言ったか？」

ふるふると首を振る。その瞳は、涙で濡れていた。

『私の感情が動くとき、近くに居る歩の運命が変わってしまう。』

その文を見て俺は理解した。確かに、最近になっていまままで無表情だったユーは涙を流したり色々感情が動いていた。それに合わせ、メガロ・吸血忍者・魔装少女が突如として一気に現れた。

だが、それがどうした？ そんなのは俺がユーを嫌いになる理由にならない。

『こんなバケモノみたいな奴が傍にいる。それを知ったら、嫌いになるでしょう？』

人形のように綺麗なユーの顔が崩れている。眉間にシワを寄せて、絶望におびえている。

「バケモノ？そんな奴どこにいるんだ？今の話を聞く限り、ここに居るのはただの優しい女の子だけだ。」

俺の言葉にユーは、ハツとした表情になる。

『私 一緒に居てもいいの？』

「ああ、好きにしてくれ・・・」

随分捻くれた言い方になったな。どうしてこんな言い方しかできないかなあ・・・。

「ユー、笑いたい時はわらっていいんだ。運命がどうかかそんなのは俺がなんとかしてやるからさ。だから、俺の所に居ろ。」

『ありがとう 今の言葉を言ってくれたのは今回で2回目。』

不意にユーがメモ帳をトントンした。二回目・・・？俺のほかに打ち明けた人物がいるのか？

「誰に言われたんだ？」

この時、俺以外にユーが打ち明けていることにその人物に少し嫉妬していた。

『臙 あノ時は臙はまだ8歳だった。』

ああ、だから臙とユ一はそんなに仲が良かったのか。アイコンタクトでも十分通じてるからなあ。二人。……。え？8歳の時？何故、そんな幼い時期に冥界に住んでいるユ一に出会った？ユ一がこつちに来ていたときに偶然出会った？いや、8歳で外に一人で出る可能性は低いしなにより子供をユ一みたいな奇抜な格好をした人に近付けるか？。ん？親？そういうえば、臙は中三の時から俺の家に居座っていたが、あいつの親はどうなっているのだろうか？初めは家出かと思っていたが、どうやら違うようだし、どうなのだろう？あいつは一体何者なんだ？

「なあ、ユ一。臙のこと教えてくれないか？俺、よく考えたらあいつのこと何も知らないんだ。」

『それは私からは言えない。』

「なんでだ？」

『それは臙の問題。臙の口から聞くべきことだから。』

「……。そうか。」

『でも。これだけは言える。』

『臙は私よりも悲しい運命を背負っている。』

ユ一よりも……。？それって一体

「お前は何者なんだよ、臙。」

明日にでも聞いてみようか？

どーもー、開き直って女物の服でも買ったろうかと思っています。
これだけ女性に間違えられるということはきつと僕は女なのでしょ
う。そうでなかったらショックでぶっ倒れます。

「セラ、僕は女っばいですか？」

「はい？」

「僕は女っばいですか？」

「そうですね。顔はとても女性らしいですよ？」

「そうですねか……なら。」

ゴキヤ、メキツ、グシヤ！！

「お、臍！？こんな公衆の面前の前でなに ツー！？」

「……こんなところでしょうか？どうです？ちゃんと女性に見え
ますか？男性には見えませんか？」

「え、ええ、とても女性らしいですが・・・いきなりどうしました？」

「・・・皆さんがあんまりにも女性に似ているとおっしゃるの
で開き直って女性に性転換しました。そうですか、男の僕がちょこ
つと体を弄っただけでとても女性らしいのですか。・・・ハア。」

「・・・すみません。」

「いえ、良いのですよ。では、そろそろ服を『プルルルルッ』
・・・間が悪いですね。はい、なんでしょう？」

『死神か？悪いが予定変更だ。明日の4時には合衆 に着いていて
くれ。』

「・・・随分と早くなりましたね。昼だったはずですが、何かあり
ました？」

『現地の忍びが消された。』

「・・・中々、やるようですね。了解しました。」

『頼む。まあ、お前なら深夜1時に日本を出ても間に合うだろう。
頼んだぞ。』

「わかってます。大丈夫、着いた瞬間即終わらせますので。」

「頼もしい限りだ。報酬は上げておこう。」

「どうも。では。・・・セラ、今何時ごろですか？」

「7時ごろですが・・・どうかしました？」

「すみません。ちょっと僕は用事の準備のために先に帰ると伝えておいてください。ああ、夜ごはんは宅配のピザを注文しときますね。」

「どこかに、行くのですか？」

「ええ、少し遠いところまで。まあ、日帰りですけどね。」

「そうですね・・・。」

あれ？何故かセラの元気が無くなったのですが、何故でしょう？気になります、ちよいと今日の所は知的好奇心ではなく目の前の用事を済ませましょう。

「では。後ほど。」

デパートを出て、少し急ぐために人に気付かれないように家の屋根を登ります。

その時に、僕はデパートの上に居るユーと歩を見ました。歩はユーを撫で、ユーは泣いてましたが、嬉し泣きでしょう。

「・・・よかったですね、ユー。」

さて、急ぎましょう。

「ただいま戻りましたって、誰もいませんよね。」

二階の自室に行き、そこで今回は本気の準備をします。準備と言っても道具の準備じゃありません。今回持っていくのは悪刀だけです。準備とは、僕が仕事を・・・特に難しい仕事をする際の、いわゆる精神統一です。これ、やるのはとっても良い効果を発揮するのですが、少し、殺気や敵意に過剰に反応してしまうのが難点です。さて、集中……。

「ただいまー。」

……ツハ！？歩たちが帰ってきましたか。そういえば、ピザを注文してましたね。もうそろそろ来る頃です。

「おかえりなさい。ピザ、来ましたか？」

「ん？ああ、帰ってきたらちょうどな。」

「それはよかった。では、食べちゃってください。僕は別に用意があるので。」

「お、なんだあ？一人だけ特別か？」

「・・・まあ、そういう見方もありますね。いえ、僕は栄養を体内に注入するだけです。歩をそれが良いですか？」

「い、いや、遠慮しとく、というか、お前そんなので大丈夫か？腹に何か入れた方が良いだろ？」

「いえ、まったく、問題はありません。」

「そつか。んじゃ、食べるか。」

「・・・なんとかごまかせました。ぶっちゃけ、この薬は僕の体内の病魔の活動を一時的に半数抑える薬です。これ、一般人が使用する、体に必要な白血球、赤血球などの活動も抑えてしまうので、はつきり言っただけに死にます。まあ、どんな生物でも活動を維持するため機能を抑えられたら死にますよね。この薬は、僕が偶々作ったのです。中三の頃でしたか？その時期に何がでつきるかな？と適当に作っていたら出来てしまいました。偶然って恐ろしいですね。まあ、作り方忘れたので、一個しかありませんが。」

『臙 何かあった？』

「え？どうしてですか？」

『雰囲気が怖い。』

怖い、ですか。やはり、精神統一の後はこうなっちゃいますか。ユ
ーの前では見せたことなかったですからね、これ。

「ああ、すみません。ちょっと疲れているようです。大丈夫、寝た
らいつも道理になります。」

その後、歩たちはワイワイ、僕は隅の方で、薬の不味さに吐き気を
覚えながら食べ、食事は終わりました。セラは何やら洋食が初めて
の様でドギマギしてましたが、おいしかったようでよかったです。
そこに

ピンポン

インターホンが鳴りました。

「はいはい。」

歩が出迎えに行きましたが・・・この時間にインターホン？あれ？
この気配は・・・

「ユー、少し気いたいことがあるのですが、歩をゾンビにする際に
(ドオオオオン！)」

音にかき消されました。というか、この気配はやはり、彼ですね。
懐かしいです。大方、歩でも殺しに来たのでしょう。

「ユー！！いきなりで悪いが治してくれ！！」

「え！？ちょ、あゆ。。」

ユーはガントレットを外し、歩の傷口に触れてしまいました。歩の傷は治りましたが……。

「往生際が悪いですよ相川さん。早く死んでくださいよ。ちゃんと

おや？」

「犬が喋ったあ！！」

いえ、ハルナ。僕的にはあなたが日ごろ戦っていた甲殻類のメガロが喋っていた時の方が衝撃だと思つたのですが？

「最近見ないと思つたら、こんなところにいらしたんですか。ヘルサイズ様、そして臃様。」

「「え？」」

・・・あー、言っちゃいましたね。なるべく、僕は一般人で済ませたかったのですが、ハア。ほら、歩もセラも僕の名前が呼ばれたら驚いてますよ？

「困りますよ全く。一言言ってから魂呼びもどして下さいよ。あなたの仕業だと分かっていたらこんなところに来なかったのに……。それに臃様も、あなたは思慮深いのですから、このようなこと、すぐに気付くはずですが？」

『忘れてた。』

「すみません。ユーに同じくです。」

「全く。お二人は考え深いのに、肝心の所はぬけてますね。」

「重ね重ねすみません。僕をついさつき気付いたもので。」

「まあ、いいですよ。これからはお気を付けを。」

「でだ、お前は何者なんだ？」

歩がケルさんに質問しました。 妥当な質問です。

「私は冥界の番人で魂を集めています。あ、犬なのに番人はおかしいとかいう突っ込みはなしですよ？番犬じゃなんかこう・・・ね？」

「ね？」

「リアクションに困るな。（ユーかわいい）」

「歩、変態です。」

「何故お前は俺が考えていることが分かった!？」

「カマ掛けてみたのですが、そういうことを考えていたのですか・・・。失望しました。」

あ、では、僕はもう寝ますね。お休みなさい。」

はい、ねぐましょ！

この後、下に忘れ物をして降りて行った時にセラが血が足りないということで僕の血を飲もうとしたことでひと悶着ありましたが、まあ、吸われなくて良かったです。……僕なんかの血を吸ったら、どうなるか分かったものじゃありませんから、少しきつめに言っただけです。その時、セラ驚き、悲しそうな顔をしていました。反省です。

〔深夜一時〕

「……行きましょう。」

僕は置手紙を置いて、歩の家を後にします。まあ、日帰りですけど。

「臃。」

「……セラですか。こんな時間にどうしました？」

「それは、こちらのセリフです。どこに行くのですか？」

「……秘密です。」

「……だそうですよ。ヘルサイズ殿。」

なっ 。 ユー、も、来てしまったのですか？

『臃 答えて どこに行くの？』

「……ッ、セラ、卑怯ですよ。」

「何がですか？」

「ユーを連れてくるなんて……、ハア、分かりました。言いますが、今は割と本気で急いでいるので帰って来てからでも良いですか？」

『絶対？』

「ええ、絶対です。」

『分かった。』

「ありがとうございます。では、さようなら。」

「……今回は死ぬかもしれませんが、このあいさつで良いでしょう。」

（ユー）

私は臃の『さようなら』を聞いた瞬間、不覚にも泣きそつになってしまった。たぶん、うつすらと目に涙があるだろう。

「ヘルサイズ殿？どうしました？」

『臃がさようならって言った。』

「……？ええ、でも、それがどうしたのです？」

『臃は昔から自分が死ぬかも知れないときはいつもさようならと言っていた。』

「え……？」

臃……どうか死なないで。臃が死んでしまったら私はすごく悲しい。悲しいなんかでは言い表せれないほど悲しいよ。だから臃。絶対に……

「無事に帰ってきて……。」

第8話 ボーリングの常識って何なのでしょう？（後書き）

朧「朧と！」

フ「フレイの！」

朧・フ「あとがきコーナー！！！」

朧「・・・で、いいですか？」

フ「うん！ありがとっ！満足満足！」

朧「叫ぶのって割と疲れるので今後は勘弁してください。」

フ「h a i！で、今回はいままでの中で一番長かったね。」

朧「そうですね。すこし、詰め込んだ感がありますね。これを読んでくださっている読者の方には作者が変わって謝罪します。このよ
うな駄文を長々と失礼しました。」

フ「ホントだよね」。しかも、最後の方、完璧に手抜きだし・・・。
」

朧「まったくです。文才が無いのならもっと細々と書けばいいものを、何を思っ
て一万文字を超えたのでしょうか。疑問です。」

フ「まあ、作者はアホだからね。」

朧「そうですね。では、次回の予告を予告をば。」

1人任務でいなくなってしまった臃!!
そして、その間に歩達を魔の手が襲う!!
一方、臃の方は意外な相手と再会!?

と、言った具合でしょうか

?

フ「さあ?なにしろあの作者だからね。予告をすっぱかすことも十分考えられるよ。」

臃「・・・確かに。では、あまり長々とここにいるのも悪いのでそろそろお暇しましょう。」

フ「そうだね!じゃあ、せーのっ!」

臃・フ「見てくださった読者の方!ありがとうございます!!感想等、お持ちしてます!!」「」

第9話 大切な物は肌身離さず持ちましょう（前書き）

いまさらですが、この小説は、これゾンの原作と漫画の「ごちゃ混ぜ」です。

く歩く

今日は臙がない。セラたちに聞いたところ日帰りでどこかに行っているようだが、どこに行ったんだ？心なしか、ユーも寂しそうにしてるし、セラもそわそわしている。ハルナは・・・まあ、いつも通りだ。

で、今日は普通に学校がある。そう、『普通』にだ。なのに臙は休みやがって。ただでさえ登校 保健室 帰るといふ誰もがうらやましがるコンボを日常的にやっているんだから、当然、教師たちの印象はあまり良くない。・・・いや、保健の高良先生と栗須先生だけは普通だな。高良先生は分かるが何故栗須は普通なんだろうか？謎だ。

それに、授業もあまり受けてないから当然内容なんて分からない筈だ。テストの時どうするんだ？俺？俺は・・・あ、やばいかも。授業中は寝てるしな。ゾンビなのに窓際って拷問以外の何物でもない。

「歩。」

「何だ？」

ちなみに今は朝五時。テレビはジャパネット高畑だ。

「私はずっと考えていたのですが・・・名前というものは、やはり必要ですよね？」

「ん？まあ、無きゃ困るよな。」

「やはりそうですね。実は新しい技を考えたのです。その技に名前を付けたいのですが、なかなか『返し』で終わる言葉が思いつかなくて……一緒に考えてもらえますか？」

お、セラが俺を頼るなんて珍しい。……ああ、そうか。臍がないからか。

「絶対『返し』がいるのか？」

「ええ、秘剣なので。」

秘剣って絶対に『返し』がいるのか？いや、いらない筈だ。

「んー、どんな技なのか見てないしな。」

「こつ、滑空しながら」

手で説明してくれるのいいんだが、すまん、全く分からない。真剣に説明している所は可愛いと思うが。

「秘剣、鶴の恩返し。というのはどうでしょうっ。」

仇で返してるな。

「やめた方がいい。」

「でしたら、どんでん返し、はいかがですか？」

「一体何を返すんだ……。」

「勝負の展開を返します。結構いい名前ですよ？」

「こつちが勝つてるときにその技を使われたら負けそうで演技がとても悪いんだが。」

「むう……。」

こつち、なんか一発逆転されそうな感じ。例えば「秘剣！どんでん返し！」「フツ、見切ったあ！！」「ぐあ！！？」みたいな感じで

「今度見せてくれ。見てから考えるからさ。」

「わかりました。……今度は臍にも考えてもらいましょう。」

臍ねえ……。そういえば、あいつは結局何者なんだろうか？口ぶりからして恐らく俺たちが人間じゃないと知っているだろう。実際に俺が吸血忍者と戦つてるところを平然と見てたしな……。そういえば壊れた家をあいつが修理したんだが、なんであいつそんなことが出来るんだ？A、臍は何でも屋だからです。

ん？なんか変な声が……。気のせいか。おっと、もう学校に行かなくてわ。ゾンビは朝に弱いんだ。

くセラく

皆さん、おはようございます。セラフイムです。歩は学校に行きましたし、現在はこの家には私も含め三人しかいません。普段は臙が歩よりも早く帰ってくるので、暇ませんが、今日は絶対に早く帰ってきません。そんな気がします。

「ところでヘルサイズ殿。」

私が名前を呼ぶとこっちをわずかに見る。

「この家の家計は誰が担当しているのでしょうか？」

『臙がしている。』

「そうですね。．．．臙が何故、危険な仕事をしているかが予想付きますね。」

『何故？』

「簡単なことです。臙はこの家の家計を支える為に危険な仕事をしているんです。確か、私たちのお小遣いは10万円でしたよね？これほどの金額、普通なら手に入りません。それに、歩の親からの仕送りは歩一人分の筈ですから、どう考えても破綻します。そのため、臙は働いていたのではないのでしょうか？私たちに不自由がないようにするために。」

きつと、その筈です。臙は優しいですから、このことも気付かれるまで黙っているつもりだったのでしょうか。

『臙は 9歳のころからバイトを始めていた。』

「・・・え？」

9歳のころから・・・？そんな子供と時から一体何故・・・。

『あの頃の臃の夢は 高校に入学することだった。』

そんな・・・、そんな、生きていく上で皆当たり前の、誰もが通過すると思っっている道が『夢』だなんて・・・。

『臃は 生まれてから8年間 一人で過ごしていた。』

「そんな・・・、親はいなかったのですか？」

『直ぐに捨てられた。臃は 唯一の救いは捨てる前に母乳を飲ませ てくれた事だと言っていた。』

臃・・・、まさかあなたに、それほどの過去があったとは微塵にも 感じませんでした。

臃はいつも元気・・・とは言い難いですが、いつも明るく話を していました。人の気遣いも出来ています。その姿からはそのような 過去があるなど思いもしませんでした。

『でも 臃はそんなこと 全然気にしていなかった。むしろ それ を受け入れずと一人で過ごすということも覚悟していた。これは 臃が8歳の時の話。』

・・・8歳でそこまでの覚悟を。

『だから 臃が私の所から居なくなつてまた一人になるのではない

かと心配した。けど、私がこっちに来た時 臃は一人じゃなかった。私はすごく嬉しかった。』

「そう、ですか……。」

『臃は もうじき自分の事をすべて話すと思う。その時は 途中で逃げずに最後まで聞いてあげて。』

「もちろんです。その時は一語一句聞き洩らしません。」

そういうと、ヘルサイズ殿は満足したのかペンを起きテレビに視線を戻しました。

臃……あなたは一体、何を抱え込んでいるんですか？

あなたが何者だろうと、私は受け入れますよ。

一方、その頃の臃は……

「奴だ！！撃ち殺せ！！」

「RPGはどこだ！！持ってこい！！」

「いや、街中でロケットランチャー撃つては駄目でしょう。」

ハア……、なんでこんな……。不法入国がばれただけでどうし

てこんなことになるのでしょうか？おかげで仕事がやり難くなっちゃいました。

「狙撃手スナイパー！！狙いが甘いよ！！何やってんの！！」

「ヒヤッ……ハ……汚物は消毒だー！！」

「てめえの血は何色だあ……！！！」

というか、何これ？ネタ？ネタなんですか！？この国は大丈夫なんですか！？否！！もう駄目です！！手遅れです！！

「俺は人間をやめるぞ！侵入者ーっ！！！」

「ウホホホッホッホッホーッ！」

「おお、侵入者よ。逃げてばかりとは情けない。」

ああ、もうこの国は駄目です。お終いです。

早く日本に帰りたいです。

く歩く

学校が終わり、織戸と一緒に京子のお見舞いに行った。ついでに京豆腐ももらいに行く。大先生が食べたくてハルナに頼んだそうだが、

ハルナは東京と京都を間違えたようだ。

「すまないな、わざわざ用意して貰って。」

俺は代金を払おうと財布を出したが京子ちゃんがそれを止める。

「お金なんていいですよ！私もこれ貰いましたし。」

良い子や。臃たちも見習って・・・いや、よく考えたら臃は毒舌だったが礼儀、気づかいはすごいよかったな。

「相川さん？」

「ああ、なんでもない。ありがとう、頂いておくよ。どうしても食べたいって人がいて。」

「ええーっ、相川さんが食べるんじゃないんですかあ？」

頬を膨らませ下を向く。可愛いな。

「相川は京子を食べるつもりじゃないか。」

「ええええ！！？」

織戸がセクハラ発言をして、京子ちゃんはリンゴの様に紅くなった。そのあと、普通に会話を楽しんだが、ユーに早く帰れと言われたのを思いだし、「そろそろ帰る」といって病院を後にした。京子ちゃんは俺が見えなくなるまで手を振っていてくれた。やっぱり、けなげでいい子だな。

で、大先生に電話をして夜九時に墓場で待ち合わせすることを約

束した。

そして、夜九時。大先生らしき人物を発見しさっそく京豆腐を渡そ
うとすると突然後ろから刺された。

「なん………で？」

何故だ。何故、俺を刺した？俺は何かしたか？

「こんばんは、相川さん。」

この声、まさか……。

「アリエル先生は来ませんよ。私がお仕事を頼みましたから。」

お前……か。

「残念でしたね」

俺を殺した犯人は

「あなたは何回殺せば死ぬのですか？」

お前だったのかよ！！京子！！

一方その頃臍は……

「ぐあああああああああああ！！！！！！」

ふう、やっと、ボスつばいのを倒しました。そして、僕は極秘ファイルを手に入れました！！道中さまざまな敵をなぎ倒して、やっと手に入れました。・・・今回の依頼は何故かファンタジー臭が凄いですね。ご丁寧以小・中・大とボスが存在しました。

・・・はつきり言ってやりましょう。

つぎつけんじやねええええええ！！

ただでさえ日帰りで帰るって言うてんによお！！こんな手間の掛かる真似しやがって！！なめてんのかこんちくしょおおお！！

「・・・わ、我を倒したことは見事。だが、我は四天王の中では最弱の存在。我を倒したかると言うて直ぐに「じゃあかあしい！！」「ごうふ！！」

倒れ伏してるボスの顔面に蹴りを入れる。さらにめんどくさそうなフラグ立ててんじやねえよ！！

「ま、まで、最後まで「言わせるかポケエ！（ガスツ）」つう！第二・第三の（ゴスツ）ゴフ！四天王があらわ「死に去らせえ！！（グシャア！）ウボアアアアアア！！」

っけ！最後の最後まで妙なフラグ立てようとしやがって！！んんっ！さて、帰りましょう。帰り？体弄って全力疾走しますよ？その気になれば三十分で着きます。・・・体がボロツボロになります、約束は守らないといけませんよね。

クラウチングスタートで、よい……

「どんっ！！」

さて、やっと我らがユートピア、日本に帰れます。この国は根っこからすべて見直していた方がいいと思います。まあ、もともと、僕にはもう関係ありませんが。

……あ、このファイルどうしましょう？お持ち帰りして、後で渡しましょう。

く歩く

よく考えれば直ぐに分かることだった！！このタイミングで俺に会いたがったのも、事件について誰も覚えていなかったのも、全部こいつが魔装少女ということと説明が付く！なんで気付かなかったんだ俺は！！

「アユム！！」

「ハルナ……なるほど……だから相川さんには記憶操作が効かなかったのですか。」

「うっさい黙れ！」

「んなっ！相変わらず気に入くない……。」

「で……アユム、こいつ誰？」

「俺を殺した魔装少女様だ。」

「アユムの敵？……だつたらあたしの敵だな。」

いや、お前の敵つて、お前魔装少女にもなれないだろ。

「へえ……面白い。ミストルティンはどうしました？素手で戦つつもりですか？」

思いあがるのもいい加減にしてください！」

っ、ハル

「やれやれ　ヘルサイズ殿に言われて加勢に来てみれば。」

秘剣『燕返し』！！

ホント、この吸血忍者様はタイミングがいいな。

「敵は人間ですか？」

「心配するな。あれは人の皮を被ったバケモンだ。」

「あれ？その目……私と同じじゃないですか。」

は？吸血忍者？

「セラ……。」

「知りません。私とまた別に力を感じます。」

「なんでだよ……。」

え？ハルナはどうしたんだ？

「なんであいつ、メガロと同じ魔力持ってるんだよ。」

どういうことだ？あいつは魔装少女で吸血忍者でしかもメガロなのか？意味わからん。

「なあ……どうしても聞いておきたかったんだが、どうしても人殺しなんかしたんだ？」

「相川さんだつて殺して永遠の命が貰えると知ったら……殺すでしょう？」

「ふざけんな……。そんなもんほしくねえよ。」

「それは嘘ですよ。だつて相川さん、不死身じゃないですか……。どうすれば死んでくれるんでしょう？消し炭はどうかなー？」

っ！？やばい！

……いつまで待っても衝撃が来ない。どういうことだ？

「やっと来てくれました。お待ちしてましたよ。」

あ……？ユー？

「ユー！」

なんでユーがミストルティンを・・・？まさか変身する訳ないよな？

いや、まで。初めて会った時ハルナが言った事をよく思い出せ。魔力を根こそぎ奪えるのはあり得ないくらいの魔力が無いと出来ないと言っていた。俺はてっきりハルナの魔力は俺が奪ったのだと思っていた。だが、違う！！ハルナに魔力を奪ったのはユーだったんだ！！

「では・・・本気でいきますよ？」

京子が魔法を放ち、ユーはそれを片手で止める。

「なるほど。」

「ッ！！！」

「その籠手には魔力を消す力があるのですか。凄い防具です。ですが・・・、ちよつと残念ですね。」

ユーが弾き飛ばされる。

「扱う人間が弱すぎます。膨大な魔力ももつたいない・・・。」

「・・・っ。」

もしかして、ユーは戦闘能力が低いのか？今まで俺に戦わせていたから自分が手を下すまでもないということかと思っていたが、どう

やら違うよつだ。

「ユー！俺も一緒に……。」

『逃げる 邪魔。』

そう、地面に書かれていた。

逃げるわけないだろう。あいつは……俺が倒さなくちゃダメなんだ！！

『せめて動くな 絶対 』

「ユー！！」

「待って下さい。あなたが行っても邪魔になるだけです。」

「なんでだよ！」

「ヘルサイズ殿の言葉には強い力がある。」

「その能力については聞いているさ！」

「……ん？待てよ。言葉を聞いたものが……？」

「それって対象者を選べないのか？」

「その通りです。見てください。」

！？京子が……倒れている？

「ヘルサイズ殿は今……こう言葉にしているのです。」

「死んで。」

「あつ……。。」

その言葉一つで……。人が死ぬのかよ……。
今だからこそわかった。何故、ユーがハルナの照れ隠しの「死ね」
にあそこまで反応したのか。あの時の言葉はいろんな思いがこもっ
ていたんだな。

その時、閃光が走った。

空中にはユーがいる。魔装少女の服も無くなっていることからやら
れたのか？

「ユー！？」

俺はユーを受け止めようと移動したが……

ユーが空中で消えた。

「なっ。。」

ずさあああああああああああああああ！！

何か、高速で移動していた物体が地面を削って止まる音がした。

なんだ？なにが起こっている！？

「・・・ハア。」

聞き慣れた、ため息が聞こえた。

「やれやれ、やっと日本に帰ってきたと思ったら、また厄介事・・・
。しかも相手は魔装少女。ホント、今日は付いてないですねー。」

「・・・まさか、あなたは。」

「ああ、やっぱりあなたが犯人でしたか。久しぶりですね。」

「っ、まだ死ぬわけにはいかないのにまさかこんな所で・・・。」

突然、風が吹いた砂煙が晴れた先に居たのは・・・

「ところで・・・。」

そこには俺たちが毎日のように見ている着物を着た・・・

「ユーをボロボロにしたのはあなたですか？」

鑢籠。まさにその人がいた。

〈鑢籠〉

急いで帰ってきたら、強い魔力を感じ、来てみたらなんと！！！！ユー

が空中にふっ飛ばされていました。そもそもユー、なぜあなたが戦場にて戦っているんですか……。あなたの戦闘力は言っては悪いですが、底辺に近いですよ？その辺の弱小メガ口にも負けますよ？それなのにこんな強い魔装少女と何故戦っているのか不思議でしょうがないです。……。あ、でも、一回殺してましたね。まあ、一回ぐらいならユーなら余裕でしょうが……。あの魔装少女も無茶しますね。まさか、自分の耳を壊して声を聞こえなくするとは、恐れ入りますねえ。

「あなたは……。あの時の化け物じゃないですか。どうしてここに？」

「まったく……。せっかく人仕事終えて帰ろうと思ったら、なんか暴れてるし、ユーはボロボロだし、僕は満身創痍だし……。」

嗚呼、不幸です。

「満身創痍ですか……。なら好都合です。私もまだ死ぬわけには行きませんし、その人の魔力手に入れたいですから。」

あー、ありきたりなユーの魔力目当てですか。

「あいつ……。何で死んでないんだ!!」

そりゃあ、あれのせいでしょうね。なんでしたっけ？せ……せい……

「残念でしたね。私は、あと十回ほど死ぬますから。」

あー、いらいらします。首のあたりまで出かかっているのに出てきま

せん！！せいなんとかの宝珠だというのは分かるんですが、生の次が出てきません！あー、もうっ！じれったい！！

「ハルナ・・・生体の宝珠「それですっ！！」っ、何ですかいきなり！！」

「いやー、やっと思い出しました。生体の宝珠でしたね。やっとすつきりしました。たしか・・・公式ではアリエルが作ったとされるアーティファクトでしたっけ。実際は違う人が作ったようですけど今は関係ないですね。生体の宝珠の効果は確か・・・一度だけ死を無効にするんですけどっけ？だけど・・・それには膨大な魔力がいるはずですが・・・あー、なるほど、だからサクリフェイスですかまったく、そんなくだらないことでケルさんを困らせないでくださいよ。」

あー、疲れた。一気に喋ったから若干意識が・・・よく考えたら少しとはいえ、僕自身の身体能力も使っちゃいましたから、こうなるのは分かり切っていたのに。

「・・・歩。」

「・・・訳なら後で聞く。それで、何だ？」

「まず、ユーを持って下さい。」

「あ、ああ・・・。」

歩にユーを預けます。さて・・・

「時間がないので手短に言います。あの魔装少女は歩の敵ですよね

？なら、誰かと力を合わせてでも良いからしつかり自分で倒して下さい。僕も本当なら手助けしたいのですが・・・すみません。」

だんだん、体に力が入らなくなってきました。たぶん、これを言ったら僕は動けなくなるでしょう。」

「僕はもう限界です。・・・頑張ってくださいね。」

あー、きつつ・・・。

バタリ

「おい！！どうしたんだ！！おい！臍！！！」

「あんまり騒がないでください。頭に響きますから。」

「って、意識あるのかよ！！？」

いつ、僕が意識を失うと言ったのでしょうか？そりゃあ、若干ゆらゆらしてますが、この程度で意識を失うほど脆くありません。

「いいから、早く行ってきてください。本当に危なくなったら加勢しますから・・・。」

「ああ、わかった・・・。」

さて、休みましょう。・・・あ、一つ言っておきますが、僕は気絶してる訳じゃないので視点は変わりませんよ？

「なあ・・・アユム、この気持ち・・・何だと思っ？」

「その根暗マンサーと何でか知らないけど色白さんがやられたっただけで・・・無性にあいつをぶん殴りたい！」

「歩・・・新しい技を思いつきました。帰ったら・・・朧と一緒に名前を考えて貰えますか？」

「うわー、なんか死亡フラグっぽい。ついさっきまでそういう所にいたからそこんところ敏感になってます。仮にあの国をフラグ合衆国と呼びましょう。」

「というか、僕は今、見稽古を使っているんで分かるんですが・・・勝てませんね。歩が魔装少女になれば話は別ですが、今のままだと絶対に勝てません。断言もできません。理由ですか？そうですね・・・総じて、場数が違いますね。セラは大丈夫なのですが、歩とハルナがね。というか、全員動きが読まれまくってますね。ああ、駄目です歩。そこは蹴りではなく拳で行かないと・・・やっぱり死角から攻撃されましたか。しかも、魔装少女の方は余裕とききます。って、全員で一斉攻撃！！？何考えてるんですか！？その人は竜巻も操れるんですよ？まとめてふっ飛ばされてお終い・・・あー、吹き飛ばされました。」

「やっぱり、援護した方がいいですかねえ・・・。」

その時、着物の裾を掴まれる感触がありました。

『駄目 今は休憩してる。』

「ハア・・・、もちろん、そのつもりですよ。ですが、これ以上戦況がひどくなるなら加勢します・・・ところで、ユーは寝てなくても良いのですか？頭痛がひどいでしょう？」

『我慢できる。』

「我慢するくらいなら寝てください。」

ユ一は少し考えた後、再び目を閉じました。

おおっと、少し話すぎましたね。さて、戦況は……おおっ！歩が押してるじゃないですか！魔装少女になってますがそつちのが強いなら初めからそうすればいいじゃないですか。……気持ち悪いですが。

というか、怖いですね。切られようが竜巻で細切れにされようが相手に向かって前進していくのですから。あの魔装少女も成す術なしです。え？僕の場合ですか？怖いんで『点』を突いて速攻で終わらせます。大体、あの魔装少女の間違いは、ゾンビ相手に時間を掛けてしまったことです。そんな、何回殺しても意味がないような生物相手に持久戦なんかあり得ませんから。

「倒れる！跪け！消えろお！」

ほら、ゾンビ相手に持久戦なんかするから。……あれ？今、妙に大きい魔力を感じましたが、何でしょう？あの魔装少女のですか？うーん、でも一瞬でしたし、気のせいですね。

「あなたは、強かった。今までで誰よりも強かった。おかしいくらいに強かった。」

……魔装錬器を素手で握りつぶしましたか。ああ、ちなみに僕は一切、歩の能力を見取ってません。理由？そんなの、ゾンビになるのが嫌だからに決まってるじゃないですか。言い忘れてましたが、

僕はホラー映画とかに出てくるゾンビが大っ嫌いです。見ると虫唾が走り、殺したくなってきました。学園 示録なんて最悪です。・・・作者は大好きなようですが(ぼそっ。んん！それはともかく、歩からは何も見取ってません。

「そんな！魔装錬器を素手で・・・握りつぶすなんて・・・。」

「すまない。実は俺もおかしいくらい強いんだ。」

ブフツッ！何言ってるんですか歩！！歩がおかしいくらい強かったら僕やクリス、ネネさん、そしてアリエルや女王、悪魔男爵はどうなるんですか！！気違いということになるんですか！？馬鹿言っちゃいけません！！その魔装少女だってそれらの人に比べたらカスですよ？僕だって手を使わず、鋼糸と自分の声だけで倒せる自信があります！！だーもうっ！！本当におかしいくらい強い人なんてヴァリエとかにたくさんいるのに何言ってるんでしょう、歩は！！・・・まさか、ゾンビだからって最強とか思ってますよね？言っておきますけど、僕はゾンビ、殺せますよ？クリスやアリエルだって二次元の世界に送ることぐらい出来ると思います。ネネさんだって・・・よくわかりませんが何らかの方法で歩を倒せるでしょう。悪魔男爵？知りませんよ。あったことないですもの。いや、アリエルとも会ったこと無いのですが、そこは、ほら。クリスのお酒に付き合っているときに、ね。

「・・・ありがとう。お前に殺されたおかげで人生変わったよ。」

人じゃありませんけどね。ゾンビですからね？

「だから、今度はお前の人生を変えてやる。」

たーまやー！おー、また見事な回転ですね。10点、9点、10点です！

おー、皆さんで勝利の余韻に浸ってますね。・・・そして、よくあれを倒しましたね。すこし、歩の評価を上方修正しましょう。

「ユー、臆。」

「ヘルサイズ殿、臆。」

「おーい、根暗マンサー。そして、色白さん。」

歩たちの呼びかけに、ユーはうつすらと目を開けます。

『終わったの？』

「ええ、歩がやってくれましたよ。」

「ハア、危ない戦いでしたね。歩ももうちょっと近接戦闘を・・・！！!?」

拙い！！拙い拙い！！

見れば歩は魔装少女に止めを刺そうとしていました。

「ちゃんと息の根を止めてやらんな。」

・・・駄目です。歩、今すぐそこから！！クソ！動かないこの体が恨めしい！！

・・・アレを使いましょう。背に腹は変えていられません。こちららもうすでに満身創痍。戦えるのは、ある条件の元、僕しかいま

せん。

「セラー!!」

荒っぽい声になりましたが、今はそんなこと気にしている場合じゃありません。

「な、なんでしょ」

「僕の懐から苦無を取って下さい!!早く!!」

歩との距離まであと少し……!

「これですか?」

「それです!!」

セラから『それ』を奪い取るようにし、『それ』を……

「おい、止めるなよ。こいつは生かしくわけにはいか」

「あなたがアユムさんですねえ?うちの生徒に何するんですー?」

心臓に突き刺した。

「え、おぼ」

寝転んでいる状態から一気に立ち上がり、そのまま『この状況でもっとも危険な人物』に突っ込む。

「大先生、こいつはな、この世界ではいけないことをしたんだ。」

「嘘です！私、そんなことする訳ないじゃないですか……。」

「ハア、歩をハルナもなに言ってるんですか？」

「「え？」」

ハアア、分かってませんね。今はこれを殺すことなんかが最優先じゃないありません。

……この状況から、アリエルがいる状況の中でいかに全員が生き延びるのが大事です。

ま、ハルナは大丈夫でしょうが。

「……いえ、とりあえず、話を進めてください。」

「あ、ああ、……大先生。俺たちを信じてくれ。」

忍法『爪会わせ』

あらかじめの戦闘準備。もちろん、裾で隠していますが。

「と言われましてー、この子はいい子ですし、何より……少なくとも今、あなたがしようとしていることがあ、いけないことだと思っんですがあ？」

「大先生！なんで歩を信じないんだよ！アユムは……こいつらは……めっちゃ良い奴なんだぞ！」

信じる材料が少ないからじゃありません？

「んー、信じるにはあ、材料が少なすぎますねえ。」

やっぱり。爪は25センチほどで伸ばすのをやめ、硬度を上げていく。

「ハルナ、セラ、ユー、臍。下がってる。」

「はあ？あんた、大先生とやるつもり？バカなの！」

「断ります。むしろ、下がるのは歩。あなたです。」

「は？何を……って、臍！！お前、胸に！」

あー、反応が無いなーと思ってたら、僕が背を向けていたからなんです。で、今、振り向いたから気付いたと。

「全部、終わったら話しますから、今は待って下さい。」

「……わかった。」

さて。

「その黒マントの女の人と鑢さん、さてはとっても強いですねー。私と組みませんか？」

ふむ、状況によっては・・・駄目ですね。クリスに怒られそうです。そんなこと考えながら、アリエルに突っ込んでいくセラを捕まえ、肩に乗せる。

「なっ！臍！！」

「今のがセラの答えの様です。そして僕は・・・ふむ、少し待ってくれませんか？確認してみます。」

携帯を取り出し、クリスに電話する。

「こんな時に電話など」

「もしもし、僕です。えつとですね、今目の前にあなたの怨敵がいて、僕と組まないかと言ってるんですが、どうしましょう？・・・いや、来ちゃダメですって、色々ややこしくなりますから、いや、待って下さい。日本が消えちゃいますから。あー、もう、わかりました。ではそのように。(ピッ)・・・と、言うわけで、殺せ、だそうです。」

戦闘開始。セラを後方にブン投げ、そのまま、アリエルに突っ込む。もちろん、殺す気で。

初っ端から・・・

「十七分割・・・！」

いままでこれで倒せない敵はいなかった。しかし、今回は全くレベルが違う。・・・あー、そういえば、一人いた。これで殺せなかった人。

「すばらしいですね。これほどの人間が」

「喋ってるとは余裕ですか。なら、もっと本気でいきます。」

地面にマツハが付くほどの勢いで足を落とした。無論、神経とかズタズタになったが直ぐに治る。この状態・・・仮に悪刀「朧」と名付けますが・・・は、まさに、僕の弱点をなくしました。問題があった体力のなさも、細胞が活性化しているおかげで問題ありません。落とされた地面はまず、揺れる前に衝撃で周囲の石が宙に浮きます。その後クレーターが出来、地面が揺れます。

ですが、僕の目的は地面にクレーターを作ることでも、地面を揺らすことでもない。

・・・石を、浮かせる事です。

浮いた瞬間、僕は忍法「足軽」で石へ石へと跳んでいく。分かりやすく言うなら室内での戦闘で、天井、壁、すべてを床として扱い、移動するように空中に浮いている石をすべて『足場』として、アリエルの周りを移動し、すれ違いざまに斬る・・・！

「！！ふあー、すごいですう。こんなに強い人間がいるなんて驚きです！！」

「それはどうも。ですが、まだ本気ではないのでしょうか？」

「そういうあなたもお、本気で来ないんですかあ？」

石が地に落ちる。によって、僕はアリエルの目の前に再び姿を見せません。もっとも、初めからアリエルは僕の姿は見えていたのかもしれませんが。

「では、そうですね……。う、おええ!!!」

口から鋼糸を吐き出し、それを所かまわず、巻きつけます。うう……。こんなことしたくなかったですよ。気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。そう思いませんか？

「歩、セラ、ユー、ハルナ、離れてください。邪魔です。」

今から行うのは無差別攻撃。範囲内に居れば確実に体を破壊します。ええ、木っ端微塵に。もしかしたら、血液が沸騰して……。これ以上は言わないでおきましょう。

「いきますよ？覚悟は良いですか？では。あー、あー、んんっ！らー、ラー。」

……。皆の視線が痛いです。まあ、そうですね。いきますよ？とか言つといて、発声練習しているんですから。アリエルも顔を顰めていますよ？まあ、いいです。もう準備は整いましたから。

「
!!!!!!!!!!!!!!」

「!!!!!!!!!!!!!!」

今発している音は人間の耳では聞くことはできません。聞き取ることもできません。ですが、聞こえなくても聞いただけで鼓膜は破れます。破れるどころか脳に異常をがおこります。で、鋼糸は僕の声帯を通過して伸びています。つまり、鋼糸が僕が発する音により高速で振動します。鼓膜が破れ、脳にまで異常をきたす、音です。

振動は空気にも伝わり、空気も振動します。そして、その空気振動も高速にまで達すれば・・・

ブシューウ！

「・・・クハッ！」

アリエルは血まみれ。ついでに僕も血まみれ。え？あたりまえでしょう？僕だって十分効果範囲内に入ってますよ。この技は諸刃の剣です。攻撃力？その気になればビルを粉々にするどころか勢い余って町を破壊しますよ。ですが、この技の前提条件として、悪刀「臙」になっているのが絶対です。そうしなければ、僕が死んでしまいませんから。今、こうやって考えている今にも傷は治って・・・

ズボツ！

「あれ？」

悪刀が抜かれました。よって、傷の再生は僕の通常に戻りました。

「鑢さんはあ、その武器を刺した瞬間に強くなりましたあ。だからあ、これを取ってしまえば　っ！」

「残念、僕は素でも結構いけます。」

普通の苦無とアリエルの魔装錬器が打ち合う。火花が散り、鉄に熱が籠る。

「セラ」

私は、速さというものを極めたつもりでいました。ですが、今の二人はどうでしょう？私よりも速いスピードで動き、なおかつ余裕を見せています。臃が石と石の間を跳んでいるのはわずかに残像をとらえるだけで、見えません。大先生とやらの手の動きは見えませんが、火花が散っていることから打ち合っているのでしょうか。

石が重力に従って落ちたと同時に臃の姿が現れました。息を切らしている様子もありません。

「じ、次元が違う……。」

「……はい、悔しいですが、今あの間に入ることは今の私たちでは不可能です。」

「な、なんだよあいつ……。なんで大先生と互角に戦えるんだよ！！」

臃……あなたは一体、どこまで強いんですか？

不意に臃が何かを吐き出しました。これは……鋼糸？何故体内にそのようなものが？

「歩、セラ、ユ、ハルナ、離れてください。邪魔です。」

……邪魔、ですか。今の私たちでは戦力としても数えてくれませんか、臃。

「離れた方がいい。」

「いや、臃を見捨てて行けない！」

『違う 臙が離れると言うのは 何らかの理由がある時。』

ヘルサイズ殿の言葉にしぶしぶながら従い、鋼糸で斬らないように臙から離れます。

そして、臙の方を向くと・・・

「あー、あー、んんっ！ラー、ラー。」

発声練習していました。その瞬間ほど臙に冷たい視線を向けたことはいないでしょう。しかし、発声練習を終わったと思ったら異変が起きました。鋼糸が振動しているのです。

次の瞬間、臙と大先生とやらが血まみれになりました。

「臙！！？」

何故？また私が知らないところで何か起こったのでしょうか？いや、今回は何もなかった筈。現に傷ついた臙はさも当然といった顔でいます。そして、敵は・・・いない！？

ズボッ！

臙の心臓に突き刺さっていた苦無が抜き取られました。あれが、無ければ臙は互角で戦えないのでは・・・？

「歩！いますぐ加勢に！！！」

「ああっ・・・あれ？」

歩がきよんとしています。何をこんな非常時に・・・！

朧が戦っている方を見ると、先ほどと同じように互角で戦っている朧がいました。

・・・朧は素で、あの苦無を使わずとも、強いということでしょう。・・・朧がどこか遠くに感じます。

「楽しいダンスだった。」

次の瞬間、私が見たのは大先生殿もろとも串刺しにされた朧でした。

（朧）

突然、腹に衝撃がきました。あー、これは、腹を突き刺されてますね。いままで戦闘に集中していた頭が、急にクールになり、周りの声が聞こえてくる。

「そんな・・・なんで・・・。」

ユー？何をそんなに動揺しているのですか？まさか・・・。

腹を刺した人物を確認する。例の魔装少女だった。が、違う。この人はさっきの人とは違います。腹から突き刺されたものが引き抜かれる。アリエルが倒れてきたのでそれを支えますが、正直に言います。まじょう。

僕、死にます。

この体は、脆く、多少のダメージでも致命傷です。この前、少し尻尾で薙ぎ払われただけで校門でバタリでしたから、刺されでもしたら、もう、終わりと考えていいですね。

「やあ、元気そうで何よりだ。そんなに怖い顔をしないでくれ、ユークリウッド。まだ何もするつもりはないんだから。」

「では、皆さん。また会いましょう。」

「……アユムさんが正解だったのですね。もう、私を騙すなんて、駄目ですよ!」

あ、そういえば鏢、アリエルが持ってましたね。返してもらわないと……。アレがあれば僕はまだ助かる可能性があります。いいえ、助かります。

「逃がしませんよお!待ちなさい!」

「あ………ちよ………」

行ってしまいました。ついでに僕も逝きそうです。もう、無理ですね……。

「ハア、僕はここ、で、ゲームオーバー………」

来世はせめて普通の健康体が良いですね。

この時の臍のつぶやきを聞いたものは誰もいなかった。

（ユー）

私は震えていた。まさか、この件に、あいつが関わっているなんて思いもよらなかつた。

おもわず、歩に抱きついてしまったのは仕方がない。

「うまく歩けません。あなたは私の松葉杖になってもらいます。」

とって、歩を松葉杖にするセラフィム。

「ユー、さっきのは何だつたんだ？」

『あれは あの霧は 私が消滅させたはずの ゾンビの力。』

ともかく、これでこの場はなんとかあった。早く家に帰ってお茶を

・

「おい、色白さん！どうしたんだよ！！」

不意にハルナが叫んだ。・・・そういえば、臃は？いつもなら終わってすぐにでも喋りかけてくるはずだ。「大丈夫ですか？」「怪我はないですか？」と。なのに、今日はそれがない。嫌な予感が頭をよぎる。

Q・臃は何者？A・人間。耐久力も人並だが、体質によって少しのダメージでも危ない時がある。

Q・今回臆が受けたダメージは？ A・腹部に何かを突き刺された。

まさか・・・、まさか・・・！！

「・・・色白さん！！なんでだよ！！何で目を開けないんだよ！！
なんで・・・、なんで・・・、息してないんだよ・・・！！」

最悪の光景がそこにあった。

第9話 大切な物は肌身離さず持ちましょう（後書き）

作「臃がピンチというかヤヴァイので、今回は私がこのあとがきコーナーを担当します。相方は・・・色々、本編の方で皆さんがバタバタしてるので、我が天敵、フレイさんです。」

フ「やー、やー！みんなー！今日もここにこれたよー！イエイ！」

作「テンション高いですねー、本編の雰囲気とは完璧にミスマッチです。」

フ「・・・五月蠅いなー。ザキ。」

作「甘いですね。そんなもの喰らい飽きました！」

フ「レベル1デス。」

作「それ反そ いぎゃあああああああ！！！！」

フ「さーて、やかましいのもどっかいったし！今日はここまで！予告は残念だけど臃の役目だから今日は無し！！！」

フ「見てくれた読者のみんな！！ありがとね！！感想とか待ってるよ！！！！」

作「いや、終わりませんよ？まだ、お詫びしてないですし。今回は、
分かりにくそうな文を長々と申し訳ありませんでした。文字数の最
高記録は更新です。14000でしたー！ながーい。では、ここま
で読んでいただきありがとうございますノシ」

第10話 己と内面と語り合うのも良いものです（前書き）

えー、今回は短いうえに、少々、いえ、かなりのとんでもない設定が追加されます。見て、一瞬でも嫌悪感を抱いたら即刻ブラウザバツクすることをあらかじめお勧めします。それでも、見て下さり、さらには感想なんてくれた日には作者は嬉しさのあまりショック死します。

第10話 己と内面と語り合っのも良いものです

くユーく

朧が、息をしていない……？

「そんな、まさか……。」

セラも焦っている。いや、ひよっとかしたら息をせずに死んだふりをしているのかもしれない。……きつと、そうだ。たまに朧は悪ノリするからきつと今はそれをしているんだろう。それに、立ったままだから、立ったまま俯いて、そこに居るだけだから……。

朧の肩をユサユサと揺する。

反応なし。悪い冗談。

ちよつと強めに揺すってみる。反応なし。

朧……もう降参だよ。だから、目を開けてよ……。

……そうだ、息は止めていられても、心臓は止められない。心臓は……鼓動がない。

「っ!?!」

なん……で。脈は……無い……。

「そんな……朧……。」

「おい、まさか、冗談だろ。おい！臃！！」

歩が臃の背中をバンツ！と叩く。臃はそのまま力の方向にうつ伏せに倒れた。

「おいおい、いくらなんでも、演技にしてはやりすぎじゃないか？」

・・・私たちは、失念していた。自然と強い人は刺された程度では死なないと思い込んでいた。歩はゾンビだから、刺されても何ともない。セラも痛いだろうが腹部を刺されたぐらいでは致命傷にならない。ハルナは・・・分からないけど、あのアリエルという人物は平気そうだったから大丈夫なのだろう。私も、たぶん、大丈夫。だけれど、臃は違う。臃は人間。ここに居る誰よりも強くて全然かなわないけど・・・、

臃は人間なんだ

「あ・・・ああ・・・。」

認めたくない。認められるはずがない。でも、確かにその事実は今私の目の前にある。

臃は・・・死んだんだ・・・。

私は泣いていた。本当はこんなに激しく感情を動かしてはいけなのに、それでも泣いてしまう。いやだ、臃は死んでほしくない。でも、臃をゾンビにしていいの？もし、ゾンビになって、『あの人』みたいな変わってほしくない。でも、死んでほしくない。どうすれば・・・。

その時、臙の指が少し、本当に少しだけ動いた。

『臙の 指が動いた。』

「本当ですか、ヘルサイズ殿！」

「だったら、早く病院に」

「バカアユム！今から行っても間に合わないだろうっ！！ここで治すぞ！！」

「でも誰が……。」

『私が治す。』

ガントレットを外し臙の傷口に手を……

あてれなかった。

「……え？」「……」

臙が、突然目の前から消えた。え？なんで？臙はどこに……。

「臙！大丈夫！？」

突然、後ろから声がした。振り返ってみると、暗くて服装と顔は分からないが小さい姿をしていることから、まだ子供だろう。だけど、

その子供からとてつもなく強力な魔力を感じる。アリエル以上の魔力。

「そんな・・・臃が死にかけるとは・・・。っ!」

そのまま、臃を抱え、どこかに行こうとする。

「ま、待て!臃をどうする気だ!」

「うるさい!!あなたたちには関係ないでしょ!」

「か、関係ない、だと・・・!」

その言葉に歩、セラ、ハルナ、そして私は怒りを覚えた。関係ない・・・?関係ある。むしろ、あなたのほうが関係ないように思える。

「なんで、臃がこんなにポロポロなの!?臃は強いのに・・・!ねえ、何で!?!・・・ああ、そうか。アリエルか・・・。また、あいつなんだあ。あいつが、臃をこんな・・・。」

この人はアリエルを知っているの?だったら、ただの人間じゃない。おそらく、魔装少女。

歩とセラはとつさに臨戦態勢をとった。ハルナもやる気なようだ。

「・・・でも、おかしいな。臃がアリエルに後れを取るとも思えないよ。・・・あつ、そっか、あなたたちが居たから臃はこんなにポロポロなのか!」

「・・・どういふこと?」

「言っている意味がわかりませんが？」

「そうだよねえ、おかしいと思ったんだよ。あいつと臃が戦ったらこの周辺が無くなっていてもおかしくないもん。でも、そっか。あなたたちが居たから、臃は本気を出せず負けちゃったのか。なるほどお、それじゃあ、クリスは行くよ。」

「あ、待ちなさ」

セラが止めようと走るがすでに、自分の事を『クリス』と言っていた人物は居なくなっていた。

「・・・なんなんだよ。あいつは・・・。」

「とにかく！早く臃を探さなくては！！」

「ああ、そうだな！」

気になることがある。さっきの人物が言った私たちが居たから、臃が負けた、という言葉。

・・・よく考えてみれば、直ぐにわかる。そもそも、臃がアリエルと戦ったのは私たちが弱かったから。もし、私たちが強ければ、臃は戦わずに撤退していた。あいつに刺されることもなかった。

・・・私のせいだ。私が、臃たちと一緒に居たから臃の運命が変わって臃はあんな目に・・・。

全部、私のせいだ・・・。

く
臃

真っ暗です。今、僕は真っ暗な空間にいます。フレイと会うときは灰色っぽい空間に出るので、死んだのでしょうか。ホント真っ暗です。

「お先も真っ暗ですね……。」

「ええ、ホントにそうですね。」

……へ？

「どうしました？そんな間抜けな顔をして。」

「えっと、あなたは？」

「わかりませんか？鑓七実ですよ。」

……は？どういふことでしょうか？鑓七実？あれは架空の人物の筈ですが……。

「あの時は本当にびっくりしました。七花に殺されて、やっと武人として死ねたと思ったらあの死神が現れていきなりこの体に放り込まれたのですから。クスクス。そうしたら今度はあなたがこの体に放り込まれ、この体の主導権を握ってしまったから驚きました。」

……それは驚きですね。まさか、フレイがそんなことをしていたとは。

「僕に、主導権を奪われて不満ですか？」

「いいえ。もうすでに私は一度死んだ身。主人格でないといえ、意識があり、世界が見れるだけでも幸せです。そう思いませんか？」

「・・・そういうものですかね？」

「そういうものよ。話を戻します。で、この体の中で私の魂と臍さん、あなたの魂が混ざり合い、あなたは私の力を手にしたというわけです。クスツ、良かったですね。いえ、悪いのかしら？私の病気まで引き継いでしまったのだから。」

あー、なるほど。そういうことですか。魂がごちゃ混ぜに、ね。

「理解しましたか？」

「はい、理解しました。で、七実さんはどうするんですか？僕、死にかけてますよ？」

「というか、あなたは死にましたよ？」

「・・・そうでしたね。なんか、すみません。」

「いえ、主人格であるあなたが死のうが死ななかるうが、私はそれに従うしかありませんから。あと、今、あなたは死んでいますか、私は生きています。気絶していますが。」

「僕が死んだのなら、七実さんも死ぬのでは？」

「いえ、死にません。あなたが死んだら私が主人格になります。一心同体ですが、そういうことが出来るようですね。あなたが生きて

いる時でも入れ替わることは可能ですよ？」

「僕はずっと死んだままですか？」

「安心してください。傷の具合にもよりますが、私が代わりに出ている間、魂は修復していくので、死んだままではありませんよ。分かりやすく言えば、あなたが死んでも、私が生きていれば、あなたは何回でも復活出来るということです。逆もまた然り。」

「・・・僕って随分チートだったんですね。」

「チート？ああ、確か不正、という意味でしたか？確かに、そうですね。敵になった人は臍と私を倒さなくてはいけないのですから、確かにずるいですね。」

クスクス笑う七実さん。・・・正直、まさかご本人に会うとは夢にも思いませんでした。というかフレイ。あなた何やってるんですか。ほかの小説は普通に力を与えてるのに、あなたはほかの人の魂を混ぜて力を与えてるんですか？しかも、七実さん死んだはずの人の魂にそれを強引に僕の魂と混ぜたということですか？ハア、死者を弄んじゃあ駄目ですよ。唯一の救いは、七実さんがそこまで怒ってないということですね。

「で、七実さんはどうするんですか？久しぶりの現実世界でしょう。何かしたい事とかあるのではないですか？」

「そうですね・・・、ああ、服を買いたいですね。」

「・・・はい？」

「今まであなたに散々呼びかけても一切反応が無かったのですが、一回自覚して貰えば、私も主人格なれますし、そうなれば、服などの支障がでますから、買っておかないと。」

「・・・そうですね。僕も知ってしまった以上七実さんをずっとここに留めておくのも僕の道徳的にも厳しいですし。でも、服なら着物ですし七実さんも着れますよ?」

「黒色か白色はありますか?私もあなたの行動を全部見ていた訳ではないので何色があるのかわかりません。・・・なければ、何色でもいいのですが。」

「ありますよ。丈は・・・そういえば、身長は僕と同じくらいですか?」

「というか、体が同じなので。」

「そうでしたね。」

喋ってみると中々楽しいですね。相性がいいのでしょうか?

「では、私は戻ります。そろそろ意識を取り戻さないと、心配かけてしまうでしょう?それはあなたが望むところではないでしょうか?」

「ええ、まあ・・・、そういうえば、僕は今どこにいるのですか?あの墓場ですか?」

「いえ、ひまわり荘という場所で、治療を受けています。では。」

そう言って、七実さんは消えました。たぶん意識を覚醒させたので

しょう。

というか、何故、僕はひまわり荘にいるのでしょうか？僕は墓場で死んだはずでしたが、どういう経緯でひまわり荘？全くの謎です。・
・そういえば、確か外の光景覗けるんでしたよね？見てみましょう。

『臃！！よかった、気が付いた！』

『もう、心配かけちゃダメだよー？』

『すみません。気を抜いてブスリとやられてしまいました。』

おお、うまい具合に僕の真似をしていますね。うんうん。やっぱり気遣いが出来る良い人

『ところで、あなた方は誰ですか？』

『『え？』』

・・・ちよつとおお！？

「七実さん！何やってるんですか！..」

『あれ？臃ですか？何とはどういことでしょうか？』

『お、臃？一体どうしたの？頭でも打った？』

『臃君？ちよつと頭見せてくれる？』

いや、なに現実世界で言ってるんですか！..ちよつと勘弁して下さいよ七実さん！..！

「いえ、私は大丈夫です。ご心配なく。」

「私い!!?」

「ホ、ホントにどうしたの臃?なんか変だよ?」

「・・・これは、専門の所で見てもらう必要があるかな?」

「ああ、もう!いいです!僕が出ます!」

「え?臃さん?あ、今出たら」

お構いなし!!

「ふう、あー、すみません。ちょっとおかしくなっていました。もう、大丈夫・・・夫?」

あれ?くらくらしします。治療した筈では?

「外部だけですよ。魂まで修復しきっていません。ハア、だから言ったのに、もしかして臃さんはバカでしたか?」

「い、え・・・バカでは・・・」

無いです・・・。

「え!?臃!?臃お!!」

「ちよ、臃君!?!」

はい、また意識はシャットダウンです。

「ハア、全く、まだ修復しきって無いのに、あんな無茶を……。」

「いや、今回は仕方ないです。このままでは僕の頭がおかしくなっ
たと思われてしまいますから。」

「確かに、私の対応は失敗の部類に入るかもしれませぬ。私は久
しぶりの世界なので緊張していたようです。」

「……あれで、緊張ですか？」

「ええ、緊張です。」

「いや、緊張に見え「緊張です。」……緊張に見「緊張です。」
……緊張していたんですね。」

「はい。」

「……ユー、僕は生れてはじめて口論で負けました。ショック！」

「では、時間もたくさんありますし、今後どのように生活するかを
考えましょう。七実さんはどうしたいですか？」

「今まで通り、私が内であなだが外でいいですよ。」

「……え？いいんですか？せっかく僕が七実さんに気付いた
んですよ？外の世界で楽しみたいとかは無いですか？あなたの生
きていた時代とはだいぶ変わってますけど、それが逆に新鮮でいい

「と思いますけど。」

「この体の主導権を先に握ったのは隴さん、あなたです。それに、私はもうすでに死んだ身。今更表舞台に出しゃばろうとは思いません。さっきのはちよつとしたおふざけです。隴さんの人生は隴さんが主人公です。そこに偶然、鑢七実が居たというだけです。私は、主人公の影が薄くなるようなことはしませんよ？昔もそうでした。七花は私を倒したことによって七花は前日本でも最強になりました。私はつまり、脇役体質なんです。」

「・・・アニメとかで見たときは怖いなー、残酷だなー、とか思っていました。七実さんの評価を急上方修正しましょう。」

「この人、めつちや良い人やん！！」

「何この人、女神？女神なんですか！？自分の体でもある筈のこの体を、先に主導権を握ったのがそちらだからというだけで、譲ってくれるその器！！感動しました！！」

「七実さん！！」

「は、はい？何でしょう？」

「ありがとうございます！！お礼と言っただけですが、一週間に一回、この体を七実さんのモノにしたいと思います！！」

「い、いえ、良いですよ。元々、私はここから見る外の風景が好きなんですからお気遣いなく。」

「・・・でも、その場合僕の気が収まりませんか？」

「それなら、話し相手になって下さい。」

「話し相手、ですか？」

「はい。一人でいることには慣れてますが、話し相手がいるなら話すに越したことはありませんから。」

「それで、良いのですか？」

「いいです。元々、あなたとは一回会ってさよならする予定だったので。」

「そうなんですか？」

「はい、さっきも言ったように出しゃばる気はありませんでしたから。」

むう、納得はいきませんが、本人がそれで良いというのならそれでいいのでしょう。

「わかりました。では、そろそろ休みましょう。ここで寝れば修復も早くなるんですよ?。」

「臃さんは聡明ですね。その通りです。」

「では、お休み下さい。」

そして僕は修復されるまでの間、眠り続けました。

第10話 己と内面と語り合うのも良いものです（後書き）

隳「あとがきコーナーです。今回はフレイではなく・・・」

七実「私です。今回限りの予定ですがよろしくお願いいたします。」

隳「それにしても、作者も思い切りましたね。まさか、七実さんを出すとは・・・。」

七実「実際、隳さんが死んだ時は、どうしよどうしよ、とさんざん悩んだ結果がこれだそうです。」

隳「なんで七実さんだったのでしょうか？」

七実「色々考えたそうですよ？あの死神によって生き返らせるとか、某弾幕シューティングの藤原〇紅をあらかじめ見ていたことにするか。」

隳「あー、そうでしたね。ですが、1つ目は何回死んでも良いという状況を作りたくなかったから没。2つ目の妹〇さんも不死身とか緊張感無くなるから没、と言うことで七実さんに落ち着いたんですよね。」

七実「ですが、結果として一回なら隳さんは死んでもいいようになりましたね。」

隳「そうなんですよ。まあ、僕が死んで、七実さんも死んでしまったら終わりですし、体の原型も残らないで死んでもアウトなんですよね。」

七実「まあ、私たちに限ってそれはないでしょう。私の眼もありませんし。」

隳「ですね。では、次回予告をば

復活する隳！しかし、起きた瞬間見たのはまさに地獄だった……。果たして、隳はどうこの地獄を潜り抜けるのか！？待て次回！

・・・って、なんですかこれ。スタッフ！何ですかこれ！何故僕は一回死んだというのにまた地獄を見るんですか！？え？作者の罫？
・・・後で殺して来ます。」

七実「では、この辺で」

隳・七実「最後まで読んでいただきありがとうございます。感想等お待ちしております。」

臃「では、行ってきますね。」

七実「はい。がんばってください。何かあれば私も協力しますので。」

作者（ブルッ）

第11話 自分自身の事を話すのは何気に勇気がいらすね

はい、みなさんこんにちは。臃です。とりあえず、魂が修復したので、普通に意識を取り戻しました。意外に早いもので、まだ深夜3時です。七実に（話しているうちに呼び捨てで良いと言われたので）聞いてみたところ「たかが、腹に穴が開いた程度ではそこまで時間は掛かりません。心臓や、脳なら話は別ですが。」だ、そうです。むしろ、お腹に穴が開いただけで死んでしまう僕が駄目なようですね。

いえ、今はそんなことは今はどうでもいいです。今は・・・そう、なんと言うか、

世間の人々の目が痛いです。

はい、何故かと言いますと、率直にいます。

クリスが僕の腕に抱きついています。

ええ、それはもう、ギューと、ギュー！と抱き疲れています。あ、あばさん！違つんです。これは、これはあー！！

『・・・臃は恋、という感情を知っていますか？』

『恋？知識としてなら知ってますが、それがどのような感情なのかは、皆目見当も付きません。』

『ハア、大変そうですね。』

『今の僕の現状ですか？』

『いえ、そちらの白い方が。』

??よく分かりません。この現状で、何故僕よりクリスのほうが大
変なのでしょう？謎です。

「臙、あれ買って。」

あ、今さっきも言ったように深夜三時です。が、ここは東京です。
しかも眠らない街、GINZAです。なんでこんなところにいるの
かというそれは30分前に遡ります。

（30分前）

目覚めた僕がまず最初に見たのはネネさんのどアップな顔でした。

「あ、臙君。おきたー？」

「ぶふう！？ちょ、ネネさん！？近いですよ!？」

「え？ああ、ごめんごめん。」

直ぐに顔を退けてくれました。いやはや、寝起きドッキリにしては
刺激が強すぎです。まあ、僕の性欲は皆無ですが。

『悲しいですね。』

『でも、これはあなたもでしょう?』

『いえ、そんなこと無いですよ？ただ、相手がいなかっただけです。』

どうだか。まあ、相手がいなかったのは本当の事でしょうが。

「臃おおおおお！！！！！」

と、いきなり白い物体が突っ込んできました。受け止められるはずもなく、そのまま吹き飛びます。

「臃臃臃臃お！！！！」

そこで、首にギュツと抱きついてきました。もちろん、極まっています。

「よかったよお〜！！」

「！！！！！！！！！！」

「あー、クリス。臃君、苦しそうだよ？」

「え？ああ！！ごめんっ！！」

「ゴホッ！ゴホッ！い、いえ、気にしてません。それより、治療ありがとうございました。ですが、僕は墓場にいたはずですが、何故ここにいるんですか？」

「あ、それはね。アリエルが居るって聞いて急いでクリスが来てみたら、死にかけてる臃が居たからなんかごちゃごちゃ言ってきた人

たちが居たけど無視してクリスが連れてきたの。」

「……つまり、今、ユーたちはそのまま放置ってことですか？心配かけているでしょうか？ユーは……心配してるかもですね。歩もなんやかんやで心配してるでしょう。ハルナは……まあ、なんだかんだいって優しい人ですからね。セラは……どうなのでしょう？殺しかけちゃいましたし、あー、でも、あの依頼の説明を日の夜は別段そういう感じじゃあ、ありませんでしたな。結局、どうなのでしょう？分からないです。」

「……まあ、大丈夫でしょう。何気にたくましい人達ですから。では、いつまでもここにいても迷惑ですし、そろそろおいとましますね。」

「えー、もう行っちゃうの？たまにはクリスにも付き合ってよ！」

「え、ですが……、今はもう夜ですよ？」

「いいじゃん。銀座はまだ昼だよー！」

「銀座って……。」

「臃君、クリスはとても心配していたんだよ？デートぐらいいいんじゃないかなー？」

「うっ、そう言われると痛いですね。わかりました。ですが、明日は学校でしたよね？早めに切り上げますが、それでも良いですか？」

「うんっ！全然いいよ！早く行こうー！」

元気ですねえ……。こんな夜に大声出しては近所迷惑だというのに……。

「では、ネネさん。いつてきます。」

「いつてらっしやくい。」

く現在く

まあ、こんな感じですよ。はい、要するに今はデート中です……。正直、ユーたちをほかってこんなことしていても良いのか？とも思いましたが、クリスマスにも恩があるのでまあ、良しとしましょう。

「それで、何を買ってほしいのですか？」

「ドンペリー!!」

「……銀座に来たからって別にドンペリ頼む必要も買う必要もないんですよ？」

「じゃあ、あれ!!」

「ん……?」

クリスが指さした方を見ると黒い箱に入った真ん中に『吟』と書かれたお酒が……。つて!!

「あれ、菊姫 黒吟じゃあないですか!!値段がすさまじいですよ

!？」

「ぶー、じゃあ、これ。菊理媛。」

「もっと高いですよ!!おとなしくアクセサリーとかにしてください!!今日はそんなに持ち合わせがないんですから。」

「・・・わかった。」

わー、あからさまに残念がつてるよ。しょうがないですね・・・。あの依頼人に追加報酬でお酒も用意させましょう。あ、ちなみに極秘ファイルですが、緊急時だったのでビニールに入れて僕の体の中に保存してあります。気持ち悪い?気持ち悪いです。

「ハア、しょうがないですね。今度またプレゼントしますよ。菊理媛。」

「ほ、ほんと!？」

「ええ、本当ですから今日はアクセサリーなど、残る物で我慢して下さい。」

「ありがとう、臈!!」

そう言って、抱きつく場所を腕から胴に変え、顔を擦りつけてきます。僕たちを見る目線の温度が5度くらい下がった気がします。

「く、クリスマス!場所は選んでください!!」

「え、良いじゃん良いじゃん。」

困ったものですね。まあ、ぶっちゃけ、周りの視線なんてどうでもいいのですが。

さて、さっさとアクセサリなりなんなり買いましょうか。

「で、どれが良いんですか？ここにある物ならある程度は買えますよ。」

「んー、じゃあ、これ！ー！」

「・・・二つでワンセットのブレスレット・・・？珍しい物もある物ですね。色は白と黒の相対的な組み合わせです。値段は・・・ワオ、2万5千円。今の僕の手持ちが2万8千円だから、ギリギリ買えますね。ああ、このお金ですが、銀行から1万分の1くらい引き抜いてきました。」

『結構お金がありますね。』

『頑張りましたから。』

「・・・ま、銀行から引き抜いたのは今日が初めてなんですよね。ほとんど、ユーたちのお小遣いです。未だに、人がいくら頑張っても容易に手に入らない金額が貯金されてますが。しかも、これが一つの銀行にではなく複数の銀行にです。理由？まあ、あれです。そっちの方が安心でしょう？」

「これですか？でも、何で二つで一つのブレスレットなんて買うんですか？いや、二つで一つと言ってもちゃんと個別に使えるようですよ。」

「いいの！これで！」

「……まあ、いいですが。ではお会計してきますね。」

お会計を済まし、外に出ます。……そろそろ日も昇り始めましたね。クリスマスもそろそろ酔いから覚めるでしょう。

「さて、クリスマス。そろそろ、学校に……。」

「臃！はいつ！」

差し出されたのは黒色のブレスレット。白色の方はすでにクリスマスが装着してます。

で、これを何故僕に？

「えっと、なんで僕に？」

「臃とお揃いがいいの！早く受け取ってよ！」

僕と……？ふむ、中々珍しいこともありますね。僕なんかとお揃いが良いだなんて。

「ありがとうございます。」

受け取り、早速腕に付けてみる。……うん、サイズはぴったりですね。

「えへへ、じゃあ、また学校でね！」

そう言ってクリスマスは走ってどこかに行きました。いや、最終目的地

は学校でしょうけど。

さて、僕も学校に行かねば。歩の家は・・・まあ、まだいいでしょう。どうせ今日は疲れ果てて学校でぶっ倒れて早退するのがオチですから。もしかしたら、校門でぶっ倒れるかもしれないですね。

有言実行は僕のモットーです。つまり、学校に言ったは良いですが、下駄箱で力尽き、何者かに保健室へ運ばれました。・・・学校って本来勉強するところですよ？なのに僕ときたら保健室で寝込んでばかり・・・。まあ、公立なのでテストの点数さえ取っていれば文句は言われなと思います。

「それにしても、久しぶりね」。なんで昨日は学校休んだの？」

「少し用事がありました、ええ、親が死にました。」

「へー、って、え！？うそ！？」

「うそ。」

「・・・一回じっくり話し合いませんか。主に教師と生徒として。」

「結構で「失礼します。」あれ？星川さんじゃありませんか。どうしたんですか？」

「どうもごうも、あなたをまたここまで運んできてくれたのは星川

さんよ？」

「いや、気にすることはない。偶然、倒れているのを見つけてまでだ。」

「いえいえ、ありがとうございます。いつもすみません。」

「だから、気にすることはない。私が好きでやっていることだからな。」

おお、この前は変な人か思っていました、良い人です。

『単純ですね。』

うるさいですね。

「いや、これでは僕が世話になりすぎです。何かお礼がしたいのですが……。」

「……ふむ、それなら、頭を撫でていいか？」

……訂正、やっぱり変な人でした。野郎の頭を撫でて何が良いのでしょうか？

「（し、しまった、やはり早かったか？）」

「……まあ、それがいいというなら良いですよ？好きなだけ。」

「本当か！？では、早速。」

ナデナデ

・・・そういえば、僕は頭とか撫でられたこととかありませんでしたね。無縁と思っていましたが、まさかこんな所で撫でられるとは夢にも思いませんでした。・・・以外にも心地よいものです。思わず目が細くなってしまいます。

『変態ですか?』

『いえ、撫でられたことが無いものですからこうなっています。』

『そうですか。なら、良かったですね。このような美人に撫でてもらえて。』

『・・・まあ、そうですね。』

「ふうー。」

ビクッ

「な、なんですか?」

「フフ、割と可愛い反応をするんだな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・

」どどどうした。」

「ち……。」

「ち？」

「力が入りません……。」

「やばいです。力が入りません。座ってるのも辛いです。ベットに寝転んでしまいます。」

『意外な弱点ですね。』

『うるさいです……。』

「ああ、駄目ですね。ふにゃふにゃです。」

「すみません……。ちょっと寝ます。」

「そ、そうか？もしかして、耳弱いのか？」

「そのようです……。お休みなさい。」

「あ、ああ（意外な発見だったな）。」

「あー、なんか意識がトロンとしてきました。お休みなさい。」

（歩）

「その後、皆で臙を探し回ったんだが結局どこにも臙はいなかった。」

ユ一は終始泣いていたし、ハルナとセラもどこか焦った様子で探していた。・・・焦っていたのは俺も同じか。死にかけていた臙を連れていかれたんだ。どこの誰だか知らないが、臙が死んでいたらただじゃおかない。

そして、俺は今学校に登校中だ。もしかしたらケロツと学校に来ているかもしれない。・・・儚い幻想だけだな。居る可能性は、限りなく低いだろう。昨日の今日だ。死にかけてた臙がいきなり学校に来ている訳がない。

学校に着いて、下駄箱から靴を出す。臙の靴は・・・やっぱりない。

「だよなあ・・・、どこにいるんだよ。たくつ。」

席について、授業が始まるまで寝る。これが俺の日課だ。

「おい、相川一、起きろー。もう昼放課だぞー。」

ああ？もう昼？随分早いな。

「今日もハルナちゃんの弁当か？」

「そうだ。中身は・・・。」

へナへナになったナスだった・・・。

「ぶっ！な、何だこれ！！ハハハハハッ！！」

・・・ハルナの感情は弁当に左右されるのか？

「そういえば、今日もクラスに女子が居ないなー。まあ、どうせ保

健室だろ。さつきもつるさかったし。ツケ！良い身分だよ全く！！」

ああ・・・、そういえば、今日も少ないな。まあ、どうせ保健室の
臙の所に行ってるんだろうが。

・・・ん？女子が居ない？

「っ！！」

その答えに至った瞬間、俺は席を立ち、保健室に走った。

「ちょ、おい！相川あ！？」

織戸がなんか言っているが、そんなことは無視だ！！保健室に着き、
ドアをあけ

「今日臙君いなかったね！」

「そうだね。ちょっと残念かも。」

・・・だよな。居る訳ないよな。

そのまま、保健室に背を向け、俺は教室に戻った。

（臙）

今日は3時間目の授業中に早退しました。まあ、僕は今日、授業を
受けてないんですけどね。

帰路の道中、なんかメガロが現れました。タコですね。うねうね

しています。

「気持ち悪い……。」

『臃、ここは私にやらせてもらっても良いですか？』

『大丈夫なんですか？』

『遅れはとりません。リハビリですので、軽く戦うだけです。』

『なら、代わりますね。』

瞬間、僕と七実が入れ替わり、僕が黒い空間に、七実が主人格になりました。

「……いきますよ？虚刀流『薔薇』。」

すさまじい跳び膝蹴りが放たれます。……軟体動物に聞くのでしようか？

「虚刀流『雛罌粟』から『沈丁花』まで打撃技混成接続……」

ちよつとおお！？そんな無茶な技使ったら……。

タコは死にました。ええ、272回の打撃を喰らって見事に死にました。ですが……

『私も死にました……。まあ、元から死ぬつもりでしたが。』

『なんて無茶を……。ウォーミングアップにはやりすぎです』

よ?」

『一回死ねるのならこのくらいがちょうどいいのよ。さ、早く代わりましょ?』

『ハア・・・分かりました。』

意識を取り戻し、目を開けたら目の前が真っ赤でした。ああ、血です。顔にもべったりでしょう? 弱りました・・・、タオル、持っていないんですね。

『ごめんなさい。そこまで考えてなかったわ。』

「ハア、人に見つからないように帰りましょう。」

屋根に上り、そのまま真っすぐ相川家を目指します。

『どのくらいで、修復されますか?』

『そうですね・・・6時間かしら。』

じゃあ、その間は死なないようにしなければ。

家に着き、玄関から入らず、自室の窓から侵入します。鍵? そんな物付いてません。盗まれて困るようなものもありませんし。

「待っていたぞ・・・。」

あ、依頼主の方です。

「例のモノですね。ちょっと待って下さい。」

口に手を突っ込み、ガサゴソします。おええ、キモッ！

「こ、これですよね？はい。」

「・・・確かに。これは報酬だ。・・・そのしまい方、なんとかならないか？」

「緊急時だったもので。あ、報酬追加しても良いですか？」

「なんだ？」

「菊理媛をお願いします。」

「あの高級酒か？わかった。明日には届けよう。」

「10本です。では。」

「ああ・・・。」

・・・さて、とりあえず、タオルを探さなければ。

下に降りて、居間に向かい、タオルを・・・

「大丈夫です。痛くしませんから・・・。」

「んあ！あ・・・。」

「・・」

「……………」

「チユル……、え……？」

「あ……。」

「……………!？」

「……………お邪魔しました。続きをどうぞ。」

さーて、僕は早くタオルを探さなければ。洗面所にあるでしょう。行きましょ行きましょ。

「ま、待って下さい!今は採血で」

「臃!！」

ユーがプロレスラーも真つ青なタツクルをかましてきました。というか、声を出しても大丈夫なのでしょううか？

「ユー……?」

見ると、ユーは泣いていました。普段のユーからはあり得ないほどに。

『心配した。』

「それは、すみませんでした。」

『死んだかと思った。』

「……すみません。」

これは言うべき？ 実際、僕は七実がいなければ死んでますし、どうしまししょう？

『言わなくてもいいでしょう。無駄に心配させることもありませんし。』

『……ですね。』

脳内……いえ、精神内会議での結論、言わなくても良い。

「改めて心配かけてすみませんでした。僕はこの通りピンピンしますので。」

『ごめんなさい。』

「え？」

『私が 朧たちと一緒にいたから こんなことに。』

……またこれですか。どうやら、ユーは若干加害妄想をしていますね。

「それは違いますよ。今回の件は僕の油断から起こったことです。ユーは悪くありませんよ。」

『でも 私がいなければ朧は。』

「死ぬまで一人でしたね。」

「「「え?」「」」

「ユーがいなければ僕は永久に一人でしたよ。ユーが運命を狂わせるといふなら僕は良い方に狂ったと思いますよ?なにせ、ユーに会わなかったら僕は今ここにいませんから。それでも、ユーは自分が居なくなればいいと言いますか?」

フルフルと首を横に振るユー。だが、まだ若干表情は曇ってますね。

「ユーは自分の力が害にしかならないと思っているでしょうが、そんなことはありませんよ?逆に考えてみてください。ユーの『おかげ』でセラやハルナに会えたんですよ?」

だってそうでしょう?ユーが居たからハルナは魔力を失い(本人にとっては悲しいことですが)歩の家に居候。セラもユーが居たからここに来たんですよ?ユーのおかげ以外の何物でもありません。

「ですから、そう自分を卑下しないでください。」

『ありがとう。』

うむ、素直でよろしいです。

「ところで臆。何故血まみれなのですか?怪我は無いようですが・

」。

「ああ、途中でメガ口に出会ったので、軽く捻ってきたらこの様です。」

まったく、無茶して混成接続する人がありますか。僕だってあんな激しい動き、他人の動きじゃないと出来ないのに。

「それと、臍はどこに行ってたのですか？皆心配していたのですよ？」

「そうだぞ！皆色白さんが死んだのかと思った。」

「まあ、実際死にましたけどね（ボソツ）」

「はい？」

「なんでもありません。で、どこにいたのかというと、銀座です。」

「なんでそんなところにいるんだよ！！変態！！！」

へ、変態？銀座のどこが・・・あ、確かにそういう店もありますね。なるへそ。

「いえ、ただ、ちょっと、デー・・・お買い物してただけです。」

「デー、なんですか？」

しまった！！

『口が軽いですね。バカ？』

『まあ、あんまり勉強はしてないですね。』

『あら、本当にバカだったの？』

『するまでもないんです。』

つと、現実逃避してる場合じゃない。見よ！セラからは夜叉が！！
ユーからは羅刹が！！

「お買い物です。」

「デー、なんですか？」

「お買い物です。」

「答えてください。」

ぐっ！なんですかこのプレッシャーは！？スタンドですか？冗談じゃありません。そんなもの出てきたら僕なんて一発昇天します。

「だから、お買い物ですって。」

「・・・質問を変えましょう。連れはいましたか？」

「ええ、いましたよ？」

「性別は？男？女？」

「女性ですがそれがどう」

チャキッ！x3

「覚悟は良いですか？」

首元にあてられている物体（ミストルティン・葉の刀・鎌）を見て、背中に嫌な汗が出てきました。

「・・・あれ？僕何かしましたか？」

「わかりませんか？なら教えてあげましょう。」

「人が心配してる中、何ほかの女とデートしてるんですかっ！！
（だっ！！）」「」

『肅清』

あ、僕終了のお知らせです。

「ちょ！待って下さい！！デートなんてしてませんよ！！」「なら、その手首に着いているものは何ですか！！」「くれたんですよ！！」「やっぱりデートじゃありませんか！！」「色白さんのバカ！変態！！」「わわ！！危ないですって。そんな室内で刃物は振り回しちやいけません！！」「大人しく斬られればすべて丸く収まります。」「バカですか！？そんなことされたら死にます！！」「肅清。」「ユーまで！？わ！ちょ！待って下さい！！鎌はホントにスッパリいっつちゃ　ぎゃあああああ！！！！」

『バカばっかりね。』

あの後、散々説教され、何故かセラとユーにデートをするという約束を取り付けられていました。ハルナはヴァイスで勝負だ！らしいです。まだやってたんですか、あれ。というか、何故僕が良いのでしょうか？もっと良い人はいると思いますが。

『鈍感ですね。』

『は？何が？』

『ハア、苦労しそうですね……。特にあの銀髪の方は。』

良く言っている意味がわかりません。鈍感？僕が？……どうなのでしょう？僕が人の好意に鈍いのは自覚してます。意外ですか？そうですね。大抵、鈍いとか鈍感とか言われる人は自分が鈍感なことに自覚がありませんが、僕は質が悪いことに自覚してるんですよえ……。理由？それはですね。闘病の際にいろんな感情をこみ箱にポイして来たからです。感情を取り戻すのに3年掛かりましたが、未だに『恋』『愛』などの好意的な感情が分かりません。……したことないからですかね？いや、そんなことないはず。ただ僕のそういう感情が欠如しているからでしょう。

『自覚はあったのね。意外。』

『まあ、自覚してるからと言って分かる訳じゃありませんけどね。口で言ってもらうまでは分からないと思います。……ところで、僕の事をそういうふうに思っている人はいるんですか？セラのデー

トの取り付けは半ばやけくそでしたし、ユーも便乗しただけのようでしたから分らないんですよね。』

『教えるものですか。自分で考えなさい。』

『やっぱり。ま、こういうことを人に聞くのも野暮ですね。』

『良く分かっていますね。その通りよ。』

・・・なんか七実さんが人生相談係みたいな立ち位置になってきましたね。まあ、あちらの方が年長者ですし、僕なんかよりも知っていることも多いでしょうが。

「ただいま。」

おや、歩が帰ってきました。

「セラ、臙は帰って」

「ますよ。心配かけましたね。僕はこの通りピンピンしています。」

「・・・ったく、無駄な心配かけさせんなよ。」

「すみません。まあ、事実、ホントに危なかったですけどね。」

「そうか・・・すまない。俺たちがもつと強かったら。」

「そうですね・・・、私たちが強ければ、臙が一人で戦うこともありませんでした。」

「ハア、まあ、こつというのはスツパリ言った方がいいですからスツパリ言いますけど、確かにそうですね。」

「「っ！」

「ですが、それが何ですか？それは結果論でしょ？たられは言っている暇があれば少しでも鍛錬すれば良いじゃないですか。反省は良いことですが、後悔している時間はもっとも無駄な時間だと僕は思います。」

「・・・ゴハツ！僕って基本甘いですからこつという厳しいことを言うのはとても酷です。ユーもそれに気付いているのでしよう。神妙な面持ちです。」

「そうだ、な。後悔しても何にもならないよな。」

「確かに、後悔してそこで足踏みするよりも先に進んだ方が利口ですな。」

ホッ、よかつたです。そこまで落ち込んで無いようです。

『甘いですね。私はもっとスツパリいます。』

『でしょうね。まあ、良いじゃないですか、これが『僕』ですから。』

「じゃあ、それにお前は付き合ってくれるか？」

「・・・はい？」

「私たちの鍛錬に協力してくれますか？」

「あー、無理ですね。戦い方が違いすぎます。」

「どういうことですか？ 臙の戦い方は、その爪を使った接近戦でしょう？ 私とクソ虫の戦い方と同じですが……。」

「……まず一つ目、僕は自分の拳を使いません。二つ目、これはセラたちが勝手に勘違いしたことです。……僕の一番得意な戦い方は中々遠距離戦ですよ？ 頻度的には接近戦の方が多いので少しなら教えますが、僕の戦法は他の人には絶対に出来ません。」

「なんでだ？ 同じ人間なんだから、出来ないこともないだろう？」

「いえ、出来ません。それと、僕を人間と見るのは少々、いや、かなり難しいですよ？」

「……どういうことだ？ まさか、幽霊とかメガロとか言い出さないだろうな。」

「生物的な見方で言えば人間ですが人間的な見方で言えば人間じゃありませんね。んー、たぶんこういう分類になります、化け物と。」

歩たちは「は？」と、ユーはハツとした表情になった。ああ、そういえば言う約束もしてましたね。すっかり忘れてました。

「ふむ、タイミングはどうかわかりませんが、いつか言わなければいけないので今言いますね。僕が何者なのか。」

部屋に緊張が走る。そこまで緊張しないでほしいんですけどね。

「一つ、いいか？」

「どうぞ。」

「つまり、臆が強いのはその見稽古が出来るからなのか？」

「いえ、違いますよ？」

「「「は？」」」

「僕が見稽古をする理由は至極単純、僕自身の身体能力で戦わないためです。」

「・・・相手に手加減してることか？」

「ああ、そのことを今から話そうとしてました。良いタイミングで質問してくれましたね。パチパチ。で、理由ですが、僕が見稽古を使っているのは、僕自身の力を抑えるためです。僕の身体能力に体が追いついてないんですよ。つまり、他人が必死に習得した技術は、僕にとっては抑止力、枷です。気持ち悪いでしょう？他人が血の滲むような努力をして長年の月日を経てやっと修得した技術もなにもかも、僕にとっては自分の力を抑えるだけのモノでしかない。・・・これで、全部です。どうです？気持ち悪いですか？なんなら、追い出しても良いですよ？」

沈黙。反応なし。どうしましょう？

「・・・追い出さないぞ。」

「・・・何故？気持ち悪いでしょう？」

「なんで追い出すんだ？昨日は俺たちを守るために一人であいつと戦ってくれた臃を、何故追い出さなきゃならない？」

「臃、私は今怒っています。何故か判りますか？」

「いえ。」

「どうしてそこまで自分をそこまで下に見るんですか？何故、自分を卑下するんですか？それが許せません。臃は私をここに置いてくれました。あの大きいメガロが現れた時は陰で助けてくれました。そんな立派な事をしているのに、自分のことをその様に思っている臃が許せません。もっと自分に自信を持って下さい。」

「色白さんは、その、気持ち悪くなんか無いぞ？大先生とも互角に戦えた凄い奴だっ！！！」

「・・・ハア。まさかこの歳で泣きそうになるとは露にもおもいませんでした。」

『臃 よかったね。』

「そう、ですね。はい、良かったです。」

あー、駄目ですね。泣きそうです。今日はもう寝ましょう。

「すみません。喋りつかれたので今日はもう寝ますね。お休みなさい。」

「え、ちよ、おぼ」

『寝かさせてあげて。』

・・・ユーはお見通しですか。

僕は自室に戻り、ひそかに涙を流しながら睡眠に入りました。

『・・・まあ、あんなこと言われればそつなるわね。』

第11話 自分自身の事を話すのは何気に勇気がいらしますね（後書き）

隳「あとがきコーナー。」

フレイ「ぶー！もっとテンション上げて行こうよー！」

隳「遠慮します。で、今回は僕の過去の暴露でしたね。」

フレイ「その前にクリスとデートしてたね。人の心配させといてよくデートなんて出来るね？」

隳「・・・申し訳ございませんでした。深く反省しております故、何卒ご容赦を」

フレイ「よいよい。面を上げよ！」

隳「はっ、って、僕は誰に謝っているのでしょうか？」

フレイ「さあ？で、つぎはどんなお話？」

隳「ああ、次は・・・」

ますます、暑くなつた夏！

遂にハルナの堪忍袋の緒が切れた！！

次回、海に行こうぜ！！（仮）

と言う感じですよ。漫画版を買っている人なら分かるかもしれません。

」

フレイ「というかそのままだよ。まあ、臃がいるから多少違うかな？」

臃「さあ？それはどうでしょう？では」

臃・フレイ「ここまで読んでくれた読者の方、ありがとうございます！！感想等お待ちしております！！」

臃「今回の話、若干温くありませんでした？」

フレイ「うん、なんか、足りないよね。気のせい？」

作者「気のせいです！！」

第12話 夏だ！！海だ！！テストだ！！・・・まったく関係ないですね

皆さんこんにちは。臃です。最近はどうしても暑いですね。こつちも
そつちも同じくらい。皆さんは安眠できているでしょうか？僕は・
・通常なら出来ませんが、ある条件の元、安眠できるようになりました。
抱き枕です。最近流行りのモフモフ抱き枕です。この前、安
眠できないということ色々試してみたところ、この抱き枕が絶大
な効果をもたらしたので、ご愛用させてもらってます。因みに、所
持数は3個です。2個は普段使っているのですが、もう一つはこの
前駅前の福引をやったら何故か3等で当たったモノです。・・・使
つてないので部屋の隅に放置ですが。それにしても暑いですね。暑
いと僕のHPはみるみる減っていきます。忌々しき事態です。

「暑い~~~~~」。

「し、死にます・・・。」

僕とハルナは寝転がって扇風機に当たっています。いや、僕の場合
は寝転がってというよりも力尽きてと言った方が正しいかもしれま
せん。

「あ、歩。この家にはクーラーという人類が生み出した素晴らしい
機械は無いのですか・・・？」

「無いな。」

「・・・買しましょう。大丈夫、お金なら掃いて捨てるほどありま
す。」

因みに、歩以外には僕のお仕事の事を話しました。驚いただけなら
まだしもお仕事を禁止させられました。どうしましょう。普通のバ
イトでもしましょうか？・・・体力が持ちそうにないですね。七実
さんにもやっつて貰いましょうか？

『いやよ。』

・・・世の中、こんなものですよね。まあ、良いです。しばらくは
もつでしょう。・・・実はこっそりやっつてるんですよ。依頼主は
一人ですが、中々良い収入なので。はい、この前来たあの人です。
あの人の仕事はやりやすいんですよ。

「家に余裕はないんだ。ただでさえ俺一人分の仕送りでここまでや
つていけたのも奇跡だ。」

「・・・クソ虫は本当に鈍いですね。そこの棚の通帳を見てくださ
い。」

あー、僕が開けるべからずを命じたあの棚ですか。あの中には通帳
がたくさん入ってますからね。

「いいのか？臍。」

「今となつては意味がないので良いですよ。」

はてさて、アレを見て歩はどういう反応を見せるのでしょうか？

「・・・何でこんなに通帳があるんだ!？」

・・・そこに驚きますか。家庭によって量は変わりますが、結構持ってますよ？

「ハアア！！！？何だこの値段！！臃！！お前何した！！」

「頑張つて稼ぎました。」

「頑張りすぎだろ！！これ、普通に稼げる値段じゃないぞ！？何だよピー億円って！！しかもこっちも同じくらいの値段が入ってるし！！！」

あー、それは荒稼ぎしていたころですね。懐かしいです。

「大丈夫。最近の通帳はピー百万円くらいしか入ってません。」

「それでも十分多いんだよ！！！」

・・・？歩は何を興奮しているのでしょうか？良く分かりません。お金があれば困らないので貯めていただけで僕にとってはそこまで執着するものでもないのですが・・・歩は違うのでしょうか？

「あ、これカードです。歩にも渡しときます。」

そう言つて僕は歩に黒いカードをポイツと渡す。

「おっと、な、何だこれ？」

「ブラックカードです。黒いでしょ？」

「ぶ、ぶぶぶ、ブラックカードお！！？」

「はい。困ったときに使って下さい。クーラーは絶対に必須ですの
で、お忘れ無きよう。」

「あ、ああ……。」

「だああ!!この世界は暑すぎる!!もっと涼しい場所はないのか
!」

「ふむ……あるにはありますが……。」

ちらつと歩を見る。え?僕ですか?これから行く場所への恐怖で急
に寒くなってきました。ああ、ここまで恐怖したのは幾年ぶりです
よう。

「え……何?俺?」

……ハア、どうしましょう。

『ああ、そうでしたね。臍に唯一弱点があるとすれば『アレ』でし
たね。』

『そう。あれです。ああ、本当にどうしましょう。』

そんな僕に気付くこともなく、歩をトランクに詰め込み、拷も……
んんっ!海水浴場に来ました。嗚呼、来てしまいました。青い空、
青い海、白い波、きゃきゃ騒ぐ人々……、反吐が出ます。

そんな、海水浴好きに喧嘩を売るような事を考えているうちに女
性陣は脱ぎ終わったようです。あー、ハルナなんて早速泳いでます
よ。ケツ!!

『いつになく辛辣ですね。』

『別に。これが素ですよ？』

「臙、お前は泳がないのか？つて、未だに着物かよ。」

「あ？何か文句でもありやがるんですか？水着なら中に『念の為』着てます。が、先に言っておきましょう。僕は絶対に！！泳ぎませんからね！！」

「は・・・？ああ、そうか。」

よし、釘は刺しました。これで安心して・・・。

「色白さんも泳ごう！！」

・・・は？

「い、嫌です！！ちょ、やめてください！！僕をあの魔境につれていけないで下さい！！」

「良いじゃん！！泳ごう！！」

「・・・臙は何をそんなに拒絶しているんですか？」

「なんでもしますから！！なんでもしますから僕をあの魔境に入れないでください！！あ、何服脱がしてるんですか！？ちょ、ホントにやめてください！！」

「あー！もう！うるさい！！」

ハルナに放り込まれました。って、あー！！！！！！

ザッパーン！！

『まあ弱点とも言えませんが、男にとっては致命的でしょうね。・
・水に入ったら誰がどう見ても女・・それも保護欲が湧く小動物
的な女にしか見えなくなってしまうのですから。実際は男ですけど。』

嗚呼、もう手遅れ。手遅れです。このまま海に沈んで溺死でもしま
しょうか？・・無理ですね。あー、もう良いです。とつと陸に
上がって早く着物を着ないとえらいことになります。

「どうです臆、気持ち・・・」

「え、色白・・さん？」

「・・・はい？」

すこし首をかしげて反応します。あ、別に幼児退行するということ
は無いです。

「「っ！！？」」

ブバァー！！

あー、やっぱり。海に赤潮が発生しました。若干鉄分多めですが。
まあ、あれなんですよ。何故かこの姿を見た人は鼻血を出すんです

よ。だから普段は人に風呂上がり姿などは見せないようにしているのですが・・・遂にはれました。ああ、別に泳げないというわけではないですよ？海 嫌い 泳げないと、想像した方もいそうですが、違います。海に来て僕が泳いだりしたら、血の海が出来るから嫌なんです。こうして陸に向かっている今でもこの姿を見て海に鉄分をぶちまけてる人が大量発生しています。自然界に影響を及ぼさなければ良いのですが。

「歩、僕の服を取って下さい。」

「ん？ああ、これ、か・・・グハツ！！！！」

また一人撃沈です。まったく、野郎の濡れた姿を見てどこが良いのでしょうか？鼻血を吹いた人全員気持ち悪いですね。ええ、気持ち悪いです。それに比べ、ユーを見てください。鼻血なんか出してませんよ？さすがですね。・・・何故か、顔に大量の熱冷まシートを張ってありますが。

「ハア、やっぱりこうなっちゃいました。ユーも知っていたでしょう？何故止めてくれなかったんですか？」

『それは・・・』

珍しくユーが口籠ってますね。しかも、顔を紅くして俯いちゃいましたよ？あー、やだやだ。こういう意味不明なことが起きるから僕の濡れた姿は見せたくないんです。さっさと服を着て乾かしましょ

う。
『難儀ね・・・。』

『・・・あなたは、何故、それも平然と、鼻血を垂らしているんですか？』

『最近流行りのキャラ崩壊よ。』

『しすぎです。昔の面影が欠片も無いじゃないですか。』

『むしろ、昔の私から卒業しようかと。』

『色々怒られそうですね。主に視聴者に。叩かれたらどうする気ですか？』

『今の私がどうなろうと、私の勝手でしょう？別に良いじゃない、キャラ崩壊。』

『・・・ハア、もう良いです。』

それから、しばらくして、この騒動は収まりました。・・・海岸が真っ赤っかになってしまったので、色々なイベントが中止になったそうです。

余談ですが、ハルナが早食い大会のモフモフ抱き枕が欲しかったようで、しょんぼりしていましたが、余っているのがあるからそれを上げると言いました。そうしたら、途端に元気になりましたね。で、今は帰り道。僕は列の一番最後尾、ユーは僕の隣、歩は真ん中で、ハルナとセラが前で横に並んでいる状態です。・・・ユーはあの墓場での出来事があってから少し元気がなかったようですが、朝よりはマシになりましたね。

「ユー、お前はこの生活どう思ってるんだ？ついでに臍も。」

僕はついですか。まあ、良いですけど。

「そうですね・・・、僕は好きですよ。今の生活。」

『嫌いじゃない。』

「そうか。」

こうして、今日という日は終わりました。

・・・またまた余談ですが、次の日、ニュースで『謎の儂い系美少女、あらわる!!』なんてのがやっていましたが、僕は一切関係ありません。

今日は6月30日。時間が経つのは早いですね。まあ、この小説の時間経過は分かりにくいと思いますが、そこはスルーお願いします。

「鑓君、あなた凄いわ。保健室、今のところパーフェクトで毎日ここに來てるわ。」

「わーい、やったー。」

「・・・喜んでいる場合じゃないわよ？今日は金曜日だけど、月曜日からテストよ？あなた、まったく授業に参加してないけど勉強のほう大丈夫なの？」

「・・・社会と四教科が拙いですね。それ以外は百点とする自信があります。」

「俗にいう天才ってやつかしら？」

「いえ、そんなんじゃないですよ。」

本当は古文を危ないんですが、こつちには七実がいます。昔の人ですから古文であれ解けるはずですよ。」

『解けるけど、私も手伝うのかしら？』

『もちです。僕はただでさえ授業休みすぎて先生方の印象が最悪なので、点数は採らないといけません。』

『ハア、死人使いが荒いですね。』

『良いじゃないですか。こちらら運命共同体ですよ？何事も協力していかないと。』

『これは、協力とは言わないわ。利用って言うのよ。』

『・・・まあ、細かいことは良いじゃないですか。』

『まあ、良いわ。協力します。』

おお、良かった。あとは教科書を流し読みすれば良いですね。

「先生、ここに四教科の教科書ありますか？」

「あるけど・・・はい、これ。」

「ありがとうございます。」

パラパラパラ・・・、うん、大体覚えましたね。楽です。楽々です。・・・何故か社会はこう簡単にいかないんですよ。何故でしょう？

「ありがとうございます。」

「あら、もう良いの？・・・そういえば、鑓君今回のテスト頑張らないと、特別指導入るらしいわよ？頑張ってたね。」

マジか。あの教師共め。僕を本気にさせたこと、後悔させてやります。

「わかりました。では、勉強するために今日は帰ります。」

「ここがすでに学び舎なのだけど・・・まあ、いいわ。じゃね。」
帰宅です。学校？僕の知っている学校は保健室が主ですよ？後、若干自分のクラスもそうですね。というか、僕未だに体育の授業に参加したことはありません。すごいでしょう？え？すごくない？もつとしっかり授業を受ける？受けようと思いました。ですが、体育だけは何故か阻止してきます。ハア。

「ただいま帰りました。」

「お帰りなさい。』お帰り。』おっ帰りー！！」

ハルナは元気ですね。こんなに暑いというのに。

「色白さん！ヴァイスやろ、ヴァイス！！」

「ああ、すみません。僕今からテストに向けてのお勉強をしなければいけないんです。テストが終わったらいくらでも相手をしましよ
う。」

「勉強するのか？」

「ええ、社会だけですけど。・・・誰か、この世界の社会が出来る
人いませんか？何故か僕の体は社会を受け付けないようで、教えて
もらわないと出来ないようです。」

かといって学校に友達が・・・女子の方たちなら教えてくれそうで
すね。何故か看病してくれるので、そのついでに教えてくれそうで
す。

「地理ならばお力になれます。が、理数系がちょっと・・・。」

「おお！ホントですか！？良かったあ〜。」

ふう、どうやら僕の心配は杞憂に終わったようですな。

・・・？何故でしょう？ハルナはそんなことないんですが何故
かユーが若干ご機嫌斜め？それに反比例してセラは若干ご機嫌よろ
しい？んん？僕に勉強を教えることに一体どういった価値がある
というのでしょうか？ああ、あれですか。僕が滅多に人にモノを聞か
ないからですか。なるほど。

『臃 数学は出来る?』

「え?あー・・・出来るはずです。」

ええ、あくまで「はず」なんですよね。・・・そういえば、提出物
つてあるのでしょうか?あったなら、絶対に終わりませんね。すこ
いですよ?僕のそういった問題集の回答欄は真っ白です。・・・あ
ー、うん。やばいですね。

「・・・すみません、セラ。優先順位を変えても良いですか?」

「いいですが・・・、どうかしましたか?」

「数学の問題集を一問も解いていません。忌々しき事態です。」

というか、どこにいきましたっけ、あれ。たしか、自室の隅っこで
埃を被っているはずですが・・・。

『手伝おうか?』

「・・・そうですね。僕は答えだけ書くのでユーはあたかも計算し
ましたよ?みたいな感じで途中式をお願いします。」

『分かった。』

お、ユーの機嫌が元に戻りました。良かったですね。さて、僕は久
しぶりに頭を使いましょう。戦闘以外で使うのは久しぶりですね。

「さて、始めましょう。」

ふう、やっとこさ終わりました。やっぱり、30分間常に指を動か
し続けると疲れますね。あー、これからは定期的にやりましょう。
そうしましょう。

「疲れました。普段から勉強しないとやっぱり駄目ですね。直ぐに
手が疲れちゃいます。」

「・・・臙は、頭が良かったのですか？」

「少なくとも、高校の数学で苦戦することはほぼありません。理科
も高校までならなんとか満点を採れますね。英語は、まあ、分かる
でしょう？ですが、社会だけは駄目ですね。どうしても覚えられま
せん。教えてもらえば覚えられるんですけど・・・何故でしょう？」

「いえ、私に聞かれても・・・。」

『頭の容量がいつぱいなんじゃない？』

「かもですね。自分では詰め込めませんが、人が強引に捻じ込めば
入ると言ったところでしょうか？」

「なるほど・・・。臙は天才という奴かもしれないね。」

「あ、それあってます。僕は天才です。自分で言うのもあれですが、

まあ、勉強面ではなく戦闘面で、ですけど。」

『私のおかげですね。』

『そうですね。感謝です。』

と、その僕たちの会話に一人、過剰に反応してきた。

「なっ！！天才はあたしだぞ！！勝手に人を持っていくなよなっ！！！」

「いえ、だから、僕は戦闘面に対してですよ。勉強ではハルナの足元にも及ばないでしょう。」

『謙虚ね。本当はガリレオさんもびっくりなほど頭が良いのに。』

『それは買い被り過ぎですよ。せいぜい、三途の川の長さが分かるぐらいです。』

『どこの九尾ですか。十分頭がいいではありませんか。』

『・・・まあ、今はそんなことどうでもいいでしょう。』

「あたしは勉強でも戦闘でも天才だっ！！！」

・・・戦闘でも、ねえ。

「本当の戦闘のプロは、魔装少女でもメガロでもましてや、吸血忍者でもありません。」

「朧？」

急に雰囲気が変わった僕に戸惑ってますね。まあ、僕にとってもこれはあまり良い思い出じゃないですからね。

僕は、今までに3回、フレイ（覚えてますか？）に助けられています。一回目は、転生する際に、そして、三回目はセラの料理を口にしたときに。では、二回目は？と思うでしょう。たぶん、この世界の場合、僕が死にかけたのは魔装少女、メガロ、吸血忍者等々が原因と考えるでしょう。でも、違います。僕が、僕を死にけるまでに追い詰めたのは唯の人間です。意外ですか？でしょうね。僕も、まさか出会った瞬間殺されかけるとは夢にも思いませんでしたから。

『本当に、あれは驚きました。』

『ですよね。僕も驚きましたよ。』

今度会ったらどうしてくれましょう？あの顔面刺青携帯ストラップ野郎。・・・全力で逃げましょう。関わりたくないです。

「・・・ぼろ・・・朧！！！」

「！！おお、すみません。過去の思い出に浸ってました。」

「そうですか。で、結局、戦闘のプロとは何のことですか？」

「ああ、いえ。戦闘のプロはハルナです。ね？」

「だろ！！！」

・・・世の中、知らない方がいいこともあります。これはそのトッ

ブクラスです。ああ、因みに僕が思っている戦闘のプロは『殺人鬼』です。いや、あれは戦闘ではありませんね。あれは遊びです。．．．ですが、殺す手際は素晴らしく鮮やかです。見習いたいとは欠片も思いませんが。

「．．．また何か隠してませんか？」

「いや、何も。強いて言えば僕が今まで3．．．いえ、2回ほど死にかけたというだけです。まあ、過去の出来事なので気にすることでもありませんよ。」

「そうですか．．．。」

「さて、お勉強しましょう。セラ先生、よろしくお願いします。」

「せ、先生．．．！？わ、分かりました。では、まずどこからですか？」

「えっと、まずですね．．．。」

それから、僕はセラ先生に社会を習いました。社会科のスキルが50上がりました。

「ただいまー。」

歩が帰ってきたようです。因みに僕たちは少し前に勉強を終了しました。理由？テスト範囲は完璧になったからです。セラ先生の教え

方はとても分かりやすかったので、直ぐに覚えることが出来ました。いやー、よかったです。これで・・・学年ベスト5は堅いですね。

「お帰りなさい。歩はテスト、大丈夫ですか？確か歩は授業中に寝てばかりいますよね？」

「そういう臃は保健室ですっと寝ているだろ？」

「クソ虫、何を言っているのですか？臃は優秀ですよ？クソ虫如きの脳みそと同じにしないで頂きたい。」

「は？どういうことだ？」

『つまり 臃は歩が帰ってくるまで勉強していて範囲を完璧にしたということ。』

「・・・この短時間でか？」

「はい、ばつちり。まあ、勉強したのは社会だけですけど。」

「それじゃ駄目だろ！！？」

やれやれ、困った人です。

「歩。この問題解けますか？」

僕が見せたのはアメリカの超有名大学にして難関校の数学の問題です。数式がバカになりません。

「・・・無理だ。ゾンビは賢さの値が低いんだよ。」

「ですよね。分かってました。が、この問題、歩とセラを除いてここにいる全員が解けます。もちろん、僕も。」

「答えを覚えているだけじゃないか？」

「・・・ハルナはそうですけど、これは覚える覚えのない問題ではなく、普通は覚えることは不可能です。普通に、スラスラ問題の途中式などを書いていてだけでも30分使っただけですよ・・・ユーは何故か一瞬で解きますが、ノートは敷き詰めて書いても5ページは堅いです。」

「あー、わかったわかった。もういい。結局、臍は大丈夫ってことだよな？」

「はい、端的に言えば。」

「・・・ここまでうだうだ言ってきましたが、結局歩は勉強大丈夫なのでしょうか？」

「まあ、俺もテストがあるから勉強しないとな。」

「・・・一人で、ですか？」

「・・・？それ以外でやる方法があるか？」

歩が一人で勉強？ハッ！！絶対に無理ですね。授業もまともに聞いていない人がまともに勉強できるはずがないでしょう。バカ、というのは2種類ありまして、授業を真面目に聞いているけど中々成果が出ないタイプ、聞いていなくて普通になにこれ？って感じのとあ

りますが、前者は大丈夫、伸びます。後者はもう無理です。諦めてください。よって歩、あきらめてください。え？僕は例外ですよ。稀にいるでしょう？何もしてなくて何でもできる人。例えば、アイシールド2 の金剛兄弟の弟とか。あんな感じですよ。まあ、僕は出来ないこともあるので努力は惜しみませんが。

・・・そんなこと考えている間に歩が勉強を始めました。おお、みるみる歩の顔が渋くなっていきますね。面白い。

「セラ、勉強を」

まずセラですか。まあ、確かに見た感じ一番知力が高そうですね。実際は教えるに関してはユーが一番ですが。僕は・・・まあ、教えることは可能ですが、単純にめんどくさいです。

「古文や地理ならお力になれますが、理数系は・・・。」

・・・残念ですね。まあ、実際セラは理数系はホントに出来ないですからね。さつき試してみましたら、結果はあまり・・・。

「ハア、歩。ある条件の元、僕はあなたに勉強を徹底的に教えましょう。」

「おお、ホントか？で、条件って？」

「バイトをさせてください。」

「え？ああ、まあ、それくらいなら「駄目です！！」「セラ？」

「臆、まさかあなた・・・。」

「早速始めちゃってますか!」

『で、どうしましょう七実。僕は唯バイトがしたいだけなのに・・・』

『普通のバイトにすれば良いじゃない。危ないから駄目なのでしょ』

『だから、ごみ拾いって言ったじゃないですか。』

『ごみって社会に蔓延ってる人間のごみ?』

『はい。』

『必殺仕事人?時代が違うわ。』

『・・・お金でも家にぶち込んでいきますか?』

『鼠小僧はこちらの損が遥かに上よ。やめておきなさい。』

『・・・お供二人引き連れて全国旅しながら悪い人を懲らしめますか?ボランティアです。』

『無理よ。私たちの体力では黄門様にはなれない。』

『・・・いつそのこと政府を乗っ取ってこの国変えますか?』

『やめておきなさい。どうせすぐ飽きるわ。』

『それもそうですね。』

ハア、どうしましょう。僕の暇つぶしはお仕事でしたから、暇なんです。たった一人の依頼主さんも最近は音沙汰無しですし、暇で暇でしようがないんです。

『それより、悪刀『鏢』どうするの？ずっとあの人に盗られたままよね？』

『あー、そうでしたね。僕は兎も角として七実はあれがなければ困りますよね？実際に今の七実さんと悪刀『七実』の場合、悪刀の方が強いでしょう？たとえ、生かされている状態であっても。』

『・・・そうね。確かに、屁理屈などを無しにして客観的に見ればその通り。あの状態の私は弱点も隙もないですから。』

『ですよ。万が一、僕が死んだ時、主に接近戦を多用する七実では、死亡率が半端ないですからね。』

僕の戦い方は、雑魚の相手や様子見する場合は接近戦です。まあ、楽だからというのもありますが、本気でやるとしたら、僕の中へ遠距離での音によって相手を何の抵抗もさせないまま倒す戦い方です。もちろん、鋼糸、ピアノ線、アリアドネを使ってより遠くの空気を振動させ、木っ端微塵にするというのも可能です。僕の最大の声が届く距離は1キロぐらいですが糸を使うことによって、県を跨いで攻撃することも可能です。・・・糸に声を集中的に当てれば、ですが。振動によって起こる衝撃波は結構バカにできませんよ？音だけでもコンクリ破壊するくらいじゃないです。分かりやすい例でいくと、某美食四天王のあの人です。知ってる人、いますよね？

一方、七実は近距離特化です。唯一使える遠距離技は忍法『巻菱指弾』だけの筈です。まあ、近距離特化にあることに変わりはありません。その上、馬鹿力ですし。なので、一発でも貰ったら即アウトなこの体で、戦うのは非常に危険です。・・・もらう可能性は僕よりも格段に少ないですが。まあ、これは経験の差でしょう。実際あっちの方が長く生きてますし。確か年齢は『臃?』

『はい?』

『それは言わない方がいいわ。』

『?そうですか。分かりました。で、結局どうしましょう?悪刀はやはり無ければ困りますよね?』

『そうね・・・あの死神にでも頼んでみる?』

『最近死神やめてこちらに来るそうですよ?何時か知りませんが。』

・・・弱りましたね。僕たちの方からヴィリエにいくわけにも行きませんし・・・というか行けませんし。話し合いしかないでしょうか?この前の件は言ってしまうえばあちらの勘違いみたいなものですし、あの人の性格なら十分可能でしょう。問題は、いつ来るかです。タイミングが分からない限りこっちらからも出向けませんし、弱りましたね。

『臃の知り合いにそういうことが出来る人、いませんか?』

『いませんね・・・、殺人鬼集団なんかあてにも出来ませんし・・・、ハア、しょうがないですね。僕は死なないようにするためにしば

らく戦闘・近接戦闘を控えましょう。やるとしたら相手の届かないところから一方的にやります。』

『エグイですね。』

知ってますか？鋼糸ってチェーンソーにもなるんですよ？振動させてやれば。フッフ、ジェイソン、いいですねジェイソン。すぶらったーです。

『さて、今後の方針も決まりましたし、そろそろ。』

『そうですね。じゃあ。』

ふう、今何時でしょう？・・・結構時間が経つって早いですね。もう、晩御飯です。

「ユーのためならなんでもするぞ。」

・・・話に付いて行けません。いや、当たり前です。何も聞いていなかったんですから。七実、七実。

『はい？』

『話の内容、分かりますか？』

『相川さん以外のゾンビについてです。』

『ああ、あれですか。・・・七実はあれに勝てる自信ありますか？』

『あの霧がなければ。あれがあると攻撃が当たりません。あれには』

臙が当たった方が得策でしょう。』

・・・仮にも一回僕を殺した人をあれ扱いしてはいけませんかね？
いや、良いはず。名前知らないもん。

『ですが、仮に相手するとしたら、町の一つや二つ、潰しますよ？』

『その前に、臙の音攻撃・・・音撃は悪刀がなければ耐えられない
筈でしょう？』

お、音撃って・・・。ネーミングセンスが良いのか悪いのか・・・。

『ああ、あれですか。僕がしっかり範囲外にいれば問題はありません。
それに、近づかれたらそれに対応して、こつちを接近戦をやれば
それでなんとかなるでしょう・・・不意打ちはやばいかもです
けど。』

まあ、ネオの反射神経があるから問題ないでしょう（あ、マトリックス
の事です）。ああ、因みに僕が死んだ日、何故アレを喰らった
のかというと、アリエルとの戦闘に集中しすぎたのもありますが、
単純に視えなかったからです。次回からは気をつけますが。

『私も似たような状況でやられましたね。いきなり真っ暗になれば
びっくりしますから。』

『ですね。さて、僕は戻ります。ちょっと、ユーに聞きたいことも
ありますし。』

何が聞きたいか？別に付き合っていたとかそんなのではないです。
ただ、僕もあのゾンビの話の昔に聞いていましたが、その時からず

つと気になっていました。

「ユー、一つ聞いても良いですか？」

突然会話に入ってきた僕に歩たちが驚いています。別にいつ入ってきてても良いじゃないですか。

『何？』

「その人、ユーにとってどういう存在ですか？」

シーン。

「臃……お前まさかユーの事……。」

「聞き方がいけませんでしたね。変えます。その人物は、ユーにとって大切な人物でしょうか？その人から守る、ということはその人を傷つけるということと同意です。ましてや、僕は敵対した人物は確実に『殺します』。ええ、確実に。この世に一変のDNAも残すことなく殺します。その人は、ユーにとっては殺されてもいい人ですか？」

「……正直、こんな事、聞くまでもないんですけどね。ユーは優しいですから。」

そして、やはり黙っちゃいましたか。これも、予想通りです。

「無理に答えなくていいです。答えられないこともあるでしょう。でも、一応言っておきます。その人物が僕にとって敵になりうるなら、ユーが何を言おうと、僕は殺します。」

それが、昔ほんの少しだけでもお世話になった人たちへの礼儀ですから。

『わかった。』

ハア、今日は少しきついことを言いすぎちゃいましたね。

ですが、僕はその人物が望んでいることが良く分かります。恐らく彼は……

『ユーに殺されたいんでしょうね……』

ハア、ちょっと疲れました。明日は休みですが、今日は早めに寝ましょう。お休みなさい。

『……ホント、嘘をつくのが下手ね。』

うるさいですね……。

第12話 夏だ！！海だ！！テストだ！！・・・まったく関係ないですね（後書

朧「あとがきコーナー！！」

フレイ「イエーイ！！今日はテンション高いねー！！」

朧「いえ、普通です。」

フレイ「嘘！？まあ、いいよ。でさ、何？最後のアレ。朧が珍しくキツイ事言っただと思っただら全部嘘なの？」

朧「半分嘘です。敵対したら殺すのは本当です。僕が依然お世話になった人たちがそうでしたから。」

フレイ「なに？零崎？この世界にいたの？」

朧「ザツツライト！！いました。この小説には出ませんけど。」

フレイ「へー。んじゃ！予告言ってみよう！！」

朧「えっと、次回は・・・」

遂に来たりしテスト！！はたして朧の成績は・・・？

そして、謎のトンこつラーメン女現わる！！

徐々にユーに魔の手が迫る！！

と言った、支離滅裂な予告ですが、まあ、なんとなくわかるでしょう。

フレイ「そういえば海に行ってたね。本当ならあそこでトモノリと会うはずだったんだけど……。」

朧「すみません……。僕のせいですね。僕がこんな顔に生まれたばかりに……。」

フレイ「ま、まあ、しょうがないんじゃないかな？うん、そうだよ！！」

朧「……そうですね。過ぎたことはしょうがないです。では

」

朧・フレイ「最後まで読んでいただきありがとうございます！

！感想等お待ちしてます！！」「」

フレイ「なんか最近、最後に七実の締めで終わってない？」

朧「気のせいですよ。」

七実「狙ってやっているに決まってるじゃない。」

朧・フレイ「うそ！！？」

七実「ほんと。」

第13話 結婚は計画的に

どーもー皆さん。臃です。今日は待ちに待った・・・別に待っていないですが、テストです。土日は歩が必死で詰め込んでましたね。僕はのんびりアニメでも見てました。いや、正確には僕の視界にアニメは入っていましたが、僕ではなく七実が見てました。刀語です。七実曰く「完成度が高い。」そうです。僕はというと、アニメを視界に入れつつ、ハルナとユーとヴァイスをしてました。皆さん、腕を上げていましたが、まだまだ僕には勝てませんね。セラは歩の勉強を教えていました。大変そうでしたね。

で、今日はさっきも言いましたがテストです。確か今日は・・・数学？、現代文、英語でしたね。・・・楽勝です。英語？現地で学んだ僕を舐めてはいけません。現代文？僕は日本人ですよ？解けない筈ないじゃありませんか。数学？？途中式なんか書かずに答えだけ書いてやりましょう。

というわけで、レッツ・テスト！！

「（と、思っていた時期が僕にもありました。）」

数学？は問題ありませんでした。楽勝すぎて40分も時間が余りました。が。がですよ。現代文が問題です。普通の小説なら問題ありませんでした。ですが、この問題、恋愛小説なんです。ふざけるんじゃないませんか！！何テストでこんな文出してるんですか！！しかも周りの皆さんはよゆうって顔で解いてますし！！

『七実！！ヘルプミー！！！！』

『ハア、しょうがないわね……。それは（ア）で、これは（ウ）よ。』

た、助かりました。思わぬところに伏兵でした……。ハッ!? これはまさか孔明の罠!?

『たぶん、あわわもはわわも関係ありませんよ?』

『ですよ。クソ、あの教師め!!!』

現代文は七実のおかげでなんとか切り抜けることが出来ました。次は英語です。これに関しては七実はまったくあてにできないので、僕自身で頑張ります。

「（と、言ってもやはり楽勝ですね……。僕にとっては日本語も英語も大して変わりませんし。）」

というわけで、すらさらと解いた訳です。

さて、テストも終わりましたし、帰りましょうか。……が、はつきり言いましょう。

力尽きました……。

『軟弱ですね……。』

『やかましいです……。しょうがないでしょう? まともに授業受けたの、初めてなんですから……。』

セラに迎えに来てもらいましょう。でなければ、僕は、帰宅の途中で、野垂れ死にます……。とりあえず、電話しましょう……。

「あ、もしも「うつさい!!死ね!!」……さようなら。」

僕、なにかしましたっけ?あれですか?ヴァイスでぼこったからですか?要するにユーも同意の上ということですか?よろしい。ならば、死にましよう。

プルルルルルッ

な、何でしょうか?(首を鋼糸で絞めてる。)

「もしもし?ちよつと今、首絞めるのに忙しいんで、用件はあなたが死んでからお願いします。」

「臍!?!ちよつと待って下さい!!死ねは誤解ですから!!間に受けないでください!!」

あー、この声はセラですか。何やら必死ですね。

「誤解ですか?なら良かったです。で、用件ですが……迎えに来てください。」

「……は?」

「力尽きました。立っていますが、たぶん、校門で力尽きます。ですから、迎えに来てください。あ、嫌ならいいですよ?」

「わかりました。迎えに行きます。」

待つこと五分。何やら騒がしくなってきました。早かったですね。。。

「相川！」

・・・織戸が鼻息を荒くして興奮してます。セラが来たからでしょうが、下心丸見えですよ？ちなみに、僕の状態ですが、机に伏せてぐったり、それはもうぐったりしてます。栗須先生に「送ってつてやるうか？」と言われましたが、さすがに送ってもらいすぎなので今回はセラ、というわけです。

気配からしてセラが教室に入ってきたので、顔を上げます。

「臃、迎えにきました。」

「あ、ありがとうございます。。。」

「・・・大丈夫ですか？」

「・・・きついです。」

「立つことは？」

「ぎりぎり可能です。」

「ぎりぎり、ですか。。。。臃、少し待っていてください。歩、ハルナから預かりものです。」

「お前が、わざわざ弁当届ける為に来てくれたのか？」

「いえ、これはついでのついで、です。」

「ついでのついで？」

「臙のついでと、旧友のついでです。」

先ほどから集まっていた嫉妬、憎悪の視線が増し増しで僕に集まりますが、はっきり言って今そんなこと気にしている余裕が全くありません。そんなの僕に当てるだけ無駄ですよ。

「では、臙。行きましょう。」

そう言っ僕の手を持ったと思ったら背中に持って行かれました。俗に言う、おんぶです。

「セラ、俺も一緒に帰っていいか？今日はもう授業がないんだ。」

「何故私？」

と、聞いたセラに歩は耳打ちしています。・・・気配で分かるだけです。

「この時間に一人で帰れないんだ。引きずって貰っても構わない。頼む。」

あ、セラが歩の顔をグイツと押し戻しました。

「ですが、すでに臙がいます。」

この誤解、解いてくだ、さ、い……………」

「わかりました。」

「誤解って何か誤解してるか？」

「なあ、相川あ、鑓い……セラさんもそうだが、ハルナちゃんやユウちゃんも、美少女ばかりとどうやって知り合ったんだよっ!!」

……この質問、僕は答えるべきですか？というか、織戸、僕、何気によばいんですが？ちよつと抗体というか生命力が病気に押され始めたんですが。

『死なないでくださいよ？私も困りますから。』

死ぬ気はありません……………死にそうですが。これ、死んだら死因・病気&織戸で良いですよね？……織戸に殺されたとか真面目に嫌なんですけど。僕がいままで殺してきた人に失礼に値しちゃいますね。

「ごちゃごちゃ、歩が説明してますがあつちは信じる気が無いようです。ホントの事なのに……………たぶん。」

……あ、なんか河が見えてきました。赤い髪の死神っぽい人が緑髪の小さい人に説教されてますよ。ほほえましいですね。

「……………ハッ!？」

「臆？どうかしました？」

「今、河が……………」

「昨日のクイズ番組」

「っ!?!五月蠅いです!?!私は急ぐので付いてこないください!?!」

廊下をかなりのスピードで走ってます。どうでもいいですが、突然走りだしたことによって、歩の胸に巻き付けておいた糸・・・スノーホワイトですが、見事に首にずり上がりました。ですが、生憎今の僕にそれをなんとかする力も気も無いので放置です。死にはしないでしょう。大丈夫。

「臃!!無事ですか!?!」

「・・・きつい、です。」

今にも意識がシャツトダウンされそうです。死んだら、七実が代わりに出てくるはずですけど、それはそれで問題になりそうですからね。あの人、TPOの概念が無いのでしょうか?

「急ぎます!?!」

ありがとうございます。セラがスピードを上げるだけ、僕は助かり、歩は苦しんでいきます。

それから、セラが頑張ってくれたおかげで、僕は無事に自室の布団の中にいます。歩?玄関に入るときに僕は拘束を解きましたが、どうなっているかは知りません。たぶん、放置でしょう。で、僕の横にはユーが正座で額に乗せたタオルを取り替えてくれています。持つべきはやっぱり親友ですね。こういう時にとってもありがたいです。

「すみません、ユー。僕が病弱なばかりに……。」

『それは言わない約束でしょ?』

……常套句で何を言っているのでしょうか? まあ、感謝です。

『臃 病気はホントに治らないの?』

ん? 唐突ですね。前にもクリスに同じ事聞かれましたね、そういうえ
ば。

「治りません。」

『試したの?』

「はい、試しました。結果、無理でしたよ。一億個の病気を治せる
人は誰も、いませんでした。」

それはもういろんな人の所に行きました。でも、治せる人は誰もい
ませんでした。まあ、元から諦めてますけどね。

『辛くない?』

「慣れました。初めて出会った時も言ったでしょう? 慣れれば気に
ならなくなるものです。常に死が付き纏いますが、死とは長年付き
添った友人みたいなものです。僕にとっては、ね。」

『臃は 死にたいの?』

……そういう質問がきますか。何気に初ですね。

「ユー？何を恐れているのですか？」

まあ、それ以前に何か、ユーは怯えているんですね。どうしたのでしょうか？

『彼は 死なくなつて変わってしまった。『死』こそ安楽と考えるてしまうようになった。臃も そうだと思つて居るの？』

・・・なるほど。

「僕と、その『彼』という人の考えは真逆ですよ。」

『え？』

「死こそが安楽？確かに、死ねば楽になれるでしょうね。ですが、死ねば終わりでしょう？何かあるのですか？死んだら終わりですよ。何もかも。喜怒哀楽、全て無くなります。」

僕はね、ユー。生きて居ることの方がずっと価値があると思つてます。昔は死のうとか死にたいとか思いましたが、ここまで生きて居てどうです？ユーやセラ、ハルナ、そして歩に会えました。死んでいたら絶対に会えませんでした。死んでいたらこんなに楽しい思いも出来ませんでした。死ぬより、生きていた方が良いに決まつてます。生きていれば例え死にたいと思つてしまふほどの状況でも、解決方法や救いがあるかもしれません。死ねば、楽にはなりませんよ。何もないですから。おっと、話がずれましたね。つまり、僕の考えは死ぬより、生きて居る方が良いということです。」

そして、この持論は、七実とも違ふんですね。

『ええ、違います。確かに、皆さんが死なない方が良いと言っているので死なない方が良いでしょう。しかし、それは結局、死ぬ本人が決めれば良いんですよ。死んだ方が良いのか、死んだ方が悪いのは、死のうと思っっている本人にしか分からないことです。』

だそうですよ。僕はそれを否定しません。ユーの言っている『彼』も否定しません。この手の話題は人が100人居れば100通りの答えがありますから、否定したところで、自分の意見を貫き通そうとしたところで、無駄なんですよ。死ぬ人は死ぬ。生きる人は生きる。死にたい人は死ぬ。生きたい人は・・・どうでしょうね。少なくとも死にたいと思っっている人よりかは、精神論で長生きするのではないのでしょうか？ただ、僕は何が何でも生きると言うだけの話。

『それで良いのでしょうかね。所詮人は人、自分は自分で、自分の思っている意見を持つていればそれで良いでしょう。あなたも、私も。』

ええ。

『よかった 臃は今も何も変わらない。』

「変わらないのも、致命的ですけどね。まあ、よかったならよかったです。ですが・・・まあ、その『彼』が言いたいことも、良く分かるんですけどね。」

まあ、本当に周りが変わって行って、自分だけ変わらないのは辛いですからね。・・・僕も、生まれてから何も変化してませんね。あー、強いて言えば、守りたいものが出来たという点では変わったのかもしれませんが。ユーに会う前は、本当に何もなかったですからね。そう考えると、ユーに出会って僕の人生は始まったようなもの

ですね。なるほど、ユーが全ての始まりですね、僕にとっての。

「ユー、すみません。僕は少し寝ます。」

『お休み。』

・・・ZZZ。

あー、因みに、こんな具合で、何故か絶不調が火、水と続き、テストは保健室で受けました。難儀ですね。二度あることは三度ある、と言いますが僕の経験論ではそれ以降ずっとあります。二・三度殺されかけた？二・三度隕石が降ってきた？がっかりしてください。もっとありますから。と、まあ、こんな風に何故言っているのかというと、木曜である今日も何故か、絶不調とは行かないまでもそこそこ不調です。・・・メガロに襲われたら取り合えず音では攻撃できませんね。それに『線』と『点』も視えませんが、というか、視界がぼやけてますから、中々ピンチですね。しかも、今日は嫌な予感がします。こう、メガロがいっぱい出てくる感じですよ。歩もメガロが大量発生していると言っていましたし、一匹みたら三十四匹はいると思って行動しましょう。ゴキブリと同じです。

『臆がそう思ったら、絶対それが起こるのだからそんなこと考えては駄目よ。』

『僕、そこまで不幸体質ですか？』

『中々に。』

で、現在は最後のテスト中です。理科、保健、家庭科です。余裕のよっちゃんです。あ、古いですね。保健室でテストをするメリットはなんと言っても、終わったら即寝れることです。ベットで。さすが保健の先生こと高良先生です。

「鑓君、テストの出来はどお?」

「終わりましたよ。デキは完璧です。ええ、出来たんですけど、体調が若干芳しくありません。」

「あ、そうなの?ちょっと休んでく?」

「はい。」

・・・嫌な予感というか、さつきからメガロの気配がびしびし来るんですけど。しかも、かなり多いんですけど。え、これ、歩ただけでなんとかできますか?偽と言えど、戦いの基本は数ですよ?たとえ実力はこっちが上回っていても、数に押しつぶされますね。いやー、参った。・・・マジやべえ。どうしよ。

「先生、ここに栄養剤ありますか?」

「あるけど・・・、飲むの?」

「はい、オロナミンGとリポビタミンBをお願いします。」

ちよつと焦ってます。どのくらいか?僕の中では悪刀が未だに盗まれたまんまと言つぐらい焦ってます。あわわわわ!!・・・失礼、取り乱しました。・・・ホントに駄目ですね。一旦落ち着きましょ。スウー、ハァー。よし。あ、栄養ドリンク、ありがとうござい

ます。じぎゅじぎゅ、ふう。

「では、僕は家に帰ります。ありがとうございました。」

「いえ、お大事に。」

んー、どっちかな？こっちかな？あっちかな？まあ、感覚にしたがつて行きましよう。らしくない？元々メガ口の搜索なんて勘ですよ、勘。なんとなくわかるぐらいですから。ユーやハルナは正確に分かるようですよが、良いですね。それは兎も角、んー、この方角は・・・駅の方ですね。さ、行きましよう。今回はやばそうなので空を跳んで。

着きました。うじゃうじゃいます。・・・クラゲが。キモツ！！？何アレ、うねうねしてる！？うねうねしてるよ！！

しかも、ハルナと歩捕まっちゃってるよ。・・・どうしましょ？歩は兎も角、ハルナは助けないと拙いですよね。・・・でもなあ・・・今僕、音出せないから、拙いですよね。

ん・・・？この匂いは・・・豚骨スープ？・・・あー、今回は出番なしですね。なんか金髪の吸血忍者が豚骨スープをひたすらメガ口に掛けてますね。それで、メガ口が消滅していきます。中々、滑稽ですね。写メ撮っておきましょう。

「臃、何しているのですか？」

「あ、セラですか。いえ、メガ口が豚骨スープぶっ掛けられて消えてくなんて滑稽なこの状況を記憶媒体に保存しておこうかと。」

「なるほど、確かに滑稽ですね。・・・体調の方は大丈夫なのか？」

「体調は一時的に大丈夫です。ま、あと一時間もすればまたぶつ倒れますね。その時はよろしくです。」

「お任せを。そろそろ合流しましょう。」

「ですね。行きましょう。」

「ようう、奇遇だな！セラフィムも元気にしてたか？」

・・・またこれは元気な人ですね。その元気を三分の一で良いから僕に分けてほしいです。

「セラ、この子と知り合いだったのか？」

「ええまあ・・・。」

「一体何者なんだ？」

「名はメイル・シュトローム。吸血忍者ですが、私とは敵対している派閥の人間ですよ。」

ということとは、革新派ですか・・・。フッフツ、此処で会ったが百年目。革新派には貸しがあります。何かって？随分前になります。僕書類仕事していたでしょう？あれ、多すぎるなーと思って後で調

べてみたら革新派の仕業でした。嫌がらせ？YES！あの糞つたれども！俺が任務ボイコットしたから嫌がらせに大量の書類を送りつけてきやがってたんだよ！！んんっ！失礼。

「そつえば・・・吸血忍者同士で争ってるんだっけ？」

どうやって、責任取らせましょう？虐殺？殲滅？絶滅？いや、絶滅は駄目ですね。

「アユムー、もうメガロも倒したんだし・・・帰ろ？」

よし、間を取って殲滅で行きましょう。革新派の。元々、ユーの害にしかならないような連中ですので。

「俺が革新派でセラフィムが保守派だな！」

「アユムー聞いてる？」

「メールさん、ちょっと革新派のお偉いさんに言伝頼んでいいですか？」

「え？ああ、良いぞ！」

「色白さんも聞いてる？」

「では・・・『死神』が貴様らを殲滅してやるから首洗って待ってな、と伝えてください。」

「」「」「は？」「」「」

「色白さん？」

「ちよ、ちよつと待てよ！！なんだよ『死神』って？」

「歩、死神とは、成功率が必ず100%で任務を達成する吸血忍者の目標とする人物です。その死神が何故……。」

「僕が、その死神です。革新派のお偉いさんには借りがありましたね……、フッフ。」

「「えっ！！？」」

「ほ、本当ですか！臍！！」

「はい、ですが、今はそんなことどうでもよくてですね……、では、お偉いさんにそうってもらっていいですか？」

「おう！首を洗って待ってるって死神が言ってたって言えば良いんだな。任せとけ！それよりも、サインくれない？」

「わ、私も……。」

「……なんかあっさり、承諾されましたね。あれですか、バカな子ですか？」

「色じ」

「すみません、サインは承ってません。というか、僕のサインにそんなに価値はないですよ？」

「吸血忍者の中では超レアも」

「もっつ、アユムも色白さんもバカッ！あたしを無視すんなよなっ
！！」

ドンツ×2

「「え？」」

・・・現在の僕たちの立ち位置を確認してみましょう。まず、メイ
ルさんの目の前に歩、で、斜め前に僕、で、僕の前にセラ・・・っ
て先まで後ろにいませんでしたか？あ、サイン云々の時に移動して
ましたね。図ではこんな感じ

？

アタック！？

？

ですね。

さあ、皆さんおわかりでしょうか？今の僕は目の焦点も合っていな
いふらぶら状態、歩はいくらゾンビといえど、いきなり押されれば
倒れるでしょう。よって・・・

歩はメイさんを押し倒してそのまま接吻・・・キスをしました。

因みに僕は、押し倒すほどの体重も力もないので普通にセラに受け
止められました。・・・ですが、こう、以前感じた事のある感触な
んですよね。こう、むにゅうんて言いますか。あれですか、デジャ
ブ。違いますか？

「ん・・・お、臍？」

「あ、すみません。って、歩は・・・」

あーあ、やっちまいましたね。

「セラ、これは・・・。」

「うわあ。」

・・・歩君、大人しく結婚しましょうか？

「で、いつまで私はこうしていれば？」

「え？僕はすでに離れようとしていますけどセラが・・・。」

「で、いつまで私はこうしていれば？」

「・・・好きなように。」

・・・とりあえず、赤飯でも炊きますか・・・。

第13話 結婚は計画的に（後書き）

朧「あとがきコーナー……。」

フレイ「む、テンションが低いよっ！何やってんのー!!」

朧「いや、さすがにアノ状態で本編終わったんすよ？ふらふらっす。」

フレイ「最近、セラが妙にデレてきたね。」

朧「デレ、ですか？そんなことないと思いますよ？」

フレイ「これだから鈍感は！！まあ、そんなことより……。」

朧「はい、作者からの結構大事な質問ですね。最近、歌詞の無断転載が云々言われてますが、第6話のカゴメカゴメはどうなのか？と言うのですね。」

フレイ「アレってどうなのかな？昔からある歌だし……アレの権利者っているのかな？微妙だね。」

朧「なので、ここは読者の方に聞くことと思っただら幸いですよ？アウトだったらあの辺は大々的に変えるそうです。」

フレイ「ま、そんなとこだね。んじゃ、次回予告言ってみよー!!」

朧「えー、今回は……」

歩に誘われ、ゲームセンターに行くことになった朧！楽しい時間を過ごしていたがそこに・・・。

ですね。」

フレイ「じゃあ、今日はここまで！」

朧・フレイ「最後まで読んで頂きありがとうございました！！感想お待ちしております。」

フレイ「そう言えば、第12話の予告を見事に無視したよね、最後の部分だけど……。」

朧「確かに、駄作者にはお灸を据えなければいけませんね。」

駄作者「ひいひい!!」

第14話　なんか最近シリアスな会話が多くないですか？

皆さんこんちわっす。臃です。毎回毎回この下りも飽きてきましたね。まあ、それは良いとして、なんと歩はまだ年齢が足りてないというのに、違法な結婚をしてしまいました。犯罪者ですねー、どうしましょうねー。因みに僕は何故かセラに頭を拘束されたままです。苦しくはないですけど。なんか、こう、きつくもなく、優しくもなくという感じですね。

しかも、なんか頭をうつすら撫でている感触があるのですが、これいかに。ほかつとけばいいのでしょうか？好きなようにさせておけば良いのでしょうか？そうしましょう。

「アユムの変態！！ハートキャッチエロキュアが！」

質問。今どういう状況ですか？辛うじて歩とメイルさんがキスしたのは見えました。僕の世界は未だに真っ暗です。・・・まあ、感触は心地良い感じですが。んんっ、話が逸れました。とりあえず、セラに好きにさせつつ状況確認に精を出しましょう。まず、首を回さねば、グググッ、お、見えますよー、ハルナがダツシュしてどっかに行ってしまったね。で、セラは明らかに侮蔑を含んだ目で歩を見ています。というか、ハルナさん「枯れちゃえケダモノ！！」は良いのですが、これ半分、というか8割方ハルナの所為ですからね？まあ、気持ちにはわからなくてもないですが・・・。

「歩・・・あなたは軽薄すぎます。吸血忍者にとって異性との接吻は婚儀の際に行うもの。あなたはメール「シュトロームを愛してい

るのですか？」

んなわけないでしょう。今さっき会ったばかりの人を愛せるなんてそんな、テレサさんじゃあるまいし。どこの聖人君子ですかという話になります。・・・が、今回はそこまで単純な話でもないんですよ。なにせ、頭の固い吸血忍者の掟なのですから。ホント、めんどくさい種族ですよ。私情を挟む余地もありません。

「いや・・・別に・・・。」

やっぱり、そうですね。・・・少し、歩と話をしていきましょうか。

「セラ、ちょっと歩とお話していくので、先に戻っていて貰えますか？」

「・・・分かりました。」

僕が今からするお話は吸血忍者には聞かせれたものではありませんから。

「で、歩、お話というのは・・・。」

「「「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい」」」

・・・ひょっとしてOHANASIと勘違いしてます？

「いや、普通に僕からの話なんですから聞いてください。」

「じゅめっ、あ、そうなのか？分かった。」

「では・・・まず、婚儀がどうのこうの言っていました。歩は認める必要はありませんよ。」

「ま、まあ、それはそうだが・・・。」

「あっちが例え、妻だの夫だの言ってきたとしても流して下さい。どうせ、綻を破らないために結婚するだけです。ですから、あっちは結婚した気であるかもしれないませんが、歩はそんな風に思う必要ありません。友達・・・もしくは親友みたいな感覚で十分です。ですが、もし、歩が異性としてメール・シフトルームを好きになったのなら、その時はちゃんと結婚してあげてくださいね。」

「・・・ああ、分かった。」

「よろしい。では、僕も帰ります。」

まっすぐ歩き、建物と建物の小さな隙間に目を向けます。

「で、セラは帰らないんですか？」

「やはりばれてましたか・・・。」

当然。

「ハア、盗み聞きはいけませんよ？」

「ですが、臍は体調が芳しくないのでしょうか？」

「・・・ああ、そうでしたね。まさか、そのために？」

「はい。」

「・・・タイムリミット1時間まで、まだ結構時間があるのですが・・・」

「・・・まあ、ありがとうございます。そして、すみません。聞きたくもないものを聞かせてしまって。」

「いえ、・・・確かに吸血忍者にとって耳の痛い話でしたが・・・、あれが臆の考えですか？」

「はい、掟が理由の結婚など幸せですか？いや、幸せにはならないでしょう。たがいが想い合っているのなら兎も角、今回は全く違うでしょう。メイさんは掟を破らないため、歩は・・・たぶん認めないでしょうね。」

「・・・そう、ですね。」

「僕はね、セラ。吸血忍者が嫌いなんですよ。」

「・・・え？」

「掟という楔が無いと生きて行けない、・・・まるで自分を見ているようですから。同族嫌悪ってやつですね。」

そう、僕が生きているのは、たぶん、ユーたちという楔があるからですね。ユーたちをあらゆる危険から守るために、僕は生きているのだと思います。ユーたちがいなくなったら、とっくに・・・。

「どづいつ意味ですか？」

「さあ？さて、帰りましょう。早く赤飯を炊かないと。」

嫌がらせですよ。ささやかな。

「セラ」

私は、あの日、臙の秘密を聞いた時に臙の事が全部分かっていました。ですが、今日の臙を見て気付きました。確かに、臙は全てを話したでしょう。自分の秘密を。しかし、それは表面的な・
・能力的なものだけです。そこから臙の内面を予測することは可能ですが、所詮予測です。臙の内面は全くと言っていいほど分かりません。何を思い、何を考えているのかなど私では全く分かりません。
・・・・ヘルサイズ殿なら分かるのでしょうか？
・・・・？そもそも、何故私は臙の事をこんなにも考えているのでしょうか？さつきも衝動的に臙の頭を撫でてしまいましたし・・・。

「セラ、何を立ち止まっているのですか？早く行きますよ。」

「え、あ、はい。」

・・・今は考えない方がよさそうですね。

「臙」

家に着き、ユーの無事を確認してから、早速僕はお赤飯の政策に取り掛かっています。キッチンの扉はアリアドネ・・・僕はスノーホワイトと呼んでいます。正式名称です・・・でがっちり固定します。そして製作に取り掛かること・・・今何時でしょう？ま、まあ、とりあえず出来たわけですよ。

「歩、ハルナ、晩御飯出来ましたよー。」

さて、僕はこのお赤飯を居間に持っていかねば。

「・・・臃、これは？」

「お赤飯ですが？」

「・・・そうですか。」

？何か問題ありますでしょうか？

「臃、きた、ぞ・・・。」

「あ、来ましたね。ささ、座って下さい。今日は僕が作ったので口に合うかどうかわかりませんが「色白さんのバカー！！」ぐぶらっ！！？」

何が起ったか説明しよう！僕がぺらぺらと話していたらいきなりハルナに顔面ハイキックを喰らった！！いきなり、ということでもともな防御も出来ず、見事に吹っ飛び壁にめり込まんばかりに激突しました！よって！！

「・・・・・・・・（ちーん）」

「まあ、今のは臙が悪いな。」

「そうですね。悪ノリが過ぎてます。」

『臙が悪い。』

・・・すみません。悪い、悪い言ってくるのは良いのですが、こころで衝撃的な事実を発表します。

僕、死にました。

失礼、噛みました。死にかけてます。洒落になんねえよ、これ。骨逝ってる気がします。幸い、出血はないようなので、治りは早そうですね。不幸中の幸いです。

『ちょっと、これはやり過ぎですね。』

『まあ、僕が悪いのもありますけどね。』

『・・・そう。』

今、僕が最も努力すべき点は僕の状態を悟られることなく自然に自室へと退避することです。

「お、臙？大丈夫か？」

「ええ、大丈夫ですよ。あ、でも今日はもう限界なのでもう寝ますね。では。」

・・・どうです？成功しましたか？

「そうか、そういうえば調子が悪いつて言ったもんな。」

成功しました！！

「では、お休みなさい。あ、冷蔵庫にお刺身が入ってるのでそれ食べてください。」

まあ、さすがにお赤飯だけじゃ、ね？

自室に上がり、はい、せーのっ。

「がはあ！..！」

びちゃびちゃと口から結構な量の血が出てくる。あちゃー、予想以上の怪我ですね。

「うっ、っほっ、げはっ..！」

『大丈夫ですか？』

『な、なんとか。貧血起こしそうですけど。』

「がっ！..？」

びちゃ。

う、うきうき・・・、もう、血吐きながらでいいから寝ましよう。明日には治っているでしょ。

コンコン。

「!?!? な、なんでしょう?」

「……あれ? 気のせいですか?」

コンコン。

っ! やっぱり気の所為じゃあないですね。……この血、どうしましよう?」

「すみません、ちょっと今体調が悪いので」

言い終わる前にドアが開きました。詰みですね。ドアから現れたのは……ユーでした。

「ユー……。」

『臙 これは血?』

「はい……。」

『さつき ハルナの蹴りを受けた時?』

「ええ、まあ……。」

『無茶 しないで。』

「すみません……。安静にするために僕はもう寝ますね。」

と、寢床に向かおうとしたら何故かユーが先回りして、丁度枕の辺りにストンっと座りました。

「えっと、ユー？」

疑問形で聞いてみたらトントンと自分の膝を叩きました。・・・膝枕？

『嫌？』

「いえ、失礼します・・・。」

・・・何故に膝枕？よく分かりませんが、今の僕は貧血によって意識が朦朧としてるので、早々に意識を落としました。

翌日です。目覚めたらさすがに膝枕はなかったですが、何故か鎌の代わりに抱き枕にされてました。・・・どうしましょう？起こすのも悪いですし・・・仕方がないですね。ここは無駄に速い七夜様の身体能力で抜けるとしましょう。

・・・成功です。さて、この時間帯はハルナ以外はたぶんまだみんな寝てますね。そういえば、傷は・・・うん、治ってますね。

『おはようございます。』

『おはようです。早いんですね？』

『お互い様です。今日は朝ごはんを食べてください。』

『ん、そうですか、分かりました。』

・・・そういえば、昨日栄養ドリンク以外何も口にしてませんし、それ以前に三日ぐらい何も口にしてませんからねえ。いい加減何か食べないと駄目ということでしょう。・・・ご飯と納豆でいきましよう。

キッチンに行くと案の定ハルナがお弁当を作っていました。

「おはようございます。」

「あ、色白さん、おはよう。」

さて、冷蔵庫に納豆は・・・

「無いですね・・・。」

「ん、何が？」

「納豆が無いんですよ。」

「ああ、それ、弁当に使ってるから無いぞ？」

「・・・弁当に、ですか。」

「そつだ！栄養たっぷりだからなっ！！」

・・・哀れ歩。弁当に粘々は禁忌だというのに。

「色白さん、朝ごはん食べるのか？」

「ええ、まあ、そろそろ何か口にしないと駄目そうなので。」

「ふーん、じゃあこれ。」

と言って渡してきたのは……み、味噌汁？ま、まあ、ありがたく頂戴しておきましょう。

「ありがとうございます。」

ずずー、はあ、おいしいですね。白味噌なのが非常にグットです。飲み終わったので、早速学校に行きましょう。

「では、行ってきます。」

ふと、登校中にすこし気になったことがあるので七実に聞いてみましょう。

『七実、そういえば僕の魂と七実の魂はごちゃ混ぜになっていると言っていましたよね？』

『はい、ですが、それが？』

『いえ、ただ、僕と七実の人格というか両方を主人格にすることは可能なのかなと思ひまして。』

『出来ますよ？』

『マジッすか!?!』

『マジです。ですが、メリットもデメリットもあります。』

『それは何ですか?』

『メリットから言うと、私の能力と朧の能力が両方使えるようになります。例えば私の虚刀流を朧が使えるようになります。前にも言ったように基本朧が主人格になつてもらいますが、これをする、私の意識も朧とリンクして、一緒になります。』

『・・・つまり、一回は死んでも良いという保険が無くなると。』

『はい、それがデメリットです。で、これは別に良いのですが、声も私の声と朧の声がダブった感じになります。また、朧だけではなく、私も喋ることが可能になります。・・・説明はしましたが、これは悪刀が無い時は極力しない方が良いでしょう。死んだら文字通り終わりですから。』

『・・・確かに、メリットも大きいですが、悪刀無しでやった場合のデメリットも中々に大きいですね。まあ、悪刀使った場合そのデメリットが一気に無くなるんですね。四季崎さんはホント、すごいもの作りでしたね。』

『説明は終わりました。何か質問は?』

『いえ、特に。あ、学校に着きそうですね。では、二二二。』

『はい。』

・・・珍しく今日は体調が良いですね。はっ！まさか今日は最後まで授業を受けられちゃう感じですか！？よしっ、ならば、頑張らないとですね！！

無理でした。ですが、最高記録の4時限目まで生きました（誤字にあらず）。・・・体育の時間に歩と一緒に保健室に放り込まれました。ハア、楽しみにしていた高校生活だったのに、過ごしている時間が明らかに保健室の方が長いです。クラスの皆さんはお見舞いに来てくれるのでそこそこ仲は良いのですが・・・圧倒的に仲の良い男子が少ないです。アンダーソン君と歩ぐらいしか、喋れる人が居ないというか・・・何故か全校の男子の皆さんがこう、親の仇でも見るかのような視線なのですよ。しかも、最近一致団結してきたようにして、僕の恥ずかしい写真を撮って、ばら撒こうとしているようです（歩談）。

しかし、それは何故か断念したようです。なんか僕が気付いた時の会話なんですけど、「クソッ！こいつ隙がまるでありやしねえ！！」「なんでこいつは何しても女子にうけるんだ！！？」と、血涙を流しながら言っていました。・・・？僕を陥れて一体何がしたいのでしょうか？まったくの謎です。誰かー、脳噛さんのお宅の電話番号知りませんかー？

『あんなのが居たら今頃世間で話題になってますよ？』

『むう、じゃあ、毛利さんのお宅は？』

『実際、なんであの少年の活躍に皆さん気付かないのでしょうかね。』

『じゃあ、んー、あのなんとか一少年のお宅？』

『あ、すみません。それは知りません。』

おおつ、七実でも知らないモノがあるうとは！！

『まあ、冗談はさておき、七実は何故にそんなに博識何ですか？』

『いえ、ただ、あなたの記憶の中からアニメを漁って見ていたらいつの間にか。』

分かった！！皆さん分かりましたよ！！この人のキャラ崩壊がひどいと思ったらアニメの見すぎでしたよ！！やったね！！謎が一つ解きましたよ！！

『・・・何故か、不名誉な事を考えられている気がしますね。』

『気の所為ですよ。というか、僕の記憶を漁っていたのですか？』

『はい、あなたに気付かれるまで暇だったのであなたの前世の記憶からアニメを漁って見ていました。』

『・・・あそう。七実はおタクなる物ですか？いえ、別にそれに偏見とか嫌悪とかはありませんが、そこは、ほら、あなたにもイメージというものがあるでしょう？』

『安心してください。あくまで暇つぶしですから。そこまで深く拝見してません。私のイメージは保たれています。』

・・・もう十分ブレイクしてますけどね。キャラ。作者も「どうし

てこうなった……。」って言っていました。

『……また、不名誉なことを考えましたか？』

『いえ、なにも。』

『ブレイクしても良いではありませんか。知っていますか？主人格になっていない状態だと病気ではないのですよ？長年苦しんだ病気が無くなればハイにもなります。』

『そうですか。あ、そろそろ目覚めますね。』

『わかりました。……今日は嫌な予感がしますのでお気をつけて。』

アイアイサー。

さて、目覚めまして、まず最初に見たのは星川さんのあまりにも近すぎる顔でした。

「つつつ！?!?」

「……えつと、とりあえず、おはようございます。」

「あ、ああ、おはよう。」

……沈黙。

「え、あ、えつと、さ、さっきの事は、き、気にしないでくれ。」

「……ええ、まあ、分かりました。」

「た、助かる（しまったああ！完璧にイメージダウンだっ！）」

「ところで、前からずっと聞きたかったのですが……。」

「な、なんだ（まさか、私が好意を持っていることに対しての事が！?）」

「星川さん、あなた……。」

「あ、あなた？（これは本当にそうなのかつ!?)」

「人間ですか？」

「……は？」

「いえ、僕の勘違いなら良いのですが、どうもねー、匂うんですよ、化生の匂いが。」

これ、実は志貴くんが化け物を殺す時になんて言いますか、こう、察知するというか、見ただけで分かるという感じの能力です。本当なら殺人衝動が起きるのですが、それは根性で抑えています。世の中気合いつすよ、気合い。」

「……何のことだ？」

「なるほど、気のせいの様ですね。いやはや、よかったよかった。」

殺さずに済んでホントによかった。もし、アホな（革新派）吸血忍

者だったらその派閥だけ皆殺しにしていたかもですね。・・・冗談です（汗）。

「まったく、アニメの見過ぎだぞ?」

「ですね。ハハハ！少し自重しましょう。」

ですってよ、七実。

『アニメは暇つぶしには最適な文化ですよ?』

一体だれが、原作の七実がこの小説ではここまでブレイクするかと予想できたでしょうか?否!!僕は予想ができませんでした!!

「では、お大事にな。」

「ええ、ありがとうございます。」

・・・さて、帰りましょ。

『臃、まさか本当に気付いていませんか?』

『まさか、十中八九、人外でしょうね。何かは知りませんが、実力はそこそこありそうです。少なくとも、歩たちでは絶対に勝てませんね。あ、訂正します、魔装少女になった歩以外誰も勝てませんね。』

『臃も勝てるでしょう?』

『体力的な事を除けば、そりゃ勝てますよ。僕に勝てたら大したも

のですよ。』

『増長ね。ですが、今までの相手は二人を除いて皆さん、弱い方々ばかりでしたからね。』

『・・・まあ、そうですが、一応聞いておきますと、その二人とは誰の事ですか?』

『ちびっ子呑んだくれと、顔面刺青携帯ストラップ野郎の事です。』

『あー、確かに強かったですね。ですが、クリスとは模擬戦ですよ?・・・ストラップ野郎はマジで殺しに掛かってきやがりましたが、まあ、おかげで曲弦系の扱いを学べたので、良いのですが、明らかにハイリスクに比べ、リターンが少なすぎる気がしますけど。』

・・・ほんと、次会ったらどうしましょう?全力で逃げつつ、半殺しにしましょうか?殺してはいけません。あんな、殺人鬼集団を相手にしていたら日が暮れます。骨も折れます。リアルに。息も切れます。マジで。心臓にも悪いですし、出来れば会いたくないですね。・・・会うなら、あの妹萌えの変態兄貴が良いですね。僕の事を女性と間違えて声を掛けてきた人第一人目です。しかも、妹にならな　い　か?ですよ?驚きますよねー、驚きました。尚且つ、「個人的にはセーラー服を着てほしいですね。」ですよ。歩を上回る変態度です。あれで、長男なんですから世も末ですよ。うんうん。そつえば、しばらく見てませんね。まさか、逝きましたか?・・・無いですね。あの人、強いですし。

『臆、熟考するのも良いですが、着きましたよ?』

あれま、昔の同居人の事を考えていたらもう着きました。・・・今

度、あの変態に少し会いに行きましようか。

「ただいま戻りました。」

「お帰りなさい。今日は遅かったですね。」

「あー、ちょっと考え事しながら帰っていたものでして。あと、保健室で寝すぎました。」

「なるほど。帰って早々ですが、ハルナから一緒にゲームセンターに行こうと御誘いを受けましたけど、どうします？私とヘルサイズ殿は行きますが。」

うぐつ、ゲームセンターですか……。嫌な思い出しかないですねというか、ストラップ野郎に会ったのがそこです。確か……。道を聞いてきてお礼にギザ十貰ったのは良いのですが、そこから戦闘になり、まあ、色々あって何故か変態が助けてくれたんですよ。なんか、「新しい家族だ！」って言ってましたけど、僕は違いますよ。あ、考えが横にずれました。まったく、いてもいなくても迷惑な奴です。

で、行く行かないですが、まあ、行つときましよう。さすがに会わないでしょう。うん、たぶん、きっと。僕はあの人たちじゃあないんで、共鳴とかしないんで、分からないのですけどね。

「……わかりました。僕も行きます。あ、いえ、逝きます。」

「字が違うような気もしますが、分かりました。では、行きましよう。ヘルサイズ殿はもう先に行つてしまいましたから、私たちも。」

「まさか、待っていてくれたのですか？」

「ええ。」

「ありがとうございます。では、行きましょう。」

道中、特に問題もなく・・・いえ、セラには問題は無かったはずですが、僕はありまして、ゲーセンであいつに会った時の事を考えると胃が！胃が！！・・・まあ、今は京都に『いそつ』なので会わないでしょう！！ハッハッハ！！

で、まあ、無事について、周囲の確認をしたところ、ストラップ野郎も居ないですね。ふう。

「あつ！葉っぱの人じゃん！！」

・・・でも、やっぱり不安になりますね。

「お、臍も来たのか。って、どうした？そんなにきよるきよるして・・・。」

「え、いや、ちょっと知り合いの殺人鬼が居ないか探してました。いないようでー安心です。」

「・・・それはめっちゃ安心だな。」

ああ、ホントに。

「あつ、色白さんもいるじゃん！！よし！今日は私のおごりだ！！皆楽しんでくれたまえ・・・よな！！」

ハルナのおごりですか。よかった、僕、各種系以外何も持って来てないんですよね。

「ふむ、では歩。アレをやりましょう。」

「・・・おまえ、絶対にわざとだろ？」

「え？何がですか？あんな、『ゾンビをひたすら撃ち殺すゲーム』なんてどこにでもあるじゃないですか。」

「やっぱり確信犯じゃねえか！！却下だ、却下！！」

「なら、あれは？」

「太鼓の玄人が・・・よし、いいだろう。勝った方がジューズ奢りな。」

「わかりました。良いでしょう。僕に賭けを挑んだ事、後悔させてやります。」

さっそく百円入れて選曲を、ふむ、余裕を見せるべく、一番難しいのでいきましょう。

「・・・おい臆。お前ひょっとしてこのゲームの達人か何かか？」

「いえ、初です。」

「初でそれは無理があるんじゃないか？」

「歩はもっと簡単なので良いですよ？」

「……ほう、実はこのゲームが得意な俺に対して挑戦するな。い
いだろう、同じ曲でいってやるう。」

プレイ中

結果、僕、勝利。

「す、すげえ、あの曲をパーフェクトでクリアしやがった……。」

「神だ……。神が降臨なされた……。」

何時の間にやらギャラリもたくさんいますね。

「さて、歩。自腹で、僕に、ジュースを、奢って下さい。」

「……ああ。」

おや、歩が燃え尽きました。放っておきましょう。

「さすがですね、臆。」

「見てたのですか？セラ。」

「はい、すばらしい体捌きでした。」

「いえ、あれぐらい序の口です。……そうだ、セラも何かやりま
すか？相手がいないんですよ。歩はあそこで燃え尽きてますし、ハ
ルナは……どこに行ったのか不明ですし、ユーはUFOキャッチ
ャーに夢中ですし、相手がいないんです。」

「いいですよ。なら、あれでもやりますか？」

・・・ホツケーですか。

「いいですね。よし、やりましょう。」

結果、僕、勝利。ですが、危なかったです。楽勝ではなかったです。はい。

「強いですね。」

「いえいえ、セラも中々、強かったです。次、何やりますか？」

「ふむ、では、アレなんかどうでしょう？」

ゾンビを撃ち殺すゲームですか・・・。

「やりましょう。アレを歩だと思って。」

「ええ、私も同じことを考えていました。」

「ちょっと待てえー!!」

「おお！歩じゃないですか。どうかしたんですか？」

「ゾンビだって心はあるんだぞー！ほら、あのゾンビもひそかにゆっくり過ごしていたいはずだー!!」

チャリン x 2

「「いざー！」」

「息ひつたりですねえ!!」

「セラ、そちらに2匹行きました。」「大丈夫です、もう逝きましたから。」「さすが、つとお、ヘッドショットです。」「さすがです。」「む、ボスですね。頭を二人で狙い撃ちにしましょう。」「はい。」「もうやめたげてえええ!!」

ふう、ハイスコアです。

「楽しかったですね。」

「ええ、スッキリしました。」

「うう、我が同胞たちがこんな、こんな……。」

「お、葉っぱの人と色白さんじゃん。何やってるんだ?」

「あ、ハルナとユーですか。このゾンビをひたすら撃ち殺すゲームをやっていました。ハルナたちもやりますか?」

「ホントッ!?やるやる!」

さて、僕は……

「歩、喉が渴きました。」

「へーへー、分かりましたよ。何飲む?」

「B S S レインボーマウンテン。」

「了解。」

その後、歩にコーヒーを買ってきてもらい、飲み終わった後でハルナがプリクラを撮りたいと言うので撮りに行きました。

「そういえば、僕はこういうのは初ですね。」

「そうなのか？何でだ？」

「いや、ただ単に、一緒に撮る人がいなかったただけですよ。．．．いえ、いましたね。そういえば。」

変態ですけど。

「ふーん。お、撮るぞ。」

またまたその後、プリクラを撮り終わって落書きなりなんなりしました。

僕としては、ユーがとっても楽しそうなので、ここに来て良かったと思っと思っています。うん、ユーがこういう顔をするのは久しぶりに見ました。歩たちには感謝ですね。

落書きし終わったら、普通にゲーセンを後にしました。楽しかったですね。また来たいです。ですが．．．

『ええ、一騒ぎあるでしょうね。』

『何せ、こんなにも嫌な予感がしますから。』

まさか、マジであるストラップがこの辺にいやがるんですか？

「ユーは楽しかったですか？」

『臃は 楽しかった？』

「ええ、個人的にも楽しかったですし、楽しそうに遊ぶユーやハルナ、セラを見ているだけでも楽しかったです。」

『私も同じ気持ち。』

よかった。ユーも楽しかったようですね。

『本当に良かったですね。・・・いえ、悪いのかしら？』

『七実、空気読んでください。』

『空気を読んだ結果、此処はこういった方が良かった。』

勝手にしてください。

『（ですが、私の言ったことも実は当たっていたりするのですが（）』

「それじゃあ、またいつか来ましょうね。」

その時、ユーは本当に楽しそうに笑って頷いてくれました。

信号が青になり、前に歩きだしますがユーが付いてきませんでした。何事かと振り返ってみると・・・

「いいのかい？そんなに興奮して。」

いつか、僕の腹を突き破った人がいました。

『（さっぴ。じゅ。）』

といった、支離滅裂な予告ですが、まあ、何をするかは分かっ
てもらえたと思います。」

フレイ「これから箇条書きにしたら？」

臃「それで、良いのでしょうか？・・・ん？え？何？良いの？はい、
スタッフが良いと言っているので良いらしいです。」

フレイ「いいんだ・・・。」

臃「では、今日はここまでです。」

臃・フレイ「最後まで読んでいただきありがとうございます！
！感想等お待ちしています！」「」

フレイ「そういえば、この世界に零崎っているの？」

朧「いましたね。タグに追加した方が良いでしょうか？」

フレイ「……した方が良くもね。」

第15話 赤とは僕にとってはデッドカラーです

どうも……なんて言っている暇はないですね。何せ、緊急事態ですから。

というか、マジでやばいです。あの人、悪刀を持っていない僕では直ぐにとは言いませんが、持久戦に持ち込まれたら確実に死にます。七実はどうです？

『能力が分からない以上、何も言えません。』

確かに。

「偶然だ……。そう、偶然……。たまたまここを歩いていた。」

何かごちゃごちゃ言ってますが、そんなことより、逃走経路を模索しなければいけませんね。……メガロも、大量に来ていることです。って、マジで多いですよ!!?こんなことになるなら曲弦系持ってこれば良かった!あ、余談ですがこの糸、何故かいつの間にか僕の部屋に置いてありました。そんな謎めいた糸です。

「ぬいぐるみを持っているね。さぞ楽しかったんだろう。」

……仕方ないですね。疲れますが、全員を抱えて忍法『足軽』で逃げましょう。そうしましょう。

「それが悪い……。いつだってお前が原因なんだ。ユークリウツ

「……………」

「……さすがに今のセリフは聞き捨てなりませんね。」

「あああああっ！」

「ユーっ！臍、ユーを止める！」

「言われるもでもない。」

「そしてほら、君が今興奮したせいで、此処に居る全ての人間の運命が変わってしまう。これから起こることは、全てお前の「黙れ」……おや？君は確か殺したはずだったけど？」

「んなことはどうでも良いんですよ。それより、全てユーの責任？ハッ！寝言は寝て言わなきゃ駄目ですよ？ユーのどこが悪いのですか？楽しむことのどこがいけないと言いやがるんですか？」

「分からないのか？こいつが感情を動かすと近くにいる人間の運命」

「それがどうかしましたか？それが何故、ユーの所為になるんですか？人間、知らない何処かで他人に迷惑を掛けているというのに、それが全てユーの所為？バカ言っつてんじゃありませんよ。じゃあ、この前、僕が死んだのはユーの所為だと？」

「ああ、そつだ。」

「んなわけないでしょう。どの口がほざきやがりますか。あれは明らかに僕の注意不足ですよ。それがユーの所為とか笑わせないでく

ださい。思わず殺してしまいそうになります。」

「まあ、そう突っ掛からないでくれ。今はまだ早いんだ。まだ、薪が足りないんだ。そう、ユークリウツドの心を焼くには、まだまだ薪をくべなくてはならない。・・・君を殺せばユークリウツドは怒るかな？」

「!!..おぼ」

「僕を殺す？何を増長しているのですか？一回は殺されましたが、二回目は無いですよ？」

「ふっ、まあ、覚悟しておくんだね。」

そう言い捨てると、暗い夜のような霧が霧散して、あの男は消えました。

・・・さて、ここからが大変ですね。

「ユー、大丈夫ですよ。ユーは何も悪くない。」

ユーは今にも泣きそうな瞳でこちらを見てきました。少しの衝撃で壊れてしまいそうです。

『私のせい。私の所為で臍は殺されてしまう。』

「・・・死にませんよ。ユーがいる限り僕は。」

とりあえず・・・。

「歩、ユ一を頼みました。」

「お前は？」

「……逃げますが、僕は別ルートからです。歩は皆を連れて逃げて下さい。」

「別ルートって、なんだよ。お前だけ楽しようってか？」

「いえ、ぶつちゃけ、歩たちに着いて行くのは体力的に無理があるからですよ。」

「……わかった。死ぬなよ。」

「もちろん。ささ、速く行って下さい。来ますよ？」

「臆、どうかご無事で。」

「戦うわけではないのですが……。」

「ですが、ご無事で。」

「はい。」

「……行きましたね。」

『で、どこに逃げるんですか？』

『前方に向かって。』

『・・・不器用ですね。』

それほどでも。

とりあえず、限界でも超えてみましょう。

メガ口の群れにまつすぐ突っ込み、爪で死点を突きまくる。突くたびにメガ口は消えていきますが、いかんせん、数が多すぎる。

「十七分割・・・。」

本来は、一匹に使う技ですが、無理して複数体に使用する。無論、筋肉繊維はボロボロ、ピンチですね。

『七実、交代が早そうです。』

『・・・わかりました。』

声が使えないのが煩わしい。やっぱり、早く悪刀を返してもらいましょう。因みに、こうやって考えている間もしっかりメガ口・・・偽ですが、殺してます。其処らじゅうに死体がごろごろ。死屍累々ですね。

そんな時、頭に何か熱いものが降り注ぎました。

「って、あづづづづ!!?何!?なんですか!?!」

上を向くと、メイルさんが豚骨スープをぶちまけて・・・

あ?豚骨スープ?頭に掛かったのもまさか、そのスープ?

「死神、大丈夫か?」

「ギトギトです。それと、ちゃんと鑢臙という名前があるのでそこから呼んでください。」

「悪い悪い。で、鑢は大丈夫か？」

「なんとか。歩たちは逃げましたか？」

「おう、逃げてたぞ。」

「ならよかつ　　っ！？メールさん！危ない！！！」

「へ？わわ！！？」

ゴリラの偽メガロがメールさんに殴りかかる寸前でした。突然のことだったので糸で引き寄せることはかなわないと判断し、メールさん突き飛ばしましたが・・・

「あちゃー、選択ミスですね・・・。」

ゴリラさんのパンチをそのまま、もろに腹部に食らいました。

「ゴフッ！！！」

さすがゴリラ。パワーが半端ないですね。地面に数え切れないくらいバウンドしてます。

「鑢！！！」

ゴッ！ガッ！！グフッ！！！！ガシャアアン！！！！！！

.....どこかにぶつかったようね。

『あれ？僕死にました？』

『死にました。人を助けるのは良いのですが、自分の事も考えないと意味ないですよ？』

『すみません。』

どうでしょう？今の私は無傷ですが、さすがにあの量のメガロは.....

「臃！？大丈夫ですか！！？」

.....良い場所に吹き飛びましたね。.....いや、

「悪いのかしら？」

「臃？」

「あれ？そこに居るのは臃さんですか？確か死んだはずなのに。」

「.....あなたは.....ああ、連続殺人犯ですか。奇遇ですね、また会えてうれしいですよ？」

「私はちっとも嬉しくありません。」

「臃、大丈夫か！！？」

おやおや、タイミングがいいですね……。いえ、悪いですね。足
手まといがそろそろと。

「つつかなんなだよあいつら！！滅茶苦茶強ええぞ？」

「当然です。あなたはとても弱そうですし。」

実際、弱いですよ？臍に助けられていなかったらどうなっていた事
やら。

「あ？お前どこ中だよ！！」

メールさんが連続殺人犯さんの肩を掴みました。……。あ、ここに
いると巻き込まれそうですね。移動しましょう。

安全地帯まで移動した瞬間、巨大な竜巻が発生しました。死ぬわけ
にはいかない以上、無闇に戦闘もしたくないですね。

巻き込まれた、メールさんは制服がズタズタになり、膝から崩れ倒
れました。

「メール！おい！ユキ！トモノリ！」

……。あ、吸血忍者にはたくさん名前があるのですか。なるほど、
少し勉強になりました。

「アユム！来てる来てる！！」

……。ホント、草がわらわらと。いくら趣味だからと言ってやり過
ぎたら飽きてしまいます。その時、

「・・・凍っていますね。」

足元が何故か凍っていました。すぐさま氷を割りますが、どんどん凍ってきます。

「あはっ・・・やっぱり持ってるじゃないですか　　アリエル先生の魔装兵器を！！」

これが魔装兵器・・・、なるほど、強力ね。

「相川さん。」

「なんだ臃　ん？臃？」

「臃です。で、この状況どうします？」

「どうするって・・・ハルナだけでも・・・。」

「なに言ってるんだ！アユムも色白さんも早く逃げる！！」

・・・困りましたね。今の状況で戦闘など起きたら、上半身だけで戦わねばいけません。

「セラ、メールを助け　　」

無理でしょうね。ここに居る皆さん、すでに足が凍っていますし・・・そろそろ脱出しましょう。凍傷になってしまいます。

「やっぱり、ハルナだけでも・・・。」

遂に自棄ですか……。まあ、それより、氷を……

「逃げて!!」

……その声が聞こえたと思ったら皆さん、どこかに消えてしまいました。

「……ああ、言霊ですか。確かに、逃げたくなくなってますが、所詮この程度。十分耐えられますね。……雑草も居なくなりましたことだし、早く割って帰りましょう。」

足を屈伸運動させ、腰にまで達していた氷を割り、足の裏に着いていた氷を割る。

「……ハア、臍も苦勞しますね。あんなに弱い方々を守るだなんて。手が何本あっても足りませんよ。」

とりあえず、帰りましょう。

（ユー）

全部、私の所為だ……。臍たちと遊んで楽しいと思っちゃった……。そんな感情、持つてはいけないのに……。

「あれ？あたし」

「ユー、お前のせいかな。」

『あの場に居た全員が 自らの場所へと帰ったはず。』

頭が痛いけど、それはしょうがないこと。ああなったのも全部私の所為だから・・・私が責任を取らないといけない。

「あたしら、なんでここにいんの？」

「どうやら、ヘルサイズ殿に助けて頂いたようですね。」

「ほえ？どうやって？」

「逃げ出したんですよ。我々も、敵も。」

「え？でも、色白さんはいないぞ？」

・・・え？

「なっ!？」

「朧がない!?!?どういうことだ!?!？」

まさか、私の力が効かないの？

「あ、いえ、いますよ。皆さんとは違って、自力で、帰って、きました、が。」

よかった。何故私の力が効かないのかは分からないけど、無事に帰って

後ろを振り向くと同時に何か私に覆いかぶさってきた。少し、驚いたけど、うまく抱きとめる事が出来た。

顔を上げると、頭から大量の血を流した朧がいた。

「っ！？臙！？どうしたのですか！！？」

「直ぐに家に運ぶぞー！！」

「臙」

はい、臙です。まず、何故人格が僕になっっているのか説明しましょう。あの後、七実が家に戻ろうしたので、僕に代わってもらおうように頼みこんでこの状況です。何故頼み込んだか？あの七実の事です。家に帰るなり毒舌を大いに発揮するに決まっています。そうなれば相川家にかつてない激震が走るでしょう。幸い、死んだ時の傷は一時間も寝ていれば修復可能範囲なのでちょっと寝てすぐに人格を入れ替わりました。・・・まあ、おかげで中々にスプラッターな姿になりましたけど。で、家に着いたのは良いのですが、そのまま気絶したという結末です。ハア、僕って結構不幸体質ですよね？

で、現在は自室にて絶対安静でセラとユーに看病という名の監禁をされています。少し布団から起きようとしたら苦無が頬を掠め、トイレに行こうとしたらユーにじっと、じいいっと見つめられ行動不能。そんな生活が倒れた次の日まで続きましたとさ。

そして夜。

歩がトイレに籠ってます。しかも二時間。すばらしく迷惑です。え？意味がわからない？つまり、地球に隕石が降ってくるのと同じくらい迷惑ということですよ。

「歩、いつまで入ってるんですか？早く出てください。ハルナも待ってますよ？」

「そつだ！早く出ろっ！！！」

「んん？聞こえんなあ〜？」

・・・今の声のトーン、言い方、全て僕の怒りスイッチをプッシュして行きましたよ。そうですか、そんなに出たくありませんか。よろしい。

「ハルナ、少し目を閉じていてください。」

「ほえ？分かった。」

・・・あ、此処からは音声だけです。

ザシュツ！「なっ！？臆お前」「やさしいです。そんなにトイレに入っていたいのなら一生入っていやがって下さい。」「ちよ、ま、まて！バカなことをするな！トイレに人間一人は入りきらない！！」「うるさい。やろうと思えば出来るはず。」「メキメキメキッ！」「待て！ホントに待ってくれ！！分かった！！俺が悪かったから！！」「・・・このまま流してやりましょう。ゾンビは下水道を循環していれば良いのです。」「ホントにすまなかった！！後、循環って俺は海に還されないのか！？」「ゾンビなど、万年汚物扱いです。」「ひでえ！！！」

「あ、そういえば携帯が鳴ってましたよ。」「それを早く言え!!」
ガシャコン!

あー、急ぐのは大変よろしいのですがトイレを壊していかないでくださいよ。これでは僕が使えないではありませんか。困りましたね困りましたね困りましたね。……本当に困りましたね。

『どうするのですか?』

『どうするもこうするも、外でするしか手が無いでしょう?』

『そうですね。……フツ。』

『いや、何笑ってんすか?』

『いえ、別にあなたの事を笑っていたのではありません。バカテスを見て笑っていたのですよ?』

……皆さん、想像できますか?あの七実、鑓七実がバカテスを見て笑っているのですよ?原作の七実、カムバック!

『無理です。アニメという素晴らしい暇つぶしを知った今、私は昔には戻れません。あ、いつかの天の黒ウサギの録画よろしくお願ひしますね。』

『やめてください!!!もうやめてください!!!』

あの冷酷で残酷でブラコンで根

『それ以上言いますと、後でひどいですよ?』

『・・・前から思っていたのですが、僕の思考を読んでいます?』

『いえ、意識をちょっと覗いたらすぐに分かります。』

『プライバシーは無視ですか!?!?』

『無視です。いいじゃありませんか。私とあなたの仲ですよ?』

『・・・親しき仲にも礼儀あり。』

『私の物は私の物、あなたの物は私の物。』

『最低ですよね、それ!』

『冗談に決まっているではありませんか。因みに、意識を云々も冗談です。普通に聞こえてきます。』

『ハア、疲れますね・・・。まあ、要するにお互いの事は筒抜けと?』

『いえ、臆だけ、一方的にです。』

『やっぱりプライバシーは無いじゃありませんか!?!!』

ぜえ、ぜえ。な、何故精神での会話でここまで疲れなくてはいけないのでしょうか?なんか、七実にはいつも掌で踊らされているような気がします。

『臙は口論で負けたことはありませんか？』

『いきなりですね……。無いですけど。』

『私もです。一体、どちらが強いのでしょうか？口撃力。』

『……。あ、そういうこと。つまり、僕は七実の掌の上だと？』

『その通りです。』

……。不幸です。

「臙、ちょっと出てくる。」

「……。どこに行くのですか？」

「げ、元気ないな……。大先生に届け物だ。」

キュピーン……！

『臙。』

『分かっていますって。』

「一緒にします。僕もその人物に用事があります。」

「……。戦うのか？」

「場合によっては。もっとも、普通に返してくれればいいのですが。」

「

返して……くれますよね？

「そうか……わかった。」

その後、ハルナも同行することになり、僕たちは墓地に向かいました。因みに、曲弦糸もしっかり持っていきます。

「んー、夜風が気持ちいですね。」

「そんなこと言ってる場合じゃないだろ!？」

と、歩の言うとおり、家を出て少し歩いただけだというのにメガロの大群に襲われています。まあ、今日は体力も有り余ってますから、余裕です。

『油断大敵って知ってますよね?』

無視です。無視無視。

ですが、今の状況、結構洒落にならないんですよ。メガロはいるわ、吸血忍者はいるわ。……めんどいんでまとめて斬り裂いても良いですかね？もちろん、後腐れ無いように全滅させます。あ、なんだかとても妙案な気がしてきました。

「歩、先に行ってください。少し、食い止めます。」

「はあ!？待てよ!お前また……。」

「今回は策がしっかりあります。ほら。」

指を一本動かす。それだけで上から来たメガロを数匹斬り裂いた。

「・・・わかった、任せる。」

「まかされました。では、お気をつけて。」

さて、半径二メートル範囲に糸を張りましょう。勝手に八つ裂きになっってくれるはずです。

筈でしたが、あれですね、吸血忍者は兎も角、メガロにも知能はあるそうです。糸自体は斬れませんけど、糸を括りつけている箇所を破壊されました。おかげで、またもや超近接戦闘を繰り広げる羽目になってます。

「シッ！・・・これでもう20匹目ですよ。いい加減！！（ズシャ）減っても！！（ブシュッ！）良いはずですけどねえ。」

「あらあら〜？そこにいるのはあ、鑪さんですかあ〜？」

「その通りです、お久しぶりですアリエルさん。早速で悪いのですが、僕から奪ったあの刀、返して下さい。」

「刀？ああ、あれですかあ。そういえばあ、ずっと返さずにいてしまいましたねえ〜。すっかりわすれてましたあ。」

・・・忘れていたって、僕そのおかげで一回死んだのですが？

「お返ししますう〜。」

ポイツと投げられる僕の愛刀。・・・よし、キャッチ。やっと返ってきました。これで一安心。

「さて、アリエルさん、どうしましょう？ぶっちゃけ、めんどくさいことこの上ないです。」

「ん〜、どうしましょう？このまま二人で殲滅しちゃいますう？」

「僕は、連携というものがとれません。」

「それは困りましたねえ〜。」

僕と連携がとれるのは今のところクリスだけです。

「大先生っ!」

およ？この声は歩ですか。ということは、僕は無意識のうちに戦闘しながら歩たちを追い抜いたことになりませぬ。・・・とろいですねえ。。。。。

「あら、アユムさんじゃないですか〜。助太刀に来て下さったんですかあ？」

助太刀って・・・、絶対今のアリエルには必要ないですよ。まあ、良いんですけど。

「話の前にとりあえず。」

「ごみ掃除だなっ！」

「ハルナ、良いところに来ましたねー。結界をお願いできますかあ？面倒くさくなっちゃいました。」

それには激しく同感です。そろそろ、爪も血糊で切れ味が落ちてきましたし、ここらでパツパとやってほしいです。

「あれやるのかっ！ですねっ！やった！」

文法がおかしいです。敬語なのか、そうではないのかはつきりして下さい、ハルナよ。というか、あれって何さ？もし魔法とかだったら近くにいる僕は絶対に巻き込まれますよね？

ああ！そうこうしているうちに結界張られちゃいましたよ！？しかもアリエルはやたら長い呪文となえてますよ？それ強いですよね？ねえ！！？

「焼尽せよお！ドラゴンズクリムゾンっ！」

「ちよっと！？僕まだいますけど！？」

迫りくる炎の海。いや、範囲が広過ぎてそう見えるだけで実際は火柱ですね。って！！やばいやばいやばい！！

緊急回避にとりあえずやたらめったら其処らじゅうに糸を巻き付けて、某蜘蛛男見たく炎から避難する。当然、僕以外の逃走者もいるわけですが・・・、

「すみません！僕が生き残るために死んでください。」

顔を踏みつけ、思いつき踏み台にします。外道？イエス。鬼畜？ノー。人でなし？イエス。

「ふう、なんとか逃げ切れましたねー。」

さてと、僕はこのままおさらばしましょう。

「サラダバっ！」

・・・とはいかず、

「まだ、メガロがいたのですか・・・。」

とりあえず、斬り裂きながら家に帰りました。

・・・とはまたいかず、

「あれ？ユー、どうしたのですか？」

『夕飯が・・・。』

夕飯？待ち切れなかった・・・とは違うみたいですね。

『おそらく、セラフィムという方が作ったのでしょう。』

『ああ、なるほど。ですが、何故それでユーが外に出ているのですか？』

『・・・覚えていないんですか？』

『何を?』

『・・・いえ、任せます。』

? 一体何のことでしょう。まあ、そんなことより早く家に入りましょう。

「ただいま戻りました。」

「あ、おかえりなさい。ハルナたちの帰りが遅かったので代わりに今日は私が夕食を作りました。」

・・・あれ? 何故でしょう? 前にも同じようなことがあったような・・・。

「今は臙だけですか? なら、先に食べていてください。はい、唐揚げの劣化ウランメッシュアレンジです。臙には特別に硝酸が入っています。」

しよ、硝酸・・・だと。いやいやいやいやいやいやいやいやいや!!!--ちよっと持って下さい!--一旦落ち着きましょう。素数を数えましょう。素数は僕に安心と勇気を与えてくれる僕の友達です。1・・・2・・・3・・・5・・・7・・・11・・・13・・・etc

「臙? さっきからぶつぶつどしたのですか?」

「・・・23・・・29・・・31・・・37・・・ハッ!!!--な、何でしょう?」

「早く食べないと冷めてしまいますよ?」

・・・え？硝酸って食べ物だったのですか？

『んなわけないでしょう。』

『ですよー。』

あれ？僕何気に今命の危機ですか？しょうがない、悪刀を・・・、

『溶けますよ？悪刀。』

『アーーーーー!!..!!』

死ぬ！？マジで死ぬ！！どうしましょう！！？助けてナナえもん！！！！

『相川さんが帰ってくるのを待てば良いじゃないですか。あの人に丸投げすれば。』

さすがです！！が、さっきの僕のセリフに対する突っ込みは無しですか？

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

あ、無視ですか。

「いえ、やっぱり料理は皆で食べ」やはり、私の料理は駄目、ですか？「うぐっ。」

ちょっと待って下さい！！そんな捨てられた子犬のような目で僕を

見ないでください！！罪悪感で死にそうです！！しかも上目遣いですと！？罪悪感で押しつぶす気ですか！？

『・・・変態？』

『七実、子供の頃の七花さんが今のセラと同じことをしたらどうしますか？』

『何をしてでもその願いを叶えますけどなにか？』

ケッ！ブラコンかよ！

『褒め言葉です。』

もう良いです。こうなれば、話の話題を変えてしましましょう。

「そういえば、あのブランダにある竹は何ですか？」

「ああ、そういえば、朧は寝てましたね。あれは七夕で使用した物です。皆願い事をしたので後で朧もどうですか？」

あー、そういえば、七夕でしたね。・・・作者あ、そんなに僕が嫌いですか？僕だけはぶけにするなんて・・・ま、それは兎も角、話をそらすのに成功です。

「そうですね、後でやっておきます。」

「皆の願いは見ないようにお願いしますね。さ、早く食べてください。」

おーっ、どうやら話をそらす攻撃はセラには効果が無いようですね。

「……その前に、短冊吊るしますね。」

書き書き書き書き書き。

ああ、因みのこの短冊はその辺に落ちていたのでそれを使用してみます。

「……本当に、お人よしですね。これ、あなたに関係ないじゃないませんか。」

『そうですか？まあ、これが僕の本心です。』

何を書いたか？秘密ですよそんなの。恥ずかしいですし。

『願わくば、いつまでも皆さんが平和に笑顔で過ごせますように……です。』

『おおい！地の文見てたました！？なに勝手に言ってるんですか！』

『ノリ。』

『……もう、いいですよ。ハア。』

胃が痛い。

ちっ、

「では、食べましょうか。」

「はい、召し上がって下さい。」

「……この願いを叶える為にはまず、この物体を全て食すしかないでしょう。さらば、友よ……」

『朧……あなたも正しく、友でした。』

朧、逝きます!!

「くあ z w x c d r v f t g b y h む j み k お i p @ ¥ ! ! ! ! !
! ! ! ! ? ? ? ? ?」

『くつ!?これは つ!?』

まさかの二人同時ノックアウト……です。

目が覚めました。今は……四時半ですか……。しかも朝の半端な時間に起きてしまったものです。ん?腹部が重たい?あ、ユ一が寝てますね。また看病してくれたのでしょうか?ありがとうございます。ございます。

つと、それより、七実は無事でしょうか?何故か、あっちもダメージがあつたようですし。まあ、僕が死ななかつたのなら大丈夫ですよ。

『七実、無事ですか？』

ん？何か上から降ってきました。何々？ただいまログアウト中です。少々お待ち下さい。・・・おおう、まさか、七実が睡眠に入るほど追い詰められていようとは。予想外もいいところですね。とりあえず、

「暇ですし、学校に行きましょう・・・。この時間帯なら誰もいないでしょう。」

とりあえず、またまた高速で布団から抜けだし、制服・・・改造ですけど・・・を着て、早速窓から学校に向かいます。因みにどのように改造しているのかというと、制服の裾を本当にダボダボにして、下のズボンもダボダボにしています。出来るだけ、和服に近付けたかったのです。

学校に着きました。久しぶりの教室です。今日は、何故か体調がすごく良いですね。あれですか？ショック療法？

『復活です。あの料理は恐ろしいですね。』

『あ、おはようございます。大丈夫ですか？なにやらすごい衝撃を受けていたようですが。』

『まさか、精神世界にまで影響があるとは思いませんでしたから。』

『なるほど。不意打ちってわけですか？』

『はい。』

七実の弱点ですね。確か、弟君に負けたのもそれが理由の一つでしたしね。

『じゃあ、僕は寝ますね。』

『はい。お休みなさい。』

・・・ZZZ。

んー？なにかきゃーきゃー騒いでますね。というか、五月蠅いですね。人がせつかく気持ちよーく睡眠をしているというのに。

「んう？何なのですか？」

『きゃーーーーーー！！！！』

こういうのを黄色い声というのでしょうか？というか五月蠅いんです。

「起きたわ！かわいい〜！」

「臃くーん！こっち向いてー！！！」

・・・はい？

「えっと、何事ですか？」

「それはな、お前が珍しく教室にいるから全校の女子がここに集まって来てるんだ。」

「何故です?」

「みんなお前目当てだろう。知ってるか?お前、マスコットにしたい男子ぶっちぎりの一位だぞ?」

「それはマジですか?歩。」

「マジだ。因みに、女装が似合う男子、守りたくなる男子、可愛い男子をぶっちぎりで一位だ。良かったな。」

「よくないです。あれ?というか其処にいるのはメールさん?」

「おう!そつだぞー、まさか同じ学校なんてビックリだな!」

「そうですね。まあ、僕はいつも保健室にいるんで、会う機会は滅多にありませんでしょうが。」

「そついえば臍、お前今日、ジャガイモ持ってきたか?」

「え?ジャガイモですか?んー、あ、家庭科室に行けば置いてありますね。」

何せ、あそこは僕の台所ですから。ああ、ちゃんと教員に許可は取っております。

「・・・ちよつと待て。なんで家庭科室に置いてあるんだ?」

「まあ、良いじゃないですか。ところで、何故にジャガイモ？」

「お前も忘れてたんだな。今日は調理実習だ。」

てな訳で家庭科室。なんですが・・・

「えー、実は・・・今日予定していた調理実習の先生がドタキャンしまして 担任もフケました！」

だそうですよ。クリスマスには後で説教ですね。というか、何故でしょう？さつきから冷や汗が止まりません。何か、とてつもないようなのが近づいてくる気がします。

『奇遇ですね。私もです。』

『そういえば、前にも一回ありましたね、こんなの。』

『はい、なんとか臍の料理で助かりましたが。』

『たしか・・・、満漢全席でしたっけ？』

『あ、それです。それで見逃してくれました。』

しかし、ホントに何でしょう？

「急遽臨時の先生に来て頂く事になりました。では……せ……先生……どうぞ。」

と、言っに入ってきたのはハルナとユーと紅いスー……

「つつつつ！！！！？」

状況判断にコンマ一秒、行動に移すまでにコンマ一秒！

声を出るだけ発さないで隣の人に早口に……

「すみません、ちょっと保健室に行くと言っておいってください！」

そのまま席を立ち、自分の死ぬ限界ぎりぎりの身体能力で窓から逃走をはか

「おい、おっ君、せっかくあたしがお前が料理を作ると聞いてはるばる来たというのに逃げるとは良い身分になったなあ？」

「すみませんごめんなさい許して下さいもうしません！！！」

クラスの方々は今までにない僕の焦りっぷりを見て驚いています。そんなもの、今の現時点において重要ではこれっぽちありません。いま重要なのは僕がいかにしてこの状況から生き残れるかです。皆さんのことなど考えている余裕はありません！！

「まあ、いいや。飯。」

「かしこまりましたあ!!!!!!」

どこどかと僕の席に座る潤様。織戸がやらしい目線で見ますが、知らん。勝手に死んでください。とりあえず、家庭科室の奥の方にある一見古そうに見えて実は最新のかなりでかい冷蔵庫から満漢せ

「今日はフランスな気分だな。」

「了解しました!!!」

フランスのフルコース（最高級）を作るべく、いそいそと材料を出す僕。あ、そうだ。

「皆さんは気にせず授業を喋っているとは余裕だなあ？おっくん？」
「.....」

ささ、作りましょう。即行で、尚且つ繊細に作りましょう。

その後、なんとか作り終えて、潤さまが口にしたところ、ご満悦のようでした。その瞬間ほどホツとした事は無いでしょうが、食べ終えて「また来る。」と言った時ほど絶望に染まったこともありませんでした。因みに、隅の方で織戸らしき人物が血まみれで倒れていた事は無視しても良いでしょう。ええ、無視です。今は生存できた事を心から喜びましょう。

ああ、安心したら珍しく何か食べたくなりました。あまり物で何か作りましょう。

『臙 さつきの人は何者？』

「ん？ああ、ユーですか。さつきの人は……全部言いますと、『人類最強』『人類最強の請負人』『赤き征裁』『死色の真紅』『疾風怒濤』『一騎当千』『赤笑虎』『仙人殺し』『砂漠の鷹』『嵐の前の暴風雨』と、まあ、いっぱいありますが、人類最強の請負人と覚えておけばなんら問題はありません。職業は請負人です。」

『臙の知り合い？』

「あー、はい、まあそうですね。」

「結局、臙の本命って誰なの？」

「ん？あなたは確か……三原さんですか。本命とは、恋愛による誰が一番好きなのかという質問ですか？」

「そうよ。」

「……何故でしょう？ユーが今までにないくらいこちらをジィィイツと見てくるのですが？」

「すみませんが、僕は鈍感なのでそう言った感情に全く自分でも気付きません。」

「えー？自分でも鈍感って分かってるのに？」

「自分が鈍感と知っているからと言ってその感情に気付く訳ではありません。まあ、僕のは鈍感とは少し違いますけどね。」

「・・・なんか意外。鑢つてあんまりしゃべらない人だと思つた。」

「あまり喋る機会がありませんからね。ですが、今は何故か体調がすこぶるいいので結構喋れますよ?・・・あ、料理が出来ました。」

喋っているうちに料理は出来ました。あ、肉です。ワインとかまあ、フランス料理店でよく出る奴です。

「わ!?!なにこれ、すっごいおいしそう!?!」

「・・・食べますか?」

「え!?!いいの!?!?」

「ええ、どうぞ。」

ぶつちやけ、食べるより作る方が好きですしね。・・・ん?

『ジーーーーー。』

・・・ユーも含め、多数の人間がすっごくこっちを向いて来るんですけど。あなたたち、ハルナの授業は無視ですか?

「・・・授業は?」

『もう終わってるよ!?!』

見事なシンクロ率です。そのまま使徒でも倒してきて下さい。

「うわっ！？なにこれ、すごいおいしい！！こんなにおいしいの初めてかも！！」

『……くくり。』

いや、口内』くくり』と発して食べたいですアピールしなくても……。

「……ハア、時間もありませんし、卵焼きで良いですか？」

『いいですとも！！』

パワーをメテオに！！と、そんなボケを言っている場合じゃなくて、さっさと作っちゃいましょう。卵を割って、かき混ぜて、……あ、そうだ。

「個別に聞きます。卵はダシ派の人は何人いますか？」

……ほとんど、ダシ派ですね。あ、ですが平松さんは違うようです。

「じゃあ、砂糖派の方は？」

シーンってあれ？平松さん？あ、良く見たら上げようか上げまいかで悩んでいますね。手を上下しています。大方、僕に迷惑を掛けないようにとか考えているのでしょうか。まあ、そんな人の気遣いができるすばらしい平松さんの意思を汲んであげましょう。

「……分かりました。ちょっと待っていてください。」

さて、四角型のフライパンを二個用意しましょう。

なんやかんやで完成です。まあ、卵焼きぐらい目をつぶっていても
出来ますし、そこまで苦勞はしてません。

さて、皆さんに配りましょう。と言ってもダシ派の人はセルフサー
ビスですが。

「はい、平松さん。」

「え、あ、ありがとう……。」

「あ、それダシじゃなくて砂糖ですから。」

「え……、で、でもわたし……。」

「別にダシと砂糖を両方作ることもなんてそこまで手間じゃないです
から、遠慮なく手を上げてくれればよかったです……、まあ、
気づかいは嬉しかったです。」

「う、うん……ありがとう……。」

「どういたしました。ところで……。」

「な、なに？」

「僕たち、どこかで会ったことありましたっけ？いえ、別に古典的
なナンパとかではなく純粹にどこかで会ったことがある気がするん
ですよ。」

「え、えっと、あるよ……。」

「おお、やはりそうですか。クラスで顔を見たときからずっと考え
ていたのですがようやく謎が解けました。ありがとうございます。」

「そんな・・・わたしは何も・・・。」

「まあ、気持ちだけは受け取っておいてください。では、僕はそろ
そろ。」

「うん・・・。」

さて、僕は帰りましようかね。今日はもう授業無いですし。

「ユ一、僕はもう帰りますけど、ユ一はどうしますっ？」

『一緒に帰る。』

「分かりました。」

さて、帰りましょ。

「・・・あの二人、付き合ってるの、かな・・・？」

（ユ一）

私は、この生活を守りたい。

「臙」

あー、久しぶりに潤様に会いましたね。もうあと十年は会いたくないです。命がいくらあっても足りません。

「・・・あ、帰りました？」

「七実、あなたは僕の精神の奥深くまで逃げてそどうしたんですか？」

「どうも何も、あの方、読心術が使えるじゃないですか。私の存在に気が付きますよ？」

「ああ、なるほど。だからですか。」

「ええ、本当に厄介な人物です。」

七実に厄介と言わせるとは・・・、恐るべし潤様。あ、元から恐ろしいですね。

話は変わりますが、僕とユーは基本的に一緒に帰る時、あまり喋りません。特に理由も無いのですが、まあ、お互い話す事もあまりないのでしょう。ユーは自分から話をあまり振りませんし。

「臙。」

ところがどっこい、話を振ってきました。

「ん？何でしょう？」

「臙が一番好きなのは誰？」

・・・一番好きな人？弱りましたね。僕の中では皆一番なのですが・・・。

「そうですね・・・、起源をたどって考えていくとユーなのかもしれません。」

『そう。』

聞いて満足したのか、またユーは前を向いてテクテク歩き始めました。・・・それにしても、僕の一番好きな人ですか・・・。ユーなのかもしれませんし、セラかもしれません。クリスかもしれません。ネネサンなのかもしれません。なるほど、僕という人間は実にいい加減ですね。かもしれないかもしれないと優柔不断にもほどがあります。

『ですが、それがあなたの本心でしょう？』

『まあ、そうですね。』

『だったら、それを貫けばいいじゃないですか。みんな一番、確かに甘い考えで、以前の私なら認めませんが、今の私は認めますよ。』

『ですが、それでは・・・。』

『皆一番とっている中で、特に一番なのが臍の一番じゃないですか？今はまだ平行線のようですが、あなたも皆さんも人間以上の寿命を持っているでしょう？まだ、時間はありますよ。ゆっくり考えれば良いんです。』

『そう、ですね。ありがとございます。おかげで気持ち少し楽になりました。』

『いえ、あなたのパートナーなので。』

ホント、良いパートナーを持ちました。

『ああそれと、今日はいろはの時間なので録画、お願いします。』
ぶち壊しだよ。

家に着きました。今だから言っちゃいますと、僕の部屋と歩の部屋は向い合せです。で、部屋に行く途中何やらセラが面白い事を言っていたのでそれに便乗します。

「既に軽蔑していたのでこれ以上の軽蔑表現を教えて頂けますか？」

「ありますよ。嫌悪です。軽蔑表現とは若干違いますが、これはもう嫌悪しても良いレベルでしょう。」

「あ、臍も戻りましたか。・・・なるほど、嫌悪。はい、じっくりきます。」

「ちょっと待て！臍は俺が何したか知っているのか？」

「その透視眼鏡で女子の方々を見たのでしょうか？」

「何故知ってる！？お前は保健室にいたはずだ！」

「勘です。」

「お前の勘はすごいなあい！」

「まあ、そんなことはどうでもいいとして、それにはなんて書かれているのですか？」

「まだ見てないので分かりませんが・・・まあ、あの装置の事でしょう。」

「あの装置？」

なんだそれ。僕は知らないですね。

「ああ、臙は知らないですよ。あの装置とは、豚骨スープを降らせる装置の事です。」

・・・なんて傍迷惑な。

『私ならその装置を一刻も早く破壊しに行きますが？』

『奇遇ですね。僕もです。』

七実と会話しているうちにセラが密書とやらを眼鏡を掛けて読んでいます。そして、はらりと、その紙を落としました。

「臙、歩、私はどうすればいいのでしょうか？」

「何が書いてあったのですか？」

・・・相当、ショッキングな事が書いてあったんですね。

「ヘルサイズ殿を・・・殺せと。」

よろしい、ならば零崎だ。

第15話 赤とは僕にとってはデッドカラーです（後書き）

作者「あとがきコーナー！」

フレイ「なんで、作者なのかな？」

作者「臙くんが零崎しようとしてるので、まあ、代理です。」

フレイ「相手は御愁傷様だね。臙の零崎は、まさに必殺と言われるのに。」

作者「・・・ねえ、なんでここでその設定言っちゃうの？」

フレイ「作者は何回殺しても死なないから精神的に殺そうかと。」

作者「鬼か!？」

フレイ「ノー。まあ、それは良いとして、私はいつ本編に出れるの？」

作者「さあ？いまだに未定です。」

フレイ「怒るよ?。」

作者「すみません。まあ、一応考えてありますが、まだ出ません。当分は。」

フレイ「ぶー！早く出してよー!!--」

作者「……実はもう出さなくても良いかなと思ってたり！」

フレイ「てめえの血は何色だぁぁ!!」

作者「白色です。いや、七実さんがいるのでぶっちゃけ君の出る幕
ないんですよね。」

フレイ「……あいつが、あいつがいなければ私は今頃……と
言うか白!? 何さり気に人外なこと言ってるの!？」

作者「さて、そろそろ終わらしましょう。」

フレイ「無視はひどいよ。」

作者・フレイ「最後まで読んでいただきありがとうございますとついでに
感想等お待ちしてます。」

作者「そう言えば、七実さんは朧の人生のアドバイザーか何かですか？」

七実「さあ？何時の間にやらこのようになっていました。」

作者「というか、アニメ好きなんですね。」

七実「・・・唯の暇つぶしです。」

作者「え？そんなんですか？なんだ、私はてっきり朧が寝静まった後、何気に朧のパソコンでアニメ〇トとかアマゾ〇とかでそう言ったグッズを見ていたのでてっきり」

七実「っ！？虚刀流『雛罌粟』から『沈丁花』まで打撃技混成接続。」

朧「ぎゃーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーす！！！！？」

七実「口は災いのもと、ですよ？」

第16話 さあ、零崎の時間です！と、思いきや・・・

皆さん、こんにちは、臃むさふさです。ただの臃ではありません。零崎臃識むさふさしきです。いやー、この名前を名乗るのも久しぶりですね2年ぶりでしょうか？いやはや、まさかこの名前をまた使うことになるうとは・・・世の中、何があるか分かりません。ええ、本当に。さて、僕にも『殺人』にちゃんとポリシーというものがありまして、試験なり、なんなりしちゃいますよー。

「なんで・・・ユーを殺す必要があるんだよ？」

試験スタートです。まあ、セラが合格しても革新派少し偉い方々と保守派の極少数は不合格ですけどね。

「久しぶりですね。腕は鈍ってませんか？」

「大丈夫です。」

「そんな事をしてしまえば吸血忍者の頭領を蘇らせる事も出来なくなるんじゃないのか？」

フフフ・・・、そういうことですか・・・。吸血忍者も馬鹿な事を・・・。あいつらは僕の存在を忘れていないのでしょうか・・・？フフフ・・・、馬鹿ですなえ・・・。

「密書によれば、天候を操る装置を使い、人類を吸血忍者に変えようなどと馬鹿な計画を目論んでいる連中がいます。」

人類吸血忍者化計画ですか……。フフッ、中々馬鹿な計画ではありませんか……。吸血忍者は他殺願望でもあるのでしょうか……。もちろん、殺すのは僕ですが……。こんな事やれば、僕が黙っちゃいないと考えなかつたのですかね……。？それとも、一対多数なら勝てるでも夢想したのでしょうか……？

「それがユーとどんな関係があるんだよ？」

無いですよ……。関係なんて、全く……。

「妖怪の大量発生に対抗するための施策でしょう。全ては妖怪の大量発生が原因。そしてその元凶を辿ればヘルサイズ殿へと辿り着く……。」

「不合格。違いますねえ……。ええ、違います……。その元凶のさらに元凶を辿れば、メガ口を作った冥界がそうです……。更に元凶を辿れば、冥界に進攻してきたヴィリエが原因です……。セラ……。僕の試験はスリーアウトでアウトです……。あと二回ですのでそのつもりで……。」

「臆？」

「で、どうすればいいかなど、聞くまでもないでしょう……。？セラはユーを守る事が任務だったハズですが……？」

「その任務が変更されたのです。私は……。忍びなのですよ？」

「へえ……。で、どうするつもりですか？」

あれー・・・？これは、ツアーアウトいつちゃうかな・・・。

「こんな馬鹿げた計画を企んだためにヘルサイズ殿を殺せという極論が出た。つまり・・・天候を操る装置さえ壊せば任務変更が来るかもしれない。」

「合格。で、変更が来なかったら・・・？」

「その時は・・・残念ながら・・・。」

「なるほど・・・。不合格。セラ・・・。何故、あなた方吸血忍者は融通が利かないのですか・・・？面倒くさい組織ですね・・・。」

面倒くさい・・・。本当に、面倒くさい・・・。何故、こんな面倒くさい組織がこの世界の守護者なのでしょう・・・？世も末です・・・。

「あなたは・・・任務というものの重さを知らない。」

「知ってますよ・・・。ええ、知ってます・・・。結構長い付き合いですからね・・・。それを踏まえて聞きます・・・。そんな任務云々ではなく、ただ単純に、あなたは・・・セラフイムはユーを殺したいんですか？それとも、殺したくないのですか・・・？」

最終試験です・・・。これで、任務云々とほざくようでしたら、真っ先に殺してやりましょう・・・。心は痛いですが・・・。

「殺したい訳がないでしょうっ！」

見ると、セラは若干泣きそうになっていました・・・。やり過ぎま

したね……。何故か、僕の試験を受けると皆反泣きか狂ってしまったのですが、何故でしょう……？

『痛いところを抉る問題を出しまくるからじゃないですか？』

『失礼な……。僕の問題は自分の本心にしたがって答えれば大体合格ですよ……。？まあ、明らかに違う事を言えば不合格ですが……』

あ、結果ですか……。？文句なしの合格ですよ……。セラも、これで吹っ切れたでしょう。

「合格。さて、ではもたもたしている場合じゃありませんね……。」

「はい、私はこの任務を放棄します。」

「では、歩も行きますよ……。」

「ああ、とりあえず、その馬鹿げた人類吸血忍者化計画ってのをなんとかしなきゃな！」

あ、それ、マジでそういう計画だったのですか……。？某補完計画ぽかったですからそれに似せただけだということに……。

それからの僕は一貫として喋りませんでした……。あ、ちょっと違いますね……。まあ、傍から見たら喋らなくなっただけです、良いでしょう……。

『ただ、もっと零崎になろうとしているだけでしょうっ？』

『違います……。思い出そうとしているだけです……。』

まあ、そういうことです……。

どごその廃ビルに着きました……。いえ、ビルではないですね……。建物です……。

『そういえば、最後に付くその「……」ってなんですか？』

『さあ……。？零崎臙識になると自然と付きます……。』

『そうですか。確か臙は……。もっとも零崎しない零崎と呼ばれてましたか？』

『そもそも、正式に零崎になったつもりもないのですが、まあ、そうですね……。』

『ですが、零崎したときに零崎の中でもっとも大量殺戮してますよね？』

『あれは零崎しようとする方々が皆何らかの組織だからです……。意図的にやってる訳ではないですよ……。』

そうなのですよ……。そんな不名誉な事が零崎……。というか匂宮とかその辺の『殺し名』……。でしたっけ？まあ、それに知れ渡っている所為で、未だに変態は僕を未だに追いかけてきます、散々ですよ……。ハア……。

「歩、臙、此処に居るのは皆私と同等かそれ以上の力を持った者で

す。」

「ああ……。」

え……？皆……？いや、僕が感知する限りでは、この中に居るのは、というか、行動しているのは一人だけですけど……。まあ、いいです……。

「中へ入りましょう。」

「さあ、零崎を開始します……。」

中に入ると、バツタバタ倒れている吸血忍者の方々……。零崎しやすそうですね……。おや……。？あれは……。

「友紀!!！」

メイルさんですね……。ああ、そういえば、あの方も革新派でしたっけ……。？まあ、あの人は馬鹿ですから僕の対象には入りませんけど……。

「我々吸血忍者が使う催眠ガスで眠らされているようですね。」

「一体だれがこんな真似を……。」

「あの方でしょう……。って、おや……。？おやおやおや……。？」

おお、まさかあの人は吸血忍者でしたか……。

「誰かと思えばセラフイムと・・・鑢？」

「いいえ、零崎です・・・。今限定ですが・・・。」

「ぜ、零崎だと・・・!？」

おや・・・?何か知っているようですね・・・。

「因みに名前は零崎隴識・・・。知っている人は、まあ、少なからずいるでしょうね・・・。ああ、セラと歩にも後ほど説明しますよ・・・。」

「わかりました。」

「ああ。」

さて、それでは・・・

「零崎する前にいくつか質問します・・・。ああ、違いますね・・・。試験します・・・。まず、あなたは保守派・・・?革新派・・・?」

「・・・保守派だ。」

「で、何故ここに居るのですか・・・?」

「この装置を使って人類吸血鬼化計画を円滑に進めるためだ。」

なるほど・・・。あのバカげた計画はつきり革新派から出たものだと思いますが、まさか、保守派から出たものとは・・・。これ

は・・・

「ハア・・・、革新派、採点ミスにより合格・・・。それに伴い、保守派、不合格・・・。ただし、セラフィルムは合格しているので別室にて待機・・・と言ったところでしょうか・・・？」

「・・・何を言っている？」

「零崎隴識・・・。この名前、聞いた事、ありますか・・・？」

「ある。確か、零崎の中で最も殺す回数が少ないが、殺す時の量が零崎の中で最も多いと聞いている。」

「因みに殺す人もちゃんと選んでいます。まあ、あの変態見たいになっちゃってますけど。で、僕たちはその装置を壊しに来たのですが、どうしますか？」

「それは困るな。いくら零崎が相手と言ってもこの装置は計画を進めるのに必要なもの。阻止させてもらう。」

「不合格。それでは、零崎を開始します・・・と、言いたいところですが、セラ、やれますか・・・？」

「はい。」

まず、セラにやらせてみましょう・・・。元々、これは吸血忍者の問題ですし・・・。

「おいおい・・・私とやり合っつもりか？同じ保守派の吸血忍者だといつのに。」

というのは建前。僕は目標を殺すためなら手段はあまり問わない人です……。つまり、セラでも歩でも利用して、相手の強さを測る訳です……。まあ、見た感じそこまで強くなさそうですね。

「一応、悪刀使っておきますか……。？ほら、七実との例の一体化する奴も試したいですし……。」

「使うのは賛成だけれども、私と一体化するのは反対ね。ここで手札を見せる必要は全くないです。」

「そうですか？じゃあ、悪刀だけにしときますね……。七実がやりますか……？」

「やりません。あなたが処理して下さい、臆識さん？」

「……。あ、僕の事ですか……？」

「やっぱり久しぶりで慣れませんか？」

「名前を呼ばれるのが慣れません……。あ、今気付いたのですが、これで居場所がばれませんか……？」

「ばれるでしょうね。また逃亡生活ですか？」

「んなわけありませんよ。ユーがいますし……。」

あ、そろそろ展開が動きそうですね……。

「気の合う話は酒を交わしながら。気の合わない話は・・・剣を交わしながらっ！」

「・・・なるほど、速いですね・・・。セラではなく星川さんが、ですが・・・。まあ、中の上ですが・・・。」

「ついていきますか？」

「無問題・・・。全く問題になりませんよ、あの程度・・・。伊達にあの人たちから逃げてませんよ・・・。」

「・・・それ、関係ありますか？」

「ありますよ・・・。逃げ足がとっても速くなります・・・。」

「情けないですね。」

「あんなのいちいち相手にしてられませんよ・・・。」

見つけたが最後、地の果てまでも追いかけてくるし、殺しに来ますから・・・。殺すのは顔面ストラップだけです・・・。」

「秘剣！燕返し！！」

「秘剣！燕尾返し！」

「あー、やっぱりセラの方が弱いですか・・・。」

「セラ！」

腹に一撃、背中を強打……。なるほど、パワーがありそうですね。

「セラフイム強くなったな……。三撃も耐えられると思ってなかった。」

「あなたは……。疑問を持たないのですか、サラス。」

「お前はいつから任務に疑問を持つようなバカになったのだ？」

「……。これだから吸血忍者は嫌いなんですよ……。自分がやった事を全部任務の所為にしている……。自分でその罪を被らず、任務という盾で身を守る……。」

「人を守るために人を吸血忍者に変える……。そんな事が矛盾していると、何故分からないのですか！」

その点、セラは吸血忍者として変わってますね……。いえ、良い方向に……。おかしいと思った任務には疑問を持つ……。こんな簡単な事が吸血忍者には出来ませんが、セラはしっかり出来ています……。いいですね、すばらしいです……。まあ、吸血忍者は全員敵に回すでしょうが、それは僕が守りましょう……。」

「どう思つかなど無意味な事だ。私は、そういう任務を与えられたのだから。」

む、歩が何かしようとしていますね……。

「歩！あなたの敵う相手では……!!！」

あ、これはちょっと阻止します。水の苦無が四本……、楽勝ですね……。二本ずつ指の間に挟んで受け止めます……。

「なっ……!?!?」

「ハア……。歩ももつとタイミングを考えてください……。それに、吸血忍者も派閥がある割にはバラバラですね……。人類吸血忍者計画だとかユーを殺せだとか……。まあ、頭領がいなかったらでしょうけどね……。無駄な事を……。」

「無駄とはなん　　っ!そんなものが当たると……。」

あ、あれはハルナが作った爆弾ですね……。すさまじい威力ですが、駄目ですね阻止されました。

「残念だったな……。この装置は壊させない。私が頂いていく。」

……。ん?何か違和感が……。これは、メイルさん……?

とくと味わえ……。秘剣!百鬼漸殺。」

雨ですか……。当たったら粉々ですが、どうし

「最終詠唱を確認した。目標地点の重力を10Gに変更する。」

参りましたね……。

「試験中止。ついでに零崎中止です。緊急事態ですね。」

クツ……。体に掛かる重力が矢鱈重い……。!ふざけてますね。

「友紀……？」

チツ、やっぱりあの方が魔装兵器ですか……。あー、僕は動けません。10G？体の弱い僕がそんな中、動けるわけがないじゃありませんか。立っているので精一杯です。

「其は命の分岐点（第一詠唱を確認。術式解放　　）我は生の道を汝は死の道をゆくだろう（第二詠唱を確認。発動準備　　）」

あー、これ拙い。悪刀を使っておいてよかったです、これ悪刀も壊れません？

『壊れます！早く骨肉細工で体内に仕舞って下さい！』

『もうやっています！』

なんとか間に合っ

「噛み砕け……。マステイコア。」

『！あれはスタープラ　ナじゃありませんか！！』

七実……。自重してください。

「歩、セラ、後は任せ　　。」

星川さん諸共、スタープラチ　に殴り飛ばされました。

「ゴアア！！！？」

グッ！なんつーパワーしてやがるんですか！って、建物にぶつかりますね……。このままでは。

星川さんは……。見捨てて自分だけ助かってても良いのですが……。むう、なんか色々な感情がそれを邪魔しますね。

「チツ、しょうがない……！」

鋼糸を星川さんに巻き付け、僕の方へ引き寄せます。

「っ！？鑢、何を……。」

「黙って下さい。下を噛みますよ？」

建物の方に僕の背中を向け、星川さんを前にして、まあ、簡単に言うど庇うんですけどね。

そして、思いっきり建物に衝突しました。

「グッ……！」

ゴホッ……。さすがに……。効きました。というか……。これほどのダメージ喰らったのは潤様以来久しぶりですね。

「おい！鑢、大丈夫か!？」

「敵、同士でしょう……。？何を、心配しているの、ですか……。か？うつ、ゴホッ、ゲハッ……！」

体内出血が……。結構な量きてますよこれ……。

「だが・・・しかしっ！」

「だがも何もありませんよ・・・。僕は敵でしょう？止めても刺せば良いじゃないませんか・・・。ゴフツ、任務なのでしょう？」

「そつだが・・・。」

「・・・？何故、殺さない？これほど任務に忠実な吸血忍者が何故？

「・・・貴様を殺せという任務は命じられていない。あの装置も破壊されたから、私の任務は失敗だ。」

「なら、僕の首でも土産にすれば少しは功績に「黙れ！」。」

「この私に、弱った敵を討てというのか？」

「・・・弱った？なめないください。僕はまだ、戦えますよ？」

まあ、じわじわと傷も治ってきてますしね。

「・・・頼む。大人しく傷を治してくれ。」

「・・・え？あ、頭を下げた？このプライドの塊のような人物が？

「え、な、何しているのですか？何故頭を・・・。」

「・・・。。。。。。らだ。」

「え？」

「私が貴様に惚れているからだっ！！！」

ナ、ナンダッテー！！！！じゃなくて！！

「え、と、ま、マジで言ってますかそれ？」

「ほ、本気だ……。」

うわ、顔真っ赤。どうやら本当のようですね……。たぶん、僕も顔赤いですね……。いや、真面目に告白されたの初めてですし、まさか、このようなシチュエーションでいうとも思っていなかったです。不意打ちってやつです。

「え、あ、あの、その、えーと、気持ちは嬉しいですが、返事は待ってもらっても良いですか？いきなりすぎて色々と整理が……。」

「ああ、もちろんだ。その代わりに、お前の事は今日から『ダーリン』と呼ぶぞ？」

「ああ、それは大丈夫です。僕は何と呼ばれようと対応可ですから。」

「……さっきまであれほど慌てていたというのに、この呼び方は良いのだな。」

「はい、いろんな呼び方されてますから。えーっと、『色白さん』『おっくん』『我が妹』『へなちよこ』『死神』等々……。」

「く、苦勞しているのだな……。」

因みに、『我が妹』とか訳のわからん呼び方しているのはあの人です。変態という名の双識さんです。『へなちよこ』はストラップ野郎です。そのへなちよこをいつまでたっても殺せないストラップは『カス』ということですね！！へ！ザマアw

「ささ、あなたの任務は失敗したわけですし、報告に行ったらどうですか？失態の理由は『死神』がいたと言えば、上は了解する筈です。ああ、あなたのプライドは傷つきませんよ。なぜなら、僕がいたのは事実だからです。」

「わかった。恩に着るぞ、ダーリン。」

そういうと、早速報告に行こうとする星川さん。

「あ、そうだ。」

「なんだ？」

「星川さん・・・あなたの名前は何ですか？」

「サラスだ。サラスバティ。気軽にサラスとでも呼んでくれ、ダーリンよ。」

「分かりました。では、学校に居る時は星川さんと、プライベートはサラスと呼びますね。」

「うむ、それでは。」

・・・行きましたね。さて、

「ゴバツ!!?」

ふう、やっとすべての血を吐き捨てる事が出来ました。いや、本当はサラスに告白される前に吐き出すつもりだったのですが、さすがにあのタイミングで吐血出来るほど空気読めない人でもないの、我慢してました。それにしても、まさか告白されるとは。・・・別に嫌な気持ちではないですね。初めての経験ですし、結構嬉しいかもですね。

『では、OKするのですか?』

『それとこれとでは話は別です。大体、僕とサラスは保健室でしか面識はないのですよ?それに、頭撫でさせてくれだとか、顔をぶにぶにしたりだとか・・・あ、なるほど、そういう事をするという事はつまり好きだったということですね。』

『いえ、あれはかなり特殊でしたがまあ、そうですね。』

なるなる。お勉強になりました。

「さてと、そろそろ戻りましょうか。全快しましたし。」

『あちらはもう終わったようですよ?』

『そうでないと困ります。スタ プラチナなんて相手にもしたくないです。』

『同感です。あんなのを相手にしていたら日が暮れてしまいます。』

『全くです。まあ、潤様を相手にするよりも楽そうですね。』

あれは真面目にやばかったです。この僕に本気で『死』というものを考えさせてきました。

まあ、そんな過去の事はどうでもいいとして、早くあちらに戻りましょう。・・・リアルドラゴンを間近でみたいですし。

『たった今私はエンドレスエイの各話の違いを全部発見しました
！！』

『どうでもいいわ！！つか、僕が苦しんでいるときにあなたはそんなことしていたんですか！！？バカでしょう？実はバカなんですよー！！？』

『いえ、別にあなたが告白されているイベントなんて割とどうでもいいので。』

『わーお、聞きましたか皆さん。この人、人の初めての告白される体験をどうでもいいで済ませやがりましたよ。』

あ、因みにトークしながらもちゃんと進んでますよ？

『それよりも臆、バカ スちゃんと録画してくれましたか？』

『うっさいわ！！今はんなことより目の前のドラゴンです！！』

『いえ、深夜のアニメです！！！！』

『あなたいつからそんなにアニメ好きになりやがりましたか！？』

『あなたが生まれてからですけど、何か？』

『随分初期のころから好きになってましたね！！つづか、そのドヤ顔やめい！！見てるといらいらしてきます！！』

『すみません、五月蠅いです。』

『なに真面目にキレてるんですか！！』

ぜえぜえ。疲れました・・・。

『まあ、半分は冗談です。アニメが好きになったのはあなたが11の時です。初めて見たのはそのの としものでした。』

『初めてが結構レベルが高いのですが！！？・・・って、あ、着きそうですね。ここまでにしましよう。ありがとうございました。』

『ありがとうございました。』

よし、オチも付けましたし、真面目になりましょう。・・・僕は大半冗談で言っていたのですが、七実はあれが本気そうなので怖いですね。

「歩、セラ、大丈夫ですか？」

「臃！無事でしたか・・・。」

「ええ、それよりも何か急いでいるようですが、どうかしたのですか？」

こう、なにか焦っている感じです。

「ハルナたちが危ないようなんだ。」

「・・・なるほど、先ほどから感じているこの感覚はそういつことでしたか。」

「承知しました。では、ここは僕に任せて助けに行ってください。」

「ですが、それでは臆が・・・。」

「無問題です。ささ、早く行ってください。」

「・・・歩、私は残って臆の援護をします。」

僕に援護は必要ないのですが・・・、まあ、良いでしょう。セラには少し戦い方のお勉強をしてもらいましょう。歩は建物から飛び降り、アリエルさんの助太刀に行きました。さてと・・・、

「セラ、このドラゴンに刃は通りますか？」

「・・・いえ、あまり効果はないです。」

ドラゴンの体を見ると、脚の辺りが微妙に傷ついていました。なるほど、もろに鱗を斬った訳ですね。

「あんな所を狙っても斬れる訳ないでしょう。いいですか、今からこのようなかい相手との戦い方を僕アレンジですが教えますので、見ていてください。」

まず、曲弦糸が効くかどうか試します。・・・効くようですね、胴には効きませんが。

「本来なら、目玉が喉を狙う所ですが、というか絶対にそうしますが、今のセラのレベルに合わせます。こういう相手は、まず、防御力が高いので・・・おっと、急に攻撃してこないでください。」

まあ、待ってくれる優しさもなさそうですが。

「仕方ない。見えるレベルで実践しますので、見稽古してください。」

此処は室内です。僕のステージです。ドラゴンの周りを跳び回り、適当に斬っていく。もちろん、これで刃が通るはずもないのは分かりきっています。

「と、このようにドラゴンは堅いです。しかし、ドラゴンにも弱いところがあります。それは・・・。」

体の裏側・・・つまり、お腹側です。地面スレスレで柱を蹴って、低空飛行しドラゴンの喉から腹を切り裂き、このまま倒れられたら僕はプチっといっちゃいますので、脚を蹴って脱出。たぶん、心臓にまで爪は達しているはずなので、絶命した筈です。

「まあ、こんな感じです。でかいのを相手にする場合は目、喉を普通は狙うようにしてください。で、こういう硬くて強いのは今みたいな感じでやってみてください。」

「・・・分かりました。」

「さて、帰りましょう。」

メールさんは起きて割とピンピンしていたので、そのまま返しました。

後で歩に聞いたところ、アリエルは夜の王と名乗る・・・というか、あいつですね。攫われ、奪還を目指しているようですが、ぶっっちゃけ、僕はそれに協力はしません。理由？そんなことしたらクリスに怒られるからですけど、何か？

第16話 さあ、零崎の時間です！と、思いきや・・・（後書き）

臃「あとがきコーナー。今日はフレイはお休みでかわりに七実です。」

七実「どうも。」

臃「たしか、フレイは作者に物申すとか言ってどっかに行きましたね。」

七実「そうですね。で、今日はサラスさんに告白されたわけですが、返事はどうするのですか？」

臃「・・・どうしょ？」

七実「・・・駄目ですね。少なくともYES、NOはしっかりした方が良いと思いますけど。」

臃「はつきりしろと言われても、あまり関わりがなかったわけですし・・・。」

七実「ハア、まあ、その辺りは追々考えておきましょう。では次回予告。」

臃「どうやらオリ展開のようですね。」

サラスに告白されたことがばれて、遂に全校の男子を敵に回す臃。はたして、臃は全校男子生徒からのリアル鬼ごっこから逃げきることはできるのか！？

って、ちょっと、また僕が苦勞するのですか？」

七実「がんばってください。」

隴「はいはい、では・・・」

隴・七実「最後まで読んでいただきありがとうございます。感想お待ちしております。」

朧「・・・七実は最近なんのアニメを見ているのですか？」

七実「HOTTですが？」

朧「・・・割とスプラッターな物見てますね・・・。」

第17話 ユーの逃走、そして自責です（前書き）

遅くなりました。すみません。次も遅くなるかもです。

第17話 ユーの逃走、そして自責です

こんにちは、臃です。あの後、歩とセラに僕のもう一つの名前を覚えて、その名前の意味を教えないで事なきを得ました。誤字にあらざ、本当に教えてません。理由は多々あるのですが一番大きいのが『あの変態と関わらせたくない。』です。まったく、あの愚兄未だに女子中学生のスカートの中にロマンを見出しているのでしょうか？確かにどこぞの『策士』で『隠れ巨乳』なあの人も女子中学生に關してはプロということで僕と愚痴ってましたからね。そういえば、最近会ってませんね。まあ、別に問題ないでしょう。というか、あの愚兄たちを最近見ませんね。前（1・2年前）なんてしよっちゆう見かけたのに、まあ、平和で大変素晴らしいのですが。

『と、思っていた結果、これですか？』

『やかましいです。』

あ、別に変態な愚兄に追われている訳ではないのでご安心を。まあ、その代わり……

「てめ、鑢い！星川さんから告白されたってどういことだー！」

「くそ！何でお前ばっかりー！」

学校中の男子から追われております。学校に着いた途端、全校男子生徒（歩除く）が待ち構えていたのです。というか、情報回るの早

すぎやしませんか？

『今日に限っては学校に来るのが遅かったことから起きたことですね。』

『仕方ありません。何故か僕の部屋に見覚えのない仕込みナイフと服が置いてあったのですよ？しかも、あり得ないほど強い強度を持っていたのです。解析と改造に手間がかかりました。』

因みに、その服は改造して和服にしました。質感と言い、重さに耐久力、全てが良い感じなので、学校に申請してこれを着用しようかという勢いです。ナイフの方は普通に懐に仕舞いました。仕込みなので大丈夫でしょう。・・・そういえば、この前も謎の糸が置いてありましたね。結局、誰が置いていくのでしょうか？

『考え事していても良いのですか？上から来ましたよ？』

『りよーか・・・って、待てい！何故上から！？』

「URYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYY
YYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYY
YYYYYYYY!!!!!!!!!!!!」

「ちょ、危ない？カッターナイフ！？そんなもの投げないでください！」

『異端者には死を！』

・・・僕のどこが異端なのでしょう？

『全校の女子を侍らせている事じゃあ！！』

「なんで地の文が読めるのですか！？それに、別に侍らせている気はありません！！」

『じゃかしい！！』

ああ、もうこれ、駄目ですね。説得は無理です。大人しく逃げましょう。廊下の行き止まりに出くわし、停止する。

「遂に追い詰めたぞ！！」

「覚悟するんだな！異端者Y！！」

・・・この声、まさか織戸ですか？

「ハア、皆さん、誤解しているようなので解いておきますが、僕は病弱だからと言って運動音痴なわけではありません。つまり・・・」

廊下の窓を開け、そこから跳び出す。

『なっ！？』

「皆さん、御機嫌よう。」

そのまま、上に苦無で鋼糸を引つ掛け、某蜘蛛男見たく、別の教室に避難する。

「ふう、失礼します。」

「臙!?!お前どこから」

「おや?どうやら歩のクラスのようですね。好都合です。」

「これぐらい出来るに決まっているでしょう?何を驚いているのですか?」

「・・・そういえば、そうだな。」

「ひよいと窓から教室に入室。・・・よし、男子は見当たりませんね。」

「・・・え、えっと・・・鑓君?い、今は・・・。」

「ん?平松さんですか。そういえば、皆さんに言ってなかったですね。これを機に言うておきます。僕は自分でいうのもなんですが、病弱のくせに運動神経は抜群です。」

「そ、そうなの・・・?」

「ああ、たぶん臙なら世界中の世界記録を塗り変えられるだろうな。」

「そんなに、すごい・・・?」

「はい、まあ、さっきのを見て納得してください。」

「・・・うん。」

「さて、しばらくは此処でゆっくり・・・」

「いたぞ!!こつちだ!!」

「・・・ちっ、歩、僕はこれで失礼します。」

「ああ、頑張れよ。逃げる場所は保健室が良いと思っぞ?」

「既に占拠されてました。なんとか室内に行ければ良いのですが・・・」

「ま、まあ、頑張れ。」

「はい、では。」

窓から逃走。そして、適当なクラスへ窓から侵入。

「失礼しま

「よお、鑓クン。もう逃げられないぞ?」

「した。サヨウナラ。」

しようと思いましたが待ち伏せされていたのでそのまま窓から落ちるようになつて逃走。というか、何故僕は追われなければいけないのでしょうか?何かしましたか僕。

『今回に関しては臆は何も悪くありません。一回シめてみたらどうですか?』

『僕を番長にでもする気ですか?却下です。』

『良いじゃないですか。好きですよ？史上最強の弟。』

『僕も好きですが、だからと言って現実に持ち込まないでください。』

『ならば、不良をバツバツタシめて回りますか？学校の頭になつてみます？』

『・・・遂にゲームにまで手を出しましたか？』

『・・・ソナコトアリマセンヨ？』

片言で言うなし。

『仮にゲームをやったとして、どうやって手に入れたんですか？』

『臙が寝ている間にアマ ンで注文しました。入手したものは臙の部屋の押し入れに仕舞ってあります。』

『あー、だから最近やけに段ボールが増えていたのですか。で、何を買ったのですか？僕が言ったゲームを除いて。』

『・・・東、Fat、メルブ、月、モンハ、F、リトバ、等々。』

『かなり買いましたね！！？しかもエロゲが入っているではありませんか！？ちよつと勘弁して下さい！！どこまであなたはキャラ崩壊する気ですか？散々ぶち壊したのに止めに脚で踏み砕きましたよ！！！？』

所々まともなのがあるのが憎たらしいです。

『あとクレヨンしんちゃん。』

『何故！？何故そこで！？』

何ゆえ国民的人気幼稚園児のゲームを七実が持っているのでしょうか？今年度最大の謎です。

『寝ぼけて買ってしまった。こう、ウトウトと。』

『すみません。僕には寝ぼけている七実が想像できません。』

が、何故でしょう？可愛い気がします。

『つまり、夜中に僕の体で注文をしているということですね？』

『はい。反省も後悔もしてません。』

『開き直らないください！！別に怒ってませんけど。』

因みに今僕は屋上に居ます。普段は入れないところなので、誰にも見つからないでしょう。

ここでちょっと七実とくっっちゃべってるといっわけです。

『やっても良いですが、ユーたちに見つからないようにしてくださいね？』

『それはもちろんです。そういうゲームをやっているところを親に

見つかるほど気まずい瞬間もないでしょうし。」

「・・・あれ？気のせいでしょうか？今これ読んでいる人のトラウマを無理やり抉じ開けた気がします。」

「ベッドの下の成人向け雑誌が見つかったとき。PCの誰にも見つかってはいけないフォルダが見つかったとき。部屋のごみ箱に異様なほど丸めたティッシュが指摘されたとき。」

「やめてください！！どこからともなくグサグサと何かが刺さる音が聞こえてきます！！！」

すみません！！これを御覧の視聴者様の中でトラウマをこじ開けられた方には深いお詫びを申し上げます！！なんの事？という方はそのまま育って下さい。」

「で、臍。そろそろ扉が抉じ開けられますよ？」

「あ、そうですか。では、逃げなければいけませんね。」

さつきからガンガンうるさかったのですよ。まあ、もうそれともおさらばですが。」

「ハア、そろそろ疲れてきましたね。保健室に行きたいところですがいけま・・・せんね。」

未だに入り口と裏口が占拠、入る余地なしです。

「弱りましたね、あ、失礼します。」

どこのクラスの入室。

「や、鑓君!？」

「ん？あなたは？」

「え、えっと、小林です……。」

「……知りませんね。」

「そうですか。覚えておきます。」

さてと、此処で少し休みましょうか。

「ダーリン？お前何故ここに居るのだ？」

むむ？この声は……

「星川さん？ここはあなたのクラスですか？」

「ああ、その通りだ。それで、何故窓から？」

「あれ？知らないのですか？僕は全校男子から追いかけられているのですよ？あなたから告白された件について、で。」

「む、そうなのか？朝からやけに騒がしいと思ったらなるほど、そういうわけか。」

「あ、あの。」

「ん？どうしました？小林さん。」

「え、えと、告白・・・したんですか？」

「ああ、したぞ。もっとも、まだ返事は貰ってないがな。」

「そ、そうですか・・・。」

・・・あれ？そもそも何の話でしたっけ？

「あ、そうでした。星川さん、僕を授業まで匿ってくれませんか？」

「それぐらいならお安い御用だが・・・、そこまで危険なものか？」

「結構やっか「失礼する！！」ちっ、もう嗅ぎつけましたか・・・。
星川さん、お願いします。僕は隠れるので。」

ロッカーに隠れます。大きさ？僕の半分ぐらいですよ。まあ、僕は体が柔らかいので余裕で入れますけど。

「ここに鑢籠は来なかったか？」

「来ていないぞ。ところで、貴様は何故鑢を追うのだ？」

「あいつが学校中の女子を侍らせるだけに至らず、星川輝羅々さんと付き合うからだ。」

・・・あの人、輝羅々って名前だったんですか。随分、似合わなげ
フン！変わった名前ですね。あれですか？アイドルでも目指すので
しょうか？

『違います!!あれは輝羅々ではなくきらりです!!そこどころ間違えないで頂きたい!!』

『いや、何熱くなってるんですか……。』

さらば、過去の七実。逝らっしやい、現在の七実。まさか、あのレボリューションまで見ていたとは。あなたの見ているアニメに僕はいつも度肝を抜かれます。あと、僕はそんなもの見た覚えはないのですが、どうやって拝見したのでしょうか？

『DVD買いました。』

『……皆さんにご報告があります。此処に居るのは皆さんが知っている七実ではありません。別人です。別人に決まっています。さ、七衣さん（誤字にあらず）あなたも。』

『だれが七衣ですか。七実です。鑢七実です、ちゃんと同一人物です。27歳。身長四尺九寸。体重七貫六斤。趣味は「草むしり」。ね？同一人物です。』

『嘘だ!!!僕は認めませんよ!!!さすがにキャラ崩壊では収まりが付きません!!!』

『キャラ爆破です。もう納得して下さい。人は変わるのです。』

『変わり過ぎです!!!!!!』

もう、やだ。叩かれる。これは絶対叩かれる。

『大丈夫です。その時は私が作者に代わって、対応するので。叩いた方々、覚悟して下さい。』

『ちよい！！なんで読者の方を煽るんですか！！やめてください！』

『冗談かもです。』

『そこは冗談と言ってほしかった！！』

フー、フー、ハア、疲れた。

『終わりですか？漫才。』

『ええ、暇つぶしに付き合ってくれてありがとうございます。』

あ、さっきまでのは全部冗談ですよ？さすがに七実もそこまでいきませんって。

『まあ、全部ホントの事ですが。』

『ウソ！？』

まさかのどんでん返し。全部ホントの事でした。……マジか。

『残念でしたね？』

『おい、そのしてやったりな顔を今すぐ止める。腹立つ。』

『わかりました。で、そろそろ良いのではありませんか？』

『・・・そうだん！そうですね。そろそろ出ましよう。』
よいしょっど。ぶづ。

「ダ、ダーリン？そんなところに隠れていたのか？」

「はい、僕は体が柔らかいので。」

これは素です。骨肉細工使えばもっと柔らかくなりますが、僕は素で柔らかいです。

「どのくらい柔らかいのだ？」

「ん・・・そうですね。ちょっと腰を持ってもらって良いですか？」

「ごうか？（って、細！？私よりも細くないだろうか？）」

「そうです。」

ん？なにか星川さんから嫉妬的な感情が見え隠れしていますが、何なのでしょう？まあ、別にどうでもいいのですが。

「ほっど。」

ぐにゃり。

「」「わわっ！？すーいー！」「」

今僕は、頭と足がくっついていてる状態です。もちろん背中を後ろに

倒した状態です。

「ほっ、ね？柔らかいでしょ？」

「そうだな。で、そろそろ授業が始まるぞ？」

「あ、では僕は保健室に向かいますね。」

もうさすがにいないでしょう。なんやかんや言ってもやはり疲れるものは疲れるのです。

「・・・前から思っていたのだが、ダーリンは授業に参加しなくて大丈夫なのか？」

「問題ありません。なんたって僕のテストの成績は

「オール満点ですから。」

保健室です。ハア、やっと落ち着いて休むことが出来ます。

「しかし、大変だったわね？」

「まあ、そうですね。疲れました。」

「ところで鑓君、テストの事だけど・・・。」

「え？何か問題でも？」

「いえ、ただ教師の皆さんが絶望してたわよ？世の中理不尽だって。」

「何故に？」

「授業に参加してなくても高得点、というかオール満点を採れる臍君に対してでしょう。本当に天才だったのね？」

「まあ、ですね。これからは保健室でぬくぬく寛ぐことができます。」

「……もう、あれね。このベッドは鑓君専用になっているわね。」

「……抱き枕も持って来て良いですか？」

「ええ、いいわよ（ダラダラダラ）」

はいしつもん。何故この先生は鼻血をだしているのでしょうか！あれですか？この学校には変な人しかいないのですか？吸血忍者だったり冥界人だったりゾンビだったり病弱だったり魔装少女だったり！！もつとまともなのはいいのですか！！

「零崎でも呼びますか？」

「やめい！！余計カオスになるわ！！！」

「じゃあ、いーくん？」

「いやだ。そもそも僕はその人を名前だけしか知らないですし。」

『萩原さんは？結構仲良かったですよね？』

『アホ、それとこれとは話が別です。いくら子荻でも人外は無理ですよ。「私の前では悪魔も全席指定」とか言ってますが、無理ですね。子荻は人の相手をしているのが一番です。というか、あちらは人間を相手にしているのが一番なんです。零崎だろうと殺し名だろうと、魔装少女、上位の冥界人に勝てると思いますか？』

『無理ですね。そう考えれば、零崎で一番強いのは臃じゃないですか？』

『さあ？どうでしょうね。』

さて、もう寝ましょう。お休みです。

・・・おはようございます。

『おはようございます。もう夕方ですよ？』

『まあ、そうですね。今日は久しぶりに動き回りましたからね。』

ホント、今日は大変でした。まさか、学校中の男子から逃げ回るリ

アル鬼ごっこを体験することになるうとは驚きです。もう、僕が体験したことが無い事の方が少ないのではないのでしょうか？

『ギャルゲ展開、ラブコメ展開、死亡フラグ、死亡フラグからの生還、エロゲ展開等々、まだありますよ。増長しないでください。』

『・・・七実、宥めてくれるのは良いのですが、僕にそういう展開を求めてくるのは良いのですか？人生のパートナー的に。』

『長い人生、そういうことが必ず一回はあります。それなのにあなたという人はそういうことが起きてもすぐに体力切れで倒れたり、本当に・・・あ、そう言えば一回ありましたね。』

『？何がですか？』

『セラフイムさんに一回抱きしめられていたではありませんか。ひゅーひゅー。』

『やかましい！！あれは事故です。セラには悪い事をしました。』

あの事は、また時期を見て謝る必要がありますね。

『・・・まさか、本当に気付いてませんか？』

『何がですか？七実の趣味にですか？』

『いえ、それは隠す気が全くないので良いのですが、まあ、これはいいです。口は出しません。』

『よく分かりませんが、まあ、良いです。』

さて、教室に戻って、カバンを取ってきましょう。

『ちえりお〜。』

何故このタイミングで!?

「いえ、ちょっとアニメを見るので。溜まってるんですよ。」

・・・ちえりおー。

教室に着きました。この時間は誰もいない筈なんですが・・・、なぜか声が聞こえます。

「ヤベー！もしかしてユークリウッド？思いつきり可愛いじゃん！」

マジマジとユーが観察されていますね。ユーはすこしたじたじです。

「メールさん。あまりじろじろ見ないで上げてください。ユーが怖がってます。」

「お、鑢か？なんだよー、人を猛獣みたいにいうなよ」

「てっ！アユムーっ！ゲーセンいこーっ！」

「師匠ーっ!」

・・・こっつて、一応高校ですよ？不法侵入しちゃだめですよ？

「ゲーセン行くのか？オレあまりゲームは得意じゃないんだよなー。」

「大丈夫ですよ。歩が雑魚ですから。」

「全く……吸血忍者たる物あらゆる技を身につけておかねばなりませんよ。」

「……何故、この学校には不法侵入者が多いのでしょうか？それにセラ。あなたどこから入ってきてるんですか。窓からなら兎も角、窓の下の壁から出てくるとは、僕の予想の斜め上を行きましたよ。というか、あれですか？ユーが来たからセラが来て、留守番が嫌だからハルナも来たという所でしょうか？んー、なんと言うか、あなたたち、もつと大人しうできないのですか？特にユーは命を狙われているのですから。その辺を……ねえ？」

「ハア……とりあえず、セラ、そこ、直しておいてくださいよ？でなければ僕が直さないといけなくなるので。」

「分かりました。」

「アユムーっ！色白さーん！早くしろよな！」

「仕方ないな。少しだけだぞ？」

「……ん？ユーは？」

「ユー、あなたは良いのですか？」

『私は』

・・・あれ？なんでしよう？何でこんなに気が焦っているのでしょうか？何でこんなに胸が締め付けられるような感覚がするのでしょう？

『臙は行つてきて。私の気遣いをする必要はない。』

「・・・ユー、あなた、ま」

「ほら！色白さんも早く！！」

「わわっ！？」

ハルナに押され、やむえなく退場。まあ、さすがに考え過ぎですよ。考え過ぎは僕の悪いところです。

『（・・・私も気の所為だと信じたいですが・・・、もし、本当に私たちの考え過ぎが当たっていたら、臙は・・・。）』

410

ふう、やっぱりゲーセンに行くのはいろんな意味で緊張しますね。携帯ストラップが居なくて良かったです。

「大量、大量」

「お前・・・いくらなんでも取り過ぎだ。」

「うっさい当然だろ！」

いや、当然ちゃいますから。これほど取られるとは、ゲーセンの関係者もビックリでしょう。僕もビックリです。・・・先ほどゲーセ

ン側が損した値段を計算して、その額に。あのゲーセンは大丈夫でしようか？これは明らかに赤字というレベルを超えていますよ？赤字ならぬ超赤字です。

不意にドサドサと何かを落とす音が聞こえました。

その瞬間、何故か、ああ、やってしまった、と誤ってしまいました。と、同時に、激しい後悔の念が僕の中で湧き出してきました。

何故……？

ふと、ユーのメモ帳が視界に入りました。

『さようなら。』

ああ、やってしまった。何故、気付かなかった。

『ごめんなさい。本当にごめんなさい。』

僕は一体今まで何をしていた？ユーや皆さんを守ると言っておきながら、何故、ユーに謝らせているんですか？

『私さえいなければ、朧も歩も……この街も、こんなことにはならなかった。』

ユーが自分で自分を責めていたというのに、この中で一番ユーの傍に居た僕は何故気付かなかった？何故、ユーにこんな思いをさせている？

歩が出て行きました。しかし、僕は立ち尽くすことしかできません。

『臍もセラもハルナも歩も・・・みんな私に優しい言葉を掛けてくれる。それはとても嬉しくて、私はそれに甘えていた。』

・・・ずっと、ずっと甘えてくれればよかったのに。それぐらい・・・そんなことぐらい、当たり前のようにしてくれればいいのに。

『でも私は一緒に居てはいけない存在。』

『私は　　死を呼ぶものだから。』

・・・ユーが、ユーがここまで思いつめられる原因は何ですか？夜の王？連続殺人犯？歩？セラ？ハルナ？いや

『このまま私が傍に居ると、きっと誰かが悲しい事になる。』

誰のせいでもない。これは

『だからさようなら。』

僕の所為です。

ユーがここまで思いつめていたのに気付けなかった僕の所為です。ユーとは一番につきよに過ごした時間が長いはずなのに気付かなかつた僕の所為です。そして何より・・・

ユーが、安心して此処に居れると思わせられなかった僕の所為です。

ユーは優しい。恐らく、今まで近くに居る誰かが傷ついたらそれを全て自分の所為にするでしょう。僕は、今まで何回敵に殺されましたか？墓場での腹部を刺されて死亡。ゴリラに殴られ頭を強打して死亡。何やってるんだ。僕が死んだ事は気付かれていないにしても、僕は何回ユーに重荷を背負わせた？僕は一体何をやっている？

「ハハ、ハハハ・・・。」

僕が傷つくことで傷つく人も考えず、自分を傷つけ、僕は何がしたいんですか？情けない。守ると言っておきながら、この体たらく。ユーを守る？ハッ！その結果どうです？僕は肉体的に傷つき、ユーを精神的に傷つけました。そう、僕はユーを守ると言っておきながら、ユーを傷つけていたのです。プシュと両の腕から音がして、鋭い痛みが走りました。が、今の僕はそれが全く気になりません。ユーの心の傷は、この程度の傷の倍以上はあるでしょう。

『臙！力み過ぎです！！早く、力を抜いてください！』

七実が何か言っていますが、僕の耳には何も入ってきません。今、僕の頭にあるのは後悔、自分に対しての憤怒、それだけです。こんな事になる前にどうにか出来なかった後悔。こんな事を起こした憤怒。

『臙！聞いていますか？このままでは　。』

さまざまな事を考えて浮かんだ答え。これはある意味、僕のこれまでの人生を全て否定する。その答えは・・・

僕は、誰とも関わらず、ずっと孤独でいた方がよい。

第17話 ユーの逃走、そして自責です（後書き）

作者「えー、今回、僕が出てきたのは・・・まあ、察してください。」

七実「まあ、この場は本編とは別ですので、気楽に行きますよ?」

作者「ですね。はい、と言うわけで、あとがきコーナーです。」

七実「どうも、あとがきコーナーでは、作者が出てくるときに相手となった鑢七実です。」

作者「実は今回はある重要なことがあります・・・。」

七実「?なんででしょう?」

作者「いや、ヒロイン、どうしよう。」

七実「・・・は?」

作者「実は決めてないんですよ。ヒロイン。」

七実「・・・まさか、ここまで無能な作者とは、さすがに予想外です。」

作者「すみません。で、ぶっちゃけ、僕が決めると、明らかにそのキャラを贖いしちゃうので、ここは読者の皆様にアンケートで決めてもらおうかな?と言ったものです。」

七実「他力本願ですか。まあ、わたしからもお願いします。さすがに、これゾンでヒロインなしと言つのはダメですの。」

作者「候補キャラはこちら」

ユ一

セラ

クリス

ネネさん

サラス

七実

その他

です。その他とは、まあ、要するに自由投票です。好きなキャラに投票してください。平松さんだったり京子だったりアリエル先生だったり……。」

七実「あの、気のせいでしょうか？私も入っている気が……。」

作者「これはあれです。ノリで。」

七実「……草むしりの時間ですね。」

作者「え、ちょ、ぎゃあああああああああああああああああああああああ
あああ……！」

七実「ふう、最後までお読みいただき、ありがとうございました。
感想等お待ちしてます。」

七実「ところで、あなたは何時までわたしの背中に隠れているのですか？」

ユ一「……………」

七実「まさか、ずっとこのコーナーに出たかったのですか？」

ユ一「臙と一緒に出たかった。」

第18話 家賊との久しぶりの邂逅です。(前書き)

タイトルの家族を家賊に修正しました。

第18話 家賊との久しぶりの邂逅です。

僕は、誰とも関わらず、ずっと孤独でいた方が良い。

・・・なるほど。僕は患者ですね。こんなくだらない（・・・・・・・・）
・・・）答えが出るとは、未だにそんな風に考える脳があったとは。
ずっと孤独で、誰とも関わらない？何逃げるような答えを出しているのですか、僕は。百歩譲ってそのようにしたとしましょう。その場合、ユーはどうなるのですか？放置ですか？ずっと孤独にさせようというのですか？ふざけんじゃねえ！僕はいいです。が、ユーは駄目です。彼女は、人生を楽しみ、幸せになる権利があります。彼女の様な優しい、すばらしい人が幸せになれない道理がありません。そのために僕は何をするか？何が出来るか？簡単なことです。こんな事、教育を受けていないストリートな子供たちでも分かります。連れ戻しますよ。例えユーが嫌がっても、僕は連れ戻します。ユーが離れた理由はユーが近くに居ると僕たちが傷つくと思ったからでしょう。ならば、ユーが居ても僕らは大丈夫という所を教えねばなりません。ユーが居てもなんら障害にならない事を教えなければいけません。強引？ええ、そうですね。ですが、ユーみたいな人には多少強引な方がちょうどいいのです。
・・・そうと決まれば・・・。

『探す、ですか？』

『ええ、もちろん。なので学校にも、この家にもしばらく戻ってこない可能性がありますね。』

『……良いのですか？この場所は、数少ないあなたを受け入れてくれる場でしょうか？』

『そこに、ユーがいなければ意味がありません。僕とユーは、ある意味、似た者同士ですから。』

かつて、人と一緒に居る事を諦めた人と、人と関わる事を諦めた人似ているようで、実は似ていない。一緒に居る事を諦める、つまり、強引に踏み込まれたら、簡単に落ちるでしょう。しかし、関わることを諦めるとは、その踏み込ませる余地もありません。まあ、お互い完璧に諦める事は出来なかったようですが……。

『その証拠が、今の状況ですね。』

『正解です。もっとも、僕はもうそんな考え捨てましたけど。』

さてと、歩も帰ってきましたし、お話をしましょうかね。……いえ、

「その必要は無さそうですね……。」

「連れ戻すって言うてんのっ！！」

……さすが、ハルナですね。さて、では僕も。

『……行くのですか？』

『もちろん。……あ、しばらくパソコン使えないですけど、我慢して下さいね？』

『……3日に2回、マンガ喫茶に行ってください。そこでやります。』

『……あのさ、ここまでとっても真面目にやってたの。分かる？』

『分かります。』

『じゃあ、空気読んで。』

『……え？今更ですか？』

もうやだこの人。

とりあえず、僕は部屋に戻って色々、準備しましょう。この前、またもや、いつの間にやら置いてあった『相生忍法の巻物』も持っていきましよう。見取りたかったのですが、ぶっちゃけ忙しくてそれどころではなかったのですよ。だから、丁度良かったです。

「臃？どうしたのですか？」

「ん？いえ、別に。あ、そうだ。僕、しばらく姿をくらましますが、気にしないでくださいね？」

「……え？」

「臃、どう言うことだ？」

「だから、僕はしばらくこの家に帰りませんから、よろしくという事です。」

・・・あれ？僕何か変な事言いましたか？

『あなたは・・・まあ、良いでしょう。指摘されるはずですし。』
え？どう言うことですか？

『自分で考えてください。』

・・・むづ。

「・・・ち・・・す。」

「はい？」

「嫌です。行かないでください・・・。」
なっ・・・。

見ると、セラは泣いていました。普段の凜とした姿からは想像できないほど。何故？どうして？わからない。

「え、えっと、セラ？」

「お願いです・・・、行かないで下さい・・・。」

・・・泣いている。誰が泣かした？僕・・・ですよ。・・・ああ、そういうことですか。なるほど。僕は愚者だけでなく、大馬鹿者のようです。ユ一の事で頭がいっぱいになり、それしか考えていない。考えていなかった。故に、セラやほかの人の気持ちに気付かなかつた。馬鹿だ。僕は、馬鹿です。
ポンツとセラの頭に手を置く。

「すみません。あなた方の気持を考えずに先走ってました。」

「臃……。」

「ですが、すみません。どうしても行かなければいけないところがあるんです。」

「え……。」

「しかし、今回はそちら側に気持ちも酌みます。ついてきますか？」

「は」

「ただし、ついて来る場合は、死ぬ覚悟で来てください。」

「……どういう意味ですか？」

「そのままの意味ですよ。ついて来るのなら死ぬ覚悟で来てください。あと、油断もしないでください。」

「……分りました。」

「……まさか、ここまで言って尚ついて来ると言われるとは、予想の斜め上に行きましたね……。」

「まあ、大丈夫ですよ。僕がしっかり殺されないようにしますから。」

「あ、ありがとうございます／＼。」

ん？何故紅く？それほどまでに僕に守られるのは屈辱ですか？マジかー……。シヨックです。まあ、しっかりちゃっかり守りますけど。

「……たらしが。」

え？何か言いました？

「では、早速行きますよ。あ、歩、もしかしたらしばらく帰ってこないかもしれませんから、そのつもりで。」

主に、死合いなどで。

「ああ、気をつけるよ？今の話を聞く限り、かなりあぶない場所に行くようだからな。」

場所？……まあ、確かにあの人たちが居る所は例えシェルター内でも危険ですから、あながち間違っていないでしょう。零崎（あの人たち）が居る所で安全な場所などこの世にありません。

あの人たちは、息をするように人を殺し、当たり前のように人を殺し、人間の生理現象を満たすが如く人を殺しますから。そんな、殺人鬼が居る所が安全なはず、ありません。

「……了解です。さ、セラ、行きますよ。」

こうして僕とセラは目的地……。まあ、僕の勘が全てですが、そこに向かいました。……窓から。

林です。いや、苗字とかそういう名前ではなく、僕の目の前にあるのが林・・・どっちかという森林ですかね？まあ、それがあるのですよ。

「同じ、ですか？」

「さあ？調べてみるまで分かりませんよ。」

因みに、いろんな所を探し回り、すでに翌日のお昼ごろになっていきます。清々しい天気です。この道中、僕は疲労に行って結構バツタバタぶっ倒れまして、セラにおぶって貰っていました。セラには

悪い事をしたので、謝ったら、顔を真っ赤にして、

「いえ、別に……。」

と言っていました。……？ああ、なるほど。いくら僕といえど、男をおぶるのは恥ずかしいのですか。それか、僕に惚れて……？いや、ありえない……とも言いきれませぬね。

『おや、少しは成長しましたね？ありえないと決め付けるのではなく、少しは可能性があると見る事はとてもいい事です。……鈍感な人にとっては。』

『まあ、僕も日々成長してますからね。』

まあ、それは兎も角、早速調査に入りましょう。

調査する事、数十分。出るわ出るは零崎がいたことの証拠。老婆の死体もありました。恐らく、変態もとい、愚兄が殺したのでしょうか。体温がまだ若干残っていることから、そう時間は経っていないようですね。

次に、小屋でバラバラ殺人の現場に出くわしました。

「これは……。」

「おお、まさしく、顔面刺青携帯ストラップ野郎の殺し方ですね。あ、動かない方が良いですよ。斬れる可能性があります。」

「分かりました。」

ん？んん？この方は……。

「早蕨？確か勾宮の分家の一つでしたね。そんな方々が何故愚兄・
・いや、一賊を敵に回すような真似を？まあ、考えても意味ないで
すね。愚兄を殺そうが殺さまいが、どうせ、早蕨はもうお終いです
からね。ああ、でも……。」

口に出して考えていた事を整理し、ふと、思った。

「愚兄に死なれるのは、困りますね。」

「……万が一にも、愚兄が、いや、『マインドレンデル』が負ける
とも思えません。念には念を、物事は常に最悪の展開を考えて行
動すれば、何かとうまいものです。」

そうと決まれば……。

「さて、セラ、行きますよ。」

「はい。」

血の跡が点々とある一方目掛けてますから、それを辿れば良いので
しょう。

着きました。

「俺は殺人鬼であんたは殺し屋だ。そこに何の違いもない、全く同じ畜生同士だ。得物があれば言葉はいらねえ、遠慮も会釈も忌憚も気兼ねもなく、呼吸するように殺し合おうぜ。俺は殺人鬼としちゃあ最低ランクの力しか持ってないが、どっこい殺人技術じゃ『句宮』にだって劣らない。今まで他人を殺し損ねたのは例外を除いてただの二度の内一度は人類最強が相手だ。ほんの

ここで聞くのをやめました。というか、顔面刺青携帯ストラップ野郎もとい、兄さん。例外って僕の事ですか？まったく、弟を殺すなんて物騒な事を考えますね。騒兄と名付けてやりましょう。というか、騒兄、それは

戯言じゃあないですか。

聞くに値しません。無駄に長い物言い。さらに、自分の評価。特に自分の評価をしているところですが・・・、信じるに値しません。まったく、戯言も良いところです。こんな話を真面目に聞いているあの太刀の人もどうかと思いますけどね。

「 殺して解^ひして並べて揃えて晒してやんよ。 」

「 ……セラは此処で良いと言うまで待っていてください。 」

「 はい。分かりました。 ……お気をつけて。 」

さて、突然ですが、

「 久しぶりですね。 愚兄、そして兄さんこと騒兄。 」

「「「「つ!?!?」「」「」

「おや？何を驚いているのですか？僕がいる事に対してですか？まあ、別に驚こうが驚かまいがどうでもいいんですけどね。さて、そちらの趣味の悪い帽子をかぶったあなた。ああ、女性の方ではないですよ。だからそんなすさまじいシヨックを受けたみたい顔をしてください。そっちの太刀の方ですよ。僕は鑢臙で……いや、今この状況でこの名を名乗るのはナンセンスですね。では、こう名乗りましょう。零崎臙識です。まあ、愚兄と違って知名度はそこまですぐで高くない筈ですが。」

「っ！また零崎……。しかも、臙識……。あの『大量殺戮者』だと……。」

「あれ？まさか、知っている人でしたか？ではでは……。」
長く、鋭い爪を生やす。そして、その爪を太刀の方に向ける。

「あなたには、面識もなく、恨みの欠片も、微塵も、小指の甘皮ほども御座いませんが、あなたを抹殺します。」

それと同時に、『僕に』注意を向ける太刀の方。まさか、此処までうまくいくとは……。

「「フフフフフ（かはははは）」」

くつくつと笑い爪も下げる。どうやら、騒兄も同じことを考えているようですな。

「……何だ。如何なる真似だ。」

「いえ、たださあ……。」

これは僕の言葉。そして……

「こりゃ、本当に便利だなと思ってさ……成程ね、『あいつ』が嵌っちまうのも、わかんなくはねーわな。」

まあ、僕と騒兄がやった事は全く違う……とも言い切れませんね。まあ、注意をそらすという意味では同じことでしょう。

「……だから、何を言っている？」

「何を言っているって？そりゃ勿論」

「言っている？違います。やっているんです。」

その瞬間、騒兄は髪を解き、さっきまで浮かべていたうすら笑いも消え、乾いた目つきになった。

対する僕は、その逆。いままで、ほとんど無表情でしたが、その瞬間になって、邪悪に、とても悪そうに口角を釣り上げました。

「戯言だっつーの、馬鹿野郎。」

「ミスディレクションですよ、間抜け野郎。」

そして、太刀の方の胸から、刃物が二本生えてきました。

「はい、お終い。種明かしは……必要なさそうですね。」

ミスディレクションとは、まあ、簡単に言っちゃうと注意をほかの物に向けたりする技術です。手品師とかもやっています。今回の場合は、僕に注意を向けさせ、その間に、後ろのニット帽が似合う方が『自殺志願』、簡単に言くと和式ナイフを挟みたいにくっ付けたやつでブツ刺して、終了つてところですね。

「な・・・な、ななななんあなな。」

おお、面白いくらい動揺してますね。

「さてと、ぶつちやけ僕は死にゆく人の話なんか聞くつもりもないので、とっとと止めを刺しちやいます、ついでに言っておきますね。何故、そのニット帽が似合う女性が動けるかというと、僕の騒兄が『曲弦糸』で止血したからでしょうね。恐らく、僕たちと同じでしょうが、それなら、わずかな意識の中でも気が僕に向いているあなたを殺す事ぐらい訳ないでしょう。さて、もう殺しますが、なにか言い残す事は？」

「二、この卑怯も」

「おいおい！そうじゃないだろう！」

む？後ろから愚兄の声がかかります。って、おいおい、その空いている手を何に使うのかと思いきや、煙草ですか。生きる事を放棄しますね。そんな事、あなたの弟である僕が許しませんよ。

「早蕨刃渡くん、君の台詞はそうじゃないだろう？折角、私の愛妹が「弟です。」お膳立てしてくれたんだ。君の『不合格』は確定しているのだから、最後の最後の最期くらいは、この泥仕合、『きつちり正々堂々』、真っ当に全うしようぜ・・・お互い、

プロのプレイヤーなのだから。ね、『紫に血塗られた混濁』くん？」
いや、ぶっちゃけ、僕は真面目に最期の言葉を聞いて早々にブツ殺
そうかと思っただのすけど。別に「こ、この卑怯者……！」で、
終わってもよかったですよ？まあ、僕の愚兄を殺しておいて卑怯
も何もありませんが。良くも悪くも、僕を見て家族だ、と言っ
てくれたのは、愚兄……いや、兄さんが初めてですからね。

「てめえら全員　最悪、だ。」

む、そうきますか。なら

その言葉に、愚兄が両肩を揺らす。
その言葉に、騒兄が両手を広げる。
その言葉に、新妹が両腕を挙げる。
その言葉に、ぼくが悪笑を浮べる。
そして、声を揃えて、笑顔で（僕は悪笑ですが）答えた。

「……知ってるよ。」「」「」

もうすでに、太刀の方はぐらりと倒れる寸前ですが、まあ、

「容赦無しです。サヨウナラ。」

爪で頭を貫く。即死、絶命しました。

「さて、愚兄よ。そのまま死んでしまうとは情けない。」

「ははは、手厳しいね。だが、私は満足だよ。」

「ん？騒兄、何をそんな珍しくどもっているのですか？別に殺しちゃあいけませんよ？」

「でも、心臓に刺さっているじゃありませんかあ。」

・・・あ、なるほど、そういう事。はいはいはい、分かりましたよ。何故にこの方々が驚いているのか。

「まあ、ネタはそのうち分かりますよ。あ、セラ、僕の荷物持ってきて。」

「はい、これですか？」

そうです。さて、あとは、チクチク縫えば完成ですよ。

「誰だあんた？」

「臍の付き添いの、セラフィムと申します。以後、お見知りおきを。」

「ふーん、そっか。」

・・・あ、そうそう。

「騒兄、その人は殺しちゃあいけませんよ？」

「ん？あ、おっと。危ない危ない、殺しちゃうところだった。」

見れば、セラの体の節々に糸で切ったような傷があります。あぶねえ・・・、あと少してバラバラ殺人じゃありませんか。

「っ！？これは……。」

「ハア……だから言ったでしょう？死ぬ覚悟で来いって。僕から離れないでください。そして、愚兄、いつまで寝てんだ。」

蹴りを一発。

「ゲフっ！？」

ついでにズポッと刀を抜く。……皆さんはお分かりでしょうが、この刀は悪刀です。

「よし、これで死にませんね。」

「……隴君、一体、何をしたんだい？」

「気にしなくて結構。さて、縫いますよ。」

「うん、願いますよ。」

チクチク中……

「こんなところですね。さて、愚兄、僕が今日来たのは別にあなたを助ける為とかそんなぬるい兄弟ドラマを演じる為ではなくてですね、僕の武器を取りに来たのですよ。」

「ああ、なるほど。私的には兄弟ドラマを期待してみたのだが、君

に限ってそれは無いね。うん。で、渡すのはいいが、約束は覚えて
いるかい？」

「もちろん。あなたの言う事を一つ何でも聞くのでしょっ？」

「正解。」

さて、どう来る・・・？セーラー服か？セーラー服でも着せられる
のか、僕は？

「・・・伊織ちゃんの世話をしてくれないかい？」

「・・・は？そんなことで良いのですか？僕はてっきり、コスプレ
させられるのかと思っていました。」

「君のそんな私に対する評価が悲しいよ。いや、臃くんがさっきも
言ったように、伊織ちゃんは成りたてほやほやだからね。私が面倒
みるのもとても良い考えなのだが、たまには弟にも花を持たせてや
ろうと思っただけ。」

「へー、それは良いのですが・・・えーと、伊織さん、でしたか？
失礼ですが、年齢はお幾つ？」

「17歳ですよ？」

「何故疑問形・・・、というか、僕よりも上じゃありませんか。
下が上を養っつて・・・。」

「まあ、良いじゃないか。君の事だ、家に女性成分は足りていない
だろう？」

・・・いえ、

「十分足りてます。ね？セラ。」

「・・・そうですね。臙の、というか、臙の居候先の家は女性率が高いですね。」

「ほらね。まあ、別に良いですよ？断るような事でもありませんし。」

「ありがとう。じゃあ、早速」

「あ、その趣味の悪い鋏、お姉ちゃんに譲ってあげてくれませんか？」

「・・・マジ？」

「大マジ。そもそも、愚兄はそれ以外のちゃんとした武器の方が強いじゃないですか。これを機に変えてみては？」

「武器にも思い入れというものが。」

ハア、本当に困った愚兄です。

「んなもん、捨てちまえ。というわけで、今日からお姉ちゃんの武器はその鋏です。あ、手も切られちゃってますね。あとで義手を作つてあげます。はい、愚兄、僕の武器。」

「分かったよ・・・。」

そう言つて、血が足りないのか、ふらふらと立ちあがり、木の影をガサゴソし始めた。

「はい、これだろう?」

取り出したのは、異様にでかいアタッシュケース。中身は・・・大二本、中四本、小六本の鎌でした。

「よし、全部しっかりありますね。では、僕はこれで。」

「もう行くのかい? たまには家族団らんでもしようじゃないか。ほら、おいでおいで。」

手を広げて、ハグを要求する愚兄。

「謹んで遠慮。では、あ、お姉ちゃんは話こととかあるだろうから、住所書いた紙を渡しておきますね。愚兄、見ても良いですが、来ないでくださいよ?」

こうして、久しぶりの家族との会話、というか、接触は結構簡単に終わりました。

おまけ

く歩く

さーて、セラも居ないし、たまには臙の部屋でも掃除してやるか。

お、結構片付いてるな。さすが臙。こりゃ、押し入れの中ぐらいかな？片付けるの。

押し入れの中はと……………

そこで、俺が見たのは、さまざまな種類のエロゲーの数々……………。

「臙……………おまえも男なんだな……………」

歩の臙に対する認識が変わった瞬間だった。

第18話 家賊との久しぶりの邂逅です。(後書き)

朧「なああああなああああみいいいい!!!!」

七実「何でしょう?」

朧「あれほど念入りに隠しておけと言ったのに!!!!」

七実「忘れてました。」

朧「クソっ!もう我慢ならねえ!!!!表に出ろやゴラァ!!!!」

七実「良いでしょう。」

作者「えー、僕の相方と、主人公がいなくなったので久しぶりにこの片を。カモオン!!!!」

フレイ「グッナイイ!フレイだよ!!!!」

作者「今回はあとがきコーナーではなく、アンケートの途中経過です。ではどうぞ。」

ユー 12票

セラ 19票

クリス 1票

ネネさん 1票

サラス 4票

七実 1票

ハルナ 1票

平松さん 2票

でした。」

フレイ「・・・私は？」

朧「候補にすら入ってませんでしたね。」

七実「伊織さんと言う人も出てきて居候することになってますし、もう出れないではありませんか？」

フレイ「う、うわああああああん!!!!」

朧「というか、今回は少々グダグダでしたか？」

七実「そうですね。なんでも、作者が忙しい中、必死こいて書きあげたらしいです。」

朧「・・・確か、あのバカ、課題がまだありましたよね？」

七実「自分の事は二の次らしいですよ？」

朧「・・・まあ、良いです。さて、今回は遂に出てきましたね、愚兄たち。そして、原作が壊れました。」

七実「ですね。作者曰く、「一賊総出の戦争なんてやってられねーよ！！」らしいですよ？」

朧「その辺りには感謝ですね。僕はユーの事で手いっぱいなので。」

七実「そうですか。では、アンケートの事をば。」

作者「さっきまで殺し合ってた人たちが何故平然と司会をやっているのかは置いといて、この小説のメインヒロインの選別基準ですが、1人か2人です。理由としては、まず、1人と言うのは、ただ単純に票数がぶつちぎっている場合です。例えば、1人が20票で他が5票とかそんな感じですよ。で、2人と言うのは、票数が近い場合です。折角、近い票数でそれだけ人気があるのなら、両方行っちゃえ！！ということですよ。今一番そうなりそうなのは、セラとユーです。批判があれば受け付けますが、やっぱりお願いします。」

朧「と言うわけです。では、今日はこの辺りで。」

朧・七実・作者「」「最後まで読んでいただきありがとうございます。感想等お待ちしています。」「」

臃「……こっちではなるべく人を殺さないようにしてくださいね？」

舞識「はい。」

第19話 やつと気付きましたよ

こんにちは、皆さん。臆です。いやー、久しぶりに家賊に会いましたよ。その上、お姉ちゃんまで引き取ることになりましたし、これからどうしましょう。とりあえず、情報操作でもして、連続殺人事件が起こっていない事にしましょうか？・・・微妙ですね。まあ、いいや。基本、放置でいきましょう。うん、それが良い気がします。さて、僕は基本朝風呂です。何故なら、朝なら誰も入らないからです。夜に入ってみなさい。相川家が血の海です。それだけは防ぎますよ。掃除が大変になります。まあ、今は昼なので昼風呂ですが。

「ということ、お風呂」

着物を脱いで、畳んで、水着を穿きます。これ重要。万が一、万が一、途中で乱入者が入ってきた時の予防策です。フッフ、僕の防御は鉄壁ですよ？

『小説的には邪道ですね。こう、入ってきて「キャー！！」という悲鳴と共にビンタされるのがお約束でしょう？』

『・・・僕にそういうお約束をさせようとししないでください。というか、僕はあなたほど悲鳴が似合わない女性を見たのは初めてです。』

『失礼ですね。女性に対してそんなこと言うてはいけません。』

『そうですね。ですが、すみません。僕は、あなたを女性として認識していません。』

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（又ギ又ギ）』

『ちょおい！！何脱いでるんですか！！』

馬鹿ですか？バカなんですか！！！！それともまさか・・・露出魔！！？

『いえ、私を女と認識させようかと。』

『だからって脱がないでください！！』

『どうです？私は結構着痩せですよ？』

『だ・か・ら！脱がないでくださいってば！！着痩せなんて僕にそんな趣味は・・・・。』

・・・・・・・・ないとも言い難いです。

『臃、私に隠し事なんて無理ですよ？あなたの趣味、特技、3サイズ、性癖、フェチ、全てが筒抜けです。確か、性格と体格、相性諸々見た結果、あなたが最も気になっている女性は、ユ「わー！！！！」とセ「貴様ー！！」ね。二股？』

『・・・・茶化さないでください。僕のそういった感情は無に等しいと知っているでしょう？』

『・・・そうですね。』

僕が、そう言った感情に疎いのは、簡単なことですが、7年間、そう言った感情に全くと言っていいほど感じてこなかったからです。愛情、友情、恋愛感情、全て、何も感じてきませんでした。よって、僕は闘病のせいもあってか、ユーと出会うまでは、空っぽの存在でした。感情なんてありませんでした。その時に出会ったのがユーです。ユーは、感情を常に抑えて生きている少女です。ですが、感情が無いわけではありません。そこで僕は、感情というものを学びました。良く考えたら、僕に感情が芽生えたのはあの時、この世界に生まれて初めて泣いた時だったのかもしれないですね。それから、さまざまな感情を学びました。喜怒哀楽を学びました。・・・が、それでも、愛や恋といった感情は分かりませんでした。これが、僕です。要するに、僕は鈍感ではありません。ただ、コンピューターで言う所の、愛、恋のプログラムが入っていない、欠陥人間です。パソコンも、OSが無ければ欠陥、使えないでしょう？それと同じです。使えない事は無いですが、僕の場合はパソコンのインターネットとワードが使えないパソコンとも思っして下さい。欠陥なんですよ、僕は。

『まあ、いいです。ぶっちゃけ、今は自分ことなど、そこまで気になりませんからね。欠陥上等です。欠陥の良いところは治せるところですよ。』

『そうですね。ゆっくり、時間を掛けて治していきましょう。』

ですね。さて、お風呂入りましょう。ああやって、思考している間にも僕は行動していたのですよ。既に水着姿です。

「さて、お風呂を沸かしましょう。」

ドアを開けます。歩がいました。

「……歩？何故入っているのですか？」

「き、きゃあー、臃さんのエ「死になさい。」待て待て！すまなかつた！」

分かればいいのです。分かれば。

「さ、出て行って下さい。」

「お前こそ、銭湯にでも行って来れば良いじゃないか。」

……ほお、僕に対する挑戦ですね、これは。

「……良いでしょう。」

ザバァーとお湯を被る。さて、僕が銭湯に行くかどうか、身をもって知ってもらいましょう。

「ブフウー!!」

鼻血が噴水のごとく吹き出ます。もちろん、歩のです。おかげでお風呂場は真っ赤。スプラッターな殺人現場みたいですね。というか・

「お風呂、入れないじゃないですか……。」

失敗しました。仕方ない、掃除しましょう。

とりあえず、歩は邪魔なので全裸のまま廊下にポイ捨てして、血に塗れた浴槽を拭きます。

廊下から「うきゅー!?」や「気持ち悪いですね。」など、さまざま
な声が聞こえてきますが、僕には実害がこれっぽっちもないので無
視です。え？歩の扱いがひどい？何言ってるんですか。ゾンビなん
て、どのゲームでもヘッドショット喰らって死ぬか、死なない事を
良い事に銃弾を浴びせたり、某ドラゴンなクエストではレベル上げ
のカモにされているでしょう?というか、これ見てる人もそういう
ことしている人いますよね？

『私だ。』

『いや僕だ。じゃなくて、要するにゾンビなんてそんなもんでこ
とですよ。知能低いし。』

『ですね、アンデットなんて、そんなもんですよね？無駄に湧いて
くるだけです。』

おお、たまには七実を良い事言いますね。

『いつも言っているではないですか。』

『・・・は？え？いつも？今いつもと言いました?」たまに「の間
違いではなく?』

『臆の私に対する評価が良く分かりました。やはり、認識を改めさ
せる必要があるようですね。』

そう言うと、七実はスルスルと服を脱いでいく。

『その場合、七実に対する僕の認識が、変態&痴女ということになりますけど？あと、仮にもここは精神世界です。そういうことは、出来ないですよ？』

『・・・その認識は個人的にも嫌ですね。それと、臍はどうやって私が精神世界でP Pをやっていると思いますか？』

『そりゃあ・・・あれ？』

『私は長い事、此処に居たので自らが想像したものをこの世界に具現化することなど、容易ですよ？ほら。』

パツ、と七実が手を向けた方にはそれはそれは大層なベッド（と、抱き枕）が現れました。

『・・・成程。では、此処でパソコンをやればいいではありませんか。』

『インターネットが繋がりません。』

『・・・いや、そんなすぐる様な眼で見られても。ウルウルさせないでください。罪悪感が凄まじいですから。』

『いや、どうしろと？』

『・・・夷さんからスパコン並みに高性能なパソコンを貰ったでしよう？その使用許可を下さい。』

・・・あ、夷さんとはこの前この世界に大気圏から乱入してきた人

間かどうかとても怪しい人間？です。僕とも何故か戦いましたよ？まあ、個人的にめんどかったので適当にケリつけて終わらせました。が。ああ、僕は負けましたよ？まあ、勝つ気もなかった。そこでここで気にしてません。自分と七実が本気を出して相手したら、恐らく、町が壊れるだけに止まらず、普通に県が危なかったかもしれない。まあ、それは置いときましょう。で、その時に貰ったもの一つにさっき言ったパソコンがあるのですよ。で、七実はそれを使わせるーと言っているのですが……

『……使いまくられても困るのですが？というか、そろそろ僕の部屋の押し入れに入りきらなくなっているのですが、どうしてくれるのですか？ほとんど物が入っていなかったのに、今ではゲームなどいっぱいになっているのですよ？内容についてはあえて公言しませんが、おかしいですよ？ゲームにはまってまだ一週間と経ってないのに押し入れいっぱいはおかしいですよ？それに、僕の部屋の今の現状知ってます？寝床以外のスペースが全部段ボールですよ？僕にマダオになれと仰いますか。』

『良いじゃない。減るもんじゃあるまいし。』

『部屋の面積が減ります。』

『それに、マダオの声優さんはあの司令の声もやっているのですよ。？』

『いや、そのどこに今の話と関連性があるのですか？』

『無いです。』

『無いんかい!!』

おお、無駄話をしていたらいつの間にかお風呂掃除終わってましたよ。やった。やっとお風呂に入れます。・・・てか、何故ゾンビの話から最終的にゲン ウ司令の話になったのでしょうか？全く関係性が見えませんが・・・。

『何を言っているのですか？』

『え？』

『そんなの何時もでしょう？』

・・・確かに。というか、七実と話していると確実にそうになっているような気がします。

『それが私クオリティー。』

『シャラップ。』

さて、お湯も沸きましたし、入りますか。

ざばぁー、ふう、最高です。お風呂は人間が生み出した素晴らしい物の一つですよ。過去にお風呂を考えた人には感謝ですね。

『汚れてしまいましたね。』

ん？あれ？お風呂の外から何か声が・・・。

シュルシュル。

んん？服を脱ぐみたいな音が・・・。

『クソ虫の処理に手間を取ってしまいました。』

んんん？クソ虫の処理って・・・歩の事ですよね？てことはこの声は・・・セラ！？

やばい！どうしましょう！？このまま外に出たら確実に生まれたまの姿のセラにでくわします。それは拙い！では、どうする？どうするよ！？

『諦める』

『逃げる』

『興奮する』

ライフカードオオオオオオオオ！！碌な選択肢がねえ！逃げるってどこに！？妄想に逃げろと！？逃げ場なんか無いんですよ！！くそ！こうなれば！

天使臙「良いじゃん良いじゃん。そのまま待機してろよ。」

！？

悪魔臙「ケツ！何言ってるやがる！このままここに居たらセラとでくわして、セラが裸を見られてショックを受けるじゃねえか！」

！！？

天使臙「あ？なんだよ？見たくないのか？」

悪魔臙「そんなものより、セラの気持ちの方が大切に決まってんだ

る!!!」

天使「いい!あなたホントに天使ですか!?まさかの不良天使!?
そして悪魔!あなた口は悪いですけどすごく良い人ですね!?悪
魔にあるまじき人のよさですよ!?

天使「あ?やんのかコラ!!!」

悪魔「やりたければやってみよ。あるいはこの俺に届くやもしれ
ん。」

天使「言ってるやああああ!!!!!!!」

「まさかの脳内乱闘。だめだ、天使と悪魔は使い物にならない。
こうなれば!」

「タスケテッ!ナナえもん!!!」

「タツタラツタツタター!人体溶解光線銃」

「あなたはセラをどうする気ですか!?!」

「む?駄目ですか?タツタラツタツタター!もう手遅れ」

「え?」

「.....は?」

セラとご対面。って!!

『七実貴様!!』

『フッフ、馬鹿ですね。』

『・・・あとで覚えていやすがって下さい。部屋にある全てのゲームをブックオフに売り捌いてやります。ついでにインターネットも切断、ゲーム機本体もネットオークションに掛けてやります。』

『あなたは鬼ですか!?!』

『フツ、何もかも貴様が悪い。』

『それを許す私ではありません。あなたの意識を乗っ取ってやります!』

『・・・ならば、僕の部屋に仕掛けてある272個の罠を総動員して全てのゲーム類を破壊します!!』

『・・・止めましょう。不毛すぎます。』

『まあ、僕も七実の趣味を奪うほど鬼畜でも外道でもありません。』

『・・・それはありがたいのですが、そろそろ現実逃避を止めましょう。』

『はい、その通りです。』

現実を直視しましょう。

「えっと、すみません。すぐに出ていきますね。」

まあ、少しですけど浸かれたからから良いです。体はまたあとで隙を見て洗いましょう。

「……いえ、大丈夫です。」

えつと……、何が？

「何が大丈夫なのでしょう？」

「一緒に入りますか？」

………おお、いかんいかん！一瞬思考が冷凍されちゃいましたよ。早くチンツしなれば……よし、解凍出来ました。

「セラさん。駄目ですよ？男と女で一緒に入浴なんて。良く考えてみてください。冷静に、ね？ほら、駄目でしょう？嫌でしょう？」

「いえ、別に駄目でも嫌でもありません。」

すみません、顔真っ赤にしながら言われても説得力皆無です。照れですか？照れているのですか！？

『臍、腹を括りましょう。』

『七実も賛成はですか！？』

『いえ、ただ、女性の方が一緒に入りたいたいと言うのなら、一緒に入つて上げれば良いじゃないですか。』

『・・・ねえ、七実、ひよっとしてセラは・・・。』

『・・・やっと気付きましたか?』

『・・・露出狂?』

『はあ?』

『ジョークです。で、やっぱりそうなのですか?』

『まあ、薄々気づいているようなのでネタバレしますが、その通りですよ。臆のどこに惚れたかは分かりませんが。』

『・・・成程。僕も、徐々に直つてきますかね?』

『はい、欠陥箇所が直つてきています。』

『そうですか・・・。まだ、全然鈍いのでしょうか、人の情緒というものが分かってきました。恋愛方面での。』

『良かったですね。で、もっかい言いますけど、現実逃避しないでください。』

『イエス、ママ。』

さて、セラの気持ちは分かりました。ですが、それにより僕の行動は何も変わりません。何故なら、僕はセラの気持ちには応えられないからです。いえ、正確には、応えたくても応えられないでしょうか?理由なんか単純明快、考えれば誰でもすぐに分かります。僕は病弱です。体には一億もの病魔がいます。それは周りも周知の事実。

ですが、僕は最も大切な事を言っていない。言う気もありませんが。一億の病魔と僕の体は拮抗してやつと僕は生きていられます。でも、逆に考えてください。この拮抗が崩れれば、僕は恐らく死にます。一億の病魔、夏風邪程度の物もあれば、コレラみたいな質の悪い病気もあるはず。それと拮抗している僕の体。この拮抗が崩れれば、全部とはいきませんが、軽い病気から未知の病気まで、多くが発症します。僕とて人間です。そんな病気が発症してしまえば、死ぬのは火を見るより明らかです。そんな、そんな状態の僕とそうですね、仮に結婚したとします。幸せになれますか？そうですね、僕が生きている間は幸せかもしれませんが、でも、もしなんらかの原因で僕が死んだら？吸血忍者の寿命は長い。元が人間なので忘れていけるかと思いますが、それでも、悲しいという気持ちは生きていく間ずっと残るでしょう。そんな事、させたくありません。ずっと、悲しみを背負いながら生きさせることなど、したくはありません。なので、僕は、セラ、あなたの気持には応えられません。それと、セラの気持ちを知って分かった事なのですが・・・、ユー、クリス、サラスの気持ちにも応えられません。ですが、まあ・・・、

『応えられない分、お風呂ぐらい一緒に入っても良いかもしれませんね。』

『なら、早く入ってあげてください。』

『了解です。』

「分かりました。良いですよ。入りましょう。」

「！！ありがとうございます。」

チャポン・・・。

「……………」

「……………」

き、気まず?!?!?

「……なにか、ありましたか?」

「……何故、そう思うのですか?」

いや、何故ってそりゃあ……。

「セラが、男性とお風呂に入るなど、あり得ないでしょう?それと入ってきた瞬間、若干顔が強張ったのが原因です。」

「……私は帰り道、どうやってこの出来事についてどうやって誤魔化そうが考えていましたが、やはり、誤魔化し方が分からないので、正直に言います。」

ふんふん。

「先ほど、吸血忍者……私と同じ吸血忍者。 私は仲間から攻撃を受けました。」

……成程。いつか来るとは思っていました。が、まさか、こんなに早く行動に移すとはね。

「何故、とは聞きません。これでも、吸血忍者との関わりは結構深いのですから大体の予測は付きます。ですが、あえて聞くなら、セラ、

「怪我はありませんか？」

セラは一瞬、目を見開き驚いたような顔をしました。がすぐに元の凜とした表情に戻りました。

「ありません。臍のおかげです。」

「は？ 僕の？ 今回に関しては、僕は何もしていませんが？」

これホント。セラに護衛を付けた覚えもありませんし、というか、護衛と言っても頼める人なんていないのですが、まあ、そんな事をした覚えなんてありませんし。

「間接的に、です。確かに私は攻撃を受けましたが、当たる瞬間、どこか恐れのようなものがありました。恐らく、私を傷つけることで臍が報復に来る事を恐れたのでしょう。そういうことです。」

「あー、なるほど。まあ、僕は今や、自分の武器も取り戻した……いや、取ってきたと言った方が良いでしょう。自分の武器もありますし、吸血忍者を皆殺しにするくらい、一晩あれば十分ですからね。ところで……。」

「はい？」

「いや、これずっと疑問だったのですが……。」

「別に、任務を放棄することは言う必要無かったと思うのですが？」

ほら、滞っている理由なんて、『死神』とひらがなで4文字、漢字で2文字言うだけであちらさんは納得いくと思うのですが。

「・・・その発想はありませんでした。」

「ハア・・・まあ、そこがセラの良いところなんですけどね。」

「とにかく、私はこれからは吸血忍者として行動できません。申し訳ございませんでした。」

「別に謝る必要なんてないですよ。セラは悪くないですからね。」

「・・・ありがとうございます。話は変わりますが。」

話が変わるところで、今のお互いの状況を説明しましょう。あ、お風呂の事です。さすがにお互い真正面向き合うのは拙いので、背中合わせで入っています。これにはセラも同意してくれました。因みに、僕は男子の中では割と小柄なほうで、セラより少し身長が高い程度なので、お風呂もすっぽり入りました。なので窮屈していません。以上です。

「ヘルサイズ殿が我々の元を去ったのは、何が原因と考えますか？」
ん？そんなの・・・

「あれは、僕の所為ですよ。」

「何故ですか？」

「僕が、何度も死にかけたからです。ユーは優しいのはもちろんですが、若干加害妄想があります。恐らく、僕が死にかけたのは全部自分の所為だと思っているのではないのでしょうか？あと、自分が此

処に居ると、皆に迷惑がかかると思ったのでしよう。まあ、僕の所為ですよ。僕がきつちり、僕も含め全員が怪我無く、守り通していれば、このような事にはならなかったでしょう。」

「……つまり、私の所為でもありますね。」

……は？

「何故？」

「臆が死にかけてしまうまで戦ったのは私たちを守るためでしょう？つまり、臆が守らなくても支障がないくらい強くなかった私、ならびに、歩やハルナの責任でもありません。」

「……ですが。」

「あまり……一人で背負いこまないでください。私たちは……仲間でしょう？」

なか……ま……。

「そう、ですね。わかりました。善処します。」

「はい、善処してください。」

そんなこんなで体を洗い、お風呂を出ました。体を洗う際は、何故か湯気がモクモクと出てきました。好都合ですが。

『ナイスです。雲 さん。』

『いや、誰ですかそれ？』

七実の意味不明な発言を突っ込むのはもう疲れました。

「ところで、セラ。」

「はい？」

「今更ですが、恥ずかしくないのですが？」

「……………(ボンッ／＼／)」

「恥ずかしかったようですね…………。」

翌日。今日は珍しく朝を教室で迎える事に成功しました。

「俺たちは、トレジャーハンターの心を持っているんだよっ
！」

朝から織戸が騒がしいです。トレジャーハンターって、まあ、僕もお宝は好き嫌いと言えば好きな部類に入りますが、どうせ、織戸とそれを聞いている歩の事です。どうせ如何わしい事なのでしょう。あ、因みに僕の今の装備は、和式制服で、その服の中のまず、両腕の袖の辺りに小鎌を3本ずつ仕込み、脇腹辺りに中鎌を2本ずつ仕込み、最後の大鎌を背中にクロスさせるように仕込んでます。重くないかどうかと聞かれれば、重くないです。僕が直々に作ったのですから、重くする筈がありません。素材は内緒です。因みに、和式制服とは、簡単に言うと、制服を和服に改造したものです。学校側の許可は取ってあります。教師から嫌われているのにどうやって許

可を得たか？人間、絶対に知られたくない事の1つや2つあるものですよ。フッフ。

「じゃあ、トモノリ。偶然発見した宝と、自分で発掘した宝、どっちが興奮する？」

「え？んー、オレは・・・偶然発見した方、かな？探そうとしていなかったものがいきなり見つかるって『うお！』ってなるし。」

「僕は自分で発掘した方ですね。偶然発見するのは、思っている程興奮しません。むしろ拍子抜けしちゃいます。」

ま、あくまで『お宝』場合ですけど。

「お、臍も入ってきたか。それは兎も角、トモノリの意見は意外だな。」

「な？相川。やっぱりこいつは、俺たちと同類なんだよ。」

織戸と同類って・・・メール、いや、友紀さん、哀れな。まだミジンコと同類の方がましでしょうに。

「そうみたいだな。トモノリ、お前を甘く見ていたよ。臍は予想通りだが。」

歩に僕の回答を予測されていました。屈辱です。

「いやあ、そこまで褒められるとなんか・・・」

いや、褒めてないと思います。むしろ碌でもない事だと思います。

「織戸よ。これで、パンチラやポロリは偶然起こるからこそ夢があるんだ。という俺たちの説はより強固なものになったな。」

「・・・へ？」

ハア、やはり、碌なことではありませんでしたね。危うく、袖に仕込んである小鎌を某独眼竜のごとく、3本指にはさんで切り裂いてしまう所でした。

もうどうでもよくなりました。先生が来るまで席で休んでしましよ

う。
「お前らー、席に着けー。」

相変わらずやる気ゼロですね。別に咎めたりはしませんが。

『とがめたり？なんですか、とがめたりって。』

『会話だけじゃああなたが何を聞いているのかさっぱりのお答なのですが、あなたが何を言っているのか分かってしまうのが、僕は悔しいです。』とがめ』ではありません』咎め』です。奇策士のことではありません。』

『あ、なるほど。』

この人、まさか、真面目に今のを質問しやがりましたか？

「えー、今日は転校生がいる。」

「マジツすか！？先生！性別は？」

織戸が五月蠅い

「女子だ。」

「可愛いですか！？それとも知的なクールビューティーですか！？」

そこに、不細工と言う選択肢はないのですか？

「あー、どちらかと言えば、可愛いと思うぞ？」

「よおおおおおおおしやああああああ！！！！！！」

ああ、五月蠅い。別にあなたの彼女になるわけじゃあるまいし。

あまりにも五月蠅すぎて、頭が痛くなってきました。

「おい、入っていいぞ。」

「失礼します。」

入ってきたのは、赤いニット帽を被った方でした。赤いと言うだけで逃げだしそうになった僕を許して下さい。

「自己紹介を。」

「皆さん、初めまして。零ぎぎぎぎじゃなくて、無桐伊織です。これからよろしく願います。」

ほー、無桐伊織さんですか……。

.....What?

「つて、はあ!!?伊織さん!?!あなた何故このクラスに居るので
すか!?!?明らかに年齢が」

「あ、臈君じゃありませんかあ。これからよろしくお願いしますね
?」

何故、言いかけて途中で言えなくなつたか。それは、ただ単にお姉
さまが私めの口を手で塞ぎやがったからです。

「おい、鑢!テメエ、その子とも知り合いなのか!?!」

「知り合いというレベルじゃありませんよお。もつと深い仲です。」

あ、ちよ、姉さん。それは

「総員、狙ええええええええ!!!!」

まさかのカッターナイフ!?!やばい!死人が出る!

「違います!僕の生き別れた姉です!!」

『何い!?!?』

クラスに居た全員の合唱です。見事にハモりました。

「(この設定でいきますよ?)」

「（わかりました。）」

「そうですよ。ね？お姉さん？」

「はい、臈くんは私の弟ですよ。」

ウソは言っていない。

「なら、いいか。」

誰かのそんな台詞を皮切りに徐々に収まってく男子生徒達。ふう、良かった。

「では、僕は保健室に行つてきます。先生、良いですか？」

「分かった。良いぞ。」

その後、保健室に行き、いつも通り3限目の終わりに家に帰りました。

相川家。

「えー、と言うわけで、今日からこの家で養つ事になりました。」

「初めまして。無桐伊織です。」

「いや、何がと言うわけでかサツパリなのだが……。」

今夜、全員が揃っている中でお姉ちゃんを紹介します。

「セラは分かるか？」

「はい。元から知っていました。」

「あ、だからと言って、人間じゃない訳ではありませんよ？人間ですよ、ちゃんと。」

「そうか。まあ、養うのは良いが、部屋はどうするんだ？もう空いてないぞ？」

「あ、大丈夫ですよ。私が此処でお世話になるのは今日と明日だけですから。」

『はあ？』

「なんですかそれ。聞いてないですよ。」

「臈くんにも説明してないのですが・・・実はあの後、みんなで相談した後、人識くんにあてがあるようなので、すでに相川さんの家には臈くんがお世話になっているから、私までもお世話になる訳にはいかない。ですが、それでは予定が狂う。なので、準備が整うまで、つまり、明日まで此処でお世話になります。よろしくお願いします。あ、襲わないでくださいね？」

「誰が襲うか！！」

まさかのどんでん返し。愚兄・・・まあ、今回は感謝ですね。あてがあるとは・・・まあ、誰かは知りませんが、あるのなら良いでし

よう。

「まあ、こんな姉ですが一日ですので我慢して下さい。」

そしてまたまた翌日。

特に変わったこともなく、普通に寝泊まりして終わりでした。そう言えば、学校はどうするのか？と聞いたら。

「私って弟が欲しかったんですね。だから、この学校には普通に通いますよ。」

前文が意味不明ですが、この学校には通うようです。

今日の体育は選択制です。僕は一番『楽が出来る』バスケを選びました。プールかバスケ。選択肢など、端から決まったも同然です。因みに、姉御はプールです。結構、粘って一緒にしようと言っていました。心を鬼にして断りました。

「あーいかわ！」

おや？友紀さんも同じバスケのようですね。

「チーム分けどうなるんだ？男女別にするほどの人数でもないな。」

「適当で良いんじゃない？」

「まあ、そうですね。適当で良いと思います。」

「……できれば、臙とは同じチームが良いかな。」

歩がぶつくさなにかを言っていますが、気にしません。あ、此処で一つ重大な事を。実は、先日、僕が学校中の男子に追われていた事がありましたよね？あれ、一般人だけ記憶を消してあります。良く考えたら、僕の取った行動は明らかに人間離れしていましたからね。それです。

チーム分けは、グツパで決まりました。僕のチームは歩、友紀さん、平松さんです。

「がっはっはっ！こりゃ勝ったなっ！」

で、あつちの五月蠅いのが居るチームは蠅、アンダーソン君、三原さんです。バスケ部が二人もいますね。こっちの方が人数が多いのは大方、僕が居るからそのハンデでしょう。全く、人を見掛けではんだんしてはいけないと教わらなかったのでしょうか？

「すごいな、あんな奴居たのか。」

「歩、知らなかったのですか？僕と歩を運んでくれるのは大抵アンダーソン君ですよ？」

おかげで、結構仲が良いです。

「アンダーソンって言うのか？」

僕たちが喋っていると、ひょっこり平松さんも入ってきました。

「本当は・・・下村くんなんだけど・・・どう見ても外国人だから・・・。」

正確には外界人です。あの人、冥界人なんですよ。D級ぐらいの強さですが。

「あんだけイケメンならモテるんだろうなあ。」

「ええ、かなり人気ですよ。ね？平松さん。」

「うん・・・すごく・・・人気あるよ・・・ごめんね。」

なんか急に謝ってきました。

「えっと、どうしました？」

「私・・・運動オンチだし・・・足・・・引っ張ると思うから・・・私のせいで負けたら・・・。」

「大丈夫ですよ。体育なんて体を動かすのが目的ですから。別に勝ち負けにこだわる必要がありません。」

「・・・うん。ありがとう・・・鑓くん。」

「よし！相川勝負だ！まあ、勝ち目はないけどなっ！こっちはアンダーソンと三原。バスケット部員が二人もいるんだし！」

・・・あの蠅は、空気も読めないのですか？

友紀さんがボールを持ってセンターサークルへ。ジャンプボールは織戸と歩です。

「歩、ちょっと良いですか？」

「お、なんだ学年一位。作戦か？」

「あとで殺します。で、ジャンプボールですが……わざと負けてください。」

ひそひそです。作戦ですから。

「別にかまわんが……何故だ？」

理由？そんなの

「歩がジャンプボールに勝ったら、僕たちが動かなくてはならないではありませんか。」

「お前が楽しただけかよっ!!?」

「おい、相川ー、はやくしろー。」

と言うわけでスタート。僕の指示下通り、歩はジャンプに負け、僕の予想通り、三原さんにボールがいきました。

「いっくよーん。」

余裕と言うわけですか。残念、こついう、多数でやるスポーツでは全てが僕の手のひらの上です。学年一位なめないでください。

「三原はやばい！マーク付け！早く！」

「いや、もう付いてますけど?」

「鑢じゃ役に立たねえ!!」

カッチン!

フフフ……、そうですか。役に立ちませんか……。良いでしょう。僕の本気と言う奴を見せてやります。

「かなみには二人付いた方がいい……。ってあれ?」

今、僕の手にはボールがしっかりとあり、ドリブルしています。

「え……。うそ……。」

「ハア、誰が運動神経が悪いと言いましたか。」

カットぐらい、するの訳ないです。

「朧!パス!」

因みに今の僕の立っている場所は真ん中の線より内側、つまり、自分のゴールの方に居ます。

「歩!パス……。しません!!」

「なんでだよ!?!」

そのままシュート。はっきり言っておきましょう。僕のシュート可

能範囲は・・・

「全域です。」

弧を描いてボールは当たり前のように敵軍のゴールに入りました。

シーン。

場がとても静かになりました。

「や、鑢……。」

む、やり過ぎましたか？某バスケマンガの奇跡の世代と言っのの真似を試みたのですが……。

ん？三原さん？どうして僕の後ろをそんな・・・ハッ！？殺気！！

「鑢！是非我がバスケ部へっ！」

「アンダーソンくん、ならびに好奇の目で見ている部活を頑張っている素晴らしい人達。忘れていませんか？僕は体力がないのですよ？」

「……そ、そうだったー！！」「……」

「くっ！天は二物を与えないのか。」

いえ、体力を代償にした結果が、この運動神経です。

それから、今のシュートでちょっと疲れた僕は普通に退場。平松さんと外でバスケットを見ていました。うん、久しぶり・・・というか、初めて体育の授業を最後まで受けた気がします。あ、そう言えば、

また調理実習があるらしいです。ハルナがまた来るようですが・・・
、どうしよう、嫌な予感しかしない。

『私もです。その日は学校を休みましょう。』

『駄目です。休んだら、僕は留年です。』

『・・・難儀ですね。』

『はい、保健室に逃げ込んでも、きつと連れて行かれます。』

・・・ハア~~~~~。

どうやら、歩と友紀さんはプラネタリウムにデートに行くようです。
学生のデート先がプラネタリウムと言うのはまあ、微妙かもしれませんが、
せんが、これでお互いの距離が縮まるのはいいことだと思えます。

で、別にデートに行かれるは大変よろしい事なのですが、気のせい
でしょうか？さつきからセラが僕をジーツと見てくるのですよ。こ
うなんかを期待する感じ、と言いますか。因みにハルナは二階で石
像になってます。何をした歩。

そついうえば、歩が出て行くときもどこか羨ましそつに見ていまし
たね。・・・あ、なるほど。

「セラ、僕たちも行きますか？」

「えっ!??ど、どこにですか?」

「プラネタです。」

「い、いえ、別に行きたくは……。」

セラさん、目が泳いでます。宇宙が好きなら素直に言えばいいのに。

『バカですね。やはり、そういう所はまだ直ってませんか。』

『?』

「では、ごうしましょう。歩たちを尾行するのです。」

「……そういうことなら。」

「色白さん！あたしも行くぞー！」

ん？まあ、大人数の方が良いでしょうね。

「……ハア。」

何故かセラがため息をついてました。

『なんと言うか、まだまだ、鈍いですね……。』

第19話 やっと気付きましたよ（後書き）

朧「あとがきコーナー！」

フレイ「イエー！！！」

朧「と言うことで、まず、原作との変更点を挙げてみましょう。

セラが吸血忍者に襲撃されたが、怪我しなかった所。

伊織さんが転校してきた時は実は原作では、あの時間帯は昼放課なのですが、今作では都合上、朝になっております。

ですかね？たぶん。」

フレイ「今回はどっちかと言うと日常を描いた感じかな？」

朧「そうですね。はい、あとがきコーナーおしまい！」

フレイ「ええ！！！？」

朧「アンケートの途中経過発表です。」

作者「どもー、では、さっそくいきますよー！」

ユー 17票

セラ 22票

クリス 1票

ネネさん 1票

サラス 4票

七実 2票

ハルナ 1票

平松さん 3票

そして

トモノリ 1票

ここであましたトモノリさん。

臃「おー、ユーは上がってきましたね。セラのヒロイン入りはもうかくじげぶらー!!」

作者「貴様！何を見ている！前は見逃したが今回は見せないぞ！」

臃「うっさい。見ても見なくても、ここでの僕と本編の僕は関係ないから良いのです!!」

作者「むう……。」

七実「ところで。」

朧「はい？」

七実「気のせいでしょうか？私の票数が上がっている気が……。」

朧「上がっていますね。まあ、良いじゃないですか。」

七実「まあ、良いですけど、まさか、この作品で私に一票入れる度量の持ち主が現れるとは思いませんでした。」

朧「……どういうこと？」

七実「いや、万が一、私はヒロイン入りしたら、今よりもっとカオスになるとは思いませんか？」

朧「……（ダラダラダラ）」

七実「まあ、私は構わないのですが。」

作者「と言うわけで、作者の予想を遥かに上回って、投票数が多いのでアンケートは次回までにします。投票してくれた皆様、ありがとうございます。」

朧「合計52票ですね。感謝感激雨あられです。」

七実「まあ、ほとんど決まったも同然ですからね。最後までいろいろかけた人に入れても良いかもです。織戸さんとか、歩さんとか、頭領さんとか。」

朧・作者「全員男じゃねえか!!!」

フレイ「最後まで見てくれてありがとうー！！感想とか待ってるよ！
」

朧・七実・作者「「意外なのが締めやがった！！？」」「」

舞識「ぐす……出落ちキャラだった……私……。」

朧「……ご愁傷様。良いじゃないですか、出番がないわけではな
いのですよ？」

舞識「作者あ……許すまじ……。ぐす……。」

作者「！？（ゾクウ）」

第20話 夜の王は予想以上に強いですね

恒例行事みたいになっただけなので一応、やっておきます。こんにちは、臃です。

今は、プラネタに行くための準備をしています。お金よし、服よし、鎌よし。うん、完璧です。あ、これを機会にちよっと僕のメインウェポンである『鎌』の説明をしちゃいます。別に、説明するタイミングを失ったからでは断じてありません。

僕の鎌、大・中・小とありますが、まず、小から説明します。小鎌は6本あり、某独眼竜見たく持つて使います。もちろん、接近戦でも使えますが、基本は投げて使います。ブーメランのように戻ってきます。しかも、この小鎌、普通の鎌ではなく、刃が対照的に付いています。こうすることで、どこでも斬れるようにします。大きさは、草を刈る鎌と同じくらいです。次に、中鎌です。これは、まあ、有っても無くてもどっちでもいい感じですよ。投げてよし、斬ってもよし。本数は4本。何故4本か。小鎌、大鎌を作っているときにでた余り物で残さず使ったら4本になった。それだけです。・・・哀れ。大きさはフランスパンよりも少し大きいくらい。最後に大鎌ですが、これは斬る専です。投げたら、僕がスツパリいっちゃいます。で、この大鎌の最大の特徴が、切れ味とそのサイズです。まず、切れ味ですが、鉄もバターみたいに斬れます。この前、ダイヤモンドがスツパリいっちゃいました。斬れぬものはありません！斬鉄剣みたいですね。次にサイズですが、僕の身長は三分の二くらいです。あ、僕の身長は165cmです。つまり、110cm。おお、やはりでかい。しかも、大鎌には細工がしてあります。ま、これは今後のお楽しみに。

はい、説明終了！

『さっそく行きましょう。』

『あれ？意外と楽しみだったりします？』

『はい。私の生きていた時代は宇宙という言葉すらありませんでしたからね。普通に宇宙には興味があります。』

『・・・すばらしい。七実が、あの、ブラコンでオタクでエロゲ・ギャルゲ好きで痴女で変態な七実が、まともなものに興味を持ちました！！やったね！！やったよ皆！！』

『・・・そうですか。そういう認識ですか。良いでしょう。』

ん？なんか七実が俯いてぼそぼそ何かを言ってますよ？あれ？こんなところにベッドなんてありましたっけ？

『さ、臆。どうぞ。』

『いや、何当たり前のようにベッドに入ってるんですか？というか、何故体にシーツを巻き付けているのです？』

『そんなの、裸だからに決まっていますではありませんか。』

『ブツ！ハア！？何故に？』

『いえ、認識を変えてやろうかと。』

『どう考えたらそのような答えが導き出されるのですか！！』

『さあ？』

『手前の事だろ！！』

『まあ、あれです。私も悲しいのですよ？相棒であり、人生共同体、運命共同体であり、まあ、親密に関係になった男二人目ですからね？まあ、化け物なりなんなり言われてきましたが、これでも普通に人間ですので、傷つくときは傷つきますよ。』

・・・急にシリアス。そして、若干落ち込んでいる七実様。・・・
・やりすぎちゃいましたね。落ち込んでいる七実の頭に手を乗せ、

『すみませんでした。確かに、女性に向けて言って良い言葉ではありませんでしたね。』

頭をなるべく優しく撫でながら謝る。反省です。

『もう、言いません。』

そうでしたね。いくら、現世に来て、キャラが大破していても、七実七実でしたね。あちらの世界では化け物なりなんなり言われていたようですが、人間である事には変わりはありませんね。僕のミスです。

七実から手を離そうと

『待って下さい。』

『はい？』

どうしたのでしょうか？何かあったのでしょうか？

『もう少しこのまままでお願いします。』

『は、はあ……？』

『あれです。仕返しです。』

なるほど。仕返しですか。なら、続けなければいけませんね。

『（……私は、何故あんなことを……？）』

というわけで、七実が良しというまで撫でました。最後の方はこっちが恥ずかしくなってきました。以上。

……さて。

「セラ、ハルナ、準備は？」

「問題ありません。」

「早く行くぞっ！」

大丈夫みたいですな。

「分かりました。では、これを付けてください。」

そして僕は、ある物をセラとハルナに渡す。

「……これは、サングラス？」

「そ、サングラスです。尾行と言えばサングラスとスーツでしょう？ですが、このご時世スーツで昼間っから町を歩いていては逆に目立つので、サングラスだけです。」

「色白さん、やけに本格的だな？」

「ええ、その通りです。」

「何故ですか？」

何故、と聞いてきますか。ふむ……

「セラ、僕はですね。友紀さん……いえ、メイさんの幸せは極力応援します。」

「はあ……。」

「歩が結婚を認めれば、僕の財力と裏の力を駆使して、応援する気でもいます。」

ハルナが「んなっ！」とか言ってますが、続けましょう。

「その結果、間接的に歩を応援する事になるでしょう。僕はそれで良いと思ってます。」

「言いたい事が分かりません。つまり、どうということですか？」

「まあまあ、慌てないください。もう終わりますから……ですが、歩自身の幸せを応援するかどうかは別です。つまり……。」

「つまり?」

「歩の幸せは全力で妨害します!!!!!!」

「ババーン!言い切りましたよ!

「なるほど、なんとなくわかる気がします。」

「.....」

「おお、予想以上に冷たい目線で見られますね。」

「色白さんはアユムの事が嫌いなのか?」

「ん?いいえ、むしろ結構好きな部類ですよ?恩情も感じてますし。」

「

「なら、どうしてそのような事を?」

「ん?まさか.....」

「まさか、真面目に捉えちゃってますか?僕が歩を妨害するのは、今に始まった事ではありませんよ?ハルナが、ユーが来る前からすでにやっています。」

「そうなのですか?」

「はい、まあ、何故妨害するのかと聞いてみると.....面白いからです。」

「面白い？」

「ええ、面白いのですよ、歩をからかうのは。ですが、妨害はしても、けして阻止はしませんよ。」

「何故ですか？」

「何故って、妨害はあくまで妨害。自分で乗り越えれば良いでしょうが、阻止は、ちょっと違うでしょう？妨害はあくまで邪魔するだけ。阻止は、本気で止めると言うことですから。・・・さて、行きましょう。」

「はい。」

「うんっ！」

んー、プラネタはやっぱりいいですねー。良く眠れそうです。

『駄目ですよ。寝ては。デートですよ？』

『え、これデートなんですか？』

『・・・はい、女性の方2人というのは少々異例ですが、立派なデートです。』

『おお、そうだったのですか。すみません、気付きませんでした。』

『ハア……、これは鈍いとかいうレベルの話ではなく、ただ単に無知なだけです。まあ、あなたの人生を見る限り、デートをした事が無いらしいので、仕方ないと言えば仕方ないですけど。私からのアドバイスです、女性の方と一緒に遊びに行くのなら、よっぽどの事がない限り、デートと思って良いですよ。』

『アイアイサー。ご教授、ありがとうございます。』

「あーっもうっ！赤い彗星はいつだよっ！」

ハルナが騒ぎ始めました。どうしましょう？

「それに、なんだあの北斗七星！死兆星が足りないじゃん！」

よし、突っ込みましょう。これは突っ込まずにいられません。

「ハルナ、少し落ち着いてください。」

「そうですね。ハルナ、まず、赤い彗星は星ではありません。シャ専用ザクのことです。で、死兆星は見えなくて良いのです。見えるのは死ぬ人だけです。」

「でもっ！ナメツ 星のことすら言っていないじゃん！こんなこともあるうかとナメツク語を専攻したのに！」

そんな専攻が出来るのですか。マテライズ魔法学校は高性能ですね。

『私も話せますよ？ナメツク語。』

『……ははは、冗談が冴えていますね。』

』でしょう？フッフッフ。』

・・・七実が言うと、冗談だと見抜くのがとっても難しいです。一瞬、ホントに話せるのかと思ってしまいました。

』いや、さすがにナメック語は話せませんよ。』

』と言いますけどね、七実なので、出来るのかなと思ってしまったりするのでよ。』

』まあ、出来ない事は無いと思いますが、逆に言ってしまうと、それはあなたもですよ？』

』マジッすか！？』

』・・・臃、あなた忘れているかもしれませんが、あなたは私の能力を持っているのですよ？まあ、今なら、私が居なくても、私ぐらい強いでしょうが。』

』忘れてはいますが、七実が居なくても強いとはどういうことですか？』

』簡単なことですよ。いくら私の能力があろうとも、経験までは補えませんし、私が居なくても、臃が見た物は既に万全の状態なんです。そういうことです。』

』つまり、僕は七実抜きでも素で強いということでしょうか？』

』その通りです。』

ほほう、そんな事になっていたのですか。

『まあ、あなたの体から出て行く気は欠片もありませんが。』

『こちらも、出て行かせる気は欠片もありません。』

・・・ハルナがさつきからイスカンドルとか言ってますが、お願いですからフィクションとノンフィクションの違いくらい区別してください。七実でも出来るのに。あなたの将来がお兄さん、とっても心配です。ほら、歩もとってもツッコミたそうにしています。さて、突っ込みましょう。

「ハルナ、ベガではありません。ペガです。」

プラネタが終わり、歩たちはレストランで食事するようです。僕たちはハルナのお弁当です。あ、セラも作ってましたね。で、さつきからマイルさんがちらちら見てきます。まあ、僕は気配を消しているのばれていないと思いますが、セラとハルナは気付かれていますよね。そんなにバカでかい荷物を抱えていたら、せっかくサングラスを掛けているのに、ばれてしまいますよ。

『いえ、サングラスを掛けただけでは、さすがに隠密効果なんてありませんよ。』

『・・・え？本当ですか？』

『臆って、結構天然ボケですよ、サングラスにそんな便利機能ありません。』

『えー、じゃあ、段ボールは違うのですか？あの某伝説の傭兵も使用していましたが？』

『・・・すみません。その質問には答えにくいです。何故、あれでばれないのかとても不思議なのですが、結果が付いてきているのでなんとも。』

『確かに、そうですね。普通、ばれますよね。』

・・・おお、脳内でとても平和な会話が展開されています。

『そう言えば臍。』

『はい？』

『そろそろ、押し入れにゲームが入りきらなくなってきたので、なんとかしていただけると、私はすごくうれしいです。』

『とってもダイレクトにお願いしてくれますね。ま、何かやっておきますよ。』

んー、確かまだ、空き部屋ありましたっけ？いや、無いでしょうね。うーん。どうしよ？

『二次元的にいったいなのか、三次元的にいったいなのか、どちらですか？』

『二次元的にです。』

あ、なるほど。それなら・・・、

『わかりました。まあ、なんとかかとききます。』

『よろしく願います。』

棚でも買って、配置しましょうか？うん、それが良いですね。・・・
今度、夷さんに作ってもらおうかな？何時でも呼び出せる札を貰いましたし、四次元的な棚を作って貰えば、もう、置き場には困らないでしょう。うん、それが良い気がしてきました。

「ところで、セラ、ハルナ。」

「なんだ？」

「何でしょう？」

「そのやたらでかい荷物は何ですか？」

「お弁当です(だ)」

・・・大量ですね。僕の食欲は、そこまで無いというのに。生きて行く上で、必要な栄養は、最近良く出回っている栄養ゼリーで十分です。世の中、便利になりました。

『いえ、駄目ですよ？しっかり食事してください。』

『え？は、はあ・・・。まあ、七実がそう言うならそうしとききます。』

・・・ん？歩がこつちに来ましたよ？

「お前ら、なんで此処に居るんだ？」

「た、たまたまに決まってるだろっ！」

「嘘つけ。セラ、どういうことなんだ？」

「強いて言えば、あなたの幸せをどうにか妨害できないかと考えた結果がこれです。」

ハモりました。いえーい。

「なんて悪趣味な！」

「デートなんて、ハルナさん絶対許さないからな！」

「なんでだよ！？つうか、臃！何でお前まで邪魔するんだ？」

「え？臃って誰ですか？ワタシニホンゴワカリマセーン。」

「分かってるじゃないか！その趣味の悪いサングラスを外せ！」

「はい。」

外しました。どういう反応をしますかね？

「いや、ホントに誰だよ！？」

今の僕の顔は、あれです、適当に弄り回しました。どうなっている

のでしょうか？七実様分かりますか？

『いえ、分かりませんが・・・周りの反応を見ればどういう顔かは大体予想が付きます。』

周りの反応・・・？

一般の方々・赤面（男性は睨んでくる）

セラ・めっさ赤面

ハルナ・赤面

歩・睨んでくる

メールさん・珍しい物を見た様な目

うん、分かりません。

『まあ、元が良いからでしょうね。』

『七実、それは自画自賛だということを理解してますか？僕とあなたは似過ぎているのですよ？顔とか。』

まあ、冗談はこの辺にしておきましょう。

顔をコネコネします。コネコネ。

「臃です。こんにちは、歩。」

「ああ、こんにちは、じゃないだろ！？なんでお前まで居るんだよ

「!!」

「そんなの、歩の幸せを妨害するために決まっているじゃないですか。」

「……そう言えば、最近は無かったが、お前はそういう奴だったな……。」

む、歩は何か勘違いしていますね。

「違います。歩にだけです。」

「最悪だあ!!」

「知ってるよ。」

おお、条件反射でつい言ってしまいました。

この後、なんやかんやで屋上で弁当を食べる事になりました。え？表現が雑？だって、本当になんやかんやなんですから、なんやかんや以外で表現できないのですから、しょうがないでしょう？屋上に上がりました。うん、暗いですね。

「友紀、すまん。」

「ん？ああ、いいよ別に……満足してるぜ！少しでも、一緒に居られたから……はは。」

……あ、そう言えば、メールさんも吸血忍者でしたね。ならば、任務を放棄したセラを良くは思っていない筈です。が、メールさん

は怒った事をありのまま評価できる人です。恐らく、セラを襲ったりはしないでしょう。そんな方ですからね。ホント、サバサバした良い女性ですよ。お弁当にドレッシングを掛けてしまうのが非常に残念ですが。

『・・・まさか、メイルさんの事を？』

『それは無いです。』

はつきり言い切れます。理由は簡単。形式上、メイルさんと歩は結婚していますからね。

というか、セラがさつきからメイルさんを警戒していますね。まあ、気持ちには分かりますでもありません。自分を殺す可能性がある人物が目の前に居たら、そりゃ警戒しますよね。まあ、僕はどうか知りませんが・・・少なくとも、普通の人は誰でも警戒しますよね。まさに一触即発の空気です。どうでしょう？

『傍観です。』

『もちろんです。僕は、そこまで深くこの件に関わる気はありません。』

これは、セラ自身で乗り越えるべき問題です。まあ、本当にやばくなれば助太刀しますけど。

・・・あ、やば。忘れてた。

「あー、すみません。ちょっと良いですか？」

「なんだ？」

「実はですね・・・、ちょっと、用事がありまして、その用を済ませて来て良いですか？」

「用って・・・なんだ？」

「ちょっと、今日発売のゲームがありまして。」

もちろん、欲しているのは七実です。

「そうか・・・。」

あれ？なんか歩が今までにないほど、慈愛に満ちた顔でこっちを見て来るのですが？気持ち悪いですね。

「で、行ってきても良いですか？」

「ああ！行ってくるがいいさ！」

何故にそんなに盛り上がっているのか分かりませんが、行ってきて良いというのなら行ってきましょう。

『すみません、デートの途中に・・・。』

『いえいえ、これぐらい、良いですよ。』

普段は少々、『アレ』ですが、七実が僕の恩人です。まあ、家族みたいなものかもしれませんが、恩人の頼みは基本何でも聞くのですよ、歩を除いて。

「じゃあ、行ってきますね。皆さんはここで楽しんでください。僕

の分を残しておく必要はありません。では。」

目指すは・・・非常に行きたくありませんが、ゲーマーです。七実が買うゲームなんて、そんなもんです。まあ、引きも軽蔑もしませんが。

『ありがとうございます。』

さて、買いに行きましょう。

目的のゲームを買って、色々と物色中です。いや、七実だけがゲームをする訳ではありませんよ？僕だって普通にゲームもしますし、マンガも読みます。ジャンの愛読者ですよ。

ん・・・？なんか今、矢鱈でかい気配を感じたのですが。どこかで感じた事がありますよ、この気配。

『あ、わかりました。この気配はスター ラチナの気配です。』

『それです。』

って、あれが出てるってことはちょっとまずいのではないのでしょうか？あ、消えた。

『何があったのでしょうか？』

『さあ？まあ、無くなったのなら、それで良いでしょう。・・・あ、ブラックロックシューターが発売してますね。買いです。』

因みに発売は25日だったはずです。

ついでに、アニメイにも寄って行きます。マンガを買うのです。

『七実はほしいものとかありますか？』

『そうですね・・・、今は特にありません。マンガは読みませんし。

』

意外でしょう？実は、七実はマンガや小説は読まないのですよ。この前、何故かと聞いてみたところ

『テレビの中で動いている事こそ、この時代のいいところです。本では、私が生きている時代と変わりがありません。』

だそうです。要するに、科学を味わいたいようです。って、ん？今の気配は・・・。

『夜の王とかいう、ちょっと痛い人の気配ですね。どうします？行きますか？』

『まあ、鎌の調整もありますからね。少し、相手をしてみましょう。』

というわけで、マンガを買って（買ったのはソウルーターです）『足軽』で空中を歩いて移動します。え？お気楽？そりゃそうですよ。だって、僕的には今回はお試しですから。確かに、えーっと、夜の王でしたっけ？その人は強いですけど・・・ただ単に強いだけですからね。そもそも、僕に勝てる人は、知っている限り、一人だけです。誰か分かりますか？

『ああ、あの人はですか？』

『はい、あの人はまだ成長途中ですから、会うたびに強くなってます。そんな人に、勝てませんよ。』

負けましたことありませんが。

はてさて、ようやく、空中散歩の終わりが見えてきたのですが……。

なんで、歩たちはいるのでしょうか？

今まで、ゆっくり歩いてきた事に激しく後悔しました。ああ、セラも怪我しちゃってるじゃないですか。

とりあえず、僕は夜のなんちゃらに、小鎌を一本投げつけました。

「ハア……、歩たちは厄介事が好きですねえ……。」

く歩く

臃がゲーム（恐らくエロゲだろう）を買いに行き、俺たちはハルナが作った弁当を皆で突いていた。ハルナの弁当はやっぱり最高だな……途中、セラの餃子（どこからどう見ても壺）を食べた友紀があの魔装兵器を発動させた時は本気で焦った。セラには少し自重して貰いたいのだが……駄目だな。あの笑顔になったセラにその現実を突き付けることは俺には出来ない。で、セラはというと、壺を切り分けていた。「後で臃にも……。」という言葉が聞こえた。さらば臃フォーエバー！

セラがたこさんウィンナーと称して出てきたのは眉毛付きの生きたタコだった。何故、眉が付いている、そして眉があるからなのかやけに顔が凜々しい。しかも、セラ曰く「天然もの」だそうだ。そのタコ（デビルフィッシュと言うらしい）が逃げ出し、捕まえて貰ったのだが、その捕まえた奴がああ『夜の王』だったのだ。で、今は夜の王の後を付けている。つうかあいつ、意外な事にペットショップで働いていやがった。動物が好きらしい。後を付けていたのだが、途中でハルナが痺れを切らして

「大先生はどこだ！こんの変態！」

と、怒声を上げてしまった。それに合わせて、夜の王は人込みから消えた。

「歩つ。」

「わかってる。いくぞ。」

くそ、こうなつてしまえば、何が何でも捕まえないといけない。急に全力疾走した俺たちを不審そうに見てくるが、そこは空気を讀んで道を開けてくれ。分かるだろ？分からないか。奴は軽い足取りで逃げていた。・・・誘ってるのか？まあ、罠とかがあるなら逆に都合だ。それだけでも手がかりになるからな。

いくつか角を曲がり、細い路地に入ったとき、ハルナが足を止める。そこは、飲食店の間に挟まれた、細くて長い、袋小路だった。悪臭が漂っている。きつとごみ捨て場だろう。そこに、相変わらず微笑を浮かべ、ポケットに手をつ突っ込んでだらけた立ち方をした夜の王が居た。

「ユークリウツドの姿が見えないな。彼女が一番俺を恨んでいるは

ずだが……。」

「ユーは……。」

「まさか、冥界に帰ってしまったのかい？」

「ああ、恐ろくな。」

刹那、ニコニコしていた顔が修羅のごとく変貌した。瞳には憤怒の色が見える。その瞳に見据えられただけで、鳥肌が立ってしまった。が、その表情も一瞬だけで、直ぐに元の人を小馬鹿にしたような顔に戻る。

「よし、君たちを殺そう。」

バカにしたように夜の王は言った。セラは赤い瞳で夜の王を警戒している。

夜の王が一步近づくだけで威圧感が全身を襲う。

オレは夜の王ではなく、周囲を警戒する。セラも同じく周囲を警戒している。もしかしたら、罠があるかもしれない。だが、ハルナは・

「とにかく一発殴らせろおおお！」

拳を振りかぶっていた。その手を咄嗟に掴む。

「バカ！ハルナ！」

「止めんな！」

「そいつは、俺が殴る。」

畏に突っ込むなら、死なない人間が適任だ。ハルナを押しつけ、夜の王の懷まで飛び込んだが、同時に、顎を蹴りあげられた。

なんだ？何が起こった？全く見えなかったぞ。目の前に青い霧が現れたと思ったら、次は頬に衝撃。顔面を何かで強打された。それも何が起こったか分からなかったし、見えなかった。だが、それでもお構いなしに、俺は踏みとどまって殴りかかる。で、次は脳天に衝撃が走った。かかとを落とされたようだ。地面に這いつくばる。

「君は確か、ゾンビだったね？」

「お前も確か、ゾンビだったな。」

「じゃあ、君は意味ないな。残りの二人を殺そう。」

・・・マジかよ。俺はどこかで安心しきっていた。こんなところでいきなり決着を付くに来るなんて思わなかったからだ。ちよつと顔を見せてすぐ逃げると思っていた。

「理由を言え。」

「理由か・・・そうだね。退屈しのぎになるし、殺しながら説明しよう。」

夜の王はそう言うと、一瞬でハルナの背後にまわり、ポケットから出した右手がハルナに振り下ろされる。

その右手を、セラが切り落とした。夜の王はハルナとセラの中間に居た。つまり、ハルナの背後はセラの前だ。さすがセラだ。

「秘剣、燕返し！」

切り返し。さすがにこれは回避できないだろう。

「思ったより速いじゃないか。」

次の瞬間、何故かセラの背中から血が噴き出し、膝から崩れ落ちる。また何をしたのか分からなかった。やばい、今俺は委縮している。訳が分からない。

「理由だったね。結論から言おう。ユークリウッドをこの世界へ引きずり出すためだ。」

「その結論だけ言われても、全く理解できないね。」

「君たちはユークリウッドと仲が良さそうだった。だから、君たち二人ほど殺せば　　っ!？」

夜の王が言いかけていたが、突然、上から何かが降ってきて、それが、地面に深々と刺さった。これは・・・鎌？だが、ユーののではない。大きさを例えるなら、草刈りがまと同じくらいだが、降ってきた鎌はそんなちやちな物じゃない。その鎌には、殺すこと以外を目的としない。そんな雰囲気があった。と、そんな事を考えていたら・・・

「ハア・・・、歩たちは厄介事が好きですねえ・・・。」

聞き慣れた、虚弱で病弱な居候の声がした。

「臃」

んー、何でまあ、こんなに厄介事になるのでしょうか。不思議ではありませんよ。これもう、ユーが居る居ない関係ない気がしてきました。

「簡単なことです。臃も十分T L A V E Rの体質だからです。」

「待って下さい。それは、「誤字」ですよ？そうだと信じたいです。」

「？T L A V E Rの体質でしょう？」

「はい、トラブル体質です。」

「ええ、T L A V E Rの体質です。」

もういいです。このまま言い合っても、平行線な気がしてきました。

「臃か？」

「はい、臃です。んー、彼は夜の王ですね。まあ、知ってて来たのですが。うん、試し切りにちょうどいい。」

投げつけた鎌を鋼糸で回収し、各三本の鎌をそれぞれの指の間に挟む。

「君は・・・臃君だったかな？確か、病弱でも『死神』と異名取るほどの人間だったね。君は、ユークリウッドと特別仲が良かったね？なら、君を殺そう。」

「僕を殺せますか？」

瞬間、目の前に青い霧が現れる。実は、この人の能力は良く分からないのです。霧が発生したところで何か起こるのでしょうが、何が起こるかは全く分かりません。ですから、視ます。ぎょろりと。じつと。

そして・・・

「っ！？」

風圧、瞬時に忍法『足軽』を使用し、受け流す。今ので理解しました。

「なるほど、霧から霧に移動するのですか。それも瞬時に。」

厄介、実に厄介な能力。それでは、1対1での攻撃を当てるのは難しいですね……。音で攻撃することも考えましたが、耳をどこかに飛ばされたら脳に直接ダメージを送ることも叶いません。体にダメージを与えても意味ないですし。

「やはり、君は此処で殺しておくべきだな。」

瞬間、空気が変わった。空気そのものが殺気に変えられたようなものですね。

瞬間、僕は全方位を霧に覆われました。

「朧っ！！！」

・・・拙いですね。あの夜の王さま、予想以上に戦い慣れてやがります。何故拙いのか。それは、服を掴まれているからです。これでは、足軽など意味をなさない。いくら僕の反射神経でも、全方位からの攻撃をかわし続けるのは、いささか、いや、かなり無理があります。

「(っ、どうする？服を掴まれているから一発当たったらその後の攻撃は全て当たります。服を破ることも考えますが、頑丈過ぎて叶いませんし、どうし

」

『臃、後ろです！』

衝撃、後頭部を殴られました。背後にぬるっとした感触があります。その後、一発貰ったおかげでほとんどの攻撃を貰いました。骨も、結構逝ってますね。

「ゴフ……。」

「臃！」

誰かが、僕の名前を叫んだのと同時に、僕は引っ張られました。

「あ……、セラですか。すみません。」

「謝罪は後で良いです。それよりも、協力して、奴を捕まえましょう。」

「いえ、大丈夫です。」

もう、彼を嘗めるのはやめます。悪刀を胸に突き刺し、骨肉細工で体内に取り込む。こうすることで、戦闘中に引き抜かれると言うことは無くなるはずですよ。

ですが、悪刀を使ったところで、状況は変わりません。近接攻撃が、小鎌では当たらないのは事実です。……よろしい、ならば……

「中鎌です。セラ、危ないので、僕に近づかないでください。」

中鎌は、4本あります。が、4本を全部手で使うわけではありません。2本は両手に、もう2本は……糸で操ります。

「へえ……君は曲芸師か何かかい？」

「ノン、唯の病弱な人間ですよ。」

言いつつ、2本の手に持った鎌で斬り掛かるが、彼は霧に覆われ、消える。しかし、

「っ!？」

出てくる所は大体予想が出来ます。故に、そこに糸で操る鎌を斬らせれば……

「なるほど、さっきまでの君は、本気じゃなかったというわけか。」

「いえ、本気でした。その武器で出せる最大の本気です。」

正面に霧、それをかわす事は容易。ここで、小鎌と中鎌の違いが出てきます。小鎌は回避した後での攻撃ですが、中鎌は、回避中に攻撃できます。よって、回避後の隙を突かせません。

「・・・やるね。」

「いえ、まだ未熟ですよ。」

両手の鎌を構え、糸の鎌を僕の斜め上にそれぞれ配置する。

「でも、此処までの様だ。やれやれ、この世界の守護者は良い嗅覚してるよ。」

「ですね、ではさようなら。もう会いたくないです。」

「俺の方はまた会いたいと思っているよ。君を・・・殺すために。」

尚更、遠慮したいですね。

『今回は、どうして手を抜いたのですか？』

『鎌になれる為。まあ、それで死にかけてちゃ元も子もありませんが。』

『まったくです。』

「報告にあつた男を発見した！救援を頼むっ！」

この声は・・・サラスですね。ああ、そう言えば、彼女は部隊長でしたっけ。興味ありませんが。

「残念ながら、捕まる訳にはいかないんだ。俺はまだ・・・死にたいのですね。」

「ならば、良い事を教えてあげます。僕は、不死でも殺す事が出来ますよ?」

「そうか、なら、期待しているよ。」

そう言つて、彼は姿を消しました。なるほど、あの霧はそれなりに濃度が要るようですね。まあ、それぐらいの事はあつても良い気がします。

『あれはあれで、十分チートですよね。』

『ですね。ま、次は負けませんよ。』

彼の動きは全て見取りましたし、ね。能力は・・・無理なんですよ。僕の体では。

『魔力が、無いですからね。』

『まあ、骨肉細工で、魔力のある人の姿になれば、使えますがね。』

「絶対に逃がすなっ!」

それにしても・・・、よく、僕の前に現れる事が出来ましたね。保守派の皆さんは。まさか、僕の殺戮対象になっている事を忘れていたのでしょうか?

む、セラがサラスに喋りかけようとしています。・・・!拙い!

サラスが、振り払った水の剣を鎌で受け止める。

「なっ……。」

「え……。」

「ハア……、危なっかしい。セラ、あなたは今や吸血忍者にとつても敵になっっているのですから、昔の仲間でも今は敵なのですよ？ そのところ、良く考えてください。」

「その通りだ。目障りだ。消えろ、セラフイム。」

「その言葉、そっくりそのまま、あなた方にもお返しします。」

「何……？」

「まさか、サラス、あなたは忘れたのですか？ 僕の殺戮対象……いえ、言い方を少し変えましょう。大量殺戮対象の中に、吸血忍者の保守派が入っているのですよ？ よく、僕の前に出て来れましたね。学校では、何もしませんが、今は別。吸血忍者としてくるなら、今此処に居る方々だけでも、殺して差し上げますよ？」

「っ！ 総員、戦闘配置っ！」

「……ハア、興が削がれました。僕を相手にする事を判断するとは……。」

「もういいです。今日は疲れたので、またにします。あなた方如き、いつでも殺戮できますからね。」

悔しそうな顔をしていますね。あ、なんで僕がサラスに冷たいのかと言つとですね、あれです。仕事とプライベートは分ける感じです。

「なあ、一つ聞いて良いか？」

歩がサラスに喋り掛けてます。まあ、内容は大体分かりますが。

「なんだ？」

「何でセラにそんなことするんだよ。セラは何もしていないだろ？」

・・・歩と言う生物には、学習能力がないのでしょうか？あ、ゾンビだからしょうがないですね。まだ、吸血忍者の理屈が理解できませんか。そんなの・・・

「何もしなかったから、許せないのだ。」

何もしなかったからでしょう。そりゃあ。

「いいじゃねえか。一回ぐらい任務を断っても。」

・・・歩には、一回、吸血忍者について再教育する必要がありますね。その言葉は、吸血忍者の誇りを踏み躪る台詞ですよ。

『まあ、私にとっては埃ですけどね。』

『ええ、僕にとってもです。』

サラスは歩の胸倉を掴んだ

「嫌だからやりません。が通用する世界ではない。我々は命を賭しているというのに。」

ま、吸血忍者ばかり否定する気はありません。吸血忍者だって、辛い選択を選んできたのは分かっています。僕が気に食わないのは、掟任務を盾にして、どんな任務でもやるのが気に食わない。自分で背負うべき重みを任務と言う盾で防ぎ、軽減しているのが気に食わないのです。

「セラフイム、貴様の顔など誰も見たくない。二度と私たちの前に現れるな。」

「……まあ、いつかは言われることだったでしょうね。セラは、セラは大丈夫でしょうか。」

「……はい。」

その声は、震えていました

「……どうしましょう。何も言える事がありません。こんな時、何を言っているのか分かりません。僕は、仲間に武器を向けられるという経験は、ありませんから。そりゃ、刺客を送り込まれたり、依頼主に殺されそうになったりしましたが、仲間に殺されそうになった事はありません。まあ、仲間など、居なかったというのもありませんが……。」

「……とりあえず、」

「セラ、帰りましょう?」

「……はい。」

「……ハア、これから、大変ですね。そう、何が大変かと言うと、明日は」

調理実習なのです。

『しょうもないですね。』

第20話 夜の王は予想以上に強いですね（後書き）

朧「あとがきコーナー。」

フレイ「いえーい。」

朧「今回はギャグ少な目で、割と滅茶苦茶な話になりましたね。」

フレイ「しかも、戦闘シーンもダメダメだったね。」

朧「あ、あれ、僕の手抜き勝負です。」

フレイ「え？」

朧「まあ、あれです。ちょっとしたお遊び？」

フレイ「それで死にかけたと？」

朧「ザッツライト。」

フレイ「馬鹿だねえ……。」

朧「はいっ、と言うことで、あとがきコーナー終わり！」

フレイ「今回もっ!?!？」

朧「では、アンケートの集計です。今回でアンケートは締切りです。協力してくれた方々、本当にありがとうございました。」

作者「アレでしょう。最後くらいはっちゃけてもいいと言ったからでしょう。」

七実「私の方は何事ですか！！？この短い間に何故10票も票数が上がっているのですか！！？」

作者「・・・僕も予想外です。どうでしょう？ここまで人気があるのなら、ヒロインにすべきなのでしょう？ガチで悩んでいます。」

七実「いえ、私に言われても困るのですが・・・。」

臃「でも実際、作者は10票越えたキャラをヒロインにする予定だったそうですよ？どうするのですか？七実のヒロイン入りは本当に想定外ですよ？」

作者「と言うわけで、緊急企画、七実はヒロインするべきか否かです。」

七実「・・・まさか、私のためにここまでしてくれるなんて・・・」

臃「もし、ヒロイン入りしたら、カオスになりそうですね。」

作者「・・・ですが、まあ、そこまで変わらないと思います。七実がボケ、臃がツッコミです。」

臃「・・・言っておきますが、図っているわけではありませんよ？」

七実「ええ。」

作者「うそ!？」

朧「まあ、と言うわけで、七実ヒロイン入りすべきか否か、をよろしくです。自分で判断できない駄作者を許して下さい。」

作者「実際、刀語のキャラをヒロインにしても良いのかと、考えた結果です。不快に思う方もいるかもしれませんがね。」

朧「あ、ヒロイン入りに決定しているのは、ユ一とセラです。で、未定が七実です。」

作者「まあ、YES・NOと言っただけで十分ですので、ご協力お願いします。では・・・。」

朧・七実・作者「」最後まで読んでいただきありがとうございます。感想等お待ちしております。」

フレイ「私、終始、一票もなかった……。」

朧「あー、えー、まあ、ドンマイ？」

フレイ「うう……ぐす……。」

第21話 赤とは、僕にとっては死色です（前書き）

すみません、遅くなりました。

第21話 赤とは、僕にとっては死色です

・・・覚悟は、できました。

『・・・本当に良いのですか？もう少し放っておいた方が・・・。』

『いや、これは、先回しにして良い問題ではありません。誰かが、いえ、僕がやらねばいけないのです。』

そう、これは、僕のミスです。事態がここまで進んでいたというのに、気付かなかった僕のミスです。

『・・・分かりました。』

僕のミスは、僕が責任を取らねばなりません。だから・・・

「入ります。」

その瞬間、僕の目に映ったのは・・・

ダンボールが僕に雪崩れこんでくる瞬間でした。

「うにゃああああああああああああああああ！！！！！！！！」

どうも、絶賛ダンボールに流されている臃です。え？何故流されたか？簡単なことです。七実はゲームやDVDを買っているでしょう？しかも、まとめ&大人買い。つまり、結構大きいダンボールで送られて来るのですよ。で、送ってくる人物は、一般の配達員ではなく、随分前に一回だけ登場した忍びの方です。届けるのが速いからです。僕も速達よりもいいね！と思っていたのですが、その忍びの方、僕の部屋にポンポン、ダンボールごと放り込んで来るのですよ。それが問題です。僕が少し目を離しただけで、まあ、元から溜まっていたのもありますが、ダンボールが部屋の許容量を超え、こぼして溢れてきたというわけです。

『つつか七実！僕の責任でもありませんが！あなたの責任でもありませんからね！？』

『臃が放置していたのがいけないのです！』

『ですが！自分で買ったものぐらい自分で処理してくれてもガッ！？』

痛・・・！なんですか、何かで頭を打ちました。って、まさか・・・。

『七実、此処は今どの辺りですか？』

『えー、階段のスタートですね。』

僕の今の状況、

ダンボールに流されている。

・・・やばくない？流されながら、階段下りるとか、やばくない？

「ガッ、グッ、イダッ、ツッ、アガア！！？」

階段の段差に散々体を打ちつけた拳句、一階の壁に頭を激突させました。

わー、お星さまがみえますよー。

「何事だ・・・って、なんだこれ！？何でこんなにダンボールがあるんだ！？」

あー、この声は歩君だー。

『臃！しっかりして下さい！！！！！！！』

『ハッ！？』

おお、危ない所でした。お星様が見えていましたよ。

「あゆ・・・む。」

「臃！？どこに居る？」

「ここです・・・。」

そう言って、ダンボールの山から手を挙げる。

「大丈夫か!？」

「なんとか・・・、それよりも、お願いがあります・・・。」

「そんなことより早く治療を！」

「お願いです・・・。このダンボールを、このダンボールを・・・
・古紙回収に出しておいてください・・・。」

「ああ!・・・ああ?」

「頼み・・・ましたよ。」

「臃!？おい!そんなのが遺言で良いのかよ!！臃おお!！!」

『臃、絶るのは良いのですが、まだやる事がありませんでしたか?』

『・・・分かってます。気絶するのはその後ですよ。さてと・・・』

『

行きますか・・・。

「じゃ、歩。このダンボール全部、古紙回収に出しておいてくださ
いね。」

「謀ったな!！」

「お願いします。」

さて、どこまでできるか分かりませんが、どうして良いのか分かりませんが、やれることはやらないといけません。

「セラ、居ますか？」

・・・返事がありません。返事が無いということは、少なくとも、入ってきてほしくないと言う事です。そうですか・・・。僕は、ドアにもたれながら座りました。

「・・・僕が今から言うことは全部独り言です。気にしないでください。」

僕は欠陥人間です。感情と言うものが一部欠如しているのです。しかも、ユーに出会う前は、今よりもっとひどい状態でした。感情など、一切無し。人に出会っても表面上だけ好意的に接していましたが、内面では、何も思う事がありませんでした。つまり、笑顔を張りつけていたということですね。ですが、ユーに出会い、喜怒哀楽を学び、やっと、破綻人間から、欠陥人間になれたのです。今でも、まだ実を言うと、愛や恋などの感情があまり理解できませんが、それも最近では色々な人と接し、少し、ほんの少しずつですが、僕の欠陥が直ってきたんですよ。皆さんは、僕が強いか思っているかもしれませんが、そんなことはありません。僕という個人は、ユーを始め、歩、ハルナ、セラ、他にも大勢いますが、あなた方がいなければ、此処には居ませんでした。あなた方がいなければ、破綻人間は、とうの昔に、破滅していました。つまり、僕は、皆さんのおかげで、ここまで生きて行く事が出来たのです。・・・ふう、独り言を喋ったら、幾分か楽になりました。では、僕はここd

ー

立って、自室に戻ろうとしたところで、セラの部屋のドアが開きました。

「・・・入って下さい。」

「分かりました。」

入室。そして、気まずい沈黙が流れます。

「・・・私は、臆の言つたみたいな、友さえ居ません。」

「僕たちがいるでしょう？人間・・・いえ、世の中の生物全て、一人一匹では何もできません。誰かと協力して、進んでいけばいいんです。」

「ふふ、・・・大丈夫ですよ。私は」

何が大丈夫なのでしょう？そんなに、涙を流しているのに。

「でも・・・私はもう・・・吸血忍者として認められないでしょう。自分から決意して、名誉よりも友を選んだのに・・・なのにまだ私は・・・吸血忍者として生きていたいと感じている。私の決意など、まだまだ甘つたれていた！それが・・・何よりも悔しい！」

・・・それを聞いて、僕はごく自然にセラの頭に手を置いた。

「誰だって、仲間と離れたくないなどと思う人は居ないでしょう。セラの決意は、すごいですよ。甘つたれてなんかいません。」

そう言うと、セラは僕に抱きついてきました。正直、此处で倒れるわけにはいかなかったのでなんとか受け止めます。

「セラ・・・？」

「少し、このままでお願いします・・・。」

そう言って、セラは僕の胸に顔を埋めてきました。声を押し殺してありますが、おそらく泣いているのでしよう。それで良いのです。泣けるときに泣いておかないと、いずれ、おかしくなって（狂って）しまうのですよ。だから、泣きたい時に泣き、それから前に進んでいけばいいのです。

『つまり、僕はもう気絶しても良いはずです。』

『却下です。駄目ですよ、今気絶しては。』

『いや、だつてさ、ぶつちやけ長々と話していた時から意識が既に朦朧とし始めていたのですよ？もう無理です。ゴールしちやいたいです。』

『頑張つて下さい。ここで頑張つたら・・・』

『たら？』

『あとで・・・何かして上げます。』

『何かって何さー！？』

『・・・あ、ゲームをあげましょうか？』

『エロゲは要りませんよ？』

『・・・ギヤルゲ？』

『却下。』

『困りました。打つ手がありません。』

『早っ！？エロゲとギヤルゲで打つ手なしくてどういことですか！？』

『仕方ありません。この体で・・・』

『アウトオオ！駄目です！そういうのは心に決めた人とすべきです！』

まったく、何を考えているのでしょうか？

『とは言われましたも、私はずっと臍の中に居ますし、出会いと言われても臍ぐらいしかいませんよ？』

『・・・忌々しき事態です。』

『で？目は覚めましたか？』

『え？あ・・・。』

『フッフ、では、頑張ってくださいね。』

・・・敵いませんね。七実には。

その後、セラの気が済むまで僕はセラの頭を撫でていました。

「ありがとうございます。もう、大丈夫です。」

「そうですね。まあ、そう深く悩んでも解決しないときもありますから、少し楽観的に考えた方が良いでしょうよ。」

「はい、試してみます。」

そう言って、セラの部屋を出て、自分の部屋に入ります。そして・

「ふう、ゴール……です。」

そのまま、ダンボールが無くなった部屋に倒れて意識を失いました。

『まあ……頭を強打した割には良く持った方ですね。』

ありがとう……。

次の日、早いうちに寝たからか、割と上々な体調で学校に登校しました。まあ、今回は準備万端です。フランス料理、イタリアン料理、地中海料理、満漢全席、和食、洋食、タイ料理、なんでもござれです。え？何の話か？今日は調理実習、つまり、潤さまが来る日なのです！正直に言うと、あんまし会いたくないのですが、まあ、腹を括るしかありません。

『私も、出来れば会いたくありませんね……。』

『ですよね……。いえ、嫌いつてわけじゃないのですが……。』

『なんとなく苦手なんですよね。』

『そうなんですよ。』

教室に荷物を置き、食材を大量に持って調理室に入り、下ごしらえを始めます。……。あれ？何でここまでする必要があるのでしょう？あ、そうか。失敗したら殺されるからだ。

おや？なんか周りが騒がしくなってきましたよ？

「お、おい、臆？何をそんな鬼気迫る表情でやってるんだ？」

「料理の下ごしらえですが？」

「たかが学校の調理実習でそこまで……。」「

「……。誰だって、自分の命は惜しいんです。」「

「はあ？」「

「いや、気にしないでください。」「

さて、もう少しです。

ん？先ほどよりも騒がしくなりましたね。まあ、聞き流してしまし

だが、どうやらまた教師がドタキャンしたようですね。で、また、ハルナを呼ぶようです。

「では、先生どうぞ。」

で、現れたのは、予想通りハルナと赤い服を着た素晴らしいプロモーションの潤さま。と、いつかのどこかの死神様……あれ？

「天才美少女悪魔男爵魔装少女ハルナちゃんだっ！」

「おっくんに飯をたかりに来た哀川潤だ。おっくん、準備は出来るんだろうなあ？」

「もちろんでございます、潤さま。ささ、こちらに。」

と言って、潤さまのために僕が直々に用意した席に促します。

「おう。」

「こんにちは〜！最近日本に来たフレイだよ！臍とはかなり昔からの仲だからよろしくね。」

ああ、やはりフレイでしたか。ふむ……

「ああ、久しぶりですね。やっと来ましたね？」

「そっだよっ！行くなって言った時から一体どのくらい経過したことか！ー！」

「まあ、出れて良かったですね。で、フレイはここに何しに来たの

ですか？」

「臙のご飯をたかりに。」

「あなたもですか!？」

「くそ!何で臙ばっかり!!」

織戸が五月蠅いです。この状況で喜ぶかと思っ
ているのでしょうか。一歩間違えば死ぬというのに。フレイは無害ですが。

「おっくん、まだか？」

「直ちに。今回は何をこそ望んでしょうか？」

「イタリアンだ。」

「あ、私は和食で。」

「承りました。しばらくお待ちください。・・・あ、皆さん方はお気にせず授業を受けてください。」

「「「お前も生徒だろ!!」「」「」

まさかの皆さんからの同時突っ込みを喰らってしまった。いや、だって、僕に料理を教えられる人とかいるのでしょうか?ぶっちゃけ、ハルナにも教えてもらう必要無しですよ?

「ならば、誰か僕に教えられる人いますか?いるのならどうぞ。」

「あたしだ!!」

拳手したのはやはりハルナ。ふむ・・・、

「分かりました。では、卵焼きを作って、どちらの方が優れているかで決めましょう。まあ、フレイの和食のついでですけどね。」

「望むところだ!覚悟しろよな!」

はいはい。

「おい、おっくん。まさかあたしのを忘れていないだろうな?」

「当たり前です。全部、同時進行で作ります。」

これぐらい出来なくては、色々やっていけませんよ。

「あ、全員分作ってる暇は無いので審査員なりなんなり決めておいてください。では、僕はこっちで作りますね。くれぐれも・・・邪魔、しないようお願いしますね?」

ニツコリ笑って注意しておきます。

「や、鑪くん・・・。」

「ん?なんですか?平松さん。」

「あ、あの・・・何か、手伝うことある・・・?」

「え?手伝うことですか?そうですね・・・、勝負とは関係な

いところていくと・・・、あ、ありました。じゃあ、味噌汁のダシをとったり、具を切ってもらって良いですか？」

「うん・・・それぐらいなら・・・お安い御用・・・。」

「ありがとうございます。フレイ、好きな具は何ですか？」

「んー、豆腐とワカメかな？」

「白味噌？赤味噌？」

「白味噌が良い!!！」

「かしこまりました。では、平松さん、今フレイが言ったようにお願いします。」

「・・・うん・・・分かった。」

ま、平松さんは料理が得意なようですし、味噌汁なんて、誰が作ってもそんなに変わらないでしょう。・・・家庭によって変わるかもです。

「ですが、同じダシとかを使っていればそこまで変わらないかと。材料はいつも通りですよね？」

「ええ、ダシは家で僕が作ったやつですし、豆腐はまあ、普通にパートに売っている奴、ワカメも同じく。」

「変えようがありませんね。」

『むしろ、これで変えられたら大したもんです。』

『・・・一人、居そうですけどね。』

『え？なんて言いました？』

『いえ、何も。』

こうして喋っている間にも、潤さまのイタリアンとフレイの和食を『同時』に作っています。というか、ここは僕が作った特別な調理室です。理由？そんなの、潤さま対策に決まっているではありませんか。ここには20ものコンロがあります。それ全部をフルに使って料理してます。まあ、圧倒的にイタリアンの方が多くですけど。もちろん、ピザを焼くためのものもありますよー。

「すごい・・・ここ、どうしたの・・・？」

「ここですか？僕が頼んで業者に作ってもらいました。」

「でも・・・お金は？」

「自腹です。それぐらいの財力がありますので。」

最近、七実が大量にゲームを買う所為でかなり減ってきてますけどね！・・・！

『良いじゃないですか。まだ貯金してあるお金は掃いて捨てるほどあるのですから。というか、お金は使って行かないと、世の中回って行きませんか？金持ちは金を貯め込みますが、臍は違いますよね？』

『まあ、確かに、貯め込むばかりではありませんが……、ですがね？あのお金は皆さんのお小遣いも兼ねているのですよ？』

『どこに一月十万円お小遣いで渡す家庭がありますか。一月に五千円で十分です。』

『……え、マジ？』

『マジ。』

『……いやー、お小遣いとか渡したことなかったですからどの程度あげれば良いかわからなかったのですが、まさかそのぐらい良いとは。ハハハ。』

『これからそうして下さい。』

『はい。』

んー、ピザはどうしましょう？無難にバジルにしましょうか？
パスタは……まあ、ちよっと海の幸を使いましょうか。

「……鑪くん、出来た……よ。」

「ん、どれどれ……。」

小皿を取って味噌汁の味見を……ふむ。

「ど、ど、ど……？」

「はい、とてもおいしいですよ。」

「よかった……。」

さてと、忘れないうちに卵焼きを作っておきましょうか。ピザは当分焼けませんし。

「平松さん、ちょっと砂糖取ってもらえます?」

「うん……はい。」

「ありがとうございます。」

卵割って、かき混ぜて、砂糖と少しお水を入れて、かき混ぜて、四角フライパンに入れてと……。

「ま、卵焼きは普通に焼くのがおいしいですからね。こんなもんで良いですか。」

「……鑓くんは……いつも、料理してるの……?」

「え?何でそう思うのですか?」

「すぐ……手際が良いから……。」

「そうですか?まあ、料理が上手な平松さんがそう言うならそうなのでしょうね。」

「そ、そんな事……あ。」

「どっかしましたか？」

「そ、その……。」

「なんですか？遠慮なく言って良いですよ？」

「う、うん……、そ、その……お……鑢くんは、前に来てたユーちゃんと付き合ってるの？」

「え？僕とユーがですか？付き合っていないですよ。」

「そうなんだ……。でも、仲良かったよね……。」

「まあ、昔からの付き合いですからね。えーっと、年齢的には小学校1年生からでしょうか？そのくらいからですね。」

「す、すごいね……。」

「っと、卵が焦げてしまいますね。このくらいで良いでしょう。」

「……よし、良い感じに焼けてますね。」

「はい、これはそちらのお皿をお願いします。」

「あ……勝負用の？」

「ええ、まあ、ぶつちやけ、負けようが負けまいがどちらでもいいので適当に作りましたけど。フレイのは本気で作ります。」

ええ、本気の本気で作ります。

「当たらないのですが？」

「知っていたのですね。ええ、後は・・・あ、努力することを覚えますよ？」

「それ、自分で言っていて悲しくなりませんか？僕は悲しくなりました。」

「・・・ええ、悲しくなってきました。」

「でしょう？それに、大丈夫ですよ。僕は、アニメはあまり見ませんが、ゲームはやっているのです。」

「エロゲでしたっけ？」

「異議あり！」

「・・・アクション系はやらないのですか？」

「やっていますよ。BRSとか、・・・あ、そのぐらいですね。」

「バカですね。もっとゲームを楽しみましょう。」

「パズルゲームは良くやるんですけどね！」

「ぶよ よとか麻雀とかですかね？」

「・・・あ、焦げますよ、ピザ。」

「やばー!？」

ピザは・・・セーフ。

危なかったです。

「さて、運びましょうか。恐らく、いいえ、待っているでしょうね。」

もし、待ち過ぎて潤さまが痺れを切らしでもしたら・・・おおっ、この街が壊れそうですね。

「潤さま、フレイ、お待たせしました。どうぞ。」

「お、中々いい出来だな。」

「そだね。うん、味噌汁も美味し！」

うん、好評なようですね。で、卵焼きはどうなったでしょう？まあ、適当に作ったのでハルナの圧勝でしょうね。

「三原さん、どうなりましたか？」

「あ、鑪？あなたの卵焼き、すごい好評だよ？どう作ったの？」

「え？好評・・・？」

おかしいですね。そこまで本気で作ったつもりはありませんでしたが、どうなって・・・

「三原さん、その卵焼き、見せて貰っても良いですか？」

「え？まあ、いいわよ。」

んー、あ、これ……。

「なるほど、そういうわけですか。」

「？どうしたの？」

「ああいえ、別に。」

「どうやら、無意識のうちにも通り作ってしまったようです。まあ、結果オーライ？」

『ですね。まあ、臆が言められるのは私としても望むところではないので良いのではありませんか？』

『それはそうなのですが、ハルナは悔しがってませんか？』

ハルナを見てみると……

「だぁー！何で色白さんはこんなに料理がうまいんだー！」

悔しがってました。どうしまししょう？

『放置しまししょう。』

『そつしまししょう。』

決定 放置。

「アユムはこれを食べ！」

愚民どもが僕の卵焼きを取り合っている中、ハルナは歩に自らが作ったであるう卵焼きを渡しました。その時、ちらっと見えてしまったのです。

「これでターゲットもイチコロ」という本を。

あれ？確かあの本って有名な殺し屋さんも愛用している本でしたよね・・・？それを何故ハルナが？まさか、歩を毒殺！？

『いえ、たぶん、イチコロの意味を間違えたのでしよう。』

『どう間違えるのですか？』

『・・・説明しにくいですね。要するにあれです。自分に惚れさせようとしたのですよ。』

『ああ、確かハルナは歩の事が好きでしたね。』

『何故、自分の事は気付かないのに、他人の事は気付くのでしょうか？』

『さあ？』

あ、歩が吐き出しました。汚いですね。一体だれがあれを掃除するのでしょうか。僕はしませんよ。

「おっくん、ちょっと良いか？」

「はい？何か問題でもございましたでしょうか？」

「いや、飲み物あるか？喉が渴いた。」

「ああ、それはすみません。何が良いですか？ジュース？酒？お茶？」

「酒。一番良いのを頼む。」

「緑茶！静岡のが良い！！」

「かしこまりました。少々お待ちを。」

この後、なんやかんや大量に注文してきた潤さま。味噌汁を大量におかわりしてきたフレイ。というかフレイは実は腹ペコキャラでした。めっちゃ食べます。すこぶる良く食べます。嗚呼、もしこれで相川家にフレイが居候しようものなら家計が傾きます。ご飯も量が要りますし・・・、ハア、まあ、僕が出張るしかありませんよね・・・。

「じゃあなおっくん。今度は戦場でな。」

「冗談きついです。潤さまと戦場で会って嫌すぎます。」

そんなこと言って潤さまは帰って行きました。戦場って・・・洒落になってませんねえ。ま、なるようになるでしょう。ところで・・・

「フレイはどうしたのです？」

「ん？なにが？」

「いや、何故に潤さまと一緒に居たのですか？」

「あー、それはね、この世界に着てすぐに会ったのが潤だからだよ。」

「・・・また災難な人に会いましたね。で、これからどうするのですか？」

「え？朧の所にいちゃいけないの？」

「あ、やっぱり？いや、僕は構いませんが、僕が住んでいる家は歩の家ですよ？まずは歩の許可を取って　　っ！」

この気配・・・あの連続殺人犯が何故学校に・・・？

「ぐっ！？」

「なっ・・・これは！？」

ちっ・・・まずった。

「朧？ねえ、朧！！」

「・・・何でしょう？正直、意識を保つのがやっとなのですが・・・」

頭を触ってみるとふわっとした感触が。やはり、これは・・・

『恐らく、魔法の呪いか何かですね。』

『どうしますか？このままでは僕はアウトですよ？』

『大丈夫です。意識を保っていないのなら、駄目な方法ですが、今から私が脳内にアニメを流します。これを治療する方法は人間の文化、音楽などがそうですね。』

『・・・お願いします。』

「脳内会議は終わった？七実ちゃんはなんだって？」

「今から脳内にアニメが流れるそうです。だから、僕は大丈夫ブフオ！！？」

な、なな、なんて・・・

『なんてものを流すのですか七実！！』

『何って・・・プリンセス バー！ですけど？』

『おかしい！選んだアニメがおかしい！！普通にサザエ なんとかで良いじゃありませんか！何でここで『ア』で始まって『メ』で終わる奴を流すのですか！！というか、そのアニメ良く買えましたね！？普通に未成年ですよ！？』

『忘れましたか？私は、27歳ですよ？』

『精神年齢です！体は未だに15・6でしょうが！！』

『・・・まあ、良いじゃありませんか。治ったでしょうっ。』

『そりゃそうですけど・・・。』

結果オーライ？なんか納得いきません・・・。

「臆、大丈夫？」

「はい、まあ、過程はどうあれ、七実に治してもらいました。ですが・・・。」

ガタガタと、家庭科室のドアが押されています。押しているのは頭に耳をこさえた、それはそれはメルヘンな方たちですがいかんせん、今の状況ではゾンビにしか見えません。あ、バイオハザー みたいにあーうー言ってるようなゾンビです。

「たぶん、あれは空気感染と接触感染だね。触ってもアウト、かといつてずっとここに留まってるのもアウトだよ。」

「・・・ふむ、となれば・・・。」

確か、僕の部屋にマイクがありましたね。それを持ってくるのも一つの手なのですが・・・、

「時間が足りません。しょうがない、校則違反ですが。」

ピポパと携帯で家に電話します。・・・繋がりました。

『もしもし、相川です。』

「あ、セラですか？ちよつと今緊急事態でして、お願いがあ「みや
—————!」わわっ!？」

『もしもし？朧?』

「すみません、何も聞かずに僕の部屋からマイクを持って来てくだ
さい!!机の中に入ってます!!それと、楽器とかがあればそれも
お願いしますって、やば!切ります!!」

『ちよ、どついで』

まずいますい!動物人間が入ってきましたよ!

『動物人間・・・?その表現は間違っています。なにせ、人間自体
が動物なのですから。』

『ええいうるさい!何でもいいのですよ、なんでも!』

『じゃあ、<奴ら>で。』

『それ違う!それ別の作品!』

『・・・じゃあもう普通に動物人間で。』

『却下したやつを肯定しやがりますか!??』

というか、どうしよう!たぶんこれ窓叩き割った瞬間感染する感じ
ですし!・・・あ、そういえば、この学校、保守派の方々が居やが
るじゃん。・・・やば。セラには気まずい思いをさせてしまいます
ね・・・。浅はかでした。

「フレイ、予定変更、僕が今すぐこの場で歌います。」

「歌うって・・・大丈夫なの？」

「大丈夫じゃありません。今日に限って悪刀は家に置いてありますし、正直歌った後が怖いですが、しょうがないでしょう？」

「・・・で、曲は？」

「内緒、といいますが、ほら、歌詞の無断掲載がなんちゃらとありますのでたぶん曲は」

「で表記されるようです。」

「メタいね。」

「メタいですよ。では、早速」。

「」

大音量での歌唱。悪刀なしではさすがにきついですね・・・。

「

ゴホッ！」

あ、もう無理。喉がつぶれました。ですが・・・

「ここ等一体は治療終了しましたか？」

「え？なに？聞こえない。」

「・・・人が必死こいて絞り出した声をそんな簡単な言葉で薙ぎ払うとは・・・脳に直接叩きこんでやりましょうか？」

「うそうそ！うそだからそんな怖い顔しないでっ！こころ辺のは治療されたよ！」

「そうですね。・・・では、屋上に向かいましょう。」

「なんで？」

「下準備です。」

廊下で動物人間（命名）に出くわしたらたまらないので、校舎の壁を登って屋上に行きます。フレイはこんなんでも元死神。普通にキヤンフライ出来るので飛んで付いてきました。さてさてさあさあ、

「ナイスタイミングです、セラ。そしてすみません。僕の思慮不足でした。」

「いえ、大丈夫です。それで、マイクと一応私のストラドモデルを持ってきましたが・・・どうするのですか？」

「すみません、マイクは必要性が無くなってしまいました。悪いのですが、セラのソロライブをお願いします。大丈夫、下準備はしてあります。存分をお願いします。」

「・・・わかりました。」

そう言って、セラはヴァイオリンを弾き始めました。クラシックですか・・・うん、良い音色です。

『もう、アニメを流す必要はありませんか?』

『・・・ずっとスルーしてきましたが、ずっと『E』で始まって『M』で終わるアニメを流してきましたね。驚きです。そんなに見ていたなんて。』

『アニメ好きなるもの、どのようなアニメも視るべきなのです!当然、アンパンマン、キティちゃんも見ました。どうですか?』

『何がどうです?なのか僕にはさっぱりですが、今回はそれのおかげで助かったのも事実ですね。』

あ、そうだ。

「セラ、あそこに歩が居るでしょう?あそこから校内に侵入し、演奏してきて下さい。一応、校内の中にも準備はしてあるので、音は良く響くはずです。」

「分かりました。では。」

シュツと立ち去るセラ。

「さて、僕たちは帰りましょう。」

「え?いいの?」

「はい。後はセラがなんとかしてくれまし、もし他の吸血忍者がどうのこうのしてきても歩がなんとかするでしょう。」

「・・・で、ホントの所は？」

「限界寸前、体力切れ、オーケー？」

「オーケー。だけど、私は臙を担いで帰る気は無いよ？」

「分かってます。ですから・・・、」

僕はここである切り札を使います。

「七実にチェンジします。というわけで」

よろしくお願いします。

「任せました。では、行きましょう、死神さん。」

「そだね、行こ行こ！」

まあ、たまにはこの世界を楽しんでみましょう。少なくとも、臙が潰れている間ぐらいはアニメ以外の楽しみを見つけてみるのも良いかもしれません。なにせ、久しぶりの現世ですから。

第21話 赤とは、僕にとっては死色です（後書き）

朧「あとがきコーナー！」

フレイ「やああああふうふう！！！！」

朧「テンション高いですね？」

フレイ「だって遂に出番だよ、で・ば・ん！待っていたぞこの時を！！！」

朧「まあ、あなたの登場にはいくつか理由があるそうですね？」

フレイ「そうなの？というか、そんなことより、今回はグダグダだったね？」

朧「ああ、作者が時間の無い中、必死こいてちよつとずつ書いたからこそなったそうです。元々、このシーンを忘れていて話を全く考えていなかったのも原因の一つですが。」

フレイ「駄目だね。」

朧「駄目ですね。であ、ここでアンケートの集計を発表します。えー、結果は……」

YESが多数、というか満場一致でYESだったのでヒロイン化決定です！！！」

七実「マジですか？」

朧「マジですよ。これからもよろしくですね。」

七実「ま、基本はあまり変わらないでしょう。朧がツツコミ、私がボケでお送りします。」

作者「ですが、七実さんとのラブシーンができますね。まあ、セラとユーにも当然ありますが……。」

フレイ「あの二人は元々あったよね？一緒に寝たり、お風呂入ったり。」

作者「……まあ、R-18にならないようにしたいですね。いえ、します。理由？作者の描写力不足ですが？」

朧「カスですね。」

七実「カスね。」

フレイ「カスだね。」

カス「うるさいやい！って、僕の表記が『カス』になってる！？誰がやった！ここの支配者である僕にこんなこと」

神「わたしだ。」

カス「お前だったのか……。」

朧「アホなお芝居が始まったのでここで終わります。では……。」

朧「七実・フレイ」「最後まで読んでくれてありがとうございます。」「」
した！感想等お待ちしています。」「」

朧「・・・そう言えば、七実はどれくらいのゲームを持っているの
ですか？」

七実「そうですね・・・、100を超えた辺りから数えてません。」

朧「そうですね・・・。」

第22話 僕は殺人外鬼です

こんばんは、鑓七実です。今回は臙ではなく私です。理由ですか？単純に臙が体力切れで寝ているからです。単純でしょう？それで、現在私は絶賛全裸た

『ストップ！あかん！それ言ったらあかんて七実さん！！』

『はい？何がですか？』

『今までずっとキャラ崩壊してきましたが、さすがに全裸待機は駄目です！いくらなんでもひどすぎる！！』

『サービスシーンですよ？』

『阿呆！どこの世界に全裸待機しているサービスシーンがあるというのですか！！どの作品を見ても全裸待機をサービスシーンと豪語しているのありませんよ！？』

『あります。』

『どこの？』

『11の作品です。』

『今さっき起こった出来事ですけど！？』

『あ、始まるので黙っててください。』

『理不尽!?!』

始まりますよ、アニメが！やはりリアルタイムで見るアニメは良いです！

「入るよー。」

ん？誰でしょう？こんな時間に。

「七実ちゃん、ちょっと話がつて、うわっ！何やってんの!?!」

「フレイですか。何って・・・アニメ観賞？」

「なんで裸なのさ!?!」

「・・・？すみません、その『何故』と言う質問がわかりません。」

「当然の事なの!?!」

????さっきの臍といい、全裸待機の何がいけないのでしょうか？誰も見ていないから良いと思うのですが。

『そういう問題ではありません！これは皆さんの七実に対するイメージの問題です!』

『そんなもの、とっくの昔に壊れているでしょ?』

『今の行動は、踏み碎いたキャラを止めにロケットランチャーで吹き飛ばす行為ですよ!?!』

『元から壊れていたのだから、これ以上壊れても問題ないではありませんか。壊れたモノはどれだけ壊しても結局のところ壊れたモノでしかないのです。』

『なんかいいこと言ってるっぽいですが、本人は全裸ですからね?』

『眼福ですよ?』

『いや、僕は人の裸で興奮しませんし、七実の裸は何と言うか、自分の裸を見ているようでなんとも思えません。』

『そうですか。』

まあ、そんなことはどうでもよろしいのでアニメを見ましょう。

「私の事忘れてない?」

「忘れていません。で、なんででしょう?」

「ああうん、その前に臙は寝てくれないかな? 私は七実ちゃんと二人で話したいから。」

『だそうですね。では、臙、その様に。』

『はい、分かりました。お休みなさい。』

『はい、お休みなさい。』

さて……、

「これで良いですか？」

「うんっ、で、話つて言うのはさぁ……単刀直入に聞くけど、七実ちゃんは今の状況に満足？」

「……どういことですか？」

この状況に対して満足か？そんなの、即答で満足と答える事が出来ず。何故なら、今の状況に全くと言って良いほど不満が無いからです。臙は私に対して良くしてくれています。死んだ身の私にこの体の所有権を臙が休んでいる間は好きなようにして良いと言ってくれています。休日のお昼も臙が休んでいる間、所有権を私に譲ってくれます。不満があるはずありません。

「本当にそう？本当に満足してるの？」

「読心術ですか……。で、何が言いたいのですか？言いたい事ははっきり言つて下さい。」

「七実ちゃんさ、臙になにか特別な感情がない？」

「特別な感情と言いますと？」

「例えば……恋愛感情とか？」

「ないで」本当にそう言いきれる？「……………」

「……どうなのでしょう？確かに、朧の事は好きです。ですが、この好きは恋愛感情に属されない、所謂ライクに分類されるもの筈ですし、朧もたぶんそう思っているでしょう。ですが……、分からない。本当の所、私は朧の事をどう思っているのでしょうか？この前、朧に頭を撫でられた時、私はどのような感情を抱きました？分かりません。ただ、こう、胸の辺りがポカポカしてくるような感じだった事は記憶しています。」

「まあ、不満があったら言ってよ。それ相応の対応をするからさ！」

「……分かりました。何かあれば、いわせていただきます。」

「ん、話はそれだけ！じゃ、お休みっ！」

「お休みなさい。」

さて、私はアニメを……あ

「アニメ、終わってしまったではありませんか……。」

……ぐす。

皆さん、おはようございます。朧です。復活しました。いや、ホント大変でした。七実がアニメ見れなかったと涙目で泣きついてきたのですよ。こんなこと今までに無かったので僕も慌ててしまいましたし、七実はずり泣きしますし、色々カオスなことになっていました。結局、僕が録画してあると言って、七実が安心して寝たというのがオチですが。

まあ、それ以外は順調に回復してこうして表に出れるようになって

ます。ま、今日の予定は全校集会と通知表を渡すだけですからね。明日から夏休みに突入です。

『朧！秋葉行きましょう！秋葉原！！』

『……ええ、そうですね。行きましょう。』

ご機嫌で鼻歌まで（もちろんアニソン）歌い始める七実。まあ、なんですか、うん、良いのではないのでしょうか？

学校に向かう道中、特に何も起きずに、無事に着きました。うん、平和って素晴らしい。

「あ……鑢くん……お、おはよう……。」

「ん？おはようございます。早いですね？」

「う、うん……ちょっと早く起きちゃって……。」

「なるほど。あ、では、僕は保健室に行くのでこれで。」

「あ……お、送って行くのか……？」

「え？ああ、迷惑でないならお願いします。」

……何か、最近よく平松さんと話すような気がします。気のせいでしょうか？否、気のせいではないです。

「……？どうしたの……？」

「ああ、いえ、別に何でもありませんよ。」

というわけで、道中特に会話も無いまま、保健室に着きました。平松さんは着いたら教室に戻りました。ありがとうございます。

「失礼します。あ……。」

「ん？……。」

えっと……とりあえず。

「おはようございます？」

「あ、ああ、おはよう。」

沈黙。とりあえず、僕はベッドに横になりましょう。話はそれからです。何も話せばいいかわかりませんが。

「……。」

「……。」

何分ぐらい経ったでしょう？結構な時間たった気がします。ちょっとウトウトしてきました。

「……失望したか？」

「え？」

「あの時、ダーリンを敵に回すと言う判断をした。それに対して、失望したか……？」

サラスの言葉を聞いて、僕は寝返りをうち、真正面にサラスを捉えます。そこには、不安そうな目でこちらを見ているサラスが居ました。

「・・・星川さん、僕は吸血忍者が嫌いです。」

「っ!」

「ユー・・・ユークリウドヘルサイズの敵であるからというのももちろんありますが、他にも理由と言うのはあります。それは、吸血忍者の生き方が嫌いなのですよ。でもね・・・。」

ここで一旦言葉を切り、サラスと目を合わせます。

「星川さん、並びに、サラスの事は嫌いではないのですよ。」

「・・・え?」

「確かに吸血忍者は嫌いです。ですが、ですがね、吸血忍者だからというだけでその人物を嫌いになりたくは無いのですよ。いや、違いますね。吸血忍者だとか、別にそんなのはどうだっていいんです。僕はね、星川輝羅々並びにサラスバティ個人が好きなのですよ。あ、ラヴではなくライクの方ですけどね。で、故に、僕はあなたに失望したりはしませんよ。むしろ、すごいではありませんか。『死神』と呼ばれている僕に対して、戦いを挑もうとする吸血忍者など、滅多に居ませんよ。確かに、統率者としては失格かもしれませんが、個人的な視点から見ると、僕はそういう人、結構好きですよ。勝ち目がなくても挑んでくる人は、ね。」

む、随分長々と喋ってしまいましたね。サラスなんか、目が点になつてますよ。

「……つまり、私は失望されていないということか？」

「ええ、簡単に言つとそうです。」

「よかつた……。だが、何故だ？私は、ダーリンが嫌いな吸血忍者だぞ？」

「さつきも言つたように、吸血忍者が嫌いなだけです。ん？ああ、言い方が悪かつたですね。吸血忍者と言う集団が嫌いなのですよ。個々の吸血忍者が嫌いなわけではありません。大体、もし嫌いならば僕はセラと暮らしてませんよ。」

「セラフイムか……。」

「……あ、そうでした。すっかり忘れてました。」

「星川さん、いいえ、サラス、お願いがあります。」

「大体予想は付くが、まあ、言つてみてくれ。」

「セラの事ですが、今すぐ許せとは言いません。ですが、せめてチャンスを与えてやってもらえませんか？」

「……難しい願いだな。」

「分かつてますよ。吸血忍者の事は嫌いなりに理解しているつもりです。それを踏まえてお願いします。セラにチャンス……例えば、

セラがあなた方を守るといふようなことが起こった場合、セラを許してやってくれませんか？もちろん、無償とは言いません。約束を守ってくれた場合、僕はそちら側が何もしてこない限り、吸血忍者には一切合切関与しません。無論、殺したりもしません。」

さあ、どう出るでしょう？それほど悪い条件でもないと思いますが、なにせ、零崎一族きつての『人外専門』が、人外を殺さないと宣言しているのですから。・・・まあ、吸血忍者限定のお話ですが。

「・・・わかった。だが、もし私がセラフィムを許しても他の奴らが許さないかもしれないぞ？」

「その場合は、僕が直々にお話をしに行きます。」

危害とは、目に見える形で与えるものです。精神的な物はノーカンな筈です。

『つまり、心を押し折ると？』

『いえ、普通に凄むだけです。まあ、耐えられるかどうかは知ったこっちゃありませんが。』

『確かに、私も吸血忍者とやらには別段、興味ありませんから、誰が心を折られようが、どうでもいいですね。』

それもそうですね。僕たちは、身内にはとことん、とことん甘いですが、それと反比例して、身内以外の関心は低いですからね。まあ、最近では身内が絶賛拡大中ですが。

「分かった。その条件で呑もう。」

「ありがとうございます。……では、僕はそろそろ眠るので。」

「ああ、お休み。」

「はい、お休みなさい。」

寝ましょ。

『……あ、DVD予約するの忘れていました。』

『勝手にやって下さい。そちらでも出来るでしょう?』

『インターネットが……。』

『ハア……。分かりました。夷さんからもらったパソコンを使って良いですよ。確かアレ、そこでもインターネット出来ましたよね?』

『本当ですか!?ありがとうございます!』

早速カタカタし始めた七実。さて、僕も寝ましょ。

寝過ぎしました。まさか、夏休み前の全校集会をサボるとは誰が予想したでしょう。

「あら、結構皆やっぱりって顔してたわよ?」

「あれ？先生居たのですか？」

「そりゃあ、保健の先生だもの、此処に居なくちゃダメでしょう。」

え？んん？普段あまり居ないような・・・。

「だって、保健委員会委員長が居るならいいかなあーって思ったのよ。」

「へ？委員長？どこに居るのですか？」

と聞くと同時に僕を指さす高良センセ。あるえー？何故僕の方を？

「まさか、僕？」

「ええ、そうよ。」

「何故に！？え、僕そんな話聞いてませんよ！仕事もしてませんし。」

「大丈夫、幽霊委員長だから普段は副が頑張ってるのよ。」

いや、何も大丈夫なことないではありませんか！副全部任せてる委員長って駄目すぎじゃないですか！というか、何故に僕が委員長になっているのでしょうか？

「簡単なことよ。クラスであなたは保健委員になり、保健委員会の会議であなたは委員長になったの。分かる？」

「分かりますが！分かりますが、何故その事を今まで言ってくれな

かったのですか！おかげで僕は仕事をしない駄目委員長です！」

「大丈夫よ。皆の同意の上だから。」

「同意しちゃってるんですか！？」

それで良いのか保健委員会！

「良いんじゃない？肝心な時に働いてくれれば良いそうよ。」

「うわー、何そのいい加減な委員会。まあ、知ってしまった以上、僕も何かしますよ。何をやればいいのです？」

「ここに居る事。」

「……すみません。僕の耳はおかしくなったようです。いま『ここに居る事』が仕事だと仰いました？」

「そうよ。授業以外の時間はここに既定の時間まで居る事が鑢くんの仕事よ。」

「……マジ？」

「マジ。」

……わい。

「授業に行つて、通知表貰つて帰ります。」

「はい、おめつなご。」

・・・仕事内容は聞かなかった事にします。

「次、鑓一。」

「はい。」

通知表が来ました。来てしまいました。進級の有無にかかわる表が来てしまいました。

『もし一があつたらどうするのですか？』

『その時は・・・学校やめます。』

『駄目です。一からやり直してください。』

『鬼だ！』

『いいえ、保護者です。』

『まさかの切り返し！？』

保護者と来ましたよ。驚きです。

『で、結果は？』

『おお、そうでした。どれどれ・・・。』

オープンー！

国語 4 教師のコメント 納得いかねえ!!
現代社会 4 教師のコメント 納得いかねえ!!
数学 5 教師のコメント 納得いかねえ!!
理科 4 教師のコメント 納得いかねえ!!
英語 4 教師のコメント 納得いかねえ!!

・・・五教科が素晴らしく良いです。やったね!留年は無くなったよ!!!

『四教科は?』

えっと、どれどれ・・・

体育 2 教師のコメント てめえ何もやってねえだろ!
家庭科 2 教師のコメント てめえ何も作ってねえだろ!
技術 2 教師のコメント てめえ何もしてねえだろ!
美術 5 教師のコメント あなたの作品は最高です!

おおっ、凄惨たる結果ですよ。美術だけ矢鱈良いですが・・・2つて・・・。

『まあ、こんなもんですよ。テスト受けて無ければ、1でしたね。』
『危なかったです。』

「臃くーん、どうでしたあ?」

「そう言うのは、まず自分が言うものですよお姉さん。」

「私？私はそんなに良くないですよ。3と4を行き行きしてますで、臃くんは？」

「僕は五教科は4・5が主ですけど。四教科が駄目ですね。美術を除いて全部2です。」

「へえー、また危ない所ですね。」

「全くです。」

さて、通知表も貰いましたし、帰りましょうか。

「では、僕は帰ります。あ、お姉様。最近なにか厄介事はありませんでしたか？」

「ありましたよう。なんか、哀川潤って言う人が仕事手伝えーって。」

うわー、また厄介なのに絡まれましたね。

「そ、そうですか。頑張ってください。」

厄介事をフツ掛けられる前に帰りましょう。潤さま絡みは全部厄介事です。厄介事以外何かあるのかと言われれば僕は自信を持って無いと断言できます。

『実際、そうですね。確か臃、私に気付く前にあの人と2回戦ってましたよね。で、結果は2回とも引き分け。理由は両者の生理現象が原因でしたっけ？』

『はい。空腹によりなんかどうでもよくなっちゃったのですよ。』

『駄目ですね。あの人はいずれ決着付けてきますよ。その時はどうするのですか？』

『ああ、その時は3度目の正直ということを決着付けます。まあ、予め言っておきますけど、人間には裏表があります。』

『はい、その通りですが……。』

『今の僕が『表』なら当然、『裏』もあります。ああ、裏が臆識と
言うわけではありませんよ？つまり、何が言いたいかと言うと、僕
がどう変化しても驚かないでくださいと言っことです。』

『……どう変化するのですか？』

『秘密です。というか、見た事ありませんか？』

『はい。』

『ま、秘密ですけどね。』

歩の家に着きました。ん？何やら、庭が騒がしいですね。おお！セラ
ラがゾンビ君をバツサリ切ってますよ！今は……燕返し？いや、
違いますね。似てますけど。

「おや、臆では無いですか。お帰りなさい。」

「ただいま戻りました。で、何やってるのですか？」

「見ての通り、セラに剣を教わってるんだ。」

セラに剣を、ね。まあ、確かにセラの剣技は素晴らしいですからね。教わる相手にはびったりでしょう。・・・相性がどうだか知りませんが。

「ところで臆、先ほどの技は見ていましたか？」

「ん？見てましたよ。」

その瞬間、セラの顔がパアアッと明るくなりました。いや、何故に。

「そうですか。では、なんと云う技にしましょうか？」

「え？あれ燕返しじゃないのか？」

「「はん。」」

声が被りました。

「その程度も見抜けないとは・・・頭部をぐちゃぐちゃにしてみます？割とすつきりするかもですよ？」

「目が節穴過ぎて反吐がでますね。」

全くです。

「ひどいなお前ら！なら、何かかっこいい名前」その必要は皆無です。「なんでだ？」

「いや、ただ単純に付ける必要性がないからです。技の発展形、それも些細な発展形に日々名前を付けていたらきりがありません。それならば、新しい技を考えた方が建設的です。」

「ふむ、一理あります。では、何かありますか？」

「セラ、あなた忍術は出来ますよね？」

「出来ますよ。・・・不得意ですが。」

「どんな事が出来ますか？」

「雷撃が放てます。」

雷撃・・・うん、剣との相性はつちりですね。

「では、切りつけた後に雷撃を相手に与えてみてください。イメージとしては切った線をなぞるように、です。実験は歩でお願いします。」

「おい！」

「分かりました。こう・・・ですか？」

「分かるなぎや ああああ！！」

「んー、もっと尾を引く感じで。」

「こうですか？」

「ぎゃあああああ！！！！」

「そうそう。それを体で慣らしていきましょう。」

「はい！」

ぎゃあぎゃあ歩が喧しかったですが、モノにできたとおもいます。

「そう言えば、臙は剣を扱えるのですか？」

「僕ですか？・・・まあ、一応は扱えますね。『剣技』ではなく『剣道』ですが。」

まあ、七実なら出来ると思いますが。

『出来ませんが、私も所詮虚刀流。達人には至れませんよ？』

『その点、僕は便利ですね。鑢の姓を名乗ってはいますが、虚刀流と言っわけではないので、普通に剣、刃物を扱えます。』

『そうですね。臙が私の弱点を補い、逆に私が臙の弱点・・・つまり、強さを補う。私たちは、どちらか一方が居なくては成り立ちませんね。』

『正確には僕が、ですが。』

『いえ、違います。違つのですよ。臙。』

『何が、違つのです？』

「わかりませんか？私もは、既に臃が居ない人生を考えていません。考えられないのですよ。これからの人生、臃が居ないという事を。なにせ、二心同体、運命共同体ではありませんか、私たち。つまり、私は臃が居ないと駄目なんですよ。」

『七実……。』

『フフツ。』

「……少し感動してしまいました。七実がそのように思っているなんて……。」

『ところで臃。』

『なんででしょう？』

『アニメ、録画してありますか？』

「……ハア。」

『ぶち壊しですよこん畜生。』

『フフフ、それが、私たちですよ。』

まあ、確かに。

「臃？どうしました？」

「ん？あ、ああ、いえ、何でもありませんよ。で、僕は剣道は出来

ますが・・・それが？」

「いえ、ただ、私たちに修行を・・・。」

たち？ああ、歩もですか。

「そうですね・・・。」

「ご迷惑なら遠慮せずに言ってお下さい。」

いや、そうは言ってもねセラさん。そんな上目遣いで見られたら断るに断れませんよ。え？変態？バカ言っちゃあいけません。皆さんも想像してみてください。普段、凜っ！としているセラが上目遣いで頼み事ですよ？想像できました？出来たでしょう？そう、それです。そんな目で見られて断れますか？否、断じて否です。

「いや、良いですよ。相手します。」

「ありがとうございます！」

むー、とはいっても、ぶっちゃけ今のセラと歩に足りないのは回避力だと思つのですよ。何か良い修行方法は・・・

『はい！はいはいはい！』

『はい、では、七実くん。』

『はい！先生！東の弾幕が良いと思います！』

『理由は？』

『えっと、方の弾幕はとにかく数が多くて、回避するのも難しいからですよー!』

『はい、良くできました。花丸をあげましょう。』

『やったー!』

『で、何やってるんですか?』

『いえ、純情な生徒みたいなものを演じてみようかと。』

『演じている時点で純情ではありませんね。』

『あ』

『いや、マジで気付かなかったのですか?』

『全くと言って良いほど。』

『驚き桃の木山椒の木です。』

七実にはやはりいつも予想の斜め上を行かれます。

「ですが、僕は剣を握りません。セラたちには回避力を高めて貰います。」

「回避力?」

「はい。ところで……ノーマルかハードどちらを選びますか?」

ふふふ、皆さんはもうお分かりでしょう。僕が何をするか！

「ハードだ！（で！）」「

「よろしい、ならば行きましょう。」

『七実、スタンバイ！』

『もう出来ています！』

行きます！紫奥義『弾幕結界

』の意味がないですね。』

『シヤラップ！』

瞬間、セラたちを結界が多い、そこから数多の弾幕が放出されます。僕？僕は結界の外で傍観です。

「なっ！」

「っ！」

「では、頑張ってください。2時間後にまた戻ってきます。」

はてさて、どうなる事やら。

『さすがに、あの結界の中に閉じ込めておくのはどうかと思うのですが、』

『あれぐらいした方が成長できますよ。なにせ、セラは吸血忍者で歩はゾンビですよ？ちよつとの事で死なないのなら、多少の無茶はしてもなんら問題はありません。』

『・・・それもそうですね。そういえば、聞きたい事があるので良いですか？』

『なんです？』

『あのナイトキングの攻略法はあるのですか？あ、いえ、言い方が悪かったです。臆自身の力で、あの夜の王さまを倒せますか？』

『無理です。』

はい、きつぱりすつぱり言っちゃいます。無理です。

『ウンですね。』

『まあ、正確には殺す事は簡単に出来ます。たぶん、2分以内に来るでしょう。が、倒す事が出来ません。そこまで余裕もないものでして。』

『・・・相手にまで、気を使う必要は無いと思うのですが？』

『別に、夜の愚王に気を使うわけではありません。ユーに使うのですよ。』

今回の件、夜の恥王を倒してはいお終いではありませんからね。ユーで、ユーが、解決しなくてはいけない所もあるのですよ。それは、

僕にも出来る事ですが、僕では意味のない事です。ユーがやるから、両者、意味があるのです。そして、この件はいずれ、遠い未来にも起こりうる可能性の一つです。そう、夜の駄王はゾンビになってしまった故に、あんな風になったと聞いています。ですが、良く考えてみてください。ゾンビは、もう一人居るのですよ。歩です。そう、あつてほしくありませんが、歩がもし、夜の珍王みたいになったら誰が止める？当然僕です。では、誰が殺す（・・・）？先ほども言ったように、僕でも出来ませんが僕では意味がありません。ユーがやらないと、意味がありません。では、仮に僕が夜の王（笑）を殺したとします。はい、この件はお終いです。が、僕がさっき言ったような事が歩に起きたら？ユーは耐えられるのですか？人の心はそう何度も悲しみ、苦しみに耐えられる訳ではありません。ここでやっておかないと、ユーの心が壊れてしまうかもしれません。云わば、これは試練みたいなものかもしれませぬね。

『成程。たしかに、そうかもしれませぬね。』

『でしょう？僕の心はとっくの昔にブツ壊れて、ただいま修復中とあった状態なので、問題ないのですが・・・、それに。』

『ああ、そうですね。』

『はい。僕は自分の敵を殺すのに、抵抗は感じて躊躇も戸惑いもしません。』

『そして、それが正しいです。敵はとりあえず殺さないといきません。後悔、悲しみは後回しです。』

『否、後悔はしません。自分がやったことには自分で背負います。』

『臃、なんか勘違いしていませんか？』

『え？何をです？』

『自分ではありません。自分『達』です。』

『……ありがとうございます。』

『いえいえ。』

『で、さっきから気になっていたのですが……。』

『はい？』

『彼……夜の変王の事を何故に名前を変えて呼んで居るのですか？僕もノリで変えてましたけど。』

『え？だって、ぶつちゃけ、イタくないですか？自ら王を名乗るなど。それも夜ってイタすぎるでしょう？どのくらいイタイかと言うと、学校に腕や目に包帯や眼帯を付けてくるほどイタイです。』

『……確かに。痛々しいですね。見ていて。ああ、考えれば考えるほどイタくなってきましたよ。まさか、王になるのが夢だったとは言いませんよね？もしそうだとしたら、アホですね。バカも休み休み言えーって感じです。王になって、何かとくがあるのでしょいか？王はいつどの時代も民衆に淘汰されると言うのに、よくもまあそんな夢を見れますね。』

『……少々、いや、かなり、羨ましいですね。そんなバカな夢を見て。僕は……夢なんて無いですからね。』

『ところで臙。』

『なんでしよう?』

『あの方々は大丈夫なんでしょうか?既に一時間は経過してますよね?』

・・・あ

『い。』

『うえお。じゃなくて、忘れてました。』

『一応、死なない程度に設定はしてありますが、あの中で気絶したら間違いなくボロツボロですよ?』

『・・・さて、そろそろ時間ですね。』

『無かった事にしましたね?』

『さて!そろそろ!!時間ですね。』

『はい、遅過ぎですが時間です。』

『そろそろ!!--!時間ですね。』

『・・・臙、見苦しいですよ。』そろそろ『ではなく、』いい加減です。いい加減、あの結界を解いて下さい。』

『うう・・・、完璧に僕のミスです・・・。』

ああ、どうしましょ。っと、考えるのは後ですね。結界解除っと。どうなっているでしょうか？庭に出て、見てみると・・・

「「「「「「（チーン）」」」」」

・・・体のほとんどが焦げてますね。まあ、とりあえず。

「治療しましょうか。」

治療中です。

『臙、話があります。』

『ん？なんでしょう？』

『いえ、簡単な話です。・・・東 キャラには私たちの病気を治せる人がいます。そして、私はその能力を身につけています。もう、言いたい事は分かりますよね。』

『・・・七実も人が悪い。そんな答えがわかりきった事を聞きますか？』

『念の為です。許可なくやるものなら、怒られてしまうかもしれませんから。』

『ハア、そんなの、決まっているではありませんか僕たちの病気は』

『『苦樂を共にしてきたお友達ですよ？今更治す必要などありません。』』

『・・・分かっているではありませんか。その通りです。』

『クスツ、つくづく、私たちは狂ってますね。自分を苦しめている病魔を友などと・・・。』

『ええ、全くです。』

さて、治療しましょう。

ハルナがヴィリエから帰ってきて、歩とハルナはアリエル先生さまの搜索に行ってしまった。僕ですか？セラとお留守番です。お茶がおいしいですね！。

「臙は、探さないのですか？」

「ん？何をです？」

「大先生とやらをです。」

「はい、探しませんよ。」

「ずずー、はふう。」

「何故？」

「んー、親友の敵だからでしょうか？いえ、僕自身はあの人に恨み

「では、追いかけますか。」

と、言っても、ユーの走るスピードはそこまで速くない。僕とセラならすぐに追いつく・・・とも思っていたのですが・・・。

「っ、邪魔です！」

「うっとおしいですね。」

はい、メガロに邪魔されています。矢鱈でかいのに邪魔されてるのですよ。まあ、点突いて速攻で消し去ってますが。

「それでも、邪魔な事に変わりはありませんけど！」

攻撃はしてきませんね。恐らく、足止めでしょう。ならば・・・。

「ヘルサイズ殿！」

セラの手がユーの届きそうですが、その瞬間、メガロが割り込んできました。しかもあのメガロ・・・熊ですが、あれは切られて喜ぶタイプですね。気持ち悪い。

気が付いたら歩たちとも合流していました。ふむ・・・、よし、此処は任せちゃいましょう。

「お先に失礼します。」

壁や電柱を足場にしてユーが入って行ったマンションに行きます。確か・・・この辺りd

ドゴオオン！！

目の前でいきなり爆発が起こり、その破片が見事に僕の頭にクリーンヒットしました！

「~~~~~っ！これは、痛いです。すごく……。」

痛い、すごく痛いです。やんなちゃいます。

『抜け駆けした罰では？』

『そこまで悪い事はしていない……はず。』

ま、まあ、痛くても我慢です。それよりも……

「ユー！無事ですか！？」

「おや……、君はいつかの病弱君じゃないか。」

ここは彼の自宅でしたか。なるほど、良いマンションです。

と、そんなどうでもいい事を考えていたら、歩たちも来ました。

「やれやれ、家を壊された拳句、招かれざる客……参ったね。」

「うるさいです。早くユーをこちらに引き渡して下さい。」

「嫌だね。君たちに渡しても、どうせまた冥界に帰ってしまうだろうっ？……ね？」

む、霧が出てきました。逃げるのでしょうか？

「させませんよ。」

ユーが手を払い、霧が消滅しました。ナイスです。その際に、夜の王を真つ二つにしましょう。死にはしなないです。

「ユークリウッド、要らない事をしてはいけないよ。」

瞬間、セラの剣が彼の体に突き刺さりました。よし、今のうちに真つ二つにしましょう。

「君にせいで、逃げる為に魔装兵器とやらを使わざる得なくなってしまった。」

・・・爆弾。爆処理呼んだ方が良いですかね？

『一応、私は出来ますよ。爆処理。ですが・・・。』

『ええ、僕はユーを追います。』

見れば、夜の糞王は窓の外に飛び出しているではありませんか。頂けません。追いかけます。

「セラ！行きますよ！」

「はい！」

ユーは僕に向かって手を伸ばしています。待っていてください！今すぐ・・・僕のエゴで連れて帰ります。しかし、夜の・・・ネタが

尽きたので夜野で行きます。死んでも王とは言いたくありません。夜野は中々早いです。僕と同じぐらいでしょうか？まあ、同じぐらいなら同じぐらいなりに手はあります。

「セラ！糸で奴を拘束するので、その瞬間捕まえてください！」

「分かりました！」

糸でこうそぐつ！？

「ゴフツ！」

なんですか？急にお腹の辺りに熱と痛みが……。後ろを見てみると、熊がその爪で僕のお腹を突き刺していました。わずかに出来た隙に、夜野は一気にスピードを上げて逃げていきました。

「臃！？」

そう、こんな、こんなもどき如きの所為で、ユーは攫われ、夜野は逃がしました。

「・・・おのれ。」

「臃！大丈夫です　　っ！？」

「おのれ。もどき風情が随分舐めた真似してくれるじゃねえか。ええ？折角あとちよつとの所でユーを連れて帰れたかもしれねえのに、肝心な時に邪魔しやがって。もちろん、覚悟はできてるんだろ？なあ？手前らは、死ぬ事すらもゆるさねえ。その手に握った六銭、無用な物と思え。」

腹に穴が開いている？そんなもん、後で治しゃあいい。でもな、この怒り、この怒りだけは……

今ここで晴らさなきゃあ、俺の気が済まねえんだよ。

殺戮なんてしてやらねえ。殲滅もしてやらねえ。こいつらは『消す』。存在した証拠すらも残さずに、一つのDNAも残させずに、消し去ってやる。

「獄死、鑢。」

そこには、僕とセラを除いて、何もありません。いや、無くなったと言った方が良いでしょうか？あ、いえ、

「『悪いでしょうね。』」

……言葉を被せてきましたよこの人。

そう、先ほどまでは十数体のメガロがいた。ですが、その姿は今も鮮血も残さずに消え去っています。まあ、僕が消したのですが……。本気を出して、殺しに掛ければその実、僕に殺されない人などほとんどいないのですよ。ああ、『人』ではありませんでした。『人外』でした。まあ、人もありますけどね。一人除いて。ま、なにせ僕は……

「臃……？」

「怖いですか？セラ。」

「……………」

「まあ、怖いでしょね。あれだけのもどきを全員消すまでにかかった時間は一分にも満たないですから。恐れて当然です。そして、覚えていてください。これが僕……殺人鬼、否、殺人外鬼です。」

そう、僕は零崎で唯一の人外を殺す、もしくは消す零崎臙識でもありますから。」

「…………さて、帰りましょうか。」

正直、少し疲れました。お腹が痛いですし。風が通り向けるたびにスースーします。

「…………臙。」

「なんででしょう?。」

「私は、受け入れますよ。」

「…………は?。」

「臙は、私たちを何度も助けてくれました。なのに、その恩人の事を恐ろしく思うなど、恩を仇で返す行為です。なので、というわけでもないのですが、何故でしょう?不思議と、臙の事は怖いと思えないのです。なので、そんな臙も受け入れますし、怖くありません。」

「・・・そうですね。」

「・・・フツ、ハア、まったく、あの家に住む住民は、皆普通では
ありませんね。」

『それは、あなたですよ。』

まったくもってその通りです。

第22話 僕は殺人外鬼です（後書き）

朧「あとがきコーナー！」

フレイ「ちょっと！今回私が出てないんだけど！？」

朧「どこに行っていました？」

フレイ「京都！いやー、日本って良いね！」

朧「それじゃあ出れませんよ。あきらめてください。」

フレイ「なんと!？」

朧「いいじゃありませんか。ここでたーくさん出ているのですから。」

フレイ「その役も、だんだん七実ちゃんに取られてきたんだけど！？」

朧「・・・まあ、次は出るんじゃない？」

フレイ「なんて適当なっ!！」

朧「はい、次回予告です。」

フレイ「無視しないでよ。」

朧「えーっと、何々」

・決着

「適當ですねえ!!?」

作者「まあ、夜の王とは決着ですね。ククク、もちろん、それだけで終わらせる作者ではありません!」

朧「またアホなこと考えてますよ。」

作者「無論、被害者は朧くんです。」

朧「なんだと!？」

フレイ「んじゃあ、今回はここで終わり!セーの!」

朧・フレイ・作者「」「最後までお読みいただきありがとうございます!」「」

七実「臃、アニメは録画しましたか？」

臃「……………あ。」

七実「……………(ニッコオオオオ)」

第23話 決着です。夜の王の件はね

はろはろ、皆さん、臙です。

『宛先は4・2・4・2・5・6・4ですよ。』

『急に何を言っているのですか？』

『え？はろはろと言えば、ソウルイータ でしょう？』

『それは偏見です。と言うか、ちょっと状況の説明をしているので静かにお願いします。』

『それは失礼しました。』

ふう、急に割って入ってきたのでビックリしました。

あの後、あの爆弾は歩がなんとかしたようです。なんか、上空で自分もろとも爆発させたようです。いやはや、過激ですね。ですが、それで粉々になっていたら意味ないでしょう。え？僕の場合どうしたか？テキトーにその辺の海に投げ捨ててきます。時間の問題もなんとかなるでしょう。本気で走れば、あのフラグ合衆国から日本までも日帰りできましたし。

で、歩はと言うと素っ裸で二駅越えて帰ってきたようです。スツパで。変態ですね。僕が現場に居なかった事がものすごく悔やまれます。もし、現場に居たら通報していたと言うのに。それでもって、今はアリエルと修行中です。まあ、あっちは先生、言わば本職です

からね。歩をボコすゲフンゲフン！いじめるのはあっちに任せましよう。

「臆。これから・・・出掛けませんか？」

「出掛ける？別に良いですが・・・。」

セラが僕と出掛けるなんて珍しいですね。あれでしょうか？用心棒役でしょうか？

「違います。」

「まさか、七実からそんな普通にツッコミを受けるとは夢にも見ませんでした。」

「いえ、あまりのアホさについて。」

「アホって・・・、僕の学年順位は一位ですよ？アホなはずありません。」

「バカと天才は紙一重。」

「そのセリフ、バットでそのまま場外ホームランしてやります。というか、それはあなたにも言えることですよ？」

「え！？」

「いや何そんな『マジ！？』みたいな顔で驚いているのですか。当たり前前です。」

『・・・私は天才ではありません。天災です。』

『なら、僕もそういうことになりませんが？』

『・・・負けました。』

『よし！！』

勝った！勝ちましたよ皆さん！遂に七実に口で勝ちましたよ！！

『接吻なら負けませんよ？』

『そつちじゃないですよ！！口論の方です！！』

どうやら、完勝はまだまだ先の様です。というか、負けないってな
んですか！？もしや、すでに経験済みだったのでしょうか？

『いえ、未経験です。』

『じゃあ何故にそんな自信満々なのですか？』

『知識だけありますから。臆と違って。』

『何言っちゃってるんですか。僕だって、知識は一応ありますよ？』

『まあ、知識があるだけで実戦経験は皆無ですが。』

『これほど空しい事ありませんね。』

『僕は別段困らないのですが。』

「あの、臍？」

おお、少しセラと話しすぎましたね。

「あ、何でしょう？って、出掛けるって話でしたね。僕は構いませんよ？」

「そうですね。では行きましょう。」

そんなに嬉しかったのでしょうか？顔の表情が緩んでいるのが丸わかりです。まあ、セラはぶっちゃけ、何やっても絵になるのでしょうが。

『そうですね。』

『最近では、七実がパソコンの前に居る事が、逆に何故かしっくりきてしまうようになりました。』

『日ごろの努力の賜です。』

『いや、日ごろの怠惰の賜でしょう。』

逆ですよ逆。

「それで、どこに行きたいのですか？」

「一度行ってみたい場所があったのですが……。」

「じゃあ、そこで。」

「いえ、臙が行きたいところで良いです。」

ハア、全く、何言ってるんだか……。

「セラが誘ってきたのです。セラが行きたいところに行くべきですよっ?」

「そう、ですね。わかりました。」

と言つて、二人で並んで歩き始めます。が、何故か徐々にセラが後ろに下がって行きます。

そんなに僕と歩くのは苦痛でしょうか?

「あの、セラさん?どうしたのですか?」

「い、いえ、別に……。」

「いや、本当にどうしました?顔が真っ赤ですよ?」

「アレだね!照れてるんだよ!」

「いや、何でフレイがそこに居るのですか!?」

「テレパスってやつだよ!臙の映像は七実ちゃんが提供してくれたよ!」

「おおい!七実!何勝手にやってくれちゃってるんですか!?」

『ノリ。』

『ノリ！？ていうかフレイは今どこに居るのですか？家にもいませんし。』

『京都だよ、良いよ京都。八ツ橋がベリーヤミーだよ。』

『お土産を要求します。ですが、テレパスと映像の提供は止めてください。』

『ほいほい。・・・まさか、セラが原作とは逆の立場になるとは。臆、恐るべし。』

『何か言いましたか？聞き取れませんでした。』

『んーん、何でもないよ。じゃね〜。』

「いえ、大丈夫です！」

まさかのシャウト。質問した僕が驚きました。

「は、はあ・・・。ですが、セラが後ろにいては、どこが目的地だかわかりませんか？」

「そ、そうですね。」

・・・？よく分かりませんね。フレイは照れていると言っていますが、その照れる理由が分かりません。後で要検討です。

『検討するまでもないと思うのですが・・・。』

『え？』

『ハア、何でもありません。』

なんか、ものすごく呆れられましたけど？横でセラはもじもじして
ますし、僕は早くもどうすればいいか分からなくなってきましたよ。
どうしましょう？だれかこの状況を打破できる猛者はいませんか？
いませんね、ハア。

そんなこんなでどうすればいいのかわからず、だんまり決め込む事
数分。ようやく、目的地に着きました。

「ここです。」

メイド喫茶でした。僕の予想を斜め上行くところか飛び超えて行き
ました。度肝を抜かれました。抜かれ過ぎてしばらく思考がフロ―
ズンされました。

「いらつしゃいませご主人様！二名様でよろしいですね？」

「はい。」

メイド喫茶は初めて来ましたが、やはりモノホンとは違いますね。
うん、千賀三姉妹や斑田さんみたいなのが本当のメイドと言うので
しょう。・・・いや、あそこの事はあまり思い出したくありません
ね。唯一の救いと言えば、潤さまとすれちがいでギリギリ出くわさ
なかったのですよ。危なかったですね。ああ、そう言えば、僕が島
を出た後、また色んな方々が来たようですね。まあ、興味の欠片も
無いのですが。あそこに行つて良かった事と言えば、おいしい料理

ぐらいでしょうか？ハア、思い出したらテンションが下げになりました。もう、誘いがあっても絶対に行きません。ええ、行きませんとも！絶対に行ってやるものですか！！

「で、なぜにこんなところに？」

トラウマを思い出したら思考が解凍されました。ようやくまともな事が考えられます。

「その、可愛い服がみたかったのです。」

「へ？」

可愛い服・・・？あ、そう言えば。

「確かに、セラは吸血忍者に珍しく、女の子っぽい恰好していますね。」

「そこですー！」

ビクンちょー！！急に声を荒げたので驚きました。

「吸血忍者の衣装は、どれもこれも地味過ぎるのですよっ！里では鎖帷子ですよ？ブラも付けずに！」

それは卑猥ですね。吸血忍者のお偉い方の印象がますます下がりました。里には行ってみたいくないですね。

『私は、吸血忍者じゃなくて良かったです。』

同意します。

「あのマントだって付けていないと能力に制限が付きますし・・・
そもそも。」

よくもまあ、そんなに愚痴が出てくるものです。それほど吸血忍者の服装が嫌ですか。まあ、マントが無いと能力に制限が付くのは、迷惑以外の何物でもありませんが。僕は嫌ですよ？そんな面倒くさい。マントなんてあっても邪魔なだけです。ええ、邪魔なだけです。

「つまり、メイド服など、可愛い服が着てみたいと言うことですか？」

「嫌ですよ、気持ち悪い。」

この店のメイドさんの心にグサツ！と言の刃が突き刺さりました。と言うかセラさん、メイド喫茶に来てメイドが気持ち悪いと言っただけじゃないよ。それが本業の人も世の中にはたくさん居ますから。

「じゃあ、どうしたいのです？」

「見ていただけで十分です。着たいとは思いませんが。」
なるほど。さっぱりわかりません。

「それより聞いてください。吸血忍者を要請する施設ではスカートすら禁止なんですよ。」

それから出るわ出るわ吸血忍者に対する愚痴の数々。ここまで来ると聞いている側も楽しくなってきましたよ。愚痴聞くの慣れていまずし。

「ところで、臙。」

「なんででしょう?」

「歩についてですが・・・どう思いますか?」

「気持ち悪いと思います。」

はい、第一印象が変態ですからね。因みに今は変態ゾンビです。1
ランク上がりました。

「それについては共感しますが、その事ではなくヘルサイズ殿に
対することです。」

「ああ、あれですか。恐らく、迷っているのではありませんか?自
分が本当にユーにとって正しい事をしているのか。」

「バカですね。」

「ええ、バカです。そんなもの、連れ帰ってから考えれば良い物を、
連れ帰る前からうじうじ考えているのですから。」

「臙は、迷わなかったのですか?私は少し迷ったのですが。」

「僕ですか?迷わなかったと言ったらウソになります。ぶっちゃけ、
この家を去ろうかとも考えましたが、まあ、そんなくだらない考え

はさつさとゴミ箱にポイして、ユーを連れ戻すと決めました。」

「話が急に飛びましたね。」

「ああ、ユーを連れ戻そうと思ったのは、単純に僕がそうしたかったからです。そこにユーの気持ちを考える思考はありません。」

ええ、ユーを連れ戻すのは、あくまで僕のエゴですからね。

「それで良いのですか？」

「え？さあ？そんなの知りませんよ、良いか悪いかなど。ただ、今回は僕がしたいようにしようと考えただけです。」

「まるでハルナみたいですね。」

「あの強引さが、時には必要なのですよ。セラだって分かっているでしょう？」

「はい。では、歩にはその様に言うておきますか？」

「ん？あー、そうですね。頼めます？」

「任されました。」

そんな感じで会話は終了し、お会計を済ませて帰宅します。ああ、途中でセラとデパートにて、普通にショッピングしました。これは・・・デートと言っちゃつですか？

『その通りです。良く出来ました、えらいえらい。』

『褒められている気がしません。』

『ですが、遂に日常とデートの違いが分かるようになってきましたね。良い傾向ですよ?』

『そうですね? まあ、七実がそういうのならそうですね。』
帰宅後、特にすることも無いので僕の姉御の元に尋ねてみることにします。まあ、居ないかもですが。

「姉さん、居ますかー?」

「いますよー、臃くんがたずねてくるなんて、明日は槍でも降ってきますそうですね。」

「失礼ですね。僕だって家賊の心配ぐらいします。で、どうですか? こちらの生活は。」

「良い感じですよー、たまに何か変なのに出くわしますが。」

変なのとは、恐らくメガ口の事でしょう。

「それは僕の専門です。殺しても構いませんが。」

「よかったです。既に5体はやっちゃってますので。」

・・・さすが、愚兄から逃げただけの事がありますね。戦闘力もそれになりありますよこの姉さん。

「ま、気を付けてくださいね。雑魚ですが、あれも一応人外ですから。」

「人には見えませんよさすがに。」

そして、しばらく世間話な殺害の美学について語り合い、そろそろ良い時間となったのでおさらばします。

「それでは、僕はここで。」

「では、最後に弟成分をチャージさせてください。」

「丁重にお断りします。」

逃げるように帰宅しました。途中まで追ってきたのでめっちゃ怖かったです。

まあ、そんなこんなで今日と言う日は終わりました。ものすごく平穏でした。素晴らしい。

ですが、そんな平穏、長くは続きません。次の日の夜に事は動き始めました。大量のモノホンメガロが現れたのですよー、いやー、一大事。何が一大事かって、我が一族のですよ。先ほど入ってきた情報なのですが、どうやら家賊にも被害が出たようで、幸い、死亡者は出ていませんが、時間の問題です。僕は誰かを待っている時間も惜しいので、すぐさま行動します。ええ、夜の王抹殺（仮）です。再起不能にはします。

『七実、どこに居るのか分かりますか？』

『私を何でも屋と勘違いしていませんか？知っている事と知らない事があります。』

『ハア、これはいつそ、歩に丸投げして、僕は一賊の救援に向かいましょうか？』

『駄目です。ナイトキングとはしっかりけじめつけてください。』

『冗談ですよ。』

彼の性格からして、たぶん東京タワーに居るでしょう。そこに向かいます。

・・・流星群まで降ってきました。ああ、魔装少女ですか。ますます拙いですね。まあ、僕が人外に認定した方々の情報は渡してあるのでなんとかなるはずですし、愚兄も、レンさんもアスさんいますから、なんとかなるでしょう。おっとここですね。

「よく来たね。」

「来ちゃいましたよ。さて、話し合いは無用です。こう見えて、僕も結構焦ってますからね。即決めさせてもらいます。」

その時、ドンと言う音がしたから聞こえてきました。いやはや、本当に大丈夫でしょうね？

だんだん不安になってきましたよ。ちょっと電話してみましよう。

「・・・あ、もしもし愚兄？僕です。はい、今どんな状況ですか？何？戦闘中？ならば、今すぐそこから退避して下さい。理由？そうですね・・・、僕が本気出すからです。ええ、ん？臆識として？違います、その両方として本気出しますので早く退避して下さい。で

は、お願いしますよ？」

よし、これで良い。」

「思ったより早かったね。相変わらず、魔装少女は血気盛んだ。」

「そーですね。それには僕も同意します。で？何故、ユーが泣いているのですか？」

「俺がユークリウッドにメガロを呼ばせた。それによって、今この状態が出来ている。」

・・・なるほど。態々、ユーの嫌いな争いを起こさせ、それによりユーの怒りを買ひ、死のうとしたわけですか。腹立つ、死ぬことぐらい、自分でしてほしいものです。太陽にでも行ってみれば良いじゃありませんか。絶対に死ねますよ。それなのに、高々自分が死ぬだけのためにこのような事を・・・ユーを泣かせるなど、元々許す気も無いのですが、許し難いですね。

「その顔だ。その切ない顔が見たかった。どうだい、綺麗だろ？」

あー、苛々します。思わず、消しなくなってきました。まあ、落ち着きましよう。クールになるのです。落ち着いて、悪刀を心臓に突き刺し、大鎌を取り出しましょう。

「この世界は美しい。億の言葉を用いても語り尽くせないほどに美しい・・・いつもユークリウッドはそう言ってた。今、それが焼かれている！お前が最も嫌いな『争い』によって！さあ、ユークリウッド！俺を殺せ！辛いだろ？悲しいだろ？俺が憎いだろ！」

・・・落ち着け、耐える。殺してはいけません。殺人衝動を抑える。限界までに。

『私には 出来ない。』

「まだ憎くないのか？見てみなよ。俺の作ったメガロはまだ残っている。・・・まだまだこの街を焼けるんだ。」

『憎い 殺したいほど。』

「そうだろう！そうだろう！」

『でも 私は あなたを もう友を殺したくない。』

「・・・そうか。相変わらずだね。鎌で痛めつけることは出来ても、殺すまではしない。いつも上辺だけ。・・・だったら、その気になるまで君の美しい顔を楽しむとしよう。」

「話は終わりましたか？」

いけませんね。我慢すぎて頭の中がブチブチ言ってます。脳内出血ですよ、ハハハ！あかん、気も狂ってきた。

「態々待っていてくれたのかい？君も律儀だね。」

・・・あー、理解、しました。こいつには鎌なんて使ってやりません。もつたいない。

『七実、アレ、やりますよ。』

『・・・まさか、融合の事ですか?』

『その通りです。お願いします。』

『・・・ハア、分かりました。では、行きますよ?』

瞬間、何かが僕の中に入り込んでくるのが分かる。恐らく、七実が入ってきているのでしょう。ぶっちゃけ、ちょっと気持ち悪いという感覚がありますが、それもあと少しで終わりそうです。そして

「どうした?来ないのか?」

その質問に対する僕の答えは。

「フフフフフフフフフフ・・・」

「フフフフフフフフフフ・・・」

悪笑。それも、今までで一番の悪笑だと思います。

「・・・何がおかしい?」

「何がおかしいか?そんなの決まっているじゃありませんか!」

「死にたいのなら、宇宙なり、どこなりと好きな所へ行つて太陽なり、ブラックホールなりに吞まれて消え去れば良いのです。そんなことも思いつかないのですか?」

上が僕、下が七実です。言いたいことは意識もリンクし、お互い考えている事も丸わかりなので、同じです。

「なんだと・・・？」

「とりあえず、僕の方がそろそろ限界なので行きますよ？」

瞬間、僕は瞬時に彼の懐に潜り込みます。さすが、志貴君の身体能力に、七実の身体能力です。今までの数倍速いです。

「なっ！」

「これは、あなたに傷つけられたハルナ分です。」

「虚刀流『鏡花水月』。」

最速の掌底が彼のアゴに入り、彼は上空に打ち上げられる。その瞬間、僕も上空に跳び彼よりも斜め上にまで昇る。

「これは、あなたに傷つけられたセラ分です。」

「虚刀流『落花狼藉』。」

足を斧刀に見立てた、踵落としが彼の頭に当たる。彼はそのまま頭から地面に激突した。

「そしてこれは、あなたに泣かされ、心を痛めたユー分です！！」

「虚刀流『花鳥風月』。」

貫手が彼の腹の辺りを貫き、血しぶきが僕の顔に掛かる。本能的に目を瞑ってしまった。そう、その瞬間、僕の顔面に衝撃。殴られたようです。

「グッ！？」

「っ！？」

「・・・効いたよ。まさか、此処まで強いとは思っていなかった。だが、そんな事よりもユークリウッド、今、反応したね。」

「いつつ・・・、頭蓋骨が陥没しました。すぐに治りますが、頭がクタクラします。」

「久しぶりですね。痛い、という感覚は。」
「我慢して下さい。」

傍から見れば一人二役ですが、残念ながら今は二人一役です。これでいいのです。」

「もつとその表情を見ていたが・・・やめだ。君相手にその余裕は無い。」

瞬間、霧が展望台に充満しました。

「本気で来ますか。」
「ですが、拙いですよ。この状況は。」

確かに、彼の能力が霧で包んだモノの瞬間移動なら、この状況はすごく拙い。」

その時、目の前に指らしきものが現れました。まあ、なんとか回避は出来ましたが、全方向からそれが来るのです。やばいっただらありません。」

「臆、右、左、上、下です。」

「っ！きつ……。」

回避するだけでやっとです。目も当てられません。その時、

「「臍！！」「色白さん！」

という声が聞こえました。今は……セラ？と歩？でしょうか？ハルナは間違いなさそうです。正直に言います。最悪のタイミングだと。

「ヘルサイズ殿を確保し　くっ！？」

やはり、それを見逃す彼ではありませんか。今の彼は、たぶん本気です。油断も隙もないというものでしょう。

まずい、この状況で歩たちは来るべきではなかった。僕が助けるしかないんですから。

で、当然、彼もそれを重々承知しているはずですから……。

目の前に、歩たちが来たことによるわずかな隙について、腕が現れる。それに、顔面を思いつき殴られました。

「ガッ！？」

「っう！！」

吹き飛び、強化ガラスに叩きつけられました。強化ガラスにひびが入ります。

「ふむ、君の弱点はどうやらその人たちの様だね。なら、優先的にこの人たちを狙うでしょう。」

・・・なんだと？こいつ今何と言った。その人たち、つまり、セラたちを狙うと言ったのか？いい度胸だ。

セラたちをを発見し、すぐさまその前に立つ。

「臃・・・？」

「そこで何もせずじっとしててください。」

「し、しかし・・・。」

「言うてはなんですが、足手まといです。」

「っ!」

あ、今のは七実の言葉ですよ？この人は言いたいことはズバツと言いますからね。

「へえ、それで、一体どうするつもりだい？」

「守り抜きますよ。全方向からの攻撃？いいですよ、やってみてください。全部防ぎますから。」

瞬間、僕の周りに指が現れました。それを僕は単純に、爪で死線をなぞり、切り裂いていく。

「な」

言うなれば、火事場のバカ力の様なものです。現にさっきは出来ませんでしたし。どうやら僕は、守るべきものが多いほど力を増すよ

うですね。

その後、さまざまな攻撃がありました。腕、脚と全部を攻撃に回してきましたが、僕はそれを全て切り裂く。今、彼は恐らく達磨状態でしょう。当然です。死線を切られた物質は、治らないのですから。

「くっ！？何故だ！何故再生しない！」

「・・・そろそろ、出てきたらどうですか？」

「それとも、怖いですか？」

「舐めるな！！！」

頭突き。ただ単純な頭突きが飛んできました。まあ、当然です。もう、飛ばすものを無いのですから。僕はそれを・・・、

「虚刀流『七花八裂（改）』」

虚刀流の最終奥義でカウンターしました。

霧が晴れ、彼は倒れていました。まあ、綺麗に決まりましたからね。

「これで、終いです。」

「虚刀流『雛罌粟』から『沈丁花』まで打撃混成」

その途中で、何者かに抱き付かれました。

「ユー？・・・ああ、はい、わかりました。」

戦闘終了です。・・・いや、歩たちは、と言ったところでしょうか。

「難儀ですね……。」

「臃、やったな。」

「終始役立たずですね、歩。ああ、早くここから逃げてください。」

「「「え?」「」「」

「ユーも、彼の願いを聞き入れるかどうかは分かりませんが、ユーのやりたいようにしてからここから逃げてください。歩、ユーを任せました。」

「おい、ちょっと待て。話の流れがまったく掴めない。どういふことだ?」

「いいから、早く行けやこのうすのろが。」

「っ!てめ」

「歩、行きましょう。」

「……分かった。」

それは何より。

彼は……光の粒子になり、消えて行きました。どうやら、彼の願いを聞き入れたようですね。ですが、今はそんなこと気にも止めていられません。何故なら……

『臃？』

「ユー、行ってください。」

『でも』

「すみません。ユー、言いたいことはたくさんありますが、その中で一番言いたい事を言っておきます。ユー、僕と、ずっと居てください。」

ユーははっとした表情で僕をみました。

「ユーがいるから、僕が傷つくだけでも？ユーが居るから、皆に迷惑がかかるとしても？そうかもかもしれませんが、そんなもの、僕がユーと一緒に居たいと思えない理由にはなりません。それでも、頑固に一緒に居てくれないと言うのなら、今度は僕がユーの前から消えてやります。」

『それは困る。』

「なら、一緒に居てください。」

『でも 皆に迷惑はかけられない。』

あー、分からない人ですね。

「迷惑？僕が誰だと思っているのですか？臃臃ですよ？ユーが持つてくる迷惑など、ことごとく消し去ってやります。」

『でも。』

あー、もう！こんな事に時間を掛けている暇は無いと言つのに！

「ええい、強行策です！」

僕はユーに強く、強く抱きしめました。

『痛い。』

「ユーが分かったと言つまで、離しませんからね。さあ、早く分かったと言つて下さい。死ぬほど恥ずかしいのですから。」

『分かった。』

「否、分かってません。」

「分かったよ……。」

ユーが言葉を発しました。それはつまり……。

「私はもう、何があってもずっと隴の傍に居るから。」

「……合格です。さて、早く言つて下さい。僕は、ちょっと野暮用があるので。」

『分かった。』

……ユーが歩たちとともに爆処理に行きました。そして僕は……

「こんばんは、こんな時間に珍しいですね？」

柱の陰に隠れていた、ある『赤い人物』に話しかけます。

「よお、おっくん。ちょっと殺しに来たぞ。」

そこには、今回の件のラスボスが居ました。

第23話 決着です。夜の王の件はね（後書き）

朧「あとがきコーナー。」

フレイ「いいやつふー!!」

朧「テンション高いですね。」

フレイ「それは何時もだよ!!」

朧「まあ、確かに。」

フレイ「今日は本編について切り込んでくよー!!」

朧「まず、決着ですね。」

フレイ「朧、強過ぎじゃない?」

朧「いえ、よく考えてください。僕＋七実ですよ?むしろ、当然の結果と言えるのではないのでしょうか?」

フレイ「もっと白熱した戦いでもよかつたんじゃない?」

作者「それは、まあ、色々あるですよ。」

朧「いたのですか?」

作者「いたのです。白熱した戦いは次回です。まあ、戦闘描写は苦手なのですが。」

フレイ「ダメじゃん。」

朧「ダメですね。」

作者「五月蠅いやい！朧くんなんて赤い人にボコられればいいんだ！」

朧「ああん？」

朧「一難去って巨大な難が降っていましたよ。」

七実「ファイト。」

朧「あなたの力も借りますよ?」

七実「なんと!？」

朧「貸さないつもりだったのですか!？」

第24話 決着です。フラグ？勿論回収してしまいましたよ（前書き）

難産でした。かなりん駄文となっておりますが、どうか寛大なお心で
ご容赦ください。

第24話 決着です。フラグ？勿論回収してしまいましたよ

皆さんこんばんは。臆です。と、言っている暇も何もないのです。まあ、恒例なのでこれだけでも言っておきましたけど。

「何故、潤さまがこんなところに？」

「おっくん、あたしの職業は？」

「請負人ですか？」

それはもう、あなたの事を知っている人ならだれもが知っていることでしょう。

「そうだ。つまり、依頼だ。おっくんを殺せと言う依頼が来て、それをあたしが引き受けた。」

「理由を聞いても良いですか？」

「いや、偶然にも、あたしたちの戦績は0勝0敗2分けだろ？ここらで、白黒はつきりつけようと思っとな。」

「・・・もしかして、この前来た時の「今度は戦場でな。」と言うのはフラグですか？」

「お、良く分かったな。そうだ。」

しまった！あそこで気付きべきでした！

「さて、始めようか？『恨みも欠片も、微塵も、小指の甘皮ほども御座いませんが、お仕事により・・・あなたを抹殺します。』みたいなっ！」

「フフフ・・・、成程成程、確かに、白黒はつきりつけたいですね。ええ、本当に。」

『七実。』

『分かっています。私は手を出さず、虚刀流と凍空一族の怪力を貸します。・・・どうか、無理だけはしないように。』

『ありがとうございます。ですが、無理するなという願いは、保証できません。僕にも、プライドはありますので。』

『そうですか・・・。』

「ああ、付けたいなあ。」

「ええ、付けたいですね。」

静寂。お互いの間にはただそれが流れていた。ふと、「龍牙雷神衝つ！」と言う声が聞こえました。その瞬間、

バゴンッー！

お互いの拳が、ぶつかり合い衝撃波を生じさせます。

「やるなあ。」

「まだまだですよ。」

潤さまが回し蹴りをし、僕はそれを片手で受け止めます。

「らああ!?!」

「ツ!」

回し蹴りの勢いを殺さず、そのまま殴ってくる。ギリギリですが、それもなんとか防御しました。

「虚刀流『七花八裂（改）』。」

虚刀流の七つの奥義を同時に放つ。だが、それさえも普通に防がれてしまいました。

ここまで、お互いにじゃれ合ってみて分かった事が一つ。

「「ここでは狭すぎます（る）。」」

その瞬間、技も何も関係無しの殴り合いが始まりました。

「先に！飛ばしてやるよ!?!」

「「こちらの！セリフです!?!」」

拳を捌き、その隙に殴るも、その拳も捌かれ、時にはガード、時に

はカウンターをしていき、それもおよそ常人では見ることさえ叶わない速度で繰り返します。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ!!!」

・・・ああ、そう言えば、潤さまはジャンプ好きでしたね。

「考え事か！？随分余裕だなあ!!!」

「ガア!?!」

鳩尾に一発もろに入りました。そのまま吹き飛ばされ、強化ガラスも貫通し、外に出ます。

「外は、僕の領域です!!!」

袖から鋼系付きの中鎌を2本取り出し、それを潤さまの方に左右同時に切りつける。

少なくとも、傷の一つは付けられたと思いました。が、世の中そう甘くないようですね。

「何!?!」

簡単なことです。左右同時からの斬撃は潤さまの両手により、柄の部分握られて阻止されたということです。否、それだけではないでしょうね。

「つつ!!!?!」

潤さまが鎌を掴んだと思ったと同時に、体に激しい痺れを感じました。良く見てみると、右手にスタンガンを持っていますね。・・・ま
ずい。

「らあー!!」

「っ！虚刀流『雛罌粟』から『沈丁花』まで打撃混成接続!!」

痺れて精密な回避運動は不可能。なら、大雑把でも攻撃した方が良
いですね。

手がぶつかる度に衝撃波が発生する。それにより、建物のガラスな
どが割れていく音が聞こえます。まさか、大雑把とはいえ、272
もの打撃と均衡するとは思ってもありませんでした。

「おらあ！落ちろ!!」

「ぐあー!!?」

競り負けた。顔面を殴られ、頭からものすごいスピードで地面まで
落下していきます。ああ、強いですね。本当に。これ、地面に激突
したら間違いなく僕は気絶しちゃいますよ。

「・・・それは、嫌ですね。」

こんな、こんな、楽しい時間を自ら終わらせるなど、あり得ません
ね。

顔を地面の方向に向け、落下したまま

「虚刀流『七花八裂（改）』！！！」

轟音。恐らく、僕も中心にバカでかいクレーターが出来ているでしょう。なにせ、殴られた威力＋七花八裂（改）ですからね。

空中に未だにいる潤さまに

「忍法爪合わせ応用版忍法「爪解し（ばらし）」」

右手を潤さまに向け、爪が伸び、徐々に解けていきます。枝分かれするように解れて行く爪。それを潤さまの居る方向に一気に伸ばします。

「なっ！！！」

潤さまとて人間です。空中では何もできない・・・筈です。そう、確かに、空中で『回避行動』はとれませんでしたね。

「らああああああ！！！」

「・・・あなた人間じゃねえよ。」

迫る爪を両手両足使って押し折りながら落下してくるって、あなたもう人間止めましようよ。ハア。

「よっと、さて、そろそろ真面目にやるかあ？」

「ですね。広いここに来ましたし、僕も存分にやっつけてやりますよ。」

服の中に仕込んである鋼糸を全て建物や電信柱、看板などに巻き付けていく。

「いくぞー!」

潤さまが迫ってきますが、此処は僕のフィールドです。迫ってくると同時に鋼糸から鋼糸へと、ランダムに跳び移って行きます。

「行きますよ、殺曲。」

歌を歌いながら潤さまを切りつけていきます。

「ちい!」

お腹、首、脚、腕と切りつけていきますが、悉く防がれて行きます。というか、爪も折れていきます。どんだけアイアンボディなのか。この爪、鉄も楽々切り裂くのですよ?

曲が終わり、僕は潤さまの目の前に立ちます。

「よお、小細工抜きでやろうとは思わないか?」

「思えません。基本、僕の戦闘は小細工だらけですよ?」

「違うな。お前は隠してるんだよ、本当の力を。ほら、とっとと本気を見せてみる。」

・・・フフ、

「フフフ・・・、フハハハハ・・・。」

「なんだ？おかしくなったか？」

「いやはや、見抜いたのは潤さまが2度目です。良いですよ。見ます？見ちやいますか？僕の本気。見ても良いですが、先にその手に握った六文、僕に払って下さい。僕が『死神』言われる所以を見せてあげましょう。」

「・・・見せてみるよ、『死神』。」

「行きますよ、『人類最強』あ、その前に。」

服の中、及び体の中にある全ての物を地面に落します。鎌12本、糸各種、仕込みナイフ、服、全てです。

「・・・そんなに仕込んだのかよ。」

「どこを見ているのですか？」

遅い、遅すぎます。

「・・・へえ、随分ましになったじゃねえか。」

「行きますよ？」

高速で潤さまに迫り、殴りかかる。

「っ！」

ガードされましたが、それでいい。

「虚刀流『柳緑花紅』。」

潤さまの溝内に手を当て、内部の肺に衝撃を与える

「かはっ!?!」

「虚刀流『錦上添花』。」

手を水平手刀にし、両脇を打つ。

「グフツ! 舐めるな!」

「っ! 虚刀流『董』。」

虚刀流の中では珍しい投げ技で、殴りかかってきた潤さまを投げます。これで、一旦小休止です。

「やるなあ。じゃあ、あたしの方も行かせてもらおうか!」

潤さまが突っ込んできます。

「オラア!」

そのまま殴打を連発します。殴り合いですか、良いですね。ならばこちらも。

「虚刀流『雛罌粟』から『沈丁花』まで打撃混成接続!」

ダダダダダダダダダダダダダダダダダッ!!!!!!

連打、ただひたすら連打します。もはや、拳と拳がぶつからずとも衝撃波が発生します。まるで、台風を中心みたいですね。

「ハハハ！良いなあ！！面白い！！」

「フフフ！！良いですね、ええ、実に良い。」

打撃混成接続？そんなもの、とつくに終わってますよ。今は本当に、ただ単純に殴り合っているのです。僕と、ここまで対等に相手出来るのはクリスと潤さまぐらいですかね？知り合いの中では。

「らあ！！」

「ぶっ！」

ドゴンつと踏み込んだお互いの足の下にクレーターが出来、ぶつかり合ったお互いの拳からは今までよりもより大きい衝撃波を生み出しました。

と、ここで周りを見てみます。建物は僕と潤さまが生み出した数々の衝撃波で既にボロボロ。地面はクレーターが何個も出来ています。

「・・・場所を選ぶべきでした。」

見れば、潤さまも同じような顔をしています。ですが、

「まあ、いいか。」

「次ぐらいでラストにするか？」

「どちらでもいいです。ですが、ラストにするなら、僕も全霊をもつて行きます。」

「じゃ、ラストで。」

「分かりました。」

・・・行きます。

「虚刀流『柳緑花紅』！！『鏡花水月』！！『飛花落葉』！！『落花狼藉』！！『百花繚乱』！！『錦上添花』！！！！」

「行くぞお！！」

前に突き出した拳をいなされ、掌底を弾かれ、合掌してから放つ両手の掌底をかわされ、跳び上がったからの足を斧刀に見立てた踵落としをガードされ、下からの蹴り上げを拳で相殺され、両手の水平手刀を左右の手により防がれます。

「まだまだあ！！虚刀流『雛罌粟』から『沈丁花』まで打撃混成接続！！」

そこからの連打。お互いに一步も譲らない、否、譲れない連打です。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！！」

「はああああああああああああああああああ！！！！」

お互い、両の手が弾かれ、一瞬、胸が無防備になります。

「そこだあああ!!!」

虚刀流『花鳥風月』!!

・・・決着は

「・・・さすがだな。」

潤さまの胸に、僕の貫手が突き刺さっています。

「・・・いえ、潤さまもです。」

僕の鳩尾に、潤さまの拳が深く、心臓まで達しています。拳で体内に捻じ込むって結構大変ですよ？

「この勝負、引き分け・・・です(だ)。」

引き分けです。と、同時に潤さまが倒れ、僕がそれを抱きかかえます。

否、唯の引き分けではありませんね。勝負においては、先に気絶した潤さまの負けです。が、生死の駆け引きでは・・・これから死に行く僕の負けです。故に、引き分けです。

殴られた方の反対側から、大量の血液が飛び出してきました。

「グツ……、あー、やっぱり、潤さまは、強いです……ね。」
足に力が入らず、仰向けに倒れます。既に、悪刀の効力はなくなり、もはや唯の苦無となっています。……フレイに頼んで作り直してもらいましょう。

『朧……。』

『ああ、七実。僕はそろそろ死にますので、後の事は頼みましたよ。』

『何を言っているのですか？今は一部とはいえ、私と朧の魂は融合している状態です。その場合、私も死んじやいますよ？』

……え。

『マジ？』

『大マジです。まったく、私までとばっちりです。』

『……すみません。』

『まあ、遅かれ早かれ、こうなることは分かっていたから、そこまで思う所も無いのですが。』

『……僕だけが死ぬのなら、問題は無かったのですが……。』

『朧？』

『七実を死なせるわけにはいきませんよね。よろしい、あと何分持つか分かりませんが、粘ってみましょう。』

骨肉細工で体の構造を変え、出血を出来るだけ抑えます。・・・打つ手がなくなりました。

いやまで、考える事を停止してはいけません。何か生き残る手を、この少し伸びた時間の中で考えるのです。

『七実、治療系の能力持ってませんか？』

『いえ、残念ながら持っていません。』

『東の永の能力は？』

『薬を使っている所を見ていません。』

・・・困りました。ブラックジャツみたいな自ら手術を出来るかと言われれば出来ませんし、かといって強力な治癒能力もありません。

・・・やばい、本格的に詰んできました。

「臃!？」

ああ、だんだん目の前が霞んで見えなくなってきましたよ。タイムリミットマジ早いですね。僕は・・・死ぬのでしょうか?今まで七実が居ましたから、そこまで何も思う所は無いのですが、今はちょっと違いますね。七実が居ても僕は死んでいきます。

「臃!大丈夫ですか!?しっかりして下さい!」

「・・・大丈夫ですよ。」

「嘘です！そんなに出血をしているのに大丈夫なはず・・・。」

あー、本格的にやばいですよ。死にます、死が間近に迫ってくるのが分かります。

「・・・ガフツ、セラ、たぶん、僕は死にます。」

「え・・・。」

まさかこの歳で遺言とは思ってもみませんでした。

「まあ、最期ですので洗いざらい言っておきますね。セラ、あなた、今回の爆処理で吸血忍者たちを助けましたね？」

「臃！最期ってなんですか！！」

「良かったですね。これで、セラはまた吸血忍者の仲間入りですよ。まあ、僕がサラスに頼んだのですがね。『セラがあなた方を救ったら許してやってくれ』と。おめでたです。」

「止めてください！そんな最期の言葉だなんて聞きたくありません！！」

「次にハルナ。あなたはその神がかった強引さと元気が素晴らしいですよ。それで、今後も歩たちを支えてやって下さい。」

「何言つてんだ！あ、あたしにそんなこと押し付けしないで、色白さんがやれよな！！」

「歩……は、特にありません。」

「ひどっ！？てかボケてる場合じゃねえ！臃！しっかりしろ！！」
しっかりしてますよ？しっかり、徐々に人生を幕として行っていきます。

「最期にユー。すみませんね、あんな事言った矢先にこの様です。」

『わたしの 所為。』

「否、これは僕の所為ですよ。他の誰でもない僕の所為です。ですから、ユー。どうか自分を責めないでください。ユーは、何も悪くないのですから。」

『嫌 死んじゃダメ。』

「……あれ？やばいですね。そろそろ、ですね。」

皆さんの姿が見えなくなったと言うより、ブラックアウトしたような感じですよ。

「臃！？しっかりして下さい！！」

「おい臃！何一人で勝手に死んでいこうとしてんだよ！！」

「色白さんのバカ！！勝手に死ぬなんて許さないからな！！」

……昔は、いつ死んでもいいやとか、死んだ時は死んだ時とか思

っていましたが、これは、この気持ちはそうですね……。

まだ、死にたくないです。

そんな思いと共に、僕は意識を手放しました。

）
完
）

第24話 決着です。フラグ？勿論回収してしまいましたよ（後書き）

作者「いや、終わりませんよ？このまま終わってしまったらあまりにも後味悪過ぎですから。まず、謝罪を。今回は愚かにも僕が一番苦手とする戦闘描写でした。かなりの駄文であると思います。すみません。戦闘描写は本当に苦手なのです。どうか寛大な心でお願いします。」

第25話 どうでしょう、予想外です

くセラく

「朧……？朧！！」

朧が目を開けません。そんな……、まさか、本当に……。

「朧！おい嘘だろ！？」

死んだ……？あの、強い朧が……？いや、そんな筈がない。この前、朧が死んだと思った時も、直ぐにケロッと帰ってきました。今回もきつと……。

「……心臓も止まっている。脈も無い。体温も、下がって行っている……。」

歩が朧の状況を言ってきました。そんな……、心臓が止まっている？それじゃあ、本当に……。

「朧が 死んだ。」

ヘルサイズ殿は泣いていました。普段、表情を変えないヘルサイズ殿が、大粒の涙を流して、声も出さずに流していました。

ピチャッと、私の手の甲に水が落ちました。雨は降っていません。

これは……涙？私は、泣いているのですか？

「朧……。」

「……認めましょう。朧は……しん

「スットーップ！駄目だよー、諦めたらいかんよー。諦めたらそこで試合終了だよー？」

上空から、この空気に似合わない実に能天気な声が聞こえました。上を見てみると、最近増えた同居人の……確か、フレイと言いましたか？朧の古い友人らしいのですが……この方の事は良く分かりません。

「んー？朧　？もしかして死んじゃってる？くたばってる？」

「……何でこんな状況でそんな態度で居られるのでしょうか？正直、不快です。」

「……何か？」

「ん？ああ、セラちゃんか。何か？つて言うのは単純明快。朧がピョンチっばいから慌てて京都から帰ってきたんだけど、そしてら大変！朧が死んでいるではありませんか！という感じ？」

「……何故、そんなに余裕な態度なのですか？朧とは旧知の中なのでしょう？心配ではないのですか？」

「心配？してないよ。だって、まだ朧の魂はまだ死んでないからね。魂が死んでないなら、いくらでも修正は効くよー。」

「それは本当ですか！？」

なら、まだ臙は生きていますということですか！良かった・・・、本当に、よかった・・・。

「ま、遅すぎだけどねー。」

「なっ!？」

「おい、それは無いんじゃないか？こんな状況で上げて落とすなんて・・・。」

「別に落としてないよー。ギャルゲーじゃあるまいし。それに、助からないとも言ってるよ。ていうか、助けるよ。臙を殺す訳ないじゃん。」

・・・ああ、この二人は、私たちの知らない絆がありそうですね。何故だか分かりませんが、その様な気がします。お互い、信頼し合っているのでしょうか？

「んー、でもなー。これ、勝手にやっちゃって良いのかな？ねえ、臙が二重人格だって知ってる？」

二重人格？そんな話、聞いたこともありません。まだ、臙は私たちに秘密があつたのでしょうか？

「その反応だと知らなかったようだね。まあ、知っていてもあなたたちには全く関係ないことなんだけどね。」

「か、関係ない・・・？」

「・・・は？」

「な、なんで・・・。」

「い、色白さんが・・・。」

『二人いる。』

「おー、成功したっばいね。今はね、一つの魂に入っていた死と言う概念を二つに分けて、そのうちの一つを臍の中にあるもう一つの魂に入れたんだよー。死とは言っても、半分に切られたら、当然死と言う概念の中に生が入ってきて、生死になる。生死の狭間を彷徨うってやつだよ。これだけなら、常人は死んじゃうんだけど、臍と、その臍に似ている人・・・まあ、本来逆なんだけど、その人の生命力はバカみたいに強いから、そのまま然るべき所で治療すれば、復活と言うわけだよ。あ、因みに、何で二人に別れちゃったのかと言うと、単純に、死を半分にするのと同時に、ごちゃ混ぜになつた二人の魂の接続はすっぱり切つて、一つだったのを二つにしたからだよ。オーケー？」

「・・・臍は、助かるのですか？」

「治療すればね。元々、臍の死因は失血死だし、輸血すればいいんじゃない？」

「っ、歩！」

「分かってる！」

「いってらー。」

臃！すぐに助けます！

くフレイ

ふー、やれやれ、臃も危ない橋渡るよねー。臃が死ぬ直前に七実ちゃんから連絡貰ってなかったら、本当に間に合わなかったよ。臃は七実ちゃんに感謝だね！

「それにしても、どうなるかな？仕方なかったとはいえ、臃と七実ちゃんを別れさせちゃったよ？あはは、楽しみだなー、一体どうなるのかな？ホントに楽しみ。」

そして、七実ちゃんはどっちを選ぶかな？臃の中に居る事を選ぶか、外に居る事を選ぶか。

「七実ちゃんも、臃のこと鈍感とは言えないよねー。臃は、少なくとも自分の気持ちは分かっているんだけど、七実ちゃんは自分の気持ちは分かってないからね。好きなら好きって言えば良いのに。あ、それはセラちゃん、ユーちゃんにも言えることか。あは！今回の件で、みんな一斉に告げたりして！」

そして、臃はどうするのかな？いや、選べるのかな？それだけが不安要素だね。まあ、臃なら三人一緒にするっていう選択も出来ないことは無いと思うんだけどね。甲斐性はあるし。たぶん、あの三人を同意するでしょ。苦はなさそうだし。・・・ま、全部私の予測だけどね！本当にどうなるかなんて知らないよ。セラちゃんを選ぶかもしれない。ユーちゃんを選ぶかもしれない。七実ちゃんをえらぶ

かもしれない。誰も選ばないかもしれない。どうなるかは、全部臍次第だね。でも、少なくとも・・・

「気持ちは受け止めてあげてほしいかな？」

ま、そんな事よりも、買ってきた八ツ橋でも食べよ！

「うーん、ベリーヤミーだねー。」

く臍く

死んで、しまったのでしょね。成程、死んだ後も、意識はあるのですか。これは死んだ人にしか分からない特権ですね。得した気分ですよ。

（ハア、で、死んだあとは何が出るんでしょうね？また転生ですか？それとも、ちっこい閻魔さんが出てくるのでしょうか？もしくは、安心 さんでも出てくるのでしょうか？いや、この世界に箱 学園は無いですからそれはあり得ませんね。）

困りました。することがありません。もしかして、死んだ後はみんなこうなのでしょうか？退屈過ぎてまた死ねますよ？

（よろしい、情報を集めてみましょう。まず、僕はどうなっているでしょう？真つ暗で何も見えませんが、どうやら仰向けに寝ているようです。それに、中々温かいですね。これが死後の世界と言うものなのでしょうか？）

「……ん？ちよつと待って下さい。『仰向けに寝ている』？」

おかしいですね。つまり、今の僕は寝ているということでしょうか？ならば、目を開ける事が可能な筈です。ですが、目は開かない。否、開けてくれないと言うのが本当ですね。では、何故開けたくないのか？これは……起きた直後に似ていますね。起きた直後は何秒か目を開けたくないモノです。が、この状態はそれが永久に続いていると言っても過言じゃありません。……良いでしょう、強引にでも起きてやりますよ。起きて、死後の世界と言っやつを拜んでやります！せーのー！！

ガバツと体を起き上がらせ、と同時に目を開けます。そこは……

見慣れた、僕の部屋でした。

「……あれ？あの世と言っのは自分の部屋を再現するのでしょうか？」

いや、それにしてはリアルすぎます。何故なら、最近また増え始めたダンボールまで再現してあるからです。ここまで再現する必要はありますか？否、断じて否です。再現する必要皆無つすよ。ふと、横を見ると、

「……すう。」

同じ布団ではもちろんありませんが、隣には僕にそっくりと言っか、七実が寝ていました。そう、寝ているのです。僕に横で……うん、オーケー、落ち着きましょう。クールになるのです。あれです、

はわわの罨です。

とりあえず、頭を思いつきりぶつけてみましょう。世界観が変わるかもです。近くにあった『黒い鎌』の柄で思いつきり頭を打ちつけます。世界が変わりました。チカチカします。なんかグルングルン回ってます。あ、これ、ただ単に脳震盪ですね。

「・・・ちよつと冷静になりましょうか。このままでは、はわわの思うつぼです。状況を整理しましょう。」

場所 おそらく我が自室。

時 夜であります。

持ち物 何もなし。ついでに服も無しで、身につけているのは包帯だけ（下着も無し）

・・・なんですかこの遠足のプログラムみたいな状況整理は。ま、まあ、良いでしょう。だいぶ落ち着きました。因みに、横に居る七実は未だに寝ています。何かあれですね。自分の寝顔を見ているように新鮮ですね。

と、そこで、ガチャリ、と自室のドアが開きました。

開いたドアから現れたのは、銀髪の髪が良く映える、ユーでした。ユーが持っていたタオルと、水が入っていた器が床に落ち、水がビシャアッと零れます。と同時に、ユーが僕に飛び込んできました。

「っ、ユー・・・？」

『心配した。』

ユーは泣いていました。泣きながら、僕の胸に顔を埋めてきます。・

「・・・一応、包帯があるのでダイレクトと言っわけではないのですが、逆に言えば、包帯一枚しか無いわけです。つまり、直接ではないですがそれなりに・・・ね？」

「・・・ご心配お掛けして、すみません。」

『良い 生きててくれたから。』

「・・・すみません。自分で聞くのもなんですが、何故、僕は生きているのですか？確実に死んだと思ったのですが？いえ、思ったというより、もう確実にそうなるかと直感したのですが？」

『わからない あのフレイと言う人が何かをしたのは確か。』

フレイが・・・？まあ、元とはいえ死神ですからね。しかも、本人曰く『唯の平死神とは違うのだよ！！平とは違うのだよ、平とは！！』とか言っていましたしね。恐らく、偉い死神だったのでしょう。『元』ですが。

『それより 怪我は大丈夫？』

「ん・・・ああ、まあ、それなりにですね。」

『そう。』

と、またまたここで

「何事ですか!?!」

と、声がしてセラが入ってきました。

「……？あれ？ここは天上学 ではないのですか？」

ガン無視。さすが七実、そこに痺れもしない憧れない。

「いや、ここAngel eats！じゃないですし。」

「ちっこいお説教閻魔さまは？」

「あの方は幻想 の担当です。ここにはいません。」

「私は幻想入りしなかったのですか……。なら、安心 さんは？」

「僕と全く発想が同じですね。それも居ません。」

「……私は、ライフストーリー には還れなかったのですね。」

「還りたかったのですか？」

「いえ、ただ、ザツ スさんには会っておきたいなと。」

「安心して下さい。この世にライフストーリー は存在しません。」

「えっ！？？」

「えっ！？？じゃないっすよ。ある訳ないでしょ。仏教、キリスト教
その他諸々全否定っすか！？？」

「あ、そう言えばそうでした。忘れてください。ところで……。」

「はい？」

「私は、思い出にならなかったのですか？」

「分かりにくい言い回しをしないでください！！死んでいませんってば！目出度く生きていたのですよ！！」

「ぜえ、ぜえ。や、病み上がりボケに七実ホケはきついです。ツッコミって結構疲れるのですよ？」

「……………」

「……………あ、やばい。ユーとセラを置いて行ってしまいました。」

「臙。」

「何か？」

「何故、私たちは別れているのですか？」

「今更！！？って、ちょっと待って下さい。それに関しては僕も未だに謎なんです。フレイに聞けば分かるとのことですが……………」

「あの死神ですか？成程、またアレですか。あれが関わってくると私にも臙にも色々被害蒙りますね。」

「ですね。さて、それは兎も角、セラ、ユー、説明入りますか？」

「お願いします。」

『是非。』

「分かりました。七実、お願いします。」

「他人任せですか。」

他人任せ、と言うより自分の説明ぐらい自分でしてもらいたいものです。

「まあ、いいです。分かりました。私の名前は鑢七実です。あとは・・・そうですね。臙とは・・・なんて言いましょうか、運命共同体？」

「・・・色々と言いたいこともありますが、まず一つ。『鑢』と言うことは、臙と血の繋がりが？」

「いいえ。血の繋がりは皆無です。魂の繋がりはありますが。」

「な」

何か今、変な誤解を招いた気がします。

「あれです。私と臙の魂はごちゃ混ぜに混ぜり合っていて、普段は私が臙の精神の中に居るはずなのですが・・・どっとうわけか、今はこんな事になっていきますね。」

・・・確かに、それだけが謎なんですよね。

「それについては私が説明してしんぜよう!」

「ん？ああ、フレイ。お土産は？」

「ほい、奈良刀。」

「……奈良刀……だと……」

「京都に行っていたのでは？」

「京都つつたら、ついでに奈良にも行ってくるでしょ？」

「……七実、これあげます。」

「要りません。」

「新撰組ごつこでもしててください。」

「子供ですか。要りません。」

「……まあ、適当にその辺に飾っておきましょう。」

「さて、説明するよ。まあ、ぶつちやけ面倒くさいから、適当に省いて説明するけど、要するに、怪我を一人が背負うのではなく、二人が背負ったと言う感じにしたんだよ。そうすればほら、大怪我も二人が背負えばそれなりに良くなるでしょう？因みに、魂の融合をしていたからと言って、あの時の主人格はほぼ臃だったから、こんな事が出来るんだよ？完璧に融合してたら打つ手なしだったね。」

随分と危ない橋を渡っていたようです。

「それにしても心配したよー？なにせ、二日間も寝っぱなしだった

からね。」

「……マジですか。それは、まあ、大変ご迷惑を……。」

「ん？別に良いんじゃない？日替わりでユーちゃんとセラちゃんは臃添い寝していて、随分と幸せそうだったし。」

「……？」

「っ！」

「な、なな」

「臃、字の表記が古いです。」

「……待ってください。これはまたもやはわわの罾かもしれませ
ん。」

「個人的にはあわわの方が好みます。」

「あなたは女性でしたよね？」

「別にキャラの好き嫌いがあっても良いではありませんか。」

「はあ……まあ……そうですが。って、そうじゃなくて、フレ
イ、それは本当ですか？ユーはまあ、良くあったのでまず置いと
てセラまで……？」

「す、すみません、つい……。」

ついつて便利な言葉ですよ。色々に次いで便利な言葉です。

「んふふ、まあ、良いんじゃない？んじゃ、後は若い人たちに任せるよー。」

なんかおばさん臭いこと言いながらフレイ退室。

「そうですね、若いのに任せましょう。」

ついでに七実も退し

「何言ってるの！七実ちゃんもだよ！！」

つしようとしたらフレイに押し戻されていました。

「な、何故？」

「七実ちゃんも、自分の気持ちに素直になるべきだよ。」

「・・・は？」

と、そこで、フレイは七実に耳打ちしています。

（臍に頭撫でられた時、どうだった？）

（っ、な、何のことでしょう？）

（とぼけちゃってー。知らないとも思った？こっちは来てなかったとはいえ、使い魔経由で見てたりしてたんだよー？）

(なっ、・・・覗きですか？)

(うんにゃ、一応、朧と七実ちゃんをこの世界に連れてきたには私だからね。当然、ピンチな時は助けようとしていたわけだよ。)

(・・・そうですか。)

(でっ、どうするの？素直になってみる？)

(っ、どういふことですか？)

(好きなんでしょ？朧の事。)

(・・・何故、そう思うのですか？)

(見てれば分かるよ。だって、現に朧が居ない人生なんて考えられないんでしょ？)

(・・・まあ、そうですね。)

(朧のことばかり考えてるんでしょ？)

(・・・アニメやゲームを除けば、考えていることは大体朧の事ですね。)

(でしょ？仮にだけど、朧と離れたいと思う？)

(嫌です。)

(決定。惚れてるんだよ、朧に。)

「……マジですか？」

「マジマジ。ユー、告っちゃいなYOー！」

「……腹を括ります。良いでしょう、やってやりますよ。自棄です。」

「じゃ、頑張ってる。」

「おや、耳打ちが終わったようですね。」

「じゃあ、ごゆっくり。あ、赤飯いる？」

「」「要りません！」「」「要らない。」

「フレイ、再び退室。」

「……沈黙です。ものすごい沈黙です。」

「臃。」

「不意に、七実が話しかけてきました。」

「な、なんですか？」

「私は、どうやらあなたの事が好きなようです。異性として。」

「……拝啓、顔も知らぬクソったれな両親へ。」

僕、人生で初めて告白されちゃいましたよ。

第25話 どうしましょう、予想外です（後書き）

作者「ひゅーひゅー。」

臃「うるさい、だまれ、殺すぞ。」

フレイ「ひゅーひゅー。」

臃「フレイまで!?!」

作者「あとがきコーナーは中止して、臃くんをからかうコーナーとします。あ、からかいたいと思う方は是非感想にてよろしくです。」

臃「何煽ってるんですか!?!」

作者「別に煽ってないっすよー?よかったじゃないですか、初体験でしょ?」

フレイ「良かったじゃん。赤飯炊く?」

臃「いいえ結構!大体、告白されたこともない人達に言われたくありません!?!」

フレイ「私はあるよ。男死神に結構。」

作者「僕は……どうでしょうねえ?秘密ですよ。フッフ……。」

臃「え、ま、まさか……。」

作者「無いですよ。興味無いですし。」

フレイ「こんな小説書いてるのに？」

作者「ジャンルのにはファンタジーです。恋愛もありますけどね。」

フレイ「あ、そう言えば作者って、再は従姉妹の方に……。」

作者「やめろおおおおお！！！」

フレイ「あー、だから、女の人に興味無しなんだね。」

作者「いやいや、興味無いわけではないです。ただ、色恋沙汰に興味無しなんです。男として終わっていると自覚してます。」

フレイ「まあ、それはともかく、臃！結婚式には呼んでね！！！」

作者「お祝い金は10万円で良いですか？」

臃「気が早い！？そしてお金多！？」

作者「ま、未長くお幸せに。」

フレイ「に〜。」

臃「気が早いですって！！！」

「フレイ」で？次回は？」

臃「当然、セラとユーです。あの人たちは、自分から言いそうになかったので七実さんから先に言わせましたよ。」

フレイ「それが賢明だね。今ここに、『ユーちゃん、セラちゃん、七実ちゃんの恋を応援しようの会』を設立しよう。」

作者「賛成です。・・・あ、参加したい方も気軽にどうぞ。まあ、主に臃くんをからかうだけです。」

第26話 二難去ってまた一難。平穩はいつ来るのでしょうか？

「……どうしよう。告白されてしまいましたよ、七実に。あ、
どうも、臆です。」

と、とりあえず、落ち着くのです。これは、あわわの罠です。はわ
わではありませんが、むしろこっちの方が脅威です。

「……すみません、もう一度お願いします。」

「私は、臆の事が、異性！として、好きです。」

「……やけに異性を強調しましたね。いや、まだです。この『好き
がライクなのか、ラブなのかはつきりさせましょう。そうすれば、
あわわの罠は突破です。」

「English please」

「I love you」

「……わお、どうやら、ラブ、の方らしいですよ皆さん。……よ
ろしい、」

「分かり、ました。」

「「！」「」」

「分かったとは？」

「ちょっと過去形になってきます。」

「死なせませんよ。というか、このネタ分かる人何人ぐらいいますかね？」

「結構いるのでは？スコー はみんな大好きです。」

「個人的にはザツ スの方が。・・・クラウ 氏ね。」

「何言ってるんですか！？ファンを敵に回していきません！！」

「アレさえいなければザツク は！ザツクス は！！」

「熱弁は結構！アレがあったから今のクラウ が居るんですよ？その辺りを」

「なんの話をしているのですか！！！！！！！！！！」

喝入りましたー。じゃなくて！！

「そ、そうでしたね。七実の告白の件でしたね・・・。」

「ああ、そう言えば、そんなことしましたね。」

ものすごくいい加減な僕たちでした。なに人の告白（もしくは自分の告白）をほったらかしてFFについて語り合っているのでしょうか？謎です。一体世界のどこに告白し、そこからゲームの話に飛び移

る人たちが居ましようか。否、絶対いません。僕たち以外、そんなアホな方々が居るはずありません。

「で？私の告白はどうなるのでしょうか？」

「うーん……。」「

断る理由はもちろん無いです。ええ、逆に何故断る？と言った感じ
です。なので、迷う余地は無し。腹を括ります。

「良い。。。」

「臙！！！！！！」

「ひゃい！！！！」

セラに急に名前を叫ばれ、思わず声が裏返ってしまいました。な、
何事でしょうか？

「私も、臙の事が好きです！異性として！！！！」

思いつきりその言葉を吐き出したのでしよう。顔が真っ赤です。顔
どころか、首までも。って、え、ええええ！？

『私も臙の事が好き。』

・・・処理落ち中です。ちょっと待つてください。まさか、3人に
ほぼ同じ時間に告白されるとは思ってもみませんでした。いやいや、
落ち着くのです。一体今日は何回落ち着かなければいけないのでし
ょう。あわわの罨と思ったらまさかの眼鏡のクールビューティーな

方の罫でした。すごいですね、今日数分だけで僕は名軍師の三人に罫に嵌められました。スリーアウト、チェンジ。

「……すみません、脳の処理が追いついてないので、とりあえず、何故？と聞かせて貰っても良いでしょうか？」

好かれているのは知っていても、何故好かれたのかまでは分かりませんから。

「では、告白した順からで行きましょう。まず、私からですが、何故好きになったのかは全くの謎です。いつの間にか、と言うやつです。強いて言うなら、いつも臈と話していて、好きになったのでしょうか？」

疑問形で言われても。

「さ、お次どうぞ。」

セラの番です。

「私は、自らが傷つくことも厭わず、私たちを守ろうとしている臈に惹かれたのだと思います。ですが、それは長所であり短所でもありますけど。ですが、そんな臈の事が私は好きなのです。」

「……耳が痛いです。まあ、その通りなのですが僕のそんなところに惚れるなど予想外も良いところです。僕で……良いのでしょうか？」

「私は 昔から臈の事が好きだった。昔 悲しい事があっても慰めず黙って私の傍に居てくれた。それが 私には下手に慰められるよ

りもすぐ嬉しかった。それは 今も昔も変わってない。悲しくて泣きそうになったときも黙って傍に居てくれた臙の事が 私好き。』

・・・よし、処理落ちが回復しました。理由も聞けましたし、そろそろ。

「・・・言いたいことは多々ありますが、その前に、歩、ハルナ、死にたくなければ今すぐそのドアから離れなさい。」

まったく、盗み聞きとはいい度胸です。

「う、うるさい！何しようとおあたしの勝手じゃん！！」

ドアの向こう側からまさかの返答。ま、それがハルナですね。うんうん、愛すべき自己中。さねど、空気は呼んでもらいたいものです。

「まあ、そう言わずに今回は引いてください。下でフレイが食事の準備をしているので、手伝ってあげてください。」

あ、言い忘れましたが、フレイも料理作れます。あの人、いや、あの死神、普段おちゃらけているくせに万能ですからね。ええ、世の中理不尽です。あんなのが万能なのですから。

「ふん、しゃーなしだからな！」

「ありがとうございます。歩、貴様は死ぬ。」

苦無をドアに貫通させんと思いつきり投げつけ、見事實通。ドアの向こう側からは断末魔が聞こえます。

「ぎゃあああああああああ！！！！？？？なんで！？？何でおれだ
け！？？」

「・・・ゾンビだから？」

「理不尽だ！！世の中のゾンビに謝れ！！」

世の中って・・・ゾンビがやたらめったらいたら、大パニックです
よ。バイオハザードですよ。

「ゾンビなんてそんなものです。いたぶられ、弄ばれ、レベル上げ
の糧にされ、最終的に主人公たちに殺されるのですよ。そういうこ
とでもう一本。」

苦無追加。

「ぎゃあああああああ！なんで尻にばかりイイイイ！！！！」

「良いからとつとと、失せてください。」

「ひどくない！？俺の扱い雑じゃない？」

「ゾンビですから。」

「わかったよこん畜生！！」

・・・よし、行きましたね。

「では、話の続きをします。七実には言いましたが、僕は何時死ぬ

か分からない身ですよ？戦いで死ぬのではなく、病で、です。それでも、良いのですか？今、刹那の幸せを掴むのと、僕が死んでからの永久の悲しみ、どちらを選びますか？皆さん・・・ああ、七実以外ですが、それ以外は寿命がとてつもなく長いですよ？生きている間、ずっと悲しみ続けますか？」

「さあ、どういう答えになります？はつきり言つて、この問いに答えはありません。これを聞いて、それでも、良い、と言うのなら、僕は・・・あれ？どうしましょう？三人ですよ？一般常識的に彼女やもしくは妻、でも良いでしょう。それらは一人と相場が決まっています。それなのに、え？三人？三股？重婚？・・・わお、まさか、法律にも喧嘩を売ることになりますし、三股つて人としてどうです？駄目でしょう？駄目ですよ？駄目に決まっています。え、何？僕はどうすればいいのです？選ぶのですか？あの三人から？・・・無理！無理無理無理！！蓬萊の玉の枝を探すのより！火鼠の衣を探すより！というか、七つの難題をすべてクリアするよりも無理です！！！！どうしましょう、まさか最期に、はわわ、あわわ、眼鏡のクルビューティーと猫耳軍師の罠に嵌められるとは！！！！どうしましょう？詰んだ？詰んだよね？詰んじやいましたよね！？・・・うわー、どうしよう。今まで将棋やオセロ、チェス、その他諸々のボードゲームで負けたことが無いこの僕が、まさかこんなところで詰むとは！あー、やばいやばい！あんな偉そうなこと言っておきながらその本人の決心が付かないとは何事です！ああ！本当にどうしよう！？」

「まあ、私はその話を知つて尚、告白しましたからね。問題ありません。第一、臍の死ぬときは私の死ぬときですから。つまり、私は臍が死ぬまで死にませんし、臍が不老なら私も不老です。なんら問題はありません。」

七実はおーケーの様です。

「問題ありません。そもそも、病如きで死ぬほど、軟な体をしていないでしょう?」

セラもオーケーの様です。

「問題ない。臃は死なせない。」

ユーもオーケーの様です。……ていうかユー、あなたは僕を死なせないつもりですか!? 僕の将来の夢の中に天寿を全うすると言っているのですが、それを叶えさせない気ですか!? ……まあ、不老なので寿命は無いですけど。

……さて、皆さん、重大な問題です。今、三人ともオーケーを出しました。ここで問題なのはクソ長い僕の葛藤まで戻ります。はい、どうしましょう? 問題が全く解決していませんし、解決の糸口も見当たりません。お先真っ暗? 否、お先どころか、前後左右、斜め上下全て真っ暗です。……どないしょ? こんな時相談するはずの七実は今や僕の目の前の、問題の当人です。

「……どうしました? まさか、悩んでいるのですか?」

「な、何をですか?」

「臃の事です。どうせ、三人と付き合ったりすることについて色々考えているのでしょうか?」

「……はい。」

さすが七実。すべてお見通しですか。

「おバカですね。そんな事気にする必要はありません。ね？」

「はい。別に、一人だろうと二人だろうと、私が一番になれば問題はありません。」

『この気持ちを受け止めてくれるなら、問題ない。』

「……まさかのオールクリアです。ならば、もう答えは決まったも同然です。」

「……こんな僕ですが、よろしくお願いします。」

「もちろん、結婚を前提にですよね？」

「はい。……はい？」

「良かったですね皆さん。結婚を前提にですよ。戸籍に残るのは私だけですけど。」

「ありがとうございます、七実様。」

『七実は 良い人。』

「……あれ？のせられた？」

どうも、昨日、七実にのせられて結婚を前提に七実、セラ、ユーと付き合う（というか、僕が18になるまでの時間潰しだそうです）事になった臃です。これをリア充と言うのでしょうか？言うのでしょうかね。前世の年齢と合わせて・・・何歳でしょうか？僕は何歳で死んだのでしょうか？ちよつとフレイに聞いてみます。

「ねえ、フレイ。僕は前世、何歳で死にました？」

「わお、また突然変な事を聞いて来るね。一気に彼女が三人も出て、頭の中春になっちゃった？」

「黙れアバズレ・・・んん！失礼。で？」

「今アバズレって言った？ねえ、言うに事欠いてアバズレって言った？ねえ、言った？言ったよね？」

「さあ？で？どうなのですか？」

「・・・聞かなかったことにしておくよ。で、質問の答えは、8歳だよ。臃が私をかばって死んだのは。」

「・・・8歳ですつてよ奥さん。」

「序でに言っておくと、臃の前世では神童とか呼ばれてたんだよ？わずか8歳で大学まで勉強過程を全部終えてたから。」

「・・・そうだったけ？前世の自分に関しての記憶は色々あやふやになっっていますからそこところ微妙ですね。」

「ま、臃は見稽古関係無しに元々頭が良かったんだよ。」

「へえ、まあ、答えてくれてありがとうございます。」

「くるしゅうないくるしゅうない。そんな礼儀正しい臈くんにはこれを与えてしんぜよう!！」

そう言っつてフレイがくれたモノは……奈良刀でした。

「いや、どんだけ買っつてきてるんですか!?!」

「昔の死神の後輩や弟子にもあげようと思っつて。」

「こんなの要りませんよ?」

「えー。」

「えー、じゃないし!……ああ、そうそう、フレイに頼みもあります。」

「何?」

「悪刀、僕と七実の分作っつてもらえませんか?ほら、この前の一件で効力無くなっつたので。」

「いいよー、任せたまへー。」

頼もしいですね。

「じゃあ、交換条件で『コレ』貰っつて?」

と言って渡してきたのは案の定、奈良刀でした。・・・随分と押し
てきますね。

「・・・まさか、後輩死神全員に要らないと言われました？」

いや、まさかね。今からあげるようでしたし、無いですね。

「・・・・・・・・ふえ。」

とか思っていたらなんか目に涙を溜め始めましたよ！？

「ちよ、え、ええ？」

「ぐす、なにさなにさ皆して。せつかく昔の先輩がお土産買ってき
てあげたのに皆口を揃えて『要らない。』って。せつかくのお土産
だから残るものが良いかな？とか思ったから態々一番高い木刀を買
ってきたのにさ。それなのに・・・それ、なのに・・・。」

「・・・どうやら、凶星の様ですね。というか、後輩死神全員が要ら
ないって、さすがにそれは無いんじゃないでしょうか？僕だって一
本買ったと言うのに。・・・まあ、無用の長物であることに変わり
はありませんけど。」

「まあ、フレイ。ちょっと落ち着いてください。確かに、奈良刀も
お土産としては悪くないのですが、やはりお土産と言えれば何か美味
しい物が良いのではありませんか？ほら、京都で言うと八ッ橋とか
そういうのです。今回はたまたま間違えてしまっただけですよね？
ね？別に一回のミスぐらい気にしないで居ればいいのです。次です
よ次。」

「……うん。」

そこまで落ち込むかこの死神。あ、死神長。まあ、あれです。長ですから、そういう失敗とかには敏感なのでしょう。万能なだけに、一回のミスで結構落ち込んでしまうでしょうね。

「ま、これからはお土産をその土地の何か名産品にしてみてもいいですか？」

「……奈良漬とか？」

「いや、あれはちょっと……。」

「……ん、まあ、いいよ。いつまでもうじうじしてられないからね！今度からは鹿せんべいにしておくよ！-！」

「……は、はい。」

し、鹿せんべい……？うー、うーん？まあ、いいのかな？結構おいしいと思いますし……。

「よし！じゃあ、臍はデートにでも行ってきたさい。」

「へ？」

「ん？行かないの？ほら、ユーちゃんが居ない時に行った場所にユーちゃんを連れていけば？ほら、あれだよ。みんな平等。」

「んー、それもそうですね。分かりました。連れていくとしましょう。では。」

「行つてらー。」

と言うわけで現在、僕はユーとデート中です。まあ、デートと言っても何時も通り話して過ごしてますけど。まずはプラネタです。

『 隴 死兆が無い。 』

「それは見えてはいけない星です。」

発想がハルナと一緒に！！

『 黒い三連星も無い。 』

「その発想は無かった！！」

小声でシャウトします。赤い彗星は予想していましたがまさかの黒い三連星です。予想の斜め上ですよ。

『 FMプラ ットとAMプ ネットは？ 』

「それあったら地球が危ない！！」

さすがの僕も電波はどうにも出来ません。というか、ユーは流星ロククマン知っているのですね。何故でしょう？

『 隴の部屋に置いてあった。 』

「あー、・・・まさか、『禁』と書いてある所も見ました？」

『そこは見て無い 見てはいけないような気がした。』

ユ一、さすがです。あの中には七実が激選したエロゲが入っているのです。因みに、他のエロゲもしくはギャルゲは『封』と書かれた所に入ってます。まあ、封印している訳でもないのですが、雰囲気的に、ね？

『きれい。』

「え？ああ、そうですね。」

この間はそんな、プラネタを楽しむ暇など、主にツッコミでありませんでしたからね。

そういう事で、前半ツッコミ、後半は普通にプラネタを楽しみました。

次はメイド喫茶です。

「いらっしゃいませご主人様！・・・二名様ですか？」

「はい、二名です。」

「こちらにどうぞ。」

まさか、一度ならず二度までもここに来るとは思いませんでした。

「さて、何頼みます？？」

『これ。』

ユ一が指さしたのは、一つのドリンクに二つのストローが付いている、カップルが好き好んで頼むアレでした。

「……これ、ですか？」

味はメロンソーダです。どうでもいい情報ですね。

『これがいい。』

「……本気ですか？」

『本気。』

「本気と書いてマジですか？」

『マジ。』

……よろしい、腹を括りましょう。

「すみませーん、これを一つお願いします。」

「かしこまりました!！」

……気のせいでしょうか？首の後ろ辺りがチクチクします。こっ、嫉妬的な視線を感じますよ。

『臃はああいうのが好きなの?』

「僕ですか？いや、僕はどっちかと言うと大人しい人が好みで、服装は特に気にしません。」

家で言うところ、学校で言うところ平松さんですね。あくまで、好みと
言うわけで実際に好きなのはまったく違うタイプと言う事もありま
すけど。七実とか。セラは・・・大人しいというより、凜としてま
すね。凜としたのも好きですよ。七実は・・・どういうタイプ？謎
です。大人しくしないでし、凜ともしていません。大人で
はありますけど。ああ、大人タイプですね。納得。

特にメイド喫茶ではする事が無かったので内容は割愛。強いて言う
なら、メイドさんに深い心の傷が付いたとだけ言うっておきましょ
う。次にショッピングです。定番ですね。まあ、尾行されながらのショ
ッピングは中々にスリリングですが。

「ユー、そろそろ良いですか？」

『うん お願い。』

合点承知。あんばいばれの尾行をしているのが悪いのです。です
から、

「あなたたち、何してるんですか？」

「「「！！！？」」「」」

後ろに回り込みました。因みにメンバーは、歩、セラ、ハルナで七
実です。

「お、朧・・・、いつからだ？」

「初めからです。全く、下手くそな尾行でした。そして七実、まさかあなたまでついて来るとは思いませんでしたよ。」

「私もついていく予定はありませんでした。折角こうして体も持てたことですしネットゲに手を出してみようかと思ったのに、どうやら私たちは半径50メートルしか離れられないようです。私の魂の一部が朧の魂と混じっているでしょう。その辺りはまたあの死神に聞いておきましょう。」

「あ、そうだったのですか・・・って、七実さん？気の所為でしょうか？僕の目にはあなたの周りにP Pが二つ、宙に浮いているように見えるのですが？」

「朧、残念ながら、あれは気の所為では無いようです。」

「うそ！？」

「ええ、気の所為ではありませんね。私は二つ同時にゲームをやっています。ぷよ よとメタルギ です。」

「何その温度差！？」

「と言うか良くメタル Aを片手でプレイ出来ますね！？そっちの方が驚きです！！」

「で？色白さんは何でここに来たんだ？」

「ああ、ぶつちやけ、あなた方後ろで・・・まあ、七実は気配は僕以外は感じられないと思いますが、後ろで尾行されるのも気分悪いので、いっそのこと全員で楽しもうと言う魂胆です。と言う事で、ユーと合流しますよ。」

と言うわけで、待っていたユーと合流し、皆でショッピングを楽しむ事にしました。

『ラベンダーのシャツと黒地にピンクのシャツ どっちが良い？』

「ん？ああ、そうですね・・・、ラベンダーはどつでしゅつか？」

『私も ラベンダーが良いと思っていた。』

「そうですね。」

「臙、緑と黒、どちらが良いと思いますか？」

「え？あー、黒はどうです？」

「ではそれで。」

「臙、さっきあちらの方に逆転検 が売ってましたよ？」

「マジですか！ちょっと行ってきます！！」

「あ、ついでにFFの新作も予約して来て下さい。」

「ホント歪みないですね！！」

「もちろん。あ、ついでのついでにアカベソフのゲームを何か一本買ってきてください。」

「僕未成年!!」

「やろうと思えば人間、ある程度の事は出来るものですよ?」

「ある程度ですよね!?しかも、仮に出来たとしてもハイリスクローリターンなんですけど!?!」

「リターンはあります。」

「え?」

「私の好感度が1上がります。」

「シヨボ!!」

「む、しょぼくないですよ。ギャルゲ、エロゲではこういったチマチマとした点数が大事なのですよ?」

「すみません、此処はリアルです。」

「いいえ、二次元です。」

「そこを否定した!?!?」

なんやかんやで一番七実との会話が長いような気がします。

「まあ、いいです。アカベソフは買いませんが、適当にギャルゲ見繕

って買ってきます。あと、予約でしたっけ？その場合、予約二本です。僕もアレ欲しいです。で、後は逆転検 と。これです。いいですか？」

「はい、ではそれで。あ、ギャルゲは真恋姫 双でお願いします。魏ルートで。」

「その心は？」

「蜀は甘ったれてます。呉は特に何も。」

「蜀ファンに謝って下さい今すぐに!!」

「まことにもうしわけありませんでした。」

「すごい棒読み!!」

因みに、作者は普通に魏呉蜀みんな好きですよ!!

「まあ、そういう事をお願いします。」

「はいはい。」

「はい、は100回。」

「多い!!」

言えなくもないですが。まあ、いいです。そんなことよりもゲームですよ、ゲーム。

ほくほくです。予約もできましたし、検 も買えました。

「はい七実、予約してきました。これ、恋 無双です。」

「ありがとうございます。」

「あの、朧……。」

セラが話しかけてきました。

「はい？」

「何故、同じゲームなのに二本予約したのですか？」

……は？何をそんな当たり前の事を……。

「決まっているではありませんか。僕もやるからですよ？」

「え、ですが、同じゲームを買う意味が……。」

「あります。僕と七実が同じゲームを持っている。例えば、選択肢が二つあったとします。全部見る為にはセーブして消してまたその選択肢からやらなければいけないのですが、僕と七実が同じゲームを持っていると僕がこれ、七実がそれと一回で全て見れるではありませんか。ね？意味あるでしょう？」

「は、はあ……。」

「……前からずっと思っていたのですが、朧も十分オタクですよ

ね。私との会話についていってますし。何より、ゲームの思考回路が私と同じです。」

「七実程ではありません。やっているゲームもまあ、言うてはあれですが一般受けする感じのですよ?」

「まあ、確かに。ぷよぷよとか、逆転シリーズとか、モンハとかですね。」

「ええ、あ、七実。後で銀龍でも倒しに行きますか?」

「あれは弱過ぎです。祖竜で。」

「さすが七実はレベルが違う!」

銀龍って弱いですか?否!チートとか何もなしで素で行ったらかなり強いはずです!」

「むう・・・では、覇龍行ってみます?」

「あ、それなら良いですよ。あいつは行動が遅いですし。」

『私もやる。』

「「持っていたのですか!?!?」」

『臆がやってたから。』

予想外の展開です。まさかユーがモンハ を持っていたとは。

「まあ、モンハ は人が多ければ多いほどいいですからね。ユーはどのくらい出来ますか？」

『祖竜ならソロ狩り出来る。』

「予想外の強さー!!」

僕だけ、僕だけ祖竜がソロ狩り出来ない!!なんてこと……。黒龍ならソロでいけるのに……。

「ではユーさん。武器は何ですか？あ、私は双剣が好きです。」

「僕は狩猟笛とハンマーですね。主にハンマーですけど。」

『私は太刀。』

普通ですね。安定があって良いと思います。

「あれですね。ガンナーがいません。」

「別に覇龍なら無問題では？」

『どんな状況でもガンナーは必要。』

と、こんな感じでモンハ をやるかという計画を立てながらシヨッピングを終えました。

「（……私も買いますよっか？）」

と言うわけで普段皆で集まる居間にてモンハをプレイしています。相手は覇龍、次に崩龍、最後に金龍銀龍の同時討伐で締めです。ハード？いいえ、普通です。七実には少し緩いそうです。七実の提案した案は、

大連続、大連続、祖竜。

死ねと？

因みに、歩はバラエティ番組を視聴し、セラは僕たちの様子を見ています。羨ましそうに。またモンハとP Pを買ってあげましょう。因みに、僕の部屋にはP Pが二個DS が二個、PS が二個、Wiiが二個とそれぞれ二個ずつあります。全て僕と七実のです。まあ、分離する前は別々でやっていたのであまり意味のない物でしたが、世の中無駄なことなんてなかったのですね。今、それご功を成していますよ！

「臚、閃光玉はまだですか？」

「今使います。タイミングを合わせてください。1・・・2・・・3！今です。」

「尻尾切った。」

「「ナイス！！」」

因みに今は崩龍です。まあ、この調子なら倒せそうですね。とりあえず武器紹介しましょう。

僕 ハンマー
七実 大剣
ユ一 太刀

です。七実はあくまで好きなのが双剣であり、基本何でも十全に使
いこなせる万能な人です。こういう人、一人は欲しいですよ。因
みに僕はヘビィボウガンの扱いが苦手です。ユ一は大剣が苦手なよ
うです。

「気絶しましたよ！たたみ掛けてください！！」

「行きます！！」

『狙うは顎。』

結果、

「あたしやっぱり思うんだ！」

「討伐したああ！！」

『次は 金と銀。』

むむむ、これが鬼門ですね。ここで多くのチート無しソロハンター
が涙を飲んできたはず。あ、言うの忘れていました。今やって
いるのはセカジーです。G級クエストです。

あ、覇龍は兎も角、崩龍はG級以外あり得ませんでしたね。

「あたし！！やっぱり思うんだ！！！！」

「では、次は狩猟笛で行きます。」

「本当ですか？なら私は双剣で。強走効果よろしくお願いします。」

「任せてください。」

『私はやっぱり太刀。』

「無視するなあああ！！！！！！」

「おおっ！！！！？」

急にハルナがシャウトしましたよ。情緒不安定ですか？黄色い救急車呼びますか？

「どうしました？」

「罰ゲームが必要だってさっきから言ってるじゃん！ちゃんと聞けよな！」

「あ、すみません。ちょっとゲームに夢中になっていました。では、いったん中断します？」

「構いません。」

『無問題。』

「で、罰ゲームとは穏やかではありませんが、どうしてですか？」

「勝手な行動をした奴には罰ゲームが必要だってな！」

ふむ、ユーを指さして言っています。それはもろにハルナにも当てはまると気付いていないのでしょうか？

「おいおい、帰って来てくれたんだし、別に……。」

『私は構わない。』

おお、強気ですね。ですが、何をやるのでしょうか？と、そこでセラがポンと手を打ちました。

「それなら、歩が良く着ている気持ち悪い衣装を一日着て貰うのはどうでしょうか？」

「罰にはならないが、アリだな。いや待て、俺に考えがある。」

と言って歩は携帯を取り出し始めました。嫌な予感がぶんぶんするので僕と七実は退室します。避難場所は僕の部屋兼七実の部屋です。たぶん、そこにフレイも居るでしょう。

「お、帰ってきたねー、おっかー。」

「おっかー？」

「お帰り、の略だよ……！」

「ああ、そうですか。ところでフレイ。」

「ん？」

「今の私たちの状態をまだ詳しく聞いていないので説明願えますか？」

「お！ついに来たね、いいいいよー！説明しちゃうよ！何から説明しようか？」

「まず、感覚的になんとなくでしたが、片方が死ねば、もう片方は死ぬのでしょうか？」

「うん、死ぬよ。七実ちゃんの魂が一部、まだ臙の魂と繋がってるからね。」

死ぬらしいですよ皆さん。

「そこです。私がずっと気になっていたのは。」

「何が？」

「何故、態々一部だけ残したのですか？完璧に分離させても、今の臙なら見稽古無しでも十分強いでしょう？少なくとも、夜の王相手に圧勝するぐらいには。」

「だろうね。臙は完璧に七実と分離しても他の追隨を許さないぐらいに強いよ。」

「はい、特に中々遠距離では勝てる者はいないでしょう。私も勝てません。近距離なら話は別ですが。それで、何故です？そんな状態なのに何故一部だけ？」

確かに、気になる所ではありませんね。そのおかげで未だに見稽古が使えるわけですが。

「そんなの簡単なことだよ。七実ちゃんにチャンスをあげたかったんだよ。」

「チャンス？」

「そ、チャンス。まあ、結果的に七実ちゃんはチャンスをものにしたけど。臙の中に居たままじゃあ、彼女にはなれなかつたよね？ ううん、なれたかもしれないけど、少なくとも、堂々とはなれなかつたよね？」

「・・・そう、ですね。」

「そこで七実ちゃんには選択肢だよ！！これこそ私が臙の中に一部残した理由だけど、七実ちゃんどうする？臙の中に戻る？それとも、ずっと臙の横に居る？さあ、どうするの？」

・・・フレイは、本当に思慮深いですね。いや、この場合、優しいのでしょうか？ここまで七実のためにやってくれますか。それで、七実はどうするのでしょうか？中か、外か。僕は・・・どちらを選んでもほしいのでしょうか？今は七実の力に頼らずとも、十分強くなりました。よって、力では七実に頼らなくても良いのでしょうか。では、外？・・・止めましょう。これは七実が決める事です。僕が口を挟むところではありません。

「・・・無論です。私は外を選びます。」

「・・・そっか。なら、もういいね？」

と言ってフレイの手には草刈り鎌ぐらいの大きさの、小さいですが禍々しい赤い色をしています。・・・赤は嫌いです。

「ほい・・・っと。」

瞬間、フレイは僕目掛けて鎌を振り下ろしました。痛みは無しですが、何かが抜け落ちた気がします。

「で、これをななみちゃんにと。」

で、今度は七実に鎌を振り下ろしました。

「はい、これで完全完璧に分離したよ。死んだら個々に死んじゃうから注意してね。それと、これ、はい悪刀。」

二本の悪刀が手渡されました。

「ちょっとサーブスで壊れないようにしたし、効力切れも無くなつたよ。後、手元から離れても自動的に戻ってくるようにしておいたから。これで死亡率はグンっと下がったはずだよ。」

「ありがとうございます。」

と、そこで。

「臈　！七実さん！フレイさん！ちょっと来てくれー！！」

歩からお呼びがかかりました。

「なんでしょうっ?」

「さあ?」

「というか私まで?」

ブツブツ言いながら階段を下ります。

「なんですか?って、げ。」

目の前に織戸がいました。

「げ、とはなんだよげとは。」

「すみませんつい。」

「て言うか鑪!!後ろに居られるお前に酷似した美白の美しい女性
は誰だ!!」

「あ、私、鑪七実と申します。今後とも、よろしくしないでくださ
い。」

出た!七実の毒舌!!

「.....」

ほら見てください。織戸なんて涙目ですよ!

「私は、臙の彼女です。」

「貴様ああああ!!!」

「おっと。」

織戸が突っ込んできたので回避して、それを七実が足を引っ掛けて織戸を転ばします。ナイスです。

「で？僕たちを呼んだのは何故です？」

「あ、そうだった。罰ゲームだけど、臃とフレイさんも十分勝手な事してたから受けて貰う事になったぞ。」

わあ、予想が当たりましたよー。僕に女装しろと言いますか。

「そこに居る色白さんマークツもだぞ!!!」

「マ、マークツ？」

七実に不名誉なニックネームが付きました!!!

「これを、着るのですか？ですが、数が合いませんよね？四人分しかありませんよ？」

「臃なら持つてるんじゃないか？」

「何故そついう事になってるんです!？」

「あ、私持つてるよー!!!」

「フレイー!!!余計な事をー!!!」

と言うわけで、歩が何かイタイ事していましたが、全力でスルーして、全員着替えました。なんか流れて気に音楽会になっていたので、僕も演奏できる楽器を持つてきます。まあ、ハーモニカですけど。七実は琴です。見事なミスマツチ。フレイはエレキギター。激しいです。歩はギターで、セラはヴァイオリン、ハルナは鍵盤ハーモニカです。あ、織戸は帰りました。

「何をやるのです？ぶつちやけ、かなりアンバランスですよ？」

「じゃああたしのオリジナル曲の『弥生時代のポリエステル』でも。」

弥生って結構文化進んでますね。って、なわけねえよ！

「お前のオリジナル曲なんて弾けるかよ。」

「では、中村主水のテーマなど。」

「お、いいですね。じゃあそれで。」

「落ち着け二人とも！わからねえから！」

『オリジナルはどんな曲？』

「こんなやつなんだけど。」

んー、良い曲ですね。ジャズっぽいです。

「良いですね、では、それをベースにそれぞれ好きに演奏していけ

ばよろしいのでは？」

「なるほど、楽しそうだな。」

いや、無理でしょう。エレキがあるのですよ？全ての音はアレの前には無意味です。

ま、合わせて演奏しますけどね。

途中、歩が歌を歌い出しました。気持ち悪かったです。ですが、それ以外は結構うまく行きました。エレキも良い感じにハマってましたし。

『ごめんなさい。』

「ん？」

一通り終わるとユーがメモを見せてきました。

『すごく 楽しかったから。』

・・・ああ、何か来ましたね。って、おや！？おやおやおや！！

「元勲老さまっ！」

セラがマントを出現させ片膝を付きました。

「元勲老ではありませんか。僕が居るところに来るなど、どういう風の吹きまわしで？」

「私を・・・罰しに来たのですね？」

「うづん、むしろ逆だよー。サラスちゃんにお願いされちゃってさー。」

「サラスに？」

「うん。セラフィムちゃんを許してやってくれって言われ、ワシ、来ちゃった。」

おお、サラスは約束を守ってくれたんですね。ありがとうございます。とか思っている傍ら、ハルナが元勲老のひげを引っ張っていました。

「ハルナ！あなた何をしているのですか！」

セラが引き剥がしました。

「この人、偉いのか？」

「そりゃあもう。歩も粗相は止めてください。見てて気持ち悪いですから。」

「かつかつか、構わんよー。まあ、そういう事と言うか、許さなかつたらわしら全滅だから、セラフィムちゃんの罪は消え。」

「なあなあ、そういうのって、厳しい試練とか与えるもんじゃないの？」

ハルナが余計な事を言いやがりました。

「んー、そだね。ワシもしっくりこないと思ってんだけど……。」

ちらつとこちらを見てくる元勲老。あ、成程。

「良いんじゃないですか？試練、実力アップのチャンスです。」

「な、臆、お前何言って」

「んじゃ、セラフイムちゃんに試練与えちゃおう。うん・・・ワシ、与えちゃおう。」

「分かりました。謹んでお受けします。」

「でさ、ちょーど今、うってつけの試練があるんだけど！」

「あ、知ってます。爆処理ですね。たしか、まだ四つほど残っていません。歩、ゴー。」

「いや俺かよ!?!」

「あたしの台詞とるなよな!?!」

「爆弾とな！大変だ。それは穏やかじゃないねー。じゃあ、ワシもついでに頼んじやおうかな？」

まあ、セラならある程度の事は出来るでしょう。

「この地に眠ると言われている最悪の化け物を倒してきて。」

・・・アウト。セラでは出来ません。というか、この世界の人では勝てないのでは？

ハア、大難さつて今度は特大の難が来ましたよ。

第26話 二難去ってまた一難。平穩はいつ来るのでしょうか。(後書き)

朧「あとがきコーナー。」

フレイ「いやー、やっと第三巻の内容が全部終わったね。」

朧「ここまで、長かったですね。うんうん。」

フレイ「私も出番増えたし！」

朧「良かったですね。」

作者「さて、やっとこさ朧の彼女になれた七実、セラ、ユーですが、次回からとは言いませんが出番がかなり増える可能性がある方々があります。」

朧「ああ、クリスとネネさんですね？」

作者「ザッツライト！増えますよー、四巻が終わったらかなり増える予定ですよー。個人的にクリスが大好きですので！」

フレイ「趣味丸出しだね!!！」

朧「ところで、今回フレイの弱い部分が視えたわけですが……。」

フレイ「それは忘れて!!!!!!」

朧「出番、増えるそうですよ？」

クリス「やった！！じゃあさっそく朧！デートいこデート！！」

朧「ん？ああ、良いですよ。」

七実「気になったのですが、セラさんやユーさんはどうなるのです？」

作者「分かりません。出来れば減らしたくないのですが、今後の展開で決まりますね。今の所の計画だと、減っていつてしまうかもですが……。」

クリス「朧」

朧「ああ、ちょっと待ってください！」

七実「……なんか、兄妹みたいですね。」

作者「ですね。」

番外編 フレイによる臙と七実のプライベート調査

どうもー！！フレイだよ！今回は私視点で話が進んでくよ。理由？フン！今回はなんと！臙と七実ちゃんの私生活をこの私が気配とか影とか色々なもの消して本格的にストーキングするんだよ！！実況だよ！！

と言うわけで、今は臙の部屋に居るよ！もちろん、姿はステルスしているのだよ！！

「あ、七実。強走薬グレー、足りてますか？」

「・・・あ、後100個しかありませんね。貰えるのですか？」

「ええ、50個ほど。」

「助かります。」

・・・ト、トラ やってるよ・・・。しかも朝っぱらから。あ、ついでに言っておくと、今は6時ね。

「次、どうします？」

「モンンにも飽きましたね。たまにはぶよよでもやってみますか？」

「いいですよ。では、それが終わったら寝ましよう。」

・・・え、今、臙はなんて言ったの？

「そうですね。さすがに眠いです。」

ま、まさか、徹夜でゲーム！？

「2時間後はどうします？」

「そうですね・・・、ネトゲでもやりますか？まあ、臙と違って私の方はまだレベルが低いですけど。」

「仕方ありませんよ。ネトゲはやり始めた時期〓レベルですから。

あ、違いますね。やっている時間〓レベルですね。何気に昔からやっている僕にはさすがに追いつきませんよ。」

え、臙、ネトゲやってたの！？どうも、今日は新しい発見の連続だね！始まって2分も経って無いのに結構発見があったね。主に、ゲームのプレイ時間とか。

「では、私は無難にサタ 様で。」

「大連続タイプですか。ならば、僕はアコー 先生で行きます。」

「長引きそうですね。ざっと、2時間ぐらいでしょうか？」

「さあ？あ、マージンタイムはもう、初めから低く設定しますよ？」

「その方が良いでしょう。でなければ5時間は続きそうです。」

・・・この二人、どれだけぶよ　よやるつもりなんだろう？

「では、通で行きます。」

「もちろんです。ファイバーや、だいへんしんがあると目もあてられませんからね。勝負が付きません。」

・・・さすが天才。こういうゲームは得意なのかな？

「では、始めます。」

「はい。」

・・・あれ？私の目がおかしくなったのかな？ものすごい速さで積んで行ってるけど・・・、なんか限界まで積んでるよ！？

「そう言えば、学校はどうしますか？」

「ああ、そろそろでしたね。どうしましょう？魂は別々になったとはいえ、あの死神に変なラインを繋がれましたからね。」

うん！繋いだね！！あのラインは、簡単に言うと、お互いの思考が読めたり、どこに居るか場所が分かったり、半径100メートル以内から離れなくなったり、病魔を共有したりする役目があるからね！ん？なんでそんなことするのか？気まぐれだよ！特に病魔はお互い、どうも友達みたいに思っているようだからそうしたんだよ！・・・病気が友達って、何か微妙だね！あ、それと、ついでお互い見稽古が出来るようにしておいたよ！私は臍には甘いからね！！死んでほしくないんだよ。

あ、因みにぶよ　よの方はおかしなことになってるよ。平均連鎖1

2。更にお互いお邪魔ぶよの被害も全くなし。これ、本当に2時間ぐらい続きそうだね。と言う事で、キングクリムゾン！！

「負けました。」

「まあ、年季が違いますよ。やはりアコル 生は強し。」

結果は臙の勝ち。スコア？両方ともカンストしてるよ！意味が分からない！！

「では、寝ますか。」

「そうですね。・・・あ、2時間後はちょっと買い物に付き合ってもらってもよろしいですか？」

「どこか行きたいところでも？」

「とらのあ。」

「僕未成年ってこの前も言いましたよね!？」

・・・ストーキング止めようかな？いや！ここは臙と七実のプライベートを知りたがっている皆のためにもがんばるよ！！

「まあ、とりあえず寝ましようよ。さすがに疲れました。」

「そうですね。では・・・。」

・・・あれ？何で一緒の布団に入るのかな？あれ？あれれ？

「……すう。」

何か一緒に寝てるんだけど!? え、何、そこまで行ってたの!? そこまで関係が進んでたの!? ……いや、ちよつと待ってよ。あの二人、つい最近までは同じ体で過ごしてたから一緒に寝るのは当然……なのかな?

と、取り合えず、此処も寝てるだけだから割愛。強いて言えば、行為には至らなかったと記しておくよ。

朧たちはきっかり3時間後に目を覚ました。……二人同時に目が覚めるって、どんだけシンクロしてるのさ。これもう仲が良いってレベルじゃないよね? なんか熟練した夫婦みたいになってるよ? ……まあ、お互いの趣味趣向は若干古臭いけど。着てる物は着物だし……ゲームは別だよ?

「で?どこに行くのですか?」

「とら あな一択でしょう。」

「……ハア、分かりました。では、着替えてから行きましようか。」

……彘? あ、古かった。ってちよちよちよ! おかしい! 何で同じ部屋で着替えてるのさ!?!? ちよ、脱ぐなし! 何でお互い気にしないの!? 熟練夫婦か!! 新婚通り越して熟練か!!

「……あ、これ七実のではありませんか。すみません、間違えました。」

「いえ、ではこれは臙のですか？どうぞ。」

もう一回脱いで渡すな！！恥ずかしくないの！？って、何当たり前の如く服交換してるのさ！赤面もしないっておかしくない！？おかしいよね！！？私がおかしいんじゃないやなくてあつちがおかしいんだよね！？私の感性は狂ってないよね！！？・・・落ち着こう。冷静になるのだよ。うん、よく考えたらあの二人は普通じゃ無いじゃん。あの二人に普通を求めること自体が間違っていたんだよ！！

「じゃ、行きましようか。」

「はい。」

うん、普通だね。あの二人にとって、玄関からじゃなくて窓から外に出ることは普通の事なんだよね！！・・・ドラ もんじゃあるまいし。

と言うか、あれ人に見られたら大問題だよな？なにか細工でもしてるのかな？ちよつち調べてみよう。

・・・え、『知られざる英雄』ミスターアンソウン？うん、落ち着こうか。確かあれはアニメ化もまだしてないし、ヴォミ では見稽古出来ないから習得するには実物を見る必要があるんだけど・・・、まさか居るの！？この世界に居るの！？ま、まあ、確かにこの世界には西尾さんの作品のキャラが居るけどまさか箱庭の方々も居るとは思いもよらなかつたよ。・・・え、でも、元会長の能力って実際見えないから習得不可能なはずんだけど・・・、どうやって習得したの？うん、気にしたら負けってやつだね！臙と七実に不可能は無いんだ、うん、きつとそうだ。現にほら、あの能力使っても私には見えてるし、忘れても居ないからきつと万全なんだよ！！・・・あ、つまり、自分に

近いもしくは上の人には見えるようにしてあるんだ。納得。・・・
納得してないけど納得しなきゃやってけないよ。

「ここですか？」

「そうです。」

「いや、何で知ってるんですか？」

「昨日来ましたから。」

「今日来る意味ありましたか!!!？」

「……………デート？」

「何故に疑問形？」

「いえ、デートって何かなと思ひまして。デートってなんですか？」

「……………なんででしょうね？」

「この二人は……………常識つてもものが足りないんじゃないかな！
！デートって言うのはつまり……………
……………くす。」

「まあ、何回来ても飽きませんが、さき、行きましょう。」

「さすが七実。迷わず十八禁のコーナーに向かいますね。」

「……………行かなきゃ……………ダメ？うう……………私実はこういうのに免

疫があまりないんだよう。おかしいのはあの二人だよ……。何で
ためらいも無く入っていけるのさ……。心細いよお……。

「……七実、やっぱり止めておきましょう。」

「え？何故です？」

「ああ、えー、ほら、秋葉 といえば電化製品も安いでしょう？ち
よつと見て行きましょう。良い物があるかもしれませんか？」

「……まあ、何時でも此処には来れますから問題はありませんが
……。ですが、急にどうして？」

「ん？あー、いえ、特に理由はありませんよ。」

「？そうですか。では、電化製品を見に行きましょう。」

「……助かったのかな？でも、臆は急にどうしたんだろう？

「（……やれやれ、暗殺者相手にストーキングなんてしてはいけ
ませんよ。まあ、七実は気付いていないようですが。」

「？とりあえず、付いていこ！」

「ハア……。」

「どうかしましたか？」

「いや、飛んで火に入る夏の虫とはこの事なのかと。」

「え？」

「ああ、こちらのお話です。さ、行きましょう。」

飛んで火に入る夏の虫？誰が？七実が？なんでだろ？

「（いや、フレイの事だから。）」

と言っわけ今は家電が売っている所に来てるよ！！

「あ、臍、見てください。コインです。」

「え？コイン？」

「超電磁 の弾じゃないですか？」

「いや、確かあれはコインである必要は」

「チュドーン。」

えええ！？なんかコインが高速で飛んで行ったけど！？

「何やってるんですか！！公衆の面前ですよ！！」

「大丈夫です。今私たちを認識できる人は身内以外誰も居ません。」

・・・あれ？

「ああ、確か不可視（インヴィジビリティ）でしたっけ？ですが、本当に見稽古って反則ですよ。身内以外には見えないようにするなんて事も出来るようになるのですから。」

「それが使いこなすと言う意味です。」

「そうなのかな？」

「臆、ここはすごいですね。」

「え？あ、そうですか？」

「ええ、見てください、タイムマシン。」

「は？タ、タイムマシンって・・・ええ！！？」

「ナ、ナンダッテー！！」

「あ、七実これタイムマシンじゃないです。洗濯機です。」

「え？ですが、バブルへ とうでは洗濯機でタイムスリップしていただけますよ？」

「いや、あれフィクション。」

「え。では勉強机もタイムマシンになりえないのですか？」

「なりませんから。」

「むしろ、なったら怖いよね。」

「ふむ、あ、見てください。」

「今度はなんですか……。」

「ライト イバーです。」

「いや、それ蛍光灯ですから。」

「え、そうなんですか？こんなによく斬れるのに。」

と言って七実がそこら辺にある看板をスパッと……スパッと!!!?

「モノホン！？それ買いましょう!!！」

そっち！？買ったちゃうの!？

「了解です。」

ブオンと言う音を立てて引っ込むライト イバー（仮）。何でそんなものが家電屋に売ってるのさ……。

「む、あれは……。」

朧が何かに気付いたようだよ。その目線の先は……ス、スタンガン！？此処家電屋だよね!!!？

「スタンガン？……嫌な予感がしますね。赤い何かが来そうです。七実、此処から出ましよう。今すぐに。」

「分かっています。お会計しましょう。」

と言う事でお会計を（ライト イバー、コイン）済ませて
98ってどついう事さ そそくさと家電屋・・・って呼んでい
いのかな？まあ、家電屋から出て行った。次はどこに行くのかな？

「・・・さて、そろそろ帰ります？」

「ですね。」

家に帰るだつてさ！・・・結局何しに来たのかな？買ったものと言
えばライト イバーとコインだけなんですけど。

家に着いたよ！！さーて、これから何を

「七実、先にやっていてください。」

「ええ、わかりました？」

ん？七実を先に行かせて一体どう

スコツ！

「・・・え？」

な、何事！？

「さて、フレイさん。お話を聞きましょうか？」

「あ、あはははは……。」

く 臃 く

と言っわけで4549文字ぶりに僕のターンです。あ、皆さんこんにちは、臃です。まあ、恒例の僕の長ったるい前置きみたいなのは無しです。ですが、そうですね、文化祭が近いとでも言っておきましよう。

「で？何故にストーキングなんてしてきたのですか？」

「え、えと、その、ど、読者のためだよ！！」

フレイ、あなた……。

「そんな可哀想な子を見るような眼で見ないでよ。」

「大丈夫ですよ。フレイは賢い子です。」

そう、とつても、誰よりも賢い子です……。

「何その慈愛に満ちた顔！やめてよ！！」

「何がです？」

「ご、後光が！？お、お母さん！！」

僕、男なんですけど。

「フレイちゃんはね、やればできる子なんだから、お母さんは応援してるよ。」

ですがまあ、ノッテみました。

「おかーさん!!」

そして抱擁。感動の再会みたいです。

「まあ、それは良いとして。」

はい、ハグ終了。

「で、結果的に何故に付けてきたのですか？」

「えっとね、普段臆と七実ちゃんがどんな風に過ごしているのかセラちゃんとうーちゃんに報告するためだよ！」

なんですかその期待はずれな答えは。あれだけ引っ張ったのもっと重大な事かと思いましたよ。

「はあ・・・まあすれば良いではありませんか？別に聞かれて困ることもないので。」

「フッフ！本当にそうかなあ!!」

「へ?」

「本当にそうかと聞いているのだよ、鑓少年。」

「え？あ、はい。」

「黙らっしやい！！ネタは割れているのだよ！！」

テ、テンション高いっすね・・・。

「ど、どのような？」

「では、報告しましょう。鑓さん、あなたは今日、徹夜で鑓七実さんとゲームをやっていましたね？」

「探偵？・・・あ、すみません、その通りです。」

鋭い眼光に押されてつい謝ってしまいました。

「その後が問題です。あなたは、仮眠と称して、鑓七実さんと一緒に寝ていましたね？」

「は、はい。ですが、それがどう」

「さらに！！あなたは鑓七実さんと一緒にお着替えていましたね？」

「はい、ですから、それがどう」

ガチャリと腕に何かはめられました。・・・え？手錠？

「自白したので連行させていただきます。さあ！行きますよ！！」

「ちよちよ！待ってください！僕何か悪い事をしましたか！？」

「ええ、しました。あなたは大変なものを盗んで行きました。」

ぬ、盗んだ……？

「な、何を？」

何故かフレイはその答えを溜めに溜めた後、やけにいい顔でこう言いました。

「5人の心です！！」

もう意味が分かりません。

その後の事。報告書、フレイ著

あの後、セラちゃんとユーちゃんに今日の事を報告したら、臃は散々説教された挙句、それぞれとデートに行くという約束を取り付けられてたよ！私は結構な長生きだと自負してるけど、あれほど目に希望が失われた人は初めてみたよ。そんなにきつかったのかな？ダブル説教……。

「臃、ネットゲのレベル上げ協力して下さいよ。」

「は、はは、今行きますよ。ははは……。」

番外編 フレイによる臃と七実のプライベート調査（後書き）

臃「あとがきコーナー……。」

フレイ「お、臃？テンションが低いよ？」

臃「いえ、そんなことはありませんよ、ははは。」

フレイ「どうしちゃったのさ！元気出してよ！！」

臃「……まあ、そうですね。いつまでもうだうだやってるのもバカらしいです。で、今回は番外編と言うことでしたが……。」

フレイ「あれだね。三巻も終わってボスっばいのも倒したからやっただらうね。」

臃「……まあ、4巻の内容はちょっと過激にするらしいですからね。」

フレイ「クリスが絡むからね。そう言えば、臃はどうするんだらうね？」

臃「内緒です。」

作者「ちなみに投稿が遅くなってしまうのは、テストがあったからです。もう終わったので、少しは早くなると思います。」

臃「赤点っばいけど？」

作者「……じりませい。」

七実「レベル上げ……。」

朧「あー、はいはい、分かりましたよ。」

番外編 臙の昔話

これは僕が十二歳、つまり小学六年生に普通なら成っている頃ぐらいのお話です。え？何故急にこんな話をするか？夢に見ているからですよ、気にしないでください。

まあ、十二歳とか小学六年生とか言っても、実際にやっていることは年頃の子どもとは言い難いです。因みにこの時期には僕はユーの元を離れていました。お仕事が忙しくなってきたというのが名目です。実際、何故かと聞かれたら、僕もさっぱり分かりません。何故かある日『一人になってみましょう』と思ったのです。話を戻します。この頃、やっていた事と言えば、お仕事・・・もう隠す必要もありませんね。つまり、人殺し、人外殺し、兎に角、殺しまくっていました。思えば、この頃には既に零崎だったのでしょうか。殺人欲と言うものは自力で抑えていましたが。思えば、この頃が僕の全盛期だったような気がします。・・・殺人スキル、殺人外スキルが最も研ぎ澄まされていました。現在進行形でメキメキ上達していますが、その辺りは気にしてはいけません。

と、まあ、こんな生活をしていたので、当然、心なんてものは無かったのですよ。ユーと出会って、感情は学びました。表現の仕方も分かりました。ですが、あくまでも表現の『仕方』だけです。実際に感情があつたかと言えば否、と僕は言っています。僕の感情らしい感情が現れたのは、ユーに助けて貰ったあの時だけでした。それ以降、感情と言うものが現れたことはありませんでした。感情が無い、つまり、心が無い、そのくせ人の感情と言うものが理解できているのだから性質が悪いですね。感情が無いのに感情は理解できる。うん、欠陥人間です。映画を見て、何故皆さんが泣いているのかはわ

かる。ですが、自分はちつとも悲しくないし泣けない。お化け屋敷に行つて、何が怖いのかはわかる。ですが、自分はちつとも怖くない。本当に、感情が無いのですよ。喜怒哀楽、確かに学びました。表現できません、表面上は。本当に喜んでいるか？怒っているか？哀しんでいるか？楽しんでいるか？否、本当は、何一つ感じていません。心は何時モ『無』です。ですが、それでは人としておかしい、だから、喜んでるフリをする。怒っているフリをする。哀しんでいるフリをする。楽しんでるフリをする。本当は何も混じていないのに、人間のまねごとをする。これを欠陥人間と言わずして、何と言いますか？何故、こんな風になつたのか。病気の所為？環境の所為？この頃の僕はひたすらにそのことだけを考えていました。無論、殺している間もずっと。ま、考えても結果的に言つと、まったく意味が無かつたのです。一つも戻りませんでした。で、今からの話は、僕が感情を取り戻す経緯です。先に言つておきます。この話は、ユー、セラ、歩、ハルナ、さらに、七実にも話した事がありません。つまり、この話を知っている人は、僕と事の当事者だけと言つたわけです。・・・まあ、その当事者が他の誰にも喋つてなかつたらの話ですけどね。え？何で喋っていないのか？決まっているでしょう？宝物と言つるのは時に、誰にも見せずに、大切にしたいモノなんです。

あれは、久しぶりにお仕事が休みの日の出来事でした。僕は何をして良いか分からず、とりあえず散歩に出てみようと思ひ、適当にぶらぶらしていました。そして、公園のブランコで遊んでいたとき（時間つぶし）発見してしまつたのです。

公園のベンチで、一人でお酒をゴキユゴキユ飲んでいる、白いゴスロリを着た、見た目幼い少女を。

それを見たとき、無駄に法律とかを律儀に（殺人、盗難除く）守っていた僕はいつもならどうでもいいとスルーしているはずなのですが、暇だったことも助長し、つい声を掛けてしまったのです。

「未成年飲酒は駄目ですよ？やるならばねないところでない？」

あれ？ちよつとずれたこと言っしまいましたね。

「ぶふう！？」

見事に酒を顔面に噴き掛けられました。

「……………僕はお酒で清められるほど、汚れていない筈ですが？」

「ごめんごめん。ちよつとびっくりしちゃったんだよ。」

「ああ、成程。で、未成年飲酒は駄目ですよ？」

「良いんだよ！くりすは未成年じゃないから。」

うそつきですね。

「嘘は泥棒の始まりですよ？悪いことは言いません。嘘は付かない方が良いですよ？」

「嘘なんて言っでないもん！！」

もんって……………明らかに嘘じゃないですか……………この世に合法口りなど……………あ、いましたね。元僕の同居人ですけど。ですが……………。

「駄目です。そんな嘘もバレバレです。さ、それをこちらに渡しなさい。」

「うー！良いっいたら良いのー！」

聞きわけがありませんね……。どうしてくれましょう？

「……って、んん？君……冥界人？」

……まさかの単語が出てきました。冥界人、まあ、勘違いしてしまつのは分かります。そりゃあ、結構長い間あつちに住んでいましたからね。仮にも普通の人間が冥界に長期間住んでいるのですよ？何らかの悪影響があるに決まっているではありませんか。その悪影響とは、まあ、つまり、冥界人って何らかの能力を持っていますよね？ユーも持ってます、アンダーソン君も持っています。で、今まで冥界に住むと言う異例、つまり僕も、ゲッチュしてしまったのですよ。能力を。無論、使った事はありません。ですが、この世界に来てからは使った事はありません。使ったのは冥界でだけ、しかもユーに内緒です。それにしても、唯の人間が冥界に長期間住むと、能力が付くのですね。悪影響……。まあ、人間にとつては悪影響でしょう。なにせ、外れるのですから。人の輪から。今更もう気にしていませんが。

「……いえ、冥界人ではありませんよ。もっとも、長期間あつちに住んでいましたけどね。」

「あー、成程。だからかー。ふーん……。」「

……何か、値踏みされているようですな。

「……よし、少年！ちょっと付いてきて！」

「……はい？」

「いいから付いてきてよ！」

「……えー、やだなにこの人、怖いんですけど。知らない人には付いていつてはいけませんとユーに言われているのに、まさか知らない人が自らよつて連れて行きますよ？どうしろと？抜けだそうにもこの人、地味に力強いですし、か弱い僕の腕力では振りほどく事も出来ません。今この瞬間もなけなしの腕力で脱出を試みているんですよ？全て無駄ですけど。」

これが、僕と白いゴスロリ少女……クリスとの出会いでした。

問答無用で引つ張られて来た所は、何と居酒屋。そう、居酒屋です。この白いは僕に何を求めているのでしょうか？ツッコミですか？ですが、生憎僕にツッコミ属性はありませんよ？それともあれですか？酌しろつてことですか？まあ、それぐらいなら構いませんが……いえ、構いますね、そもそも見た目は小学生な僕が居酒屋に入るかと自体がおかしいのです。……あー、それを言ったらこの目の前でニコニコしながら居酒屋に入ろうとしている公園の白い悪魔（命名）の方が問題ですね。見た目小3ですよ？そんなのがよくもまあ堂々と居酒屋に……。

「おークリスちゃんかい！いらっしやい！ー！」

「おっちゃん！何時ものお願い！」

「おつよ！お？今日は連れもいるみたいだな？」

・・・えー、なにこの慣れた感じ。常連ですか、そうですか。

「そつだよ、公園で拾ってきた。」

拾われちゃいました。

「がっはっは！そうかそうか！よし、坊主、お前は今日俺のおごりだ！好きなだけ飲みやがれい！！！」

子供に飲ませては大問題でしょう。

「おっちゃん！くりすは？」

「クリスちゃん？いいぜ！クリスちゃんもおごりだあ！！！」

「おー！最高だよおっちゃん！」

いや、だからそもそもお酒を与えては・・・いや、止めましょう。もう言っても無駄です。諦めて酌に回ります。

「さー飲んで！」

ドンツと置かれるジョッキ中。そこに入るは今にも噴き出しそうなビール。キンキンに冷えていそうですね。・・・いやいやいや。

「あの、僕未成年ですけど？」

「それが？」

まさかの切り返し。未成年発言を「それが？」で返してきましたよこの人。成程、常識の通用しない人ですか。

「僕は未成年ですので、お酒は飲みません。代わりに酌しますよ。」

「嫌！とりあえず飲んじやいなさい！酌はそれからでも出来るよ。」

・・・この人は、何でそんなに僕に飲ませたがるのでしょうか？

「そんな辛気臭い顔してお酌はされたくないよ。するならもっと景気のいい顔しなきゃ。」

辛気・・・臭い？僕はそんな顔していただいでしょうか？表面上は普通に表情を作っていたような気がしますが、はて？

「僕は普通ですよ？」

「嘘はいけないってさっき少年が言ったんだよ？」

「嘘なんて言ってます。僕は」

「嘘だよ。だって少年、此処に来るまで一度も笑ってないじゃん。」

・・・は？

「それは唯笑えない状況だと言う事ですよ。」

「嘘ばかり。顔は笑ってるよ？でも、その本心は無感情。こんな人間初めて見たよ。何があったか知らないけどさ、とりあえず、嫌なことはお酒飲んで忘れるのが良いんだよ！」

「・・・嫌なことなど、ありませんよ。これは嘘でも何でもありません。本当にありません。これは、生まれつきです。」

そう、生まれつき。原因不明。治療法も無しときています。まったくもって原因が分かりませんよ。

「生まれつきかー。まあ、とりあえず飲んで！」

ズイツと差し出されるジョッキ中。・・・仕方ないですね。

「・・・ハア、分かりました。飲みますよ。」

・・・ンクツ、ンクツ、ンクツ、プハツ・・・不味い。

「ん？？ビールはまだ早かったかな？」

「うえ・・・不味いです。」

決めました、大人になってもビールは絶対に飲みません。今決めました。

「ま、それは良いとして、お酒も入ったしさつきよりは喋りやすくなったと思うよ。一体、何をそんなに悩んでるの？」

「・・・はい？」

・・・この人は、一体どこまで知っているのでしょうか？

「別に慰めも励ましもバカにしたりもしないからさ、話してみなよ。結構楽になるよ？」

・・・ああ、今の僕は少し酔ってますね。

「話、聞いてもらえますか？」

「うん！」

話しました、全て。

「・・・うん、まあ、飲んで！！」

飲めば良いそうです。って！

「何人の一大決心を酒で流そうとしているのですか！！！！！」

今思えば、これが僕のツッコミ体質が覚醒した時だったような気がします。目覚めさせたのはクリスのようですね。

「とりあえず、お酒飲んでおけば、楽しいし笑えるよ？」

「いや、笑えはするのですが・・・って、全く話聞いてませんね！
？作り笑いは出来ませんが本笑いは出来ないって言って」

「そんなことより聞いてよ!!」

そんなこと・・・だと・・・!?

「くりすはね、復讐したい人が居るの!!」

「へー。」

「そいつ意味が分からないんだよ!自分がクーデター起こそうって言ったくせに自分だけ呪いを受けなかつたんだよ?これ不公平だよね!?起こした本人が呪いを受けないって可笑的いよね?」

「そうですねー。」

なんかあつちが愚痴り始めましたよ?あれ?これ僕の悩みを聞いてくれる所でしたよね?あれ?なんか方向性が変わりましたよ?あれ?

「だよね!可笑しいよね!これはもう世界を消しても良いレベルの問題だよね!!」

「いや、それは唯の八つ当たりでしょう!?!止めてくださいよ?復讐するなら本人にです!」

「でもさ、あいつヴィリエから出てこないんだよね。ホント嫌になっちゃうよ、ケツ!」

ヤサグレましたけど!?

「ま、まあまあ、ほら、一杯。」

「ん、……プハア、大体さ！クーデター起こした張本人なら責任を持ってくりすたを庇うべきだと思わない！？思うよね！？それなのにあいつときいたら今でもきつとのほほくと過ごしているんだよ？それを考えたら腸が焼き切れそうだよ！！」

「それはいけませんね。ほら、もう一杯。」

「ん、……プハア！あいつがあつちでのほんと過ごしている今現在もくりすは呪いで苦しんでいると言つのに、う、うう……。」

怒り上戸からの泣き上戸。これは噂に名高い絡み酒と言つやつでしようか？こんな体験したことないですからちよつと戸惑っちゃいますね。

「まあ、あれですよ。生きていれば復讐なりなんなり出来ますってほら、僕も協力しますよ？うん。」

「ホント！？ありがと〜。」

……あれ？僕は何故この人に協力しようと思ったのでしょうか？

「よーし！そうと決まれば飲むよ〜！飲み明かすよ〜！！」

「酌、しますよ。」

……僕ってこんなに人と積極的に何かする人でしたっけ？こんなに今日、しかも一時間も満たない人に酌をしようと思う人でしたっけ？……謎ですね。でも、まあ……

「少年！早く酌してよ！」

「はい、ただいま。」

思えば、この時から本当に少しですが、感情が芽生えた様な気がします。もともと有ったモノですから、なにかの刺激で簡単に戻るようです。僕に無かったものは、本当に簡単なもので、ただ単に、人とのコミュニケーションが足りなかったようです。それが、クリスを通じて、本当に少しですが、満たされたのでしょうか。あの時の僕は確かに心からこう思っていました。

『楽しい』と。

「臃？こんなところで何をしていますのですか？」

「ああ、セラですか。いえ、ちょっとお酒を飲んでいます。」

「臃は未成年の筈ですが？」

「今日は特別です。……あー、やっぱりビールは不味いですね。」

うん、本当に不味い。この味には未だになれませんか。

「不味いのなら、飲まなければよろしいのでは？」

「・・・いえ、僕は毎年、この日はビールを飲むと決めているんです。ジョッキ中で。」

「・・・？また、それはどうしてですか？」

「さあ？気が付いたら習慣と化していただけですよ。まあ・・・強いて言うなら、初心を忘れるべからずって所ですかね？」

「はあ・・・そうですか。」

「ええ、そうです。」

「・・・不味い。」

番外編 臃の昔話（後書き）

臃「あとがきコーナー！」

フレイ「イエー！ー！！！」

臃「さて、今回は僕の過去のお話でした。」

クリス「うんうん、あの話を知っているのは、私、臃、クリスマスちゃんだけだね！確か七実ちゃんも知らないんだったよね？」

臃「ええ、その通りです。」

フレイ「で、またなんでこのタイミングで？いい加減本編に入らないの？」

作者「いや、だって、四巻に入りますよ？」

臃「・・・それが？」

作者「四巻と言ったらクリスマスですよ、ク・リ・ス！！！！遂にクリスマスの春が来るのですよ！？これがこの話を書かずにいられますか！？いいえ、居られませんとも！！！」

フレイ「つまり、衝動書き？」

作者「いえ、ちょっと伏線といいますが、臃くんの秘密についてちよっと書きました。」

朧「あー、あの能力云々の話しですか？」

作者「そうです。さすがに、唯の人間？が冥界に行つて何も影響なしというのはおかしいと思ひまして。」

フレイ「ちなみに、その辺りが朧が中々遠距離戦は得意と言つ所いでもあるんだよ！まあ、確かにアレはチート臭いよね。」

朧「ネネサンには聞きませんよ？」

作者「当たり前でしょう！！！」

フレイ「アレ使つたら、ぶっちゃけ夜の王なんて一瞬で」

朧「それ言つたらネタバレでしょう？」

フレイ「あ、そうだね。じゃあ、今回はこの辺りにしとこうか！」

作者「では、最後に。過去に置いて矛盾点がありました是非感想にて報告してください。重大な矛盾点はすぐさまに編集します。」

朧「それでは！」

朧・フレイ・作者「」最後までお読みいただき、ありがとうございました！感想等お待ちしています！！！！

七実「あれ？出番は？」

臃「今回はお休みでしたね。まあ、たまには良いのではありませんか？普段ずつと出ているわけですし。」

七実「それもそうですね。」

クリス「フッフ！今回はほぼオールだったよ！」

臃「がんばりましたね。」

七実・フレイ（）気のせいでしょうか（）かな？（）臆がお父さんに見
えます（）る。（）（）

第27話 学園祭です！・・・準備ですけど

秋ですよー、二学期ですよー。

「本編再開ですよー。」

「七実！自重なさい！」

始まってから早速やかした七実でした。まあ、それは置いておいて、どうも皆さん、臃です。遂に夏休みが終わってしまいました。夏休みの終わりごろには、七実、ユー、セラとのデートラッシュでした。正直に言います。めがっさ疲れました！！七実が良いです。秋葉原行っていけば満足してくれます。僕も趣味で用事があることが多いので良いのですが！がですよ！！ユー、セラは普通の女の子なわけで、七実みたいにギャルゲ、並びにエロゲが趣味な訳でもありませんし、ゲームは・・・あー、僕たちの影響でやつちゃってますね。セラにもモンハ とP P買ってあげましたし。それは良いとして、兎に角、普通の女の子の訳です。つまり、デートも普通にやる訳ですよ。映画見て、食事して、買い物して、適当にその辺りをぶらぶらして、帰る。はい、期待はずれかもしれませんが、こんな感じですよ。そして、此处からが重要です！皆さん忘れていませんか？僕が、僕は病弱で虚弱です。はっきり言って防御力は障子紙程度です。たぶん歩むでもぶん殴れば僕は一発で昇天します。そんな僕がですよ？毎日毎日来る日も来る日も歩きっぱなし立ちっぱなしのデートをする訳ですよ？精神力？有り余っています。体力？真っ赤です。視界が真っ赤でモンスターにエンカウントしたらア

ウトと言う状況でした。スラムにも負ける自信がありましたよ、あの頃は。
ま、結果的には乗り切ってやりましたよ。体力は限界、しかしそれを悟られないように表面上はニコニコして、なんとか。ちょっと昔を思い出してしまったのは余談です。

で、今は普通に学校にて授業を受けてたりします。まあ、授業と言ってもあれですけどね。学園祭の話し合いと言いますか、何やるのー？といますか……。

「やっぱりさー、スワット演習場が良いと思うんだ！」

はい質問！という思考回路ももったらその様な考えが思いつくんでしょうか！！

「ハルナ、バカ言わないでください。そんなことしたら費用が洒落にならん位掛かりますよ？」

「……いや、そっち!?!?!」

「え?」

え……、いや、僕間違ってますんよね？だって、スワットですよ？銃とかも実弾とは言いませんが、模擬でもそれなりにお金掛かりますし、数もいるでしょう？さらに演習するための土地を県、もしくは国に貸して下さいっていう申請出して、さらに貸して貰うためにお金払って……、ほら！こんな平凡な高校がやることじゃないでしょう!?!?

「ツッコミどころが可笑しいですよ、臍。」

「え？どこがです？」

「そもそも、学園祭でスワット演習なんてやりません。」

「ああ〜！」

「『『気付くのおっそ〜!!?』』』」

因みに、今僕と喋っていたのは七実です。何故ここにいるのか？それは単純に100メートルぐらい離れたところで急に七実が僕の傍に現れ、また離れ、現れを繰り返したらこうなりました。まあ、ハルナもいますし、別に良いですよ？ついでに、七実と一緒に来た時に織戸と一悶着あったのですが、それは別のお話です。強いて言うなら、僕と七実を初見で見分けた、芯の通った変態とでも言うておきましょう。

「臆は天然ですからね。」

「えー、いいじゃん！あたしがみっちりやってやる！ペイント弾でも本物のカラシニコフ使うからな！」

何それ怖い。というか、銃刀法違反！僕が言えたもんじゃありませんが！

「か、……からし？……ねりねり……するんですか？」

うん、和みます。そういう和むボケを言ってくれるのは平松さんだけです。ですが、カラシニコフ、洒落になりませんか？からし

ねりねりの方がいいです。まあ、からしも十分兵器として運用可ですけどね。リアルに、「目が！目があー！」が出来ますし、「鼻が！鼻があー！」と言ったこともできます。というか、こういうのって激流に身を任せて流される人と、激流となり、ほあたほあたしまくる人と別れますよね。

「何故、急に北斗 拳？」

「理由なしです。」

因みに、僕はそのどちらでもなく、激流に身を任せ同化し、ツッコミどころがあれば隙についてほあたするタイプです。自分からは意見を言いません。

「やるからには、コス「黙りなさい。」ひでぶっ!？」

何か発言しようとした歩むの眉間に苦無一発。もちろん、先端には吸盤が付いています。

「何故だ！俺が何をした!？」

「歩の言いそうなことは大体分かります。コスプレ喫茶でしょう？ 一体何企んでいやがるんですか、この変態が！あれですか？女子の方々に卑猥な衣装を着せて、自分は裏からコソコソ隠れてカメラのシャッターを連打する予定だったのですか？」

「そんな訳ないだろう!？」

「俺はその意見に「黙りなさい。」ぶぎゃあ!？」

眉間にパチンコ玉一発。歩の時よりも効果は増し増しです。

「で？結局何か良い案はあるのですか？皆さん方も。歩の場合は如何わしい発言した瞬間に眉間にナイフ一発行くので、そのつもりで」

「俺の扱いひどいな！？ていうか、臍！お前俺にだけやけに毒舌じやね！？」

「……え？なにをほざいているんですか？そんな今はどうでもいい事を口走る余裕があるなら、まず歩から意見を言ってみなさい。ほら、栗栖先生も飽き飽きしてきたようですから早く！」

何気に完璧にこの場を掌握してしまいました。まあ、この際、都合が良いのでこのままにします。一部からは「そうだそうだ。」やら、「た、確かに……早くした方がいい……かも。」と言った意見が見られますので。

「……じゃあ、いつそ夜にやってみる……とか？」

この言葉に僕は絶句しました。周りの皆さんも同じようです。確かに、そもそも中々決まらない原因が何かありますか、と言った理由で、学園祭自体、ありがちな雰囲気になっています。それを、歩は……歩は……！

「歩……！！！！」

「は、はい！？」

「それで行きましょう……！！」

「すみませ・・・って、は？」

何呆けた様な顔しているのでしょうか？

「最近には既に学園祭も正直マンネリ化し始めています。ぶっちゃけ、皆飽き飽きしているはずですよ。皆さんはどうですか？」

「確かに・・・。」

「ありがちって感じだよな。」

「そうだね・・・。」

「そこに歩は夜祭と言う新しい発想を出してくれました。これ、僕は結構良いと思うのですが、皆さんはどうですか？」

「・・・楽しそう・・・かも。」

「うん！夜祭にすれば良い！」

他の方々も、結構良いんじゃないかと書いてあります。

「夜・・・ねえ。んー、とりあえず教頭に話してみるか。」

さすが栗須先生。話が早い。

「え、いや、ちょっと待てよ。そんな一クラスの意見が通る訳・・・。」

「大丈夫です。通します。何があっても絶対に通します。金にモノを言わせません。」

「どんだけこの学園祭楽しみにしてるんだよ!？」

「・・・実は、皆さんは学園祭、飽き飽きと言うか、またかゝって雰囲気でしたけど、僕はとてつもなく楽しかったです。楽しみ過ぎて歩の味噌汁の中に砂糖を入れてしまうほどに。」

「通りで昨日の味噌汁は若干甘かった訳だ!」

「ま、今回の件で、歩の評価は、くさった死体から、リビングゲデッドに昇華しました。」

「え、まあ、うん、ありがとう?」

強くなっています。

あ、因みに夜祭の方は・・・

「お前たちの熱い思いは伝わったっ!」

僕が色々やるまでも無く、通りました。

「近隣の住民の方々から苦情等が来たら　私が責任を持って、土下座して回るから安心して騒げ!以上だ!感動したっ!」

僕も感動しました。実は僕、この教頭先生が生徒としてとても好きです。あ、ライクですよ?この先生は生徒が進んでやりたいことはやらせてくれます。積極的に言えばその通りにしてくれるのです。

とても良い先生です。

栗須先生のありがたーいお言葉で緊急会議は終了しました。

で、まだありますよ。夜祭をやるならば当然、出し物と言うものがある訳でして……。

「夜に行われるなら断然スワット屋敷だな！」

「待って下さい。スワットと屋敷を合わせるのはあまりにも無謀です！」

こういうツツコミを入れる必要がある訳でして……。

「妖怪……喫茶……で、どうかな？」

……妖怪喫茶……ですと？

「平松さん！！」

「は、はい！」

良いではありませんか！歩の腐った意見である、コスプレ喫茶もいれ、さらにハルナのスワット屋敷……お化け屋敷で良いですか？まあ、その両方の意見を尊重しているのですから。

「良いと思います。」

「え……本当……？」

「ええ、良いと思いますよ。双方の意見を尊重した素晴らしい意見

です。ああ、ハルナ。スワットが諦めきれないのなら、スワットのオリジナル妖怪でも出してみればどうです?」

「じゃ、それで!」

「ま、と言うわけで、とても素晴らしい良い意見でした。ありがとうございます。」

「そ、そんな・・・お礼を言われるほどじゃ・・・。」

「いえ、実際僕は夜祭、楽しみですからね。このような面白そうな事を提案してくれた平松さんには、とても感謝しています。まあ、お礼は僕の気持ちですので、受け取らないも受け取るも自由です。」

「う、うん・・・。ありがとう。」

いや、平松さんがお礼を言う理由が分からないのですが・・・、まあ、いいです。受け取っておきます。

「妖怪喫茶ね。あんときみたいな感じかな。」

・・・栗須先生?

「どのとき?」

「ほら、皆がどうぶつみたいになってしまった時みたいな感じで。」

アウト。この中でその事実を知っているのは、僕と七実、歩、そしてハルナだけです。そして、あなたの正体を知っているのはこの中では僕と七実だけ。ハルナは兎も角、歩がどういう反応するか火を

見るよりも明らかです。まあ、何か意図があるのか、無いのかは知りませんけど。

ほら、やっぱり険しい顔で睨んでいるではありませんか。これは、あとで話し合いですね。

「で、クリス。何故、あのような事を言ったのですか？」

現在、僕と七実は例の居酒屋でクリスと飲んでいます。僕は酌、七実は普通に日本酒ですけど。因みに、クリスに七実の事はしっかり話してあります。僕の彼女兼嫁？とか言ったら目のハイライト無くして、

「そんな、何で？臙はくりすだけの物なのにねえどうして？」

と言ってきた時は割と本気で焦りました。その後の七実の鶴の一声が無ければどうなっていた事やら……。七実は一体クリスに何を言ったのでしょうか？耳打ちでよく分かりませんが「臙なら……。4。ぐらい……。」「と言っていたような気がします。なんなのでしょう？

「んー、それがね、やっとくりすの計画に目途が立ったの！」

計画？

「まさか、魔装少女に戻るのですか？」

「そっだよ、今回はそのための余興ってやつかな？」

余興ですか……。まあ、良いんですけどね？歩程度にクリスがつうにかされる気もあまりしませんし。ですが、そうですね……。可能性があるなら、ネネサン、ですね。あの方は、ユーと友人だったハズ。で、恐らく、クリスは歩たちの敵になります。しかも圧倒的な。そのような状況で、ユーがネネサンに頼らない訳が無いと言うのが僕の予想。まあ、ネネサンの性格なら、少なくともネネサンVSクリスと言う事にはならないでしょう。そんなこの世界が危ない！？といったレベルの戦闘を、少なくとも僕の目の前では起こさせませんよ？全力を持ってこの場合は阻止します。もし赤の他人ならば、排除します。……。まあ、言ってはなんですけど、僕と潤さまの戦闘も人の事言えたものではありませんけどね。

「なるほど。あ、どうぞ。」

「ありがとう！」

美味しそうにクイツとお酒を飲むクリス。僕も、ビール以外なら割と好きなんですけどね……。まあ、滅多に飲みませんが。

「あ、七実もですね。」

「ありがとうございます。個々のお酒はおいしいです。」

「今までは飲んでいなかったのですか？」

「最近飲み始めました。」

「そっだったのですか。」

「それで、ね、臙に聞きたいことがあるんだけど……。」

「なんででしょう?」

珍しいですね、クリスが聞きたいことなんて。

「臙は、どんな状況になってもくりすの味方で居てくれる?」

・・・ああ、成程。これは、味方が欲しいのではなく、単純に僕と敵対したくないと言う事ですか。つまり、僕とは戦いたくないと言う所ですか。まあ、確かに、僕も歩やセラ、ユーとは戦いたいかと聞かれれば、確実に答えはノーです。で、その答えも考慮して、クリスにいう答えは……

「はい、味方ですよ。」

「ホント!?!」

ちよおい、身を乗り出さないください。近い近い。

「まあ、積極的に戦うかと言われるればノーですけどね。僕にも、戦いたくない人はいますから。ですが、そうですね。自衛、もしくは追い払う程度なら協力します。」

まあ、さすがに命までは取りに行きませんよ。・・・僕を怒らせるような言動をしなければですけど。あー、でも、それも微妙ですね。セラやユーならどうなのでしょう?最悪、説得だけで終わる可能性大です。

「でも、どうして？」

「はい？」

「なんでくりすの味方になってくれるの？悔しいけど、くりす以外にも大切な人はいるんでしょう？それなのになんで……。」

「僕は、約束は違えませよ。」

「え？」

「昔ですけど約束しましたよね。僕も協力するって。」

「あ……。」

「いくら昔の出来事だからと言って、僕がこの約束を破ることは絶対にしません。」

ユーやセラ、ハルナ、ついでに歩の事が大切でないと聞かれれば僕は間違はなくノーと言います。その逆、ぶっちゃけ、自分の命賭けてでも守りたいぐらい大切です。歩には賭けませんけど。では、何故クリスの約束を優先するのか？単純明快、クリスも同等に大切な人だからです。大切な人に、僕の中での順番はありません。唯、今回の件は。クリスの悲願ですから、僕はクリスに協力します。本人は気丈に振舞っていますが、実際はかなり辛いと思います。想像してみてください。ある日突然、若かったあなたが突然老人となってさまざまな障害にぶち当たります。そんなとき、耐えられますか？昨日までは元気に走れたのに、今では無理。昨日の晩御飯の事は思い出せないどころか、物忘れは激しくなる一方。これはちよつと極論ですが、今のクリスはその様な状態です。ましてや、普段がハイス

ペックな魔装少女です。その辛さは増し増しと言ったところでしょう。だから、僕はクリスマスに協力します。味方になります。辛そうなクリスマスはもう見たくありませんから。

「……ありがとう。」

「どういたしまして。」

ですが、それと同時にセラたちの辛そうな顔を見る羽目になってしまつたのですよね……。まあ、人間ですから、両立させるのは中々難しいです。特に人間関係は。

「どうぞ。」

「うん！」

酌します。それを美味しそうに飲むクリスマス。平和ですね。

「……あ、臍、そう言えばFFの最新作が出てますよ？」

「……そう、ですね。」

もう何も言つまい。

学園祭の準備と言つものは、結構大変なですね。

「じゃあ、相川、鑓兄妹。頑張ってくれな。」

「ごめんね。私も用事あるから。」

「いえいえ。」

とまあ、看板作りを押し付けられたとは言い方が悪いのですが。ちぎり絵的な看板を作ろうとしたのは良いですけど、途中で飽きてしまったのでしょね。遅くまで残っている歩と、なんやかんやで七実のポケを捌きまくっていたらいつの間にか帰りが遅くなってしまった僕にその役が回ってきたというわけです。因みに今は木曜日です。土曜日には学園祭です。事の性急さが尋常じゃありません。

「・・・臆。」

「なんですか?」

「早く帰らないと英霊たちの戦闘に巻き込まれてしまいます。」

「いやいや!そんな事態になりえませんか!この世に英霊居ませんか!というか、Z E OではなくStay/nigh ですか?また随分と、古いと言うか、何と言うか・・・。」

「私はStayの方が好きです。ライダーが好きです。」

「その心は?」

「エロい。」

「そんな事だろうと思いましたよ!...!」

「じゃなくて、普通に好きです。とても良い人ではありませんか。」

「まあ、確かに。」

「臙は誰ですか？」

「僕ですか？僕は・・・ランサーですね。」

「そうなんですか。てっきりワカメかと思っていました。」

「何故に！？どうしてその結論に至りました！？」

「臙は、ゲテモノが好きそうだから。」

「ゲテモノ！？」

「はい、ゲテモノです。チョウチンアンコウとか好んで食べそうです。」

「いやいやいや！！僕は普通ですから！ノーマルですから！！」

「え！？」

「何その新鮮な驚き！？」

ああ、作業が捗りません・・・。

「お前ら・・・口動かしてないで作業してくれ・・・。」

「ですってよ七実。」

「いや、臙の事でしょう。」

「両方だよ!!」

「はいはい。」

「無駄に息びったりだな!」

作業しましょうか。

「あゝいかわ。」

友紀さんが来ました。まあ、用があるのは歩なので、僕はスルーです。作業しなくては。

「おう　　友紀。やけにご機嫌だな。」

「携帯を買ってもらったんだぜ!番号教えてくれよ。」

携帯ですか。吸血忍者も、随分と時代に適応・・・あ、しまくってましたね。ネットアイドルとかやってましたね・・・それでいいのか吸血忍者。あの頃の殺伐とした雰囲気はどこに行ったのでしょうか?

「そう言えば、臙も携帯持ってましたよね?」

「ん?ええ、持ってますよ。50個ぐらいですけど。」

少なくなっただけです。

「・・・え？何故そんなに持っているのですか？」

「あー、ちょっと色々ありましてね。クライアント別に分けているんです。同じ携帯だと、頻繁に掛かってきますので。」

まあ、仕事と言っても、暗殺とかではなく諜報とかなので安全なのですが。ほら、あれです。セラとユーに「危険なこと、ダメ！ゼツタイ！」と言われてからは、一人の依頼人を除いて、そういうお仕事はしないようにしています。しかも、その一人の依頼人は最近行方不明なんですよ。によって、お仕事も減るし、性懲りもなく僕に暗殺させたがる人のケータイを廃棄、と言う事で、少なくなったのです。

「そうなのですか。てつきり某アメリカンフットボールアニメーションのあの人がと思いました。」

「いや、結構昔の事を言ってきましたね。あんなに持っていないですし、あんなにスパルタではありません。」

「言うか、皆さん分かります？」

と、七実と話していたら歩がいつの間にかどこかに行ってしまうした。さて、と。

「では、七実。本気で完成させますよ。」

「分かっています。」

僕が空中で紙をバラバラに切り裂き、その落ちてくる紙を七実が

「虚刀流『雛罌粟』から『沈丁花』まで打撃混成接続。」

で、紙を貼り付けて行く。糊は予め付いていますのであしからず。無論、悪刀も使っております。

「こんな感じでしょうか？」

「上出来です。」

・・・何ともまあ、技の無駄遣い。僕もですけどね。空中で物を切り裂くのはものすごく難しい技術です。まあ、僕の場合は魔眼があるので難易度は激減しますが。

「これで半分ぐらいでしょうか？」

「そうですねー。何ともまあ、技の無駄遣い感が否めませんが。」

「どうせこの様な技、使う機会は少なくとも私には回ってきそうもないので、偶に使って鈍らないようにする方が良いと思ひまして。」

・・・え？どういう事？

「すみません。話の内容が全く理解できません。詳しくお願いします。」

「嫌です。かなり端折ります。」

「断られた!？」

「えつとですね。私が臙でも勝てるかどうか分からない相手以外は基本臙に戦闘を丸投げするからです。オーケー？」

「えーつと何故ですか？いや、戦闘を僕に丸投げするのは良いのですよ？僕もまだまだ戦闘において伸びますから。ですが、せめて理由を聞いても良いですか？」

「嫌です。」

「いやそこは答えよ！？アンサーしよう！？」

「仕方ないですね……。理由は二つです。一つ目は、働きたくないでござる！絶対に働きたくないでござる！！です。」

あれ？おかしいですね。確か七実の設定に、働き者と言ったものがあつた気がします。

「そんな設定、とつと昔に掃いて捨てました。」

「……で、二つ目は？」

もうその辺は無視です。作者も「どうしてこうなった……。」と言っていますし。

「単純な話ですよ？」

「え？」

単純？まあ、確かに七実はゲーム・アニメに関しては単純と言いますか、直ぐに釣られますけど。フィーツシュ！ですよ？

「女の子は、好きな男性に守ってもらいたいと思うものですよ?」

.....

は！思考がフリーズしましたよ！？予想外過ぎて十二指腸が飛び出るかと思いました。

「そ、そそ、そうですか。」

「はい、なので、守って下さいよ?」

「.....もちろん。指一本触れさせませんよ。」

僕は、どっちかと言うと、攻める戦いよりも、守る戦いの方が得意とは言いませんが、なんか性に合っている気がします。

「フッフ、期待しています。」

と、七実が悪笑ではなく、普通の微笑でそう言いました。普段、滅多に笑わない、と言うか、クールな七実のその突然の表情の変化に少なからず僕はドキツとしてしまいました。まあ、惚れた弱みってやつでしょうか？僕も男ですからね。まあ、性欲とドキツとはまたちよつと違うみたいです。

「あれえ？ちよつとまずい場面に出くわしちゃいました?」

「.....お姉様?」

と、なんかちよつとピンク色の雰囲気になりかけていたところに」

自殺志願』を継ぎし我らがお姉さま、零崎舞識、ああ、今は無桐伊織と言った方が良さそうですね。まさにその人が教室に入り口にて平松さんと一緒に立っていました。

「久しぶりの登場ですよー。うなー。」

「へ？僕たち学校始つてからは毎日会ってますよね？」

「そういう意味じゃありません。登場がです。」

「何のことでしょう？」

「良いですよーレギュラーの方々は！何もしなくても出番が貰えるのですから。こちらら自分から良い雰囲気の中割り込んででも喋らないと出番すら貰えないんですよ！！」

「・・・なんででしょう？何故でしょう？なんか涙が出てきました。僕はいこれほど背後に悲壮感を漂わす人類を見たことはありません。

「・・・よく分かりませんが、後でファミレスに行きましょう。奢ります。」

「ステキ！惚れていいですか！！？」

「駄目です。血の繋がりはありませんが、姉と弟でしょう？」

「禁断の恋って憧れませんかあ？」

「少なくとも僕は憧れませんねえ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「まあ、それはともかく、作業進みます・・・って、わお！二人でもう半分までやつちやっただのですか！？すっこ！」

「・・・まあ、僕たちですからね。来たんなら、姉御も手伝って下さい。二人より三人。三人より四人です。平松さんもよろしくお願ひします。」

「う、うん・・・・・・・・。」

おや？平松さんの元気がありませんね？何かあったのでしょうか？

「（やっぱり・・・・・・・・付き合ってる・・・・・・・・のかな？）」

「では、さっさと作業しちやいましょう。」

・・・今は、良いでしょうか？勘ですけど、なんか、放っておいてはいけないような気がしますけど、どうなのでしょう？

「平松さん？どうかしましたか？」

「う、うん・・・・・・・・なんでもないよ・・・・・・・・。」

・・・元気ないですね。

「平松さん、平松さん。」

「え・・・・・・・・？」

「はい。」

「……？」

平松さんに上げたモノは、あれです。チュッパチャップス。皆さん、お忘れかもしれませんが、僕は一応暗器使いです。更に曲絃師です。滅多に、滅多に！！使いませんが。理由？これはクリスの主張と、相反してしまうのですが、最強って言うのは最後の最後まで奥の手を隠しておくものだと思います。ほら、フリー様も第三ぐらいまで形態があつたでしょう？話が逸れました。つまり、暗器使いですから、どこからともなくチュッパチャップスを出すぐらい朝飯前と言う事です。その気になれば、バカでかい某海賊王になりたいゴムの人が食べている骨付き肉もポケットから出せるのです！！不衛生極まりないですけど。

「美味しいですよ？」

「……くす。」

なんか笑われました。え、駄目ですか、チュッパチャップス。美味しいですよ、チュッパチャップス。

「？何か変なことでもしましたか僕？」

「……ううん、何もしてないよ……ありがとう……。」

あれですか。女の子はミステリーと言う奴でしょうか？

「臆、何サボっていちゃっているんですか。」

「い、いちゃついでないよ……。」

「そうです。僕はただ飴ちゃんを上げただけです。」

「そんなことはどうでもいいので、早く作業しましょう。どこぞの腐れゾンビが仕事ほっぽって行きましたから、人数が増えたとはいえ、良い状況とはいえないのですよ?」

……ま、まあ、確かにこのメンツで先ほどの様な事は出来ませんね……。一般人いますし。」

「分かりました。ちゃっちゃんと片づけちゃいましょう。」

途中で歩が帰ってきましたが、今更来ても「は?何この人?仕事放り出してよく帰ってこれたね?」みたいな事を僕と七実で言っていたら泣きながらどこかに行こうとしていましたが、そうはいきません。曲絃系で拘束し、袖から出したバカでかい大砲の中に放り込み、着火してどこかに飛ばしておきました。あれ、結構よく飛ぶんですよ。」

「まさに技術の無駄遣い。と言うか、そんな大きいものどこから出したのですか?さすがに暗器では説明付きませんよね?」

「そんなこと言ったら、宗 先輩もそうですよ?まあ、確かに僕のはちょっと度が過ぎますけど。」

ですけど、気にしてはいけません。それが暗器ですから。

「ハア……。まあ、良いです……。あ、一つ聞きたいのですが。」

「はい？」

「さすがに、マテリアルライフルとかは入ってませんよね？長さ的にはあの大砲よりも長いですし。」

えっと……。

「マテリアル？ひょっとしてこれですか？」

「……明らかに服の面積と釣り合ってませんけど？」

「いや、そこは突っ込んではいけませんって。」

「まさか、月とかも入ってませんよね？」

「メタル ア！？いえいえ、さすがにあれは無理ですよ。動いてますし。」

「そういう問題ですか？」

「え？他に何か？」

よく分かりませんね。

「……臆の非常識さには、私も脱帽です。」

「帽子がぶつていないでしょう？」

「屁理屈は良いです。さ、戻りますよ。」

なんか、等身大の歩が居ました。マネキンですね。気持ち悪いですが、割と妖怪喫茶には合っているかもしれないので放置。で、作業していたら珍しく平松さんから話しかけてきました。

「ねえ、鑢くん……。」

「はい？」

「夜の学校って……ドキドキ……するね？」

夜の学校……？

「んー、確かに、普段とは違った雰囲気ですね。たぶんあれですね。普段学校と言えば賑やかですから、逆にそう感じるのかもしれないね。」

「そうだね……。あ……そう言えば、知ってる？」

「いえ、知りません。」

「まだ何も言っていないよ……。この校舎って……昔……お墓だったんだって。」

「墓……ですか？それは初耳です。ひょっとして、幽霊が出るとかですか？」

あ、近くにもありましたね、お墓。ゾンビがよく出没するので、杭

や鈍器を持って行った方が良いでしょう。現れた場合、サーチ&デスで頭を鈍器で狙いましょう。コツは、振り回すのではなく、脳天に向かって一発決めることです。竜宮 ナさんみたいに。

「うん……ここ、出るんだって……。」

「そうですね……。テケテケとか、口裂け女とかですか？」

「発想がリアルで怖いよ……。鑢くんは……。幽霊信じない人？」

「僕？んー、どうなのでしょう？ぶっちゃけ、いてもおかしくは無
いかなーと言った感じですよ。別にいてほしいかと言われれば、ど
ちでもいいという感じですけど。」

魔装少女、冥界人、吸血忍者、メガロ、ゾンビ、殺人鬼、殺し名、
呪い名、あとは、最近ある疑惑が浮上してきた箱庭学園（フレイが
なんかそれっぽい事言っていました。）もうお腹いっぱいです。そこ
に幽霊とかも追加されたらたまったものではありません。

「私は……。信じたくないな……。ほら、信じている人には見える
って言うでしょう？」

「実際、キリストなどの宗教関係の神様は信じ切っても降臨しませ
んけどね。」

あ、ですが、神はいますね。死神ですけど。

「因みに、どんな幽霊なのですか？」

「え？・・・白い服を着た・・・小さな女の子・・・みたいだよ？
夜、理科室で・・・煙と一緒に現れるんだって・・・。」

何それクリス。全く、大方、理科室使つてあたりめでも作っている
のでしょうか。困ったものです。

その後、七実が「そろそろお開きにしましょう。」と言う一言で、
今日の作業は終わりました。中々進んだのではないのでしょうか？
クリス？会いに行きましたけど、べろんべろんに酔っていたので、
家まで送り届けました。

第27話 学園祭です！・・・準備ですけど（後書き）

隳「あとがきコーナー！」

フレイ「フウワアフウウー！」

隳「テンションおかしいですね？」

フレイ「別に？」

隳「あれ？なんか怒ってます？」

フレイ「当然だよ！今回碌に出てないじゃんー！」

隳「まあ、学校行事ですから。フレイ達には出番ないですよね。」

フレイ「ブー。ま、しょうがないかな？で、私達の代わりに妙子ちゃん結構喋ってたね？」

隳「まあ、クラスで仲が良い人と言ったら、アンダーソン君と平松さんぐらいでしょうか？」

フレイ「あれ？歩君と蠅は？」

隳「歩は例外。蠅？そんな人いましたか？僕は存在を特定できませんでした。」

フレイ「ま、そうだよな。所で、今回は隳の技術が結構無駄に使われてたね？」

朧「無駄って……、まあ、無駄ですけど。切断技術と暗器。そして曲絃系ですか？」

フレイ「そうそれぞれ。」

朧「まあ、アレです。今までなんやかんやで使ってこなかったからですね。」

フレイ「確かに使ってなかったね。なんで？」

朧「夜の王には意味がない。潤様には効かない。連続殺人犯にはそもそも戦闘していない。アリエルさんは使いましたけど、糸で直接攻撃していません。」

フレイ「あれ？メガロとかは？」

朧「実は描写されないだけで地味に使ってます。まあ、歩達を逃がしたり、歩達が近くにいたりであまり使っていないのですが。」

フレイ「なんで？」

朧「作中にも言いましたが、奥の手とは最後の最後まで取っておくものです。」

フレイ「手の内は明かさないと？」

朧「はい。」

フレイ「えげつな!？」

朧「そう言えば。この世界って箱庭あるんですか？」

フレイ「さあ？」

作者「その辺りは学園祭で明らかになります。」

朧「マジ！？」

作者「マジ。今の所の考えでは、学園祭はカオスになりますよ？主に臃くんが。」

臃「やめい！！」

第28話 カオス！世界でも狙いましょうか

「マグロのたたきを作ろうとしていたんです。そして意気揚々と準備していたところ、急にクワガタのハサミとカブトムシの角を兼ね備えた万能な鯉が現れたんです。そして、こう言っんです。『焼きそばをパサパサにしろ』と。私はそれに大層憤慨しまして、『では、きなこ餅を持って来てください』と言ったのです。そうしたら、突然玄関の靴は踊り狂い、家が蹂躪され、そこから『トイレの神様』が現れて、私の足を3本と腸二本を持って行ったのです。ああ、4本目と3本目は無事でしたから安心して下さい。その代わりということでは神様に貰った黒板の美味しい事美味しい事。半日ですべて食したのですが、私は気が付いたらおうかんになっていました。悲しくて……、本当に悲しかったです。もう、生きている事が辛かったです。どうして、私はマニアの間でしか集められない、ゴミなのかと。自らの不必要さに打ちひしがれました。だからというわけではありませんが、私の傍らには常に大蛇様がいらっしやいました。大蛇様は偉大な方で、あのパピポンを一晩で開通したと言う実績もあるぐらいでした。これにはさすがのナポレオンも五体倒地せざるえなかつたです。笑いました。私は、笑いました。笑い過ぎて涙が出るほど笑い、笑い、気付けば涙が止まりませんでした。分かつたのです。時代の流れと言うのは常に私の口に向かって

「

「うにゃあああああああああああああああ！……！！？ も
うやめてくださあああああああああああああ！……！！」

「と言つわけで皆さまご機嫌はよろしいでしょうか？ 鑢七実です。」

「

」

「臙はただいま処理落ち中です。今回はかりは天才的に頭が良い事が仇になりましたね。臙の頭脳は今、私が先ほど述べた事を全て理解しようと光速フル回転させて処理させているはずです。ああ、誤字ではありませんよ？ 真面目に光速です。」

「……………はっ！？ つまり世界の真理は地中海にあると言つ事ですか！！」

「処理しきつた上に何か変な方向に解釈しましたよ！？ 地中海に何かあると言つのですか！！」

「……………成程、宇宙の真理の秘密まで地中海にあると言つ事ですか……………」

「臙！？ 本当にどうしたのですか！？ 戻ってきてください！！！」

「ああ、七実。僕は今清々しい気分ですよ。世界の、宇宙の真理に触れ、己の小ささを改めて実感しました。」

「は、はあ……………」

「生きるとか、死ぬとか、そんな小さい事に何故僕はこだわっていたのでしょうか？ 全てが一つになるだけだと言つのに。」

「……え？お、臃？」

「全てを一つに……、今こそ、人類補 計画の始まりです……！」

「臃……！ 正気に戻って下さい……！ 臃……！」

「と言うわけで、今から同志を探すべく旅に出ます。では……！」

「臃……！！！」

大変の見苦しいところをお見せしてしまい、申し訳ございません。臃です。あれです、脳を光速フル回転させていましたら、いつの間にか悟りを開いた揚句、変な宗教の開祖になる所でした。危ない危ない。七実がハリセンで一発やってくれなかったら今頃僕は地中海で布教していたでしょう。

「で、さっきのあの話はなんだったのですか？」

「夢に見た事をそのまま言ってみました。」

・・・なんかそんな話を読んだことがありますよ？確か、生存のデ
イーブサマーさんが言っていた気がします。

「どんだけ複雑な精神構造しているんですか。」

「仕方がありません。実際見てしまったのですから。」

まあ、うん、もう良いですけどね。

因みに今は金曜日の夜です。学園祭は明日ですよ。看板？普通に金
曜日の学校にいる間に完成させました。知ってます？僕のお姉さま
は優秀な人なんですよ？普段おちゃらけてますからそう見えませ
んけど。

今僕たちは秋葉原にいます。理由とえば、簡単な話で七実が行き
たいと言ったからです。セラとユーは今頃ハルナたちと一緒に妖怪
の絵でも描いているのではないのでしょうか？

「臆。」

「はい？」

「気のせいでしょうか？ 私にはあそこに『ボールのようなもの』
が売ってあるように見えます。」

七実の視線の先には、ライト イバーが売ってあったと言う規格外
な家電屋がありました。何故、家電屋に『ボールのようなもの』が
売ってあるのかは謎です。今世紀最大の謎です。

「あ、ピカチュウ までありますよ。」

「それは色々とまずいでしょう!?!」

あれ生物!?! 家電ちゃうで!?!?

「まあ、そんなのはどうでもいいので、早くとら あなに行きましよう。ギャルゲ、エロゲが私を待っています!?!」

テ、テンション高い……。

「付き合いますけど、僕未成年ですよ?」

「はい。」

はいつて、なにこ、れ……。

「身分証明書です。」

「おかしい!! 僕の名前、僕の血液型とかはあってるのに年齢がおかしい! 21ってなんですか!! 普通に偽装ですよ!?!」

「いえ、臍にも私の買い物に付き合ってもらいたいなと思った結果です。」

「ですが、いくらなんでも偽装はやり過ぎでしょう?」

「愛の力です。」

「ならしょうがないですね。」

うん、愛ならしょうがない。・・・ところで、

「愛ってなんでしょっ?」

「また難しい事を聞きますね。まあ、これは私の持論ですけど、愛とはただ単に相手の事がどれくらい好きかというものではないでしょうか? 色々意見が飛び交ってますけど、私はこれが一番じっくりきます。」

「まあ、確かにそうですね。・・・ああ、成程。だからヤンデレなもの生まれるのですか。愛が重いと言っちゃつですね。僕はその気持ちがよく分かりませんが。自分の事それくらい好いてくれていると言っのなら、むしろ嬉しくありません?」

「それも様々な意見がありますが・・・まあ、死んだら元も子も無いと言っちゃつでは?」

「そうですね・・・むしろ、殺そうという考えに至らせた相手も悪いと僕は思います。」

「・・・まあ、あれは少々厄介なデレであることに変わりはありません。」

「それは同意します。」

さて、雑談もそこそこ。目的地に着きました。

「では、付いてきて下さい。」

「はいはい。」

七実が付いていきます。迷わず特定の場所まで猛進する辺り流石だと思います。

「買い物の詳細は割愛です。理由？一応これ、R-15が限度ですから。ね？」

「良い買い物をしました。」

「えー、何々？ 銀髪美少女、クーデレ、ですか？あー、そう言えば秘蔵の品にもこうというのが多かった気がします。」

「よくないですか？ クール。」

「思慮深い人は好きですよ。」

そういう意味ではクールな人は好きですね。ユーとか、ユーとか。あれ？ クールなのってユーしかないのでしょうか？ セラはちよっと違うような気がしますし、七実は・・・うん、ノーコメント。

「失礼な事を考えられた気がします。」

「気のせいでしょう。」

「嘘です。」

「あ、七実、見てください、排気ガスです。」

「話の逸らし方が嘗て無いほど雑なうえに、そんなもの見てどうするのですか。」

「地球環境について語り合いますか？」

「どのような？」

「僕はつくづく思っているのですよ。七実、質問なのですが、何故夏場にクーラーを付けてはいけないのですか？」

「南極の氷が溶けるからでは？」

「あれ？ おかしいですね？」

「何がです？」

「塵も積もれば山となると言いますが、実際どのくらい気温は上がるのは何度くらいなのでしょう？ 南極の最低気温はマイナス89.2度ですよ？ そして、水が解け始めるのは0度超えた辺りの筈でしたがはて？ そこまで気温が上がるものなのでしょうか？ 赤道付近でもそこまで気温は高くなかったはずですから、南極の氷を溶かしたかったら少なくとも90度は必要なはずですよ。そこまです赤道付近の気温は高いでしょうか？」

あ、ただの戯言なので気にしないでください。あくまで話を逸らすために言ってますから。

「・・・そう考えると確かに。では、来年はもっとガンガンにクーラー付けますか？」

「止めておきましょう。ぶっちゃけ、日本が沈んでも僕たちは生き残れますけど、さすがに紫外線は無理です。皮膚癌に余裕でなりま

すよ?」

何このずれた会話。

「まあ、土地が沈む云々よりも、私たちにとってはそちらの方がやっかいですね。今度二人でオリジナルの術みたいなのを考えてみます?」

「いいですけど、どんな?」

「どんなのですか・・・、そうですね、光を屈折させてみたり、幻影を作ってみたりとしてみます? あ、ですが、私達お互いに魔力とか持っていないませんでしたね。霊力とか気とかありませんし。」

まあ、この世界は基本魔力ですね。というか、そろそろ七実には明かしておいた方が良いでしょう。別段、七実には隠す必要もありませんし。え? セラとユーですか? 今は教えませんよ。時が来たら教えます。今教えてしまったら、僕の計画に支障が出てしまいますから。・・・まあ、なににせよ、クリスには復活して貰わなければ、すべておじゃんですけど。

「・・・その事なんですけど、ちょっと話したい事があるので、公園に寄ってもらって良いですか?」

「? はい、いいですよ。」

と言っわけで急遽公園に移動。

「それで、話とは?」

「単刀直入に言います。実は僕、魔力あるんです。」

「・・・はい？」

さすがの七実もこれには驚いてくれましたよ。滅多に驚かない人ですからね、驚かせた時の達成感もまた良い感じですよ。

「あるんですよ、魔力。今まで黙っていて申し訳ありません。」

「何故黙っていたのか教えて貰ってもよろしいでしょうか？」

「・・・そこ、聞かれますか。まあ、単純な理由ですから別に良いんですけど」

「何、簡単な理由です。ユーにはばれないようにするためですよ。敵を騙すためにはまず味方からと言いますでしょうか。敵じゃありませんけど、それと同じです。情報が漏れるのを防いだ結果です。因みに、知っているのはクリスマスだけです。あ、今七実も知ったのでこれ二人目ですね。」

「なるほど、それで、何故私に教えたのですか？」

「理由は二つです。一つ目は七実が術を作りたいと言ったから、まあ、そろそろ教えても良いのではないかと考えた結果です。二つ目、ぶっちゃけ、今回のあの会話が無くても、明日には教える予定でした。それが少々早まっただけですが、何故教えるのかと言うと、僕には計画があり、七実はずっと僕の付いていくと言いましたよね？」

「ええ、言いましたよ。」

「だからです。僕の計画と言うのは」

「・・・それはまた、何と云うとんでん返し。」

「ええ、とんでん返しです。」

「でも、良いのですか？随分私だけ鼻屑にしていますが、セラさんとユーさんは？」

「・・・そこが、一番の悩みポイントで、実行を決定した今でもかなり心苦しいのですが。」

「・・・僕なりの理由、捉え様によつては言い訳にしか聞こえなくなってしまうのですが、たぶんなんですけどね、僕はこの計画を実行した場合、ちょっと面倒なこと になります。」

「・・・はい。」

「その時に、まあ、当然フケる訳ですが、僕の自惚れではない場合、確実にセラとユーは付いて来ると思っています。仮にフケないとしても、セラは僕と一緒にバトルでしょうね。」

「そうですね。私も、その場合は助力しますし。」

「で、そうなった場合・・・。」

「もう言わなくても理解しました。ですが、良いのですか？それ、臆だけがと言いませんが、一番心身ともにダメージが大きいのは臆ですよ？」

・・・ハア、七実を僕をなんだと思っているのでしょうか？

「七実、僕を誰だと思っけていますか？」

「え？」

「『死神』ですよ？ 汚れ役など、とうの昔に慣れ切っています。」

と言つわけです。家に帰つたのは0時過ぎなので、翌日と言つ言
いはおかしいのですが、まあ翌日。

朝から魔力の大移動を感じます。気のせいでしょうか？ いや、で
すがこれは・・・。

「臃。」

・・・ああ、やっぱり。

「状況は把握しました。誰に魔力が移つたのですか？」

「ハルナに。」

・・・うわあ、よりもよつてハルナに、あのハルナにですか・・・
。いえ、ハルナが嫌いなわけではありませんよ？ むしろ、結構好
きな方なのですが（ライクです）、この状況では最悪と言わざるを
得ませんね。ええ、最悪です。

「ハア、面倒なことになりましたね。」

「ごめんなさい……。」

「何謝ってるんですか。ユーは悪くありませんよ。」

大方、ハルナの自爆でしょう。勘ですけど。

「気負わなくて良いんですよ。実際、ユーが何かしたわけではないのでしょうか？ 確かに、現状はユーの力によって色々問題が起きていますようですが、原因は『力』であって、ユー『自身』ではありませんよ。」

と、ユーの頭を軽くポンポンとしてから僕はハルナの自室に向かいます。

「……ありがとう。」

いえいえ。あ、ところで……。

「そう言えばなんですけど、何故ユーはハルナの魔力を奪ったとは聞こえが悪いですけど、その様なことになっていたのですか？」

「私は、普段は一番抑え込むのが厄介な感情、『楽しさ』を抑える訓練のために、バラエティーという番組を見ている。今も毎日見続けている。」

把握、オチが掴めました。

「ある時、私はあるコントで思いっきり笑ってしまった。」

「・・・ネクロマンサーでもネタにされましたか？」

「そう。さすがにネクロマンサーをネタにされたら笑わずには・・・
こほん。」

「で、笑った時にハルナの魔力をつて事ですか。成程、で、食事の時にゆっくり分け与えていたと言う事ですね？」

「そう。」

「何ともまあ、微笑ましいですねー。いや、実際の当事者たちからしてみれば洒落になつてませんけど。」

「まあ、兎に角、今は何か対策を練りましょう。今はたぶん熱を出しているのだと思いますが、最悪の場合、ハルナは声も感情も出せなくなると思います。そして、そうなる可能性は極めて、極悪なほど高いです。」

さて、ではハルナの部屋に・・・と思った矢先、僕の袖にわずかな力が加わりました。後ろを見てみると、ユーがキュツと僕の袖を掴んでいました。

「・・・ごめんなさい。私は昨日、眠る前に思ってしまった。神に願ってしまった。」

僕は無神論者です。・・・あ、いえ、死神の存在は認めますがそれ以外は否と断じております。全く関係ない話ですけど。

「私も臙と、笑いながら学園祭を楽しみたい・・・そう、願ってしまつた。」

たぶん今ユーは『自分なんかを楽しみたいなどと言う事を願ってはいけない』的な事を考えていることでしょう。その証拠に、今にも泣きそうな顔をしています。・・・ハア。

「それは魅力的ですね。楽しめます？ 実を言うと、僕も学園祭をかなり楽しみにしているんですよ？」

あ、それとついでに。

「今回の件は、ユーの願いとは恐らく関係ありません。本当に偶然と偶然が重なつただけです。たぶん原因はハルナの自爆でしょう。気にしなくて良いと思いますよ？」

さて、では改めてハルナの部屋に行きますか。予想以上に話が長引きました。

「失礼します。」

はてさて、容態は悪いでしょうか、一体どのくらい悪いのでしょうか？ 僕とユーが入室した時には既に全員集合していました。・・・あ、今は八時ではありませんよ？

「七実、ハルナの容態は・・・。」

「芳しくありません。」

やはりそうですか。まあ、そうですね。簡単に攻略出来たらユ

「もここまで苦労しなかったはずですし。」

「ハルナ、具合はどうですか？」

セラが優しい声でハルナに話しかけています。・・・ですが、その傍らにあるお盆に中のコンクリートは何なのでしょう？ 知らない方が身のためだと思ったのでスルーしますけど。

「・・・じよぶ。」

大丈夫と言いたいのでしょうか。まあ、絶対に大丈夫ではないと思います。

「くっ！ うあああっ！ ああ むぐっ。」

どれだけ激痛でも、今は絶対に声を出してはいけません。故に、心苦しですが曲絃系で割とキツ目に口を塞がせていただきました。

「臍、何をした？」

「口を塞ぎました。今は絶対に声を出してはいけません。それは歩も知っているでしょう？」

「・・・ああ。」

実感がないのでしょうかね、ユーの激痛の痛みがどれほどなのか知らなかったのでしょうか。まあ、ユーは何時も無表情なのでしょうが無いです。・・・ですが、これではあまりにもハルナが不憫ですね。・・・仕方がない。

「すみません。ちょっと無茶します。」

「……え？」「」

ハルナ以外キョトンとしていますね。さて、この技は本来、僕の状況……現在進行形で起こっている病魔の苦痛を相手に送りつけ、自分は楽になると言う何ともえげつない技ですが……その逆もできます。

苦しんでいるハルナに近付き、後頭部にそつとある特殊な糸を差し込みます。太さはミクロン単位ですので痛みはありません。この糸によつて、脳にある『痛い』と言う情報を、直接、全て、僕の方に流しこみます。これにより、あと数分すれば痛みは消えるでしょう。逆に言えば、あと数分はちょっとした余波が残りますが。因みに、情報とは簡単にいえますと、あれです。指を動かす際に、人間は微少な電気を使用しますがその事です。怪我したときの痛いと言う感情も脊髄を通して脳に伝わるので、その流れを完璧に僕に移したと思っただけければ結構です。

「つう……、これは、中々。」

「臍、何をしたのですか？」

「ちよつとした裏技です。」

詳細は省きます。無駄な心配を掛けさせたくありません。

「そうですね……、ハルナ、水、飲みますか？」

ハルナが上下に激しく首を動かします、が。

「セラ、ちょっと待って下さい。そのままではいけません。」

「え？ 何故ですか？」

「ユーの手には治療能力が備わっています。そして」

「その対象には、モノも入る。そして、治したものは自分が肩代わりすることになる。」

それが厄介なですよね……。

「モノに宿る思いが一番恐ろしいですよ。によって、ユー。その籠手、ハルナに貸して上げてくれませんか？ 大事なもののなのは重々理解しています。」

「構わない。むしろ、私から貸すつもりだった。」

それは良かった。では……、

「籠手だけでなく、今のユーの装備を全てハルナに貸すべきだと僕は思います。なので、ユーお願いします。」

「うん。」

さて、僕たちはと。

「歩、僕たちは出て、さっさと学校に行って準備しますよ。」

「え？ ハルナはどうするんだよ。」

「女性陣に任せます。それとも歩、今からハルナは着替える予定なのですが・・・覗くんですか？」

「さあ！今すぐ学校に行こう！..！」

ちよろいですね。

「相川。」

ほー、良い感じに『祭り』という雰囲気醸し出していますね。いいですね、いいですね、いいですね、いいですね。

「相川ーっ。」

じゃ、僕は教室に向かいますか。え？ 声がしていた？ 僕は蠅の羽音など聞こえませんでしたけど。

「あ・・・鑓くん・・・おはよう。」

「平松さん、おはようございます。あ、これ、絵です。」

絵を渡します。僕は書いていませんけど、まあそれは置いておきましよう。

「あ、ありがとう・・・じゃ、早速やるっか？」

「ですね。準備は早ければ早いほうがいいです。と言っわけで！皆さん、作業しますよー！..！」

「「「おー!!」「」」

うむ、団結力があります。素晴らしい。

歩と織戸、そして復活した我らが元気娘ハルナが教室に入ってきました。

「ハルナ、大丈夫ですか？」

と、質問してみたところハルナは

『当たり前だっ!』

だそうですね。うん、それでこそハルナです。

「そうですね。あ、先ほどはすみませんでした。ちょっと急でしたのであるような塞ぎ方になってしまい……。」

『気にすんな!』

「……ありがとうございます。」

作業に戻りますか。

「鑢くん……ハルナ先生、どうしたのかな……?」

「あれですか?まず、鎧はスワットと十字軍を間違えた結果です。声の方は、風邪で喉が痛いので話せないと言う事です。」

「そうなんだ……。」

腑に落ちないと言ったところでしょうか？まあ、別に落ちなくてもその様に思っているだけで十分です。

「ささ、早く作業しちやいましょう。」

その後、絵を貼る作業も難なく終わりました。一番好評だったのはハルナの描いた『こたつライオン』が好評でした。皆ほわーんとしています。……ああ、すみません、語弊がありました。僕と七実とお姉ちゃん、そして何時の間にもやら来ていたフレイ以外はほわーんとしていました。僕はひとまず置いておいて七実の場合、

「ギャルゲには到底及びませんね。」

だそうです。いや、そもそもジャンルが違う気がしないでもないですが、まあ、これぞ七実！ と言う感じなのでスルー。我らが姉御の場合、

「臙くん程じゃあ無いですよ。」

弟冥利に尽きます。フレイの場合、

「せ とくん程じゃない!!」

かなりずれた発言をしています。フレイの可愛いの基準がおかしいです。どうしましょう？ま、まあ、そんな感じで作業は終わったわけです。ええ、終わって次は本番なのですが……。

「納得できません。」

「ええ、不愉快です。」

僕と七実の一言。何があったか？ ふむ、では此処でクイズです。当たった人にはもれなく赤い人が家に押しかけます。嘘です。

- 1 仕事が無い。要するに役立たず。
- 2 何故か僕たちの役目がねずみ男とねずみ女。
- 3 女装させられている。七実は男装。

答えは2です。僕と七実の役目はねずみ男女。・・・この時、皆さんはゲゲゲ 鬼太郎をあれを想像したかもしれませんが、残念、違います。良く考えてください。このクラスには、オープンな変態とクローズな変態が居るのですよ？ つまり・・・。

「ハア・・・、何故、ねずみ男なのに普通にねずみ耳（ねずみの耳の略）と尻尾なのでしょう？ このミツキーマウ ですか全く・・・」

「その通りです。臙は兎も角として、何故私までこのようなコスプレ紛いの事をしなくてはいけないのでしょうか？ 心外です。」

僕は兎も角とはどういう事でしょう？

「七実、僕は兎も角とはどういう事でしょうか？ く・わ・し・く！ 意見を聞きたいですねえ？」

「こづいづのは臙の役目であって、私の役目ではないです。」

「ほう？・・・ちよっと校舎裏こいちゃ。」

「告白ですか？ 照れますね。」

「ちゃっわー!!」

どうしてこのタイミングでそういう捉え方が出来るのでしょうか？

と、その時、教室のドアが開きました。

「いらっしやませー!!」

「・・・やる気があるのかないのかわからないね。」

フレイが何か言った気がします。

「グツナイ！マイシスター!!」

「なんで貴様が居るんじゃああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

大絶叫。たぶん人生で一番の大絶叫でしょう。予想の斜め上どころかありとあらゆるものぶち抜いて大気圏投入しましたよ。

「なんでって、私の妹の晴れ舞台に長兄である私が見に行かない訳ではないですか!!」

「やかましいです！ だからってなんの連絡も無く突然現れんじやねえよ!!」

盛大なキャラ崩壊を起こしている気がします。んなもん関係ねえ!

「それと俺は妹じゃねえ！弟だ！！てめえの妹なら今はシフト入ってないからどつかでぶらぶらしてるぞ！」

「今何気なく弟と認めたね？ やつと、やつと認めたね！？」

うつ・・・。

「・・・ハア、まあ、良いですよ。で？来たのは愚兄だけですか？
むしろそうであってほしい。」

「え？ 普通にアスとトキ、それと人識だけど？」

「なにやつとんじゃあああああああ！！！」

キャラ崩壊、再来。

「ここ一般人も来るんだぞ！？ 血祭りになるわ！！一万歩譲ってアスさんは良いとして、他二名はアウトだろ！？ バカか？ バカなのか！！？」

いやもうバカだろう。

「バカとはひどい。せめて妹バカと言ってほしい。」

いや、あんたは唯の中学生マニアだ。

「・・・ちつ、まあ、しゃーねーな。少なくともトキさんには我慢して貰うしかねえけど・・・、問題は騒兄だ。あれは我慢の欠片も

しないだろうなあ……。どうしつかなあ……。」

さすがに学園祭で殺人事件は洒落にならんわなあ……。だからと言つて、半端者を見張りにつけてもバラバラ死体の完成を早めるだけだし、マジどうしつかなあ……。

「臍、まず崩れたそのキャラを治して下さい。」

「ああん？……。こほん、見苦しいところをお見せしました。すみません。」

……。問題の解決にはなっていないんですけど。

「……。んー、折角お姉ちゃんにも我慢して貰っているのに、ここで全ておじやんにする訳にも行きませんからね。よし、愚兄。ちゃんと騒兄を監督して下さい。ついでに愚兄にも言っておきますが、試験はしてはいけませんよ？純粋に学園祭を楽しんでください。」

「えー……。」

えーってあんた。しょうがない。

「……。お願い、お兄ちゃん？」

「任された!!」

秘技、上目遣いからの『お兄ちゃん』。ポイントは『お兄ちゃん』の部分高声高めに言う所です。語尾は疑問形にしましょう。大抵の女子中学生ならこの技で愚兄は落とせますただし！スカートの中にスッパツを履いてはいけません。

「では、お願いしますね？ お兄ちゃん？」

と言うわけで教室から愚兄が退場。この学校は今世界で最も危険な学校です。殺人鬼が合計で6人もいるのですから。しかもその内三人は一賊の三天王で、やり手の殺人鬼。一人は血統書付きの殺人鬼。一人は殺人スキルなら愚兄も超える殺人鬼。そして何気に人外も数に入れるなら愚神礼賛よりも多くの生命を殺している殺人鬼or殺人外鬼。というか僕。

・・・国取りにでも行きましようか？と、その時

「よお、おっ君。狂気しろ、あたしが来たぞ。」

・・・世界で最も凶悪な学校になりました。世界でも取りに行きましようか？

・・・あ、さっきから七実を置いてけぼりにしていますね。

第28話 カオス！世界でも狙いましょうか（後書き）

朧「あとがきコーナー。」

フレイ「よっ、待つてました！！」

朧「・・・なんかたくさん来ましたけど？ どうしましょう？」

フレイ「そこに潤ちゃんも来たね！ うん、今この学校に入ること自体が自殺行為だね！」

朧「凄まじいですね。学校に侵入するだけで死亡フラグが乱立しますよ。」

フレイ「刺青に出会って立ち、麦わら帽子に出会って立ちってところだね！」

朧「さらにその人物が少女なら音楽家にあつた時点でフラグです。勿論死亡の方で。」

フレイ「何この学園祭。」

朧「意味がわかりません。何故にこのような事態に陥っているのでしょうか？何が原因？」

フレイ「十中八九、朧だろうね。」

朧「マジ！？」

フレイ「愛されてるねー。」

隳「・・・家賊は兎も角、潤様はどうなのでしょう？」

フレイ「お気に入りじゃない？」

隳「光栄なことなのか、そうではないのか。」

フレイ「・・・がんばってね!!！」

隳「そんな励ましはいりません！・・・まあ、唯一の救いは常識さんがいないことでしょうか。」

フレイ「あの爆弾魔？ あー、確かに。学校全壊だね。」

隳「あ、ついでに補足しておきますが、僕がキャラブレイクしたあの場では一応、全員の脳内を弄って僕が普通の対応をしているように見せています。使った糸はハルナに使ったのとまったく同じ。あの糸は脳内を弄るのに適しています。」

フレイ「ちなみに、使用方法は？」

隳「僕の意味ですけど？ あ、後は頭に糸を刺す必要があります。ある意味、トキさんに似てるかもですね。」

フレイ「何？刺せばやりたい放題？」

隳「僕はこの技を死揮者と呼んでいます。ええ、やりたい放題です。殺すも殺さないも僕の意味です。滅多に使いませんが。」

フレイ「じゃあ、なんで今回使ったの？」

朧「技術の無駄遣い？」

フレイ「くだらな！？」

朧「……本当にどうしましょう？潤様ですよ、潤様。」

七実「……まあ、がんばってください。これが終わったら一杯やりましょう。」

朧「・・・胃が痛い。」

第29話 カオス！？いいえ、序の口の様です（前書き）

今回は他作者様の作品とクロスさせていただきました。

ケファイア様の『ネギま！ 転生しまし……え?!』から両希夷さん。

裂やん様の『世界の枠から外れた者』から神儀紫稀さん。

黒い狐と紅い眼様の『星は魔法の世界で何を見る』からジンさん。

の3人が学園祭に乱入？します。初めての試みですので、拙い所もあるかと思いますが、どうか温かい目をお願いします。

それと、キャラの口調、性格などが違ったりするかと思いますが、それも温かい目をお願いします。

第29話 カオス！？いいえ、序の口の様です

・・・ガクガクガクガクガク。

「じゅ、潤さま？ な、何故ここに？」

「なんだあ？ 客にそんな態度はないだろ？」

「し、失礼いたしました！！ ささ、こちらへどうぞ。」

・・・なんで？ どうしてこうなったのでしょうか？ ここはあれですか？ 自殺スポット？

「臆、どうしましょう？ 結構大変なことになってますよ？」

「・・・ちよつと探ってみましょうか？」

・・・いや、これ以上危険人物を発掘することは無いですね。正直言って、愚兄、騒兄、アスさん、トキさんそして潤さまでお腹いっぱいどころか胃がもたれてます。

「いえ、そうじゃなくて、あれあれ。」

ん？ あれ・・・？

.....。

ぼ、僕の目はおかしくなったのでしょうか？ 魔眼で見て、明らかに死線が薄いと言うか、もはやないと言っても過言じゃない人がいますけど？

「・・・あれ？ この気配どこかで・・・？」

認識阻害みたいなものを掛けているようですが、僕には体質がらそう言ったものが効きにくいですからね。認識阻害ってようはあれでしょう？ ばれないようにするための物であって、ばれてしまったら意味が無いのと同義でしょう？ それになんか変な仮面かぶりますよって・・・あれ

「夷さんじゃないですか？」

「お片付け出来ない子ですか？」

「誰がお片付け出来ない子だ!!！」

おおっ、本当に夷さんでしたよ。・・・は？

「・・・ちょっと待って下さい。は？ なんで？ どうしてここにいますか？」

「学園祭と聞いて。」

・・・づっ。

「胃が・・・、七実、胃薬持ってます・・・？」

「いえ。」

なんてことでしょう。

「あ、俺持ってるぞ。」

そう言っつて僕に胃薬を渡す夷さん。ありがたいですが、あなたが原因ですからね？

「ありがとうございます……。」

……あ、これ即効性がありますね。良く効きます。

「そうそう、俺以外にも異世界から来たやつ、居るぞ？」

「グハアー!!」

「吐血した!?!」

「嗚呼……この学校はどこに向かおうとしているのでしょうか？
異世界……異世界から来ちゃいましたよ。夷さんはまあ良いとして、他は？ 他は一体だれが来たのでしょうか？」

ぶつくさ言いながら考えことをする僕。傍から見てみたら気味が悪い事でしょう。

「おいおっ君。あたしを空気にするとは随分とまあ出世したもんだなあ？ うん？」

「申し訳ございません潤さまただいま当店の最高のお食事を用意させていただきます故何卒ご容赦して下さい。」

「それでいい。」

「……とりあえず、目先の危険から回避しておきましょうか。……
ハア~~~~~」

「では、とりあえず夷さんは適当に注文しててください。七実、夷さんを見ていてください。いいですか？　くれぐれも！！　自由に行動させてまいけませんよ？」

「あれ？　なんか俺かなり危険人物になってないか？」

「そんな事ありませんよ。ね？　七実。」

「はい。では暇つぶしとしてお片付けのお勉強でもしますか？」

「しねえよ！！」

うん、相変わらず夷さんを子供扱いする七実。年齢的にはあつちの方がかなり上なんですけどね。

さて、料理を作る序でに、どんなのが来ているのか確認といきましよう。ちよつと『能力』を使いますが、誰もいないから別に良いです。

手に何千本と魔力で形成した糸を　この糸はかなり少量の魔力です。感知されることは無いはず　学校中に張り巡らし、その中に一般人とは違うのが居ないかチェックします。因みにこの糸、別に物質化している訳ではないので触ったと言う感触は無いはず。

簡単に言えばそうですねえ……センサーみたいなものでしょうか？　ん、何々？　ゾンビ、魔装少女×2、吸血忍者×3。……あれ、3？　……サラス、友紀さん……後は……ああ、悪魔男爵で

すか。納得。で、

アンノウン×2。

いえ、これはセンサーがそうやって分析しただけであって、少なくとも一人は僕は知っています。まあ・・・あの人なら問題ないでしょう。進んで問題解決に乗り出してくれそうですし、後で会いに・・・いえ、今呼びますか。

『もしもし、聞こえますか？ 紫稀さん。』

『ん？ ああ、臍か。さつきからなんか変な糸が張ってあるなと思っていたが、臍がやったなら納得だな。で、なんだ？』

この糸が見えるのですか。さすがバグ。

『普通に対応していますが、僕としては今すぐにでも卒倒してしまいたいそうですよ・・・。何でいるのですか？』

『学園祭だからだがそれが何か？』

『・・・もういいですよ。それで、お願いなのですが、ちょっと僕の店に来てもらえませんか？』

『私がか？ 構わんが・・・また急にどうして？』

『積もる話がありまして・・・。』

ハア~~~~~。何で僕がこれほど疲れなければなら
ないのでしょうか？

『そ、そうか。じゃ、すぐ行くから。』

『あ、ついでにもう一人居る異世界人みたいな人も連れて来て下さい。』

『もう一人って・・・二人いると思うんだが？』

そう言われればそうですね。

『場所の方は僕がなんとかしますからお願いします。』

『ああ、分かった。』

そこで念話を切ります。・・・ふう、良識のある人って良いですよ。少なくともこの中では一番まともだと思います。・・・バグですけど。

あ、因みに紫稀さんとどういった経緯で知り合ったかと言いますと、まあ、単純に僕に贈り物をしてくれたという経緯です。体力増強剤役立ってます。・・・と、七実が言っていました。そう、何故か僕にくれた物なのに七実が使っているのですよね！。何でも

「オタクには体力が必要なんですよ。」

らしいです。同意しますが、そこまでやるかと。序でに、

「これで何回戦でもいけますよ？」

とかほざいていやがりました。何を考えているのでしょうか・・・
。と言うか、七実に弱点がなくなりましたけどこれいかに？

と、片手で携帯&糸、髪の毛でセンサー、そして空いていた手で潤さまの料理　今回に限りそう大したもののは作れません　を調理中です。というか、まあ、やきそばですけど。そう、当店の最高の料理はやきそばです。・・・いや、高校生に何求めているんですか。

「潤さま、出来ました。」

「ん。・・・やきそば？　まあ、別に構わないが。」

まあ、普段僕が潤さまにお出しするものは結構高級ですからね。意外だったでしょう。味には自信ありですけどね。

「お、うまいな。」

「それはどうも。では。」

そろそろ来る頃でしょうから、まあ、コーヒーでも用意しておきましよう。

「隴ー、来たぞー。」

「あ、紫稀さん。ちょうど良かったです。あそこに七実が居るのでそこに座って居てください。そちらの方も。」

「分かった。」

「悪いな。」

さてさて、コーヒーでも淹れましょうか。七実と僕はカフェオレ、

紫稀さんはお好み、アンノウンさんもやはりお好み。夷さんはドキツイブラックで。

「コーヒー持ってきまし・・・た・・・。」

「良いですか夷くん。お片付けもただ手当たり次第にやっていけば良いというものではありません。効率を考えて、よりテキパキやることが大切なのです。まずは少し片付いてない所から始め、徐々に徐々にレベルを上げて行くのです。分かりましたか？」

「ウン、ワカッター。」

・・・え？ 僕がちよつと目を離しているうちに何があったのですか？ 七実はどこから持ってきたのかホワイトボードにペンで何か書きながら夷さんに何か教えてますし、夷さんは幼児退行？ しています。えっと、何々？ 『上手なお部屋の片づけ方〈初級編〉』・・・上級編とかあるのでしょうか？

それに見てくださいいよ。紫稀さんもアンノウンさんも目をパチクリさせてますよ。僕もだと思えますけど。他のお客さんは何やら熱心にその演説を聞いて、『良い？ あのお姉ちゃんの言う事をしっかり聞いているのよ？』とか言ってますし、はつきり言いましょう。

どうしてこうなった!？

「七実・・・。」

「次に窓ふきですが。これはよく水ぶき『だけ』でやってしまう人がいます。それはそれでもいいのですが、より綺麗したいのならこ

れ！『すーぱーまどふきくん！』がお勧めです。これをちよつとちよつと雑巾に付けて窓を拭くだけでほら！ほーらほら！ね？どンドン汚れが落ちていくでしょう？」

「実演販売ですか！？学校で何やってるんですか！！」

「今ならこの『すーぱーまどふきくん！』と特性雑巾を付けて3980円、3980円ですよ！お求めの方は今すぐこの鑢七実、鑢七実まで！..!」

.....もう、いいや。

「紫稀さん紫稀さん。」

「.....はっ！な、なんだ？」

「呆気にとられているところ済みませんが、場所を移しましょう。まあ、移すと言っても少し距離を置くだけです。そちらのえつと.....」

「ジンだ。よろしくな。」

「あ、いえいえこちらこそ。鑢臙と言います。.....では、場所を移しましょうか。」

「そうだな。」

「おい、夷は良いのか？」

「夷さん？「助けってくれええええ!!」.....なんとかなるでしょ

う。」

「おい！ 無視か！？」

「ささ、行きましょ行きましょ。」

さすがに僕もあのおぼちゃんたちに突っ込む勇氣など持ち合わせてはいませんから。ああいう時のおぼちゃんの戦闘力は53万ですからね。

「お前ら恨むぞオオオオ！！！」

「……え、私もか？」

「どうして俺まで……。俺なんかしたか？ いきなりこの世界に来たと思ったら紫稀にここに連れて来られるし。良く状況が掴めないのだが？」

「まあ、その辺は追々。今は早く移動しましょう。」

なんか学校中のおばさまが集まっている気がしますが、なんなのでしょうね？ まあ、ぼろ儲けですけど。

結果から言いましょう。ぼろ儲けどころではありませんでした。これ、この売り上げだけで修学旅行いけるんじゃない？ ってぐらい売れました。恐るべし、七実。

「ふう、やっと全員集まりましたね。」

因みに潤さまはまだ居ますよ？ ハードボイルドにコーヒー飲んです。

「本当ですよ。此処まで来るのにどれだけの時間が」

「「「お前が言うな。」」」

「全く、ひどい目にあつたぞ……。」

「そうか？ 私からの視点で見ていた限りまんざらでもなさそうだったけどな。」

「楽しそうでしたねー。『ウン、ワッカー。』とか言っていました。」

「輝いていたぞ？」

「よし、お前らブツ飛ばす。」

「止めてください。その場合、『お片付け』はあなただけでお願いしますよ？」

「っ！？ ちっ、命拾いしたな。」

「（……完全に七実の手中に収まってるんですけど？）」

「（七実……何やったんだ？）」

「……あれ？俺浮いてね？」

……それはさておき。

「では、作品の都合的にも、お互いの親睦を深める為にも自己紹介しておきましょう。では、右から。」

「俺？俺は両希夷だ。一応零崎でもあるから。因みに、俺の年齢は3000前後な。」

……あれ？夷さんってそんなに歳行っていましたっけ？

「俺、臍があつた事のある夷よりも未来の夷だから。」

「うそん!？」

「本当だ。はい、次。」

「私か。私の名前は神儀紫稀。一応言っておくが、私も零崎だ。因みに年齢は3000ぐらい。」

……前から知っていましたけど、そっくりですね。

「そうだな。」

……読心術使われている事はスルーで行きましょう。

「」「賢明な判断だな。」「」

「潤さままで!？」

「あー、ま、次だな。」

「俺はジンだ。皆言ってるから一応言っておくと俺も零崎だ。年齢は・・・さあ？」

「さあ、つて。まあ、良いですよ。では次は僕と七実ですね。」

「分かりました。私の名前は鑢七実。唯のしがいないオタクです。」

「僕の名前は鑢隴。唯のしがいない病弱です。あ、あと滅多に零崎しない零崎です。」

故意じゃないよ？真面目にする機会が無いんだよ？

「」「嘘つけ！」「」

「」「おお！？」

な、なんなのでしょう？

「まず俺からだ！七実さん！あんたが唯のオタクって言うのはまずあり得ないでしょう！？」元日本最強のくせに！！」

「元ですから。」

「次は私だ！隴！お前は大切なことをなんで序でみたいに言うんだよ！？」

「序ですし。」

「最後に俺だ！　まとめて言うよ……規格外のくせになんで普通みたいに言っただよー！！」

「「それ、お互い様。」」

というか、

「そもそも、規格外と当てはめるならジンさんはどうか知りませんが、少なくとも夷さんと紫稀さんの方が圧倒的にバグってますよ？」

「「うぐっ。」」

だって……ねえ？　創造とかもう普通にバグでしょう？　考えても見てください、リスクありなしは問わず、自分の好きなもの創れるんですよ？　バグ以外の何物でもありません。エクスカリバー！　とか出来るではありませんか。

「……そんなこと言ったら、一億個の病魔に平然と耐えてるお前も俺から見たら十分バグだけどな。」

「なんとっ！？」

「ナイスだジンー！！」

そ、そんな……僕も、バグ？

「……ハア、まあ誰がバグだろが無かるうが良いですよ。ぶっちゃけ、此処にいる人たちだけで世界取れそうですし。」

「まあ、な。」

「確かに。」

「その通りだ。」

平然と答える辺りその強さが窺えます。

「さて、自己紹介も終わりましたし、早速本題に入ります。」

「私達が何故来たか・・・だろ？」

「そうですね。で、なんで？」

「「学園祭と聞いて。」

「さあ？」

若干一名おかしなのがいますが要するに・・・

「純粹に楽しみに来たのですか？」

「ああ。」

「楽しそうじゃないか。」

「俺のは無視か!？」

無視です。これ以上厄介事を持ってこないでください。

「なら、見て回りますか？ 僕丁度シフトから外れますし。」

見張りも兼ねて。ああ、紫稀さんは必要ないです。あと、ジンさんも。夷さんの見張りを兼ねてです。

「危険人物認定か!？」

「喧しいです。いきなり現れて僕だけならまだしも、騒兄と潤さまにまで喧嘩フツ掛けた人なんて危険人物以外の何者でもありません。」

その後の処理したの僕たちですよ？

「夷・・・そりゃねえわ。常識考えろよ常識。」

「しかもそれ被害が凄まじそうだな?・・・後処理したのか？」

「いやあ・・・ハハハ！ すまん！ なーんもしてねえわ。」

「・・・もう良いですよ。済んだことですし。皆さん分かりましたか？ これが『お片付け出来ない子』の由来です。」

「理解した。」

「把握。」

「せんでいいわ!？」

「さ、行きましょ。今回は皆さんテンションが高いですからね。珍

しい出し物があるかもですよ。」

と言っわけで野郎（見た目完全に美少女）4人と美少女1人の計5人で屋台めぐりです。

「・・・俺のホームは？」

あるはずもない。

そんなこんなでやってきました屋台立ち並ぶ中庭にやってきました。途中でナンパとかされましたけど完全に無視してやってきました。

「おーおー、賑わってんなー。」

「服装が着物で良かったな、私達。」

「一人除いてですけどね。」

一人とはジンさんの事です。

「お？ なんだあれ。」

夷さんが指す方向を見てみると・・・

『ボケ倒しホットドック』

なるものがありました。

「よし、臙、行け！」

「何で僕なんですか!？」

「私も同意だ。ツッコミと言えば臙だろう。な? 七実。」

「はい。この世界ではツッコミ=臙です。」

「そこまで!？」

「行ってこい、キングオブツッコミの称号を持ちし者よ!」

「持ってませんよ! あー、はいはい。行けばいいんでしょう行けば!」

「しかも何ですか『ツッコミしないと売れません』って。ただ単に自分らがツッコミ下手なだけでしょう。」

「いらっしやいませ。ポテトはいかがですか?」

メニューを見るとカット三千円、パーマ五千円、シャンプー十八万円と書かれていました。ああー、ツッコンでほしいですね、これ。だがしかし!

「じゃあお願いします。あ、あちらに連れがあるのでLサイズを二個で。」

呆気にとられる漫才研究部の方々。後ろで何やら必死にこらえてい

るバグ共。

まさか、素でポテトを頼まれるとは思つまい。

「い、いえ、此処はホットドッグの」

「メニューにはホットドッグと書かれていませんか？」

「」「」「」「」

「み、店に書いてあるではありませんか！！」

「いやあ、ポテトだったり、カットだったり、ホットドッグだったりもう意味が分からないんですよ。ツツコンで貰いたいのならまず分かりやすいボケを、そして、何処にツツコンで貰いたいのか的確に絞ることですね。例えば・・・七実、ちょっとボケてください。」

「嫌です。」

「即決で断ってきた!？」

「大体ボケと言うものは一定の条件がそろって初めて出来るのですよ？ そんないきなり出来るはずありません。」

「た、確かに・・・。」

「と、い、う、か、な、ん、な、の、で、す、か、こ、の、店、は、カ、ツ、ト、パ、ー、マ、ま、で、な、ら、理、解、で、き、ま、す、が、シ、ャ、ン、プ、ー、が、十、八、万、円、と、言、う、の、は、お、か、し、い、で、し、よ、う、あ、れ、で、す、か、合、法、的、な、も、の、で、は、な、い、の、で、す、か、？ よ、ろ、し、い、な、ら、ば、通、報、で、す、!」

「」「止めてください!?!」「」

「いいですか? これがポケです。相手がツツコンでもらいたいと思っている所に目を当てながら外的外れな事を発言します。こうして初めてツツコミと言うものが成立するのです。ポケて、ツツコム。簡単なようで実は難しいのですが、これが基本です。」

・・・あれ? なんの話でしたっけ?

「臃、もう良いですか?。」

「ええ、良いですよ。」

・・・さて

「ところで、ポテトはまだですか?。」

「」「ここはホットドッグですけど!?!?」「」

・・・ありゃ?

「と言うわけでホットドッグです。」

「なにがと言うわけでだよ!?!?。」

「ツツコミどころかむしろツツコムをさせてどっつするんだ!?!?。」

「天然ポケか!?!? 新手の嫌がらせか何かか!?!?。」

え、そんなこと言われても……。

「「ねえ？」」

「「「ねえ？ じゃねえよー！」」」

おおっ！？ 総ツッコミですよ。僕が一体何をしたと言っただけじゃあ？

「いやいや、ツッコメツッコメ言いますけど実際難しいんですよ？
ねえ？ 七実……七実？」

「臃……ホツトドグが……私のホツトドグが……。」

そこには俯いてちょっと落ち込んでいる七実とその視線の先には踏まれ無残な姿になったホツトドグがありました。

「えーつと……？」

「……からし入りでした。」

「そっち！？ てか、からし無理だったのですか！？」

「新しい味でした。」

「あなた結構こっちに来て長いですよねえ！！？」

「食事は全て臃の和食でしたから、からしなどありません。」

「しまった！ 食事の種類を固定させ過ぎました！！」

「「「いやもう十分だよ！！ 十分漫才師でやっていけるよ！！」」」

「

「「んなわけないでしょう！！」」

「無駄に息びったりだなオイ！！」

そんな漫才師なんてやっていける訳ないでしょう。全く何を言っているのでしょうかこの人たちは。

「ハア、さっさと次行きますよ。」

「・・・なあ、紫稀。俺怒って良いかな？」

「奇遇だな。私もちょっと、な。」

「零崎でも始めるか？」

「早く行かないと僕のシフトが入るのですが？」

「・・・しゃないな。早く行くか。」

「だな。」

「行くか。」

ということとで屋台を総なめ・・・豪華賞品は主に夷さん、豪華ゲーム類は七実が独占したと言っわけ、することがなくなったので体育館に行くことになりました。ライブやってるんですよ。

「・・・ほああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」「」

「・・・此処、来たいって言った人誰ですか？」

「・・・俺だ。」

夷さんでした。では・・・

「よし、夷さん以外は違う所行きましょう。」

「・・・そうだな（そうですね）」「」

「待った！ 待ってくれ！！ 俺を一人にしないでくれ頼むから！」

「良いじゃないですか、たぶんアイドルとか来ますよ？」

「違う！ なんか・・・こう、貞操の危機が・・・。」

その瞬間、恐らく僕たち全員はある共通の事を考えたでしょう。

ハイテンション+夜=YOU！ ヤッチャいなYO！！

やけに周りの目線が怖いです。こう・・・体に纏わりつくと言いますか、舐めまわされるようにと言いますか・・・。

「」「」「」「逃げよう。」「」「」「」

逃亡です。この学校は変態に高確率でエンカウントするようです。

今度は部室棟です。まあ、色々あるでしょう。知り合いも居ると言えは居ますし。

「あ？ お前は随分前の仮面野郎じゃねーか。」

最悪に出会ってしまいましたよ。・・・どうしましょ！？

「まあ、今は割とどうでもいいけどな。うるさい弟もいることだし。」

「およ？ 予想外にも引いてくれるようですよ？」

「終わったら、やるっぜ。」

「何をですか！？」

「おっしー」

おう！ じゃねえし！！ って、気が付いたらもういない。何やってるんでしょあの兄は。

「まあ、いいです。行きましようか。」

で、やってきたのはバスケット部の部室。

「あれ？ 鑪じゃん。来たの？」

「来ましたよ。暇つぶしです。あ、アンダーソン君、お久です。」

「え？ 確か昨日も会った気がするけど？」

「そういう話ではありません。・・・フリースローですか。」

ふむ、入りそうもないのがインド象とハワイ旅行と冷蔵庫。入りそうなのがジュースとポテチと・・・ぎりぎりですが、ギャルゲの詰め合わせ。ええ、こんなことすれば・・・。

「・・・・・・・・(ゴゴゴゴゴッ！！)」

明らかにやる気満々の人が出てくるではありませんか。

「ま、やってみましようか。皆さん何狙います？ 僕はジュース。」

「インド象。」

「無難に冷蔵庫。」

「ハワイ。」

「断固ギヤルゲ。」

一人だけやけに絶対取ると言う確固たる意志を持った人がいますけど・・・ま、いいですよ。

「じゃあ1000円ですね。どうぞ。」

「まいど。でもさ、残念だけどあの3人が狙ってるのは絶対に手に入らないよ?」

「それは本人がやってから分かることです。まあ、僕は無難にジュースですけど。あ、それぞれそれ。」

一人200円でフリースロー三回。で、僕はほぼ同時に手前の同じ穴にボールを投げ込み、全て入りました。

「・・・え?」

「ジュース、コーヒーで。」

「え、あ、うん。どうぞ・・・。」

放心しているようですね。まだするのは早いと思いますけど。

「んじゃ、次は俺だな。」

夷さんです。さて、どうやって入れるのでしょうか?」

「ほっ!」

超高速で飛んで行く手作りボール。そのボールは、そのサイズに合わない穴を見事にブチ破り、下のボールが出でてくる穴から「シュー」と音が鳴っているボールが出てきました。

「嘘……。」

「インド象だな。」

恐らく、ジャイロ回転でしょう。魔力は感じなかったですし、妙な力も感じませんでした。ジャイロ回転によって、摩擦で穴を広げ、それで入ったのでしょうか。……さすがバグ。

「じゃ、次は私だな。……フンツッ!」

今度は紫稀さんです。紫稀さんはやけに良いフォームで構え、手が消える速度でボールを投げました。恐ろしいですね。気が付いたら穴が広がっていましたよ。

「なんで……。」

「次は俺か。」

さらにジンさん。ボールを三つ一気に持って、それを……

「ほっ、ほっ、と!」

1 投目、穴にぶつかる。2 投目、穴にぶつかったボールにぶつかる。
3 投目、一投目のボールを押し込んだ!

「ハワイか。誰か誘って行くか？」

・・・さて。

「三原さん。これ、用意出来ますか？」

「む、無理！ 無理です！ すみませんでしたー！ー！ー！ー！ー！ー！
「！！」

「ま、そうですね。はい、コピー。」

「お、悪いな。」

「ありがとうございます。」

「ブラックか・・・。」

まあ、分かってましたよ、うん。

・・・あ、そう言えば。

「七実はどうしました？」

「そう言えば・・・。」

と、探してみると部屋の隅の方でいじけている七実を発見しました。

「どうしました？」

「・・・ああ、いえ。ただ、何故、私にはコントロールが無いのか
と・・・。」

・・・入らなかったのですか。珍しいこともあるものです。

「・・・三原さん、もう一回良いですか？」

「インド象は無理よ？」

「知ってますよ。さっきのは冗談です。僕・・・というか、さっきからそこで落ち込んでいる人の目的はそのギャルゲです。」

「ああ、あれ？ あれなら問題ないわね。はい、三回。」

「確かに・・・ほっ。」

スポーツと入って行きました。まあ、伊達に苦無投げてませんからね。

「お、やっぱり鑢はすごいな。あれを入れるなんて。やっぱりバスケット部に入らないか？」

「遠慮します。それよりも。」

「ああ、そうだったね。どうぞ。」

ギャルゲは・・・10本？ 何故にこんなに多いのでしょうか？ まあ、良いですけど。

「はい、どうぞ。」

「臆大好きです!!」

そう言って飛び付いて来る七実。・・・って、ええ!?

「マソップ!？」

鳩尾に一撃入りました。と言うか七実の頭ですけど。まあ、僕と七実はそのくりさんですけど、さすがにそこは男女の差で僕の方が背が高いのですよ。具体的には七実の頭が鳩尾にくる感じに。ダメージ? かなりのもんですよ?

「」「にやにや。」「」

「ゴホッ、ゴホッ! こ、声に出さなくて良いですよ・・・。七実も顔をすりすりしなくて良いです。皆が見てますよ?」

「むしろ見せつけましょう。」

即答しやがりましたよこの人。

「・・・ねえ、鑓たちってそういう関係?」

「」「そういう関係です。」「」

「うわ、息びつたり・・・。」

さて、まあ、七実はひっ付かせたままで良いでしょう。言ってもたぶん離れないでしょうし。・・・ひっ付きながらだとお互い歩きにくいのはこの際気にしない方面で行きましょう。

「じゃ、次行ってみましょう。」

「陸上部？ 臃こんなところに縁なんてあったのか？ むしろお前には無縁だろ、む・え・ん！！」

「夷さん、今度じっくり話し合いましょう。主にお互いに対する認識について。」

「危険人物と玩具だろ？」

「分かっているではありませんか。付けたしするなら『お片付け出来ない子供』です。」

「それもつよくない！！？」

「子供ですよ。」

「子供だな。」

「断固子供。」

「う、うー……。」

あ、着きましたね。では……

「……失礼しました。」

僕は何も見なかった。故に何も知らず、ただ喫茶の仕事に戻るだけです。

「な、何があつたんだ？」

「見てみれば分かります。ハア、胃が、胃が痛いです……。」

「大丈夫ですか？」

ああ、今は珍しく七実が僕の癒しです。はふう~~~~~。

「な、え、臃？」

「は~~~~、うん、ちよつとの間こつしてますね。」

ギョツとしますよ、ギョ~~~~ツと。今この癒しを離してなるものですか!! 僕の胃の安泰のためにも!!

「は、はあ、良いですけど……。」

はふう~~~~~。

「……今、冬だよな？」

「ふにゃ~~~~~。」

「……っ。」

「……え、何この状況? ある意味あつちよりもカオスだぞ? 眼福だが。」

「まあ、臃にも限界が来たと言う事だな。眼福だが。」

「苦労していそうだからな。眼福だが。」

「……よし、そろそろ良いでしょう。」

「ありがとうございます。では、出陣します。」

「いえ、頑張ってください。」

「……あれ？ ちょっと残念そうですね。何故でしょうとは昔みたいに言いませんけど。」

「……で、見ましたか？ 皆さんも。」

「カオスと言うか、珍妙だった。」

「まあ、学園祭だから良いのか？」

「むしろ学園祭だから問題があると思うのだが？」

まあ、それもあるのですが、僕が胃を痛める原因となったのはその後ろにある物だったりするのですよね。主に、製作費はどこから出したのかと言う方面で。

「いざ！！」

突入！！

そこは確かに陸上部の部室でしたが、そこにいる人物は異質。何故か水着を着用した友紀さんと、何故かバニーガール姿のユー……。何故に？

「・・・えっと、なんですかこれ。どういう状況？」

「その前に、何故七実は臙に抱き付いている？」

「理由はありません。」

「あ、ユーじゃないか。久しぶりだな。」

「・・・夷？」

覚えていたようですよ。

「そつだ。いやー、変わらないな！。さすが冥界人つて所か？ ま！ 俺も3000年生きてるが特にこれと言って変わらないんだけどな！」

「なら私もそつだな。3000年間何も変わってないな。・・・そつ言えば、臙はどうなんだ？」

「僕？ 僕は普通に16です。・・・誰が何と言おうと、16ですよ？」

前世合わせた場合は24ぐらいでしょうが。

「まあ、んなことはどうでもよくてですね、ユーは此処で何やっているのですか？」

「私はCDを売っている。」

「バニーで？」

「バニーで。・・・これが、私なりの楽しみ方。」

そうですか、なら、僕が何か言えることではありませんね。

「そうですか、では楽しんで「たのもー！！！」・・・何事？」

まあ、このテンションでしゃべる人と言えば僕は一人しか知りませんけど。

「やあやあみんな揃ってるね！ 知ってる人から知らない人まで勢ぞろいだよ！！！」

「ああ、こちらは紫稀さんとジンさんです。異世界から来たみたいですよ。因みに、僕と紫稀さんは元々知り合いですから。」

「私が紫稀だ。よろしくな。」

「ジンだ。」

「うんうん！ よろしくね！！ よくもまあこんなにタイミングと
言うか都合が良い感じになってるね！！！」

・・・話が全く分かりません。

「すみません、なんの話でしょう？」

「臙たちには、喫茶が終わったら女装コスプレ大会に出て貰うよ！
！もちろん、その三人も！」

「「「「はあ!?!」「」「」

「どうやら、カオスの本番は此処からの様ですよ。」

「「「「というか序の口だね!?!」「」

「「地の文に突っ込まないでください!?!」「」

第29話 カオス！？いいえ、序の口の様です（後書き）

フレイ「今回は前編みたいなものだからあとがきコーナーはお休み
！！」

作者「と言うわけで謝辞をば。まず、このような作品とクロスすることを許可してもらえたケフィア様、裂やん様、黒い狐と紅い眼様、ありがとうございます！

それぞれのキャラの魅力が出せていないかもしれませんが、楽しんでいただいたなら幸いです。これは前編で、後編はもっとカオスになる予定ですが、どうか温かい眼で見守ってください。」

第30話 カオス!!!! . . . 胃があ

フレイからの爆弾発言の後、僕は喫茶のシフトが入ったので今は店で . . . 『狼男』やっています。ですが、ですがね？

「何故、耳と尻尾オンリーなんですか!!!!」

「臆、五月蠅いですよ。」

「っ、しかし七実!!!!」

「私も同じ気分なのでから、少し黙りましょう。ね？」

. . . 奴さん、かなりキレてますよ . . . 。まあ、そうでしょうね。七実の今の格好は何と言いますか . . . えー . . . 。

「猫娘？」

「五月蠅い。黙って下さい。」

怒られました。まあ、猫娘なんですよ。ネコミミカチューシャに猫の尻尾、さらにはメイド服。誰がこんなもん用意しやがった。あいつか？ 織戸か？ よろしい、ならば零ざ

「「「ちよつとまてい!!!!」」」

まさかの三人同時に地の文にツツコンで来ました。そういうのはフレイだけで十分なんですけど。あ、因みに三人とはバグ、ズとジンさんの事です。

「俺（私）たち扱いわる!?!」

「あ、間違えました。バグと紫稀さんとジンさんです。」

「俺だけ名前すら登場してないぞ!?!?」

「前回の続きですから問題ないでしょう。」

「あるわ!?!? 色々あるわ!?!」

五月蠅いですね……。さっきまで僕の姿を見ては爆笑を繰り返していた人にツツコミされたくないです。

「あれ? 何か怒っている?」

「虫の居所が極悪ですね。ね、七実?」

「腸が煮え繰り返りそうです。」

「「「憤怒!?!」」」

「「「温いわ!?!」」」

「これ以上の怒りの表現を俺は知らないぞ!?! 紫稀!?! なんとかしてくれ!?!」

「む、無理だ！ 私も表現しようがない！！ ジン！！」

「俺に回してくるな！！」

あー、苛々します。たくつ、大体誰がこんな服装用意しやがったんだよ。普通に河童とか天狗とかで良いじゃねえかよ、ケツ。

「ありますよ、表現の仕方。」

「」「」「」

古い。

「では七実。一斉に行きますよ。」

「はい、せーの……。」

「俺の怒りがああ、有おおおおお天んんんん！！！！！！！！」

「結局ネタかよ！！」

まあ、なんやかんや言っても仕事はするのですが。

「いらっしやませー！！ 二名様でよろしいですか？」

「あ、う、うん。」

「では、こちらになります。・・・では、こちらがメニューになりますので、御注文がお決まり次第スタッフにお申し付けください。では、ごゆっくり。」

「は、はい・・・。」

とまあ、こんな感じです。何故か僕が担当したお客は惚けた様な顔をしています。無視です。止めてほしいです。男女関係なくそういう顔になるのですからたまったものではありません。因みに七実は・・・

「二名？」

「は、はい。」

「ごうち。」

「・・・。」

「メニュー。」

終わり。接客？ 何それおいしいの？ を地で行ってますね。無口キャラで行って・・・いや、普通に機嫌が悪いのですね。顔が無表情なのは良いですが、明らかに「私、怒ってます。」という雰囲気滲み出ております。接客業としてはどうなのでしょう？ ダメですね。ダメなのでしょうが、僕は今の七実に口出しする度胸など微塵もありません。あれ注意出来たら大したもんですよ。うっすら羅刹が背後に鎮座しておられますからね？

「すみませーん。」

「はい！ ただいま！！」

そのおかげで僕の仕事が倍増です。増し増しです。まあ、考えてみればそうですよ。営業スマイルとはいえ、ニコニコしながら接客している僕と、背後に羅刹が君臨しておられる七実。どっちを選びますか？ たぶん、生物的な生存本能から僕の方を選ぶでしょう。と言うわけで、僕の仕事は現在進行形で増えているのですよ。・・・さつきから夷さんとジンさんがゲラゲラ笑っていますね。後でしめましょう。紫稀さんは・・・あ、合掌しています。死ぬんですか僕。と言うか七実、僕は見逃しませんでしたよ。今、ほくそ笑みましたね？ 他の方々は気付かなかったかもしれないませんが僕は気付きましたよ！！ あれですか、「計画通り・・・！」と言ったところですか？ クソ！ 嵌められた！！

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「は、はい、えった、焼きそば2つと紅茶とコーヒーを。」

「は、ご注文を確認いたします。焼きそば2つと紅茶一つ、コーヒ一つ。以上でよろしいですか？」

「は、はい！」

「ではごゆっくり。」

・・・後ろでほわーんとした空気を感じます。ハア、困ったものです。特にもう脳の血管が千切れて脳内出血でマジで死ぬ5秒前と言っくらいゲラゲラ笑っている。チッ、客じゃなかったら今すぐマリアナ海溝に沈めてやるところです。大丈夫、死にはしないでしょ。

ちょっと水圧で体が大変なことになるだけです。僕の場合は余裕で死にますけど。一般ピーポーですから。

「おい、おっ君。」

潤さまからお呼びがかかりました。いや、何時まで此処に居座る気ですか。他にすることないんですか。

「まあ、来た理由がこの喫茶だからな。他には興味ないなあ。」

「ナチュラルに心を読まないでくださいよ。」

「注文だ。このクリームシチューとコーヒー。」

「かしこまりました。今すぐに。」

・・・ハア、焼きそば2つとクリームシチュー。焼きそばはストックがあるので良いのですが、クリームシチューは一からです。・・・潤さまも厄介な物を頼んだものです。

「聞こえてるぞ。」

「申し訳ございません!!」

さーて！ 張り切って作っちゃいましょうか!!

調理中。

「お持ちしました。」

「御苦労。」

「どこの貴族ですか。」

「聞こえてるぞ。」

「じゅっくりー!!」

もうやだ。赤怖い。

・・・ん？　なんかウィディングドレス着た変態が焼きそば焼いているのですが、僕が調理している間に何が起こったのでしょうか？　警察を呼ぶべきでしょうか？　名前は・・・あ、変態ですか。

「あの、変態。ちょっと良いですか？」

「俺の名前は変態じゃねーよー!!」

「僕はどうするべきでしょうか？　裁判はどちらを起こすべきなのでしょう？　刑事裁判か、民事裁判か。個人的には刑事が良いです。」

「俺ってそんなに有害!?!」

「かなり・・・うえ、すみません、気分が悪くなったのでこれで失礼します、変態。」

「俺の扱いわつる!?!」

あ、因みに焼きそばは既にお持ちしてありますのでご安心を。仕事は抜かりなくやりますよ。さて、今の夷さん達の御様子はと・・・

「もっと『コレ』持ってこんかい!!」

「ちよ、夷。さすがに不味いぞ。」

「ああ、臍がブチギレる前に止めとけて。」

「大丈夫だって! あいつは今、潤の相手でいっぱいいっぱいのだ!!」

「・・・この匂い、まさか酒? 鮭じゃなくて酒? ・・・ふむ、百聞は一見に如かず。」

「・・・(へ口)」

「あ・・・臍。」

「へ?」

「終わったな・・・。」

上から僕、紫稀さん、夷さん、ジンさんです。まあ、反応を見て分かりますよね。と言うか、やはりこれ・・・。

「夷さん・・・。」

「な、なんだ?」

「これ、お酒ですよ?」

「さ、さあ? なんのことがボクニハサツパリワカラナイヨ。」

「ああ、私の予想は当たっていた。臃は怒らせてはいけない類の人間だな。見る、夷が再生しては刻まれてを繰り返しているぞ。」

「そうだな。・・・臃を中々にえぐいと言っか、容赦ないな。未恐ろしい。」

さて、お仕事しましよ。と、思った矢先・・・、何故か教室が色めき立ちました。

「何事？」

「どうやら、セラさんが御来店したようですよ。」

・・・未だにその背後に君臨なさっている羅刹様。いや、いい加減仕舞いましょうよ。

「そういう臃も背後に不動明王がいますよ？　それで百式でもやる気ですか？」

「あれ？　そうですか？　フフ、どうやら仕舞い忘れていたようです。いえいえ、そんな事しませんよ、フフフフ・・・。」

「そうですか、なら良かった。フフフフ・・・。」

「フフフフフフフフ。」

「・・・怖いな。」

「ああ、怖い。顔が美少女だからなおさら怖い。というか、まだ怒

りが収まっていななんだな。」

会話し、二人して悪笑を浮べる。気味が悪い上にこの上なく怖い事でしょう。

「で、仕事する気になりましたか？」

「まさか。このままシフトが外れるまで行きますよ。働いてたまるものですか。」

二ト発言。いけません、七実が四六時中パソコンの目の前で何やらやっている姿がありありと脳内に浮かびあがります。僕は養う側ですか。まあ、別に良いですけど。え？ よくない？ 良いのですよ、やる時はしっかりやってくれれば僕は文句ないです。やる時にはしっかりやる人って良いですよね。

「いらっしやいませ、セラ。」

「臙、お疲れ様で」

ん？ セラが何やら僕の背後を見て固まっていますよ？ 顔もみるみる青くなっていきます。何かあったのでしょうか？

「お、臙・・・私は何か粗相をしましたか・・・？」

え？・・・ああ、成程。まだ僕の後ろに君臨なさっていましたか不動明王が。

「ああ、すみません。ちょっと色々あったのでまだだしっぱのままのようでした。すぐに仕舞いますね。」

ん、でもどうやってしまうのでしょうか？ 適当に精神を落ち着かせれば・・・あ、引っ込みました。

「それでは、改めていらっしやいませ、セラ。」

「お疲れ様です。ところで、色々と聞きたい事があるのですが・・・」

「ああ、あれ（夷さん）の事ですか？」

「それもありますし、あの二人の事、あの赤い方、隴の家賊、あとは・・・少々奇妙な方々を発見したのですが。」

「・・・奇妙な方々？ 思い当たる節があり過ぎて困りますね。」

「ではまず、あの二人は夷さんの同類とだけ思っていたら良いですよ。」

「なるほど、バグですか。」

「そうです。」

「私達までそういう認識なのか！？ いや、バグだとは認めているが初っ端からそれだと少々こちらも凹むぞ？」

「俺はこいつらほどバグじゃない！！・・・善だ。」

「と言うわけで、神儀紫稀さんとジンさんです。」

「私はセラフイムと申します。以後、お見知りおきを。」

「あ、ご丁寧にどうも。私は先ほども紹介されたように神儀紫稀だ。よろしく。」

「ジンだ。こちらこそよろしく。」

よし、互いの自己紹介が終わりましたね。

「では、次に赤い方・・・潤さまの事ですね。スルーでお願いします。愚兄たちも然り。」

「そうですか。分かりました。」

「それで・・・最後のなんですけど、奇妙なとは具体的にどのよう
に奇妙なのですか？」

「その・・・なんと言いますか。」

んん？ セラが言い淀むなど珍しい。それほどに奇妙ですか。

「露出の多い黒い服を着た矢鱈存在感のある女性を筆頭に、服の下
にジャージを着ている時代錯誤な男性、胸元を露出している男性、
普通かと思いきや、服の下に水着を着ている女性、何故か学ランを
着ている色々と終わってそうな男性と合計5人です。」

・・・んんん？ ちょっと待って下さい。おかしいですね。いや、
おかしいですよ。

「・・・それって、全員黒い服装ですか？」

「知り合いですか？」

知り合いと言うか……えっと。なんというか……

「七実……。」

「はい、特徴は一致していますね。」

……いやいやいやいや、ない！ それは無い！！

「臃……。」

夷さんが話しかけてきました。というか、もう復活したのですか。細かく刻んだのですが、流石と言わざるをえませんね。

「あり得ないなんてありえないんだぜ！！」

「どやかましいわ！？」

そんな縁起でもない事い

「ふむ、妖怪喫茶とはまた斬新だな、善吉。」

「そうだな。」

「ええ、確かに、メイド喫茶みたいにありきたりではなく、斬新ですな。」

「うん、怖いかとも思ったけど結構可愛いかも。」

『裸エプロンの妖怪はいるのかな?』

「…………アウト。」

「…………あれ? 臍?」

「胃があ…………。」

胃に今世紀最大のダメージ!!

「!? セラさん!! 胃薬持ってますか!?!」

「い、いえ、持ってません。」

「俺が持つてるぞ!!」

「なら早く上げてください!! この痛み方は尋常ではありませんせん!!」

うう、胃があ、胃がナイフで刺されるように痛い…………。

「ん? 貴様、どうしたのだ?」

「グハア!!」

「臍!! ちょ、あなたは今はこっちに来ないでください!!」

「え?」

「いいからちよつと離れてください!!」

「あ、ああ、分かった。」

なんとか胃が持ち直しました。今でも少しチクチクしますが、さつきよりもマシです。・・・出会って初めて夷さんに感謝したかもしれません。

ま、未だに『あの方々』を見ると胃がヤバいんですけどね!! もうね、爆発するんじゃないかってぐらい痛いんですよ!!

「七実い・・・シフトは・・・シフトはまだ外れませんか・・・？」

「辛そうな所大変言いにくいのですが・・・まだです。」

「・・・・・・・・・・そうですかあ。」

・・・この世界、何で箱庭まであるんですか。ねえ、何ですか。西尾様ワールドのキャラが皆いるのですか？ まさか、化物な語りの人たちまでいませんよね？ いないと信じています。

「店員、メニューが決まったのだが？」

「はい、分かりました。焼きそば5つですね。」

「いや、まだ何もいってね「焼きそば5つですね?」「・・・そうだ。」

もうちやつちやか済ませちゃいます。接客業がなんですか！！そんなことより、僕の胃の方が重要です。というか、色々限界なんですよ！！ 僕の問題とか胃とかストレスとか！！！！

「・・・臃、あの歳にしてそうとう苦労してるな。」

「ええ、心なしか、ちょっとやつれはじめています。セラさん、なんとかしてあげてください。」

「・・・そう言われましても。」

「・・・私、後で臃に何か奢ってやるうと思っただ。」

「俺もだ。」

うう・・・皆の同情が心に染みます。ですが、今の僕は明日白髪になってもおかしくありませんよ。

「と言うわけで焼きそば5つです。スタッフ！しゃきしゃき働きなさい！！ 僕の胃の安泰のためにも！！」

「イエスマム！！」

「ママじゃねえ！！」

ちやきちやきやってもらいたいものです。

「・・・ねえ、君さ。」

「僕ですか？ 何かご用で？」

『どこかで会ったことないかい？』

「ありませんよ。出来れば会いたくもなかったです。」

『・・・うん、そうか。なら良かった。』

「こっちはちっとも良くないですけどね。」

「(1)用は以上で？」

『うん、もういいよ。態々呼びとめてごめんね。』

・・・早く此処から出たいです。

と言っわけで、ちやきちやき焼きそば作って早々に御退場願いました。え？ 深く関わらないのか？ これが普段だったら関わっていいかもしれませんが、生憎、今の僕にその様な余裕は欠片もありません。もうね、気を配り過ぎて疲れましたよ。

「・・・ハア。」

「臃・・・大丈夫か？」

「ああ、紫稀さんですか・・・。疲れましたよ。精神安定剤とか持ってます？」

「あるにはあるが・・・、何？　そこまでひどいのか？」

「明日には白髪になる勢いです。」

「そ、そうか、・・・ほら、これだ。」

「ありがとうございます。」

「・・・ふう、これも即効性ですか。バグも捨てたものではありません。・・・いや、紫稀さんは別ですね。希少な良識ある方です。夷さん？　良識はあるかもしれませんがいかんせん、常識が足りません。非常識の塊です。どこの団長ですか全く・・・。」

「ふう、少し楽になりました。ありがとうございます。」

「そうか、なら良かった。・・・その歳で胃薬とかを服用するとはなんと云うか、気の毒だな？」

「ホントに、気苦労が絶えませんよ。癒しが欲しいものです。」

「七実、セラ、ユーに癒してもらえば？」

「・・・まあ、公衆の面前でいちゃつく気はありません。」

風紀とかもありますし。

「・・・さつき、思いつきりいちゃついていたか？　七実と。」

「あれは公衆の面前ではないので良いのです。」

あ、因みに今セラたちは入口の近くで紅茶飲んでいますよ。七実は少し前にシフトに外れ、今は僕待ちつて所ですね。栗栖先生は何故か落ち込んでますね。あれですか、酒でも没収されましたか。ついでに、僕は今、姉御と青さん言葉を借りるなら「うなー」「うにー」という感じの状況です。客がね、来ないんですよ。

「あの……先生。」

おや、平松さんが先生に話しかけましたよ。

「どうした？ 平松。」

おおっ、相当落ち込んでますね。

「……その……斉藤さんが……来ないん……ですけど。」

斉藤さん？ ああ、あのサボリですか。あまり学園祭に乗り気ではなかったの、すっぱかしたのでしょうか。

「また居ないのですか……。」

「……うん……どうしよう……？」

「行ってきてもいいですよ？ 今は丁度暇ですし、平松さん、ずっと働きっぱなしでしょう？ 休憩がたら、探しに行ってください。」

「でも……。」

「大丈夫ですよ。見ての通り、今はそんなにお客は居ないので
す。気にすることなく行ってください。」

「鑢くん……ありがとうございます。」

別にお礼を言われる程の事でもないと思うのですがね。うなー&活
用形！ うにー。

……いけません。本格的におかしくなり始めてきました。

と、平松さんが制服をカバンから取り出し、着替えに行くために教
室から出ていくと言う一連の動きをポケポケと眺めていたら、団体
様がいらっしやいました。平松さんは突然の事に驚いてます。次、
厄介事だったら僕、世界を滅ぼすんだ……。

……死亡フラグどころか、何故かラスボスもしくは隠しボスフラ
グを建築してしまいましたよ。本格的に病んできたようです。

「サラス……なのですか？」

サラスのようです。世界は命拾いしましたね。……ああ、そう言
えば、吸血忍者はネットアイドルやってましたね。成程、そのイベ
ント的な物があつたのでしょうか。服装がゴスロリに背中に小さな羽
根、手には杖といかにもコスプレという感じです。上司のあられも
ない姿を見て、セラの顔も引き攣っています。……そう言えば、
僕たち参加（強制）するんですよ、女装コスプレ大会。僕もです
が、夷さん、紫稀さん、ジンさんはもう既にコスプレしているよう
なものなのですが、どうなのでしょう？ 七実なんてオリジナルで
すし、やる意味あるのでしょうか？ ……フレイの事ですから、
きつと碌でもない事を考えているのでしょうか。それは兎も角、なん
か空気がピリピリし始めたのですが？

「セラフィム。ここでその名を呼ぶな。阿呆かお前は……。」

あー、そう言えば、偽名がありましたねえ。輝羅々でしたっけ？
極上みたいですね。

「あれ、見ていたのですか？」

「いえ知識として知っているだけです。」

それは兎も角としましょう。

「なんのための偽名なのか、貴様はそんなことも理解できんのか。」

「申し訳ございません　輝羅々さん。」

おー、ひよつとして、この二人仲が悪いのでしょうか？ いやまあ、セラとサラ・・・星川さんが誰と仲が良かろうが悪かろうが別に良いんですけど。好き嫌いは生物である以上ある物です。現に僕は今、厄介事臭を第六感にて感じ取り、某『はたらかない』アイマスクを所持している人の持っている布団？　みたいなのに丸くなって様子を見ています。あれですね、カメが甲羅に隠れるのと同じです。まあ、それは良いとして、目線でバチバチするの止めてくれませんか？　平松さんがものすごく怖がっています。あの怯えようはさながら赤に睨まれた僕と言ったところでしょうか？　言い得て妙ですと、思っていたらスタスタと焼きそばを作っている歩の方へ向って行きました。焼きそばでも頼むのでしょうか。まあ、今に限り全ての事がどうでもいいと思っっている僕です。今の僕ならとこそぞの『厄介者』がアメリカ大陸消し飛ばしてもスルー出来そうです。

「臆、あと30分です。」

「じゃあ、ずっとうにーしていいですか？」

「個人的には良いのですが、集団的に駄目でしょう。仕事して下さい。」

「まさか七実にそんなこと言われるとは夢にも見ませんでした。明日は槍でも降るのでしょうか？」

「むしろ、隕石が降ってきそうですね。」

また物騒なこと言いますね。まあ、大抵の隕石は大気圏で燃え尽きるそうなので実際地上に落ちてくるのは本当に稀だそうですよ？

「なあ臍。俺達ものすごく暇なんだが？」

「僕みたいに怠ければ良いじゃないですか。それとも、コーヒーでも飲みますか？」

「コーヒーか……。まあ、頼む。」

「あいあい。では、そこにあるので勝手に持って行って下さい。お代は置いていってください。」

「自分でやるのかよ!？」

「夷さん・・・僕はね? とても疲れているのですよ。バグ街道を爆走してのほんと生きているあなたとは違うのですよ。」

「俺だつてこの3000年苦勞してるよ!!--」

「敵なしじゃありませんか。」

「……それでも色々大変なんだよ。」

「相談事なら乗りますよ?」

「はっ! 高々20数年程度しか生きていないお前には分からぬさ・
」

「お片付け出来ない子供が言いますね。」

「だからそれ違うし!! 片付けぐらい出来るし!! 過去の事を
何時までも穿り返すなよ!!」

「……え? 何か言いました?」

「ブツ殺す!!」

短気ですね。

「短気は損気ですよ?」

「てめえが悪いんだろうが!! ……ていうか、なんか性格変わ
ってないか?」

んー、あー、まあ、確かにちょっとやさぐれ入ってましたね。

「どづした?」

「……いや、ちょっと『厄介者』による『厄介事』を思い出して

しまっただけです。他意はありませんよ。」

「……あ、そうか、確かこの後……。」

「夷？ お前、何か知ってるのか？」

「ん？ まあ、な。俺は臙の知ってる夷の2100年後だからな。当然臙の未来も知ってる訳だ。まあ、900歳の時点で未来除いて今後の展開も知っていたわけだが。」

「……相変わらずバグだよな、お前。序でに紫稀も。」

「あ！？ てめっ、ジンまでそんなこと言うのか！！」

「まあ、私は自覚はあるけどな……。それは夷も同じだろ？」

「まあ、そりゃそうだが……。なんか、面と向かって言われるとむかつくんだよな。」

「臙が何時も言ってるじゃないか。」

ジンさん！？ 何気に布団で寛いでいた僕に振って来ないでくださいよ。……ほくそ笑んでいますよこの人。あれですか、意地でも巻き込んでやるとかそういうのですか。

「臙はあれだ。もう慣れた。」

「ああ、慣れたな。」

慣れたそうです。

「とというか、コーヒー冷めますよ?」

「お、そうだったな。んじゃ、俺たちはまたあっちで駄弁ってるわ。

・・・ふう、やっとゴロゴロできま

「それにしても、繁盛していない店だ。」

・・・厄介事臭がします。よろしい、ならば行動だ。

「いや、お前のお陰で繁盛してるよ。」

「私の人望をもってすれば、当然の結果だ。セラフィム程度では客も呼べんかったのか?」

「まあ、確かに繁盛していませんよね。」

下からミュイと立ち上がる僕。皆さん驚いています。

「お、臍!? 一体どこから」

「どごつて、この布団と一緒に這って立ち上がったただけですよ?」

もちろん、布団を小脇に立ちあがってます。もう、この布団が手放せません。

「ダ」「今は駄目です。」「んん! 鑢!? 何故お前が此処に・・・」

「何故って、此処、僕の所属しているクラスですよ？ そりゃ居ますって。」

「何！？ そうだったのか！？」

今更ですかい。

「まあ、繁盛してませんけどね。」

「わ、私は別にそういうつもりで」

「いえ、本当の事ですから良いですよ。本当の事を言っただけ悪いという道理はありませんし、何より僕も楽できて丁度いいですし。」

「そ、そうk」ですが。」

「セラは関係ありませんよ。ここが繁盛していないのは必然です。そこにセラは関係ありませんし、また、セラに魅力がないと言っただけでもありません。ですから、セラもそんなに怒らないでください。」

「は、はい。」

「・・・鐘とセラフィムはどういう関係なのだ？」

「僕たちですか？ んー、そうですね、いさ恋仲です。」うろろ仲間って、そこまでズバツと言いますかセラ。」

「何？・・・鐘、貴様私が以前こ」その返答は、学園祭が終わってからします。忘れていたわけではありません。」・・・なら良い。」

ひやっとしましたね。あそこまで鋭い殺気を放つとは、強いですね。少なくとも歩では歯が立たないでしょう。

「臆、ジャスト0分。仕事終わりましたよ。」

「よし来た！　じゃあ早速学「コスプレ行ってみよー！！」……え？」

「……あれ？　なんですかこれ。何で僕縛られてるんですかねえちよつと！！　しかもこれ切れませんよ！？　どっという素材ですか！

「……あり？　俺もだ。」

「……私もだ。」

「同じく。」

「なんで俺まで!?!」

おや、歩も捕まったようです。

「んじゃ！　ちよつと『コレ』借りてくね。あ、体育館で面白いことやるから見に来たい人は見に来てちよ!!　んじゃ、バイビ。」

「……知ってますか？　『人』の『夢』と書いて……」

「『夢』と読むんですよね？」

その通りです。って、フレイ！ さすがにそれはまず

くセラく

フレイに体育館で面白い事をするとのお誘いを受け、私達は体育館に来ました。メンバーは私、ヘルサイズ殿、ハルナ、サラス、メイルです。普段なら此処にあゆ・・ん！ 変態殿と臃もいるのですが、フレイに拉致されてしまったので今はいません。それで、来てみたのですが・・んなのでしようこれは？

『女装コスプレ大会』

意味が分かりません。これはフレイが企画したものののでしょうか？ 何を思ってこんな物を企画したのか分かりかねますね・・。ステージはさながらミスコンみたいなものとも言えば良いでしょうか？ 舞台から真っ直ぐに伸びた道があり、そこまで歩いて戻ると言う物のようです。全く、男の女装姿を見て一体何が・・いや、ちよつと待つて下さい。女装・・臃もするのでしょうか？ それは少し見てみたい気もいえいえ！！ 私は何を考えているのでしょうか、臃に対してこのような不純な思考をするなど・・。しかし・・見てみたいです。はっ！ い、いけません！！

『楽しみ。』

どうやら、ヘルサイズ殿は楽しみなようです。私は・・いえいえ！ い、一体何を考えているのでしょうか私は！！

『レディースエージェントルメン！！ 大変長らくお待たせし

ました！！ ただいまより女装コスプレ大会は開催いたします！！
可愛い人から気持ち悪い人まで結構な人数が居るからどんどん巻
いていくから一人一人を刮目してみてくださいね！！」

始まるようです。

「ほあ！！ ほあ！！ ほああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああ！！！！！！！！」

・・・気持ち悪いですね。

（夷）

全く、あの死神の意味が分からん事するよな。俺たちにこんなこと
させて一体何が楽しいんだか・・・。また半殺しにしてやるうか？
・・・いや、止めておこう。今度こそ臍がキレそうだ。

ハア、めんどくせえ。因みに、この『衣装』はフレイが選んだんだ。
紫稀もジンもフレイで、臍だけが七実さんなんだよな。・・・あ
い、大丈夫か？

「納得いかねえ！！」

「五月蠅い。諦める。」

ジンがワーキヤー騒いでいるが、まあ、あいつが一番悲惨だからな。
俺？ 俺も悲惨ぢやあ悲惨だな。・・・エヴァとこのかに比べたら

どうなるかな？

紫稀は・・・あ、なんか諦めた目をしてる!？

「ああ・・・すまない、皆・・・。」

・・・もう悲惨だよ!! 俺たちみんなのライフポイントはもう限界地突破するよ!!

『エントリーナンバー25番!! 両希夷くんです!! どうぞー

!..!』

・・・よし、じゃあ。

「逝ってくる。」

「」逝ってこい・・・。」

夷! 逝きまーす!!

くセラッ

『エントリーナンバー25番!! 両希夷くんです!! どうぞー

!..!』

・・・いままでは変態殿を筆頭に散々な物を見せられましたが、ようやくまともな方が出てきました。あの方なら、不快な思いはしないでしょう。

あああああああああ!!!!!!!!!!!!!!」

夷さん・・・私の知っているあなたは、もう、居ないんですね。

〈夷〉

・・・終わった、何もかも。・・・別に泣いてなんかないやい。

〈紫稀〉

夷・・・お前、漢だよ。頼まれた事をしっかり完遂する。お前は・・・漢だよ。

「終わった・・・、ハハ、やっちゃった、やっちゃったよ、エヴァ・・・。」

「まあ、その、なんだ、元気出せ？ な？」

「・・・悪い、当分無理だ。」

「・・・そうか。」

・・・ジン、お前、結構優しい奴だったんだな。お前・・・

『次はエントリーナンバー26番!! ジンくんです!! どうぞ
ー!!!』

次、なのにな……。

くその頃の病弱カップルく

「ちょ、マジでこれ着るんですか!?!」

「むしろ、これ以外に何かありますか?」

「いやいやいやいや!!!!!! ない!!! これはない!!!!!!」

「喧しいです。ほら、早く来てください。台詞も覚えて貰うんですから。」

「嫌アアアア!!!!!!」

くジンく

……どうやら、俺の番が来てしまったようだな……。チツ、あの死神め。後でしばいてやる……。俺だけ明らかに役割の負担が重いじゃないか!!! 夷や紫稀の方がまだましだ。俺なんて……。俺なんて……。

「私を・・・私をぶてば良いじゃない!!」

ドMキャラなんだぜ・・・？

（セラ）

・・・いや、姿形はまともなんですが・・・。何故でしょう？ 少なからず臙と関わりがある人たちは皆悲惨な末路を歩んでいる気がします。主に夷さん。

因みにあの・・・ジンさんでしたか？ あの人の服装は下に七色のひらひらが付いた白い服に青いスカート。頭には黒い帽子に桃が乗ってます。髪の毛は長い青色。

・・・間逆ですね。元の髪の色と。

『ほああああああああああああああああああ!!!!!!』

それしか言う事がないのでしょうか？

「もつと・・・もつとぶちなさいよ!!!!!!」

『よっしやああああああああああああああああああ!!!!!!』

あ、変わりました。そして、ジンさんは逃げました。命の危機を感じたのでしよう。哀れ・・・フレイもえぐい事をします。まさか・・・臙も同じような目には合いませんよね？

「それは無いよー。」

「っ！ フレイ？ 何時の間に……。」

「あ、これ分身だから。でね、臆は七実ちゃんが担当してるから私もどうなるか分からないんだけど……一つ言える事は、私みたいにゲーム・アニメキャラのコスプレはさせない筈だよ。」

あれ、ゲームなどのキャラだったのですか。

「ま、七実ちゃんだから失敗は無いだろうね！！ 乞うご期待ってところかな？」

「……そうですか。」

「んじゃ、私は消えるよ……！！」

……次は、まともですよね？

〜ジン〜

……終わった、何もかも………アノ死神ブッコロス。

（紫稀）

・・・うわ、あれはきついな。私は割とまともで良かった。というか、一体何を基準に選んでるんだろうな、これ。

「しくしく・・・。」

「殺す殺す殺すクロスクロスクロス殺殺殺殺殺殺クロス・・・。」

・・・末期だな。

『続いてエントリーナンバー27番！！ 神儀紫稀くんです！！
どっぞー！！』

・・・逝くか。

（その頃の熟練夫婦）

「・・・え、こ、これに入るのですか？」

「はい、これに入ってこんな感じの目をしてください。後はこっちで演出します。台詞はこの一言です。あと、移動は無しで、私が直接舞台の一番前まで持って行きます。」

「え、ですが・・・。」

「いいですか？ 何があっても何らかのアクションが合った後にこのセリフを言ってお下さいよ？」

「・・・はい。」

（セラ）

次は紫稀と言う人らしいです。話して見た限り、臃とも仲が良く、唯一の良識人と言ったところでしょうか？・・・その人までフレイの毒牙にかかったのですね・・・。

出てきました。服装は・・・ふむ、割と普通ですね。薄い青の線が入った制服と、うすい青色のスカートです。頭には黄色のリボンで、腕には『団長』の腕章を付けています。

そして、一番前に来てそのセリフを言い放ちます。

「唯の人間には興味ありません!!！」

『ほああああああああああああああああああ!!！」

「もしこの中に宇宙人、未来」

この先はちょっと危ない雰囲気があるので聞き流させていただきます。

「団長命令よ！ 出来なかった死刑よ死刑!!！」

何がどうしたら死刑になるのでしょうか？

『ほあああああああああああああああああああああああ
ああああ!!!』

・・・この学校はそろそろ精神科に行く事をお勧めします。とい
うか、気持ち悪いです。

（紫稀）

いや、さすがにあれぐらいじゃあ私は落ち込まないぞ？

「この裏切り者がああああ!!!」

「ヒビ、殺殺殺ココココココココ殺殺!!!」

・・・どうしょ？ 人の範疇を・・・あ、元々超えてたな。
さて、次は臍なわけだが・・・どうなるんだろっな？

（その頃のブラコンと病弱）

『次でラスト!!! エントリーナンバー28番!!! 鐘籠くんです

!!! どうぞー!!!』

「さあ、行きなさい!!」

「嫌ですから!? 絶対に嫌ですから!! 大体これみじ・・・っ
!」

「大丈夫です。見えるか見えないかぐらいでしっかり調整していま
すから。」

「性質悪い!!」

「良いから逝きますよ!」

「字がちがうぎゅ!」

くセラく

次は臙の番のようです。・・・誠に、誠に遺憾なのですが、少し楽
しみにしてしまっている私が居ます。ん? あれは・・・七実?
何故七実が、いえ、それよりも、あの箱はなんでしょう?横に割と
大きいですが。

と想っていたらその箱をドンツと起きました。そしてガムテープを
びりびり剥がし、そこに現れたのは・・・

『ほあ・・・あ?』

普通に女性用の制服を着た臙でした。ですが、ですが・・・!!

『っ?』

ダンボールの中で膝を抱え、潤んだ瞳で上目遣いでこちら側を見えます。そして頭には犬耳を装着しており、ダンボールには何か細工がしてあったのでしょうか、『ひろってください。』という文字が書き込まれてあります。

「こ、これは……。」

『強烈。』

強烈、その言葉も、今では軽く思えます。なんなのでしよう、この感情は。母性……これが母性ですか？ 何者からも守ってあげたいと言うこの感情は母性から来るものなのでしょうか！？

ツ！ 鼻の奥がツーンとしてきました。周りの方々も必要異常に後頭部を強打しています。

と、私達が苦悩している間に、またアクションが起きました。なんと、臙の上空から水が降ってきたのです。それを臙は見事に被ってしまいました。そして、次に見たのは

『グハア！！！？』

何人がが逝ってしまいましたか……。いえ、私も危なかったですね。今の臙の状態は水を頭からかぶり、制服とかがもろに透けてしまっています。肌や服に張り付いた綺麗な髪が、妙に扇情的です。

「……ひろ……って？」

そう、最後の「て？」の部分で首をコテンと横に曲げる臙。

そこで私は意識を失いました。最後に見たのは、鼻血を大量に吹きながら倒れる観客の人々。ヘルサイズ殿はさすがです。吹いていま

せん。

我が生涯に、一片の悔いなし。

く
臆
く

くすん、くすん、もう、お嬢にいきません……。。

第30話 カオス!!!!・・・胃があ（後書き）

作者「誠に申し訳ございませんでしたああ!!!!!!」

臃「・・・うう。」

夷「・・・あー。」

ジン「殺殺殺殺殺。。。」

紫稀「・・・世紀末を見ているかのようだ。」

七実「何か言い訳はありますか？」

作者「本当に申し訳ないです!!! つい出来心だったんです!!!」

フレイ「やりすぎだよね。」

七実「まったくです。」

作者「今回でコラボは一応終了です。まあ、次回も学園祭なのですが。改めて、コラボしていただいた、ケフィア様、裂やん様、黒い狐と紅い眼様、ありがとうございます。このような文章になっていますが、楽しんでいただけたのなら幸いです。ありがとうございます!」

第31話 一件落着と思つた時が、実は最も危ないのです

あの僕たちにとっては拷問のような出来事 女装コスプレ大会が終わりました。大会と言うからには当然順位という物もある訳なのです。で、その結果は・・・

一位 両希夷

二位・三位（同票） 神儀紫稀&ジン
梓外 僕

という結果になりました。いや、梓外ってなんですかとフレイに聞いてみてみたところ、曰く『あれはフェアじゃない。』らしいです。別に一位とかになりたいと言っわけでもないのですが体を張った割には実にあんまりない草です。

あ、因みにあの異世界訪問組ですが、血走った眼で 紫稀さんは二人に付き合うという形でしたが フレイを追い掛けていました。フレイは涙目で逃走しましたよ。今頃は赤道の辺りでも飛んでいるのではないでしょうか？・・・僕にもとばかりが来た事は余談です。いや、やり返そうとしたのですがね？ フレイがあまりにても可哀想というかさすがに泣きつ面を蹴る様な事は出来ませんでした。まあ、恩人で親友ですからね。夷さん達は止めませんけど、現在はまあ、することも無いと言う事で一旦喫茶に戻りました。・・・道中、例の魔装兵器の作動を確認したのですが、なんだつたのでしょうか？ いや、まあ、あれの『目的』は一応知っているのです僕がもう出張る事はありませんが・・・どうしましょうね？ 言うべきか言わないべきか・・・うーん。

「言ったら言ったで面倒なことになりそうですね……。しかし、言わなかったら言わなかったでまたばったり会った時に問題が……」

「？ 臃、何か考え事ですか？」

あ、口に出していましたか。

「いえいえ、セラ、気にしなくて良いですよ。ちよつと『厄介事』をどう回避しようか考えていただけですから。」

「厄介事ですか？ ふむ、それで、何か妙案は浮かびましたか？」

……浮かばないんですね。

「いえ、保留にします。どうせ、いつかは関わるのですから、その時期が早くなるうと遅くなるうと変わりません。『関わる』というのが問題なのですから、時期は関係ないです。」

まあ、計画通りなら確実に関わってしまうでしょうね。なら、計画を実行しなければ良いと言つのもあるのですが、僕の今の計画はどちらかというところ『受け』です。そして確実にこの計画は遂行しなければならぬと思っています。

「……臃がそこまで言う人物とは？」

「ん？ そうですね……。あー、強いて言えば」

「腐れ縁、ですかね？ 中々どうして、切っても切れないのですよ。」

歩がスタボロのウィディングドレスを着て、帰ってきました。・・・
ふむ

「「いよいよ化けの皮が剥がれ始めましたね。」」

おおつ、まさかの一字一句間違つことなくセラとハモりましたよ。

「さすがですね、セラ。」

「いえ、臍もです。」

まあ。それは置いておいて。

「歩、魔装兵器はどうでした？ 強かったですか？」

「・・・ああ。つつか、気付いたんなら助けてくれても良いじゃないか。」

・・・ああ、成程。やはりそうなりますか。

「臍？」

「何でもありません。別に歩は助けなくても良いと思っただけです。ゾンビでしよつ？」

「それはそうなんだが・・・。」

「どうせ死なないのなら、僕は助けません。まあ、宇宙の彼方へ飛ばされるや、別の空間・・・二次元などに飛ばされたりするのならば助けますが。」

そして、それが出来そうな人が割と居るので困りものです。

「・・・臃って、つんど黙りなさい。」イダダダダダ!?!?」

吸盤付き苦無を歩の額に連続で投げつけます。全く、なんて不愉快な称号を付けようとしてくれちゃってるのですか。

「さて、僕はもう手が開いているので普通に学園祭を楽しんできますが・・・セラと七実はどうします?」

「私は臃に付いていきます。というか、付いていかなくて100M圏外にどちらかが出て、正面衝突なんておバカなことになりたくありません。」

それは僕もです。あれ結構痛いですよ。しかも、正面衝突で互いがお互いのダメージを抑える為に自然と抱き付き合う形になるのですが、それをやったらセラとユーが恐ろしいほど冷たい目で見てきたのでそれ以来気を付けています・・・逆に、日常でもずっと居るのでこの前、三人で何やらお話ししていたようですが、それは全くの余談なので気にしないで起きましよう。

「私も一緒にします。」

あれ? てつきりセラはこの喫茶店で働いてみたいと言ったのですが・・・。

「臙と学園祭を回る事の方が重要です。」

「つ、真正面から言われると照れますね。そして、恥ずかしげも無く当たり前のように言うセラに尊敬します。」

「そ、そうですね・・・。」

「何か問題が？」

「いえ、全くありません。」

さてでは、

「行きますか。」

「はい。」

「私はちよつと用があるので後で合流します。」

用とは、恐らくあれでしょうね・・・。いえ、それは指摘するのはデリカシーに欠けるので言いませんけど。」

「分かりました。」

よし、楽しめますよ。」

『教頭を倒せ』

これを見たとき僕は教頭先生にそういう趣味があるのかと立ち眩みしそうになりましたが、よく考えたらあの教頭先生の事です。情熱がどのこのうので、見を呈して実演しているのでしょう。で、それをやりまくっている人物が・・・。

「クリス・・・何やってるんですか？」

「あ、臆！ ねえっ！ 聞いて聞いて！！」

わいわいはしゃぐクリス。ですが、片手で水風船を投げる事を忘れていません。さすが、としか言いようがありません。

「どうしました？」

「あのね！ ちょっとさっき問題が発生して戻れないかな？ って思ったんだけど、その問題も解決して、今日中には戻れそうなの！！」

今日中・・・ですって？ 成程、かなり予想外ですが、予定外ではありません。仕方ないです、少々、計画を詰めましょうか・・・本当は一週間後を予定していたんですよ？ まあ、嬉しそうなクリスを見て、そんな事言えるはずありませんけど。

「そうなんですか？ それは良かったではありませんか。やっと目的のための第一歩つてところでしょうか？」

「うんっ、これでようやく復讐できるよ。」

・・・その復讐なんですけど

「・・・クリス、一つ確認なのですが、アリエルさんは女王に対してのクーデターでしたよね？」

「うん？ そうだと思っけど。」

「・・・無駄な事を。」

ああ、なんて無駄な事でしょう。初めて聞いた時はなんの冗談かと思っていたモノですが、まさか本当に女王・・・あいつにクーデターする気でしょうか？ 自殺願望でもあるのでしょうか？

「・・・どういう事？」

クリスは水風船を投げるのを止め、真剣にこちら話を聞いています。ふむ、クリスは知っていると思っただのですが・・・、いえ、事実知っているのでしょうが、確認したいのですか？

「女王にクーデター、絶対に失敗しますよ。」

「なんで絶対って言い切れるの？ ぶっちゃけ、クーデターが成功しようが失敗しようがどうでもいいんだけど。」

「クリスでも分かっているでしょう？ 『アレ』には絶対に勝てませんよ。」

「・・・あー、『アレ』ね。確かに、くりすが戦った時とは訳が違っからね。」

「そうです。故に絶対勝てませんよ……『ふうりんかにはん』には。」

「……おお、ちよつとメタい事言いますけど、伏線はりまくりですね。いやまあ、賢しい読者様ならどうなるか分かっているでしょうけど……。うちの作者程度の伏線など、見破られて当然です。」

「臙、メタいよ。」

「ああ、すみません。で、今日でしたよね？ 了解です。協力はしますけど……。」

「けど？」

「この世界は潰さないでくださいね？ あと、僕の大切な人たちも必要がない限り、歩以外は傷つけないようにしてください。まあ、どうしてもならしょうがないと割り切ります。……が、世界を潰すもしくは殺したりする場合は、僕の『全力』をもってして止めますからその所よろしくお願いします。」

「うえ、臙の全力はちよつと嫌だかな？ ……いや、正確には臙『達』かな？」

「誰を出してほしいですか？」

「遠慮するよ。」

遠慮されました。まあ、あれと好き好んでたたかいたいと言う人など、あまり知りませんねえ。

「では、僕たちはそろそろ。クリスも頑張ってくださいね？」

「うん！」

では、ぶらぶらを再開しますか。

「・・・臃。」

「はい？」

「前々から思っていたのですが・・・。」

うん？ 何やら深刻な話しのようです。目が嘗て無いほど真剣です。

「臃の冥界人的な能力、主人公っぽくないです。」

「いやそんなことですか！？ 僕に主人公性を求めないでください

！！ こんな病弱な主人公が合ってますか！！」

「最近はめっきりそういう描写も減りましたね。」

「慣れてきたんですよ。」

真面目に聞こうとした僕がバカでしたよ。

「臃。」

七実とブラブラしていたところ、後ろからチヨンと袖を掴まれるのと同時に名前を呼ばれました。因みの僕と七実はそれぞれお面を付けています。僕は木造りの狐のお面（白）で七実は黒です。何故買ったのか？ いや、店員と目が合ってしまったので、そのままスル―しても良かったのですが、あまりにもお客さんが居なかったの、つい同情で買ってしまいました。結構完成度は高いんですけどね、コレ……。

「おや、ユーにセラではありませんか。セラは用を済ませた後、ユ―と合流したのですか？」

「はい、丁度出会ったので、お誘いしました。」

ふむ、成程。

「ユーはもうお仕事は終わったのですか？」

「ハルナが、適当な人を見つけて代用させた。」

適当な人に同情します。どこの誰だか知らない適当な人、ハルナに出会った事が今日最大の不運でしたね。

「では、そのハルナは今どこに？」

「分からない。私と色々回っていたのだけど、見失った。」

迷子ですか。年相応なのかなんというか。まあ、ハルナの事です。一人でも楽しくはつちやける事でしょう。……ところで、迷子と言えば、ついさっきフレイの魔力が感じ取れなくなったのですが、何かあったのでしょうか？ さすがに死んでいないと思いますが、

相手が相手ですからね。バグ2人とチート1人です。まあ、がんばれとしか言えません。

「そうですか。どうします？ ハルナを探しますか？」

コクツと強く頷くユー。では、ブラブラしながら探しますか。．．．とは言っても、先ほど．．．紫稀さんを探し当てた魔力の糸を使えば一発なのですが、さすがにユーが居ますからね。今はネタバレする時期でも時間でもないのでもそんな事はせず、普通に歩いて探します。

「手、繋ごう？」

「ええ、良いですよ。」

．．．ん？ 何やらセラがソワソワと。そして七実が『超クイズ大会！』の景品であるゲームを見てウズウズと。あかん、この二人いえ、セラは可愛いと言いますか、女性的な反応なのですが、七実よ、あなたの脳内メーカーはゲームしかないのでですか？ さっき、ギャルゲの詰め合わせ取ってあげましたよね？ それでも尚、貪欲にゲームを求めますか。さすが七実。ゲームに対する執着が半端ないです。

「セラも繋がりますか？」

「．．．いえ、私は」

遠慮？ ああ、恐らくユーが繋いでいるから自分は．．．と言った感じでしょうか？

「はい。」

「あっ……。」

「……これが両手に花というやつでしょうか？ まあ、後ろにも居るのですが。」

「七実。」

「何でしょう！?!?」

何この期待に満ち満ちた顔。その期待には応えますけど。

「今から僕の言う言葉を聞いてください。あのクイズ大会は恐らく、1〜4の中から本当の答えを選ぶと言う物の筈です。劣化ミリオネアみたいなものでも考えてください。で、今からその答えを言います。良く聞いてください。1・4・3・2・2・1・4・3・1・2です。これであるゲームは七実の物です。」

「ありがとうございます!!」

そう言うと、バビューンという効果音が付きそうな勢いでそのクイズ大会に参加しに行きました。……ああ、そう言えば、七実は弱点克服しましたね。体力は有り余っているはずですよ。

「何で答えが分かったの？」

「ん？ ああ、ただ単に高校生レベルでどういった問題が出るのかという予測をして、その予測した問題の中でも最も出やすそうな問題を10問に絞り込み、問題を限定します。」

何やらぼかんとしていますが、今は説明が先ですね。

「それから、1〜4の番号にどのような解答例が来るかを予測して、まあたぶんこの番号が答えじゃない？　と言った番号を七実にしました。当たる確率は92.8%です。」

「ほぼ当たる。」

「さすがですね。」

これぐらいなら、某一方通行さんも出来ると思いますけどね。いや、比べる相手がおかしいですか。

「さて、七実は当分帰ってきそうも」おおとー！？　なんだこの選手は！！　問題を次々と即答していくぞー！！！！？　一体何者なんだー！！」・・・ありますが、まあ行きますか？」

「うん（はい）」

野外マジックショーなる物があるそうです。・・・まあ、こういうのは大抵タネがあるのですが、こういう場でタネを暴露するのは無粋であるため、純粋に楽しむとします。考えてはいけません、考えては。

「おおー、中々完成度が高いです。」

で、始まっている訳ですが、箱の中に男の人が入り、その箱を回し、タネも仕掛けも無いと言う事をアピールしてから、でーんと言う音がして、そこには服だけが残っていました。・・・ふむ、タネはあえて明かしませんが、サクラですか・・・というか、

「魂魄消失事件にでも巻き込まれたのでしょうか？」

「むしろ、ドクター・ゲロの作った人造人間の仕業。」

成程、そういう見方もありますか。・・・セラはあまりそう言った話に分からないでしょう。頭の上に『？』が浮かんでいます。と、こんな事を言っていたら周りから笑いと拍手が巻き起こりました。どうやら、それは僕たちの方に向いているようです。そんなに面白かったのでしょうか？

次は人が箱の中に入り、その箱の真ん中部分を横にスライドすると言うものでした。またサクラです。どう見てもやらせですね。これがそこまで人気が出なかった理由なのでしょうが、まあ、気にしません。思った事を口にします。

「おお！ バラバラの実の能力者ですか！ 切断しても死なないのですよね？」

「さすがターンAのお兄さん。」

余談ですけど、あのターンAのお兄さん、女性に見えませんか？ 見えませんか、そうですか。

「いえ、あれは石川五右衛門に斬られた人の末路でしょう。」

「無駄にグロいですね!？」

あんな感じになってますけど!!

その後も、まあ、ありきたりと言えばありきたりなマジックを披露していました。ぶっちゃけ、精度はそこまでもないのですが、何かする度にユーが

「エスパー魔美のテレポーターシヨンガンがあれば、あるいは。」
「ダルシムなら全て説明が付く。」

という感じですか。どこでそんなもの学んだのでしょうか? . . . あ、すみません、原因は僕と七実でした。因みに、余談ですがこの時の僕の呟きは . . .

「 . . . 瞬間移動? 孫悟 にでも学びましたか? 」

みたいな感じですか。まあ、タネは分かっているのですが、ノリです、ノリ。

ま、なにはともあれ、そこまで好評ではなかったマジックショーも中々の盛り上がりを見せました。

「ありがとうございます! 君のお陰で楽しめたよ! 」

と、ユーにお礼を言う方々もいました。

「や、鑢くん! ! ! 」

「? はい、なんですか? 」

「こ、これ! 受け取って下さい! ! ! 」

勢いよく渡されたのは・・・可愛らしい封筒に入った手紙でした。

「返事、ま、待ってます!!!」

そのままバビユーンと七実顔負けの速度で走り去っていく名も知らぬ同級生？

「・・・臃？」

とまあ、僕に何故かこのタイミングでラブレターらしきものをくれる方もいました。

・・・セラとユーが不機嫌になってしまっただ変でしたが、そこは何と言うか、セラとユーの立場の優位性を説いたらしぶしぶながら機嫌を直してくれました。・・・ユーは兎も角、セラまで機嫌を悪くするのは予想外でした。あれですか？ 独占欲が強いのでしょうか？ まあ、僕はヤンデレにも対応できますのでどうという事でもありませんが。え、理由ですか？ 禁則事項です。嘘です。まあ、なんと言いますか、慣れ、ですかね？

七実と合流し、次はあの忌々しい事件の現場、体育館です。フレイはまだ帰ってきません。・・・まさか、やられましたか？ いや、いくら夷さん達でも・・・ありうる。ま、まあ、大丈夫でしょう。フレイもあれはあれで自称『死神長』。しかもフレイ曰く「歴代の中でも最も最優」らしいですし、なんとかかしているでしょう。というか、『最優』なんですね、『最強』ではなく。

で、七実はメツチャホクホクした顔で帰還しました。・・・欲しいゲームでも合ったのでしょうか？ まあ、家にあるゲームはそれこ

そ、ギャルゲ、エロゲが大量にありますけど、実のところ、アクシヨン、RPGなどは有名どころしかないのですよね。ドラ エとか。

「臃……。」

「ん？ なんですか七実。」

「誰でしょう？ メ トを歌っている人が居ますよ。」

「マジですか！？ え、こんな公の場ですか？ どんな猛者でしょう……。」

ユーとセラは『？』という感じですね。まあ、この辺りは僕と七実ぐらいしか分かる人はいないでしょう。

「……手強い。」

「は、もっと勉強せねばなりませんね。」

止めた方が良くと思います。引き返せませんよ？ 知ったら知るだけどんどん深みに嵌っていきますよ？ 脱出は不可能ですよ？
・今の七実のように。

「む、失礼なこと考えましたね？」

「イエ、ナニモ。」

何でこの人はナチュラルに地の文を読んできるのでしょうか？

まあ、それからしばらくバンドを聞いていたわけですが、ユーが突

然、

「臚、私もカラオケ大会に出たい。」

と言ってきました。

・・・ふむ、まあ、ユーの考えている事は大凡分かります。皆に自分の声を記憶に残しておきたいのでしょう。実際、僕もユーの声は片手で数えられる程度しか聞いた事ありません。

なので、その願いはぜひとも叶えてあげたいのですが、世の中、そう甘くないですよね。。。まあ、何事にもルールというか、決まり事がある訳でして、集団で生活している以上、守らなくては行けない事も有るのです。

つまり、何が言いたいのかというと、カラオケ大会にも出る為のルールがあるのです。僕としてはそんな物ぶち壊してでも出してあげたいのですが、それでは人間的に何か駄目な気がするのではありません。だからと言って、歌わせてあげないと言う選択肢も無いのですが・

「ダメ？」

「・・・ちよつと待つて下さい。僕の弱点は良くも悪くも不意打ちでして、予測していなかった事となるとちよつと考える必要があります。ですが、今言える事は、ダメという事は決してありません。絶対歌えるようにします。・・・一つ確認なのですが、大勢の人の前で歌う、という事で良いですよね？」

「うん。」

大勢で・・・つまり、コンサートですか。出来る場所と言ったら限られると言つか、グラウンドぐらいしかないのですが、此処で問題

が発生します。

僕、教員からの印象が、すごく悪いんですよねえ。

使用許可貰おうにも、ねえ？ まあ、手がないと言っわけでもありません。

・・・久しぶりに、頼ってみますか。というわけで、ケータイを取りだし、『ある電話番号』に掛けます。

『もしもし、鑓くん？』

「あ、高良先生お仕事お失礼します。」

『今は学園祭回ってるから問題ないわよ？』

「なら良かったです。それで、用件なのですが・・・。」

コンサートをやりたい旨を話し、なんとかグラウンドの使用許可を貰えないか頼んでみます。

『んー、ちょっときついわね。ほら、私って結構他の教師と仲悪し、鑓くんも良い印象もたれてないでしょう？ だからね？』

・・・そうでした、この人、嫌な事はきっぱりNOという性格故、結構敵が多いのです。確か仲が良い先生と言えば、教頭先生くらいではないでしょうか？

「・・・分かりました。では、最後に一つ。」

『何かしら？ 私も協力出来る事ならするけど？』

「・・・教員方に、全責任は僕が取る、とでも言っておいてください。」

ならば強行策です。あ？ ルールがどうの言ってたけどそれはどうしたか？ あのですね・・・、別に人様に迷惑は掛からない筈です。空いているグラウンドでコンサートをやる。これだけ。別に迷惑もかかりません。まあ、ルールは破りますが、それは僕が責任を取るので無問題。

『・・・何しでかすか分からないけど、そう言っておくわ。』

「頼みます。」

通話終了。

「朧・・・？」

ユーが不安げな目でこちらを見えています。あー、確かに少し物騒な会話でしたからね。

「ユー、僕はユーが歌えるように準備してきますので、しばし別行動です。大丈夫、歌えますよ。」

「朧は無茶しない？」

・・・無茶ですか。どうなのでしょう？ 責任問題になり、謹慎？ 停学？ 退学？ いや、あの教頭先生なら分かってくれるでしょう。

「しません。では、歌の練習でもしていてください。CD、あるの
でしょう?。」

さて、早速行動開始です。

まずは・・・って、

「七実は何故に付いて来るのです?。」

「ビタン! は嫌ですから。」

同意。

「で、どうするのですか?。」

「とりあえず、舞台を作りますが、これは僕の暗器で急ピッチで作
ります。時間は10分と言ったところです。」

「では、まずどうやって人を集めるかですか?。」

「・・・星川さんを頼ります。あと、序でに僕も使います。」

・・・何故か知りませんが、僕は女子生徒に人気がある様なのです。
いや、これは本当に何故か分かりません。鈍感とか関係なしに。だ
って、保健室で寝ていたらこうなったのですよ? 意味分かりませ
ん。が、意味は分からなくても、これを利用しない手は無いです。

「成程、最後に、教師をどうするのですか?。」

「・・・こういうとき、頼りにならなそうで実は頼りになるのが居

るではありませんか。」

「……まさか。」

再び、ケータイを手に取り、本来なら絶対に掛けたくない人に電話します。その相手とは……

『どうしたんだい、臈くん？ お兄ちゃんに言ってみなさい。』

愚兄、です……。くっ、此処はプライドなど捨て去ってやりま
す！！

「お兄ちゃん……ちょっとお願いがあるんだけど……聞いても
らって、良いかな？」

くおおおおお！！ やだ！ キツイ！ 愚兄相手に何故この様な口
調で……！！！！

『任せないさい！！』

プツンと通話が終了しました。……用件、言ってないので

「で、お願いってなんだい？」

「うわ！？ 何時の間に……。」

どこから湧いてきたのでしょうか？

「妹のためなら地球の裏でもすぐに駆けつけるに決まっているじゃ
ないか！！」

妹じゃねえし……。

「アリガトウゴザイマス。で、頼みなんですが、ちよっと僕がある事をするので、その間、教師共を足止めしてほしいんです。殺しちやダメですよ?」

「……ふむ、まあ、良いよ。お兄ちゃんに任せないさい。」

よし、これで完璧です。あとは、サラスが協力してくれるかどうかですけど……。

「構わん。是非やらせてもらおう。」

割とあっさり落ちました。え、そんなに簡単に決めて良いのでしょうか?

「ほかならぬダーリンの頼みだからな。断る道理は無い。」

この人、旦那を尻に引きそうですけど、絶対に良妻になります。保証します。

「ありがとうございます。今度、何か奢ります。」

「ありがたく貰っておこう。」

さて、後はユーを迎えに行くだけですな。

「ユー良いですよって、歩たちまでいたのですか。」

「ああ、ユーが歌うんだろ？聞かない訳がない。」

「それもそうですね。さて、移動しましょうか。」

「うん。」

そんなこんなでグラウンド。

「そう言えば、お前、教師に許可取ったのか？」

「取ろうと思いましたが、アウト食らいました。なので、強行です。」

「おいおい、それ大丈夫なのか？」

「無問題です。腕の良い殺人鬼に協力を求めましたので。」

「問題大アリじゃねえか！！ 殺人鬼ってなんだよ！！」

「あ、大丈夫です。家賊ですのよ。」

「はあ？ 家族？」

「いえ、家賊です。」

「家族？」

「家賊。」

「……………」

話しが面白いぐらい噛み合っていない気がします。

「まあ、知り合いなんだな？」

「……………それで良いです。」

流血で繋がっていますけどね！！

ま、それは置いておきまして、さっさと舞台を作っちゃいましょうか。

まず、服の袖から鉄の棒と、鉄の板を出します。ジャンルは鈍器。あつて困りませんから。で、糸とか使って一度に何本も糸に絡めて操り、組み立てていくと……

「簡易舞台の出来上がりです。」

「もう何でもアリだなお前！！」

さっきから歩が五月蠅いです。何でもって……僕は出来ることしか出来ませんよ。何でも出来るわけでは決してありません。

サラスが来ると言う事で、かなり観客が見に来ています。さすがサラス。ネットアイドルの中でも上位に食い込んでいるだけあります。まあ、僕はあまりネットアイドルに興味は無いんですけど。七実も然り。まあ、七実の場合は「アニメのアイドルなら良いです。アイス万歳です。ですが、ネットアイドルには興味ないです。所詮、リアルですから。」という理由らしいです。・・・何故でしょう？七実が最近、某落とし神のようになってきたような・・・。

「死にたいやつから前へ出る！！」

愚兄はどこですか！？ あの人たしか自殺願望がありましたよね！？ よし、消し去るなら今です！！

「お、臍・・・？ 何故そんな血走った眼で？」

「おお、セラ良い所に来ましたね。僕の愚兄を見ませんでしたか？」

「見ていませんが・・・。」

「・・・チツ、命拾いしやがりましたね。まあ、良いでしょう。」

「・・・ん？ なんでしようこの胸騒ぎ。」

「キララたーん！ 萌え殺してー！！」

どごそのツンツンヘッドが叫んでいますが、まあ、どうでもいいです。・・・あ、そう言えば、僕もユーの後に歌うのです。何歌いましょう？

「選曲、していなかったのですか？」

「まあ、ある程度は歌えるので良いです。そうですね・・・七実の曲で行きましようか？」

「あれですか？ ですが、ちょっと暗いですよ？」

「別に明るい曲を選びたいならアンパンマでも歌っていれば良いのです。僕はこれで行きます。」

「まあ、声も似ていますし、うまい事に変わりはありませんね。」

「・・・本当に、なんでしようこの胸騒ぎ。そう例えば、運命が強引に変えられて行くような」

「っ！？ まさか・・・。」

「？ どうかしましたか？」

ハルナの方を見る。ハルナは無表情でした。が、アホ毛がピコピコ激しく動いています。つまり、感情が激しく動いていると言つ事です。今はサラスが歌っていますが、羨ましいのでしょうか？

「そういう事ですか。」

「・・・本当なら、ユーは緊張しているでしょうから、解しに行きたいのですが、それは歩に任せましよう。」

「七実、行きますよ。」

「どいへん？」

「決まっているでしょう？　・・・上です。」

さて、やってきました学園の真上。良く見たら、雲がどんどん来ていますね。この雲は・・・雨ですか。集中豪雨ですね。

「で、どうするのですか？　正直、私も臍も、天候をどうのこうの出来る力は持ち合わせていませんよ？」

「そうなんですよね・・・。直視の魔眼でも、雲は殺せませんし。」
だつてこれ、水蒸気の集まりですし？　無くすには水蒸気一粒一粒殺していかなくてはいけません。そんなアホみたいに時間の掛かる事、やってられません。・・・下では、サラスの歌が終わろうとしています。

・・・ユーの願いは叶えてあげたい。こんな事が今後起こるとは限りませんし。しかし、だからと言って、ハルナに感情を消せとは言いません。純粹にハルナが楽しんでるのなら、僕はそれで運命がどうなるうと、それで良いと思つてます。運命なんてくだらないモノのために、楽しんではいけないと言う道理は無いのですから。ですが、その変わってしまった運命で誰かが悲しむと言うのなら、僕は・・・

「その運命、どんな力をもつてしてもねじ伏せてやります。」

瞬間、今まで枷

七実とお揃いの髪留めです

で使えない

ように、感じ取られないようにしていた魔力を開放します。

「っ!?!? これは……。」

「今からすることは時が来るまで関係のない人には教えないでくださいね?」

そのあふれ出た魔力を操り、複雑な魔法陣を形成する。

「……あー、やっぱり、『こいつ』を出すには普通の10倍の魔力を喰いますね。」

しかし、あまり時間のない事も事実。急ピッチでもなんとか魔法陣が完成しました。

「これで、どうするのですか?」

「……開け放たれたパンドラのは箱から今こそ解放放つ。」

「……厨二臭いですねえ。まあ、これがキーなんですからしょうがないです。」

と、その瞬間、魔法陣が淡く発光し、何者かがその魔法陣から飛び出してきました。そして、役目を終えたかのように魔法陣は消滅。作るのに苦労したのに用が済めば一瞬で……ああ、虚しいです。

「……久しいですね。」

「ん、んん、んんん?」

そこには、京都っぽい服を身に付け、傘を指している大和撫子とい

言葉が良く似合う女性がいました。

「朧はんほなあらしまへんか。久しぶりどすなあ。」

「・・・相変わらず京都并且つ、なんかまつたりしていますね。というか・・・」

「抱きしめるの止めて頂けませんかねえ!!」

「ええではおまへんどすか、減るモンほなおますまいしい。」

「僕が精神がガリガリ減っていくんです!! 良いから離して下さい!!」

「仕方があらしまへんね。ほして、御用件は何でじゃしょう?」

ようやく本題に入れます。

「詳しい事は聞かず、あの雲を跡形も無くぶった切ってくれませんか?」

「かな雲をどすか? そない簡単な事でよろしいさかい?」

「・・・簡単って言いますが、あなたねえ。なんの概念も無い普通の刀で天候変えるのってかなり滅茶苦茶な気がします。・・・まあ、もう慣れましたけどね。」

「お願いします。」

「分かったんや。ほな、5秒ほど待っていておくれやす。」

そう言つと、この変態は僕たちに目を向け……

シャリンシャリンシャリンシャリンシャリンシャリンシャリンシャリン！！

と、鉄と鉄を擦り合わせたような音が聞こえた瞬間、既に目の前で迫っていた雲は本当にさっきまでそこにあつたのかというぐらい、見事に散って行きました。

「ふう、これでええどすか？」

「ええ、完璧です。相変わらず、凄まじい剣速ですね？」

「いややわあ、褒めてもなんも出まへんよ？」

と言つて抱きしめてくる変態……もとい、一露葉^{いそは}。そう、この人物……人かどうかは内緒ですが、こいつの名前は一露葉と言います。名付け親は実を言つと僕です。どうでもいいですね。

「……さて、では、お帰り下さい。」

「かなんどす。」

え？

「久しぶりの外どすえ？　　うちは朧はんと楽しみたおす。」

「……やはり、イロハを出したのは早まったでしょうか？」

「あかんどすか？」

「……あのですね。イロハ、あなたわざとやってるでしょう？ 僕がそういう顔（上目遣い＋涙目）に弱い事知ってるからそういう事するんですよ？ そうですよね？」

「……わかりました。」

「やった！」「ただし。」「え？」

「少しの間は別行動です。京都にでも行って生八ツ橋でも買ってきてください。」

「ああん、いけずどすなあゝ。やて、よろしゅうおあがり。」

そう言って、イロハは京都に向かって飛んで行きました。……傘って、結構空気抵抗がありますけど、まあ、あの規格外なら無問題でしょう。

「さて、もどりますか。」

「はい。」

戻った後、皆さんにどこで何をしていたのかと問い詰められました。が、まあのらりくらりと回避しました。え？ ユーの歌？ しっかり録音機に録音してあります。抜かりはありません。まあ、何はともあれ、大成功でしょう。……僕だけ生で聞けなかったのが激しく遺憾ですけど。

「鑢。」

教室に戻ろうとしていたところ、アンダーソン君に呼び止められました。

「なんででしょう?」

「君から、ユークリウッドに言ってくれないか?」

・・・あー、『戻せ』という事ですか。

「お断りします。」

「・・・何故だ? お前なら分かっているだろう? このままじゃ
」

「僕は、どんな下種でも、その人生を楽しむ権利はあると思っています。ましてやユーです。今までずっと楽しいと言っ事を我慢してきましたんです。今日ぐらい、良いじゃないですか。」

「俺はね、今のこの生活が気に入ってるんだ。魔装少女がもし進攻を再開して、この世界を滅ぼそうとしたら、俺は全力で阻止する。だがな、ユークリウッドの能力で滅ぶのは守りようがない。・・・運命だから。」

・・・ハッ。

「運命がなんですか。そんな物に振り回されるぐらいに僕たちは脆いのですか? 否、少なくとも僕は運命など信じません。もし、運

命が僕の前に立ちはだかるなら、そんなもの、いくらでもぶち壊してやります。」

「・・・そうか、んじゃ、頼りにしてる。」

「任せなさいな。」

まあ、その後、普通に学園祭が終了して、皆各自教室に帰り、片付けの準備を開始しました。

で、当然の如く指揮を取ろうとしたハルナですが、突然倒れました。・・・限界、ですね。

「おいおい大丈夫か？」

「はしゃぎ過ぎたのですか？」

はしゃぎ過ぎでぶっ倒れるとは、どんだけはしゃいだのという事になります。まあ、良いです。

「限界ですね。」

「何が。」

「アンダーソン君、パス。」

「はいよ。ユークリウツドの魔力全てを受け止められる人間なんか、この世にもあの世にも、一人しかいないと言う事だ。鑢、パス。」

「はい。要するに、もう一杯なのに無理やりタイヤに空気を入れるようなものです。そりゃ倒れますって。」

「・・・さて、ユーはどうするのでしょうか？ 今回の件ははつきり言っただけは無効ですから。」

「ユークリウッド・ヘルサイズ・・・さん。」

友紀さんが頭を下げました。

「お願いします！ 師匠を元にも戻してあげてください！」

友紀さん・・・そこまでハルナの事を慕って・・・。さすがですね、ハルナ。人を引っ張っていくことも天才です。

「そのような事が、可能なのですか？」

驚いていますね。というか、友紀さんは僕とアンダーソン君の話を知っていたのでしょうか？

「・・・出来る。」

ユーの声は、申し訳ないと言う気持ちで一杯です。優しいユーですからね。今回の事で並々ならぬ罪悪感を感じていることでしょう。

「苦しんでいるハルナを救えるのに・・・それをしなかったというのですか？」

きつ、と目を細め、声を強めるセラ。セラはハルナとも仲が大変良

好ですからね。心境は複雑でしょう。まあ、ハルナの頭痛は全て僕が受け持ったので、少なくとも『痛い』という事はこの学園祭ではなかったはずですけど。

「セラ。」

「分かっています。」

「今日だけは……一日だけ、どうしても臆と楽しみたかった。」

「……ユー。」

「兎に角、師匠から能力を奪い取ってくれよ！　お願いします！」

「大丈夫……そうするつもりだから。」

ああ、この喋っているユーともお別れですね。次喋れるのは何年後か、何十年後か……。それよりも、

「ユー、今日は楽しめましたか？」

「とっても……臆に、言えるうちに、ずっと言っておきたい事を……言っておく。」

そう言うと、僕の方に歩いてきて、そっと耳打ちをしてきました。

「好きです。そして、いつも守ってくれてありがとう。」

ユーはそう言うと、照れくさそうに笑いました。僕が今まで、ユーと過ごしていて、一番の笑顔です。

「……………どういたしまして。」

あー、照れますね、こう、真正面から言われると。そして、遂にユーに能力が戻る様です。

「帰ったよ……………」

……………タイミングわっる!?

「フレイ……………空気読んでくださいよ。」

「ええ!?! 何!?! 私今までずっとあのバグ達から逃げ回って満身創痍でやっとこさ戻ってきたのにそれは無いよね!?!」

「あー、お疲れさまです。」

「今更だよ!?!」

それは良いとして、あちらの方は……………ハルナが何故か取り押さえられていますね。何があったのでしょうか?

そして、ハルナの額にユーの額が当てられます。

「……………ねえ、臍、さ。」

「ん? 何ですか?」

「・・・まさかとは思っけど、能力、使った？」

「・・・何故、ばれているのでしょうか？」

「正確には。呼び出した、です。能力は使ってません。」

「どの魔法陣から呼んだの？」

「・・・パンドラから。」

「ブツ!?!」

急に吐き出さないでもらいたいです。

「パ、パパパ、パンドラ!? なんだって急にそんなところから・・・いや、それは良いとして、誰を出したの？」

「イロハです。・・・否、ランダムの結果、イロハが出ました。」

「イロハ・・・ちゃん!? ちょ、臆! 何でいきなり『アレ』なの!?! いくらパンドラでむぐ!?!」

台詞の途中ですが、ちょっと口を手で防がせていただきました。

「声が、大きいですよ?」

「(コクコク。(」

全く・・・。

ユーたちの方は、もう終わりそうですね。これで、一件落着、

「これで、師匠はもうだいじょ

」

に、ならないんですね。

「そうですね？　ねえ？　クリス。」

おじさんの形を取っていたクリスは、魔装少女の魔力を吸い、もう既に・・・

「ふふふふふ。」

おじさんではなく、紛れもない、『最強』のクリスがそこにはいました。

第31話 一件落着と思つた時が、実は最も危ないのです（後書き）

隳「あとがきコーナー！」

フレイ「やふー！ いやー、今回も長かつたね！」

七実「色々詰め込みましたからね。」

フレイ「さて、今回魔法陣から出てきた謎の人物なだけど？」

隳「イロハですか？ というか、フレイは知っているでしょう？」

フレイ「知ってるからなお困ってるんだよ！！ なんであんなのだすかな！！ しかもいきなり！！！」

隳「ランダムですから。」

フレイ「それが良くない！！！」

七実「あの、私はあの人の事知らないんですけど、どういった人なんでしょうか？」

隳「変態。」

フレイ「抱き付き魔。」

隳「お茶大好き。」

フレイ「隳大好き。」

朧「京都弁。」

フレイ「それと……。」

朧・フレイ「「斬り裂き魔?」」

七実「随分、危なそうな人ですね……。」

フレイ「さーて、次回からはどうなるかな？」

臃「シリアスらしいですよ。」

作者「もしかしたら、シリアルになるかもです。」

朧・フレイ「「え？」」

第32話 人生山あり谷ありです。今は・・・丁度八合目ぐらいでしょうか？

油断した時が一番危ない。これは、殺しの世界では常識です。死亡フラグの中にも「ふう〜、危なかったあ〜。」なる物がある様に、油断したところを持ってかれると言う事は多々あります。かく言う僕もその被害者の一人です。油断したところ、七実にぶよ よで負けてしまったと言う失態があります。つまり、何が言いたいのかというと、

「えへへへ〜。やっと戻ったあ！ わーいわーいつ！」

油断していたところをクリスに持って行かれて、見事にクリス完全復活っ！ と言った感じですね。別段、そこまで驚きはしません。なんとなくですが、このタイミングで来る事は分かってましたから。だって、絶好の機会じゃないですか。友紀さんの身に付けているあの『指輪』。そして、クリスが持っている魔力を集めるあの道具。・・・これだけ分かっていたら、すでに答えは示されているも同然です。後は簡単、僕が冒頭で言ったように、油断したところを突いてお終い、と言ったところでしょうか？ 友紀さんを傷つけたのはちよつとあれですが・・・、まあ、ああでもしないと指輪は取れなかったでしょうね。

「あつ！ あんたはっ！」

ハルナは知っているようですね。ま、クリスは良くも悪くもヴィリ工では有名人。むしろ知らない方が常識を疑われるでしょう。

と、ユーが崩れ落ちました。魔力の移行は終わったようです。咄嗟に支えたので倒れこまないで済みました。

「ハルナ、知っているのか？」

それにしても、どのタイミングで僕はあっちに行けばいいのでしょうか？・・・いや、まだ敵対するとは限らないので、こっちで良いですか。

「知らない訳ないだろ！ バカか！！」

いやいや、少なくともこの場で知っているのはハルナを除いて、僕、七実、フレイぐらいです。あと、姿だけならサラスも知っている事でしょう。

「教えてもらえれば助かる。」

「あいつは・・・あー、いや・・・あの人は・・・うん。クリス。最強の魔装少女って言われてたクリス先生。大先生の大先生だっ！」

・・・あ、そうだったのですか。アリエルさんの先生というのは知りませんでした。まあ、クリスがアリエルさんを恨んでいると言うことぐらいしか知りませんでしたからねえ。まあ、そんなことはどうでもいいでしょう。

「ハルナ、友紀を止血してやってくれ。俺は・・・こいつと話があるんだ。」

「あ、止血はもう済んでますよ。」

まあ、未だに傷は痛むでしょうけど。

「えへへ、やっぱり個性って良いよね！ ね！ 臙！」

「「「は？」「」」

「・・・そこで僕に振っちゃいます？ 見て下さいよ、良い具合に皆さんが困惑しているじゃないですか。」

このタイミングですか？ え、僕はこのタイミングであっちに行くのですか？

「そんなの関係ないよ！ 帰って祝杯だよ！！」

「お酒ですか・・・、それより、おでんの方が良いのでは？」

「寒いからね。それも良いかも。」

・・・何でこんなにのほんとしてるのでしょうか？ 今はシリアスですよ？

「その前に。」

瞬間、クリスは友紀さんの目の前に現れました。

「ごめんね。おっさんのくりすだと、ああでもしないと絶対に吉田に勝てないんだもん。」

「え、えっと、その・・・。」

まあ、驚きますよね。突然、おじさんがこんな小動物の様な可愛らしい少女になったら。

そして、クリスは右手を上げたかと思うと、何かを高速で呟きました。記憶操作ですか。僕と七実とユー、そしてフレイには影響が及ばないようになっていますね。歩とハルナは魔装少女なので効きませんし。魔装錬器なしでの操作で、このコントロール。さすがですね。・後で効率のよい魔力の使い方でも学んでみましょう。イロハを出したとなれば、他の奴らも出てくるでしょうし。そう考えると、僕の魔力は順調に枯渇していつて・・・なんてこともあり得ますので・・・あ、いや、あり得ませんでした。良く考えたらあいつらは僕の害になる様な事はしませんからね。

「そんな！ 魔装錬器もなしに広範囲記憶操作をやるなんて！」
ぶっちゃけ、僕ってそこまで魔力多くないのですよ。まあ、多くないと言うか、クリスに比べれば、ですから、普通にしてみれば多い方なんですけど。

「あれあれ？ 相川すごい。男なのに魔装少女なんだあ。」

「ニューハーフってやつですよクリス。」

「うっせ。あんたこそ、おっさんなのか女の子なのか、どっちなんだ？」

今度は歩の所に瞬時に移動しました。・・・縮地に近いですね。点から点への移動です。僕も出来ない事は無いのですが・・・、悪刀を使う必要があります。

「えっへん。この姿こそが、くりすの真の姿だもんね。」

「第二形態とありますか?」

「ないよ!?!」

「ないそうです。こんなときまで七実はそういう事を聞きますか。」

「・・・ハア、で、クリス、どうするんですか? ヴィリエに殴り込みですか?」

「ん、それもいいんだけど、とりあえず観光かな?」

成程、地酒めぐりですか。

「質問、良いか?」

おおっと、歩を空気にしてしまいました。

「いいよー。」

「この学園祭で、何回か会ったよな? あるとき、既に真の姿だったのは何故だ?」

「くりす、お酒で酔っていると、元の姿に戻る体質なの。」

「どんだけ穴がある呪いなんでしょうね。まったく・・・あいつも容赦ない、用心深い割にはいい加減な仕事をしますね。」

「それで、ずっと酒を飲んでいたのか・・・聞かせてくれないか」

？ どうしてあんなおっさんの姿で、どうして俺のクラスの担任なんてやってたんだ？」

「聞いてくれるの？ くりすの話。」

ここは割愛します。否、聞き流します。この話は過去に耳にタコが出来るぐらい聞いてますから。

ですが、まあ、要約すると、クリスが女王に喧嘩売って、返り討ちで、呪い掛けられてヴィリ工追放、と言ったところでしょうか？

・・・やばい、典型的な雑魚キャラ臭がしますね。ですが、そもそも喧嘩売った相手が相手ですからね。魔装少女じゃ絶対に『ふうりんかじゃん』には勝てませんし、他の『魔装兵器』でも・・・勝てそうもありませんね。確か、アリエルさんはヴィネグレットをふうりんかじゃんにぶつけたいんですしたよね。まあ、他にも秘密兵器的な物がありそうですが、少なくとも、『過去』のふうりんかじゃんならいざ知らず、『今』のふうりんかじゃんには手も足も出ないでしょう。え？ 根拠ですか？ それはまあ、追々。

「臃。」

「なんででしょう？」

不意に、七実の話しかけてきました。

「臃は本当にクリスさんにつくんですか？ その場合、明らかに皆さん達が不利じゃないですか？」

「そうですね。ですが、七実。別に僕は歩たちを殺そうって訳じゃないんですよ？」

クリスたちが喋っている間に、七実とコソコソ会話します。

「確かにそうですが……。」

「……もう遠回しにせず、はっきり今回の僕の目的を言っちゃいますね。今回の件、目的は大まかに分けて2つです。」

「それは、理解しています。一つは、クリスさんの完全復活ですよね？」

「それと、護衛みたいなものでしょうか？ ヴィリエから色々来そうですし。で、二つ目は」

「臆は、何なんだ？」

突然、歩が僕に話を振ってきました。

「何、とは？」

「お前は、どつちなんだ？」

「……やばいです。完璧に話をスルーしていたので話の内容が分かりません。どつち……？ つまり、何か選択を迫られるようなことなのでしょうか？ しかもこの空気、尋常じゃありません……はっ、分かりましたよ！ 僕は……」

「そうですね……目玉焼きにはやはり、胡椒を掛けますね。」

「……私も胡椒ですね。」

どうやら七実も同じような事を考えていたようです。・・・思考回路でも似ているのでしょうか？

「・・・臃、それに七実ちゃん。さすがにそれは無いかな？ 空気読まないにも程があるよ？」

ハズしたっばいです。じゃあ、どっという質問なのでしょう？ どっち、ですよねえ・・・？あ、

「僕はFの好きです！」

「ペルソ も捨てがたいですー!!」

「「「いや違うからー!!」」

これも違う・・・だと・・・。ええい、ならば！

「電撃文が好きですー!!」

「角川文が好きですー!!」

「「「そこは富士見って言うところじゃー!!」」「「「

「「「どうしろって言うんですかー!!」」「「

「逆ギレかよ!？」

「臃、話聞いてなかったんだ・・・。くりす、ショック。」

「ハア、あのね」

（説明され中）

「ああ、なんだ、そんなことですか。深読みしすぎました。」

「深読みって・・・あの話の流れからどう考えたら目玉焼きの好みとか、好きなRPGとか、好きな文庫の話になるのか、フレイさん、全く理解できないよ・・・。」

「とは言われても、それが僕たちですから」

「「ねえ？」」

「二人がもう遺伝子レベルで仲が良い事は十分わかったよ。」

「ま、仲が良いですよ的な会話は終わりにして、シリアスな雰囲気でも出しましょうか。」

「いや、もう手遅れだからな？」

「で、僕がどっち側に付くと言うお話のようでしたが・・・歩、あなたは薄々気付いているではありませんか？」

「そう、むしろ気付かない方がおかしいんですよ。あの場で、僕とクリスに面識があり、仲も良好という事は知ったはずですから。」

「なら、やっぱりお前は・・・。」

「そうですね、歩。僕はあなたたちと、敵対します。」

そう、高らかに宣言させてもらいました。ユーは・・・悲しげな眼をしています。ですが、僕は謝ることもしませんし、後悔もしません。これは僕が、僕自身が『選んだ道』です。それなのに、此処でユーたちに謝るなど、僕自身を全否定しているようなものです。自分を否定する？ 自分を否定してどうするのですか。自分を否定してしまつたら・・・一体、何を肯定すればいいのですか。そんな、意味のない事、僕はしません。

『なんで・・・。』

「それに答える事は無意味です。理由を言ったところで、結果は変わらないでしょう?」

さあ・・・

「歩、どうしますか？ あなたは友紀さんを傷つけたクリスに落とし前を付けさせ、さらに、ハルナの魔力をクリスから取り戻させたのでしょ?」

「ああ、だから、そこをどいてくれ。」

「良いですよ。」

と言って、すすうーと道を開ける僕。歩はぽかんとしています。

「なんで・・・。」

「後に分かります。」

何故どいたか、簡単ですよ。歩は、クリスの脅威になりえないからです。まあ、クリスもお久ですので、リハビリぐらい・・・ね。

「まあいい。・・・ハルナ、あいつは最強の魔装少女って言っても、しよせん『元』なんだよな？」

・・・トサカに来ました。『元』は良いです。いや良くないですけど。しかし、『しよせん』？あの馬鹿は『しよせん』とのたまいましたか？・・・上等どころ。

『クリス。』

あ、コレ念話です。

『何？』

『予定変更です。僕もちよつと歩をボコします。』

『・・・もしかして、怒ってる？』

『もしかしなくても怒っています。』

「そつだ。今は大先生が最強だ！」

あんなの、ちよつと真面目に僕が戦えば指先を数センチ動かすだけで勝てるわ！！ そつホイホイ最強最強言わないでください。最強の言葉が軽くなります。

「やっちまつか？」

「うん！ やっちまえアユム！」

そして、最強は・・・クリスです。

一瞬でした。一瞬で手足を千切られ、心臓を鷲掴みにしています。

「ねえ、最強って何だと思う？」

楽しそうですね・・・。

「出し惜しみしない事だよ。さて、臃、こつた〜い。」

「もう良いのですか？」

「うん、相手にもならないよ。」

そうですね。そうですね。とりあえず、歩の体が完全に治るまで待ちます。上げて落とすのは基本です。

「臃・・・そこを退け。」

「退かせてみてください。」

「舐めんな!!！」

突っ込んで来る步。ああ、愚か。僕を相手に突っ込んでくるなど・・・

「世界を知りませんね。」

指を少し、動かします。それだけで、歩の上半身と下半身がお別れを告げました。

「なっ……。」

「自分が強くなったとも思いましたか？ 不死身だから、ちょっとやそつとのことで負けないとも夢想しましたか？ ……甘い、甘すぎます。」

ひょいっと、歩を糸に吊るしてマリオネットのようにします。

「クリスはさつき、最強とは出し惜しみしない事と言いましたが、僕の持論はこうです。……最強とは、切り札をいっぱい持っている物ですよ。まあ、何が良いのかというと、今まで歩が見てきた僕が、全てだと思わない方が良いですよ。むしろ、今までよくもまあ、僕はバカ正直にほぼ接近戦だけで戦ってきた物ですよねえ。」

スタスタと、悪笑を浮かべながら歩に喋りかける。笑い、嗤いながら。

「……なんなんだよ、お前は。」

「臆臆ですよ。それ以下でも、それ以上でもない。……さて、そろそろ終幕です。このまま消し去って上げましょうか？ 存在を。」

魔眼を久しぶりに発動させます。

「存在を……消す？ そんな事が出来るのか？」

「当たり前でしょう。僕が今までどうやって偽メガロを『殺して』

来たと思っっているのですか？ 全て消し去っているのですよ、存在を、魂を、跡形も無く。」

・・・ですが、まあ

「それをしようとする、ユーが言霊を使いそうですからね。今日経験してみても分かったのですが、あれはかなり痛いですし、今日の所はこれで済ませます。クリスは何か言いたい事、ありますか？」

「んー、そうだね・・・、くりすと敵対したんだから、次は無いと思っってね？」

歩の首を引っこ抜きながらそう言いました。

「じゃ、臙！ 行こー！！」

「では、またいつか。」

僕とクリスは、瞬動もどきでその場を後にしました。

（ユー）

どうして、なんでこんな事になったのか分からない。コンサートも成功した。臙にずっと自分の口で言いたい事も言えた。そして、何も起こらず、平和にこの学園祭も終わるお思っっていた。でも、そんなのは唯の幻想で、事実はどうだろう？

臙が、居なくなっってしまった。

何故？ どうして？ 何が原因なのか分からない。私が・・・私が居るから？ 私が居るから臃は居なくなってしまったの？・・・違う、あれは、臃が自分で決めた事。その臃が自分で決めた事を全て私の所為にするのは・・・臃に対する最大の侮辱になってしまう。そんな事は、したくない。しようとも思わない。ならどうするか。そんなの、答えはもう決まっている。

（連れ戻そう。）

なんで臃が私達と別れたのかは分からない。何か、考えがあるのかもしれない。でも、私は、それでも、臃の考えている事を全部無駄にしてしまっても・・・

私は、臃に、傍にいてほしい。

・・・以前の私なら、こんなこと考えなかったかもしれない。でも、今は違う。臃と出会って変わった。その変化を臃に見せる。私達は、確かに臃や、あのクリスと言う人よりも弱いかもしれない。いや、かもしれないじゃない。弱い。でも、それでも、何か伝える事はあらず。それに・・・『強さ』は何も、戦闘の事だけを指している訳じゃないと思う。思いの強さも・・・立派な『強さ』だ。

絶対に、連れ戻してみせる・・・！

（臃）

「この辺りで一番強い人？」

今、僕たちはその辺りの道をブラブラしています。理由は、クリスガリハビリしたいと言っているのです、それについてです。この辺りで一番強いねえ……。

「うん、隴達を除いた中で、一番強い人。」

僕たち……七実とフレイでしょう。それを除いた一番強い人……歩かサラスでしょうか？ ですが……

「殺すのは勘弁ですよ？」

「ぶー、分かってるよお。」

ま、好きにやって下さいと言う感じですが。僕が相手しても良いのですが、ちよつと魔力を久しぶりに消費したので若干だるいんですよ。歩ぐらいなら軽く捻れますけど。

「隴はん、いま戻ったんやよ。」

……戻ってくるの、早すぎじゃね？

「……何でこんなに早いですか？」

「八ツ橋ならしっかりこうて来やはった。安心おくれやす。」

「そういう問題じゃ」「へーな。」「むぐツ!?!?」「

八ツ橋を口の中突っ込んでくれやがりましたよこの変態。……

・美味しい。

「ハア~~~~、癒されまんねんなあ。」

「だ・か・ら！抱き付かないでくださいってば！！」

「ええではおまへんどすか、臍はん成分の補給どす。」

成分って何！？ 僕って温泉みたいに触ると何かあったりするのですか！？

「あれ？イロ八じゃん。出てきたの？」

今更！？

「まあ、クリスほなあらしまへんか。久しぶりでっせー。」

「うん、相変わらず何言ってるのか分からないけど、久しぶりー！」

何年ぶりぐらいでしょうね？ 僕が能力を持ったのが9歳、つまり分かりやすく言うと小3の頃で、クリスに出会ったのが12歳、つまり小6の頃です。そして、クリスとイロ八が出会ったのは僕がクリスと出会った時期とほぼ同じなので・・・

「3年ぶりぐらいでしょうか？ いやはや、時が過ぎるのは早いものですね。」

「そのセリフ、オジサンっぽいよ？」

「うちらにとってみれば、一時間ぐらいやったけどな。」

まあ、あの魔法陣・・・ぶっちゃけ倉庫の様な物ですが、保存状態を良くするために時間の流れがホントにすこぶる遅くなっていますからね。こちらの3年が、あちらでは一時間に感じられるぐらいには・・・あの理論作った後は一週間の糖分過剰摂取という健康に大変よろしくない食生活をしましたけどね。

「それにしても、外はやっぱりよろしおすなあ。」

僕を抱きかかえながら目をキラキラさせているイロハ。・・・僕は人形ですか。普通逆でしょうに。それよりも・・・

「斬らないでくださいよ？ 連続バラバラ変死事件とか発生しても僕なんとかしませんからね？」

「そない言うて、結局なんとかしてくれはるのが臍はんのええ所ですやる？」

「甘えんじゃねえ！」

「そない言いつつも？」

「・・・絶対になんとかしません。」

「いけずどすなあ。」

・・・も、やだ。

「ハア、めんどくさい。限りなくめんどくさい。際限なくめんどくさい。今のこの状況。ねえ、そうは思いませんか？ セラ、サラス、

そして歩。」

「いや、いきなり言われても困る。」

「まあ、そんなことはどうでも良くて、さっきぶりですね、歩。そして、んー、これまたさっきぶりですね、セラにサラス。」

まさか、イロハと良いあっているうちに再び、いや、こんなに早く再開を果たすとは夢にも見ませんでした。

「臆？ 何故この様なとこ」セラ、下がってる。「・・・は？」

「貴様、どういう！？」

風が吹きました。否、風というには少々優し過ぎますね。さながら、衝撃波とでも言いましょうか？ アスファルトが抉れるぐらいの。

「すごい。二人とも避けちゃった。」

・・・あ、本当ですね。セラとサラスは避けてます。歩は・・・モザイク指定ですね。

「・・・クリス、フライングです。」

「ぶー。」

「貴様はっ！？・・・まさか、本当にこの地に居るとはな・・・。」

ああ、そう言えばサラスは戦った事があるのですでしたっけ？ 良く生きて帰って来れましたね。さすがサラス、強いですね。

「サラス・・・奴を知っているのか？」

「前に話しただろう？ 私は以前、挑んだ事があるのだ。こいつが、伝説の鬼だ。」

「フフフ、鬼ですってよクリス。言いえて妙ですね。」

「こんな可愛い少女を鬼だなんて失礼こいちゃうね！！」

「臃は、その事を知っていたのか？」

「・・・ふむ、普通の彼女とは似ても似つかない、不安げな表情ですね。」

「・・・いや、普通、殺されると分かっているのに、それ教えますか？ 言ってみるならあれです。レベル1の勇者が、ラスボスである魔王に挑むかどうかというぐらい分かりやすい答えです。」

「つまり、臃は私が鬼に敵わないと？」

「はい、絶対に。だって、僕に勝てないじゃないですか。クリスに勝つのなら、僕を10秒以内に殺せなくてはいけませんよ。・・・もうちょっとはつきり言いましょう。『今』の、セラ、序でに歩では、僕に触れることすらできませんよ。」

「・・・ま、安い挑発です。引つかかるかどうかは知りませんが。」

「・・・今の言葉は、例え臃でも聞き逃せません。私は、あの家に来てからも、修業は欠かさずにやってきました。その日々を、否定

される訳にはいけません。」

「フッフ、なら、僕にその『日々』を肯定させてみなさい、『人外』。今の僕は、そこまで優しくありませんよ。・・・クリス、そちらは任せます。程々に。」

「はい。それじゃ、遊ぼうか？ 星川輝羅々さん。」

僕たちはとりあえず上空に飛び上がりました。・・・いや、あそこに居たらクリスに巻き込まれる可能性が万が一にもありますからね。

「・・・あ、イロハは僕が良いと言うまで手、出さないでくださいね？」

「え、折角、生モンが斬れへんのにどすか？」

「そうだ「余所見とは余裕だな？」」

正面から歩、そして・・・後ろにセラですか。1対2の定石、挟み撃ち。悪くない。コンビネーションも中の上と言ったところですが・・・

「甘い。」

歩の拳を捌き、そのまま歩の拳を後ろに受け流します。セラはそのまま歩むを斬りつけて尚、僕に迫ります。・・・って!?

ガキイン！！

「・・・常識が通用しねえなおい。」

「歩の使い方を教えてくれたのは臍です。」

そうでしたね。ゾンビなど、斬っても死なぬ、痛みも感じぬなので、捨てゴマにしなさい、と言ったのは僕でした。盲点。

苦無と葉の剣が罅迫り合います。本来、1対2の戦いにおいて、こうして罅迫り合いことはそのまま死に直結します。しかし、僕はあえてそれをします。何故、それは・・・

「（・・・手加減されている。）」

「フツッ、どうしましたセラ？ 僕程度の力ぐらい、すぐに弾け飛ばせるでしょう？」

「舐める・・・な！！」

セラは剣を振り抜き、僕は案の定、吹き飛ばされます。僕、力はそこまで無いですからね。まあ、刀が扱えるぐらいにはありますけど。吹き飛ばされた、という事はそこからの追撃があるはず。しかし、僕の目には未だにセラが移っています。・・・背後に歩ですか。後ろ取るのが好きですね。

「ですが、僕の後ろはそうそう、狙えませんか？」

吹き飛ばされたまま、腰だけを捻り、袖から出した刀で歩の首を狙います。出鱈目で、刀の使い方が成ってないですが、所詮使い捨て、武器に思い入れ皆無ですから無問題です。

「っ!？」

・・・避けられましたか。

「というか、歩。空に居ると言う事はもう既に魔装少女ですよね？
まあ、服装を見れば一目同然ですけど。」

「ああ、そうだ。」

・・・魔装少女になって、『コレ』ですか。

「・・・弱い。」

「何？」

「弱い、と言ったのです。僕が合わせる為に近接戦闘という物をやっているのに、二人掛かりでやってこれですか？」

「なら、お前の『本気』を見せてみるよ。お前の本気を、俺たちは倒して見せる。」

・・・言いましたね？ 『本気』で来いと。良いでしょう、機は熟
した。いつかは見せたわけです、それが今日というだけの事。

「良いでしょう・・・見せてあげますよ。イロハ！ 少しの間、相
手してて良いですよ。」

「ほんまどすかあ？ ほな、お言葉に甘えて。」

・・・フッフ、さあ、どれくらいの量にしましょうか？ 10？
20？ 100？ もっといけるでしょうか？ フッフ・・・。

「セラ」

事は突然起きた。私は何故か学校で寝ていました。

今回起きた事・・・ヘルサイズ殿の魔力の件ですが、私は今回の事でヘルサイズ殿が分からなくなってしまう。無論、その答えを探すために考えました。が、結局、ヘルサイズ殿との生活が長いとはいえない私では分からないようです。なので、ヘルサイズ殿と付き合いが長く、親しい臙に聞こうと思ったのですが、肝心の臙が居ません。この時点で気付くべきでした。臙が、片付けをサボると言うこと自体が既に異常事態なのです。しかし、その時の私は考え事で夢中でしたので、その事を見落としていたのでしょうか。結局臙に出会うまで、その事に気付きませんでした。

臙がどこに言ったのか、それを帰りを待ち伏せして変態殿に聞いたのですが、変態殿は言いにくそうな顔をして、口を閉ざしてしまいました。何かあったのでしょうか？ と、言い様のない不安が私の中に浮かび上がってきました。歩を問い詰めたのですが、中々口を開きません。そして、何故かサラスまで臙がどこに居るのか聞きに来ました。二人で聞いているのに口を開かない歩。遂に実力行使に出ようと思っていたところ、私が望んでいた人物の声が聞こえました。

「ハア、めんどくさい。限りなくめんどくさい。際限なくめんどくさい。今のこの状況。ねえ、そうは思いませんか？ セラ、サラス、

そして歩。」

めんどくさい、最近、よく臃が言っていて、もはや口癖になってきている。おかしい、確かに臃は面倒事、厄介事を嫌う傾向があります。それはまあ、人間にとつて普通ですし、当たり前前の事なのですが、それを口に出す事はあまりしませんでした。強いて言うなら、臃の家賊を探す際の道中、かなりの頻度で「めんどくさい。」と言っていました。つまり、臃がめんどくさいと口に出すときは、大抵本当に『めんどくさい』事なのでしょう。それを、何故、今言うのか。分かりませんが・・・さつきから臃を抱きかかえている女性の原因なのでしょう。現に、臃は引き剥がそうとしています。女性はその意に介さず抱きかかえています。・・・腹ただしい事この上ない。

「いや、いきなり言われても困る。」

・・・何やら空気が不穏です。私達が眠っている間に臃と変態殿の間に何かあったのでしょうか？

「まあ、そんなことはどうでも良くて、さつきぶりですね、歩。そして、んー、これまたさつきぶりですね、セラにサラス。」

とりあえず、今は臃と歩の間に何が起きたのか、原因の究明が先ですね。

「臃？ 何故この様なとこ」「セラ、下がってる。」「・・・は？」

何故、下がる必要があるのでしょうか？ 何故、臃をそんな仇敵を見るような眼で見ているのでしょうか？ 私が寝ている間に、何が起きたと言っているのですか？

「貴様、どういう　　!?!」

サラスも疑問に思っていたようで、変態殿に詰め寄ろうとしていましたが、突然、衝撃波らしきものがこちらに迫ってきました。私とサラスはなんとか回避出来ましたが、変態殿はまともに喰らい、スプラッターな事になっています。

「すごい。二人とも避けちゃった。」

この場に似つかわしくない、可愛らしい声が響きました。

「クリス、フライングです。」

クリス・・・というのでしょうか。臙の知り合いか何かでしょうか?・・・何故、臙の知り合いには女性の方が多いのでしょうか?あれですか、最近七実に教えて頂いた『フラグ体質』というやつなのでしょうか?

「ぶー。」

「貴様は!?!?・・・まさか、本当にこの地に居るとは・・・。」

サラスも知っているようです。

「サラス・・・奴を知っているのか?」

「前に話しただろう? 私は以前、挑んだ事があるのだ。こいつが、伝説の鬼だ。」

伝説の、鬼。私の試練で倒さなくてはいけない相手。そこで、また新しい疑問が生まれます。

何故、その鬼と一緒に、臃は親しげに話しているのか？

「フッフ、鬼ですつてよクリス。言いえて妙ですね。」

「こんな可愛い少女を鬼だなんて失礼こいちゃうね!!」

「臃は、その事を知っていたのか？」

そうです。もし、知っていたのなら、私に教えてくれても良かったはず。

「無論です。全部知っていましたよ。担任の栗栖が、クリスだと言う事も、セラの倒さなくてはいけない鬼が、クリスだと言う事も。」

「どうして・・・黙っていたのですか？」

不安・・・でした。明確な理由は分かりませんが、まるで臃が私達の知らない所で何か重要な事をしているようで。そして、私達に必要な事は一切教えず、自分だけで全部解決してしまいそうで。

「・・・いや、普通、殺されると分かっているのに、それ教えますか？ 言ってみるならあれです。レベル1の勇者が、ラスボスである魔王に挑むかどうかというぐらい分かりやすい答えです。」

つまり、臃はこう言っているのです。

「あなたたちは弱いので教えたところで簡単に殺されてしまいます。」と。

臙は、私達の事をこう見ていたのでしょうか。弱い存在。確かに、臙に比べればそうかもしれません。ですが、私も日々修行をしています。ずっと弱いままではありません。

「つまり、臙は私が鬼に敵わないと?」

「はい、絶対に。だって、僕に勝てないじゃないですか。クリスに勝つのなら、僕を10秒以内に殺せなくてはいけませんよ。・・・もうちょっとはつきり言いたいですよ。『今の、セラ、序でに歩では、僕に触れることすらできませんよ。』」

・・・それは、聞き逃せません。

「・・・今の言葉は、例え臙でも聞き逃せません。私は、あの家に来ても、修業は欠かさずにやってきました。その日々を、否定される訳にはいけません。」

例え、今のが挑発するための言葉でも、聞き逃せません。もし許してしまつたら、それは今まで修行してきた自分への侮辱です。いくら私が臙に惚れているからと、それだけは許せません。

「フフフ、なら、僕にその『日々』を肯定させてみなさい、『人外』。今の僕は、そこまで優しくありませんよ。・・・クリス、そちらは任せます。程々に。」

ならば、肯定させてあげます。私達が決して、臙が思っている程弱くない、と。

上空に上がり、変態殿の傷が癒えるまで臙はずっと待っていました。余裕……なのでしょうか。

「……あ、イロハは僕が良いと言っただけで手、出さないでくださいね？」

「え、折角、生モンが斬れへんのにとですか？」

「そうだ「余所見とは余裕だな？」」

先ほどの女性と話していたところ、歩が仕掛けました。私はそれに合わせ、臙の後ろに回り込みます。

「甘い。」

その言葉と共に、臙は歩を受け流し、私の方に押し付けてきました。私はそれを切り裂き、臙に肉薄します。

ガキーン！！

鏝迫り合います。

「常識が通用しねえなあおい。」

言葉遣いが崩れるほど驚いているようです。

「歩の使い方を教えてくれたのは臙です。」

そう、歩の使い方を教えてくれたのは臙なのです。恐らく、私と歩

が一緒に妖怪を討伐していたので、より効率的に討伐できるよう、教えてくれたのでしよう。

臙曰く、

「二人で共闘する場合、お互いの実力が拮抗しているか、あるいは天と地ほど離れている場合が一番やりやすいのです。何故か、まず、実力の拮抗、つまり、お互い、次に何をするか大体考えが同じという事です。で、天と地ほどの場合ですが・・・ま、これはコンビネーションも何もないですね。天の方が地をひたすらフォローするだけです。まあ、どちらがよりよいチームなのかはわかると思いますが、当然実力が拮抗している方です。ですが、いくら実力が拮抗していて、お互い何をするか分かっていても、互いの動きの邪魔にならないように動かなくてはいけません。まあ、仕方のない事です。ですが、セラのコンビ・・・歩としますが、歩はゾンビ。傷ついても再生しますし、死にません。痛みも無しときています。言いたい事が分かりますか？ 要するに、もし歩が何らかの邪魔になった場合は、歩もろともやれば良い訳です。相手の意表も突けますし、」

と。
つまり、今回はその臙の言葉通りしたわけです。しかし、2対1の戦いにおいて1の方が動きを止める事は自殺行為です。それを行うと言う事は・・・

「（手加減されている。）」

「フフッ、どうしましたセラ？ 僕程度の力ぐらい、すぐに弾け飛ばされるでしょうっ？」

「舐める・・・な！！」

純粹な腕力なら私は臙の数倍強いです。鏢迫り合いの状態から吹き飛ばす事は造作ありません。

そして、歩は私達が鏢迫り合っているうちに後ろに回り込んでいました。それを見越し、臙を後方に思いつき飛ばしました。

しかし・・・それで終わるのならそれは臙ではありません。病弱で虚弱、防御力など障子紙に等しいですが、だからこそ、臙は攻撃を受け流す術に長け、攻撃を受けない事に長け、気配を読むことにも長けているのです。

「僕の後ろはそうそう、狙えませんか？」

臙は飛ばされながらも、腰だけを後ろに捻り 相変わらず柔らかいですね 袖から刀を出して歩の首を狙いますが、それは回避されたようです。・・・刀の使い方は出鱈目ですが、臙にとってはそれは消耗品。使い捨ててなんぼの武器ですから、むしろそれで良いでしょう。

「・・・弱い。」

弱い？

「何？」

「弱い、と言ったのです。僕が合わせる為に近接戦闘という物をやっているのに、二人掛かりでやってこれですか？」

確かに、臙は近接戦闘も出来ます。むしろ、かなり強いのですが、本人も言っているように近接戦闘よりも、中々遠距離の方が臙は強いのです。・・・実際に見た事はありませんけど。

「なら、お前の『本気』を見せてみるよ。お前の本気を、俺たちは倒して見せる。」

その時、臆の雰囲気が変わりました。何が、とは明確に言えませんが、兎に角変わったのです。

「良いでしょう・・・見せてあげますよ。イロハ！ 少しの間、相手してて良いですよ。」

「ほんまどすかあ？ ほな、お言葉に甘えて。」

と言つて、彼女・・・イロハと呼ばれた人が前に出てきました。

「一露葉と言いますわ。まあ、よろしゅう。」

・・・なんでしょう。彼女からは、何かとてつもない様な物を感じます。そう、これは、絶対に戦つてはいけない、そう感じます。こんな感覚、感じたこともありません。

圧倒的強者、その威圧が肌をヒリヒリさせます。

「（・・・歩。）」

「（ああ、分かってる。あれはヤバい。）」

「どないしたんや？ 来ーひんのどすか？」

・・・余裕ですか。傘を閉じたり開いたりしています。あの傘が武器でしょうか？ しかし、見た目はなんの変哲もない唯の番傘です。

「（セラ・・・俺が先に行くから、お前は後詰めを頼む。）」

「（分かりました。）」

「・・・難儀な。おこしやすくねやらのどすか？」

つまらなそうな、本当につまらなそうな顔をした矢先、歩が彼女に突っ込みました。

・・・その時の彼女の顔はまるでお預けを解除された純粋な子供の様でした。

シャリン。

「んー、やっぱりええなあ。生モン斬るのは。」

「「・・・え？」」

意味が分からなかった。彼女はその場から動いていない。ただ、歩が彼女の傍を素通りしただけです。それに、彼女の発言、斬る、とは一体どういう意味でしょうか？

「トコで・・・あんさんは斬られても喋る事の出来はる生モンなんえかあ？」

「・・・が。」

刹那、歩の腰が、首が、ズレた（・・・）。ずるずると、重力に従って下に落ちていく。

「歩！！」

私はそれを支えようと前に……

「シャ」

「イロハ、やり過ぎです。」

「なっ！？」

気が付いたら首に向かって刀……よりも細い剣が振り抜かれようとしていました。臍が止めなかつたらと思うと……ゾツとします。その剣はあの番傘から出てきていました。私がそれを視認する事が出来たのは、完全に抜刀される前に臍が止めたため、分かつただけで、止められるまで、いつ剣を手に持ったのか、いつ抜いたのか、全く見えませんでした。

「あーん、ええ所どしたのにい。」

「良いじゃなくてですね、僕斬らないでって言いましたよね？」

「ストレスの溜め過ぎはよーへんのどすよお？」

ストレス……人を斬る事で解消されるのでしたら、この女性は危険ですね。

「五月蠅い変態。それと、もう準備できたので良いですよ。」

「これからがええとこどすのにい。」

・・・準備が出来た？　そう言えば、臃は何やら後ろでやっていたように見えましたか・・・。

「ほんまなん？　一体どなたはんを出すのどすか？」

「いえ、僕が今回出すのは『雑兵』です。」

雑兵・・・？　さつきから臃達がなんの話をしているか分かりません。

「雑兵？　また何でそないなモンを？」

「いや、久しぶりですからね。『何人までなら大丈夫か』調べるだけです。」

・・・なにか、あるのでしょうか？　臃にはまだ何か秘密があったと言っのでしょうか。

「ま、そんな事ならウチは引きまんねん。トーさん、ひと時の楽しい時間をおおきにねえ〜。」

・・・トーさん？

「お嬢さん、という意味ですよ。いやはや、他の地方の方言は難しいですよね。まあ、それは兎も角・・・。」

唐突に、臃は何時も付けている七実さんとお揃いの髪留め　　すごく羨ましいです　　を外しました。

瞬間、今まで抑えていたかのように魔力が臃の内から溢れだしました。ですが、それほど多いと言っわけでもありません。普通よ

りも少し多いと言っぐらいです。ですが、それ以前に私は臙が魔力を持っていた事に驚きを禁じえません。臙にはまだ秘密があったようです。一体、あと何個秘密があるのですか。

「・・・開け放たれた箱の中から今こそ解き放つ。」

その言葉と同時に、臙が空中にも関わらず、脚で何かを踏むように前に出しました。

瞬間、臙を中心に何らかの巨大な陣が空中に浮かびあがりました。そして、目も眩むほど強く発光したと思ったら。

「フッフ・・・お初にお目にかかります。『死神』臙改め『人形遣い』臙です。さあ、覚悟して下さい。今から始まるのは『戦闘』ではありません、『戦争』です。・・・それでは、『人形戦争』を開始します。」

視界は、およそ100人の『人形』で一杯になっていました。

第32話 人生山あり谷ありです。今は・・・丁度八合目ぐらいでしょうか？

朧「あとがきコーナー！」

作者「あー、疲れました。最近小説の文字数が14000ぐらいになっていきます、ハヤテです。何故、こつも長くなるのでしょうか？」

七実「まとめる能力がないのでしょうか。」

朧「その通りです。」

作者「うぐ、心が痛い・・・。」

フレイ「まあ、そんなどうでも良いこと」「どうでも良い!？」は放つておいて、遂に朧の能力が明らかになったねー。『人形遣い』・・・
・具体的にどんなことができるの?」

朧「いや、フレイは知ってるでしょう?」

フレイ「形式的に聞いておこうかと。」

朧「あ、そう。まあ、詳しいことは本文で説明が入ると思うので、ざっくりいきますね。創る、操る、直す、以上です。」

七実「本当にざっくりですね。」

フレイ「人形にも種類があるんだよね?」

朧「はい。今回出てきた『雑兵』はその名の通り、雑兵です。軍隊

で言うと一般兵です。まあ、一応創る側としては色々こだわる必要があるのですが、しっかり顔にも眼、鼻、口、耳、髪の毛、歯もあります。ぶつちゃけ、人間とそう変わりありません。」

七実「血とかは出るんですか？」

朧「出るやつもいます。」

フレイ「イロ八ちゃんとか？」

朧「・・・あの辺りは特別と言いますか、なんと言いますか、雑兵が完全遠隔操作型ならイロ八は完全独立型ですからね。」

七実「種類があると言いましたが、『雑兵』、『パンドラ』以外に何かあるんですか？」

朧「んー、そうですね・・・と『將軍級』があります。後は・・・『ネタ』です。『將軍級』はほぼ独立型で、僕の代わりに人形を操り、独自の部隊を持っていたりします。まあ、操れる量は僕の比ではないですけど。」

七実「どのくらい操れるんですか？」

朧「將軍級が50だとすれば、僕が300です。」

七実「・・・色々ツッコミたいですが、まあ良いです。それより『ネタ』とはなんですか？」

朧「・・・僕がちよっと趣味で創ってしまったものです。」

フレイ「ふーん、例えば？」

朧「・・・エヴァンゲリンとか、ストライクフリーダムガンムとか、マジン、ーZとか。」

七実「なんてももの創ってるんですか!!」

朧「良いじゃん！ 創ってみたかったんだもん!!」

フレイ「幼児退行・・・。それにしても、人形遣いって、主人公っぽくないよね。」

七実「確かにそうですね。私の知っているところだと、某忍者漫画のカンク、ウヤ、攻殻機動、や、アリス・マーガ、ロイドぐらいしか思い浮かびませんよ?」

朧「五月蠅いですね!! 前にも言いましたが、僕に主人公性を求めないでください!! あ、それと、僕の場合は攻殻機動、みたいな感じです。ハッキングじゃないですけど。」

フレイ「まあ、主人公っぽくないってことで。」

朧「ドやかましい!!」

七実「そう言えば、今回私空気ですね。」

朧「特に後半が、ですね。」

七実「・・・くすん。」

朧「泣いた!？」

作者「ここでちょっとお話が二つ程あります。まず一つ目ですが、これはまあ、なんと言いますか、人形の募集です。」

臃「作者の貧困な発想力ではそうそう思いつかないのですね。」

作者「コホン、とにかく！ 読者の方々がふと思いついたものでも何でも良いので、『こんな人形、面白いんじゃない？』や『こんな人形が居れば良いな。』みたいな感じで、皆様のアイデアを募集したいと思います。皆様のアイデア、心よりお待ちしております。」

臃「二つ目は、そろそろテストが近いので、小説の投稿が少々止まるということです。テストが終わるのは再来週の・・・何時ぐらいですか？」

作者「時間が空くのは再来週の木・金ぐらいですね。」

臃「らしいです。何卒ご容赦ください。」

作者「それでは！」

第33話 人はいつの間にか強くなっています

どうもついでにさつき新しく『人形遣い』の称号をゲツチユした臚です。いえ、この能力、発現したのは僕が9歳のころなのでどっちかというところ『死神』よりも『人形遣い』の方が早いです。．．．まあ、『人形遣い』はあまり知られていないのですが。それは兎も角．．．

「兵法にもある様に、戦争とはより多くの兵を集めた方が勝つ確率が高いです。無論、一騎当千の将による一発逆転もあり得ますが、そんな博打みたいな不確定なものにあまり頼りたくは無いです。まあ、一騎当千どころか一騎当万出来る人が居たなら話は別ですけど．．．さて、セラ、歩、どうしますか？ 『今の』僕に操れる量はたったの100程度ですが、もう少し頑張ればあと50ぐらい増やせそうです。」

僕の人形の操り方は少し変わってると思います。僕の知っているマンガなどの人たちは糸などで操っているのが多いですが、僕の場合はまあ、糸でも操れます。ですが、糸は遊び、本当の操り方は．．．頭です。人形に脳から指示を飛ばせるようにして操ります。これ、糸で操るよりも簡単だと思った方、舐めちゃいけません。確かに、お遊戯程度の動きで良いのなら誰でもできるかもしれませんが、僕の場合はこれで戦闘をするのです、より精密に、より効率良く動かさなくてはいけません。まあ、感覚的には格闘ゲームですね。コントローラーのボタンが100個以上ありますけど。

「．．．なんですか、この人たちは。」

「人？ 否否、人ではありません。これは僕が作った『人形』です。」

「・・・人形？」

まあ、人間に見えますよね。僕のこだわりで『より人間っぽく』しましたから。まあ、『雑兵』には意思も人格も無く、ただ単に僕と『隊長』が操るためにある物ですから。

「・・・で、どうしますか？ 今なら逃げてでも追いませんよ？」

僕としても逃げてくれた方が楽ですし。

「誰が・・・逃げるかよ!!」

そう言つて、歩が僕に拳を振りかぶり、突っ込んできます。が・・・

「なっ!?!」

僕の周りには1000の人形達が居ます。僕がそれで歩を防がない筈がない。脳から指示を飛ばし、歩の前に立ち塞がります。

「僕の所に行きつくには、まずこの人形達を全部壊さなくてはいいけませんよ？」

「上等だ!!」

人形に迫る歩。・・・このゾンビ、本当にバカですね。たかが人形と侮っているのでしょうか？ その点、セラは良いですね。とりあ

え、歩に突っ込ませて、自分は様子見と言ったところでしょうか？
とりあえず・・・あの馬鹿を沈めますか。
脳から人形に指示を飛ばし、歩の右ストレートをかわし、逆に歩の
腹に膝を入れます。

「ゴフツ！」

「ハア・・・歩はバカですか？ たかが人形と侮ることなかれ、こ
の人形達には僕が直接指示を出しているのです。つまり、身体能力
は兎も角、体術の技術はまんま僕そのものという事です。」

「・・・つまり、この人形たちは臙が直接操っている？」

「？ その質問に何の意味があるか分かりませんが、そうですねよ。」

「そうですね・・・なら！」

・・・まさか、

「この量は捌ききれない筈です！ 飛剣、百鬼漸殺！！！」

大量の木の葉が僕の視界を覆い尽くしました。

くフレイ

んー、また派手にやってるねえ。臙も数年間ちょっと訳ありで封印
していた能力使っちゃうしさ。まあ、このタイミングがある意味

ベストなのかもしれないけどね！

「死神、あのような攻撃を喰らって臃は大丈夫なのですか？」

「ん？ あれあれ？もしかして七実ちゃん、心配してるの？」

「空気読めバカ死神。」

・・・最近、私の扱いが悪いと思っちゃうんだよね。

「分かったよ。で、臃だっけ？ だいじょーぶだいじょーぶ。全く問題になってないよ。少なくとも今の臃に勝てる人なんて・・・居るけど、それでもたぶん勝てないよ。」

「良く分かりませんね。何故です？ 今の臃は人形を制御することで精一杯。そんな時にあのような物量で攻められたら回避できる訳がありません。」

ん、七実ちゃんは誤解してるね。臃の臃たるるところを全く理解してないよ。

「七実ちゃんさ、精一杯って言ったけど、それはちょっと違うよ。」

「・・・どういう事です？」

「臃の人形の操り方は脳で指示を飛ばして人形を操る・・・って、思ってる？ まあ、それを間違いないからたぶん臃もこうやって説明するんだろうけど、実際は違うんだよね。正しくは、『髪の毛の先から伸びた斬れない糸を通して、臃の思考のままに人形達が動く』だよ。」

要するに、自分の右手を動かしているみたいなものだね。

「・・・ちよつと待って下さい。それはおかしいです。」

「ん？ 何が？」

「思考して動かすと言いましたよね？ ですが、あそこに居る人形は100体。どう考えても人間が同時に思考出来るレベルを超えています。5〜6ならまだ良いかもしれませんが、同時に100の物事を考えられるのですか？」

「分割思考・・・って知ってる？」

「分割思考？ まあ、言葉の意味通りなら分かりますけど。」

「うん、これね。普通に人間なら限界が5個ぐらいなの。改造人間・・・七実ちゃんに分かりやすく言うとキラ・ヤトくんみたいな場合は10個ぐらい出来るんだろっけどさ。・・・でも。」

「いやあ、この結果にはさすがの私も吃驚仰天だったね。なにせ、前世の時点で・・・」

「前世の時点で臍の分割思考の個数は・・・85個。」

「・・・は？」

「因みに私が15個。これでどのくらいこの数値が異常なのか分かる？」

私の・・・死神の5倍だよ5倍。意味分からないよ。・・・あ、8
5がどれくらいすごい事なのかって言うと、んー、そうだね、とり
あえず、スパコン並みとでも言うっておこうかな？いや、私もこの辺
りは良く分からないんだけどね。

「それ、前世で、ですよね？」

「そだよー。で、今の分割思考の個数は・・・。」

・・・何でこんな馬鹿げた数値になったか知らないけどね。

985個、だよ。

〈臍〉

くるくる回す。その度に思考が割れていく。

くるくる回す。その度に新しい『僕』が生まれていく。

くるくる回す。くるくる回す。くるくる回す。くるくる回す。くる
くる回す。

「そんな・・・。」

目の前の視界が晴れ、セラと歩の姿がしっかりと確認できます。

人形たちは見るも無残。手足がないのは当たり前。原形を留めてい
ない物もありますが、それでも、僕は無傷。かすり傷一つ付いてい

ません。

「人形の良いところ。それは、どんなに損傷が激しくても僕の思った通りに動いてくれる事です。さすがに、核のある頭を壊されたら僕が糸を使い、手で動かさなくてはならないのですが、実質、頭さえ壊れなければ人形たちは動きます。これほど優秀な兵士は居ないでしょう。」

人間の兵はダメとは言いませんが、痛みやら感情やらがある時点で僕の操る人形達には勝てません。・・・ん？ ああ、僕にも感情はありますが、『消す事』は可能なので大丈夫です。何が大丈夫なのか分からない上に、僕もまるで人形のようにですね。まあ、思考は出来ずから違うと言えば違えますけど。

先のセラの猛攻で、頭が無事で損傷のほとんどない人形が一体、頭が無事でも損傷が激しいのが57体。残りは今頃下に落下してクリスたちの戦闘妨害でもしているでしょう。

「・・・あれ？ 一体残ってるのですか？」

いや、実際に目で見たわけではなく、髪先端から伸びた糸を伝って分かった事なのであれなのですが、おかしくないですか？ 一体を残し、残り全部が損傷あり。うん、おかしい。僕は雑兵をそこまですりつぶして操りません。先の攻撃も、全員であまりなく防がせた筈です。なのに、まるで『意思があるかのように動いた』様な人形が雑兵の中に居るとでも？ いやいや、無いです。それだと、雑兵が雑兵である意味がなくなります。・・・まあ、ぶつちやけるとイロハを含めた『パンドラの住民』も、『隊長級』も、元を正せば雑兵なので可能性は無きにしも非ずなのですがしかし・・・。

「・・・あれ？」

その残り一体の方を見てみると・・・他の人形達よりも明らかに小さいと言うか、大きさに言うと僕の頭の上にちょうど乗るぐらいの緑髪のナイフをジャグリングして、ケケケ、ケケケと笑っている可愛らしい殺戮人形が・・・って!?

「戦争中ですがちょっと失礼。スウーーーーー、茶々アアア!! ? あなた何でここに居るんですか!! 何時! どうやって!! そして何故!! 詳しく説明なさい!! 出来なければ火炙り!!」

「おーおー、怖い御主人だぜ。」

「怖くて結構!! 良いから説明なさい!!」

「そつだなー、出てきたのはさっき。いつの間にか、原因不明でって感じだな。オレもいつの間にかって感じだしよお。」

・・・まあ、嘘じゃなさそうですね。しかし何故茶々が・・・あ、名付け親はイロハです。仲がよろしいです、で、茶々は一体何故雑兵の中から出てきたのでしょうか? あれは本来隊長級に居る存在です。・・・まあ、隊長級にも色々あるのですけどね。各隊の隊長並びに副隊長。そして、料理長、副料理長、殲滅部隊隊長、副隊長、諜報部隊隊長、副隊長、冥土長、副冥土長 誤字にあらずです

メイド長、副メイド長等々、まだあるのですが一応色々分けてあります。因みにメイド長は封印してありません。僕の保有する館の管理を任せています。・・・あ、そう言えば『パンドラ』からも一人派遣してありましたね。元殲滅部隊隊長なのですが、今頃どうしてるでしょうね。

因みに茶々は副冥土長です。冥土部隊は主に戦闘、というか、一に

戦闘二に戦闘、三・四も戦闘五に戦闘と言った戦闘狂集団の集まりです。出したら最後、大地に血の海が出来ます。余談ですが、イロハは元冥土長です。さらに余談ですが、元殲滅部隊隊長で現パンドラの人の場合は、血どころかコンクリートすら残りません。残るのは砂ぐらいです。

「ところで御主人、あいつらやって良いのか？」

「やめてくださ．．．いえ、存分に相手してあげちゃってください。」

「ヤッホー！！ んじゃ、行ってくるぜ！！」

まあ、茶々ならなんとか退けられるでしょう．．．小回り利きますし、ナイフの扱いが半端なくうまいですけど。

「茶々ちゃんほならしまへんかあ。久しぶりどすなあ。」

「そう言えば、あなたの副隊長でしたね。後で駄弁りますか？」

「そらええどすなあ。序でにおぶ屋に行けたら申し分なしでっせ。」

集りにきやがりましたよ。

「そーですねー。」

それは兎も角戦況は．．．芳しくないですね。セラと歩の方が。セラが燕返しを放ちますが、茶々はそれをナイフ二本で受け止め、逆にその受け止めた時の衝撃を利用して後ろに跳びそのまま歩に蹴り

を放ちます。蹴りがもろ鳩尾に入りました。ゾンビなので痛みはなさそうですが、ダメージは深刻そうですね。主に肺の。

あ、歩が突撃しました。一気に勝負を決める気ですか。歩がチェーンスローを矢鱈滅多ら振り回し、セラは茶々に出来た隙を見逃すことなくそこに打ち込んで行きます。成程、歩のパワーで押し、セラの技術で詰めていく。良い戦法ですね。茶々にはそれが一番良い戦法です。なにせ、いくら小回り利いても、ナイフの扱いがうまくても茶々は僕の創った人形の中で一番軽い人形ですからね!! え? 大きさ? 僕の頭にちょこんと乗るくらい?

「ケケケ! あいつら強いな。」

「ん? まあ、茶々と同じくらいではないでしょうか?」

ぶつちやけると、茶々・・・というより、副隊長は隊長格と比べてしまうと天と地ほどの差があるのですよ。そもそも副隊長の役目は隊長補佐、並びに隊長制御です。うん、言いたい事は分かります。補佐は納得いきますけど、制御は納得いかねえ! って感じなのですよね? ええ、僕も納得したくなかったですし、理解したくも無かったですよ。まあ、しょうがないのですよ。地球でリングが地面に落ちることぐらいしょうがないのです。制御の訳、はつきり言います!

全員、頭のねじがぶっ飛んでるんですよ。

特に殲滅部隊隊長と料理長が。いや、そもそも考えてみてください。イロハは今でこそパンドラ入りして隊長ではありませんが、元々は隊長です。分かります? 隊長格は精神科に行った方がよいのではないかというぐらい頭がおかしいのです。特に殲滅部隊隊長と料理長。具体的には

「お前の人形は全部壊れただろ？」

「はっ、御冗談。人形ですよ？ 核さえ壊れなければ……。」

57体の人形を同時操作。

「いくらでも動かせるに決まっているでしょう？」

「一斉に飛び掛かります。個々の力は弱くても、塵も積もれば山となると言っわけです。」

「龍牙雷神衝ッ！！」

「らあああッ！！」

雷が走り、チェーンソーの肉を斬る音が響き渡ります。数の暴力でも、さすがに一番へばい雑兵では勝ち目無しですか。いくら技術は僕でも、それを完璧に表現できるかどうかと言われたら僕は否、と言います。いや、そもそも人形では僕の動きはどれだけ素晴らしい性能を持っていようと、十全には出来ません。良くて8割でしょうか？

「というかこの人たち、さっきまでと強さが全く違うじゃありませんか。あれでしょうか？ テンションによって強さが変わると言うやつでしょうか？ もう残っている人形も少ないですよ。」

「秘剣！ 燕返し！！」

「……全滅しやがったよ。」

「・・・臃。」

チャキと刀を僕に向けて構えるセラ。

「・・・よろしい。イロハ、ちょっとあそこに居るゾンビの相手、任せますか？」

「任せてーな。」

・・・結局、人形は茶番でしかありませんでしたね。最終的には自分でやるのですか。

「・・・行きます！ 秘剣！ 燕返し！！！」

「む。」

キーンキーン！！

返す刃で相手に止めを刺すこの燕返し。速い、初撃も二撃も既に達人に近い域かもしくは入っているかもしれない。

近距離では分が悪い。上空へ跳び上がり、息を大量に吸い・・・

「ハアツ！！！！！」

『手裏剣砲』 応用版『刃物大砲』！！

この技の元々は体内に収納した手裏剣を一気に吐き出す技ですが、僕はこれを改良し、手裏剣だけではなくあらゆる刃物を吐き出します。刀、ナイフ、西洋剣等々。

・・・あー、中には妖刀とかあったかもしれない。ま、良いでし

よう。どうせ貰い物です。それに、本当に貴重な妖刀の類は、イロハに保管してもらっています。好んで使用しているのは普通の刀ですけどね。閑話休題。

「っ！？ ハアアアア！！」

その吐き出した刃物をその剣で自らに当たる物だけを弾き、さらに僕に迫ろうとしています。それを苦無を投げて牽制。同時に5、6本投げていますから、接近は出来ないと悟ったのでしょう。セラもそのまま苦無を投げて応戦してきます。

「（ギリ貧ですね……。ならば！）」

苦無を片手で投げつつ、もう一方の手の袖からデザートイーグルを取りだし、構えます。

「なっ！？」

セラもこの銃の事は知っていたのでしよう。自動拳銃、さらに高威力。改造もしてあるのでもし被弾しようものただでは済みません。

ドダダダダダ！！

・・・自動拳銃が発する音ではないですけど、気にしないでください。改造の賜です。大丈夫、僕の人形の中には対物ライフルであるバレットM82A1を改造してフルオートにするとか言うアホみたいなことする人が居ますからね？ これ、いくら不老不死の人でも当たったらバラバラになるところかちよつと特殊な弾使ってますので回復も格段に遅くなると言う不老不死の天敵も良いところです。

「つつー!!」

キンツッ！ キキンツッ！！

セラはその改造デザートイーグルから発射された弾を剣で弾いていきます。

「この銃、戦車ぐらいなら貫通させることが出来るんですけどね・・・」

それを弾くつてセラさん。あなた鍛錬つて言つてましたけどどんな鍛錬したらここまで強くなれるんですか。準チート候補に格上げですか？

「フレイが鍛えてくれたんですよ。」

「・・・チツ、ジャムりましたか。まあ、それは置いておきまして、フレイが、ですか？ 成程、合点がいきました。一体いつの間に？」

「臆に内緒でと言う事です。それと、いつ鍛錬していたのかと言いますと、フレイがどこぞの世界から盗んん！！ 失礼、拝借してきました物・・・確か、ダイオラマ魔法球でしたか？その中で鍛錬していました。」

「・・・あ？ ちょっと待って下さい。よし、整理しましょう。」

フレイがどこかの世界からその魔法球を拝借してきた。

その中でセラは修行していた。

「・・・はい、どう考えても別荘です。本当にありがとうございます。しかし、一体いつの間に・・・って、ああ、そう言えばあつちへこつちへ逃げていた時がありましたね。確か、写真をばら撒

きながら逃げていたのですたっけ？ その時でしょうか？ いや、それは無いです。時間が合いません。・・・まあ、フレイだからという事で納得しておきましょう。

『さすがの私もそこまで命知らずじゃないよ！』

む、なんか電波が・・・

「成程、道理で強くなっているはずです。こちらでの一時間はあちらではどのくらいですか？」

「二日です。」

普通の人が入ったら大変なことになりますですね。まあ、吸血忍者は不老なので何も問題にならないでしょうけど。

「続き、行きます！！！」

っ！？ 速い！？

キーン！！ガキヤア！！ギイン！！

「くっ、やりますね。」

「まだまだです！！！」

僕は苦無、セラは剣と苦無の二刀流で、手数は圧倒的あちらが上、力もあちらが上、技術では僕が勝っているでしょうが、それでも実力が拮抗していますね。・・・本当に、いつの間に、

「フフフ……。」

楽しい……？ 楽しいですね。いつの間にか、初めて会った時は僕に手も足も出なかったセラが今ではどうでしょう？ 僕も今出せる本気と拮抗しているではありませんか。全力ではなく、あくまでも今出せる本気ですが、それでも、拮抗しているではありませんか。

ガガッ！ ギギンッ！！

苦無にひびが入る。瞬時にそれを放棄し、代わりナイフを両手に持ち、応戦する。それに応じて、セラは苦無と刀ではなく、刀と刀に変え、さらに剣戟を増していく。

「秘剣！ 燕返し！！」

キーンキーンキーンキーンキーン！！！！

五回もの高速で放たれた剣。それを二振りの刀で防ぐも、その刀にはまた、ひびが入ります。……近接戦闘では、僕と同じくらいもしくは、それ以上ですね。

「ですが、僕の得意な舞台はここじゃない。」

一瞬で距離を置き、袖から僕が普段愛用している曲絃系を取りだし、それをセラに巻き付けるようにして放ちます。

「っ！？」

それに気付いたのか、セラは背に付いている葉の翼を大きくはためかせ、後退します。が、甘い。後退した瞬間苦無付きの糸を投げつ

けます。

「くっ！」

それを強引に弾き、体勢が悪かったのかそのままバランスを崩しました。隙あ つ！？

「ドラゴンズクリムゾン！！」

上空から迫りくる炎の波。いきなりの事でしたが、僕とセラはなんとかそれを回避します。この技、この魔力、・・・随分、気付かれるのが早かったですね。

「・・・とりあえず、こんばんは、アリエルさん。」

「こんばんわあ、朧さん。いえ、人形遣いさん？」

・・・おいおい、何でこの人が知ってるんですか。人形遣い（これ）の事知っている人はさつきまでですけどクリス、フレイ、それとヴェリエの女王だけの筈だったのですが。

「何故、知っているんですか？ あの事件の事は僕と女王が全力で揉み消した筈ですが？」

「いえいえ、知ったのは本当に偶然だったのですよあ？ ふうりんかにはんに対抗するためにヴェリエのあらゆる書物を読み漁ったのですが、当然女王がそんな本残しておく訳がありませんからあ、私も調べるのは止めようかと思っただのですがあ、見つけてしまったんですよ。私の計画を大きく進展させる人物の記録を。」

「……んなもん残しておくなよ。」

「それが、僕だと?」

「とぼけても駄目ですよ? 分かっているのですから。二年前の戦争の主犯は、臈さん、あなたですよ?」

「なんの事でしょうか?」

「とぼけても無駄ですつてば、もう。」

「……完璧にばれていますね。」

「……何が、目的ですか?」

「私の計画に経りよ、断ります。」即答なんですなえ。」

「断る理由は無論あります。まず、僕にメリットがない。」

「ヴィリエの進攻が止まると言う事はメリットになりませんか?」

「別にヴィリエがどこの世界に進攻しようと思ったこつちありません。それに、個人的に僕は女王に会いたくありません。」

「負けたからですか?」

「負けたってこの人は……。」

「あれは負けたのではありません。僕が目的を達成したので退いたのです。」

「そうなんですかあ？」

負けず嫌いなんですねと、クスクス笑うアリエルさん。

「後、僕はクリスの味方ですのであなたに協力は出来ません。精々、首を洗って待っていてください。」

「困りましたねえ。それじゃあ、せめて臃さんの魔装兵器を何体が貸してくれませんかあ？」

「愚問ですね。貸しもしませんよ。あと、魔装兵器ではありません。人形です。」

「それは本当に困っちゃいましたねえ。これを断られたら、私は臃さんを攫うしか方法がなくなってしまうさう。」

過激ですねえ。・・・とりあえず、

「セラ、色々言いたい事もあると思いますが我慢して下さい。お願いします。それから、とても強くなりましたね。近接戦闘なら僕に勝るとも劣らないですよ。」

「ありがとうございます。」

「・・・では、しばし別れです。」

「別れません。絶対に臃を連れ戻させてもらいます。」

「それは・・・頑張ってください。さて、ではアリエルさん。僕は

逃げますよ。」

「逃がしませんよお！」

おお怖い。じゃあ、切り札二枚切りますか。

トントンと足のつま先を鳴らす。その瞬間、宙に二つの魔法陣が浮かび上がりました。

「開け放たれたパンドラの箱から今こそ解き放つ。」

出すのはパンドラの住民。過剰防衛ですけどまあ、良いでしょう。

「……なんじゃ？ 久しぶりに外に出てみればいきなり戦場ではないか。おい貴様、どういう事なのか妾に30文字以内で説明するが良い。」

「……ん、臍。お久。」

「雛にリリーお久しぶりです。「あと17字じゃ。「ええ!?」あと15字。「ピンチですので助けてください。」」

「うむ、ぴつたりの回答じゃの。しかし、何故妾が貴様を助けなくてはならんのじゃ?」

……この妙に尊大で偉そうなのがリリー。こいつは元どこかの隊長と言うわけではなく、創りだした瞬間からパンドラ入りした生粋のパンドラです。パンドラに入れる基準はあるのですが、リリーは創った瞬間からその条件を満たしていた唯一人の人形です。……パンドラの住民を人形と呼んでいいのかは分かりませんが。と言う

かこいつ、主に向かって何と言う態度を取るのでしょうか。まあ、創った瞬間からこうでしたけど。因みに、一回僕の呼び方について注意してみたところ……

「貴様とは尊称でもあるのじゃぞ？」

とのたまいました。いやそうですね、確かにそうですね!!

で、口数が少ない方が雛。元後処理部隊の隊長です。……見た目は子供ですけど。そもそも、人形の見た目はランダムにしてあるので僕は決めていないのですけど。で、雛は何と言うか……

「……あむあむ。」

大食いです。常に片手に何か食べ物を持っています。今日は……あ、マンガ肉ですか。小さい子どもがマンガ肉に齧り付くのって中々シニールですね。

「そんなこと言わずに助けて下さいよ。ね？」

「む、そ、そこまで頼むのなら仕方ないの。」

序でに言うところの人、ツンデレです。

「と言うわけで、あの魔装少女の足止めをよろしくお願いします。」

「ん、分かった。」

「魔法少女……ふむ、面妖な。貴様、まだ追われているのか？」

あの女王と揉み消してから妾達を封印したのでは無かったのかの？」

「この人は例外のようです。」

ハア、まあ、戦争と言っても実際は僕と女王の一騎打ちなんですけどね。あまりにも被害が大きすぎて女王は戦争と言う事にして、僕は普通に姿をくらましました。因みに、ふうりんかにはんを壊したのはパンドラの方々です。ぼこぼこでしたね。今頃大変な魔改造が施されているでしょう。

「あなた方は……『毒殺姫』と『暴食童子』。やはり臈さんが隠していましたかあ。探しても探しても見つからず、大変でしたよお？」

「なんじゃ？ 雑種、妾達が欲しいのか？」

雑種って……、そう言えば僕と身内以外の呼び方は統一して全て『雑種』でしたね。因みにイロハの事は変態、雛の事は童子と呼んでいます。どうやら、二文字に収めたいようです。

「欲しいですねえ。」

「やらんぞ。この世の物は妾の物。雑種のもも妾の物じゃ。」

すごいジャイアニズム!?!?

「まあ、貴様になら少しぐらい分けてやらんことも無いがの。」

あ、どもです。

「……食べ物に渡さない。」

・・・歪みないな。

「では、任せました。後で例の家で落ちあいましょう。」

「ふん、まあ、任せておくが良い。」

「・・・バイビー。」

じゃ、逃げましょうか。

と言っわけで地上に降りました。

「ハア・・・ハア・・・。」

・・・すご、サラスはまだ戦ってましたよ。

「ん、星川ってすごく強いんだね。くりす吃驚しちゃったよ。」

・・・あれ？ サラスってここまで強かったのでしょうか？

「あー、あれ？ なんかサラスちゃん、臍と肩を並べたいって頑張ってたよ？」

・・・マジツすか。

「クリス、お楽しみのところすみませんが、退きますよ。」

「えー、なんでー？」

「アリエルさんが「ちょっと殺してくる。」待て待て待て！今は止めて！？ 僕が女王に殺されちゃうから！？」

精神的にですけど。

「ぶー、しょうがないなあ。じゃ、そういう事で星川さん？ ありがとねー、良いリハビリになったよ！」

「ま、待つ「サラス。」・・・なんだ？」

キツ、と睨みつけてくるサラス。まあ、邪魔したのは悪かったです。

「はいこれ。」

懐から手紙を出してサラスに渡します。

「・・・なんだこれは？」

「あなたの告白の返事です。口で伝えたかったです、生憎時間が無かったので簡潔にまとめてあります。じゃー！」

急げ急げ。いつリリーの巻き添え食らうか分かったものではありません。あれは単純な戦闘力ならイロハよりも強いですからね。まあ、イロハもイロハでリリーに勝っている所もあるので互角という感じになってるのですが。

「・・・ハア、厄介事が絶えませんね。しかもこんなに早くヴィリ工が嗅ぎ付けて来るなんて予想外も良いところですよ。これは早急に防御と警戒を強めた方が良いでしょう。」

「臃！ 早く早く！」

「ん？ ああ、はい今行きます・・・七実！ フレイ！ 逃げますよ！...」

「そこまで堂々と逃げる宣言するとむしろ清々しいですね。」

「それが臃だからねえ。」

「・・・あ、そう言えばあの館に戻らなくてはいけないのです。・・・年中発狂コンビとトリガーハッピー、さらに過保護メイド長の厄介な人たちと一時的にはいえ一緒に生活するのですか。」

「・・・あ、胃薬大量に購入しなくては。」

第33話 人はいつの間にか強くなっています(後書き)

作者「テストが終わった!!! これでかつる!」

臃「と言っわけであとがきコーナーです。」

フレイ「・・・何このグダグダ感。」

作者「すみません。テスト勉強の間、ちよくちよく書いていたのですが日をまたいでいたせいで文章が支離滅裂に・・・、いえ、言い訳ですね。すみません。」

フレイ「うむ、今後このようなことがないように!」

作者「うむ!」

臃「今回はあとがきコーナーと言いましたが、趣旨を変えて、登場した人形たちの紹介をしたいと思います。では、どうぞ!」

名前 一露葉

性別 女

年齢 7歳

武器 仕込み刀・妖刀各種

備考

元冥土部隊隊長。現パンドラの住民。

他の人形たち曰く、「朧にすぐ抱きつくけしからん変態。」

朧曰く、「人斬って血を浴びて喜んでる致命的な変態。」

とにかく人を斬ることが大好きな頭のネジがぶっ飛んでいる人形。

戦闘力は今の所不明（本人が本気を出した事がないため）

戦闘スタイルは基本的に受け。敵から見た場合、突っ込んだら次の瞬間には何故か一露葉を通り過ぎて絶命しているという。その居合抜きは抜刀してから納刀するまでの動きがまったく見えない程早い。また、本人曰く、「斬れへんモンやらなんやらあらしまへん。」
因みに、リリーは一露葉の事を「変態」と呼ぶ。

名前 茶々

性別 女？

年齢 5歳

武器 ナイフ

備考

冥土部隊副隊長。殺戮人形。一露葉と同じで人を斬るのが大好きな人形。というか、一露葉の影響を受けまくって今に至る。

他の人形曰く、「昔はあんなに良い子だったのに……。」

朧曰く、「昔の純粋な茶々はもう……居ないんですね。」

イロハ曰く、「茶々ちゃんはほんまにかいらしいなあ。」

どうやら、昔は良い子だったようだ。

因みにリリーの呼び方は普通に「茶々」「二文字なら良いらしい。

名前 リリー

性別 女

年齢 7歳

武器 秘密じゃ

備考

生っ粋のパンドラっ子。生みの親である臃の事は「貴様」と呼び、他の人形たちの事はすべて特徴を二文字にあてはめて呼んでいる（例えばイロハの「変態」みたいな）。その他の人たちの事はすべて「雑種」と呼んでいる。どこの金ぴかだ。他の人形たち曰く、「天上天下唯我独尊」臃曰く、「ツンデレ」臃の事を貴様と呼んでいる理由は実を言うと名前で呼ぶのが恥ずかしいから尊称でもあるこの言葉で呼んでいるというところは誰も知らない。と言うか知ったら海に底。故に、臃にツンツンしているっぽいが、実は激甘と言うのもここだけの話・・・のはず。

名前 雑

性別 女

年齢 6歳

武器 ……内緒

備考

元後処理部隊の隊長。現パンドラの住民。

他の人形たち曰く、「唯一の癒し」

臃曰く、「食費が半端ねえ」

常に片手に何かしら食べ物を持っている。一番臃に衝撃を与えた食べ物には『ピラルク』

なお、この食べ物を強引に取り上げた場合、大声で泣き叫び、取り上げた人にもものすごい罪悪感を与えてくる。この時の臃の感想は「

あれ、反則、もう、だめ」

リリーの呼び方は「童子」

名前(仮) トリガーハッピー

性別 女

年齢 7歳

武器 銃？

備考

元殲滅部隊隊長。現パンドラの住民。

他の人形曰く、「とりあえず銃を仕舞ってほしい」

臃曰く、「一応、常識は持ってるんですけどねえ……」

今の所分かっている情報は、トリガーハッピーであること。銃を魔改造すること。
リリーの呼び方は「犬っ子」あれ、三文字？・・・漢字が二つなので良いらしいです。

名前（仮） メイド長

性別 女

年齢 6歳

武器 すみません、秘密です。

備考

メイド長。パンドラに最も近い人形らしい。
他の人形たち曰く、「PADとは言ってはいけない」
臙曰く、「良くやってきているのですが、過保護はやめてほしいです」

どうやら禁句ワードは「PAD」で過保護らしい。
リリーの呼び方は「冥土」・・・あれ？

名前（仮） 殲滅部隊隊長

性別 男

年齢 3歳

武器 話すわけなかるうが!!

備考

発狂野郎

他の人形たち曰く、「五月蠅い」

隴曰く、「バカ」

ぶっっちゃけクラウザーさん。下品なこと言わないクラウザーさん。
リリーの呼び方は「莫迦」

名前(仮) 料理長

性別 男

年齢 3歳

武器 ひみつなのさ

備考

ピエロ。得意料理はジャンクフード。・・・あれ？

他の人形たち曰く、「料理はおいしい」

隴曰く、「発狂してるのが残念でしようがない。」
ぶっっちゃけドナルド。

リリーの呼び方は「道化」

朧「こ、こんなところですかね？」

フレイ「・・・そだね。長かった・・・。」

朧「僕達の体力切れのため、ここで終了です。」

朧「あ、イロハ置いてきた。」
リリー「あやつなら勝手にのこの帰ってくぬぢゃる。」

雛「・・・お腹すいた。」

朧「そればかりですね、雛。」

なお、人形の案を出して下さい下さった裂やん様、黒い狐と紅い眼様、暇人様、ありがとうございます！ まだ登場してないのもありますが、話が進んでいくにつれて確実に出して行きますのでよろしくです。

今回の茶々は、裂やん様の提供です。

人形は常時募集していますのでよろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6675t/>

これはゾンビですか？～いいえ、ただの？病弱です～

2011年12月11日02時49分発行